

Oracle® ZFS Storage Appliance 管理ガイド、Release OS8.6.x

ORACLE®

Part No: E78570-01
2016 年 9 月

Part No: E78570-01

Copyright © 2009, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

Oracle ZFS Storage Appliance の概要	19
Oracle ZFS Storage Appliance の主な機能	19
サポートされているプロトコル	20
アプライアンスのデータサービス	20
データ可用性	21
ブラウザユーザーインターフェース (BUI)	22
ネットワークのアイコン	30
ダッシュボードのアイコン	30
Analytics ツールバーのアイコン	31
アイデンティティマッピングのアイコン	32
サポートされるブラウザ	32
コマンド行インターフェース (CLI)	33
CLI コンテキスト	34
CLI のプロパティ	39
CLI スクリプトの操作	42
バッチコマンドの使用	42
CLI スクリプトコマンドについて	43
▼ CLI スクリプト環境へのアクセス	43
CLI の組み込み関数について	44
▼ run 関数の使用	44
▼ get 関数の使用	45
▼ list 関数の使用	45
▼ children 関数の使用	48
▼ choices 関数の使用	49
出力を生成するための関数の使用	50
CLI スクリプトエラーについて	50
アプライアンスの構成	53
アプライアンスの初期構成	53
ネットワーク構成	53

ネットワーク構成 (BUI)	54
ネットワーク構成 (CLI)	67
ネットワーク構成の操作	74
管理インタフェースの構成	76
ネットワークデータリンクの構成	76
ネットワークインタフェースの構成	79
ネットワーク IP マルチパス (IPMP) の構成	80
ネットワークのパフォーマンスおよび可用性の構成	82
ネットワークルーティングの構成	83
ストレージの構成	86
▼ ストレージプールの作成 (BUI)	87
▼ ストレージプールの作成 (CLI)	89
▼ 既存のストレージプールのインポート (BUI)	91
▼ 既存のストレージプールのインポート (CLI)	92
▼ 既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 (BUI)	93
▼ 既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 (CLI)	95
▼ 既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 (BUI)	97
▼ 既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 (CLI)	99
▼ 既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 (BUI)	101
▼ 既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 (CLI)	102
▼ ストレージプールの構成解除 (BUI)	103
▼ ストレージプールの構成解除 (CLI)	103
▼ ストレージプールの名前の変更 (BUI)	104
▼ ストレージプールの名前の変更 (CLI)	105
▼ ストレージプールのスクラブ (BUI)	106
▼ ストレージプールのスクラブ (CLI)	107
▼ プールとデバイスのステータスの表示 (BUI)	108
ストレージプールの概念	109
ストレージプールのデータプロファイル	110
アプライアンスステータスについて	113
ダッシュボードの「ステータス」	114
メモリー使用状況のサマリー	119
ディスクアクティビティータッシュボード	120
ダッシュボード CLI	122
▼ ダッシュボードの連続実行	124

ステータスダッシュボード設定	124
▼ 表示されるアクティビティ統計情報の変更	126
▼ アクティビティのしきい値の変更	127
NDMP ステータス	127
NDMP の状態	129
Storage Area Network (SAN) の構成	129
▼ FC ポートモードの構成 (BUI)	130
▼ FC ポートの検出 (BUI)	131
▼ FC イニシエータグループの作成 (BUI)	133
▼ LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (BUI)	134
▼ FC ポートモードの変更 (CLI)	136
▼ FC ポートの検出 (CLI)	136
▼ FC イニシエータグループの作成 (CLI)	137
▼ LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (CLI)	137
▼ イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 (CLI)	138
▼ 分析ワークシートの作成 (BUI)	140
▼ SAN iSER ターゲットの構成	140
▼ 自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)	144
▼ 特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)	144
▼ CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 (CLI)	145
▼ iSCSI ターゲットグループの追加 (CLI)	146
▼ iSCSI イニシエータグループの追加 (CLI)	146
▼ SRP ターゲットの構成 (BUI)	147
▼ SRP ターゲットの構成 (CLI)	148
SAN の理解	149
SAN ファイバチャネル構成	151
SAN iSCSI 構成	155
SAN iSCSI イニシエータの構成	157
SAN SRP 構成	158
SAN の用語	160
ユーザーの構成	162
▼ 管理者またはユーザーの追加 (BUI)	163
▼ 管理者またはユーザーの追加 (CLI)	164
▼ ユーザーパスワードの変更 (BUI)	166
▼ ユーザーパスワードの変更 (CLI)	166
▼ ユーザーの例外の編集 (BUI)	167
▼ ユーザーの例外の編集 (CLI)	168

▼ ユーザーの例外の削除 (BUI)	170
▼ ユーザーの例外の削除 (CLI)	170
▼ ロールの追加 (BUI)	171
▼ ロールの追加 (CLI)	172
▼ ロールの承認の編集 (BUI)	173
▼ ロールの承認の編集 (CLI)	174
▼ ロールからの承認の削除 (BUI)	175
▼ ロールからの承認の削除 (CLI)	176
▼ ダッシュボードを表示できるユーザーの追加	176
ユーザーとロールについて	177
ユーザー承認	178
ユーザープロパティの管理	179
アプライアンスのプリファレンス設定	181
▼ プリファレンス設定 (BUI)	181
▼ プリファレンス設定 (CLI)	182
▼ SSH 公開鍵の設定 (BUI)	183
▼ SSH 公開鍵の設定 (CLI)	184
プリファレンスのプロパティ	185
アラートの構成	186
▼ アラートアクションの追加 (BUI)	186
▼ アラートアクションの追加 (CLI)	187
電子メールアラートの送信 (CLI)	188
SNMP トラップの送信 (CLI)	189
アラートのカテゴリ	189
しきい値警告	190
分析データセットおよびワークシートの再開/一時停止	191
アプライアンスのクラスタ構成	192
クラスタ構成の BUI ビュー	193
▼ クラスタ化構成へのスタンドアロンアプライアンスのアップグレード (BUI)	195
▼ クラスタ構成のシャットダウン (BUI)	197
▼ クラスタ構成のシャットダウン (CLI)	199
クラスタの用語	201
クラスタ化の理解	202
クラスタの長所と短所	203
クラスタ相互接続 I/O	206
クラスタリソース管理	207
クラスタのテイクオーバーとフェイルバック	210
クラスタ化された環境での構成変更	213

クラスタ化におけるストレージの考慮点	214
クラスタ化におけるネットワークの考慮点	216
プライベートのローカル IP インタフェース	218
クラスタ化における Infiniband の考慮点	219
「スプリットブレイン」状態の回避	220
テイクオーバーの影響の見積もりと削減	223
アプライアンスサービス	227
サービスの管理	228
▼ BUI でのサービスの表示	228
▼ CLI でのサービスの選択	229
▼ サービスの有効化 (BUI)	229
▼ サービスの有効化 (CLI)	229
▼ サービスの無効化 (BUI)	230
▼ サービスの無効化 (CLI)	230
▼ CLI でのサービスの状態の表示	231
▼ CLI でのサービスヘルプの表示	231
▼ サービスプロパティの設定 (BUI)	232
▼ サービスプロパティの設定 (CLI)	233
▼ サービスログの表示 (BUI)	234
▼ サービスログの表示 (CLI)	235
使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示	235
必要なサービスポート	237
サービスの構成	238
NFS 構成	239
iSCSI 構成	244
SMB 構成	245
FTP 構成	263
HTTP 構成	266
NDMP 構成	268
シャドウ移行の構成	278
SFTP 構成	279
SRP 構成	282
TFTP 構成	282
ウイルススキャンの構成	283
NIS 構成	286
LDAP 構成	288
Active Directory の構成	296

アイデンティティーマッピングの構成	302
DNS 構成	314
IPMP 構成	317
NTP 構成	317
フォンホーム構成	321
動的ルーティング構成	324
サービスタグの構成	324
SMTP 構成	325
SNMP 構成	326
syslog 構成	329
システム識別情報の構成	335
SSH 構成	343
RESTful API 構成	344
シェアとプロジェクト	345
▼ プロジェクトの作成 (BUI)	346
▼ プロジェクトの作成 (CLI)	346
▼ プロジェクトの編集 (BUI)	348
▼ プロジェクトの編集 (CLI)	348
▼ プロジェクトの名前変更 (BUI)	349
▼ プロジェクトの名前変更 (CLI)	350
▼ プロジェクトの削除 (BUI)	351
▼ プロジェクトの削除 (CLI)	351
▼ プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 (BUI)	351
▼ プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 (CLI)	352
▼ ファイルシステムまたは LUN の編集 (BUI)	354
▼ ファイルシステムまたは LUN の編集 (CLI)	355
▼ ファイルシステムまたは LUN の名前変更 (BUI)	356
▼ ファイルシステムまたは LUN の名前変更 (CLI)	357
▼ ファイルシステムまたは LUN の別のプロジェクトへの移動 (BUI)	358
▼ ファイルシステムまたは LUN の別のプロジェクトへの移動 (CLI)	358
▼ ファイルシステムまたは LUN の削除 (BUI)	359
▼ ファイルシステムまたは LUN の削除 (CLI)	359
▼ ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定 (BUI)	360
▼ ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定 (CLI)	361
ストレージプール、プロジェクト、およびシェアについて	362
プロジェクトとシェアのプロパティ	364
継承されるプロパティ	365

LUN ローカルプロパティ	373
その他のプロパティ	374
静的プロパティ	375
プロジェクトのプロパティ	378
ファイルシステムのプロパティ	386
LUN プロパティ	395
シェアの領域管理	401
シェアの用語	402
ファイルシステムとプロジェクト領域の管理	402
ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定	404
アイデンティティ管理の操作	405
ファイルシステムの名前空間の操作	406
シェアの使用状況統計	407
シェアおよびプロジェクトプロトコル	408
NFS プロトコル	409
SMB プロトコル	416
HTTP プロトコル	421
FTP プロトコル	422
SFTP プロトコル	422
TFTP プロトコル	422
ファイルシステムのアクセス制御リスト	423
ルートディレクトリアクセス	423
モード変更時の ACL 動作	424
ACL 継承動作	425
ルートディレクトリ ACL	427
スキーマの操作	430
▼ スキーマの作成 (BUI)	431
▼ スキーマの作成 (CLI)	431
スキーマプロパティ	432
シャドウ移行	435
シャドウ移行について	436
シャドウファイルシステムの作成	439
バックグラウンド移行の管理	439
移行エラーの処理	439
移行の進行状況のモニタリング	440
移行の取り消し	441
シャドウファイルシステムのスナップショット取得	441

シャドウファイルシステムのバックアップ	441
シャドウファイルシステムのレプリケート	442
ローカルファイルシステムの移行	442
シャドウ移行分析の使用	442
▼ CLI を使用したシャドウ移行の可能性のテスト	443
▼ CLI を使用したアクティブな NFS サーバーからのデータの移行	444
スナップショットとクローン	445
スナップショットの領域管理	447
▼ スナップショットの取得 (BUI)	449
▼ スナップショットの取得 (CLI)	450
▼ スナップショットのスケジュール (BUI)	450
▼ スナップショットのスケジュール (CLI)	452
▼ 定期スナップショットラベルの設定 (BUI)	454
▼ 定期スナップショットラベルの設定 (CLI)	455
▼ スナップショットとスケジュールの表示 (BUI)	455
▼ スナップショットとスケジュールの表示 (CLI)	456
▼ スナップショット保持ポリシーの編集 (BUI)	457
▼ スナップショット保持ポリシーの編集 (CLI)	458
▼ スナップショットスケジュールの削除 (BUI)	459
▼ スナップショットスケジュールの削除 (CLI)	460
▼ ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する (BUI)	461
▼ ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する (CLI)	462
▼ 非表示のファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス (CLI)	463
▼ 表示されているファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス (CLI)	464
▼ スナップショットの名前の変更 (BUI)	464
▼ スナップショットの名前の変更 (CLI)	465
▼ スナップショットへのロールバック (BUI)	466
▼ スナップショットへのロールバック (CLI)	467
▼ スナップショットの破棄 (BUI)	468
▼ スナップショットの破棄 (CLI)	469
▼ スナップショットのクローニング (BUI)	470
▼ スナップショットのクローニング (CLI)	472
▼ クローンのクローニング	473
▼ スナップショットのクローンの表示 (BUI)	474
▼ スナップショットのクローンの表示 (CLI)	475

▼ クローン元の表示 (BUI)	475
▼ クローン元の表示 (CLI)	475
リモートレプリケーション	477
▼ リモートレプリケーションのワークフロー	478
▼ ソースおよびターゲットアプライアンスの互換性の確認	478
▼ ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 (BUI)	479
▼ ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 (CLI)	481
▼ レプリケーションターゲットの作成 (BUI)	482
▼ レプリケーションターゲットの作成 (CLI)	483
▼ レプリケーションアクションの作成 (BUI)	484
▼ レプリケーションアクションの作成 (CLI)	486
▼ クラスタ構成のレプリケーションの構成	488
▼ レプリケーション更新の手動送信 (BUI)	489
▼ レプリケーション更新の手動送信 (CLI)	489
オフラインレプリケーションの作成 (BUI)	490
▼ オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する	490
▼ NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する (BUI)	491
▼ レプリケーション更新をエクスポートする (BUI)	491
▼ NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する	492
▼ NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする (BUI)	492
▼ 手動でのネットワーク更新を実行する (BUI)	493
▼ オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処 理 (BUI)	493
オフラインレプリケーションの作成 (CLI)	494
▼ オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する	495
▼ NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する (CLI)	495
▼ レプリケーション更新をエクスポートする (CLI)	496
▼ NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する	497
▼ NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする (CLI)	498
▼ 手動でのネットワーク更新を実行する (CLI)	500
▼ オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処 理 (CLI)	501
▼ レプリケーションの進行状況のモニタリング (BUI)	504
▼ レプリケーションの進行状況のモニタリング (CLI)	504
レプリケーションの警告と監査イベント	505
レプリケーション分析の使用	506

▼ レプリケーションターゲットの編集 (BUI)	506
▼ レプリケーションターゲットの編集 (CLI)	506
▼ レプリケーションアクションの編集 (BUI)	507
▼ レプリケーションアクションの編集 (CLI)	507
▼ レプリケーション圧縮の無効化 (BUI)	508
▼ レプリケーション圧縮の無効化 (CLI)	509
▼ レプリケーション更新の取り消し (BUI)	509
▼ レプリケーション更新の取り消し (CLI)	510
▼ レプリケーションパッケージのクローニング (BUI)	511
▼ レプリケーションパッケージのクローニング (CLI)	515
▼ レプリケーションパッケージの編集 (BUI)	518
▼ レプリケーションパッケージの編集 (CLI)	519
▼ レプリケーションパッケージの無効化 (BUI)	520
▼ レプリケーションパッケージの無効化 (CLI)	521
▼ レプリケーションパッケージの切断 (BUI)	521
▼ レプリケーションパッケージの切断 (CLI)	522
障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 (BUI)	522
▼ 回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 (BUI)	523
▼ 回復サイトへの操作の切り替え (BUI)	523
▼ 本番サイトの更新 (BUI)	524
▼ 本番サイトへのレプリケーションを逆向きにする (BUI)	524
障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 (CLI)	525
▼ 回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 (CLI)	526
▼ 回復サイトへの操作の切り替え (CLI)	526
▼ 本番サイトの更新 (CLI)	527
▼ 本番サイトにレプリケーションを逆向きにする (CLI)	528
ディスク間バックアップでのレプリケーションの使用	530
リモートレプリケーションの概念	532
レプリケーションターゲット	534
レプリケーションアクションおよびパッケージ	535
レプリケーションのストレージプール	537
プロジェクトとシェアのレプリケーション	538
レプリケーションの承認	539
クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成	540
例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成	541
レプリケーションスナップショットとデータ整合性	548
レプリケーションスナップショットの管理	549
iSCSI 構成およびレプリケーション	550

レプリケーションの失敗	551
レプリケーションアクションのプロパティ	554
圧縮レプリケーション	556
レプリケーションパッケージ	557
レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング	558
レプリケートされたファイルシステムのエクスポート	560
レプリケーションの切断	561
逆向きレプリケーションの動作方法	562
レプリケーションパッケージの破棄	565
ターゲットレプリカのバックアップ	565
データ暗号化	567
▼ データ暗号化ワークフロー	568
▼ ローカルキーストア暗号化の構成 (BUI)	569
▼ ローカルキーストア暗号化の構成 (CLI)	571
▼ OKM キーストア暗号化の構成 (BUI)	572
▼ OKM キーストア暗号化の構成 (CLI)	573
▼ 暗号化プロジェクトの作成 (BUI)	574
▼ 暗号化プロジェクトの作成 (CLI)	575
▼ プロジェクトの暗号化鍵の変更 (BUI)	575
▼ プロジェクトの暗号化鍵の変更 (CLI)	577
▼ 暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 (BUI)	578
▼ 暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 (CLI)	578
▼ シェアの暗号化鍵の変更 (BUI)	580
▼ シェアの暗号化鍵の変更 (CLI)	581
▼ ローカル鍵のバックアップ (BUI)	582
▼ ローカル鍵のバックアップ (CLI)	582
▼ 暗号化鍵の削除 (BUI)	583
▼ 暗号化鍵の削除 (CLI)	585
▼ ローカル鍵の復元 (BUI)	586
▼ ローカル鍵の復元 (CLI)	587
暗号化プロパティ	588
暗号化鍵の管理	589
鍵の管理	590
暗号化鍵の値について	590
暗号化のパフォーマンスへの影響	591
暗号化鍵のライフサイクル	591
暗号化データのバックアップと復元	592

暗号化シェアのレプリケート	592
保守のワークフロー	595
ワークフローについて	596
ワークフローのパラメータについて	597
制約付きワークフローパラメータ	598
オプションワークフローのパラメータ	599
ワークフローのエラー処理	600
ワークフローの入力の検証	601
ワークフローの実行の監査およびレポート	602
ワークフローのバージョン管理について	604
アラートアクションでのワークフローの使用	605
スケジュールされたワークフローの使用	607
スケジュールされたワークフローの使用	608
ワークフロースケジュールのコード化	608
指定されたドライブタイプに基づくワークシートの作成	610
BUI を使用したワークフローのアップロード	612
▼ CLI を使用したワークフローのダウンロード	613
▼ CLI を使用したワークフローの一覧表示	613
▼ CLI を使用したワークフローの実行	614
▼ CLI を使用したワークフローの監査	615
統合	617
Oracle ZFS Storage Appliance の Oracle データベースクライアント用の構成	618
Oracle Exadata Database Machine バックアップ	618
Exadata 用のアプライアンスの構成	619
アプライアンス用の Exadata の構成	623
Oracle SuperCluster のバックアップ	626
SuperCluster のバックアップのためのアプライアンスの構成	627
アプライアンスのバックアップのための Oracle SPARC SuperCluster の 構成	644
Oracle Intelligent Storage Protocol	647
データベースレコードサイズ	648
同期書き込みバイアスのヒント	648
データベース名別の分析内訳	648
OISP 対応プロトコルおよびクライアント	648
Oracle Solaris Cluster 用のアプライアンスネットワークファイルシステムプラ グイン	649

Oracle Solaris Cluster Geographic Edition 用のアプライアンスプラグイン	649
Oracle Enterprise Manager System Monitoring のアプライアンスプラグイン	649
Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成	650
Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成解除	651
Oracle Virtual Machine Storage Connect 用のアプライアンスプラグイン	651
ボリュームシャドウコピーサービスソフトウェア用のアプライアンスプラグ インプロバイダ	651
Symantec Dynamic Multi-Pathing および Storage Foundation での FC サポー ト	652
Appliance Replication Adapter for VMware Site Recovery Manager	653

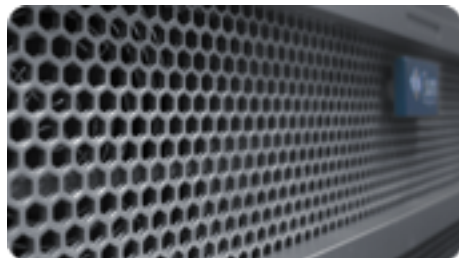
Oracle ZFS Storage Appliance の概要

Oracle ZFS Storage Appliance (アプライアンス) 製品ファミリーは、ネットワーク経由のクライアントに対して効果的なファイルサービスおよびブロックデータサービスを提供し、システムに保存されたデータに対して適用できる豊富な一連のデータサービスを提供します。

Oracle ZFS Storage Appliance の構成と操作の詳細は、次のセクションを参照してください。

- [Oracle ZFS Storage Appliance の主な機能](#)
- [20 ページの「サポートされているプロトコル」](#)
- [Oracle ZFS Storage Appliance データサービス](#)
- [21 ページの「データ可用性」](#)
- [ブラウザユーザーインターフェース \(BUI\)](#)
- [ネットワークのアイコン](#)
- [ダッシュボードのアイコン](#)
- [Analytics のアイコン](#)
- [アイデンティティマッピングのアイコン](#)
- [サポートされるブラウザ](#)
- [コマンド行インターフェース \(CLI\)](#)
- [CLI スクリプトの操作](#)

Oracle ZFS Storage Appliance の主な機能



Oracle ZFS Storage Appliance には、最高クラスのストレージ価格性能比と、本番ワークロードに対する過去に例を見ない可観測性を実現するために、次のテクノロジーが組み込まれています。

- Analytics は、システムの動作をリアルタイムで動的に観察し、データをグラフィカルに表示するためのシステムです
- ZFS ハイブリッドストレージプールは、読み書きを高速化するオプションのフラッシュメモリーデバイス、低消費電力で大容量のディスク、および DRAM メモリーで構成され、これらすべてが単一のデータ階層として透過的に管理されます
- さまざまなハードウェアのサポート

Analytics およびハードウェアの詳細については、[Oracle Technology Network \(http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html)のドキュメントを参照してください。

サポートされているプロトコル

Oracle ZFS Storage Appliance では、NFS、iSCSI、SMB、FTP、HTTP、NDMP、ファイバチャネル、SRP、iSER、および SFTP などの業界標準のさまざまなクライアントプロトコルをサポートしています。

これらのプロトコルの詳細は、次を参照してください。

- [151 ページの「SAN ファイバチャネル構成」](#)
- [140 ページの「SAN iSER ターゲットの構成」](#)
- [239 ページの「NFS 構成」](#)
- [244 ページの「iSCSI 構成」](#)
- [245 ページの「SMB 構成」](#)
- [263 ページの「FTP 構成」](#)
- [266 ページの「HTTP 構成」](#)
- [268 ページの「NDMP 構成」](#)
- [279 ページの「SFTP 構成」](#)
- [282 ページの「SRP 構成」](#)

アプライアンスのデータサービス

これらのプロトコルを使用してエクスポートするデータを管理するために、次のような組み込み済みの高度なデータサービスのコレクションを使用して、アプライアンスを構成できます。

ライセンスについて: リモートレプリケーションとクローニングは無償で評価することが許可されていますが、本稼働環境で使用するには、各機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価期間を過ぎたら、これらの機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

- RAID-Z (RAID-5 および RAID-6)、ミラー化、およびストライプ化されたディスク構成 (86 ページの「ストレージの構成」を参照)
- スナップショットスケジュールを使用した無制限の読み取り専用および読み取り/書き込みスナップショット (445 ページの「スナップショットとクローン」を参照)
- データの重複コピーの削除を管理する (367 ページの「データ複製解除」を参照)
- 組み込みのデータ圧縮 (368 ページの「データ圧縮」を参照)
- 障害回復のためのデータのリモートレプリケーション (477 ページの「リモートレプリケーション」を参照)
- 高可用性のためのアクティブ/アクティブクラスタ化 (192 ページの「アプライアンスのクラスタ構成」を参照)
- iSCSI LUN のシンプロビジョニング (244 ページの「iSCSI 構成」を参照)
- ウイルススキャンと隔離 (283 ページの「ウイルススキャンの構成」を参照)
- NDMP バックアップと復元 (268 ページの「NDMP 構成」を参照)

データ可用性

本番データの可用性を最大限に高めるために、アプライアンスには、スタックの各レベルでの冗長性など、データの完全性のための完全なエンドツーエンドアーキテクチャが組み込まれています。主な機能は次のとおりです。

- CPU、DRAM、I/O カード、ディスク、ファン、電源など、すべてのシステムハードウェアの障害に対する予測的自己修復および診断
- すべてのデータおよびメタデータについての ZFS エンドツーエンドのデータチェックサムにより、スタック全体でデータを保護
- RAID-6 (ダブルパリティおよびトリプルパリティ) およびオプションのディスクシェルフ全体での RAID-6
- 高可用性のためのアクティブ/アクティブクラスタ化 (192 ページの「アプライアンスのクラスタ構成」を参照)
- ネットワーク障害からの保護のためのリンクアグリゲーションおよび IP マルチパス (53 ページの「ネットワーク構成」を参照)
- コントローラとディスクシェルフの間の I/O マルチパス

- すべてのシステムソフトウェアサービスの統合ソフトウェア再起動
(227 ページの「アプライアンスサービス」を参照)
- すべてのソフトウェアおよびハードウェアの問題に対するフォンホームによる遠隔監視 (321 ページの「フォンホーム構成」を参照)
- リモート電源制御およびコンソールアクセスのための各システムの Lights-out 管理

ブラウザユーザーインターフェイス (BUI)

Oracle ZFS Storage Appliance ブラウザユーザーインターフェイス (BUI) は、アプライアンスの管理のためのグラフィカルツールです。BUI によって、管理タスク、概念の視覚化、およびパフォーマンスデータの解析のための直感的な環境が提供されます。BUI によって、システム動作を視覚化したり、アプライアンスでのパフォーマンスの問題を識別したりするための整理された環境が提供されます。

The screenshot shows the 'Choose Storage Profile' step in the BUI. It includes a 'Storage Breakdown' pie chart, a 'Data Profile' table, and a 'Disk Breakdown' section.

TYPE	NSFF	AVAILABILITY	PERFORMANCE	CAPACITY	SIZE
Double parity	No	██████████	██████████	██████████	41.9T
Mirrored	No	██████████	██████████	██████████	25.6T
Single parity, narrow stripes	No	██████████	██████████	██████████	34.9T
Striped	No	██████████	██████████	██████████	55.9T
Triple mirrored	No	██████████	██████████	██████████	16.3T
Triple parity, wide stripes	No	██████████	██████████	██████████	46.6T

Data profile: Mirrored
Duplicate copies of data yield fast and reliable storage by dividing access and redundancy evenly between two sets of disks. Mirroring is intended for workloads favoring high performance and availability over capacity, such as databases. When storage space is ample, consider triple mirroring for increased throughput and data protection at the cost of one-third total capacity.

Storage Breakdown

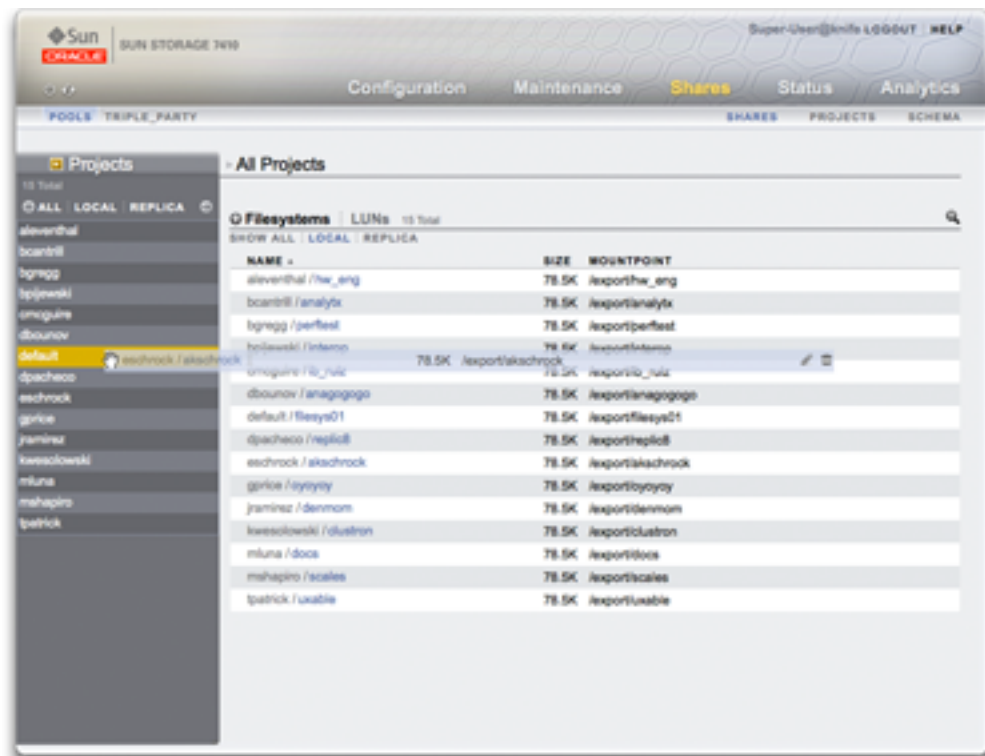
Data	25.6T
Parity	26.0T
Reserved	4.000
Spares	4.73T

Disk Breakdown

Data + Parity	44 disks
Spares	4 disks
Log	0 disks
Cache	0 disks

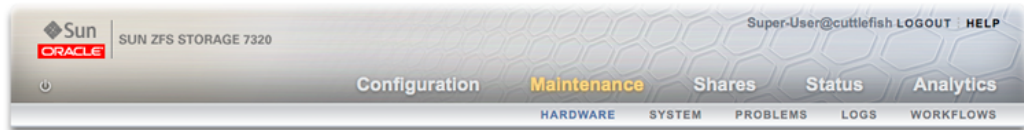
ブラウザでシステムにアクセスするには、初期構成中に NET-0 ポートに割り当てた IP アドレスまたはホスト名のいずれかを使用します。たとえば、`https://ipaddress:215` または `https://hostname:215` と指定します。ログイン画面が表示されます。

BUI の右上にリンクが表示されるオンラインヘルプは、コンテキストヘルプです。BUI のトップレベルとセカンドレベルの各画面で「ヘルプ」ボタンをクリックすると、関連するヘルプページが表示されます。



ファイルシステムのプロパティを、「プロジェクト」サイドパネルを使用して別のプロジェクトに移動することによって変更します。

マストヘッドには、ナビゲーションや通知のためのいくつかのインターフェース要素、および主要な機能が含まれています。左側には、上から下に、Sun/Oracle のロゴ、ハードウェアのモデルバッジ、ハードウェアの電源切断/再起動ボタンが配置されています。右側に移ると、ここでも上から下に、ログイン ID、ログアウト、ヘルプ、メインナビゲーション、サブナビゲーションが配置されています。

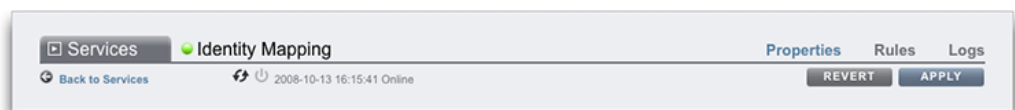


システムアラートは、トリガーされたときにマストヘッドに表示されます。複数のアラートが連続してトリガーされた場合は、「ダッシュボード」画面に表示される最新のアラートのリスト、または「ログ」画面に表示される完全なログを参照してください。

BUIの「構成」、「保守」、「シェア」、「ステータス」、および「分析」領域間を移動して表示するには、メインナビゲーションリンクを使用します。各領域内の機能や関数にアクセスするには、サブナビゲーションリンクを使用します。


セッションの注釈を提供した場合、その注釈は、ログイン ID とログアウトコントロールの下に表示されます。ログアウトすることなく、以降の管理アクションのためにセッションの注釈を変更するには、テキストリンクをクリックします。セッションの注釈の詳細は、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)を参照してください。

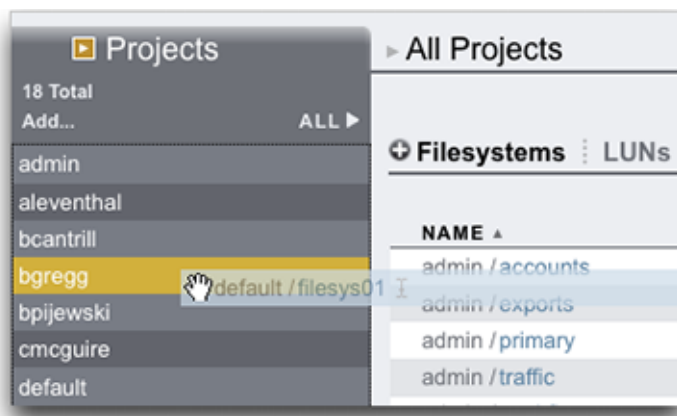
タイトルバーはマストヘッドの下に表示され、ローカルナビゲーションや、現在のビューによって異なる機能を提供します。




たとえば、アイデンティティマッピングサービスのタイトルバーは、次のものを有効にします。

- サイドパネルを通じたサービスの完全なリストへのナビゲーション
- アイデンティティマッピングサービスを有効または無効にするためのコントロール
- アイデンティティマッピングの稼働時間のビュー
- アイデンティティマッピングサービスの「プロパティ」、「規則」、および「ログ」画面へのナビゲーション
- 現在の画面で実行された構成の変更を適用するためのボタン
- 現在の画面で適用された構成の変更を元に戻すためのボタン

「サービス」ビューと「プロジェクト」ビューの間をすばやく移動するには、タイトルまたは展開  矢印をクリックして、サイドパネルを開いたり閉じたりします。








プロジェクトを追加するには、サイドバーの「追加...」リンクをクリックします。



プロジェクト間でシェアを移動するには、移動  アイコンをクリックし、ファイルシステムのシェアをサイドパネルにある適切なプロジェクトにドラッグします。

シェアを別のプロジェクトにドラッグすると、プロパティーが親プロジェクトから継承されるように設定されている場合は、そのシェアのプロパティーが変更されることに注意してください。

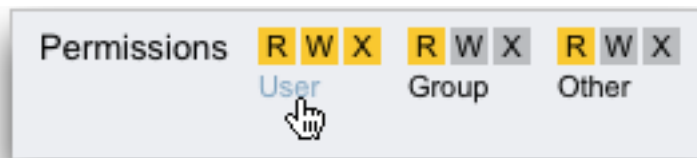
ほとんどの BUI コントロールは標準の Web フォーム入力を使用しますが、注意する必要がある重要な例外がいくつか存在します。

表 1 主な Web フォームの例外

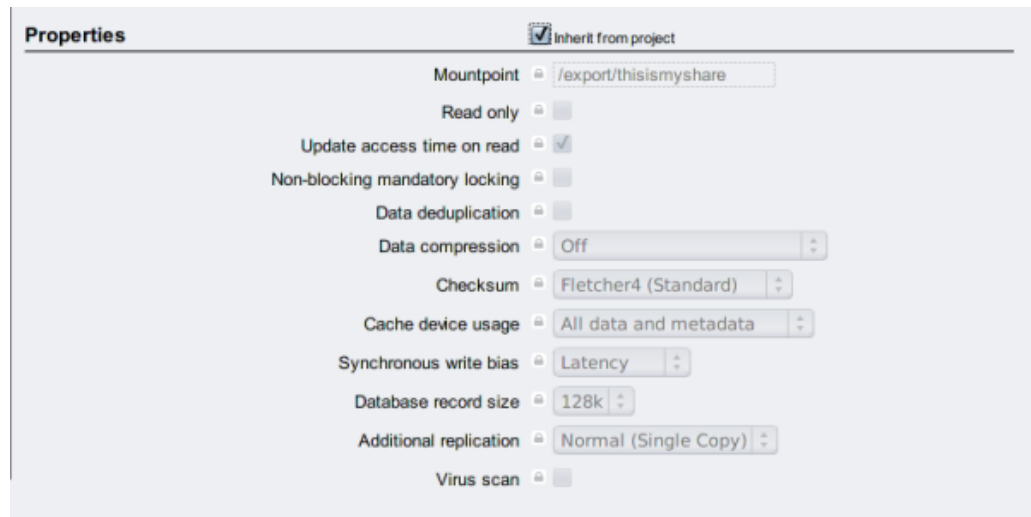
BUI コントロールのサマリー	
プロパティーを変更します	編集  アイコンをクリックし、ダイアログを完了します
リスト項目またはプロパティーエントリを追加します	追加  アイコンをクリックします
リスト項目またはプロパティーエントリを削除します	削除  アイコンをクリックします
変更を保存します	「適用」ボタンをクリックします
保存された変更を元に戻します	「戻す」ボタンをクリックします
リストから項目を削除します	ごみ箱  アイコンをクリックします (マウスを項目の行の上に移動すると、このアイコンが表示されます)
リスト内の項目を検索します	リストの右上にある検索  アイコンをクリックします

BUI コントロールのサマリー	
リストの見出しでソートします	リストを再ソートするには、太字のサブ見出しをクリックします
項目を移動またはドラッグします	移動  アイコンをクリックします
項目の名前を変更します	名前の変更  アイコンをクリックします
システムに関する詳細を表示します	使用しているモデルの oracle.com Web ページに移動するには、Oracle のロゴまたはモデルバッジをクリックします
サイドパネルを自動的に開きます	項目をサイドパネルにドラッグします

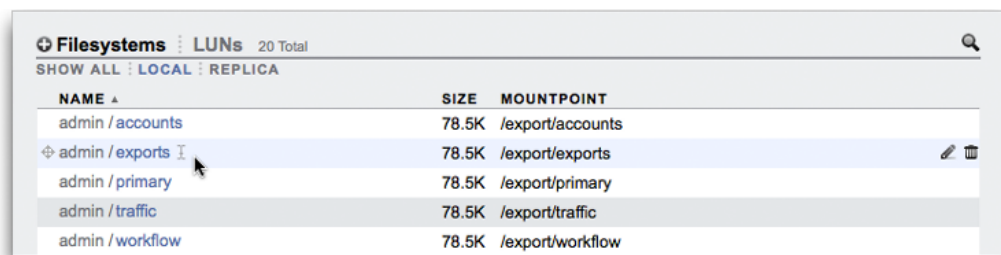
アクセス権を設定する場合は、RWX ボックスがクリック可能なターゲットになります。アクセスグループのラベル (「ユーザー」、「グループ」、「その他」) をクリックすると、そのラベルのすべてのアクセス権のオン/オフが切り替わります。



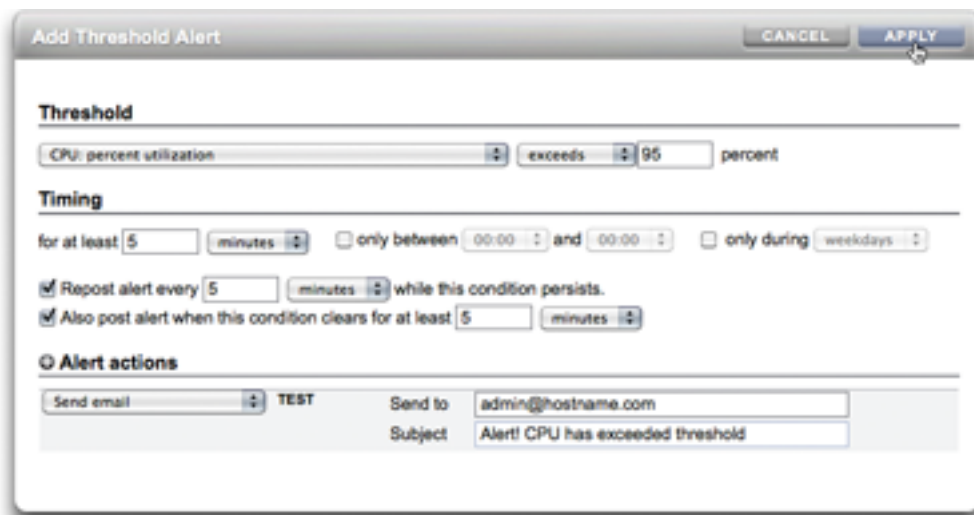
シェアプロパティを編集するには、「プロジェクトから継承」チェックボックスのチェックマークを外します。



リスト内の項目のコントロールを表示するには、マウスをその行の上に移動します。



すべてのモーダルダイアログでは、上に現在のアクションを識別するタイトルと、そのアクションのコミットまたは取り消しを行うためのボタンがあり、下にコンテンツが配置されています。モーダルダイアログのコンテンツ領域はメインのコンテンツ領域と同じインターフェース規約に従いますが、ほかのアクションを実行するには、その前にタイトルバーにあるボタンを使用して破棄する必要がある点が異なります。



アイコンはシステムのステータスを示し、機能へのアクセスを提供するほか、ほとんどの場合は、クリックされたときにアクションを実行するボタンとして機能します。マウスをインターフェイスアイコンの上に移動してツールチップを表示すると役立ちます。下の表は、ユーザーインターフェイスの規約の基本を示しています。

ステータスの光は、システムの健全性やサービスの状態の基本的なインジケータです。

表 2 ステータスインジケータ

アイコン	説明	アイコン	説明
	オン		警告
	オフ		無効

次のアイコンはユーザーインターフェイス全体にわたって現れ、基本的な機能のほとんどをカバーしています。

表 3 BUI のアイコン

アイコン*	説明	アイコン*	説明
--	名前の変更 (テキスト編集)	--	切断
--	移動	--	クローン

アイコン*		説明	アイコン*		説明
		編集	--		ロールバック
		破棄	--		アプライアンス電源
		追加	--		適用
		削除	--		戻す
		取り消し/閉じる	--		情報
--		エラー	--		リスト列のソート(下)
--		アラート	--		リスト列のソート(上)
		オン/オフの切り替え			最初のページ
		再起動			前のページ
--		検索			次のページ
		無効/オフライン			最後のページ
		ロック	--		検索
--		待機スピナー			メニュー
--		逆方向			パネル

* 左側には無効になったアイコンが示されています。

次のアイコンは、異なるタイプのオブジェクトを区別するとともに、二次的に重要な情報を提供するために使用されます。

表 4 その他のアイコン

アイコン	説明	アイコン	説明
	許可		SAS
	拒否		SAS ポート
	ストレージプール		

ネットワークのアイコン

次のアイコンは、ネットワークデバイスの状態とネットワークデータリンクのタイプを示します。

表 5 ネットワークのアイコン

アイコン	説明	アイコン	説明
	アクティブなネットワークデバイス		アクティブな Infiniband ポート
	アクティブでないネットワークデバイス		アクティブでない Infiniband ポート
	ネットワークデータリンク		ネットワークデータリンク (IB パーティション)
	ネットワークデータリンク VLAN		
	ネットワークデータリンクアグリゲーション		
	ネットワークデータリンクアグリゲーション VLAN		

ダッシュボードのアイコン

次のアイコンは、「設定」内で設定されたユーザーが構成できるしきい値に関連した、モニターされている統計情報の現在の状態を示します。

表 6 ダッシュボードのアイコン

アイコン	説明	アイコン	説明
	快晴		ハリケーン
	部分的に曇り		ハリケーンクラス 2
	曇り		ハリケーンクラス 3
	雨		ハリケーンクラス 4
	嵐		ハリケーンクラス 5

Analytics ツールバーのアイコン

この一連のアイコンは、「分析」ワークシート内の情報の表示を操作するためにツールバーで使用されます。

表 7 Analytics ツールバーのアイコン

アイコン	説明	アイコン	説明
	戻ります		最小値を表示します
	進めます		最大値を表示します
	現在まで進めます		折れ線グラフを表示します
	一時停止します		山型グラフを表示します
	ズームアウトします		外れ値を除外します
	ズームインします		ワークシートとこの統計を同期します
	1 分間を表示します		ワークシートと統計の同期を解除します
	1 時間を表示します		ドリルダウンします
	1 日を表示します		統計データをエクスポート (クライアントにダウンロード) します
	1 週間を表示します		統計データを保存します
	1 か月を表示します		データセットをアーカイブします
			ワークシートをサポートバンドルとともに送信します

分析の詳細は、[Oracle Technology Network \(http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html) のドキュメントを参照してください。

アイデンティティマッピングのアイコン

次のアイコンは、Windows と UNIX の間でユーザーとグループをマップするときに適用されるロールのタイプを示します。

表 8 アイデンティティマッピングのアイコン

アイコン*	説明	アイコン*	説明
	Windows から UNIX を許可します		UNIX から Windows を許可します
	Windows から UNIX を拒否します		UNIX から Windows を拒否します
	双方向を許可します		

* 左側には無効になったアイコンが示されています。

関連トピック

- 113 ページの「アプライアンスステータスについて」
- 53 ページの「ネットワーク構成」
- 86 ページの「ストレージの構成」
- 186 ページの「アラートの構成」
- 227 ページの「アプライアンスサービス」

分析の詳細は、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html>) のドキュメントを参照してください。

サポートされるブラウザ

このセクションでは、BUI のブラウザサポートを定義します。

BUI は、次のブラウザ上で完全に機能するように設計されています。

- Firefox 10 以降
- Internet Explorer 9 以降
- Safari 5 以降
- Google Chrome 31 以降

次のブラウザでは、BUI の要素が見かけ上不完全になることがあるほか、必要な機能はすべて正しく機能しますが、一部の機能が使用できない場合があります。次のいずれかのブラウザを使用している場合は、ログイン中に警告メッセージが表示されません。

- Firefox 6 - 9
- Internet Explorer 7 および 8
- Google Chrome 21 - 30
- Opera 23 以前

次のブラウザは互換性がなく、サポートされておらず、問題が発生することが知られています。ログインは完了しません。

- Firefox 5 以前
- Internet Explorer 6 以前
- Google Chrome 20 以前
- Safari 4 以前
- Opera 22 以前

関連トピック

- [162 ページの「ユーザーの構成」](#)
- [181 ページの「アプライアンスのプリファレンス設定」](#)

コマンド行インタフェース (CLI)

CLI は、BUI の機能をミラー化する一方で、繰り返しタスクを行うための強力なスクリプト環境も提供するように設計されています。コマンド行は、繰り返しの管理タスクのための効率的で強力なツールです。アプライアンスは、コンソールまたは SSH を介して使用可能な CLI を示します。推奨されるシステムとの対話方法が CLI である状況が、次に示すようにいくつか存在します。

- **ネットワークが使用不可** - ネットワークが使用できない場合、ブラウザベースの管理は不可能です。テキストベースのインタフェースにしか対応していないコンソールが、管理のための唯一の手段になります。
- **便宜性** - システムの特定の側面を検査したり、構成をすばやく変更したりしたいだけの場合は特に、ブラウザの起動に非常に長い時間がかかることがあります
- **精度** - 状況によっては、ブラウザで提供される情報がその性質上、定量的というより定性的であり、より正確な答えを必要としている場合
- **自動化** - ブラウザベースの対話は、容易には自動化できません。繰り返しのタスクや厳密に定義されたタスクがある場合は、それらのタスクをスクリプト化します

CLI 内を移動する場合に注意する原則が 2 つあります。

- **タブ補完が幅広く使用されます** - 特定のコンテキストで何を入力すればよいかわからない場合、Tab キーを押すと、入力可能なオプションが表示されます。ドキュメント全体を通して、Tab キーを押す場合は「tab」という文字を太字の斜体で表現します。

- **ヘルプは常に使用できます** - help コマンドによって、コンテキスト固有のヘルプが提供されます。特定のトピックのヘルプは、たとえば `help commands` のように、そのトピックを `help` の引数として指定することによって表示できます。使用可能なトピックは、`help` コマンドをタブ補完するか、または `help topics` を入力することによって表示されます。

この2つの原則を、次のように組み合わせることができます。

```
dory:> help tab
builtins  commands  general  help      properties  script
```

CLI を使用してリモートからログインするには、ssh クライアントを使用します。このアプライアンスを管理する、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)の指示に従わない場合は、`root` としてログインする必要があります。ログインすると、次に示すように、ホスト名とそれに続くコロン、さらにそれに続く大なり記号で構成されるプロンプトが CLI に表示されます。

```
% ssh root@dory
Password:
Last login: Mon Oct 13 15:43:05 2009 from kiowa.sf.fishpo
dory:>
```

関連トピック

- [22 ページの「ブラウザユーザーインタフェース \(BUI\)」](#)
- [34 ページの「CLI コンテキスト」](#)
- [39 ページの「CLI のプロパティ」](#)

CLI コンテキスト

CLI における中心的な原則は、コマンドが実行されているコンテキストです。このコンテキストによって、システムのどの要素を管理できるか、およびどのコマンドを使用できるかが規定されます。コンテキストには、各コンテキスト自体に入れ子のコンテキストが含まれている可能性のあるツリー構造があり、一般には、この構造によって BUI 内のビューの構造がミラー化されています。

ログイン時の初期コンテキストはルートコンテキストであり、すべてのコンテキストの親または上位コンポーネントとして機能します。コンテキストに移動するには、そのコンテキストの名前をコマンドとして実行します。たとえば、ブラウザ内の「構成」ビューで使用可能な機能は、CLI の `configuration` コンテキストで使用できます。次のように、ルートコンテキストから直接入力してこのコンテキストにアクセスできます。

```
dory:> configuration
dory:configuration>
```

プロンプト内のコロンと大なり記号の間にコンテキストが表示されており、プロンプトがコンテキストを反映して変更されます。

`show` コマンドは子コンテキストを表示します。たとえば、`configuration` コンテキストから実行すると、次のようになります。

```
dory:configuration> show
Children:
    net => Configure networking
    services => Configure services
    version => Display system version
    users => Configure administrative users
    roles => Configure administrative roles
    preferences => Configure user preferences
    alerts => Configure alerts
    storage => Configure Storage
```

これらの子コンテキストは、「ネットワーク」、「サービス」、「ユーザー」、「プリファレンス」などの、ブラウザ内の「構成」ビューの下で使用可能なビューに対応しています。これらの子コンテキストのいずれかを選択するには、その名前を入力します。

```
dory:configuration> preferences
dory:configuration preferences>
```

中間のコンテキストを空白で区切って指定することによって、上位コンテキストから直接下位コンテキストに移動できます。たとえば、ルートコンテキストから直接 `configuration preferences` に移動するには、単に次のように入力します。

```
dory:> configuration preferences
dory:configuration preferences>
```

一部の子コンテキストは、ブラウザ内の固定されたビューではなく、ユーザーまたはシステムのどちらかによって作成された動的なエンティティに対応しているという点で動的です。これらのコンテキストに移動する方法は2つあります。`select` コマンドを使用し、そのあとに動的コンテキストの名前を指定することも、動的コンテキストの名前を二重引用符で囲むこともできます。特定のコンテキスト内に含まれている動的コンテキストの名前は、`list` コマンドを使用して表示されます。たとえば、`users` コンテキストは静的コンテキストですが、各ユーザーは独自の動的コンテキストです。

```
dory:> configuration users
dory:configuration users> list
NAME                USERNAME          UID          TYPE
John Doe            bmc               12345        Dir
Super-User          root              0            Loc
```

`bmc` という名前のユーザーを選択するには、コマンド `select bmc` または `"bmc"` を発行します。

```
dory:configuration users> "bmc"
dory:configuration users bmc>
```

あるいは、二重引用符、`select` および `destroy` を一部のコンテキストで使用すると、プロパティに基づいてエンティティを選択できます。たとえば、次のコマンドを発行することによって、`maintenance logs system` コンテキストで `reboot` モジュールによって発行されたログエントリを選択できます。

```
dory:maintenance logs system> select module=reboot
dory:maintenance logs system entry-034> show
Properties:
  timestamp = 2010-8-14 06:24:41
  module = reboot
  priority = crit
  text = initiated by root on /dev/console syslogd: going down on signal 15
```

ほかのコマンドと同様に、`select` または二重引用符をコンテキスト変更コマンドに追加することもできます。たとえば、ルートコンテキストから `bmc` という名前のユーザーを選択するには、次のコマンドを実行します。

```
dory:> configuration users select bmc
dory:configuration users bmc>
```

`last` コマンドを使用すると、前に選択または作成したコンテキストに移動できます。次の例ではレプリケーションアクションを作成し、`last` および `get id` コマンドを使用してレプリケーションアクション ID を取得します。そのあと別のアクションを選択し、`last` および `get id` コマンドを使用して、最後に実行したレプリケーションアクションの ID を取得します。

`last` を使用すると最後に使用したノードに戻ることができます。

```
dory:configuration net interfaces> "igb4"
dory:configuration net interfaces igb4> done
dory:configuration net interfaces> last
net:configuration net interfaces igb4>
```

`last` コマンドは、動的ノードの作成中にアプライアンスによって自動的に設定された値を取得する場合にも便利です。たとえば、各レプリケーションアクションはその作成時にアプライアンスによって ID が割り当てられます。`last` コマンドを `get id` コマンドとともに使用すると、レプリケーションアクションの名前を使用せずに ID を取得できます。

```
dory:shares p1/share replication> create
dory:shares p1/share action (uncommitted)> set target=dory
      target = dory (uncommitted)
dory:shares p1/share action (uncommitted)> set pool=p0
      pool = p0 (uncommitted)
dory:shares p1/share action (uncommitted)> commit
dory:shares p1/share replication> last get id
      id = 7034367a-d4d8-e26f-fa93-c3b454e3b595
dory:shares p1/share replication>
```

`last` コマンドが別のコマンドと組み合わせられると(この場合 `get id`)、このコマンドは最後に使用したノードのコンテキストで実行されますが、現在のノードは変更されないままとなります。

`last` コマンドでは、最後に使用したノードおよびその値を、ノードの名前を指定せずに取得できるため、このコマンドは特にスクリプトで役立ちます。

```
script
  project = 'myproj';
  target = 'mytarget';
  target_pool = 'notmypool';

  run('cd /');
```

```

run('shares select ' + project);
run('replication');
run('create');
set('target', target);
set('pool', target_pool);
run('commit');
run('last');
id = get('id');
printf("Sending update for replication action id %s ...", id);
run('sendupdate');
while (get('state') != 'idle') {
    printf(".");
    run('sleep 1');
}
printf("done\n");

```

以前のコンテキストに戻るには、`done` コマンドを使用します。

```

dory:configuration> done
dory:>

```

次に示すように、これによって戻る以前のコンテキストは、必ずしも親コンテキストではありません。

```

dory:> configuration users select bmc
dory:configuration users bmc> done
dory:>

```

`done` コマンドを複数回使用すると、以前のコンテキストに1つつ戻ることができます。

```

dory:> configuration
dory:configuration> users
dory:configuration users> select bmc
dory:configuration users bmc> done
dory:configuration users> done
dory:configuration> done
dory:>

```

親コンテキストに移動するには、`cd` コマンドを使用します。従来の UNIX コマンドと同様に、親コンテキストへの移動を示すには、`cd` に「`..`」の引数を指定します。

```

dory:> configuration users select bmc
dory:configuration users bmc> cd ..
dory:configuration users>

```

また、UNIX コマンドと同様に、「`cd /`」を指定するとルートコンテキストに移動します。

```

dory:> configuration
dory:configuration> users
dory:configuration users> select bmc
dory:configuration users bmc> cd /
dory:>

```

さらに、UNIX コマンドと同様に、「`cd ../..`」を使用すると親の親のコンテキストに移動できます。

```

dory:> configuration

```

```
dory:configuration> users
dory:configuration users> select bmc
dory:configuration users bmc> cd ../../
dory:configuration>
```

コンテキスト名は、静的コンテキスト (通常のコマンド補完を介して) か動的コンテキスト (`select` コマンドのコマンド補完を介して) かにかかわらずタブ補完されます。次に示すのは、ルートコンテキストから `bmc` という名前のユーザーを、タブ補完を使用しない場合に必要になる 31 回ではなく、わずか 15 回のキーストロークで選択する例です。

```
dory:> configtab
dory:> configuration utab
dory:> configuration users setab
dory:> configuration users select tab
bmc root
dory:> configuration users select btab
dory:> configuration users select bmcenter
dory:configuration users bmc>
```

コンテキスト内では、コンテキスト固有のコマンドを実行します。たとえば、現在のユーザーのプリファレンスを取得するには、`configuration preferences` コンテキストから `get` コマンドを実行します。

```
dory:configuration preferences> get
      locale = C
      login_screen = status/dashboard
      session_timeout = 15
      session_annotation =
      advanced_analytics = false
```

コンテキストを変更するコマンドのあとに入力が存在する場合は、ターゲットのコンテキストでそのコマンドが実行されますが、制御は呼び出し側のコンテキストに戻ります。たとえば、コンテキストを変更せずにルートコンテキストからプリファレンスを取得するには、コンテキストナビゲーションコマンドに `get` コマンドを追加します。

```
dory:> configuration preferences get
      locale = C
      login_screen = status/dashboard
      session_timeout = 15
      session_annotation =
      advanced_analytics = false
```

システム内で新しいエンティティを作成した場合は通常、新しいエンティティに関連付けられたコンテキストが、コミットされていない状態で作成されます。たとえば、`configuration alerts threshold` コンテキストから `create` コマンドを実行することによってしきい値アラートを作成します。

```
dory:> configuration alerts thresholds create
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)>
```

プロンプト内の `(uncommitted)` は、これがコミットされていないコンテキストであることを示します。コミットされていないエンティティは、`commit` コマンドを使用してコミットされます。コミットされていないコンテキストから移動しようとする、確認を求めるプロンプトが表示されます。

```
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> cd /
Leaving will abort creation of "threshold". Are you sure? (Y/N)
```

コミットされていないエンティティをコミットするときは、新しいエンティティに関連付けられたプロパティが検証され、エンティティを作成できない場合はエラーが生成されます。たとえば、新しいしきい値アラートの作成には統計名の指定が必要であり、この名前を設定できない場合はエラーが生成されます。

```
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> commit
error: missing value for property "statname"
```

この問題を解決するには、エラーに対処してコミットを再試行します。

```
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> set statname=cpu.utilization
statname = cpu.utilization (uncommitted)
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> commit
error: missing value for property "limit"
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> set limit=90
limit = 90 (uncommitted)
dory:configuration alerts threshold (uncommitted)> commit
dory:configuration alerts thresholds> list
THRESHOLD      LIMIT      TYPE STATNAME
threshold-000      90      normal cpu.utilization
```

関連トピック

- [33 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\)」](#)
- [39 ページの「CLI のプロパティ」](#)

CLI のプロパティ

プロパティとは、コンテキストに関連付けられている、型付けされた名前と値のペアです。特定のコンテキストのプロパティは、「`help properties`」コマンドを実行することによって確認できます。ユーザーのプリファレンスに関連付けられたプロパティを取得する例を次に示します。

```
dory:configuration preferences> help properties
Properties that are valid in this context:

locale           => Locality

login_screen     => Initial login screen

session_timeout  => Session timeout

session_annotation => Current session annotation

advanced_analytics => Make available advanced analytics statistics
```

特定のコンテキストのプロパティは、`get` コマンドを使用して取得できます。`get` コマンドを使用してユーザーのプリファレンスを取得する例を次に示します。

```
dory:configuration preferences> get
locale = C
login_screen = status/dashboard
```

```

    session_timeout = 15
    session_annotation =
    advanced_analytics = false

```

get コマンドは、引数として指定された任意のプロパティを返します。たとえば、login_screen プロパティの値を取得するには、次のコマンドを実行します。

```

dory:configuration preferences> get login_screen
    login_screen = status/dashboard

```

get コマンドは、使用可能なプロパティの名前によってタブ補完されます。たとえば、iSCSI サービスの使用可能なプロパティのリストを表示するには、次のコマンドを実行します。

```

dory:> configuration services iscsi get tab
<status>          isns_server          radius_secret          target_chap_name
isns_access        radius_access          radius_server          target_chap_secret

```

select コマンド、または二重引用符で囲んだコマンドは、プロパティ別の動的ノードを選択します。たとえば、ユーザー別に key-000 を選択するには:

```

hostname:configuration services sftp keys> show
Keys:

NAME      MODIFIED          CIPHER  USER  COMMENT
key-000   2015-6-5 19:48:23  RSA     u1     1

hostname:configuration services sftp keys> "user=u1"
hostname:configuration services sftp key-000>

```

set コマンドは、プロパティを指定された値に設定します。ここで、プロパティ名とその値は等号で区切られます。たとえば、login_screen プロパティを「shares」に設定するには、次のコマンドを実行します。

```

dory:configuration preferences> set login_screen=shares
    login_screen = shares (uncommitted)

```

アプライアンス上の状態を構成するプロパティの場合は、プロパティを設定してもその値は変更されず、代わりに、設定された値が記録され、そのプロパティの値はコミットされていないことが示されます。

設定済みのプロパティ値を強制的に有効にするには、それらのプロパティ値を明示的にコミットして、複数の値を1つの整合性のある変更として変更できるようにする必要があります。いずれかのコミットされていないプロパティ値をコミットするには、commit コマンドを使用します。

```

dory:configuration preferences> get login_screen
    login_screen = shares (uncommitted)
dory:configuration preferences> commit
dory:configuration preferences> get login_screen
    login_screen = shares

```

コミットされていないプロパティを含むコンテキストから移動しようとする、この移動によって設定済みのプロパティ値が破棄される旨の警告が表示され、移動を確認するよう求められます。例:

```

dory:configuration preferences> set login_screen=maintenance/hardware

```



```

        login_screen = maintenance/hardware (uncommitted)
dory:configuration preferences> done
You have uncommitted changes that will be discarded. Are you sure? (Y/N)

```

コンテキスト内のプロパティが別のコンテキストから設定された場合、つまり、コンテキストを変更するコマンドに `set` コマンドが追加された場合、そのコミットは黙行的に行われ、制御が発信元のコンテキストに返される前に実行されます。例:

```

dory:> configuration preferences set login_screen=analytics/worksheets
        login_screen = analytics/worksheets
dory:>

```

一部のプロパティには、値のリストを指定します。これらのプロパティでは、リストの要素をコンマで区切るようにしてください。たとえば、NTP の `servers` プロパティを、次のように NTP サーバーのリストに設定できます。

```

dory:configuration services ntp> set servers=0.pool.ntp.org,1.pool.ntp.org
        servers = 0.pool.ntp.org,1.pool.ntp.org (uncommitted)
dory:configuration services ntp> commit

```

プロパティ値にコンマ、等号、引用符、または空白が含まれている場合は、値全体を二重引用符で囲む必要があります。たとえば、デフォルトのプロジェクトの `sharenfs` シェアプロパティを読み取り専用にし、ホスト `kiowa` に読み取り/書き込みアクセスを提供するよう設定するには、次のようにします。詳細は、[345 ページの「シェアとプロジェクト」](#)を参照してください。

```

dory:> shares select default
dory:shares default> set sharenfs="ro,rw=kiowa"
        sharenfs = ro,rw=kiowa (uncommitted)
dory:shares default> commit

```

一部のプロパティは変更不可能です。その値は取得できますが、設定することはできません。変更不可能なプロパティを設定しようとする、エラーが生成されます。たとえば、デフォルトのプロジェクトの変更不可能な `space_available` プロパティを設定しようとする、次のようになります。詳細は、[345 ページの「シェアとプロジェクト」](#)を参照してください。

```

dory:> shares select default
dory:shares default> get space_available
        space_available = 1.15T
dory:shares default> set space_available=100P
error: cannot set immutable property "space_available"

```

ほかの一部のプロパティは、特定の条件でのみ変更不可能です。これらのプロパティに対して、`set` コマンドは有効ではありません。たとえば、`bmc` という名前のユーザーがネットワークユーザーである場合、`fullname` プロパティは変更不可能です。

```

dory:> configuration users select bmc set fullname="Rembrandt Q. Einstein"
error: cannot set immutable property "fullname"

```

関連トピック

- [22 ページの「ブラウザユーザーインタフェース \(BUI\)」](#)
- [33 ページの「コマンド行インタフェース \(CLI\)」](#)

CLI スクリプトの操作

CLI は、繰り返しタスクを実行するための強力なスクリプト環境を提供するように設計されています。

バッチコマンドまたはスクリプトコマンド (あるいなんらかの組み合わせ) を使用できますが、どの場合でも自動化インフラストラクチャーにはこのアプライアンスへの自動アクセスが必要になります。そのためには、ユーザー構成、ユーザー認証、および CLI を使用した SSH 公開鍵設定を行う必要があります。

ユーザーの構成方法については、次を参照してください。

- [162 ページの「ユーザーの構成」](#)
- [178 ページの「ユーザー承認」](#)
- [184 ページの「SSH 公開鍵の設定 \(CLI\)」](#)

CLI スクリプトを使用するには、次のセクションを使用します。

- [バッチコマンドの使用](#)
- [CLI スクリプトコマンドについて](#)
- [CLI スクリプト環境へのアクセス](#)
- [CLI の組み込み関数について](#)
- [run 関数の使用](#)
- [get 関数の使用](#)
- [list 関数の使用](#)
- [children 関数の使用](#)
- [choices 関数の使用](#)
- [出力を生成するための関数の使用](#)
- [CLI スクリプトエラーについて](#)

バッチコマンドの使用

もっとも単純なスクリプト化のメカニズムは、アプライアンスのシェルコマンドをバッチ処理することです。たとえば、プロジェクト「myproj」とファイルシステム「myfs」内に「newsnap」と呼ばれるスナップショットを自動的に作成するには、ファイル内に次のコマンドを記述します。

```
shares
select myproj
select myfs
snapshots snapshot newsnap
```

次に、このファイルを標準入力としてリダイレクトして、アプライアンスに ssh を実行します。

```
% ssh root@dory < myfile.txt
```

多くのシェルでは、「ヒアドキュメント」を使用してこれを省略できます。この場合は、トークンまでの入力が標準入力に送信されます。ヒアドキュメントを使用した場合の上の例を次に示します。

```
% '''ssh root@dory << EOF
shares
select myproj
select myfs
snapshots snapshot newsnap
EOF'''
```

このメカニズムは、もっとも単純な種類の自動化には十分であり、またクライアント上のより高水準なシェルスクリプト言語のプログラムロジックでラップされている場合は十分である可能性があります。一般にはかなり不十分な方法です。

CLI スクリプトコマンドについて

もっとも単純な操作にはコマンドのバッチ処理で十分ですが、プログラムロジックでラップすることは面倒になる場合があります。たとえば、すべてのシェアの領域使用状況に関する情報を取得する場合は、特定のコマンドの出力を解析したクライアント上のより高レベルの言語でラップされた、CLI のさまざまな呼び出しを行う必要があります。これにより、低速で、脆弱な自動化インフラストラクチャーがもたらされます。より高速で、もっとも堅牢な自動化を可能にするために、このアプライアンスには ECMAScript 3 に基づいた、機能の豊富なスクリプト環境が用意されています。ECMAScript のチュートリアルはこのドキュメントの範囲を超えていますが、ECMAScript は C に似た構文を持つ動的に型付けされる言語であり、次のことが可能になります。

- 条件付きコードフロー (if/else)
- 繰り返しのコードフロー (while、for など)
- 優れたオブジェクト型および配列型による構造的なデータや配列データの操作
- Perl に似た正規表現および文字列操作 (split(), join() など)
- 例外
- クロージャーなどの高度な言語機能

▼ CLI スクリプト環境へのアクセス

1. CLI で、`script` コマンドを使用してスクリプト環境に入ります。

```
dory:> script
("." to run)>
```

2. スクリプト環境のプロンプトが表示されたら、スクリプトを入力し、最後に 1 行に「`.`」だけを入力してそのスクリプトを実行できます。

```
dory:> script
("." to run)> for (i = 10; i > 0; i--)
("." to run)>   printf("%d... ", i);
("." to run)> printf("Blastoff!\n");
("." to run)> .
10... 9... 8... 7... 6... 5... 4... 3... 2... 1... Blastoff!
```

3. スクリプトが 1 行の場合は、単にそのスクリプトを `script` コマンドへの引数として指定できます。これは、スクリプトを調べるための簡単な方法になります。

```
dory:> script print("It is now " + new Date())
It is now Tue Oct 14 2009 05:33:01 GMT+0000 (UTC)
```

CLI の組み込み関数について

当然ながら、システムと詳細に対話できないかぎり、スクリプトはほとんど役立ちません。スクリプトがシステムと対話できるようにするための組み込み関数がいくつか存在します。

表 9 システムとの対話をサポートするための組み込み関数

関数	説明
<code>get</code>	指定されたプロパティの値を取得します。この関数はネイティブ形式の値を返します。たとえば、日付は <code>Date</code> オブジェクトとして返されます。
<code>list</code>	現在のコンテキストの動的な子に対応するトークンの配列を返します。
<code>run</code>	指定されたコマンドをシェルで実行し、すべての出力を文字列として返します。出力に複数の行が含まれている場合、返される文字列には、埋め込まれた復帰改行が含まれます。
<code>props</code>	現在のノードのプロパティ名の配列を返します。
<code>set</code>	2つの文字列引数を受け取り、指定されたプロパティを指定された値に設定します。
<code>choices</code>	値のセットが知られていて列挙可能であるすべてのプロパティの有効なプロパティ値の配列を返します。

▼ run 関数の使用

1. スクリプトがより大規模なシステムと対話するためのもっとも単純な方法は、「run」関数を使用することです。この関数は、実行するコマンドを受け取り、そのコマンドの出力を文字列として返します。例:

```
dory:> configuration version script dump(run('get boot_time'))
'
boot_time = 2009-10-12 07:02:17\n'
```

2. 組み込みの `dump` 関数は、埋め込まれた復帰改行を展開することなく引数をダンプ出力します。この出力を分割するために、ECMAScript の文字列処理機能を使用できます。たとえば、空白に基づいて上の出力を分割すると、次のようになります。

```
dory:> configuration version script dump(run('get boot_time').split(/\s+/))
[&#39;', 'boot_time', '=', '2009-10-12', '07:02:17', &#39;]
```

▼ get 関数の使用

`run` 関数は十分に強力であるため、システムに関する情報を取得するために、もっぱら出力の解析に頼りたくなることがあります。しかしこれには、将来変更されるかどうかかわからない、人間が読める形式の出力をスクリプトが解析し続けるという決定的な欠点があります。システムに関する情報をより安定して収集するには、組み込みの「`get`」関数を使用します。`boot_time` プロパティーの場合は、この関数によって文字列ではなく、ECMAScript の `Date` オブジェクトが返されるため、プログラムからプロパティー値を操作できます。

1. たとえば、`boot_time` プロパティーを現在の時間と組み合わせて使用して、ブートからの時間を特定することもできます。

```
script
run('configuration version');
now = new Date();
uptime = (now.valueOf() - get('boot_time').valueOf()) / 1000;
printf('up %d day%s, %d hour%s, %d minute%s, %d second%s\n',
    d = uptime / 86400, d < 1 || d >= 2 ? 's' : '',
    h = (uptime / 3600) % 24, h < 1 || h >= 2 ? 's': '',
    m = (uptime / 60) % 60, m < 1 || m >= 2 ? 's': '',
    s = uptime % 60, s < 1 || s >= 2 ? 's': '');
```

2. 上のスクリプトを「`uptime.aksh`」として保存したとすると、それを次の方法で実行できます。

```
% ssh root@dory < uptime.aksh
Pseudo-terminal will not be allocated because stdin is not a terminal.
Password:
up 2 days, 10 hours, 47 minutes, 48 seconds
```

仮想端末の割り当てに関するメッセージは、ssh クライアントによるものです。このメッセージが示す問題は、ssh に「`-T`」オプションを指定することによって対処できます。

▼ list 関数の使用

動的な子が存在するコンテキストでは、これらの子をプログラムから繰り返し処理すると非常に有効です。これを行うには、動的な子の配列を返す `list` 関数を使用します。

1. たとえば、次のスクリプト例は、すべてのプロジェクト内のすべてのシェアを繰り返し処理し、消費されている領域と空き領域を出力します。

```
script
run('shares');
projects = list();

for (i = 0; i < projects.length; i++) {
run('select ' + projects[i]);
shares = list();

for (j = 0; j < shares.length; j++) {
run('select ' + shares[j]);
printf("%s/%s %1.64g %1.64g\n", projects[i], shares[j],
get('space_data'), get('space_available'));
run('cd ..');
}

run('cd ..');
}
```

2. このスクリプトが「space.aksh」という名前のファイルに保存されたと仮定して、スクリプトを実行した出力を次に示します。

```
% ssh root@koi < space.aksh
Password:
admin/accounts 18432 266617007104
admin/exports 18432 266617007104
admin/primary 18432 266617007104
admin/traffic 18432 266617007104
admin/workflow 18432 266617007104
aleventhal/hw_eng 18432 266617007104
bcanttrill/analytx 1073964032 266617007104
bgregg/dashbd 18432 266617007104
bgregg/filesys01 26112 107374156288
bpijewski/access_ctrl 18432 266617007104
...
```

3. この結果の「きれいに出力された」バージョン (ただし、プログラムの処理はより困難になる) が必要な場合は、get コマンドの出力を直接解析することもできます。

```
script
run('shares');
projects = list();

printf('%-40s %-10s %-10s\n', 'SHARE', 'USED', 'AVAILABLE');

for (i = 0; i < projects.length; i++) {
run('select ' + projects[i]);
shares = list();

for (j = 0; j < shares.length; j++) {
run('select ' + shares[j]);

share = projects[i] + '/' + shares[j];
used = run('get space_data').split(/\s+/)[3];
avail = run('get space_available').split(/\s+/)[3];

printf('%-40s %-10s %-10s\n', share, used, avail);
run('cd ..');
}
}
```

```

        run('cd ..');
    }

```

4. このスクリプトが「prettyspace.aksh」という名前であると仮定して、この新しいスクリプトを実行した出力を次に示します。

```

% ssh root@koi < prettyspace.aksh
Password:
SHARE                               USED      AVAILABLE
admin/accounts                       18K       248G
admin/exports                         18K       248G
admin/primary                         18K       248G
admin/traffic                         18K       248G
admin/workflow                       18K       248G
aleventhal/hw_eng                    18K       248G
bcantrill/analytx                    1.00G     248G
bgregg/dashbd                        18K       248G
bgregg/filesys01                     25.5K     100G
bpijewski/access_ctrl                18K       248G
...

```

5. **list** 関数は、オプション引数 **depth** および **filter** をサポートします。

形式は、`list ([depth, [filter]])` です。引数 `depth` は、1つの数値で定義できます。`depth` の数値を大きくすると、より詳細な出力が返されます。引数 `filter` の形式は、`{<prop1>:<val1>, <prop2>:<val2> ...}` です。`filter` を指定する場合は、`depth` も指定する必要があります。

使用方法と入力の動作:

- `list()` - ノード名のみを返します。
- `list(0)` - ノードのプロパティと子の名前のみ返します。
- `list(0, {kiosk_mode: true})` - `kiosk_mode` が `true` の場合のフィルタ済みリストと子の名前を返します。
- `list(1)` - ノードのプロパティ、子の名前とプロパティ、孫の名前のみ返します。
- `list(1, {kiosk_mode: true})` - `kiosk_mode` が `true` の場合のフィルタ済みリストと `depth=1` までの詳細を返します。
- `list(2)` - ノードのプロパティ、子の名前とプロパティ、孫の `list(0)` 出力を返します。
- `list(2, {fullname: 'Super*', kiosk_mode: true})` - `fullname` に `Super` を含み、`kiosk_mode` が `true` の場合のフィルタ済みリストと、`depth=2` までの詳細を返します。

6. これは `depth=2` のときのリストの出力例です。

ラベル `name` はリスト項目 (すなわちノード) の名前を示します。ラベル `properties` はリスト項目のプロパティを示します。ラベル `children` はリスト項目の静的な子を示します。ラベル `list` はリスト項目の動的な子を示します。

```

script
    ("." to run)> dump(list(2));
    ("." to run)> .

```

```
[{
  name: 'restuser',
  properties: {
    kiosk_screen: 'status/dashboard',
    kiosk_mode: false,
    roles: ['basic'],
    require_annotation: false,
    initial_password: 'DummyPassword',
    fullname: 'REST User',
    logname: 'restuser'
  },
  children: [{
    name: 'preferences',
    properties: {
      advanced_analytics: false,
      session_timeout: 15,
      login_screen: 'status/dashboard',
      locale: 'C'
    }
  }, {
    name: 'exceptions',
    list: [{
      name: 'auth-000',
      properties: {
        allow_configure: false,
        scope: 'alert'
      }
    }, {
      name: 'auth-001',
      properties: {
        allow_workgroup: false,
        allow_domain: false,
        name: '*',
        scope: 'ad'
      }
    }
  ]
}]
}]
```

▼ children 関数の使用

静的な子が存在するコンテキストであっても、これらの子をプログラムから繰り返し処理すると有効です。これを行うには、静的な子の配列を返す children 関数を使用します。

1. たとえば、すべてのサービスを繰り返し処理し、そのサービスのステータスを出力するスクリプトを次に示します。

```
configuration services
script
  var svcs = children();
  for (var i = 0; i < svcs.length; ++i) {
    run(svcs[i]);
    try {
      printf("%-10s %s\n", svcs[i], get('<status>'));
    } catch (err) { }
```



```

        run("done");
    }

```

2. このスクリプトが「`svcinfo.aksh`」という名前のファイルに保存されたと仮定して、スクリプトを実行した出力を次に示します。

```

% ssh root@koi < space.aksh
Password:
cifs      disabled
dns       online
ftp       disabled
http      disabled
identity  online
idmap     online
ipmp      online
iscsi     online
ldap      disabled
ndmp      online
nfs       online
nis       online
ntp       online
scrk      online
sftp      disabled
smtp      online
snmp      disabled
ssh       online
tags      online
vscan     disabled

```

▼ choices 関数の使用

choices 関数は、値のセットが知られていて列挙可能であるすべてのプロパティの有効なプロパティ値の配列を返します。たとえば、次のスクリプトは、choices 関数を使用してシェアノード上のすべてのプールのリストを取得してから、すべてのプールを反復処理してプロジェクトのリストを作成し、使用可能な領域とともにシェアします。

1. たとえば、次のスクリプトは、choices 関数を使用してシェアノード上のすべてのプールのリストを取得してから、すべてのプールを反復処理してプロジェクトのリストを作成し、使用可能な領域とともにシェアします。

```

fmt = '%-40s %-15s %-15s\n';
printf(fmt, 'SHARE', 'USED', 'AVAILABLE');
run('cd /');
run('shares');
pools = choices('pool');
for (p = 0; p < pools.length; p++) {
    set('pool', pools[p]);
    projects = list();
    for (i = 0; i < projects.length; i++) {
        run('select ' + projects[i]);
        shares = list();
        for (j = 0; j < shares.length; j++) {
            run('select ' + shares[j]);
            share = pools[p] + ':' + projects[i] + '/' + shares[j];

```

```

        printf(fmt, share, get('space_data'),
              get('space_available'));
        run('cd ..');
    }
    run('cd ..');
}

```

2. これは、スクリプトを実行した出力です。

SHARE	USED	AVAILABLE
pond:projectA/fs1	31744	566196178944
pond:projectA/fs2	31744	566196178944
pond:projectB/lun1	21474836480	587670999040
puddle:deptA/share1	238475	467539219283
puddle:deptB/share1	129564	467539219283
puddle:deptB/share2	19283747	467539219283

出力を生成するための関数の使用

システムの状態を報告するには、出力を生成する必要があります。出力を生成するために、スクリプトで使用可能な組み込み関数がいくつか存在します。

表 10 出力を生成するための組み込み関数

関数	説明
dump	埋め込まれた復帰改行を展開することなく、指定された引数を端末にダンプします。オブジェクトは、JSON に似た形式で表示されます。デバッグに有効です。
print	指定されたオブジェクトを文字列として出力し、そのあとに復帰改行を出力します。そのオブジェクトに toString メソッドがない場合は、不透明に出力されます。
printf	C の printf(3C) と同様に、指定された引数を指定された書式設定文字列に従って出力します。

CLI スクリプトエラーについて

エラーが生成されると、例外がスローされます。この例外は一般に、次のメンバーを含むオブジェクトです。

- code - エラーに関連付けられた数値コード
- message - エラーに関連付けられた、人間が読める形式のメッセージ

例外はキャッチして処理できます。または、スクリプト環境からスローされる可能性があります。スクリプト環境にキャッチされていない例外がある場合は、CLI にその詳細が表示されます。例:

```
dory:> script run('not a cmd')
error: uncaught error exception (code EAKSH_BADCMD) in script: invalid command
      "not a cmd" (encountered while attempting to run command "not a cmd")
```

例外をキャッチしてダンプすることによって、例外に関するより詳細な情報を表示できます。

```
dory:> script try { run('not a cmd') } catch (err) { dump(err); }
{
  toString: <function>,
  code: 10004,
  message: 'invalid command "not a cmd" (encountered while attempting to
           run command "not a cmd")'
}
```

また、これにより、豊富なエラー処理も可能になります。次に例を示します。

```
#!/usr/bin/ksh -p

ssh -T root@dory <<EOF
script
  try {
    run('shares select default select $1');
  } catch (err) {
    if (err.code == EAKSH_ENTITY_BADSELECT) {
      printf('error: "$1" is not a share in the ' +
            'default project\n');
      exit(1);
    }

    throw (err);
  }

  printf('default/$1: compression is %s\n', get('compression'));
  exit(0);
EOF
```

このスクリプトが「share.ksh」という名前であり、無効なシェア名で実行された場合は、次のような豊富なエラーメッセージが生成されます。

```
% ksh ./share.ksh bogus
error: "bogus" is not a share in the default project
```


アプライアンスの構成

アプライアンスを構成するには、次のセクションを使用します。

- [53 ページの「アプライアンスの初期構成」](#)
- [53 ページの「ネットワーク構成」](#)
- [86 ページの「ストレージの構成」](#)
- [113 ページの「アプライアンスステータスについて」](#)
- [129 ページの「Storage Area Network \(SAN\) の構成」](#)
- [162 ページの「ユーザーの構成」](#)
- [181 ページの「アプライアンスのプリファレンス設定」](#)
- [186 ページの「アラートの構成」](#)
- [192 ページの「アプライアンスのクラスタ構成」](#)

アプライアンスの初期構成

初期構成は「保守」>「システム」画面で「初期セットアップ」ボタンをクリックするか、CLIの `maintenance system setup` コンテキストに入ることによって、あとで繰り返すことができます。

初期構成の詳細な情報は、『[Oracle ZFS Storage Appliance インストールガイド](#)』、「[アプライアンスの初回の構成](#)」にあります。

ネットワーク構成

ネットワーク構成機能により、物理的なネットワークポートを使用して、リンクアグリゲーション、仮想 NIC (vNIC)、仮想 LAN (VLAN)、マルチパスグループなどのさまざまな高度なネットワーク設定を作成できます。次に、システム上のさまざまなデータサービスへの接続で使用するために、これらの抽象化のための任意の数の IPv4 および IPv6 アドレスを定義できます。

システムのネットワーク構成には、次の 4 つのコンポーネントがあります。

- **デバイス** - 物理的なネットワークポート。デバイスは、物理的なネットワーク接続または InfiniBand (IPoIB) パーティション上の IP に対応します。
- **データリンク** - パケットを送受信するための基本的な構成体。データリンクは、デバイス (つまり、物理的なネットワークポート) または IB パーティションと 1:1 に対応させることができます。または、ほかのデバイスとデータリンクで構成されたアグリゲーション、VLAN、および VNIC データリンクを定義できます。
- **インタフェース** - IP の構成およびアドレス指定のための基本的な構成体。各 IP インタフェースは 1 つのデータリンクに関連付けられるか、またはほかのインタフェースで構成された IP マルチパス (IPMP) グループとして定義されます。
- **ルーティング** - IP ルーティングの構成。これにより、システムによる IP パケットの転送方法が制御されます。

アプライアンス用のネットワークを構成するには、次のセクションを参照してください。


- [54 ページの「ネットワーク構成 \(BUI\)」](#)
- [67 ページの「ネットワーク構成 \(CLI\)」](#)
- [74 ページの「ネットワーク構成の操作」](#)
- [76 ページの「管理インタフェースの構成」](#)
- [76 ページの「ネットワークデータリンクの構成」](#)
- [79 ページの「ネットワークインタフェースの構成」](#)
- [80 ページの「ネットワーク IP マルチパス \(IPMP\) の構成」](#)
- [82 ページの「ネットワークのパフォーマンスおよび可用性の構成」](#)
- [83 ページの「ネットワークルーティングの構成」](#)

ネットワーク構成 (BUI)

BUI を使用してネットワークを再構成する場合、システムは、ユーザーのブラウザへの現在のネットワーク接続を保持するためにあらゆる努力を行います。ただし、ブラウザの接続先の特定のアドレスを削除する場合など、ネットワーク構成の変更の中には、ブラウザが接続を失うことが避けられないものがあります。このため、管理者が使用するための特定の IP アドレスとネットワークデバイスを割り当てておき、常にそのアドレスを構成された状態に保つことをお勧めします。また、必要に応じて、シリアルコンソールを介して CLI から特に複雑なネットワーク再構成タスクを実行することもできます。


次のアイコンは、「構成」 > 「ネットワーク」セクションで使用されます。

表 11 ネットワーク構成のアイコン


アイコン	説明
	新しいデータリンク/インタフェース/ルートの追加


アイコン	説明
	データリンク/インタフェース/ルート設定の編集
	編集無効
	データリンク/インタフェース/ルートの破棄
	破棄無効
	ドラッグ&ドロップアイコン
	接続されたネットワークポート
	I/O アクティビティにより接続されたネットワークポート
	切断されたネットワークポート (リンク停止、ケーブルの問題か)
	アクティブな InfiniBand ポート
	I/O アクティビティによりアクティブな InfiniBand ポート
	アクティブでない InfiniBand ポート (停止、初期化、またはアラーム状態)
	InfiniBand パーティションデバイスが稼働中
	InfiniBand パーティションデバイスが停止中 (サブネットマネージャーの問題)
	ネットワークデータリンク
	ネットワークデータリンク VLAN または VNIC
	ネットワークデータリンクアグリゲーション
	ネットワークデータリンクアグリゲーション VLAN または VNIC
	ネットワークデータリンク IB パーティション
	インタフェースがパケットの送受信に使用されている (稼働中または縮退のどちらか)
	インタフェースがユーザーによって無効にされている
	インタフェースがオフライン (クラスタピアによって所有されている)
	インタフェースに障害が発生したか、または重複した IP アドレスが構成されている

右上には「構成」、「アドレス」、「ルーティング」のためのローカルナビゲーションが配置され、これらの構成ビューが交互に表示されます。

デフォルトでは「構成」ページが表示され、「デバイス」、「データリンク」、および「インタフェース」のリストが管理のためのボタンとともに表示されます。マウスをエントリの上に移動すると追加の  アイコンが表示され、任意のエントリをクリックすると、そのエントリに関連付けられたほかのコンポーネントが強調表示されます。

「デバイス」リストには、右側にリンクステータスのほか、ネットワークポートの状態が反映されたアイコンも表示されます。ポートの切断が表示される場合は、ポートがネットワークに正しく接続されていることを確認してください。

ネットワークデバイスで IP アドレスを構成するには、最初にデータリンクを作成し、次にそのデータリンクを使用するインタフェースを作成します。  アイコンを使用するとその両方を実行することができ、データリンクプロパティとインタフェースプロパティのダイアログが表示されます。

ネットワークインタフェースの構成には複数の方法があります。デバイスの  アイコンをクリックし、それをデータリンクテーブルにドラッグしてみてください。次に、そのデータリンクをインタフェーステーブルにドラッグします。その他の移動も可能です。この方法は、有効な移動が強調表示されている複雑な構成に役立つことがあります。

このページには、現在のネットワーク構成のサマリー表が表示されます。次のフィールドがあります。

表 12 現在のネットワーク構成のサマリー

フィールド	説明	例
ネットワークデータリンク	データリンク名と詳細なサマリー	datalink1 (igb0 経由)
ネットワークインタフェース	インタフェース名と詳細なサマリー	IPv4 DHCP、datalink1 経由
ネットワークアドレス	このインタフェースでホストされているアドレス	192.168.2.80/22
ホスト名	ネットワークアドレスの解決されたホスト名	caji.sf.example.com

このページには、IP ルーティングテーブルの構成と、上で説明した関連付けられたプロパティが表示されます。デフォルトでは、ルーティングテーブル内のすべてのエントリが表示されますが、サブナビゲーションバーを使用すると、このテーブルをタイプでフィルタ処理できます。

特定のルートをチェックするには、CLI で `traceroute` を使用します。

```
zfssa-source:> traceroute 10.80.198.102
traceroute: Warning: Multiple interfaces found; using 10.80.198.101 @ igb3
traceroute to 10.80.198.102 (10.80.198.102), 30 hops max, 40 byte packets
```




```

1 10.80.198.1 (10.80.198.1) 6.490 ms 0.924 ms 0.834 ms
2 10.80.198.102 (10.80.198.102) 0.152 ms 0.118 ms 0.099 ms
zfssa-target:> traceroute 10.80.198.101
traceroute: Warning: Multiple interfaces found; using 10.80.198.102 @ igb3
traceroute to 10.80.198.101 (10.80.198.101), 30 hops max, 40 byte packets
1 10.80.198.1 (10.80.198.1) 1.031 ms 0.905 ms 0.769 ms
2 10.80.198.101 (10.80.198.101) 0.158 ms 0.111 ms 0.109 ms


```

▼ 管理インターフェースの構成 (BUI)

管理インターフェースを構成するには、次の手順を実行します。

1. 「構成」 > 「ネットワーク」に移動します。
2. 「データリンク」の横にある追加アイコン  をクリックします。
3. 次の最小データリンクプロパティを設定し、「適用」をクリックします。
 - 「VNIC」 - このチェックボックスにチェックマークを付けます。
 - 「名前」 - データリンクの名前を入力します。
4. 作成されたデータリンクを「インターフェース」列にドラッグします。
5. 「ネットワークインターフェース」ダイアログボックスで、次の最小インターフェースプロパティを設定して、「適用」をクリックします。
 - 「名前」 - インターフェースの名前を入力します。
 - 「インターフェースを有効化」 - インターフェースを有効にするには、このチェックボックスにチェックマークを付けます。
 - 「管理を許可」 - これを、ポート 215 での BUI 接続と ssh ポート 22 での CLI 接続を有効にする管理インターフェースにするには、このチェックボックスにチェックマークを付けます。

注記 - 「管理を許可」オプションを選択すると管理インターフェースとなり、ポート 215 で BUI 接続、ssh ポート 22 で CLI 接続が有効になります。

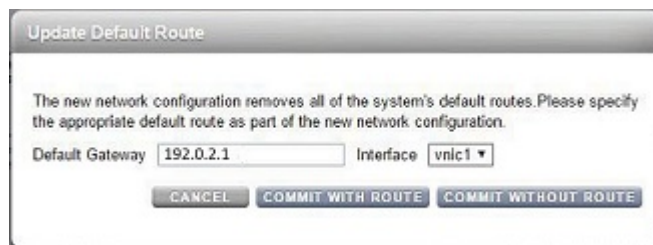
 - 「IPv4 プロトコルを使用」または「IPv6 プロトコルを使用」 - プロトコルとそのアドレスタイプを選択して、1 つ以上の IP アドレスを CIDR 表記で入力します。
6. クラスタ化コントローラの場合は、2 番目のコントローラで手順 1 - 5 を繰り返します。
7. デフォルトのインターフェースである「無題のインターフェース」の横にあるごみ箱アイコン  をクリックして、これを破棄します。

注記 - インタフェースを削除すると、そのインタフェースに関連付けられたすべてのルートも削除されます。

8. 「デフォルトルートを更新」ダイアログボックスで、「デフォルトゲートウェイ」を入力して、ドロップダウンメニューから「インタフェース」を選択します。「ルートを使ってコミット」をクリックします。

デフォルトゲートウェイはデフォルトルーターの IP アドレスです。インタフェースでは、最初の管理インタフェースに割り当てたデータリンクを選択します。

注記 - BUI および CLI を使用してアプリケーションと通信できるようになるため、ルートを設定することを強くお勧めします。ルートがない場合、アプライアンスとの通信手段は SP への Oracle ILOM 接続の使用だけです。



関連トピック

- ネットワークインタフェースの構成の概要については、74 ページの「ネットワーク構成の操作」を参照してください。
- その他の構成については、53 ページの「アプライアンスの構成」を参照してください。
- スタンドアロンコントローラでソフトウェアをアップグレードするには、『Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル』、「ソフトウェアのアップグレード」を参照してください。
- クラスタ管理インタフェースをロックするには、58 ページの「クラスタ管理インタフェースのロック (BUI)」を参照してください。





▼ クラスタ管理インタフェースのロック (BUI)

初期構成後のクラスタ化コントローラはアクティブ/アクティブ状態になっています。フェイルオーバーが発生した場合、アクティブコントローラはプライベート以外のすべてのインタフェースをテイクオーバーし、ピアコントローラがパッシブになってその BUI および CLI からアクセスできなくなります。その状態に関係なくコントローラへのアクセスを維持するには、管理インタフェースをロックしてプライベートにし

ます。次の手順では、各クラスタ化コントローラで管理インタフェースをロックします。




注意 - クラスタ化コントローラでロックされた管理インタフェースの構成に失敗すると、障害の診断および解決に必要な時間が長くなる可能性があります。


1. 最初のコントローラの BUI で、「構成」 > 「クラスタ」に移動します。
2. 2 番目のコントローラの BUI で、「構成」 > 「クラスタ」に移動します。
3. 最初のコントローラの BUI で、「リソース」リストから最初のコントローラの管理インタフェースを選択します。
4. 南京錠アイコン  をクリックして、このコントローラへの管理インタフェースをロックします。
このインタフェースでは、「リソース」リストのその名前の横にロックされたアイコン  が表示されます。
5. 2 番目のコントローラの BUI で、「リソース」リストから 2 番目のコントローラの管理インタフェースを選択します。
6. 南京錠アイコン  をクリックして、このコントローラへの管理インタフェースをロックします。
このインタフェースでは、「リソース」リストのその名前の横にロックされたアイコン  が表示されます。

関連トピック

- ソフトウェアをアップグレードするには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ソフトウェアのアップグレード](#)」を参照してください。

▼ シングルポートインタフェースの作成 (BUI)



1. データリンク  アイコンをクリックします。
2. オプションで、名前を設定し、カスタム MTU のラジオボタンを選択します (テキストボックスに「9000」と入力します)。
3. 「デバイス」リストからデバイスを選択します。
4. 「適用」をクリックします。データリンクが「データリンク」リストに表示されます。

5. インタフェース  アイコンをクリックします。
6. 目的のプロパティを設定し、前に作成されたデータリンクを選択します。
7. 「適用」をクリックします。インタフェースが「インタフェース」リストに表示されます。
8. 実行中のアプライアンスネットワーク構成はまだ変更されていません。インタフェースの構成を完了したら、いちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。

▼ インタフェースの変更 (BUI)

1. データリンクまたはインタフェースのどちらかにある編集アイコンをクリックします。
2. 設定を目的の値に変更します。
3. ダイアログにある「適用」をクリックします。
4. ページのいちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。

▼ データインタフェースのロック解除 (BUI)

1. 「構成」 > 「クラスタ」に移動します。
2. データインタフェースのロックアイコンが、ロック解除されていることを示す灰色  になっていることを確認します。
3. ロックアイコンが黒  の場合、各アイコンをクリックしてインタフェースをロック解除します。
4. 「適用」をクリックして変更を保存します。

▼ データインタフェースのロック解除 (CLI)

1. **configuration cluster resources** に移動します。
`hostname:> configuration cluster resources`
2. 「show」と入力します。
すべてのデータインタフェースで TYPE が singleton に設定されているべきです。

```
hostname:configuration cluster resources> show
Resources:
```

RESOURCE	OWNER	TYPE	LABEL	CHANGES	DETAILS
net/vnic2	zs34-02	private	mgmt-02	no	10.80.218.170
net/vnic3	zs34-02	private	data-01	no	10.80.216.46
net/vnic4	zs34-02	singleton	data-02	no	10.80.216.47
zfs/pool-01	zs34-01	singleton		no	
zfs/pool-02	zs34-02	singleton		no	53.5T

3. データインタフェースのタイプがプライベートに設定されている場合、リソースを選択して、タイプをシングルトンに設定します。

```
hostname:configuration cluster resources> select net/vnic3
hostname:configuration cluster resources net/vnic3> set type=singleton
type = singleton
```

4. 「commit」と入力します。


```
hostname:configuration cluster resources> commit
```

▼ シングルポートインタフェースの作成 (BUI)

1. マウスをデバイスの上に移動し、ドラッグ&ドロップアイコン (⊕) をクリックします。
2. それを「データリンク」リストにドラッグして離します。
3. オプションで、名前とジャンボ MTU を設定します。
4. 「適用」をクリックします。
5. 次に、データリンクを「インタフェース」リストにドラッグします。
6. 目的のプロパティを設定し、「適用」をクリックします。
7. 画面のいちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。


▼ LACP 集合リンクインタフェースの作成 (BUI)

1. データリンク ⊕ アイコンをクリックします。
2. オプションで、データリンク名を設定します。
3. LACP アグリゲーションを選択します。
4. 「デバイス」リストから 2 つ以上のデバイスを選択し、「適用」をクリックします。

5. インタフェース  アイコンをクリックします。
6. 目的のプロパティを設定し、「データリンク」リストから集合リンクを選択して、「適用」をクリックします。
7. いちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。


▼ プロブベースのリンク状態障害検出を使用した IPMP グループの作成

IPMP テストのアドレスと同じサブネット上に、ICMP エコーリクエストに応答するように構成されている (クラスタピア以外の) システムがない場合、プローブベースの障害検出を使用しないでください。


1. IPMP グループのコンポーネントとして使用される 1 つ以上の「基になる」IP インタフェースを作成します。各インタフェースには、プローブのソースとして使用される IP アドレスが必要です (上のシングルポートインタフェースを作成するための個別のタスクを参照)。
2. インタフェース  アイコンをクリックします。
3. オプションで、インタフェースの名前を変更します。
4. 「IP マルチパスグループ」チェックボックスにチェックマークを付けます。
5. 「IPv4 プロトコルを使用」または「IPv6 プロトコルを使用」、あるいはその両方をクリックし、IPMP インタフェースの IP アドレスを指定します。
6. 「インタフェース」リストから、最初の段階で作成されたインタフェースを選択します。
7. 選択した各インタフェースを、必要に応じて「アクティブ」または「スタンバイ」のどちらかに設定します。
8. 「適用」をクリックします。

▼ リンク状態のみの障害検出を使用した IPMP グループの作成


1. IPMP グループのコンポーネントとして使用される、IP アドレス 0.0.0.0/8 を持つ 1 つ以上の「基になる」IP インタフェースを作成します (上のシングルポートインタフェースを作成するための個別のタスクを参照)。

2. インタフェース  アイコンをクリックします。
3. オプションで、インタフェースの名前を変更します。
4. 「IP マルチパスグループ」チェックボックスにチェックマークを付けます。
5. 「IPv4 プロトコルを使用」または「IPv6 プロトコルを使用」、あるいはその両方をクリックし、IPMP インタフェースの IP アドレスを指定します。
6. 「インタフェース」リストから、最初の段階で作成されたインタフェースを選択します。
7. 選択した各インタフェースを、必要に応じて「アクティブ」または「スタンバイ」のどちらかに設定します。
8. 「適用」をクリックします。


▼ LACP アグリゲーションの拡張 (BUI)


1. マウスを「デバイス」リスト内のデバイスの上に移動します。
2.  アイコンをクリックし、そのデバイスをアグリゲーションのデータリンクにドラッグして離します。
3. ページのいちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。

▼ IPMP グループの拡張 (BUI)

1. マウスを「インタフェース」リスト内のインタフェースの上に移動します。
2.  アイコンをクリックし、そのデバイスを IPMP インタフェースにドラッグして離します。
3. ページのいちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。


▼ InfiniBand パーティションのデータリンクとインタフェースの作成 (BUI)




1. データリンク  アイコンをクリックします。

2. オプションで、名前を設定します。
3. 「IB パーティション」チェックボックスにチェックマークを付けます。
4. 「パーティションデバイス」リストからデバイスを選択します。
5. パーティションキーに対する 4 桁の 16 進数を入力します。これは、InfiniBand サブネットマネージャーで構成されたものと一致する必要があります。
6. ドロップダウンメニューからリンクモードを選択します。
7. 「適用」をクリックします。新しいパーティションデータリンクが「データリンク」リストに表示されます。
8. インタフェース  アイコンをクリックします。
9. 目的のプロパティを設定し、前に作成されたデータリンクを選択します。
10. 「適用」をクリックします。インタフェースが「インタフェース」リストに表示されます。
11. 実行中のアプライアンスネットワーク構成はまだ変更されていません。インタフェースの構成を完了したら、いちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。

▼ クラスタ化コントローラでの VLAN ID なしの VNIC の作成 (BUI)


この例は、ネットワークポートの半分がスタンバイ状態のアクティブ/アクティブ構成の場合です。このタスクでは、デバイスデータリンク上に IP インタフェースを作成して、ヘッドに割り当てます。VNIC は同じデータリンクの最上位に構築され、IP インタフェースは VNIC の最上位に構成されて、他方のヘッドに割り当てられます。特定のデータリンク上で VNIC を複数ではなく 1 つ構成すると、ピークパフォーマンスが確保されます。トラフィックは、一方のヘッド上の基盤となるアクティブレポート、および他方のヘッド上の基盤となるスタンバイポートに関連付けられているケーブル上を転送されます。このため、アイドル状態にあるほかのスタンバイポートを VNIC で使用できます。


1. クラスタが AKCS_CLUSTERED 状態にある場合、データリンク  アイコンをクリックします。
2. オプションで、名前と MTU を設定します。

3. 「デバイス」リストからデバイスを選択して、「適用」をクリックします。データリンクが「データリンク」リストに表示されます。
4. インタフェース  アイコンをクリックします。
5. 目的のプロパティを設定し、前に作成されたデータリンクを選択して、「適用」をクリックします。インタフェースが「インタフェース」リストに表示されます。
6. データリンク  アイコンをクリックします。
7. 「VNIC」チェックボックスにチェックマークを付け、オプションで名前と MTU (手順 2 の値以下) を設定して、「適用」をクリックします。新しい VNIC データリンクが「データリンク」リストに表示されます。
8. インタフェース  アイコンをクリックします。
9. 目的のプロパティを設定し、前に作成された VNIC データリンクを選択して、「適用」をクリックします。インタフェースが「インタフェース」リストに表示されます。
10. 実行中のアプライアンスネットワーク構成はまだ変更されていません。インタフェースの構成を完了したら、いちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。
11. 「クラスタ」タブをクリックします。新しく作成された 2 つのインタフェースが、デフォルトの所有者で「リソース」セクションに表示されます。
12. 「所有者」プルダウンリストを使用して 2 つのインタフェースの 1 つを他方のヘッドに割り当てて、「適用」をクリックします。

▼ クラスタ化コントローラでの同じ VLAN ID の VNIC の作成 (BUI)

この例は、ネットワークポートの半分がスタンバイ状態のアクティブ/アクティブ構成の場合です。このタスクでは、同じデバイスデータリンクの最上位に、同一の VLAN ID を持つ 2 つの VNIC を作成します。各 VNIC はインタフェースを使って構成され、各インタフェースは異なるヘッドに割り当てられます。トラフィックは、一方のヘッド上の基盤となるアクティブポート、および他方のヘッド上の基盤となるスタンバイポートに関連付けられているケーブル上を転送されます。このため、アイドル状態にあるほかのスタンバイポートを VNIC で使用できます。

1. クラスタが AKCS_CLUSTERED 状態にある場合、データリンク  アイコンをクリックします。

2. 「VNIC」チェックボックスにチェックマークを付け、オプションで名前と MTU を設定して、VLAN ID を設定してから、「デバイス」リストからデバイスを選択して、「適用」をクリックします。新しい VNIC データリンクが「データリンク」リストに表示されます。
3. インタフェース  アイコンをクリックします。
4. 目的のプロパティを設定し、前に作成された VNIC データリンクを選択して、「適用」をクリックします。インタフェースが「インタフェース」リストに表示されます。
5. 手順 1 と 2 の説明に従って、同じデバイスおよび VLAN ID で別の VNIC を作成してから、手順 3 と 4 の説明に従ってそのためのインタフェースを作成します。
6. 実行中のアプライアンスネットワーク構成はまだ変更されていません。インタフェースの構成を完了したら、いちばん上にある「適用」をクリックして、この構成をコミットします。
7. 「クラスタ」タブをクリックします。新しく作成された 2 つのインタフェースが、デフォルトの所有者で「リソース」セクションに表示されます。
8. 「所有者」プルダウンリストを使用して 2 つのインタフェースの 1 つを他方のヘッドに割り当てて、「適用」をクリックします。

▼ 静的ルートの追加 (BUI)

1. 「構成」 > 「ネットワーク」 > 「ルーティング」に移動します。
2. 追加アイコンをクリックします。
3. 先に説明したように、プロパティを入力します。
4. 「追加」をクリックします。新しいルートがテーブルに表示されます。

▼ 静的ルートの削除 (BUI)

1. 「構成」 > 「ネットワーク」 > 「ルーティング」に移動します。
2. マウスをルートエントリの上に移動し、右側にあるごみ箱アイコンをクリックします。

ネットワーク構成 (CLI)

ネットワーク構成は、configuration net の下にあります。これには、devices、datalinks、interfaces、および routing のためのサブコマンドがあります。各サブコマンドでは、show コマンドを使用して現在の構成を表示できます。

```
caji:> configuration net
caji:configuration net> devices show
Devices:
```

DEVICE	UP	SPEED	MAC
igb0	true	1000 Mbit/s	0:14:4f:9a:b9:0
igb1	true	1000 Mbit/s	0:14:4f:9a:b9:1
igb2	true	1000 Mbit/s	0:14:4f:9a:b8:fe
igb3	true	1000 Mbit/s	0:14:4f:9a:b8:ff

```
caji:configuration net> datalinks show
Datalinks:
```

DATALINK	CLASS	LINKS	LABEL
igb0	device	igb0	datalink1

```
caji:configuration net> interfaces show
Interfaces:
```

INTERFACE	STATE	CLASS	LINKS	ADDRS	LABEL
igb0	up	ip	igb0	192.168.2.80/22	caji

```
caji:configuration net> routing show
Properties:
    multihoming = loose

Routes:
```

ROUTE	DESTINATION	GATEWAY	INTERFACE	TYPE
route-000	0.0.0.0/0	192.168.1.1	igb0	dhcp
route-001	192.168.0.0/22	192.168.2.142	igb0	system

データリンク、インタフェース、およびルートの作成や構成のための関連コマンドを表示するには、各セクションで help を入力します。このコンテキストで有効なサブコマンドは次のとおりです。

```
help [topic]          => Get context-sensitive help. If [topic] is specified,
                        it must be one of "builtins", "commands", "general",
                        "help", "script" or "properties".

show                  => Show information pertinent to the current context

commit                => Commit current state, including any changes

abort                 => Abort creation of "vnic"

done                  => Finish operating on "vnic"

get [prop]            => Get value for property [prop]. ("help properties"
                        for valid properties.) If [prop] is not specified,
                        returns values for all properties.

set [prop]            => Set property [prop] to [value]. ("help properties"
                        for valid properties.) For properties taking list
```

values, [value] should be a comma-separated list of values.

available => Get values that can be assigned to the links parameter when creating a network component.

ネットワークコンポーネントの作成時に links パラメータに割り当てできる値を表示するには、available コマンドを使用します。次の例は、CLI コマンド available の出力を示しています。

```
caji:configuration net datalinks> device
caji:configuration net datalinks device (uncommitted)> available
igb7,igb6
```

```
caji:configuration net datalinks> vnic
caji:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> available
igb5,igb4,aggr2,aggr1
```

```
caji:configuration net datalinks> vlan
caji:configuration net datalinks vlan (uncommitted)> available
igb5,igb4,aggr2,aggr1
```

```
caji:configuration net datalinks> aggregation
caji:configuration net datalinks aggregation (uncommitted)> available
igb7,igb6
```

```
caji:configuration net interfaces> ip
caji:configuration net interfaces ip (uncommitted)> available
aggr2,aggr1
```

```
caji:configuration net interfaces> ipmp
caji:configuration net interfaces ipmp (uncommitted)> available
vnic4,vnic3,igb5,igb4
```

次の例は、device コマンドを使用したデータリンクの作成と、ip コマンドを使用したインタフェースの作成を示しています。

```
caji:configuration net> datalinks
caji:configuration net datalinks> device
caji:configuration net datalinks device (uncommitted)> set links=igb1
links = igb1 (uncommitted)
caji:configuration net datalinks device (uncommitted)> set label=datalink2
label = datalink2 (uncommitted)
caji:configuration net datalinks device (uncommitted)> set mtu=9000
mtu = 9000 (uncommitted)
caji:configuration net datalinks device (uncommitted)> commit
caji:configuration net datalinks> show
Datalinks:
```

DATALINK	CLASS	LINKS	LABEL
igb0	device	igb0	datalink1
igb1	device	igb1	datalink2

```
caji:configuration net datalinks> cd ..
caji:configuration net> interfaces
caji:configuration net interfaces> ip
caji:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set label="caji2"
label = caji2 (uncommitted)
caji:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set links=igb1
links = igb1 (uncommitted)
caji:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set v4addrs=10.0.1.1/8
v4addrs = 10.0.1.1/8 (uncommitted)
caji:configuration net interfaces ip (uncommitted)> commit
```

```
caji:configuration net interfaces> show
Interfaces:
```

INTERFACE	STATE	CLASS	LINKS	ADDRS	LABEL
igb0	up	ip	igb0	192.168.2.80/22	caji
igb1	up	ip	igb1	10.0.1.1/8	caji2

次の例は、新しい igb1 IP インタフェースを介した 10.0.1.2 経由のデフォルトルートの作成を示しています。

```
caji:configuration net routing> create
caji:configuration net route (uncommitted)> set family=IPv4
family = IPv4 (uncommitted)
caji:configuration net route (uncommitted)> set destination=0.0.0.0
destination = 0.0.0.0 (uncommitted)
caji:configuration net route (uncommitted)> set mask=0
mask = 0 (uncommitted)
caji:configuration net route (uncommitted)> set interface=igb1
interface = igb1 (uncommitted)
caji:configuration net route (uncommitted)> set gateway=10.0.1.2
gateway = 10.0.1.2 (uncommitted)
caji:configuration net route (uncommitted)> commit
```

▼ 管理インタフェースの構成 (CLI)

管理インタフェースを構成するには、次の手順を実行します。

1. **configuration net** に移動し、**datalinks** と入力します。

```
hostname:> configuration net
hostname:configuration net> datalinks
```

2. **show** と入力し、データリンクを表示します。

```
hostname:configuration net datalinks> show
Datalinks:
```

DATALINK	CLASS	LINKS	STATE	ID	LABEL
igb0	device	igb0	up	-	Untitled Datalink

3. **vnic** コンテキストに移動して、リンクが管理用であることを示すようにそのラベルを設定することで、管理データリンクの **VNIC** を作成して、オプションで **VLAN ID** を割り当てます。**commit** と入力してから、**cd ..** と入力して次の手順に合った正しいコンテキストに戻ります。

```
hostname:configuration net datalinks> vnic
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> set links=igb0
links = igb0 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> set label=management-datalink-1
label = management-datalink-1 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> commit
hostname:configuration net datalinks vnic> cd ..
```

VLAN ID を割り当てるには:

```
hostname:configuration net datalinks vnic> set id=100
id = 100 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> commit
```

```
hostname:configuration net datalinks vnic> cd ..
```

4. クラスタ化コントローラの場合、vnic コンテキストに移動して、一意のラベルを設定することで 2 番目の管理データリンクの VNIC を作成して、オプションで VLAN ID を割り当てます。commit と入力してから、cd .. と入力して次の手順に合った正しいコンテキストに戻ります。

```
hostname:configuration net datalinks> vnic
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> set links=igb0
links = igb0 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> set label=management-datalink-2
label = management-datalink-2 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> commit
hostname:configuration net datalinks vnic> cd ..
```

VLAN ID を割り当てるには:

```
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> set id=100
id = 100 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic> commit
hostname:configuration net datalinks vnic> cd ..
```

5. コントローラの IP インタフェースを作成して、これを VNIC に割り当てます。

```
hostname:configuration net> interfaces
hostname:configuration net interfaces> ip
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set v4addrs=192.168.1.101/24
v4addrs = 192.168.1.101/24 (uncommitted)
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set label=management-controller-1
label = management-controller-1 (uncommitted)
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set links=vnic1
links = vnic1 (uncommitted)
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> commit
```

6. クラスタ化コントローラの場合、IP インタフェースを作成して、これを 2 番目のコントローラの VNIC に割り当てます。commit と入力したあとで、done と入力します。

```
hostname:configuration net interfaces> ip
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set v4addrs=192.168.1.102/24
v4addrs = 192.168.1.102/24 (uncommitted)
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set label=management-controller-2
label = management-controller-2 (uncommitted)
hostname:configuration net interfaces ip (uncommitted)> set links=vnic2
links = vnic2 (uncommitted)
hostname:configuration net datalinks vnic (uncommitted)> commit
hostname:configuration net datalinks> done
```

7. 最初のコントローラのルーティングを構成します。クラスタ化コントローラの場合は、2 番目のコントローラについてルーティングを構成します。commit と入力したあとで、done と入力します。

最初のコントローラ:

```
hostname:configuration net> routing
hostname:configuration net routing> create
hostname:configuration net route (uncommitted)> set destination=0.0.0.0
destination = 0.0.0.0 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set mask=0
mask = 0 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set interface=vnic1
```

```

        interface = vnic1 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set gateway=192.168.1.1
        gateway = 192.168.1.1 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set family=IPv4
        family = IPv4
hostname:configuration net route (uncommitted)> commit
hostname:configuration net route> done

```

2 番目のコントローラ:

```

hostname:configuration net> routing
hostname:configuration net routing> create
hostname:configuration net route (uncommitted)> set destination=0.0.0.0
        destination = 0.0.0.0 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set mask=0
        mask = 0 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set interface=vnic2
        interface = vnic2 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set gateway=192.168.1.1
        gateway = 192.168.1.1 (uncommitted)
hostname:configuration net route (uncommitted)> set family=IPv4
        family = IPv4
hostname:configuration net route (uncommitted)> commit
hostname:configuration net route> done

```

8. 「無題のインタフェース」という名前が付いたデフォルトのインタフェースを破棄して、`cd ..` と入力してから `done` と入力します。

注記 - インタフェースを削除すると、そのインタフェースに関連付けられたすべてのルートも削除されます。

```

hostname:configuration net> interfaces
hostname:configuration net interfaces> show
Interfaces:

INTERFACE  STATE  CLASS  LINKS  ADDR5  LABEL
igb0       up     ip     igb0   192.168.1.101/24  Untitled Interface
vnic1      duplicate ip     vnic1  192.168.1.101/24  management-controller-1
vnic2      duplicate ip     vnic2  192.168.1.102/24  management-controller-2
hostname:configuration net interfaces> destroy igb0
This will destroy "igb0" and any networking objects exclusively built over it.

Are you sure? (Y/N) y

hostname:configuration net interfaces> cd ..
hostname:configuration net> done

```

関連トピック

- その他の構成については、[53 ページの「アプライアンスの構成」](#)を参照してください。
- スタンドアロンコントローラでソフトウェアをアップグレードするには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ソフトウェアのアップグレード](#)」を参照してください。
- 管理インタフェースをロックするには、[73 ページの「クラスタ管理インタフェースのロック \(CLI\)」](#)を参照してください。

▼ ネットワークインタフェースの構成 (CLI)

始める前に ソースとターゲットのアプリケーション間でレプリケーション接続に適切なネットワークインタフェースが確実に使用されるようにするため、静的な /32 (ホスト固有) ルートを構成します。

クラスタ構成用にレプリケーションを設定する場合は、クラスタのテイクオーバーまたはフェイルバックのあとにインタフェースがレプリケーション作業の実行ノードに移るように、シングルトン (ロック解除) ネットワークインタフェースを選択します。2つのソースクラスタノードを同じターゲットノードにレプリケートできるのは、ターゲットノードが2つの IP アドレスを提供し、ソースクラスタの各ノードで1つ使用できる場合のみです。ソースクラスタの両方のノードからの同じターゲット IP アドレスへのレプリケートはサポートされません。

1. ソースアプリケーションで `configuration services routing` に移動します。

専用ネットワークインタフェース経由でターゲットシステム IP アドレスへの静的 /32 (ホスト固有) ルートを使用します。次の例では、`mask=32` はこれがホスト固有のルートであることを意味します。

```
host_source:configuration services routing> create

host_source:configuration services route (uncommitted)> get
  family = (unset)
  destination = (unset)
  mask = (unset)
  gateway = (unset)
  interface = (unset)
host_source:configuration services route (uncommitted)> set family=IPv4
host_source:configuration services route (uncommitted)> set destination=203.34.56.78
host_source:configuration services route (uncommitted)> set mask=32
host_source:configuration services route (uncommitted)> set gateway=203.34.56.254
host_source:configuration services route (uncommitted)> set interface=nge3
host_source:configuration services route (uncommitted)> commit
host_source:configuration services routing> show
route-000 0.0.0.0/0                203.24.30.254  nge0    static
route-001 203.24.30.0/32                203.24.30.28  nge0    dynamic
route-002 203.24.150.0/32                203.24.150.10 ibd0    dynamic
route-003 203.24.101.65/32              203.24.30.254 nge1    inactive
route-005 203.34.56.78/32                203.34.56.254 nge3    static
```

2. ソースアプリケーションからターゲットアプリケーションへの静的ルートを定義したら、ターゲットアプリケーションでこれらの手順を繰り返して、ターゲットからソースへと戻る静的ルートを定義します。

3. 適切なソースおよびターゲットインタフェースを介してトラフィックがルーティングされていることを確認するには、`traceroute` コマンドを使用します。

`traceroute` の使用方法の詳細は、[83 ページの「ネットワークルーティングの構成」](#)を参照してください。

注記 - インタフェースを削除すると、そのインタフェースに関連付けられたすべてのルートも削除されます。

関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [532 ページの「リモートレプリケーションの概念」](#)

▼ クラスタ管理インタフェースのロック (CLI)

初期構成後のクラスタ化コントローラはアクティブ/アクティブ状態になっています。フェイルオーバーが発生した場合、アクティブコントローラはプライベート以外のすべてのインタフェースをテイクオーバーし、ピアコントローラがパッシブになってその BUI および CLI からアクセスできなくなります。その状態に関係なくコントローラへのアクセスを維持するには、管理インタフェースをロックしてプライベートにします。次の手順では、各クラスタ化コントローラで管理インタフェースをロックします。



注意 - クラスタ化コントローラでロックされた管理インタフェースの構成に失敗すると、障害の診断および解決に必要な時間が長くなる可能性があります。

1. 最初のコントローラで、**configuration cluster resources** に移動して、前に **net/** を入力して最初のコントローラの管理インタフェースを選択します。

```
controller-a:> configuration cluster resources select net/igb0
```

2. タイプをプライベートに設定してインタフェースをロックします。

```
configuration cluster resources (uncommitted)> set type=private
configuration cluster resources (uncommitted)> commit
```

3. 2 番目のコントローラで、**configuration cluster resources** に移動して、前に **net/** を入力して 2 番目のコントローラの管理インタフェースを選択します。

```
controller-b:> configuration cluster resources select net/igb1
```

4. タイプをプライベートに設定してインタフェースをロックします。

```
configuration cluster resources (uncommitted)> set type=private
configuration cluster resources (uncommitted)> commit
```

関連トピック

- ソフトウェアをアップグレードするには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、『[ソフトウェアのアップグレード](#)』を参照してください。

▼ 静的ルートの追加 (CLI)

1. **configuration net routing** に移動します。

2. 「create」と入力します。
3. 「show」と入力して必要なプロパティを一覧表示し、それぞれ「set」と入力します。
4. 「commit」と入力します。

▼ 静的ルートの削除 (CLI)

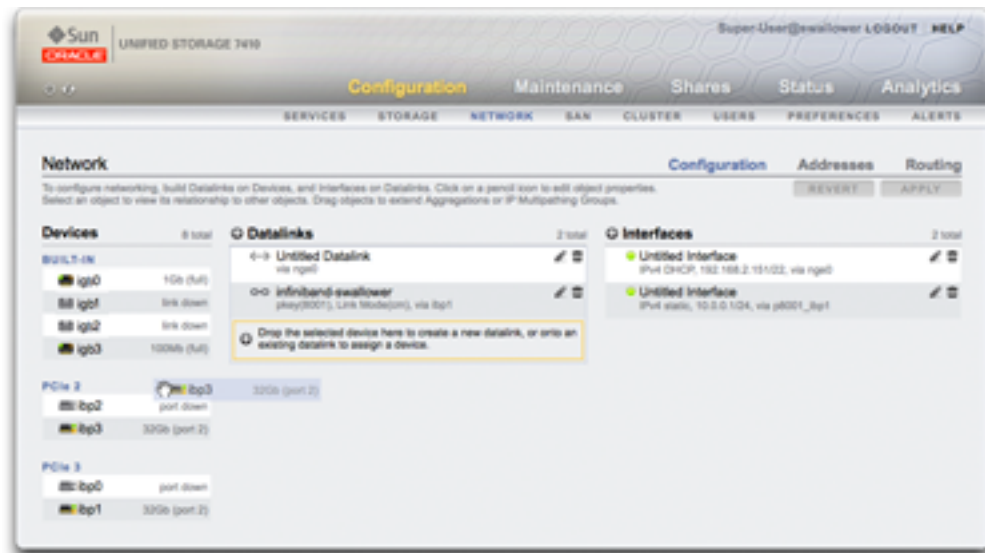
1. `configuration net routing` に移動します。
2. 「show」と入力してルートとルート名 (たとえば、`route-002`) を一覧表示します。
3. 「destroy ルート名」と入力します。

▼ マルチホーミングプロパティの「厳しい」への変更 (CLI)

1. `configuration net routing` に移動します。
2. 「set multihoming=strict」と入力します。
3. 「commit」と入力します。

ネットワーク構成の操作

アプライアンスモデルでは、ネットワークデバイスは、使用可能なネットワークまたは InfiniBand ポートを表すためにシステムによって作成され、構成可能な設定を持っていません。データリンクはレイヤー 2 のエンティティであり、これらのネットワークデバイスに LACP などの設定が適用されるように作成する必要があります。インタフェースは、IP 設定が含まれたレイヤー 3 のエンティティです。これらの設定は、データリンクを介して使用可能になります。このモデルでは、ネットワークインタフェースの設定が、レイヤー 2 の設定のためのデータリンクと、レイヤー 3 の設定のためのインタフェースという 2 つの部分に分離されています。



「デバイス」列は、コントローラ上の物理ネットワークインタフェースカード (NIC) ポートに対応し、通常は igb0、igb1、igb2、および igb3 というラベルが付いています。ポート NET-0 はデバイス igb0 に対応し、ポート NET-1 は igb1 に対応するという具合になります。コントローラごとに 1 つの NIC ポートを管理インタフェースとして使用することを強くお勧めします。この列には、コントローラ上の物理 InfiniBand ポートも含まれており、通常は ibp0、ibp1、ibp2、および ibp3 というラベルが付いています。

「データリンク」列は、特定のネットワークデバイスのパケットを送受信するための構成体に対応します。これらは、VLAN、VNIC、IB パーティション、および LACP アグリゲーションをサポートします。ネットワークデバイスに特定の設定が適用されない場合でも、データリンクは、ネットワーク構成を完了するために必要です。

データリンクエンティティ (名前を「aggr1」とします) によって、ネットワークデバイスが構成可能な方法 (LACP アグリゲーションポリシー) でグループ化されます。インタフェースエンティティ (名前を「phobos」とします) によって、構成可能な IP アドレス設定が提供されます。これらの設定は、データリンクを介してネットワーク上で使用可能になります。ネットワークデバイス (システムが付けた名前は「igb1」、「igb2」、...) には、直接の設定はありません。

「インタフェース」列は、構成可能な IP アドレス設定とデータリンクのその他のプロパティに対応します。インタフェースは、単一のデータリンクを介して使用可能か、障害が発生したデータリンクから機能しているデータリンクに IP アドレスを自動的に移行できるようにする、データリンクのプールで構成される IP マルチパス (IPMP) グループで定義されているように使用可能です。

1 つのポート上に 1 つの IP アドレスがある場合 (一般的な構成) の例を次に示します。

- デバイス - igb0
- データリンク - datalink1
- インタフェース - deimos (192.168.2.80/22)

3 ウェイリンクアグリゲーションのための構成は次のとおりです。

- デバイス - igb1、igb2、igb3
- データリンク - aggr1 (LACP アグリゲーション)
- インタフェース - phobos (192.168.2.81/22)

管理インタフェースの構成

初期構成時に管理インタフェースを設定しなかった場合、次の手順を使用して、ネットワークインタフェースカード (NIC) ポートを管理インタフェースとして構成します。管理インタフェースは、管理アクセス権限を持つネットワークインタフェースです。

物理ポートは、管理インタフェースにするよう選択可能なインタフェースに対応します。すべてのスタンドアロンコントローラでは、少なくとも 1 つの NIC ポートが管理インタフェースとして構成されているべきです。すべてのクラスタインストールでは、各コントローラの少なくとも 1 つの NIC ポートを管理インタフェースとして構成されているべきです。さらに、各クラスタ化コントローラの NIC インスタンス番号は固有である必要があります。

クラスタ化コントローラでは、管理インタフェースをロックすることをお勧めします。

管理インタフェースを構成して、クラスタ管理インタフェースをロックするには、次の手順を使用します。

- [57 ページの「管理インタフェースの構成 \(BUI\)」](#)
- [69 ページの「管理インタフェースの構成 \(CLI\)」](#)
- [58 ページの「クラスタ管理インタフェースのロック \(BUI\)」](#)
- [73 ページの「クラスタ管理インタフェースのロック \(CLI\)」](#)

ネットワークデータリンクの構成

ネットワークデータリンクはデバイスを管理し、インタフェースによって使用されません。次のものをサポートします。

- **リンクアグリゲーション制御プロトコル (LACP)** - LACP は、複数のネットワークデバイスを束ねて 1 つのネットワークデバイスとして動作させるために使用されます。これによりパフォーマンス (帯域幅の増加) および信頼性 (ネットワークポート

の障害から保護)が向上しますが、アプライアンスを、LACPをサポートし、これらのポートに対して有効になっているスイッチに接続する必要があります。

- **InfiniBand (IB) パーティション** - 論理的に分離された IB ファブリックドメインに接続する InfiniBand パーティション。
- **仮想 LAN (VLAN)** - VLAN は、ローカルネットワークのセキュリティーおよび分離を向上させるために使用されます。アプライアンスの管理には VLAN が推奨されており、それ以外の場合は VNIC を使用します。
- **仮想ネットワークインタフェースカード (VNIC)** - VNIC は単一または集合 Ethernet データリンクを複数の仮想 (Ethernet) データリンクに分割できます。VNIC は、オプションとして VLAN ID でタグ付けでき、クラスタ内で物理ネットワークポートをシェアできます。手順については、次の [216 ページの「クラスタ化におけるネットワークの考慮点」](#) を参照してください。

注記 - VNIC ベースと VLAN ベースのデータリンクが、同じ VLAN ID をシェアすることはできません。

IEEE802.3ad (リンクアグリゲーション) の標準では、複数のスイッチにわたるアグリゲーションは明示的にサポートされていませんが、一部のベンダーは独自の拡張機能によって、マルチスイッチのサポートを提供しています。これらの拡張機能で構成されたスイッチが IEEE 標準に準拠しており、また拡張機能がエンドノードに対して透過的であれば、アプライアンスでスイッチの使用がサポートされます。問題が発生した場合、Oracle サポートでは、単一スイッチ構成で問題を再現することが必要になる場合があります。

次のデータリンク設定を使用できます。

表 13 データリンクの設定

プロパティ	説明
名前	定義されたカスタム名を使用します。たとえば、「internal」、「external」、「adminnet」などがあります。
速度	定義された速度を使用します。有効な値は auto、10、100、1000、および 10000 であり、それぞれ、自動ネゴシエーション、強制 10M ビット/秒、強制 100M ビット/秒、強制 1G ビット/秒、および強制 10G ビット/秒を表します。速度と全二重/半二重は、両方が特定の値に強制されるか、または両方が自動ネゴシエーションに設定されるのどちらかである必要があります。すべてのネットワークデバイスが、速度と全二重/半二重の可能性のあるすべての組み合わせへの強制をサポートしているわけではありません。自動ネゴシエーションを無効にしないことが強く推奨されています。ただし、スイッチで自動ネゴシエーションが無効になっている場合は、データリンクが必ず予期された速度と全二重/半二重で動作するように、速度 (および全二重/半二重) の強制が必要になることがあります。

プロパティ	説明
全二重/半二重	定義された転送方向を使用します。有効な CLI 値は auto、half、および full であり、それぞれ、自動ネゴシエーション、半二重、および全二重を表します。速度と全二重/半二重は、両方が特定の値に強制されるか、または両方が自動ネゴシエーションに設定されるのどちらかである必要があります。
VLAN	VLAN ヘッダーを使用します。
VLAN ID	定義された VLAN 識別子を使用します (VNIC の場合はオプション)。
VNIC	VNIC を使用します。
MTU	定義された最大転送単位 (MTU) サイズを使用します。デフォルト MTU は 1500 バイトです。パケットに余裕を持たせるには (トンネリングプロトコルなど)、指定する MTU (最小 1280) を小さくします。ネットワークのパフォーマンスを改善するには、指定する MTU (最大 9000) を大きくします。同じ LAN 上のすべてのシステムおよびスイッチが、選択された MTU を使用して構成されている必要があります。MTU 値が設定され、システムに対して新しいネットワーク構成がコミットされたあとは、ネットワーク画面に戻り、データリンクのステータスを表示して、選択された正確な MTU 値をバイト単位で確認できます。VLAN および VNIC は、ベースとなるデータリンクより大きい MTU 値では構成できないことに注意してください。
LACP アグリゲーション	複数のネットワークデバイス LACP アグリゲーションを使用します。
LACP ポリシー	定義済みの LACP ポリシーをアウトバウンドポートの選択に使用します。L2 は発信元と宛先の MAC アドレスをハッシュし、L3 は発信元と宛先の IP アドレスを使用し、L4 は発信元と宛先のトランスポートレベルのポートを使用します。
LACP モード	定義済みの LACP 通信モードを使用します。アクティブモードでは、接続のネゴシエーションを行うために LACP メッセージを送受信し、リンクステータスをモニターします。受動モードでは、LACP メッセージのみを待機します。オフモードでは、集合リンクを使用しますが、リンク障害やスイッチ構成の変更を検出しません。Cisco Etherchannel を含む一部のネットワークスイッチ構成では、LACP プロトコルは使用されません。ネットワーク内で LACP 以外のアグリゲーションを使用する場合は、LACP モードを「オフ」に設定してください。
LACP タイマー	LACP メッセージ間の定義済みの間隔をアクティブモードで使用します。
IB パーティション	IB パーティションを使用します。
パーティションキー	ベースとなるポートデバイスがメンバーであるパーティション (ファブリックドメイン) を使用します。パーティションキー (pkey) はサブネットマネージャーによって検出され、構成さ

プロパティ	説明
	<p>れます。サブネットマネージャーを構成する前に pkey を定義できますが、サブネットパーティションがポート GUID をメンバーとして使用して正しく構成されるまで、データリンクは「ダウン」したままになります。HCA ポートのパーティションメンバーシップを、サブネットマネージャー上の 317 ページの「IPMP 構成」 および 192 ページの「アプライアンスのクラスタ構成」 の規則と整合性がある状態に維持することが重要です。</p>
IB リンクモード	<p>定義済みの IB リンクモードを使用します。IPoIB には、「接続完了」(デフォルト)と「信頼できないデータグラム」の2つのリンクモードがあります。「接続完了」モードは高いスループットが可能なため、「信頼できないデータグラム」よりも推奨されます。「信頼できないデータグラム」は技術的に必要な場合にのみ使用します。「接続完了」モードでは、IB キューのペアを使用し、専用のリモートキューのペアと通信するためのローカルキューのペアを専用に割り当てます。「接続完了」モードでは 65520 の MTU を使用するため、「信頼できないデータグラム」より高いスループットが可能になります。「信頼できないデータグラム」では、ローカルキューのペアが任意のホスト上のほかの複数のキューのペアと通信することができ、メッセージは IB 層で未確認のまま通信されます。「信頼できないデータグラム」モードでは 2044 の MTU を使用し、スループット率は低くなります。</p>

ネットワークインタフェースの構成

インタフェースは、データリンクを介して IP アドレスを構成します。次のものをサポートします。

- IPv4 および IPv6 プロトコル。
- IPMP - IP アドレスが、障害の発生したデータリンクから正常なデータリンクに自動的に移行できるようにすることによってネットワークの信頼性を向上させる IP マルチパス。

ネットワークインタフェースの構成方法については、[72 ページの「ネットワークインタフェースの構成 \(CLI\)」](#) を参照してください。

次のインタフェース設定を使用できます。

表 14 インタフェースの設定

プロパティ	説明
名前	インタフェースのカスタム名

プロパティ	説明
インタフェースを有効化	このインタフェースを IP トラフィックに使用できるようにします。あるインタフェースが無効になっている場合、アプライアンスはそのインタフェースを介して IP トラフィックを送受信しなくなるか、またはそのインタフェース上に構成されている任意の IP アドレスを使用します。現時点では、IPMP グループ内のアクティブ IP インタフェースを無効にしても、スタンバイインタフェースのアクティブ化はトリガーされません。
管理を許可	このインタフェースを介したアプライアンスの管理 BUI または CLI への接続を許可します。ネットワーク環境に個別の管理ネットワークが含まれている場合は、セキュリティを向上させるために、このプロパティはその管理ネットワークに対してのみ有効にできます
IPv4 構成:	手動で入力される「静的アドレスリスト」か、または動的に要求するための「DHCP」のどちらか
IPv4 アドレス/マスク	CIDR 表記での 1 つ以上の IPv4 アドレス (192.168.1.1/24)
IPv6 構成:	手動で入力される「静的アドレスリスト」か、または自動的に生成されたリンクローカルアドレス (および、IPv6 ルーターが応答する場合はサイトローカル) を使用するための「IPv6 自動構成」のどちらか
IPv6 アドレス/マスク	CIDR 表記での 1 つ以上の IPv6 アドレス (1080::8:800:200C:417A/32)
直接到達可能なネットワーク	ローカル IP アドレスがメンバーではないものの、そのインタフェースのデータリンクの物理的な接続先である直接到達可能なサブネット (IP アドレスおよびマスクの CIDR 表記で表される)。これにより、IP アドレスが節約されてスケーラビリティが改善し、コアシッチおよびルーターを介してトラフィックの輻輳を緩和できます。
IP マルチパスグループ	冗長性のためにデータリンクのプールを使用できる IP マルチパスを構成します

ネットワーク IP マルチパス (IPMP) の構成

IP マルチパスグループは、IP インタフェースの障害 (物理的な回線の切断や、ネットワークデバイスとスイッチの間の接続の障害など) が発生した場合、またはシステムとネットワークゲートウェイの間のパスの障害が発生した場合でも引き続き使用できる IP アドレスを提供するために使用されます。システムは、下記で説明するように、IP インタフェースの基になるデータリンクのリンクアップおよびリンクダウン通知をモニタリングしたり、オプションでグループ内の各 IP インタフェースに割り当てることができるテストアドレスを使用してプローブしたりすることによって障害を検出します。IPMP グループには、すべてが同じリンク (LAN、IB パーティション、または

VLAN) 上に存在するかぎり任意の数の IP インタフェースを設定でき、また任意の数の高可用性アドレスを割り当てることができます。

IPMP グループ内の各 IP インタフェースは、アクティブまたはスタンバイのどちらかに指定されます。

- **アクティブ:** この IP インタフェースは、IPMP によって正しく機能していると判断されるかぎり、データを送受信するために使用されます。
- **スタンバイ:** この IP インタフェースは、アクティブインタフェース (または、以前にアクティブ化されたスタンバイ) が機能を停止した場合にのみ、データを送受信するために使用されます。

アクティブおよびスタンバイ IP インタフェースは複数構成できますが、各 IPMP グループには、少なくとも 1 つのアクティブ IP インタフェースが構成されている必要があります。IPMP は、構成された数のアクティブインタフェースを保持するために、必要な数のスタンバイをアクティブにしようとします。たとえば、IPMP グループに 2 つのアクティブインタフェースと 2 つのスタンバイインタフェースが構成されており、すべてのインタフェースが正しく機能している場合は、2 つのアクティブインタフェースのみがデータを送受信に使用されます。アクティブインタフェースに障害が発生した場合は、いずれかのスタンバイインタフェースがアクティブ化されます。ほかのアクティブインタフェースに障害が発生した (または、アクティブ化されたスタンバイに障害が発生した) 場合は、2 番目のスタンバイインタフェースがアクティブ化されます。そのあと、アクティブインタフェースが修復された場合は、スタンバイインタフェースがもう一度非アクティブ化されます。

IP インタフェースの障害は、リンクベースの検出またはプローブベースの検出 (つまり、テストアドレスが構成されている) で発見できます。

IP インタフェース上でプローブベースの障害検出が有効になっている場合、システムは、プローブするターゲットシステムを動的に決定します。最初に、IP インタフェースのテストアドレスと同じサブネット上にゲートウェイ (ルーター) がないかどうかルーティングテーブルがスキャンされ、最大 5 つが選択されます。同じサブネット上にゲートウェイが見つからない場合、システムはマルチキャスト ICMP プローブを (IPv4 の場合は 224.0.0.1、IPv6 の場合は ff02::1 に) 送信し、同じサブネット上の応答した最初の 5 つのシステムを選択します。そのため、IPMP を使用したネットワーク障害検出および修復のために、各リンク上の少なくとも 1 つの近傍ノードまたはデフォルトゲートウェイが ICMP エコーリクエストに応答することを確認してください。IPMP は、IPv4 と IPv6 の両方のアドレス構成で動作します。IPv6 の場合は、インタフェースのリンクローカルアドレスがテストアドレスとして使用されます。

注記 - IPMP テストのアドレスと同じサブネット上に、ICMP エコーリクエストに応答するように構成されている (クラスタピア以外の) システムがない場合、プローブベースの障害検出を使用しないでください。

システムは、選択されたターゲットシステムをラウンドロビン方式でプローブします。5 回のプローブに連続して応答がない場合、その IP インタフェースは障害が発生

していると見なされます。逆に、10回のプローブに連続して応答があった場合、システムは、以前に障害が発生した IP インタフェースを修復されたと見なします。システムの IPMP プローブ障害検出時間を、「IPMP」画面から設定できます。この時間によって、プローブの頻度と修復間隔が間接的に制御されます。たとえば、障害検出時間が 10 秒である場合、システムはおおよそ 2 秒間隔でプローブを送信すること、およびシステムがプローブベースのインタフェース修復を検出するには 20 秒かかることを示します。システムが選択したターゲットシステムを直接制御することはできませんが、ルーティングテーブルを介して間接的に制御することは可能です。

システムはルーティングテーブルをモニターし、必要に応じて、選択したターゲットシステムを自動的に調整します。たとえば、システムではマルチキャスト検出ターゲットを使用しているが、そのあと IP インタフェースのテストアドレスと同じサブネット上にゲートウェイを含むルートが追加された場合、システムはそのゲートウェイのプローブに自動的に切り替えます。同様に、マルチキャスト検出ターゲットがプローブされている場合、システムは一連の選択されたターゲットを定期的に取り替えます (たとえば、以前に選択されたターゲットの一部が応答しなくなっているため)。

IPMP グループを作成する手順については、[317 ページの「IPMP 構成」](#)を参照してください。

プライベートローカルインタフェースの詳細は、[192 ページの「アプライアンスのクラスタ構成」](#)を参照してください。

ネットワークのパフォーマンスおよび可用性の構成

IPMP とリンクアグリゲーションは、ネットワークパフォーマンスの向上やネットワーク可用性の維持を実現するためにアプライアンスで使用可能な異なるテクノロジーです。一般に、リンクアグリゲーションはより優れたネットワークパフォーマンスを得るために配備するのに対して、IPMP は高可用性を保証するために使用します。この 2 つのテクノロジーは互いを補完するものであり、ネットワークパフォーマンスと可用性の組み合わせられた利点を実現するために一緒に配備できます。

リンクアグリゲーションでは、受信したトラフィックは、アグリゲーションを構成する複数のリンクにわたって分散されます。そのため、アグリゲーションにリンクを追加するために多くの NIC がインストールされているほど、ネットワークパフォーマンスは向上します。IPMP のトラフィックは、使用可能なアクティブインタフェースにバインドされている IPMP インタフェースのデータアドレスを使用します。たとえば、すべてのデータトラフィックが、必ずしも同じ接続上にはない 2 つの IP アドレス間だけを転送される場合は、多くの NIC を追加しても引き続き 2 つの IP アドレスだけが使用可能であるため、IPMP に関するパフォーマンスは向上しません。

パフォーマンスは、特定のデバイスのデータリンク上に構成された VNIC/VLAN の数、および VLAN ID の使用に影響されることがあります。特定のデバイスで複数の VNIC を構成する場合、VNIC が使用されていない場合でも、そのデバイス上のすべて

のデータリンクのパフォーマンスが最大 5% 影響を受ける可能性があります。特定のデータリンク上で 8 つ以上の VNIC/VLAN が構成されている場合は、パフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。また、データリンクで VLAN ID が使用されている場合、そのデバイスのすべてのデータリンクパフォーマンスがさらに 5% 影響を受ける可能性があります。

ネットワークルーティングの構成

システムは、ルーティングテーブルエントリのコレクションから成る 1 つの IP ルーティングテーブルを提供します。IP パケットを特定の宛先に送信する必要がある場合、システムは、そのパケットの宛先アドレスに宛先がもっとも緊密に一致するルーティングエントリを選択します (システムのマルチホーミングポリシーに従います。下を参照)。次に、そのルーティングエントリ内の情報を使用して、パケットの送信先の IP インタフェースと、宛先に直接到達できない場合に使用する次のホップのゲートウェイを決定します。宛先に一致するルーティングエントリがない場合、そのパケットはドロップされます。複数のルーティングエントリが同程度のもっとも緊密な一致を示している (かつ、それ以外の場合はマルチホーミングポリシーによって優先付けされていない) 場合、システムは、接続単位にこれらのエントリにわたって負荷分散します。

システムは、ルーターとしては機能しません。

ルーティングテーブルは、それぞれが次のフィールドを含むルーティングエントリで構成されています。

表 15 ルーティングエントリのフィールド

フィールド	説明	例
宛先	ルートに一致する可能性のある IP 宛先アドレス (CIDR 表記) の範囲	192.168.0.0/22
ゲートウェイ	パケットの送信先のネクストホップ (IP アドレス) (「system」ルートを除く。下を参照)	192.168.2.80
ファミリー	インターネットプロトコル	IPv4、IPv6
タイプ	ルートの起点	dhcp、direct、static、system
ステータス	ルートのステータス	active、inactive (無効またはオフラインの IP インタフェースに関連付けられた、静的または直接ルート)
インタフェース	パケットが送信される際の IP インタフェース	igb0

0.0.0.0/0 の「宛先」フィールドを含むルーティングエントリは、すべてのパケットに一致するため (より正確に一致するほかのルートがない場合)、「デフォルト」ルー

トと呼ばれます。BUI では、デフォルトルートは、次の追加のプロパティによってデフォルト以外のルートと区別されます。

表 16 デフォルトルートとデフォルト以外のルートの区別

種類	ルートの種類	デフォルト、ネットワーク
----	--------	--------------

上に示すように、特定の packets は、ルーティングエントリの「インタフェース」フィールドで指定された IP インタフェース上で送信されます。IPMP インタフェースが指定されている場合は、IPMP グループ内のいずれかのアクティブ IP インタフェースが接続単位にランダムに選択され、選択された IP インタフェースがそのあと使用不可になった場合は自動的にリフレッシュされます。逆に、特定の IP インタフェースが IPMP グループに含まれている場合、このようなルートは可用性が高くないため、この IP インタフェースを「インタフェース」フィールドで指定することはできません。

ルーティングエントリは、「タイプ」フィールドで識別された、いくつかの異なる起点から来ています。ルーティングエントリの起点はシステムでのルーティングエントリの使用方法とは関係ありませんが、各エントリの編集や削除が可能かどうかや、その方法はこの起点によって制御されます。システムは、次のタイプのルートをサポートしています。

表 17 サポートされているルートのタイプ

タイプ	説明
静的	アプライアンス管理者によって作成および管理されます。
動的	RIP および RIPng ダイナミックルーティングプロトコルを介して、アプライアンスによって自動的に作成されます (これらのプロトコルが有効になっている場合)。
DHCP	DHCP を使用するように構成されている IP インタフェースの有効化の一部として、アプライアンスによって自動的に作成されます。DHCP ルートは、DHCP サーバーによって提供されるデフォルトルートごとに作成されます。
システム	IP インタフェースの有効化の一部として、アプライアンスによって自動的に作成されます。システムルートは、アプライアンスから直接到達できる IP サブネットごとに作成されます。これらのルートは直接到達可能であるため、代わりに「ゲートウェイ」フィールドが、そのサブネット上のアプライアンスの IP アドレスを識別します。
直接	ネットワークインタフェースプロパティとして作成および管理されます (直接到達可能なネットワーク)。ローカル IP アドレスがメンバーではないものの、そのインタフェースのデータリンクの物理的な接続先である直接到達可能なサブネット。これによ

タイプ	説明
	り、IP アドレスが節約されてスケーラビリティが改善し、コアスイッチおよびルーターを介してトラフィックの輻輳を緩和できます。

直接ルートは、「構成」>「ネットワーク」BUI 画面または `configuration net interfaces CLI` コンテキストを使用して、ネットワークインタフェースとして構成されます。直接ルートは、「ルーティング」BUI 画面または `routing CLI` コンテキスト経由では管理されません。

表 18 ルーティングのプロパティ

プロパティ	説明
マルチホーミングモデル	複数の IP インタフェースが同時に有効になっている場合に、IP パケットを受け入れて送信するためのシステムポリシーを制御します。許可される値は、「ルーズ」(デフォルト)、「適応可能」、および「厳格」です。下の説明を参照してください。

システムに複数の IP インタフェースが構成されている場合は、特定の宛先への同等のルートが複数存在する可能性があるため、パケットを送信するための IP インタフェースをシステムが強制的に選択するようにします。同様に、パケットがある IP インタフェースに到着したが、別の IP インタフェース上にホストされている IP アドレスに転送される可能性もあります。このような状況でのシステムの動作は、選択されたマルチホーミングポリシーによって決定されます。次の 3 つのポリシーがサポートされています。

表 19 マルチホーミングポリシー

ポリシー	説明
ルーズ	IP パケットと、その IP パケットを送受信するために使用される IP インタフェースの間にバインドを強制的に適用しません。1) IP パケットは、その宛先 IP アドレスがアプライアンス上で有効であるかぎり、IP インタフェース上で受け入れられます。2) IP パケットは、IP パケットの宛先アドレスにもっとも明確に一致するルートに関連付けられた IP インタフェースを介して転送されます。その IP インタフェース上にホストされている IP アドレスはまったく考慮されません。使用可能なルートが存在しない場合は、そのパケットをドロップします。
適応可能	パケットの発信元 IP アドレスと同じサブネット上にゲートウェイアドレスを含むルートが優先される点を除き、「ルーズ」と同じです。1) IP パケットは、その宛先 IP アドレスがアプライアンス上で有効であるかぎり、IP インタフェース上で受け入れられます。2) IP パケットは、IP パケットの宛先

ポリシー	説明
	ドレスにもっとも明確に一致するルートに関連付けられた IP インタフェースを介して転送されます。複数のルートが均等に一致する場合は、パケットの発信元アドレスと同じサブネット上にゲートウェイアドレスを含むルートが優先されます。使用可能なルートが存在しない場合は、そのパケットをドロップします。
厳しい	IP パケットと、その IP パケットを送受信するために使用される IP インタフェースの間に厳格なバインドが必要です。1) IP パケットは、その宛先 IP アドレスがある IP インタフェース上で有効であるかぎり、その IP インタフェース上で受け入れられます。2) IP パケットは、その発信元 IP アドレスがある IP インタフェース上で有効な場合にのみ、その IP インタフェースを介して転送されます。このポリシーを強制的に適用するために、アプライアンスは使用可能なルートに対する一致を調べる場合、パケットの発信元アドレスとは異なるサブネット上にゲートウェイアドレスを含むルートをすべて無視します。使用可能なルートが残っていない場合は、そのパケットをドロップします。

マルチホーミングポリシーを選択する場合は、アプライアンスのいずれかの IP インタフェースが管理専用（たとえば、BUI アクセス専用）に使用され、そのために個別の管理ネットワークを介してアクセスされるかどうかを考慮することが重要です。特に、管理ネットワークにリモートアクセスを提供するためにデフォルトルートが作成され、またストレージプロトコルにリモートアクセスを提供するために別のデフォルトルートが作成される場合は、「ルーズ」のデフォルトのシステムポリシーを選択すると、管理用のデフォルトルートがストレージトラフィックに使用される可能性があります。ポリシーを「適応可能」または「厳しい」に切り換えることにより、アプライアンスは、要求に関連付けられた IP アドレスを応答のためのルートの選択の一部として見なすようになります。同じ IP インタフェース上にルートを見つけることができない場合、「適応可能」ポリシーでは使用可能な任意のルートが使用されるのに対して、「厳しい」ポリシーではパケットがドロップされます。

ストレージの構成

アプライアンスでは、ストレージプールを使用して物理ストレージデバイスを管理します。物理特性と目的のデータ冗長性レベルに基づいてこれらのプールを構成した後で、総称してシェアと呼ばれるファイルシステムと LUN をこれらのプールに格納できます。プロジェクトに含まれているシェアは、プールに割り当てられたディスク容量内で自動的に増加し、複数のストレージデバイスにまたがる場合があります。シェアを静的にサイズ変更する必要はありませんが、割り当て制限と予約を使用して、領域の使用を制御できます。詳細は、[401 ページの「シェアの領域管理」](#)を参照してください。

ストレージを構成および管理するには、次のタスクを使用します。


- ストレージプールの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- 既存のストレージプールのインポート - [BUI](#)、[CLI](#)
- 既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 - [BUI](#)、[CLI](#)
- 既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 - [BUI](#)、[CLI](#)
- 既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ストレージプールの構成解除 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ストレージプールの名前の変更 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ストレージプールのスクラブ - [BUI](#)、[CLI](#)
- [プールとデバイスのステータスの表示](#)

ストレージの基本を理解するには、次のトピックを使用します。

- [109 ページの「ストレージプールの概念」](#)
- [110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)
- [401 ページの「シェアの領域管理」](#)

▼ ストレージプールの作成 (BUI)

ストレージプールにはデータが格納され、初期構成中またはその後に作成できません。プールには、データドライブ、読み取りキャッシュデバイス、およびログデバイスを含まることができます。なんらかの理由でプールが構成解除されている場合は、[91 ページの「既存のストレージプールのインポート \(BUI\)」](#)の説明に従ってインポートできます。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項については、[110 ページの「プールあたりのデバイスの数」](#)を参照してください
 - さまざまなデータプロファイルを理解するには、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
 - ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。
1. 「構成」>「ストレージ」に移動します。
 2. 「使用可能なプール」の横にある追加アイコン  をクリックします。
 3. ストレージプールの名前を入力して、「適用」をクリックします。

4. ディスクシェルフごとに、ストレージプールのデータドライブの数を選択します。使用可能なキャッシュとログデバイスを選択することもできます。

Confirm that all devices are present and minimally functional, and allocate them to a storage pool. ABORT COMMIT

Verify and allocate devices << Step 1 of 2 >>

Verify that storage is correctly attached and functioning. If devices are missing or malfunctioning, they will not be available for use and cannot be added without reconfiguring the pool. It is recommended that you fix any problems before configuring storage on the appliance. Mixing device types and speeds is strongly discouraged.

NAME	MODEL	TYPE	RPM	DATA	LOG	CACHE
ar7320-230	Sun ZFS Storage 7320	System	--	-	-	0 (1.40T) *
1235FMT007	Oracle Storage DE2-24C	HDD	7200	0 (19.1T)	-	- *



注意 - ディスクがプールに追加されたら、そのプールを完全に破棄してすべてのデータを失う方法でしか削除できません。

接続されているすべてのディスクシェルフが表示されない場合は、「中断」をクリックして、ディスクシェルフの配線と電源を確認し、この手順を再度開始します。

- すべてのドライブのサイズまたは回転数が同じ場合、または複数のサイズから1つのサイズが選択されている場合、使用可能なドライブの最大数がデフォルトで割り当てられます。ストレージデバイスに、回転数またはモデルが異なるドライブが含まれている場合、デフォルトではドライブは割り当てられません。
 - 一貫したパフォーマンス特性を提供するため、プールには同じサイズと回転数のデバイスのみを含めることを強くお勧めします。
 - プールの容量が満杯状態に近づくとパフォーマンスが低下する可能性があるため、領域の使用をモニターまたは制限します。
5. 「コミット」をクリックします。
ドライブはストレージプールに割り当てられ、存在と最小機能が検証されます。検証に失敗した場合、「中断」をクリックして、問題を修正し、この手順を再度開始してください。存在しないか障害の発生したデバイスを含むプールを割り当てる場合、存在しないか障害の発生したディスクをあとで追加することはできません。
 6. 「ストレージプロファイルの選択」画面で、信頼性、可用性、保守性、およびパフォーマンスの目標を満たす目的のデータプロファイルを選択します。
各プロファイルの説明については、データプロファイル名をクリックするか、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
 7. ログまたはキャッシュデバイスを割り当てた場合、適切なプロファイルを選択しません。

- ログデバイスでは、「ログプロファイル」をクリックして、ミラー化またはストライプ化されたプロファイルを選択します。偶数の数のログデバイスをプールに割り当てた場合、ミラー化プロファイルを選択します。



注意 - 二重の障害により、ストライプ化された構成でログのデータ損失が発生する可能性があります。冗長性の向上のためには、ミラー化されたログプロファイルを構成することを強くお勧めします。詳細は、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。

- キャッシュデバイスでは、プロファイルは「キャッシュプロファイル」の下に示されているように、常にストライプ化されます。

8. 「コミット」をクリックします。

関連トピック

- [91 ページの「既存のストレージプールのインポート \(BUI\)」](#)
- [93 ページの「既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 \(BUI\)」](#)
- [104 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(BUI\)」](#)
- [109 ページの「ストレージプールの概念」](#)

▼ ストレージプールの作成 (CLI)

ストレージプールにはデータが格納され、初期構成中またはその後に作成できます。プールには、データドライブ、読み取りキャッシュデバイス、およびログデバイスを含めることができます。次のタスクでは、初期構成が完了していることを想定しています。ストレージプールの作成および構成は2段階のプロセスです。最初に、ストレージデバイスの存在と最小機能が検証され、ユーザーがドライブまたは場合によってはディスクシェルフ全体をプールに割り当てます。2番目に、ビジネスニーズに基づいてドライブのプロファイルを選択します。なんらかの理由でプールが構成解除されている場合は、[92 ページの「既存のストレージプールのインポート \(CLI\)」](#)の説明に従ってインポートできます。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項については、[110 ページの「プールあたりのデバイスの数」](#)を参照してください
 - さまざまなデータプロファイルを理解するには、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
 - ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、`maintenance system updates` に移動します。

1. **configuration storage** に移動します。
2. **config** と、新しいストレージプールの名前を入力します。

```
hostname: configuration storage> config pool0
hostname: configuration storage (pool0) verify>
```

3. プールのデバイス情報を表示するには、**show** と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool0) verify> show
ID STATUS ALLOCATION DATA LOG CACHE RPM
0 ok custom 0 0 0/4 1.86T
1 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
2 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
```

4. **set**、ディスクシェルフまたはコントローラの ID、および使用するデータデバイスの数を入力します。使用可能なキャッシュとログデバイスを選択することもできます。



注意 - ディスクがプールに追加されたら、そのプールを完全に破棄してすべてのデータを失う方法でしか削除できません。

ID 「0」 はコントローラで、残りの ID はディスクシェルフです。次の例では、**1-data=8** により 1 番目のディスクシェルフから 8 個のデータドライブを割り当てています。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 1-data=8
1-data = 8
```

この例では、コントローラから 1 つのキャッシュデバイスを割り当てています。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 0-cache=1
0-cache = 1
```

5. 「**done**」 と入力します。
6. 「**show**」 と入力してプロファイルを表示します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> done
```

```
hostname:configuration storage (pool1) config> show
PROFILE CAPACITY NSPF DESCRIPTION
log_profile = log_stripe 17G no Striped log
```

7. プールにログデバイスを割り当てた場合、**set log_profile=** と入力し、ログプロファイルを **log_mirror** または **log_stripe** に設定します。プールに現在偶数の数のログデバイスが含まれている場合は、**log_mirror** を使用します。



注意 - 二重の障害により、ストライプ化された構成でログのデータ損失が発生する可能性があります。冗長性の向上のためには、ミラー化されたログプロファイルを構成することを強くお勧めします。詳細は、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。

```
hostname:configuration storage (pool1)> set log_profile=log_mirror
```

注記 - キャッシュデバイスをプールに割り当てた場合、プロファイルは常にストライプ化されます。

8. done と入力してタスクを完了します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> done
```

関連トピック

- [92 ページの「既存のストレージプールのインポート \(CLI\)」](#)
- [95 ページの「既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 \(CLI\)」](#)
- [105 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(CLI\)」](#)
- [109 ページの「ストレージプールの概念」](#)。

▼ 既存のストレージプールのインポート (BUI)

このインポートアクションによって、構成解除されたストレージプールをインポートできます。ストレージプールは、誤ったアクション、出荷時リセット、またはユーザーデータを回復するための保守操作のため構成解除されることがあります。ストレージプールをインポートするには、接続されているすべてのストレージデバイスをスキャンし、既存の状態をすべて検出する必要があります。これには膨大な時間がかかる場合があります、この間、ほかのストレージ構成操作は実行できません。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。

1. 「構成」>「ストレージ」に移動します。

識別されている特性を含むストレージプールのリストが表示されます。ストレージが破棄されているか、不完全な場合は、そのストレージプールをインポートできません。ストレージ構成とは異なり、ストレージプール名は最初は表示されませんが、ストレージプールの選択後に表示されます。

2. 「インポート」をクリックします。

3. インポートするストレージプールを選択します。

デフォルトでは、前のストレージプール名が表示されます。

4. ストレージプールの名前を変更するには、プール名をクリックして変更します。

5. 「コミット」をクリックします。

関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(BUI\)」](#)
- [104 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(BUI\)」](#)

▼ 既存のストレージプールのインポート (CLI)

このインポートアクションによって、構成解除されたストレージプールをインポートできます。ストレージプールは、誤ったアクション、出荷時リセット、またはユーザーデータを回復するための保守操作のため構成解除されることがあります。ストレージプールをインポートするには、接続されているすべてのストレージデバイスを繰り返し処理し、既存の状態をすべて検出する必要があります。これには膨大な時間がかかる場合があります、この間、ほかのストレージ構成操作は実行できません。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、maintenance system updates に移動します。

1. **configuration storage** に移動します。
2. **import** と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool0)> import
```

```
Search for storage. Begin the process of searching for existing storage pools.
```

```
Subcommands that are valid in this context:
```

```

help [topic]          => Get context-sensitive help. If [topic] is specified,
                        it must be one of "builtins", "commands", "general",
                        "help" or "script".

show                  => Show information pertinent to the current context

abort                 => Abort this task (potentially resulting in a
                        misconfigured system)

done                  => Finish operating on "discover"
```

```
hostname:configuration storage (pool0) discover>
```

3. 「done」と入力します。
4. 「show」と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool0)> show
Pools:
```

```

POOL          OWNER      DATA PROFILE LOG PROFILE STATUS  ERRORS
-> pool0      hostname  mirror        log_stripe  online  0
pool1        hostname  -             -           exported -

```

Properties:

```

pool = pool0
status = online
errors = 0
owner = hostname
profile = mirror
log_profile = log_stripe
cache_profile = cache_stripe
scrub = none requested

```

5. `set pool=` と、インポートするプールの名前を入力します。

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

```

hostname:configuration storage select> set pool=pool1
pool = pool1

```

メッセージで、ストレージが正しく接続され、機能していることを確認するよう通知されます。

6. 「done」と入力します。

関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(CLI\)」](#)
- [105 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(CLI\)」](#)

▼ 既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 (BUI)

既存のストレージプールにディスクシェルフを追加するには、次のタスクを使用します。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項と、その他の考慮事項およびガイドラインについては、[109 ページの「ストレージプールの概念」](#)を参照してください。
 - 既存のプールで現在使用されているものと同じデータプロファイルを選択してください。さまざまなデータプロファイルを理解するには、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
 - データプロファイルとそのオプション用にシステムを構成するためのストレージが不足している場合、一部の属性はサポートされない可能性があります。たとえば、

NSPF オプションを使用して単一のディスクシェルフをダブルパリティ RAID 構成に追加すると、NSPF 特性を保持できなくなります。ディスクシェルフを追加できますが、NSPF オプションは使用できません。

- ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。



注意 - ディスクがプールに追加されたら、そのプールを完全に破棄してすべてのデータを失う方法でしか削除できません。

1. 『Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル』、「新しいディスクシェルフの追加」を使用して新しいディスクシェルフをインストールします。
2. 「構成」>「ストレージ」に移動します。
3. 「使用可能なプール」リストから、ディスクシェルフの追加先のオンラインプールを選択します。
4. 「追加」をクリックします。
5. このディスクシェルフに対して、ストレージプールのデータドライブの数を選択します。
新しいディスクシェルフが表示されない場合は、「中断」をクリックして、ディスクシェルフの配線と電源を確認し、この手順を再度開始します。
 - すべてのドライブのサイズまたは回転数が同じ場合、または複数のサイズから1つのサイズが選択されている場合、使用可能なドライブの最大数がデフォルトで割り当てられます。ストレージデバイスに、回転数またはモデルが異なるドライブが含まれている場合、デフォルトではドライブは割り当てられません。
 - 一貫したパフォーマンス特性を提供するため、プールには同じサイズと回転数のデバイスのみを含めることを強くお勧めします。
 - プールの容量が満杯状態に近づくとパフォーマンスが低下する可能性があるため、領域の使用をモニターまたは制限します。
6. (オプション) ディスクシェルフからプールにキャッシュまたはログデバイスを追加します。
7. 「コミット」をクリックします。
8. データドライブでは、既存のプールで使用されているものと同じデータプロファイルを選択します。
9. ログまたはキャッシュデバイスを割り当てた場合、適切なプロファイルを選択します。

- ログデバイスでは、「ログプロファイル」をクリックして、ミラー化またはストライプ化されたプロファイルを選択します。偶数の数のログデバイスをプールに割り当てた場合、ミラー化プロファイルを選択します。



注意 - 二重の障害により、ストライプ化された構成でログのデータ損失が発生する可能性があります。冗長性の向上のためには、ミラー化されたログプロファイルを構成することを強くお勧めします。詳細は、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。

- キャッシュデバイスでは、プロファイルは「キャッシュプロファイル」の下に示されているように、常にストライプ化されます。

10. 「コミット」をクリックします。

関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(BUI\)」](#)
- [97 ページの「既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 \(BUI\)」](#)

▼ 既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 (CLI)

既存のストレージプールにディスクシェルフを追加するには、次のタスクを使用します。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項と、その他の考慮事項およびガイドラインについては、[109 ページの「ストレージプールの概念」](#)を参照してください。
 - 既存のプールで現在使用されているものと同じデータプロファイルを選択してください。さまざまなデータプロファイルを理解するには、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
 - データプロファイルとそのオプション用にシステムを構成するためのストレージが不足している場合、一部の属性はサポートされない可能性があります。たとえば、NSPF オプションを使用して単一のディスクシェルフをダブルパリティ RAID 構成に追加すると、NSPF 特性を保持できなくなります。ディスクシェルフを追加できますが、NSPF オプションは使用できません。
 - ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、maintenance system updates に移動します。



注意 - ディスクがプールに追加されたら、そのプールを完全に破棄してすべてのデータを失う方法でしか削除できません。

1. 『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[新しいディスクシェルフの追加](#)」を使用して新しいディスクシェルフをインストールします。
2. **configuration storage** に移動します。
3. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが選択され、表示されています。これがデバイスを追加するプールでない場合は、**set pool=** と入力し、別のオンラインプールを指定します。

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

デバイスが正しくインストールされていることを確認するよう促すメッセージが表示されます。デバイスのタイプおよび速度は混在させないことを強くお勧めします。

4. **add** と入力します。
- ```
hostname:configuration storage (pool1)> add
```
5. プールのデバイス情報を表示するには、**show** と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> show
ID STATUS ALLOCATION DATA LOG CACHE RPM
0 ok custom 0 0 0/4 1.86T
1 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
2 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
```

6. ディスクシェルフまたはコントローラ、および使用するデータドライブの数を指定します。
- ID 「0」はコントローラで、残りの ID はディスクシェルフです。次の例では、**1-data=8** により 1 番目のディスクシェルフから 8 個のデータドライブを割り当てています。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 1-data=8
1-data = 8
```

7. (オプション) ディスクシェルフまたはコントローラと、使用するログデバイスまたはキャッシュデバイスの数を指定します。

ID 「0」はコントローラで、残りの ID はディスクシェルフです。次の例では、**set 0-cache=1** は、1 つのキャッシュデバイスをコントローラから割り当てます。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 0-cache=1
```



```
0-cache = 1
```

8. 「done」と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> done
```

ストレージデバイスの存在と最小機能が検証されます。検証が失敗した場合は、問題を修正して、この手順を再度開始します。存在しないか障害の発生したデバイスを含むプールを割り当てる場合、存在しないか障害の発生したディスクをあとで追加することはできません。

9. 「show」と入力してプロファイルを表示します。

```
hostname:configuration storage (pool1) config> show
PROFILE CAPACITY NSPF DESCRIPTION
log_profile 17G no Striped log
```

10. `set profile=` とプロファイル名を入力して、残りのプールと同じデータプロファイルを入力します。

11. 「done」と入力します。

12. プールにログデバイスを割り当てた場合、`set log_profile=` と、`log_mirror` または `log_stripe` のいずれかを入力します。プールに偶数の数のログデバイスが含まれている場合は、`log_mirror` を使用します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> set log_profile=log_mirror
```

---

注記 - キャッシュデバイスをプールに割り当てた場合、プロファイルは常にストライプ化されます。

---

13. 「done」と入力します。

関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(CLI\)」](#)
- [99 ページの「既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 \(CLI\)」](#)

## ▼ 既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 (BUI)

既存のストレージプールに読み取りキャッシュデバイスまたはログデバイスを追加するには、次のタスクを使用します。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項と、その他の考慮事項およびガイドラインについては、[109 ページの「ストレージプールの概念」](#)を参照してください。
  - 既存のプールで現在使用されているものと同じデータプロファイルを選択してください。さまざまなデータプロファイルを理解するには、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。
  - ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。
1. 使用可能で適切な最初のスロットに新しい読み取りキャッシュまたはログデバイスを取り付けます。適切なスロットを判断するには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ディスクシェルフの構成](#)」の記述に従ってください。
  2. 「構成」>「ストレージ」に移動します。
  3. 「使用可能なプール」リストから、デバイスの追加先のオンラインプールを選択します。
  4. 「追加」をクリックします。
  5. プールに追加するデバイスを選択して、「コミット」をクリックします。
  6. ログまたはキャッシュデバイスを割り当てた場合、適切なプロファイルを選択します。
    - ログデバイスでは、「ログプロファイル」をクリックして、ミラー化またはストライプ化されたプロファイルを選択します。偶数の数のログデバイスをプールに割り当てた場合、ミラー化プロファイルを選択します。



---

注意 - 二重の障害により、ストライプ化された構成でログのデータ損失が発生する可能性があります。冗長性の向上のためには、ミラー化されたログプロファイルを構成することを強くお勧めします。詳細は、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。

---

- キャッシュデバイスでは、プロファイルは「キャッシュプロファイル」の下に示されているように、常にストライプ化されます。
7. 「コミット」をクリックします。

### 関連トピック

- [101 ページの「既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 \(BUI\)」](#)

- 93 ページの「既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 (BUI)」

## ▼ 既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 (CLI)

既存のストレージプールに読み取りキャッシュデバイスまたはログデバイスを追加するには、次のタスクを実行します。

- 始める前に
- プールごとに選択するドライブの数に関する推奨事項と、その他の考慮事項およびガイドラインについては、109 ページの「ストレージプールの概念」を参照してください。
  - 既存のプールで現在使用されているものと同じデータプロファイルを選択してください。さまざまなデータプロファイルを理解するには、110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」を参照してください。
  - ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、`maintenance system updates` に移動します。
1. 使用可能で適切な最初のスロットに新しい読み取りキャッシュまたはログデバイスを取り付けます。適切なスロットを判断するには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ディスクシェルフの構成](#)」の記述に従ってください。
  2. `configuration storage` に移動します。
  3. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが選択され、表示されています。これがデバイスを追加するプールでない場合は、`set pool=` と入力し、別のオンラインプールを指定します。

---

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

---

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

メッセージで、ストレージが正しく接続され、機能していることを確認するよう通知されます。

4. `add` と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> add
```
5. プールのデバイス情報を表示するには、`show` と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> show
ID STATUS ALLOCATION DATA LOG CACHE RPM
0 ok custom 0 0 0/4 1.86T
1 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
2 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
```

6. **set**、ディスクシェルフまたはコントローラの ID、および使用するログデバイスまたはキャッシュデバイスの数を入力します。

ID 「0」はコントローラで、残りの ID はディスクシェルフです。次の例では、2-log=1により 2 番目のディスクシェルフから 1 つのログデバイスを割り当てています。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 2-log=1
2-log = 1
```

---

注記 - 「1-log=2」という値では、1 番目のディスクシェルフから 2 つのログデバイスが割り当てられます。

---

この例では、2 番目のディスクシェルフから 1 つのキャッシュデバイスを割り当てています。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> set 2-cache=1
2-cache = 1
```

7. 「done」と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> done
```

8. 「show」と入力してプロファイルを表示します。

```
hostname:configuration storage (pool1) config> show
PROFILE CAPCTY NSPF DESCRIPTION
log_profile = log_stripe 17G no Striped log
```

9. プールにログデバイスを割り当てた場合、**set log\_profile=** と入力し、ログプロファイルを **log\_mirror** または **log\_stripe** に設定します。プールに現在偶数の数のログデバイスが含まれている場合は、**log\_mirror** を使用します。




---

注意 - 二重の障害により、ストライプ化された構成でログのデータ損失が発生する可能性があります。冗長性の向上のためには、ミラー化されたログプロファイルを構成することを強くお勧めします。詳細は、[110 ページの「ストレージプールのデータプロファイル」](#)を参照してください。

---

```
hostname:configuration storage (pool1)> set log_profile=log_mirror
```

---

注記 - キャッシュデバイスをプールに割り当てた場合、プロファイルは常にストライプ化されます。

---

10. **done** と入力してタスクを完了します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> done
```

### 関連トピック

- [102 ページの「既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 \(CLI\)」](#)
- [95 ページの「既存のストレージプールへのディスクシェルフの追加 \(CLI\)」](#)

## ▼ 既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 (BUI)

既存のストレージプールから読み取りキャッシュまたはログデバイスを削除するには、次のタスクを実行します。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。

1. 「構成」>「ストレージ」に移動します。
2. 「使用可能なプール」リストから、デバイスを削除するオンラインプールを選択します。
3. 「削除」をクリックします。
4. ストレージプールから削除するログデバイスとキャッシュデバイスの数を選択します。

---

注記 - ログデバイスでミラー化されたプロファイルを使用している場合は、メッセージで、削除する偶数の数のログデバイスを選択するように通知されます。ストライプ化されたプロファイルを使用している場合は、偶数または奇数の数のデバイスを削除できます。

---

5. 「コミット」をクリックします。

### 関連トピック

- [97 ページの「既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 \(BUI\)」](#)

## ▼ 既存のストレージプールからのキャッシュまたはログデバイスの削除 (CLI)

既存のストレージプールから読み取りキャッシュまたはログデバイスを削除するには、次のタスクを実行します。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、`maintenance system updates` に移動します。

1. `configuration storage` に移動します。
2. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが表示され、選択されています。これがデバイスを追加するプールでない場合は、`set pool=` と入力し、別のオンラインプールを指定します。

---

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

---

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

3. プールのデバイス情報を表示するには、`show` と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) verify> show
ID STATUS ALLOCATION DATA LOG CACHE RPM
0 ok custom 0 0 0/4 1.86T
1 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
2 ok custom 0 0/2 34G 0 15000
```

4. `remove` と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> remove
```

5. 削除するコントローラまたはディスクシェルフと、ログデバイスまたはキャッシュデバイスの数を指定します。

ID 「0」はコントローラで、残りの ID はディスクシェルフです。次の例では、`1-log=2` により 1 番目のディスクシェルフから 2 つのログデバイスを削除しています。

```
hostname:configuration storage (pool1) remove> set 1-log=2
1-log = 2
```

この例では、コントローラから 1 つのキャッシュデバイスを削除しています。

```
hostname:configuration storage (pool1) remove> set 0-cache=1
0-cache = 1
```

6. 「done」と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1) remove> done
```

---

**注記** - ログデバイスでミラー化されたプロファイルを使用している場合は、メッセージで、削除する偶数の数のログデバイスを選択するように通知されます。ログデバイスでストライプ化されたプロファイルを使用している場合は、偶数または奇数の数のデバイスを削除できます。

---

### 関連トピック

- [99 ページの「既存のストレージプールへのキャッシュまたはログデバイスの追加 \(CLI\)」](#)

## ▼ ストレージプールの構成解除 (BUI)

ストレージプールを構成解除すると、アクティブなファイルシステムと LUN はすべて削除され、将来のストレージ構成のために raw ストレージが使用可能になります。この処理は、それ以降に raw ストレージがアクティブなストレージプールの一部として使用されていないかぎり、構成解除されたストレージプールをインポートすることによって取り消すことができます。




---

**注意** - プールを構成解除するとデータがアクセス不能になり、データが失われる可能性があります。インバウンドレプリケーションは失敗します。

---

始める前に

ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」>「システム」に移動します。

1. 「構成」>「ストレージ」に移動します。
2. 「使用可能なプール」リストから、構成解除するオンラインプールを選択します。
3. 「構成解除」をクリックします。

### 関連トピック

- [91 ページの「既存のストレージプールのインポート \(BUI\)」](#)
- [104 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(BUI\)」](#)

## ▼ ストレージプールの構成解除 (CLI)

ストレージプールを構成解除すると、アクティブなファイルシステムと LUN はすべて削除され、将来のストレージ構成のために raw ストレージが使用可能になります。

この処理は、それ以降に raw ストレージがアクティブなストレージプールの一部として使用されていないかぎり、構成解除されたストレージプールをインポートすることによって取り消すことができます。



---

**注意** - プールを構成解除するとデータがアクセス不能になり、データが失われる可能性があります。インバウンドレプリケーションは失敗します。

---

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、CLI の `maintenance system updates` に移動します。

1. **configuration storage** に移動します。
2. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが選択され、表示されています。これが構成解除するプールでない場合は、`set pool1=` と入力し、別のオンラインプールを指定します。

---

**注記** - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

---

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

3. **unconfig** と入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> unconfig
```

4. 「done」と入力します。

#### 関連トピック

- [92 ページの「既存のストレージプールのインポート \(CLI\)」](#)
- [105 ページの「ストレージプールの名前の変更 \(CLI\)」](#)

## ▼ ストレージプールの名前の変更 (BUI)

ストレージプールの名前を変更するには、そのストレージプールを構成解除してから、すぐに新しい名前でもインポートする必要があります。ストレージが構成解除されている間、データはアクセス不能になり、データ損失が発生する可能性があります。ストレージプールのインポートには、かなりの時間がかかることがあります。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、「保守」> 「システム」に移動します。



1. 「構成」 > 「ストレージ」に移動します。
2. 「使用可能なプール」リストから、名前を変更するオンラインプールを選択します。
3. 「構成解除」をクリックしてから、「コミット」をクリックします。
4. 「インポート」をクリックして、構成解除したストレージプールを選択します。
5. ストレージプール名をクリックして、変更します。
6. 「コミット」をクリックします。

### 関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(BUI\)」](#)
- [91 ページの「既存のストレージプールのインポート \(BUI\)」](#)

## ▼ ストレージプールの名前の変更 (CLI)

ストレージプールの名前を変更するには、そのストレージプールを構成解除してから、すぐに新しい名前でもインポートする必要があります。ストレージが構成解除されている間、データはアクセス不能になり、データ損失が発生する可能性があります。ストレージプールのインポートには、かなりの時間がかかることがあります。

始める前に ディスクファームウェアアップグレードが発生しているときに、プール構成操作を実行しないでください。アップグレードが進行中かどうかを確認するには、`maintenance system updates` に移動します。

1. **configuration storage** に移動します。
2. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが選択され、表示されています。これが名前を変更するプールでない場合は、`set pool=` と入力し、別のオンラインプールを指定します。

---

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

---

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

3. **unconfig** と入力します。
 

```
hostname:configuration storage (pool1)> unconfig
```
4. 「done」と入力します。

5. **import** と入力します。

```
hostname:configuration storage> import
Search for storage. Begin the process of searching for existing storage pools.
Subcommands that are valid in this context:
 help [topic] => Get context-sensitive help. If [topic] is specified,
 it must be one of "builtins", "commands", "general",
 "help" or "script".
 show => Show information pertinent to the current context
 abort => Abort this task (potentially resulting in a
 misconfigured system)
 done => Finish operating on "discover"
hostname:configuration storage> discover>
```

6. 「done」と入力します。

7. 構成解除したストレージプールを選択するには、**set pool=** とプール名を入力します。

```
hostname:configuration storage select> set pool=pool1
pool = pool1
```

8. ストレージプールの名前を変更するには、**set name=** と新しい名前を入力します。

```
hostname:configuration storage (pool1)> set name=NewPool
pool = NewPool
```

9. 「done」と入力します。

関連トピック

- [103 ページの「ストレージプールの構成解除 \(CLI\)」](#)
- [92 ページの「既存のストレージプールのインポート \(CLI\)」](#)

## ▼ ストレージプールのスクラブ (BUI)

ストレージプールをスクラブすると、エラーがないかどうか検査することで内容が検証されます。何らかの回復不可能なエラーが見つかった場合は、スクラブ操作または通常動作のどちらかを使用して、影響を受けているファイルが BUI に表示されます。

通常、少なくとももっとも古いバックアップの有効期限が切れるごとにスクラブを実行すべきです。スクラブを実行するための推奨される期間は 3 か月ごとです。スクラブは、ソフトウェアアップグレードの実行前にも実行してください。

1. 「構成」 > 「ストレージ」に移動します。
2. 「使用可能なプール」リストから、スクラブするオンラインプールを選択します。
3. 「スクラブ」をクリックします。  
スクラブの日付と時間、エラーの数、エラーがあるファイル名を含む、スクラブのステータスが表示されます。
4. (オプション) スクラブを停止するには、「停止」をクリックします。  
「スクラブ」を再度クリックすると、スクラブが停止された場所から再開されます。

### 関連トピック

- [109 ページの「ストレージプールの概念」](#)

## ▼ ストレージプールのスクラブ (CLI)

ストレージプールのスクラブすると、エラーがないかどうか検査することで内容が検証されます。なんらかの回復不可能なエラーが見つかった場合は、スクラブ操作または通常動作のどちらかを使用すると、影響を受けているファイルを CLI に表示できます。必要に応じて、スクラブプロセスは完了前に停止できます。

通常、少なくとももっとも古いバックアップの有効期限が切れるごとにスクラブを実行すべきです。スクラブを実行するための推奨される期間は3か月ごとです。スクラブは、ソフトウェアアップグレードの実行前にも実行してください。

1. **configuration storage** に移動します。
2. 複数のプールがある場合、デフォルトのプールが選択され、表示されています。これがスクラブするプールでない場合は、**set pool=pool1** と入力し、別のオンラインプールを指定します。

---

注記 - 単一のプールの場合、プール名は表示されませんが、そのプールが選択されます。

---

```
hostname:configuration storage (pool0)> set pool=pool1
pool = pool1
```

3. **scrub start** と入力します。  
hostname:configuration storage (pool1)> scrub start
4. (オプション) **scrub stop** と入力して、スクラブを完了前に停止します。  
hostname:configuration storage (pool1)> scrub stop

scrub start と再度入力すると、スクラブが停止された場所から再開されます。

## 関連トピック

- [109 ページの「ストレージプールの概念」](#)

## ▼ プールとデバイスのステータスの表示 (BUI)

プールとコンポーネントデバイスのステータスを確認できます。プールに問題がある場合は、デバイスのステータスに関する詳細も一覧表示されます。

1. 「構成」 > 「ストレージ」に移動します。
2. プールをクリックして選択して、詳細を表示します。  
プールのステータスの説明については、次の表を参照してください。

| プールステータス | 説明                                                     |
|----------|--------------------------------------------------------|
| オンライン    | すべてのデバイスが正常に動作しているプール。                                 |
| 縮退       | 1つ以上のデバイスで障害が発生しているが、冗長性構成のためにデータを引き続き使用できるプール。        |
| 失敗       | 1つ以上のコンポーネントデバイスがオフラインになっており、動作を継続するためのレプリカが不足しています。   |
| オフライン    | プールは明示的にオフラインにされました。                                   |
| 使用不可     | メタデータが壊れているか、1つ以上のデバイスが使用できず、動作を継続するためのレプリカが不足しているプール。 |
| エクスポート済み | プールはクラスタピア上でアクティブで、クラスタのフェイルバックを行う準備ができています。           |

3. 「デバイスのステータス」セクションで、選択したプールのデバイスのステータスを表示します。  
デバイスのステータスの説明については、次の表を参照してください。

| デバイスのステータス | 説明                                                                                     |
|------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| オンライン      | デバイスはオンラインで動作しています。このステータスは表示されず、代わりにメッセージ「ストレージプールにデバイスの障害が検出されませんでした。」が表示されることがあります。 |
| 縮退         | デバイスは最適な状態ではありません。すぐに障害が発生することが予測されるか、スペアがまだ再同期化を終了していません。                             |
| 失敗         | デバイスで障害が発生しています。詳細は、保守ログ内にあります。                                                        |

| デバイスのステータス | 説明                                                                  |
|------------|---------------------------------------------------------------------|
| オフライン      | デバイスは明示的にオフラインにされました。このデバイスがオンラインにされるまで、デバイスに対する読み取りまたは書き込みは行われません。 |
| 削除済み       | デバイスは物理的に取り外されています。                                                 |
| ホットスベア     | このスベアデバイスは、障害が発生したデバイスの交換用のデータディスクとしてプール内でアクティブに使用されています。           |
| 使用不可       | デバイスを開くことができなかったか、プールがこのデバイスを検出できませんでした。                            |

4. プールとデバイスのエラーの詳細情報を確認するには、アクティブなエラーについては「保守」>「問題」に移動して、すべての問題の履歴については「保守」>「ログ」に移動します。

## ストレージプールの概念

ストレージは、基になるデータ冗長性によって特徴付けされるプール内に構成され、すべてのファイルシステムおよび LUN でシェアされる領域を指定します。ストレージプールが個々のファイルシステムまたは LUN にどのように関連しているかの詳細は、[362 ページの「ストレージプール、プロジェクト、およびシェアについて」](#)を参照してください。

## ストレージプール構成

プールは、新しいプールを構成したり、既存のプールをインポートしたりすることによって作成できます。既存のプールのインポートは、以前に Oracle ZFS Storage Appliance 上で構成されたプールをインポートするためにのみ使用され、コントローラ間でのプールの移動時や、致命的なコントローラ障害などの偶発的な再構成の場合に有益です。

## 複数のプール

各コントローラに任意の数のプールを含めることができ、各プールには、クラスタ内で独立して所有権を割り当てることができます。ログおよびキャッシュデバイスへのアクセスをシェア単位に制御できる機能を持つ、推奨される動作モードは 1 つのプールです。任意の数のプールがサポートされていますが、同じクラスタヘッドによって所有される同じ冗長性特性を持つ複数のプールを作成することはお勧めできません。それを行うと、パフォーマンスの低下、最善でないリソース割り当て、ストレージの人為的なパーティション分割、管理の一層の複雑さなどがもたらされます。同じホスト上での複数のプールの構成は、たとえば、データベース用のミラー化されたプールやストリーミングワークロード用の RAID-Z プールのように、まったく異なる冗長性またはパフォーマンス特性が望ましい場合にものみ推奨されます。

## プールあたりのデバイスの数

シャーシ全体のドライブを個別に割り当てることができますが、ディスクシェルフからディスクを割り当てるときは、最適なプール構成になるようにしてください。管理が簡素化され、使用可能な全体の容量の割合が高まるため、一般に、プール数を少なくし、プールあたりのディスク数を多くすることが推奨されます。

システムは必要に応じて任意の増分でストレージを割り当てることができますが、各割り当てにはすべてのディスクシェルフに分散するようにして少なくとも 8 台のディスクを含めること、可能であればさらに多くを含めることをお勧めします。

## ドライブの特性とパフォーマンス

ストレージプールを構成する場合は、次の制限に従ってください。

- ヘッドノードまたはディスクシェルフ内に含まれるすべてのデータディスクは、回転数 (メディアの回転速度) が同じである必要があります。アプライアンスソフトウェアは、構成の誤りを検出し、条件に対する障害を生成します。
- 予期しないパフォーマンスの問題のため、同じプール内で回転数が異なるディスクが混在しないようにします。
- パフォーマンスを最適化するため、同じ SAS ファブリック (HBA 接続) 内で回転数が異なるディスクをディスクシェルフと結合しないようにします。そのように混在させても正しく動作しますが、高速なデバイスのパフォーマンスが低下する可能性があります。
- 同じプール内で容量が異なるディスクを混在しないようにします。容量が異なるデータディスクが含まれるストレージプールを構成するときに、場合によっては ZFS が容量がもっとも小さいディスクのサイズをストレージプール内の一部またはすべてのディスクに対して使用するため、想定される全体の容量が小さくなる可能性があります。使用されるサイズは、デバイスのストレージプロファイル、配置、および組み合わせに依存します。

## ストレージプールの容量

プールに raw ストレージを割り当てる場合、特にシェアまたは LUN に書き込むときは、プールを完全にいっぱいにするとパフォーマンスが大幅に低下します。これらの効果は、プールの容量が満杯状態に近づくとより顕著になります。

## ストレージプールのデータプロファイル

ストレージデバイスが物理的に検証され、ストレージプール用にリソースが割り当てられたあとの次の手順は、信頼性、可用性と保守性 (RAS)、およびパフォーマンスの目標を反映したストレージプロファイルを選択することです。提供される一連の可能

性のあるプロファイルは、使用可能なストレージによって異なります。次の表は、可能性のあるすべてのプロファイルとその説明を示しています。

表 20 データプロファイル

| データプロファイル              | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>デュアルパリティオプション</b>   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| トリプルミラー化               | データが3つにミラー化され、非常に信頼性の高い高速なシステム(たとえば重要なデータベース用のストレージ)がもたらされます。この構成は、最大のパフォーマンスと可用性の両方が必要な状況に向いています。双方向ミラー化と比較すると、3方向ミラー化では、格納ブロックあたりのIOPSの増加と障害に対する保護レベルの向上を実現します。注: 拡張ストレージのないコントローラは、トリプルミラー化で構成すべきではありません。                                                                                         |
| ダブルパリティ RAID           | 各ストライプに2つのパリティディスクが含まれている RAID。トリプルミラー化に比べて、高可用性がもたらされ、2つのディスクで障害が発生してもデータは使用可能のままです。ダブルパリティ RAID は、ミラー化オプションよりも容量が増加するオプションであり、高スループットで順次アクセスのワークロード(バックアップなど)の場合やランダム読み取り性の低いコンポーネントに大量のデータを格納する場合に向いています。                                                                                         |
| <b>シングルパリティオプション</b>   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| ミラー化                   | データがミラー化されるため、容量は半分に減少しますが、高信頼性で高パフォーマンスのシステムがもたらされます。領域には十分な余裕があると考えられるがパフォーマンスに余裕がない場合(データベースストレージなど)に推奨されます。                                                                                                                                                                                      |
| シングルパリティ RAID、ナローストライプ | 各ストライプに3つのデータディスクと1つのパリティディスクが含まれている RAID。シングルパリティによる保護で十分な場合は、シングルパリティ RAID のほうが単純なミラー化よりも得られる容量が多くなるオプションです。ミラー化オプションよりも低くなるランダム読み取り性能と容量増加とのバランスを取る必要があります。シングルパリティ RAID は、適度なランダム読み取りコンポーネントを使用する重要ではないアプリケーションに向いていると考えることができます。純粋なストリーミングワークロードの場合は、容量とスループットが高くなるダブルパリティ RAID オプションを選択してください。 |
| <b>その他</b>             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| ストライプ化                 | データは、ディスクにまたがってストライプ化され、冗長性はありません。パフォーマンスと容量が最大化されますが、1つのディスクに障害が発生するとデータが失われます。この構成は推奨されません。純粋なストリーミングワークロードの場合は、ダブルパリティ RAID の使用を検討してください。ストライプ化されたプロファイルで構成され                                                                                                                                     |

| データプロファイル              | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| トリプルパリティ RAID、ワイドストライプ | <p>各ディスクは、非冗長性であるため、構成済みのストレージプールがエクスポート済み状態の場合を除き、ファームウェアの更新を受け取りません。</p> <p>各ストライプに3つのパリティ用ディスクが含まれている RAID。このオプションは、ストライプデータを別にするとともに容量が高くなります。ワイドストライプと低いランダム入出力パフォーマンスのため、1つ以上のドライブ障害のあとでデータを再同期化する場合は、かかる時間が大幅に長くなる可能性があります。その他の RAID 構成と同様に、キャッシュが存在するため、読み取りパフォーマンスの影響を軽減できます。この構成は一般には推奨されません。</p> |

**注記** - 以前のソフトウェアバージョンでは、ワイドストライプによるダブルパリティがサポートされていました。このオプションは、信頼性を大幅に向上させる、ワイドストライプによるトリプルパリティに置き換えられました。以前のソフトウェアバージョンの下でワイドストライプによるダブルパリティとして構成されたプールも引き続きサポートされますが、新しく構成または再構成されるプールではそのオプションを選択できません。

拡張可能なシステムでは、一部のプロファイルを「NSPF」オプションで使用できます。これは「No Single Point of Failure」の略でシングルポイント障害がないことを表し、深刻なディスクセルフ障害によってデータ損失が発生しないように、データがミラーまたは RAID ストライプで構造化されていることを示します。システムではすでに、ほぼすべてのコンポーネントにわたって冗長性が構成されています。各ディスクセルフは、冗長パス、冗長コントローラ、冗長電源装置およびファンを備えています。NSPF による保護の対象となる唯一の障害は、ディスクバックプレーン障害 (ほぼ受動的なコンポーネント)、または全体的な管理ミス (両方のパスの1つのディスクセルフへの切り離し) です。一般に、NSPF を採用すると、ストライプの幅に関する要件がより厳格になるため、容量は少なくなります。

ログデバイスは、ストライプ化またはミラー化されたプロファイルのみを使用して構成できます。ログデバイスは、ノード障害の場合にのみ使用されます。ミラー化されていないログによってデータが失われる場合、デバイスに障害が発生することと、そのあとにノードがただちにリポートされることの両方が必要です。これはほとんどありそうにない状況ですが、ログデバイスをミラー化すると、2つの同時デバイス障害とノード障害が非常に短い時間帯に発生することが必要になるため、これを事実上不可能にできます。

**注記** - 異なるサイズのログデバイスが別のシャーシにある場合は、ストライプ化されたログプロファイルのみを作成できます。

ホットスペアは合計プールサイズの割合として割り当てられ、選択されたプロファイルには関係ありません (ホットスペアをサポートしていないストライプ化を除く)。



ホットスワップはストレージの構成段階ごとに割り当てられるため、小さい単位でストレージを追加するより、ストレージを全体として構成する方がはるかに効率的です。

クラスタ構成で、コントローラスロットに取り付けられたキャッシュデバイスは、ストレージプールがインポートされたノードでのみ使用できます。クラスタでは、両方のノードでキャッシュデバイスを構成して、同じプールの一部にできます。これを行うには、パッシブノード上のプールを引き継いだあと、ストレージを追加し、キャッシュデバイスを選択します。これには、常に、構成されているグローバルキャッシュデバイスの半分を保持するという効果があります。キャッシュデバイス上のデータはフェイルオーバーで失われますが、新しいノード上では新しいキャッシュデバイスを使用できます。

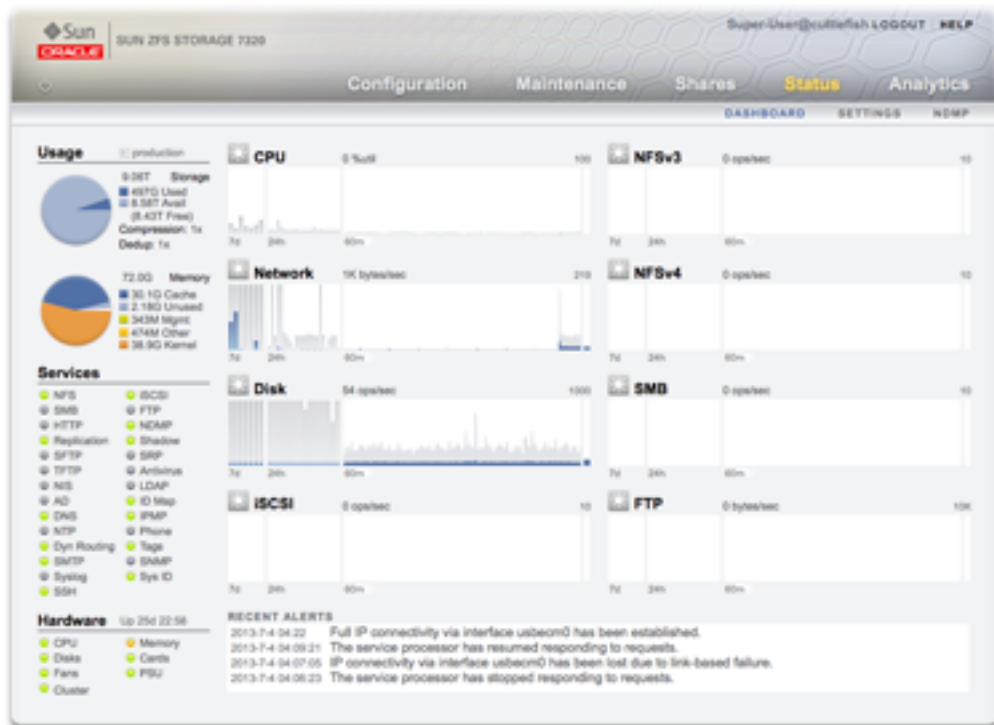
プールへの追加時にディスクスロットに取り付けられたキャッシュデバイスは、クラスタのフェイルバックまたはテイクオーバー時に自動的にインポートされます。追加のプール構成は必要ありません。

## アプライアンスステータスについて

「ステータス」セクションには、アプライアンスステータスおよび構成オプションのサマリーが表示されます。アプライアンスステータスのビューや関連するサービス構成の概念的な情報および手続きに関する情報については、以降のセクションを使用してください。

- [19 ページの「Oracle ZFS Storage Appliance の概要」](#)
- [114 ページの「ダッシュボードの「ステータス」](#)
- [119 ページの「メモリー使用状況のサマリー」](#)
- [120 ページの「ディスクアクティビティダッシュボード」](#)
- [122 ページの「ダッシュボード CLI」](#)
- [124 ページの「ダッシュボードの連続実行」](#)
- [124 ページの「ステータスダッシュボード設定」](#)
- [126 ページの「表示されるアクティビティ統計情報の変更」](#)
- [127 ページの「アクティビティのしきい値の変更」](#)
- [127 ページの「NDMP ステータス」](#)
- [129 ページの「NDMP の状態」](#)

## ダッシュボードの「ステータス」



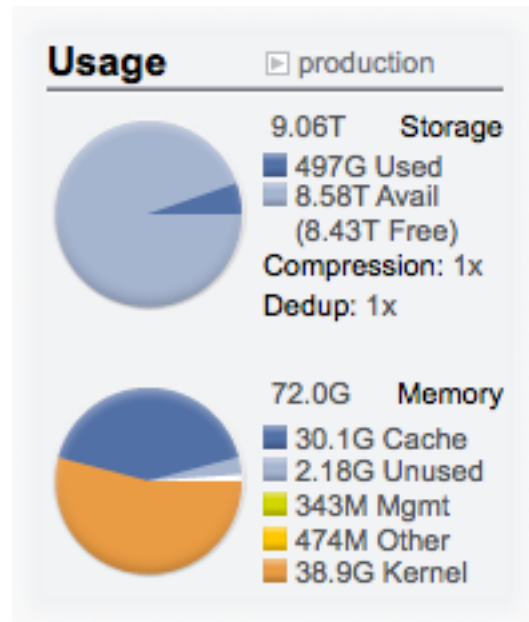
「ダッシュボード」にはアプライアンスステータスのサマリーが表示されます

「ステータス」「ダッシュボード」には、ブラウザユーザーインターフェース (BUI) のすべてのメイン画面へのリンクが表示されます。「ダッシュボード」に表示されている 100 を超える項目が、マウスを上に移動すると表示される枠または強調表示されたテキストによって示される関連付けられた BUI 画面にリンクされています。以降のセクションでは、「ダッシュボード」の各領域について詳細に説明します。

## ダッシュボード使用状況

「ダッシュボード」の使用状況の領域には、ストレージプールとメインメモリーの使用状況のサマリーが表示されます。使用状況の領域の右上には、プールの名前が表示されます。複数のプールが構成されている場合は、プルダウンリストを使って目的のプールを選択して表示します。

図 1 「ステータス」「ダッシュボード」使用状況

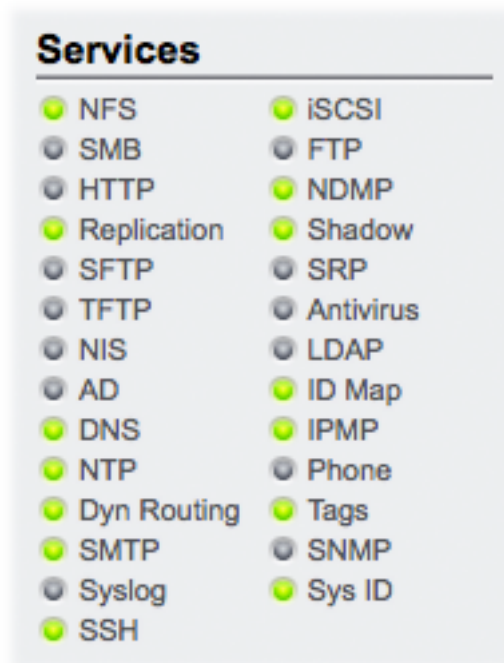


プール容量の合計は、この領域のいちばん上に表示されます。「ストレージ」の円グラフに、使用済み、使用可能、および空いている領域の詳細が表示されます。プールの「シェア」画面に移動するには、「ストレージ」の円グラフをクリックします。

## ダッシュボードの「サービス」

「ダッシュボード」のこの領域には、アプライアンス上のサービスのステータスが表示され、光のアイコンが各サービスの状態を示します。

図 2 「ダッシュボード」 「サービス」



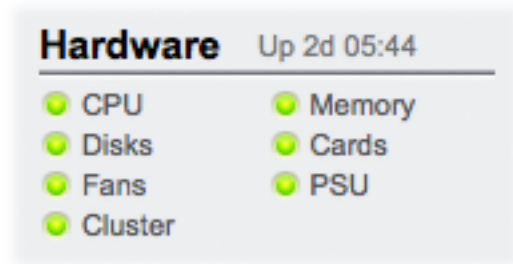
ほとんどのサービスは、サービスがオンラインであることを示す緑色か、またはサービスが無効になっていることを示す灰色です。可能性のあるすべての状態とアイコンの色を参照するには、[22 ページの「ブラウザユーザーインタフェース \(BUI\)」](#)を参照してください。


関連付けられた構成画面に移動するには、サービス名をクリックします。「プロパティ」画面が表示されます。ここには、構成可能なフィールド、再起動、有効化、および無効化アイコン、このサービスに関連付けられた「ログ」画面へのリンクが含まれています。

## ダッシュボードの「ハードウェア」

「ダッシュボード」のこの領域には、アプライアンス上のハードウェアの概要が表示されます。

図 3 「ダッシュボード」「ハードウェア」



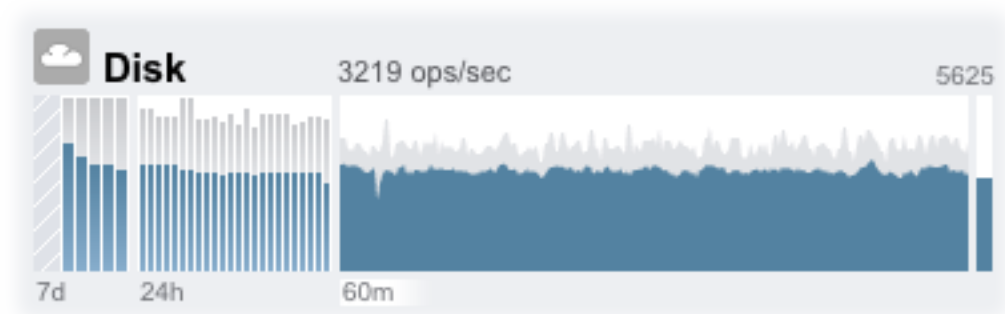
既知の障害が存在する場合は、オレンジ色の障害  アイコンが表示されます。

ハードウェア状態の詳細を表示するために「ハードウェア」画面に移動するには、ハードウェアコンポーネントの名前をクリックします。

### 「ダッシュボード」のアクティビティ

「ダッシュボード」のアクティビティ領域には、デフォルトでは8つのパフォーマンス統計のグラフが表示されます。このセクションにある例は、1秒あたりのディスク操作の数を示しています。統計の平均が青色でプロットされ、最大が明るい灰色で表示されます。

図 4 ディスクアクティビティダッシュボード



アクティビティの分析ワークシートに移動するには、評価する統計の4つのグラフ(日、時間、分、秒)のいずれかをクリックします。

グラフごとの平均を表示するには、マウスをグラフの上に移動すると、平均がツールチップに表示されます。左上にある天気アイコンは、[124 ページの「ステータスダッシュボード設定」](#)画面で統計ごとにカスタマイズできるしきい値に従ったアクティビティのレポートを示します。

表 21 統計グラフのサマリー

| 統計グラフのサマリー    |                                                       |
|---------------|-------------------------------------------------------|
| 7日間グラフ (7d)   | 各棒が1日を表す棒グラフ。                                         |
| 24時間グラフ (24h) | 各棒が1時間を表す棒グラフ。                                        |
| 60分間グラフ (60m) | 1時間にわたるアクティビティを表す折れ線グラフ (24時間グラフ内の最初の1時間の棒としても表示される)。 |
| 1秒間グラフ        | 瞬時のアクティビティレポートを表す折れ線グラフ。                              |

選択されたプロットの平均が、グラフの上に数値で表示されます。表示される平均を変更するには、目的の平均(7d、24h、60mのいずれか)を選択します。

すべてのグラフの垂直スケールが右上に出力され、すべてのグラフがこの同じ高さにスケールされます。高さは、選択されたグラフから計算されます(プラス余白)。高さが100%に固定されている使用率グラフを除き、高さは、選択されたグラフ内のアクティビティに基づいて再スケールされます。

高さは再スケールが可能のため、アイドル状態アクティビティの60分がビジー状態アクティビティの60分と同様に表示される可能性があります。グラフが意味する内容を解釈しようとする前に、グラフの高さを常に確認してください。

統計情報によっては、明白に理解できない場合があります。環境内の特定のアプライアンスについて、毎秒1000個のNFSv3操作をビジーまたはアイドル状態のどちらと見なせばいいか迷うことがあります。このような場合、比較のために現在のアクティビティの横に履歴データを表示する24時間と7日間のプロットが役立ちます。

プロットの高さは、選択されたプロットから計算されます。デフォルトでは、60分間のプロットが選択されます。そのため、高さは、その60分間隔中の最大のアクティビティ(プラス余白)になります。すべてのプロットを前の7日間のもっとも高いアクティビティにわたるように再スケールするには、7dを選択します。これにより、現在のアクティビティを前日または先週と容易に比較して確認できます。

天気アイコンは、何かが異常にビジーまたはアイドル状態にあるときに、ユーザーの注意を引き付けるように考慮されています。天気のしきい値の構成ページに移動す

るには、天気アイコンをクリックします。良いしきい値や悪いしきい値は存在せず、BUIによって、アクティビティ統計情報ごとのレベルのグラデーションが表示されます。天気アイコンの基になっている統計情報は、次に示すように、ワークロードに合わせてカスタマイズすべきアプライアンスパフォーマンスに対する概略の理解を提供します。

- 環境が異なれば許容可能なレベルのパフォーマンス (待機時間) も異なり、1 つですべてに間に合うしきい値は存在しません。
- 「ダッシュボード」上の統計情報は 1 秒あたりの操作数や 1 秒あたりのバイト数に基づいているため、システムパフォーマンスを正確に理解するには分析ワークシートを使用してください。

## 最新のアラート

図 5 最新のアラート

```

RECENT ALERTS
2010-2-22 16:53:51 Replication of 'default' to 'tuna' failed.
2010-2-22 16:29:23 Finished replicating 'default' to appliance 'tuna'.
2010-2-22 16:29 Began replicating 'default' to appliance 'tuna'.
2010-2-22 15:59:28 Finished replicating 'default' to appliance 'tuna'.

```

このセクションには、最後の 4 つのアプライアンスアラートが表示されます。最近のすべてのアラートの詳細を確認するには、ボックスをクリックして「ログ」画面に移動します。

## メモリー使用状況のサマリー

システム物理メモリーの合計は、この領域の最上部に表示されます。左側には、コンポーネントごとのメモリー使用量を示す円グラフが表示されます。アプリケーション名で分類された動的なメモリー使用量の Analytics ワークシートに移動するには、「メモリー」の円グラフをクリックします。

表 22 プール使用状況のサマリー

| プール使用状況のサマリー |                                    |
|--------------|------------------------------------|
| 使用中          | このプールで使用されている領域 (データやスナップショットを含む)。 |

| プール使用状況のサマリー |                                                                                                                              |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 使用可能         | 使用可能な物理ディスクの容量。ファイルシステムメタデータの消費のために、ファイルデータで使用できる容量(「Shares」画面で報告される)はこれより少なくなります。                                           |
| 空き           | 使用可能な容量(LUNの容量のうち、プロジェクトにより予約され、プール内部で共有されている未使用領域を減らします)。ディスク容量が事前に予約により割り当てられるか、LUNが作成される場合、または両方の場合に、使用可能な空きディスク容量を提供します。 |
| 圧縮           | このプールによって達成されている現在の圧縮率。圧縮が無効になっている場合は、1xと表示されます。                                                                             |
| 複製解除         | このプールによって達成されている現在のデータ複製解除率。データ複製解除が無効になっている場合は、1xと表示されます。                                                                   |

表 23 メインメモリー使用量のサマリー

| メインメモリー (RAM) 使用量のサマリー |                                                          |
|------------------------|----------------------------------------------------------|
| キャッシュ                  | パフォーマンスを向上させるためにファイルシステムキャッシュで使用されているバイト数。               |
| 未使用                    | 現在使用されていないバイト数。ブート後、領域がファイルシステムキャッシュで使用されるに従ってこの値は減少します。 |
| 管理                     | アプライアンス管理ソフトウェアで使用されているバイト数。                             |
| その他                    | その他のオペレーティングシステムソフトウェアで使用されているバイト数。                      |
| カーネル                   | オペレーティングシステムカーネルで使用されているバイト数。                            |

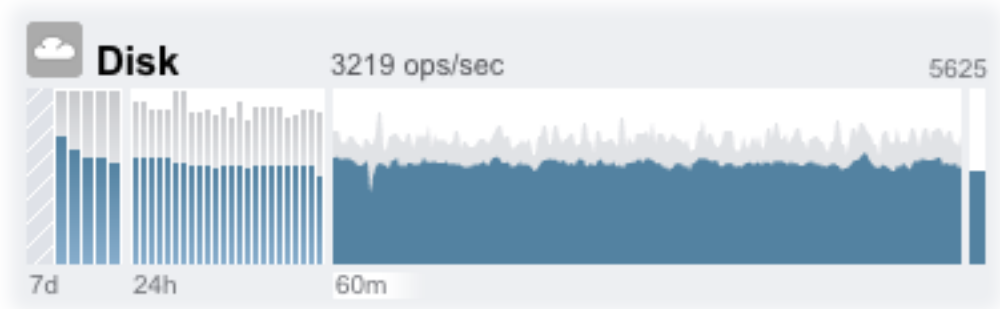
メモリー使用量を表示するユーザーには、analytics/component create+read 承認が必要なことに注意してください。この承認がない場合、「ダッシュボード」にメモリーの詳細は表示されません。

## ディスクアクティビティダッシュボード

「ダッシュボード」のアクティビティ領域には、デフォルトでは8つのパフォーマンス統計のグラフが表示されます。このセクションにある例は、1秒あたりのディスク操作の数を示しています。統計の平均が青色でプロットされ、最大が明るい灰色で表示されます。



図 6 ディスクアクティビティードッシュボード



アクティビティの分析ワークシートに移動するには、評価する統計の4つのグラフ(日、時間、分、秒)のいずれかをクリックします。

グラフごとの平均を表示するには、マウスをグラフの上に移動すると、平均がツールチップに表示されます。左上にある天気アイコンは、「ステータス設定」画面で統計ごとにカスタマイズできるしきい値に従ったアクティビティのレポートを示します。

表 24 統計グラフのサマリー

| 統計グラフのサマリー    |                                                      |
|---------------|------------------------------------------------------|
| 7日間グラフ (7d)   | 各棒が1日を表す棒グラフ。                                        |
| 24時間グラフ (24h) | 各棒が1時間を表す棒グラフ。                                       |
| 60分間グラフ (60m) | 1時間にわたるアクティビティを表す折れ線グラフ(24時間グラフ内の最初の1時間の棒としても表示される)。 |
| 1秒間グラフ        | 瞬時のアクティビティレポートを表す折れ線グラフ。                             |

選択されたプロットの平均が、グラフの上に数値で表示されます。表示される平均を変更するには、目的の平均(7d、24h、60mのいずれか)を選択します。

すべてのグラフの垂直スケールが右上に出力され、すべてのグラフがこの同じ高さにスケールされます。高さは、選択されたグラフから計算されます(プラス余白)。高さが100%に固定されている使用率グラフを除き、高さは、選択されたグラフ内のアクティビティに基づいて再スケールされます。

高さは再スケーリングが可能のため、アイドル状態アクティビティの 60 分がビジー状態アクティビティの 60 分と同様に表示される可能性があります。グラフが意味する内容を解釈しようとする前に、グラフの高さを常に確認してください。

統計情報によっては、明白に理解できない場合があります。環境内の特定のアプライアンスについて、毎秒 1000 個の NFSv3 操作をビジーまたはアイドル状態のどちらと見なせばいいか迷うことがあります。このような場合、比較のために現在のアクティビティの横に履歴データを表示する 24 時間と 7 日間のプロットが役立ちます。

プロットの高さは、選択されたプロットから計算されます。デフォルトでは、60 分間のプロットが選択されます。そのため、高さは、その 60 分間隔中の最大のアクティビティ (プラス余白) になります。すべてのプロットを前の 7 日間のもっとも高いアクティビティにわたるように再スケーリングするには、7d を選択します。これにより、現在のアクティビティを前日または先週と容易に比較して確認できます。

天気アイコンは、何かが異常にビジーまたはアイドル状態にあるときに、ユーザーの注意を引き付けるように考慮されています。天気のしきい値の構成ページに移動するには、天気アイコンをクリックします。良いしきい値や悪いしきい値は存在せず、BUI によって、アクティビティ統計情報ごとのレベルのグラデーションが表示されます。天気アイコンの基になっている統計情報は、次に示すように、ワークロードに合わせてカスタマイズするべきアプライアンスパフォーマンスに対する概略の理解を提供します。

- 環境が異なれば許容可能なレベルのパフォーマンス (待機時間) も異なり、1 つですべてに間に合うしきい値は存在しません。
- 「ダッシュボード」上の統計情報は 1 秒あたりの操作数や 1 秒あたりのバイト数に基づいているため、システムパフォーマンスを正確に理解するには分析ワークシートを使用してください。

## ダッシュボード CLI

「ステータス」>「ダッシュボード」画面のテキストバージョンを CLI から使用できるようにするには、「status dashboard」と入力します。

```
cuttlefish:> status dashboard
Storage:
 pool_0:
 Used 497G bytes
 Avail 8.58T bytes
 Free 8.43T bytes
 State online
 Compression 1x

Memory:
 Cache 30.1G bytes
 Unused 2.18G bytes
 Mgmt 343M bytes
 Other 474M bytes
```

```

Kernel 38.9G bytes

Services:
ad disabled smb disabled
dns online ftp disabled
http online identity online
idmap online ipmp online
iscsi online ldap disabled
ndmp online nfs online
nis online ntp online
routing online scrk maintenance
snmp online ssh online
tags online vscan online

Hardware:
CPU online Cards online
Disks faulted Fans online
Memory online PSU online

Activity:
CPU 1 %util Sunny
Disk 32 ops/sec Sunny
iSCSI 0 ops/sec Sunny
NDMP 0 bytes/sec Sunny
NFSv3 0 ops/sec Sunny
NFSv4 0 ops/sec Sunny
Network 13K bytes/sec Sunny
SMB 0 ops/sec Sunny

```

```

Recent Alerts:
2013-6-15 07:46: A cluster interconnect link has been restored.

```

このセクションにある前の説明が適用されますが、次の違いがあります。

- アクティビティのプロットはテキストでは描画されません (ただし、aalib の使用について検討しました)。
- CLI では、ストレージ使用状況のセクションに、使用可能なすべてのプールの詳細が一覧表示されます。これに対して、BUI には 1 つのサマリーを表示する余裕しかありません。

別のビューも使用できます。たとえば、`status activity show` では次のようになります。

```

caji:> status activity show
Activity:
CPU 10 %util Sunny
Disk 478 ops/sec Partly Cloudy
iSCSI 0 ops/sec Sunny
NDMP 0 bytes/sec Sunny
NFSv3 681 ops/sec Partly Cloudy
NFSv4 0 ops/sec Sunny
Network 22.8M bytes/sec Partly Cloudy
SMB 0 ops/sec Sunny
caji:>

```

## ▼ ダッシュボードの連続実行

ブラウザで「ダッシュボード」画面を連続して (毎日 24 時間) 開いたままにすると、ブラウザメモリーの問題が発生することがあります。ブラウザのサイズが増加するため (メモリーリーク)、ブラウザを閉じて、ふたたび開く必要があります。ブラウザは、さまざまな Web サイトを参照している (また、タブを開いたり閉じたりしている) ときは、きわめて適切にメモリーを管理できます。問題は、「ダッシュボード」画面が実行されたままで閉じられないと、アクティビティーのプロットのためにイメージを何回も開きなおすことになり、これによってイメージ描画のパフォーマンスが低下する点です。

Firefox の使用中にこの問題が発生する場合は、次のようにメモリーキャッシュを無効にします。

1. **about:config** を開きます
2. 「**memory**」でフィルタリングします
3. **browser.cache.memory.enable = false** を設定します。

## ステータスダッシュボード設定

「ステータス」>「設定」画面を使用すると、表示される統計情報や、天気アイコンを通してアクティビティーを示すしきい値など、「ステータス」「ダッシュボード」をカスタマイズできます。

The screenshot shows the 'Configure Dashboard' page. On the left, there is a text box: 'About: Configure the activity metrics displayed on the status dashboard. If desired, some may be configured as empty, which will reduce the network traffic required to refresh the dashboard.' To the right is a 2x4 grid of dropdown menus. The first column contains: CPU, Network, Disk, iSCSI. The second column contains: NFSv3, NFSv4, SMB2, ARC Ratio. At the top right, there are tabs for 'Layout' and 'Thresholds'. Below the tabs are 'REVERT' and 'APPLY' buttons.

次の表で定義された、ダッシュボードアクティビティー領域に表示されるグラフを選択するには、レイアウトタブを使用します。

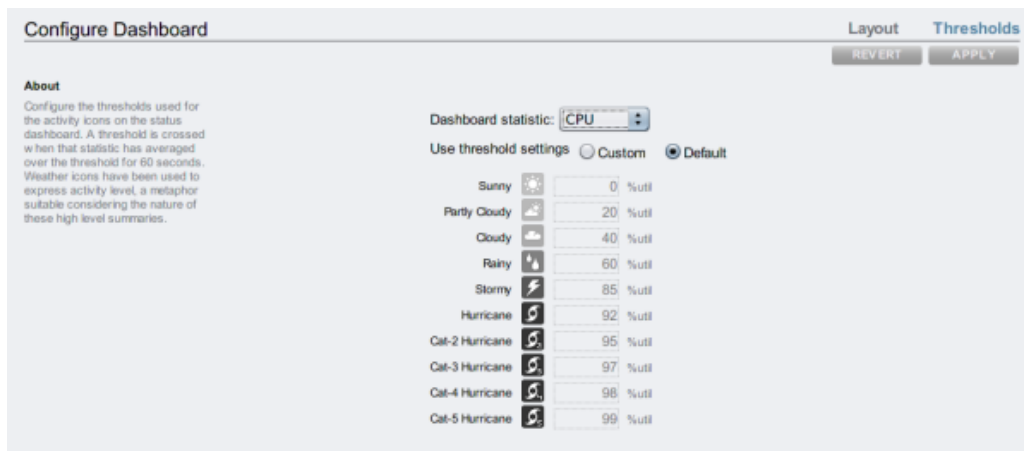
表 25 ステータスのレイアウトの設定

| 名前      | 単位     | 説明                                                        |
|---------|--------|-----------------------------------------------------------|
| <empty> | -      | この場所にグラフは表示されません。                                         |
| CPU     | 使用率    | アプライアンス CPU がビジー状態である平均サイクル数。CPU サイクルには、メモリー待機サイクルが含まれます。 |
| ARC 率   | 使用率    | 平均の ARC ヒット/ミス率。ヒット率の低下は、潜在的なパフォーマンスの問題を示しています。           |
| HTTP    | 操作数/秒  | HTTP 操作の平均数。                                              |
| ディスク    | 操作数/秒  | 物理ストレージデバイスへの操作の平均数。                                      |
| iSCSI   | 操作数/秒  | iSCSI 操作の平均数。                                             |
| FC      | 操作数/秒  | ファイバチャネル操作の平均数。                                           |
| NDMP    | バイト数/秒 | 平均の NDMP ネットワークバイト数。                                      |
| NFSv2   | 操作数/秒  | NFSv2 操作の平均数。                                             |
| NFSv3   | 操作数/秒  | NFSv3 操作の平均数。                                             |
| NFSv4   | 操作数/秒  | NFSv4 操作の平均数。                                             |
| ネットワーク  | バイト数/秒 | すべての物理ネットワークインタフェースにわたる平均バイト数/秒。                          |
| SMB     | 操作数/秒  | SMB 操作の平均数。                                               |
| SMB2    | 操作数/秒  | SMB2 操作の平均数。                                              |
| FTP     | バイト数/秒 | FTP バイトの平均数。                                              |
| SFTP    | バイト数/秒 | SFTP バイトの平均数。                                             |

「ダッシュボード」をリフレッシュするために必要なネットワークトラフィックを削減するには、一部のアクティビティグラフを「<empty>」として構成してください。

ダッシュボードアクティビティの天気アイコンを構成するには、「しきい値」画面を使用します。提供されるデフォルト値は負荷の高いワークロードに基づいているため、実際の環境に適していないことがあります。

図 7 ダッシュボードアクティビティの設定



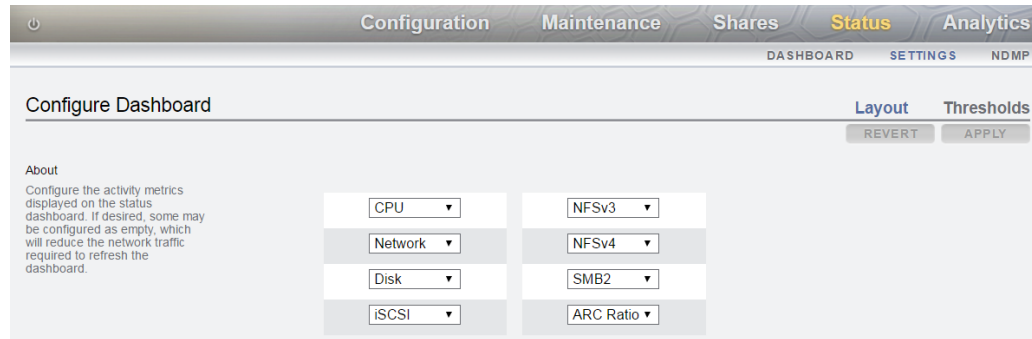
「ダッシュボード」に表示される天気アイコンは、現在のアクティビティに対するしきい値の設定にもっとも近い (60 秒の平均として測定される) アイコンです。たとえば、CPU 使用率が 41% であった場合、デフォルトでは、しきい値が 40% (実際のアクティビティにもっとも近い) である曇りの天気アイコンが表示されます。しきい値を構成し、しかも必ず画面に表示される順番に構成するには、「カスタム」ラジオボタンを選択します。

現在、ダッシュボードを CLI から構成することはできません。BUI で保存された設定は、CLI から表示されるダッシュボードに適用されます。

## ▼ 表示されるアクティビティ統計情報の変更

1. 「ステータス」 > 「設定」 > 「レイアウト」画面に移動します。
2. ドロップダウンメニューから、「ダッシュボード」に表示する統計情報を選択します。

3. 選択を保存するには、「適用」ボタンをクリックします。



## ▼ アクティビティのしきい値の変更

1. 「ステータス」>「設定」>「しきい値」画面に移動します。
2. ドロップダウンメニューから、構成する統計を選択します。
3. 「カスタム」ラジオボタンをクリックします。
4. リスト内の値を表示される順番にカスタマイズします。一部の統計情報では、「Kilo」/「Mega」/「Giga」を選択できるように「単位」ドロップダウンが表示されます。
5. 構成を保存するには、「適用」ボタンをクリックします。

## NDMP ステータス

NDMP サービスが構成されていて、アクティブである場合、「ステータス」=>「NDMP」ページには NDMP デバイスと最新のクライアントアクティビティが表示されます。緑色のインジケータはデバイスがオンラインであることを示し、グレーのインジケータはデバイスがオフラインであることを示しています。

NDMP デバイスリストを再ソートするには、「デバイス」列見出しをクリックします。デバイスの詳細を表示するには、そのデバイスをダブルクリックします。

NDMP ステータスは CLI からは使用できません。

図 8 NDMP のステータスの BUI

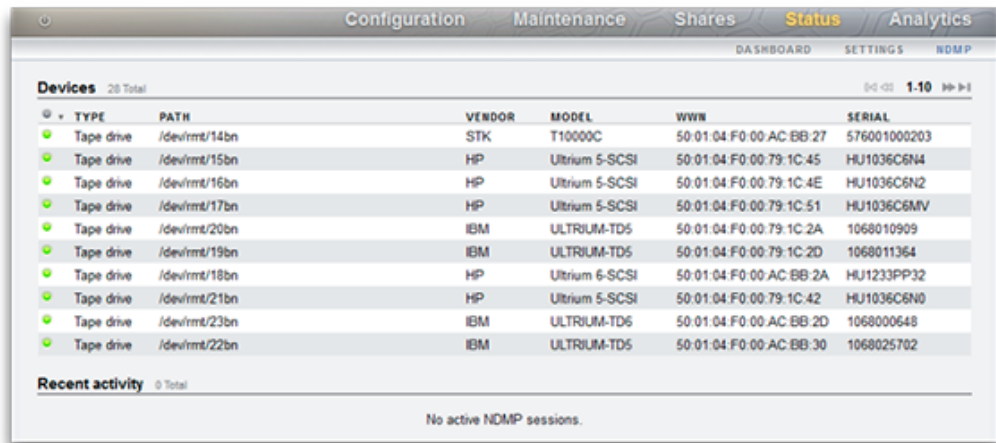


表 26 NDMP のステータス - デバイス

| フィールド | 説明              | 例                       |
|-------|-----------------|-------------------------|
| タイプ   | NDMP デバイスのタイプ   | ロボット、テープドライブ            |
| パス    | NDMP デバイスのパス    | /dev/rmt/14bn           |
| ベンダー  | デバイスのベンダー名      | STK                     |
| モデル   | デバイスのモデル名       | T1000C                  |
| WWN   | World Wide Name | 50:01:04:F0:00:AC:BB:27 |
| シリアル  | デバイスのシリアル番号     | 576001000203            |

表 27 NDMP のステータス - 最新のアクティビティ

| フィールド      | 説明                       | 例                  |
|------------|--------------------------|--------------------|
| ID         | NDMP のバックアップ ID          | 49                 |
| アクティブ      | 現在アクティブなバックアップ           | いいえ                |
| リモートクライアント | NDMP クライアントのアドレスとポート     | 192.168.1.219:4760 |
| 認証済み       | クライアントがすでに認証を完了したかどうかを示す | はい、いいえ             |
| データの状態     | 「データの状態」を参照              | アクティブ、アイドル、...     |
| ムーバーの状態    | 「ムーバーの状態」を参照             | アクティブ、アイドル、...     |



| フィールド | 説明                 | 例            |
|-------|--------------------|--------------|
| 現在の操作 | 現在の NDMP 操作        | バックアップ、復元、なし |
| 進行状況  | このバックアップのための進行状況バー |              |

## NDMP の状態

「NDMP データの状態」には、バックアップまたは復元操作の状態が表示されます。可能性のある値は次のとおりです。

- 「**アクティブ**」: データがバックアップまたは復元されています。
- 「**アイドル**」: バックアップまたは復元がまだ開始されていないか、あるいはすでに完了しています。
- 「**接続完了**」: 接続は確立されていますが、バックアップまたは復元がまだ開始されていません。
- 「**停止**」: バックアップまたは復元が正常に完了したか、あるいは失敗または異常終了しました。
- 「**待機**」: 操作はリモート接続の受信を待機しています。

「NDMP ムーバーの状態」には、NDMP デバイスサブシステムの状態が表示されます。テープデバイスの例は次のとおりです。

- 「**アクティブ**」: データがテープから読み取られているか、またはテープに書き込まれています。
- 「**アイドル**」: テープ操作がまだ開始されていないか、あるいはすでに完了しています。
- 「**一時停止**」: テープが最後に達したか、または変更されるのを待機しています。
- 「**停止**」: 読み取り/書き込み操作が正常に完了したか、あるいは失敗または異常終了しました。
- 「**待機**」: 操作はリモート接続の受信を待機しています。

## Storage Area Network (SAN) の構成

SAN 構成ページを使用すると、アプライアンスを Storage Area Network (SAN) に接続できます。SAN は、次の 3 つの基本コンポーネントで構成されています。

- ネットワーク上のストレージにアクセスするクライアント
- ネットワーク上のストレージを提供するストレージアプライアンス
- クライアントをストレージにリンクするネットワーク

SAN を構成するには、次のセクションを参照してください。

- FC ポートモードの構成 (BUI)
- FC ポートの検出 (BUI)
- FC イニシエータグループの作成 (BUI)
- LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (BUI)
- FC ポートモードの変更 (CLI)
- FC ポートの検出 (CLI)
- FC イニシエータグループの作成 (CLI)
- LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (CLI)
- イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 (CLI)
- SAN iSCSI イニシエータの構成
- 分析ワークシートの作成 (BUI)
- 自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- 特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 (CLI)
- iSCSI ターゲットグループの追加 (CLI)
- iSCSI イニシエータグループの追加 (CLI)
- SRP ターゲットの構成 (BUI)
- SRP ターゲットの構成 (CLI)



SAN について詳しく理解するには、次を参照してください。

- SAN の理解
- SAN ファイバチャネル構成
- SAN iSCSI 構成
- SAN iSER ターゲットの構成
- SAN SRP 構成
- SAN の用語

## ▼ FC ポートモードの構成 (BUI)

1. FC ポートを使用するには、次のイメージで示すドロップダウンメニューを使用して、BUI の「構成」>「SAN」画面で FC ポートを「ターゲット」モードに設定しま

す。このアクションを実行するには、root アクセス権が必要です。クラスタ構成では、個々のサーバーで別々に、ポートを「ターゲット」モードに設定します。

2. 目的のポートを「ターゲット」に設定したら、「適用」ボタンをクリックします。アプライアンスがただちにリブートすることを通知する確認メッセージが表示されます。リブートすることを確認します。
3. アプライアンスがブートすると、アクティブな FC ターゲットが  アイコンとともに表示され、マウスをその上に移動すると、移動  アイコンが表示されます。

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ FC ポートの検出 (BUI)


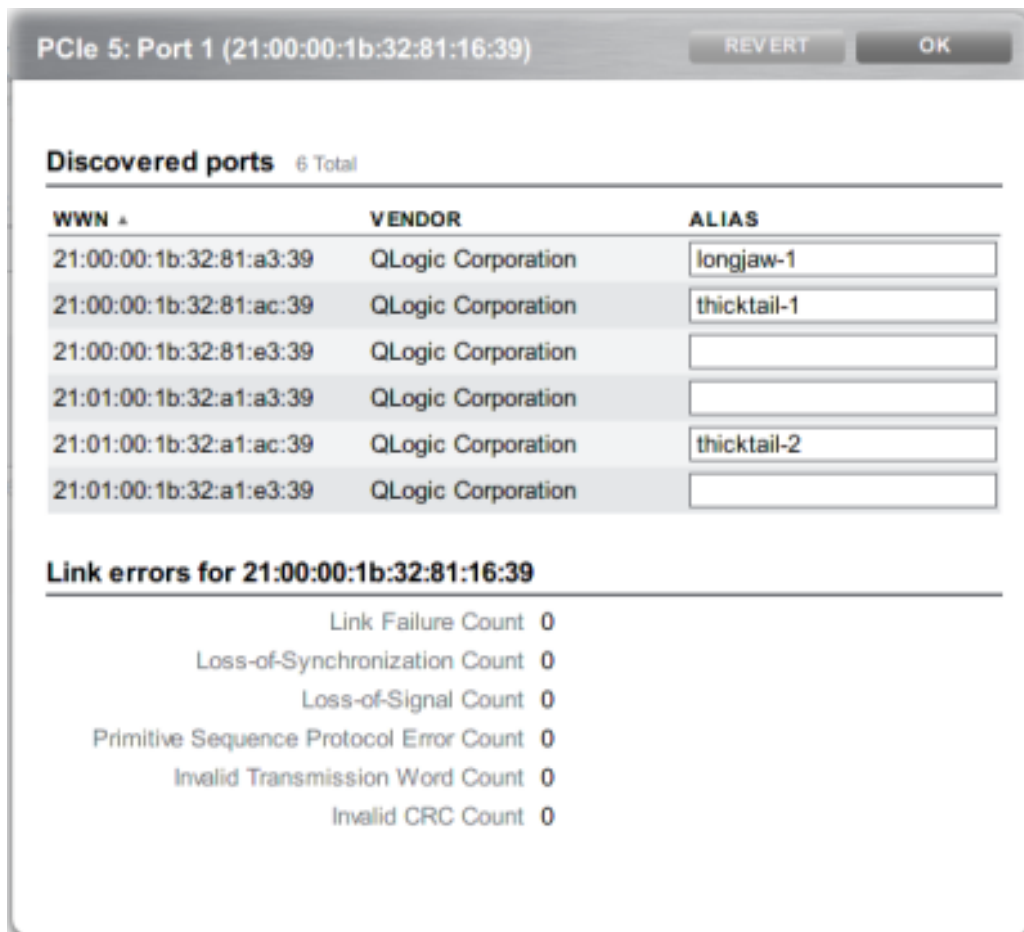
1. リンクエラーをトラブルシューティングできる「検出されたポート」ダイアログを表示するには、情報  アイコンをクリックします。「検出されたポート」ダイアログで、リスト内の WWN をクリックして関連するリンクエラーを表示します。

図 9 検出された FC ポート




2. 「検出されたポート」ダイアログで、リスト内の WWN をクリックして関連するリンクエラーを表示します。

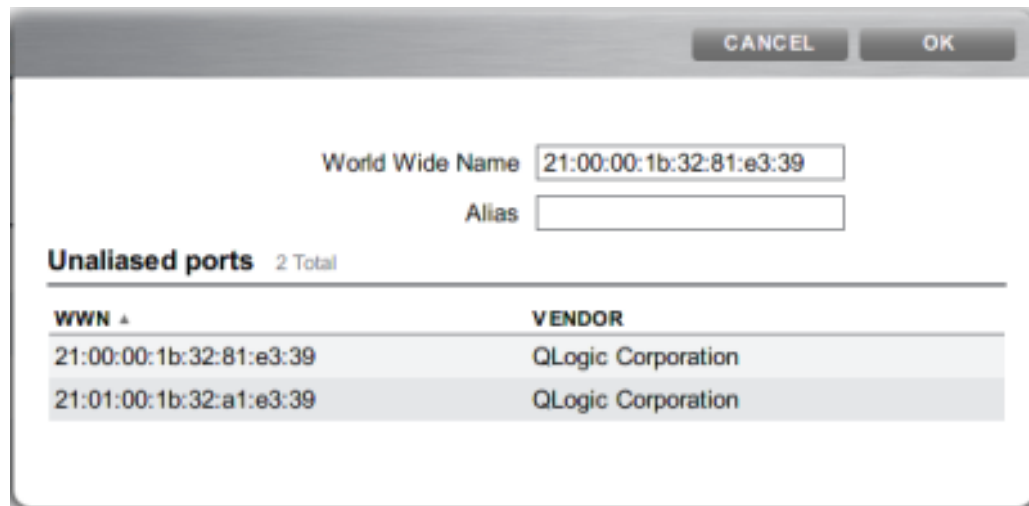
#### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)

- SAN iSER ターゲットの構成
- SAN SRP 構成
- SAN の用語

## ▼ FC イニシエータグループの作成 (BUI)

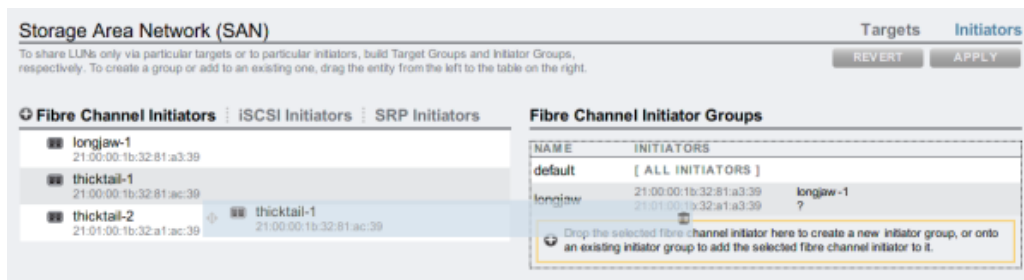
1. イニシエータグループの作成と管理は、「イニシエータ」画面で行います。別名化されていないポートを表示するには、追加  アイコンをクリックします。「別名」フィールドで意味のある別名を追加するには、リスト内の WWN をクリックします。



| WWN ▲                   | VENDOR             |
|-------------------------|--------------------|
| 21:00:00:1b:32:81:e3:39 | QLogic Corporation |
| 21:01:00:1b:32:a1:e3:39 | QLogic Corporation |

2. 「イニシエータ」ページで、イニシエータを「FC イニシエータグループ」リストにドラッグして新しいグループを作成するか、または既存のグループに追加します。

図 10 「FC イニシエータグループ」リスト



3. 「適用」ボタンをクリックして、新しいイニシエータグループをコミットします。これで、クライアントのイニシエータグループへの排他的アクセス権を持つ LUN を作成できます。

#### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (BUI)


1. LUN を作成するには、イニシエータグループをロールオーバーし、LUN の追加  アイコンをクリックします。「LUN を作成」ダイアログが表示され、関連付けられたイニシエータグループが選択された状態になります。

図 11 LUN と FC イニシエータグループとの関連付け

Project default

Name

Volume size 0 G

Thin provisioned

Volume block size 8k

Online

Target group All targets

Initiator group(s) All initiators  
initiators-0  
initiators-1

LU number  0  Auto-assign

2. 名前とサイズを設定し、「適用」をクリックして LUN をストレージプールに追加します。

#### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ FC ポートモードの変更 (CLI)

- FC ポートモードを変更するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
dory:configuration san fc targets> set targets="wwn.2101001B32A11639"
 targets = wwn.2101001B32A11639 (uncommitted)
dory:configuration san fc targets> commit
```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ FC ポートの検出 (CLI)

- FC ポートを検出するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
dory:configuration san fc targets> show
Properties:
 targets = wwn.2100001B32811639,wwn.2101001B32A12239
Targets:
NAME MODE WWN PORT SPEED
target-000 target wwn.2100001B32811639 PCIe 5: Port 1 4 Gbit/s
target-001 initiator wwn.2101001B32A11639 PCIe 5: Port 2 0 Gbit/s
target-002 initiator wwn.2100001B32812239 PCIe 2: Port 1 0 Gbit/s
target-003 target wwn.2101001B32A12239 PCIe 2: Port 2 0 Gbit/s
dory:configuration san fc targets> select target-000
dory:configuration san fc targets target-000> show
Properties:
 wwn = wwn.2100001B32811639
 port = PCIe 5: Port 1
 mode = target
 speed = 4 Gbit/s
 discovered_ports = 6
 link_failure_count = 0
 loss_of_sync_count = 0
 loss_of_signal_count = 0
 protocol_error_count = 0
 invalid_tx_word_count = 0
 invalid_crc_count = 0
Ports:
PORT WWN ALIAS MANUFACTURER
port-000 wwn.2100001B3281A339 longjaw-1 QLogic Corporation
port-001 wwn.2101001B32A1A339 longjaw-2 QLogic Corporation
port-002 wwn.2100001B3281AC39 thicktail-1 QLogic Corporation
port-003 wwn.2101001B32A1AC39 thicktail-2 QLogic Corporation
port-004 wwn.2100001B3281E339 <none> QLogic Corporation
port-005 wwn.2101001B32A1E339 <none> QLogic Corporation
```



### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ FC イニシエータグループの作成 (CLI)

- FC イニシエータグループを作成するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
dory:configuration san fc initiators> create
dory:configuration san fc initiators (uncommitted)> set name=lefteye
dory:configuration san fc initiators (uncommitted)>
 set initiators=wwn.2101001B32A1AC39,wwn.2100001B3281AC39
dory:configuration san fc initiators (uncommitted)> commit
dory:configuration san fc initiators> list
GROUP NAME
group-001 lefteye
 |
 +--> INITIATORS
 wwn.2101001B32A1AC39
 wwn.2100001B3281AC39
```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (CLI)

次の例は、lefty という名前の LUN を作成し、それを fera イニシエータグループに関連付ける方法を示しています。

- LUN を FC イニシエータグループに関連付けるには、次の CLI コマンドを使用します。

```
dory:shares default> lun lefty
dory:shares default/lefty (uncommitted)> set volsize=10
 volsize = 10 (uncommitted)
dory:shares default/lefty (uncommitted)> set initiatorgroup=fera
 initiatorgroup = default (uncommitted)
dory:shares default/lefty (uncommitted)> commit
```

## 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 (CLI)

次のスクリプト例を変更する方法および使用する方法については、[CLI の使用法](#)および[単純な CLI スクリプトとコマンドのバッチ処理](#)を参照してください。

- イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプトを作成するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
script
/*
 * This script creates both aliases for initiators and initiator
 * groups, as specified by the below data structure. In this
 * particular example, there are five initiator groups, each of
 * which is associated with a single host (thicktail, longjaw, etc.),
 * and each initiator group consists of two initiators, each of which
 * is associated with one of the two ports on the FC HBA. (Note that
 * there is nothing in the code that uses this data structure that
 * assumes the number of initiators per group.)
 */
groups = {
 thicktail: {
 'thicktail-1': 'wnn.2100001b3281ac39',
 'thicktail-2': 'wnn.2101001b32a1ac39'
 },
 longjaw: {
 'longjaw-1': 'wnn.2100001b3281a339',
 'longjaw-2': 'wnn.2101001b32a1a339'
 },
 tecopa: {
 'tecopa-1': 'wnn.2100001b3281e339',
 'tecopa-2': 'wnn.2101001b32a1e339'
 }
}
```

```

 },
 spinedace: {
 'spinedace-1': 'wwn.2100001b3281df39',
 'spinedace-2': 'wwn.2101001b32a1df39'
 },
 fera: {
 'fera-1': 'wwn.2100001b32817939',
 'fera-2': 'wwn.2101001b32a17939'
 }
 };
 for (group in groups) {
 initiators = [];
 for (initiator in groups[group]) {
 printf('Adding %s for %s ... ',
 groups[group][initiator], initiator);
 try {
 run('select alias=' + initiator);
 printf('(already exists)\n');
 run('cd ..');
 } catch (err) {
 if (err.code != EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw err;
 run('create');
 set('alias', initiator);
 set('initiator', groups[group][initiator]);
 run('commit');
 printf('done\n');
 }
 run('select alias=' + initiator);
 initiators.push(get('initiator'));
 run('cd ..');
 }
 printf('Creating group for %s ... ', group);
 run('groups');
 try {
 run('select name=' + group);
 printf('(already exists)\n');
 run('cd ..');
 } catch (err) {
 if (err.code != EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw err;
 run('create');
 set('name', group);
 run('set initiators=' + initiators);
 run('commit');
 printf('done\n');
 }
 run('cd ..');
 }
}



```

## 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ 分析ワークシートの作成 (BUI)

イニシエータによる動作を監視するための分析ワークシートを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「分析」画面に移動します。
2. 「統計を追加」用の  追加アイコンをクリックします。すべての統計情報のメニューが表示されます。
3. メニューの「プロトコル」セクションの下にある「iSCSI 操作」 > 「イニシエータ別」を選択します。イニシエータによる現在の動作のグラフが表示されます。
4. より詳細な分析を監視するには、グラフの左側にあるフィールドからイニシエータを選択し、 アイコンをクリックします。詳細な分析のメニューが表示されます。

### 関連トピック

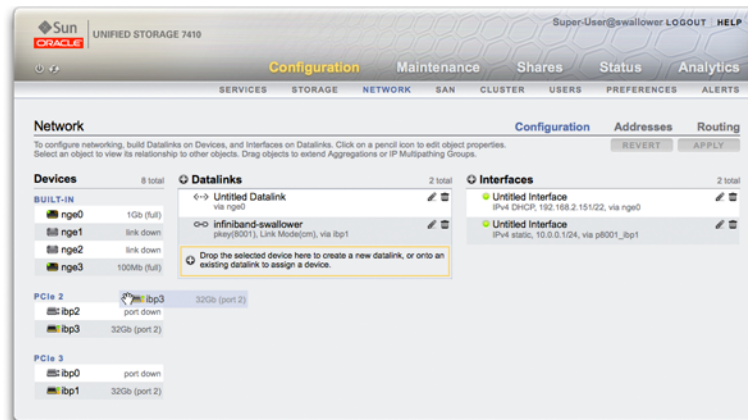
- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ SAN iSER ターゲットの構成

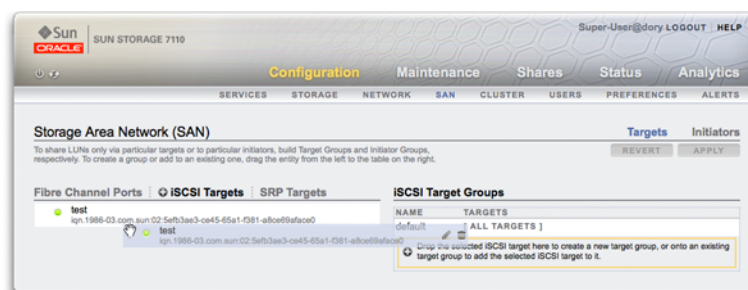
BUI では、iSER ターゲットは「構成」 > 「SAN」画面で iSCSI ターゲットとして管理されます。

1. **ibp(x)** インタフェースを構成するには、目的の **ibp(x)** インタフェース (または **ipmp**) を選択して「データリンク」リストにドラッグし、「構成」 > 「ネットワーク」画面でデータリンクを作成します。

2. そのデータリンクを「インタフェース」リストにドラッグして、新しいインタフェースを作成します。

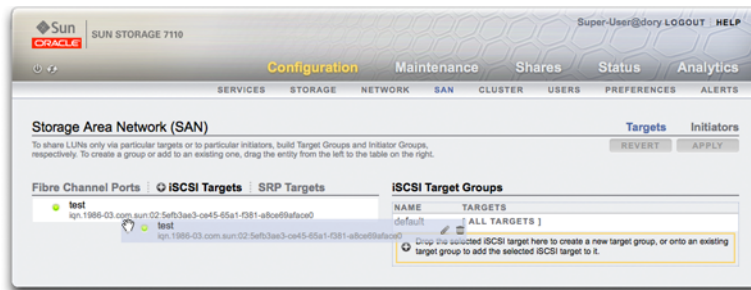


3. iSER ターゲットを作成するには、「構成」 > 「SAN」 ページで「iSCSI ターゲット」リンクをクリックします。
4. 新しい iSER ターゲットを別名で追加するには、⊕ 追加アイコンをクリックします。
5. ターゲットグループを作成するには、今作成したターゲットを「iSCSI ターゲットグループ」リストにドラッグします。




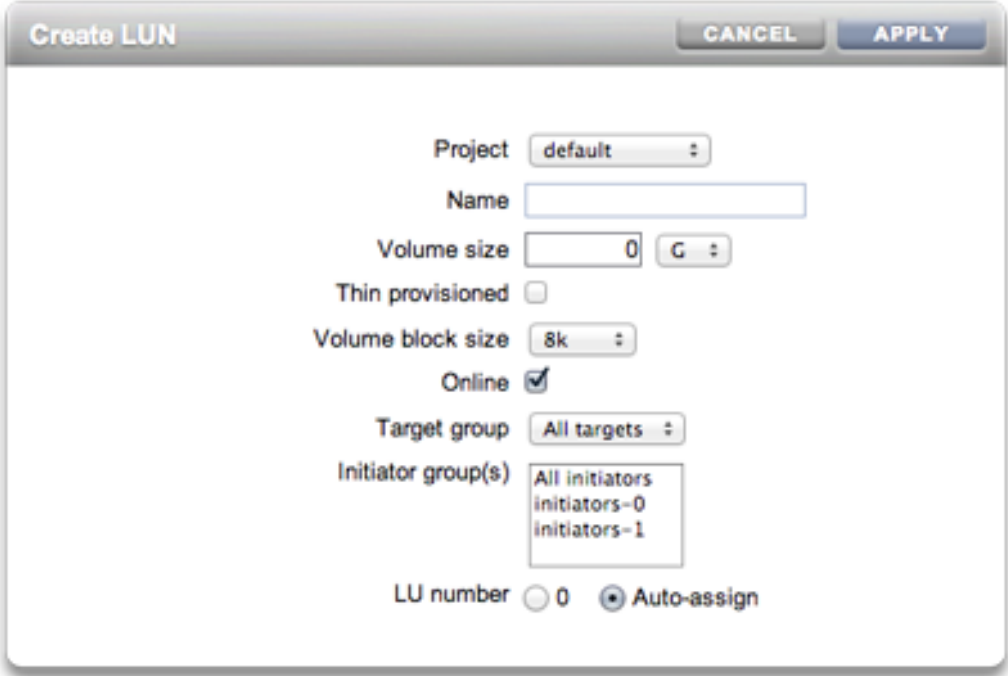
6. イニシエータを作成するにはには、「イニシエータ」リンクをクリックしてから、「iSCSI イニシエータ」リンクをクリックします。
7. 新しいイニシエータを追加するには、⊕ 追加アイコンをクリックします。

8. イニシエータ IQN と別名を入力し、「OK」をクリックします。イニシエータグループの作成はオプションですが、グループを作成しないと、ターゲットに関連付けられた LUN がすべてのイニシエータから使用可能になります。
9. グループを作成するには、イニシエータを「iSCSI イニシエータグループ」リストにドラッグします。



10. LUN を作成するには、「シェア」ページで「LUN」をクリックします。

11.  追加アイコンをクリックし、「ターゲットグループ」および「イニシエータグループ」メニューを使用して、新しい LUN をすでに作成したターゲットまたはイニシエータグループに関連付けます。



The image shows a 'Create LUN' dialog box with the following fields and options:

- Project: default
- Name: (empty text box)
- Volume size: 0 G
- Thin provisioned:
- Volume block size: 8k
- Online:
- Target group: All targets
- Initiator group(s): All initiators, initiators-0, initiators-1
- LU number:  0  Auto-assign

#### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ 自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)

- 自動生成の IQN を持つ iSCSI ターゲットを追加するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
ahi:configuration san iscsi targets> create
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set alias="Target 0"
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set auth=none
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set interfaces=igb1
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> commit
ahi:configuration san iscsi targets> list
TARGET ALIAS
target-000 Target 0
 |
 +--> IQN
 iqn.1986-03.com.sun:02:daf0161f-9f5d-e01a-b5c5-e1efa9578416
```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ 特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)

- 特定の IQN を持ち RADIUS 認証を使用する iSCSI ターゲットを追加するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
ahi:configuration san iscsi targets> create
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set alias="Target 1"
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)>
 set iqn=iqn.2001-02.com.acme:12345
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set auth=radius
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> set interfaces=igb1
ahi:configuration san iscsi targets target (uncommitted)> commit
ahi:configuration san iscsi targets> list
TARGET ALIAS
target-000 Target 0
 |
 +--> IQN
 iqn.1986-03.com.sun:02:daf0161f-9f5d-e01a-b5c5-e1efa9578416
target-001 Target 1
```



```

|
+--> IQN
 iqn.2001-02.com.acme:12345

```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 (CLI)

- CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータを追加するには、次の CLI コマンドを使用します。

```

ahi:configuration san iscsi initiators> create
ahi:configuration san iscsi initiators initiator (uncommitted)>
 set initiator=iqn.2001-02.com.acme:initiator12345
ahi:configuration san iscsi initiators initiator (uncommitted)> set alias="Init 0"
ahi:configuration san iscsi initiators initiator (uncommitted)>
 set chapuser=thisismychapuser
ahi:configuration san iscsi initiators initiator (uncommitted)>
 set chapsecret=123456789012abc
ahi:configuration san iscsi initiators initiator (uncommitted)> commit
ahi:configuration san iscsi initiators> list
NAME ALIAS
initiator-000 Init 0
|
+--> INITIATOR
 iqn.2001-02.com.acme:initiator12345

```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ iSCSI ターゲットグループの追加 (CLI)

- iSCSI ターゲットグループを追加するには、次の CLI コマンドを使用します。

```

ahi:configuration san iscsi targets groups> create
ahi:configuration san iscsi targets group (uncommitted)> set name=tg0
ahi:configuration san iscsi targets group (uncommitted)>
 set targets=iqn.2001-02.com.acme:12345,
 iqn.1986-03.com.sun:02:daf0161f-9f5d-e01a-b5c5-e1efa9578416
ahi:configuration san iscsi targets group (uncommitted)> commit
ahi:configuration san iscsi targets groups> list
GROUP NAME
group-000 tg0
 |
 +--> TARGETS
 iqn.2001-02.com.acme:12345
 iqn.1986-03.com.sun:02:daf0161f-9f5d-e01a-b5c5-e1efa9578416

```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ iSCSI イニシエータグループの追加 (CLI)

- iSCSI イニシエータグループを追加するには、次の CLI コマンドを使用します。

```

ahi:configuration san iscsi initiators groups> create
ahi:configuration san iscsi initiators group (uncommitted)> set name=ig0
ahi:configuration san iscsi initiators group (uncommitted)>
 set initiators=iqn.2001-02.com.acme:initiator12345
ahi:configuration san iscsi initiators group (uncommitted)> commit
ahi:configuration san iscsi initiators groups> list
GROUP NAME
group-000 ig0
 |
 +--> INITIATORS
 iqn.2001-02.com.acme:initiator12345

```




### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)

- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)
- [SAN の用語](#)

## ▼ SRP ターゲットの構成 (BUI)

ここでは、SRP ターゲットを構成するための手順について説明します。

1. HCA ポートを IB インタフェースに接続します。
2. アプライアンスによってターゲットが自動的に検出されます。
3. ターゲットグループを作成するには、「構成」 > 「SAN」画面に移動します。
4. 「ターゲット」リンクをクリックしてから、SRP ターゲットをクリックします。
5. SRP ターゲットのページが表示されます。
6. ターゲットグループを作成するには、 移動アイコンを使用してターゲットを「ターゲットグループ」リストにドラッグします。
7. 「適用」をクリックします。
8. (オプション) 「イニシエータ」画面でイニシエータとイニシエータグループを作成するには、 アイコンをクリックし、イニシエータから GUID を収集し、それに名前を割り当ててから、イニシエータグループにドラッグします。
9. LUN を作成し、それを前の手順で作成した SRP ターゲットとイニシエータに関連付けるには、「シェア」画面に移動します。
10. 「LUN」リンクをクリックしてから、LUN  アイコンをクリックします。「LUN を作成」ダイアログにある「ターゲットグループ」および「イニシエータグループ」メニューを使用して、LUN に関連付ける SRP グループを選択します。

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)

- [SAN の用語](#)

## ▼ SRP ターゲットの構成 (CLI)

次の例では、CLI の configuration san targets srp groups コンテキストを使用して、targetSRPgroup という SRP ターゲットグループを作成する方法を示します。

- SRP ターゲットを構成するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
swallower:configuration san targets srp groups> create
swallower:configuration san targets srp group (uncommitted)> set name=targetSRPgroup
 name = targetSRPgroup (uncommitted)
swallower:configuration san targets srp group (uncommitted)>
set targets=eui.0002C903000489A4
 targets = eui.0002C903000489A4 (uncommitted)
swallower:configuration san targets srp group (uncommitted)> commit
swallower:configuration san targets srp groups> list
GROUP NAME
group-000 targetSRPgroup
 |
 +--> TARGETS
 eui.0002C903000489A4
```

### 例 1 CLI を使用したターゲット SRP グループに関連付けられた LUN の作成

次の例では、CLI shares CLI コンテキストを使用し、LUN を作成して targetSRPgroup に関連付ける方法を示します。

```
swallower:shares default> lun mylun
swallower:shares default/mylun (uncommitted)> set targetgroup=targetSRPgroup
 targetgroup = targetSRPgroup (uncommitted)
swallower:shares default/mylun (uncommitted)> set volsize=10
 volsize = 10 (uncommitted)
swallower:shares default/mylun (uncommitted)> commit
swallower:shares default> list
Filesystems:
NAME SIZE MOUNTPOINT
test 38K /export/test
LUNs:
NAME SIZE GUID
mylun 10G 600144F0E9D19FFB00004B82DF490001
```

### 関連トピック

- [SAN の理解](#)
- [SAN ファイバチャネル構成](#)
- [SAN iSCSI 構成](#)
- [SAN iSER ターゲットの構成](#)
- [SAN SRP 構成](#)

- [SAN の用語](#)

## SAN の理解

これらの3つのコンポーネントは、ネットワーク上で使用されているプロトコルには関係なく同じです。場合によっては、ネットワークがイニシエータとターゲットの間のケーブルであることもありますが、ほとんどの場合は、何らかの種類の切り換えが使用されます。

ターゲットとイニシエータは、プロトコルによって構成されます。詳細は、特定のプロトコルに関するドキュメント ([151 ページの「SAN ファイバチャネル構成」](#)、「[iSCSI](#)」、または [282 ページの「SRP 構成」](#)) を参照してください。

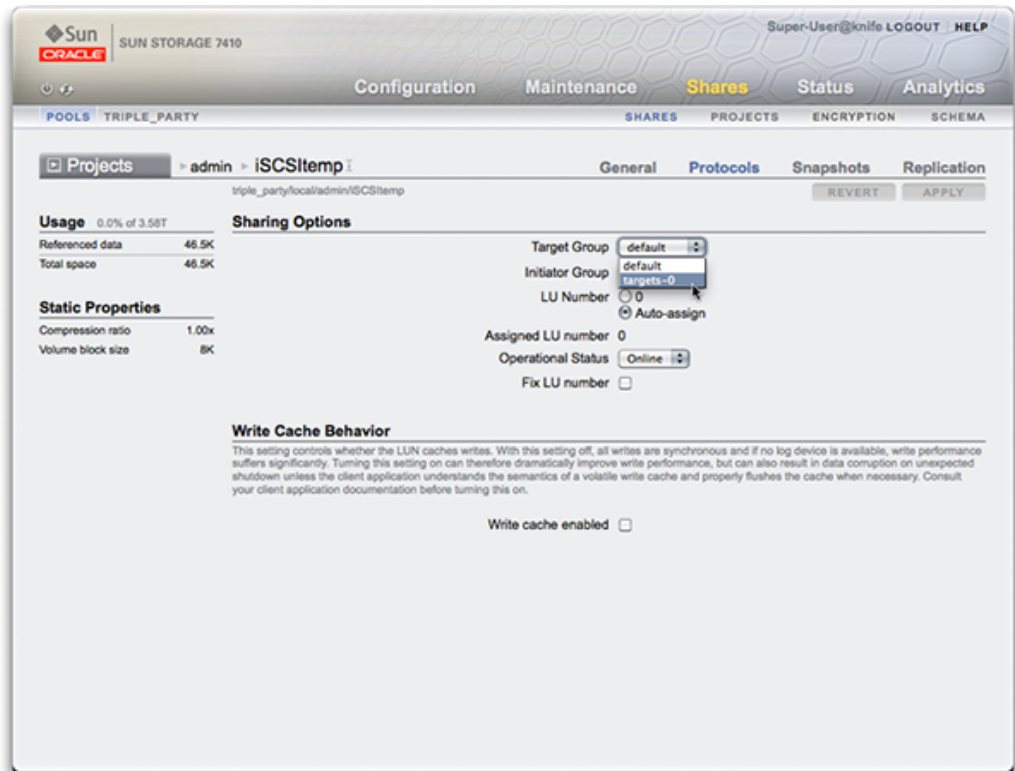
ターゲットグループとイニシエータグループによって、LUN に関連付けることができるターゲットとイニシエータのセットが定義されます。ターゲットグループに関連付けられた LUN は、そのグループ内のターゲットからのみ表示できます。LUN がターゲットグループに明示的に関連付けられていない場合は、デフォルトのターゲットグループ内にあり、プロトコルには関係なく、すべてのターゲットからアクセスできます。同様に、LUN を表示できるのは、それが所属するグループ内のイニシエータだけです。LUN がイニシエータグループに明示的に関連付けられていない場合は、デフォルトのイニシエータグループ内にあり、すべてのイニシエータからアクセスできます。デフォルトのイニシエータグループの使用は評価の目的には有効な場合がありますが、不要なイニシエータまたは競合するイニシエータに LUN が公開される可能性があるため、その使用はお勧めできません。

イニシエータが複数のグループに所属する場合に起こり得る LUN の競合を回避するため、グループを LUN に関連付ける前に、すべてのグループ内のイニシエータを構成してください。

ターゲットを構成するには、「構成」>「SAN BUI」ページに移動し、「ファイバチャネル」、「iSCSI」、および「SRP」を使用してナビゲートし、「ポート」、「イニシエータ」、および「ターゲットグループ」コントロールを構成します。

LUN を関連付けるには、「シェア」>「シェア」>「プロトコル」ページに移動し、「ターゲットグループ」および「イニシエータグループ」コントロールを構成します。

図 12 LUN を関連付ける



CLI の `configuration san` コンテキストを使用して、プロトコルタイプごとにターゲットとイニシエータに対する操作を行います。次に、`shares` CLI コンテキストを使用して LUN を作成し、それらをターゲットグループとイニシエータグループに関連付けます。

### 関連トピック

- FC ポートモードの構成 (BUI)
- FC ポートの検出 (BUI)
- FC イニシエータグループの作成 (BUI)
- LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (BUI)
- FC ポートモードの変更 (CLI)
- FC ポートの検出 (CLI)

- FC イニシエータグループの作成 (CLI)
- LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (CLI)
- イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 (CLI)
- SAN iSCSI イニシエータの構成
- 分析ワークシートの作成 (BUI)
- 自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- 特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 (CLI)
- iSCSI ターゲットグループの追加 (CLI)
- iSCSI イニシエータグループの追加 (CLI)
- SRP ターゲットの構成 (BUI)
- SRP ターゲットの構成 (CLI)

## SAN ファイバチャネル構成

ファイバチャネル (FC) は、ほぼ SCSI のためのトランスポートとしてのみ使用されるギガビット速度のネットワークテクノロジーです。FC は、アプライアンスでサポートされるいくつかのブロックプロトコルのうちの 1 つです。FC を経由して LUN をシェアするには、アプライアンスにオプションの FC カードが 1 枚以上装着されている必要があります。

デフォルトでは、すべての FC ポートがターゲットモードになるように構成されます。アプライアンスを使用してバックアップ用のテープ SAN に接続する場合は、1 つ以上のポートをイニシエータモードで構成する必要があります。ポートをイニシエータモードで構成するには、アプライアンスをリセットする必要があります。複数のポートを、同時にイニシエータモードで構成できます。

各 FC ポートには WWN (World Wide Name) が割り当てられます。また、ほかのブロックプロトコルと同様に、FC ターゲットを SAN のターゲットグループとイニシエータグループにグループ化し、ポートの帯域幅を特定の LUN または LUN のグループ専用に割り当てることができます。FC ポートがターゲットとして構成されたあとは、リモートで検出されたポートを検証したり、確認したりできます。

Oracle ZFS Storage Appliance を使用した FC SAN ブートソリューションの詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/fbsanboot-365291.html> にある *Oracle Sun ZFS Storage Appliance* を使用した FC SAN ブートの実装に関するホワイトペーパーを参照してください。

クラスタでは、イニシエータには各 LUN への 2 つのパス (またはパスのセット) があります。1 つのパス (またはパスのセット) は、その LUN に関連付けられたストレージをインポートしたヘッドになり、もう一方のパス (またはパスのセット) は、そのヘッ

ドのクラスタ化されたピアになります。最初のパス (またはパスのセット) はアクティブであり、2 番目のパス (またはパスのセット) はスタンバイです。テイクオーバーが発生した場合は、アクティブパスが使用不可になり、スタンバイパスが (しばらくして) アクティブに移行されたあと、入出力が続行されます。このマルチパスへのアプローチは、非対称論理ユニットアクセス (ALUA) と呼ばれます。これを ALUA 対応イニシエータと組み合わせると、クラスタテイクオーバーをより高レベルのアプリケーションに対して透過的にすることができます。

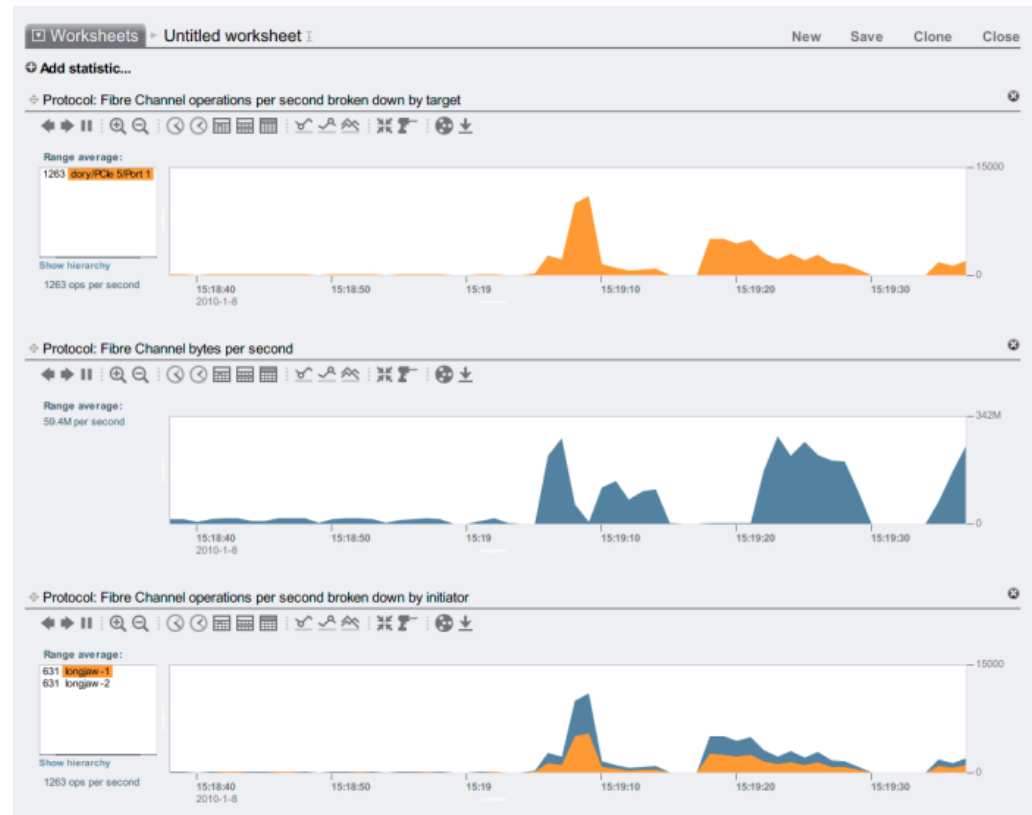
イニシエータは、それぞれの WWN で識別されます。ほかのブロックプロトコルと同様に、イニシエータに対して別名を作成できます。FC イニシエータに対する別名を作成しやすくするために、検出されたポートの WWN から WWN を選択できます。また、ほかのブロックプロトコルと同様に、イニシエータをグループに収集できます。LUN が特定のイニシエータグループに関連付けられている場合、その LUN は、そのグループ内のイニシエータからのみ表示できます。ほとんどの FC SAN では、LUN は常に、その LUN が作成されたシステムに対応するイニシエータグループに関連付けられています。

このアプライアンスは、ALUA に準拠したアレイです。ALUA 環境で FC イニシエータを正しく構成するには ALUA 対応ドライバが必要であり、さらにイニシエータ固有のチューニングが必要になる可能性があります。詳細は、Oracle ZFS Storage Appliance: クライアントマルチパスを設定する方法 (Doc ID 1628999.1) を参照してください。

FC のパフォーマンスは分析を通して監視できます。その場合、操作またはスループットをイニシエータ、ターゲット、または LUN ごとに分解できます。



図 13 FC のパフォーマンス



また、操作の場合は、オフセット、待機時間、サイズ、および SCSI コマンドごとにも分解できます。これにより、FC 操作の内容だけでなく、その方法や理由についても理解できます。

このアプライアンスは、各ヘッド上の LUN を提供するためにリソースのグローバルなセットを利用するように設計されています。アプライアンス内の FC ポートは多数の並行要求を処理できるため、一般には、クライアント上の待ち行列の深さを制限することは必要ありません。そうであったとしても、これらの待ち行列がオーバーランして、SCSI トランスポートエラーが発生する可能性がわずかに存在します。このような待ち行列のオーバーランは多くの場合、次の状態の 1 つ以上に関連しています。

- フロントエンド上の多重定義されたポート。1 つの FC ポートに関連付けられたホストが多すぎるか、または 1 つの FC ポートを経由してアクセスされる LUN が多すぎる場合

- 縮退したアプライアンス動作モード。アクティブ/アクティブのクラスタ構成になるように設計されている環境でのクラスタテイクオーバーなど

待ち行列のオーバーランの可能性はわずかですが、待ち行列の深さをクライアント単位の積極的に制限すれば、この可能性を完全に解消できます。待ち行列の適切な深さの制限を決定するには、ターゲットポートの数を求め、それにポートあたりの並行コマンドの最大数 (2048) を掛け、さらにその積をプロビジョニングされる LUN の数で割るべきです。縮退した動作モードに対応するには、クラスタピアにまたがる LUN の数を合計して LUN の数を決定するべきですが、ターゲットポートの数には 2 つのクラスタピアのうちの少ない方を取ります。たとえば、アクティブ/アクティブ構成の 7420 デュアルヘッドクラスタで、1 つのヘッドが 2 つの FC ポートと 100 個の LUN を備え、もう一方のヘッドが 4 つの FC ポートと 28 個の LUN を備えている場合は、最悪の事態を考慮した待ち行列の最大の深さを 2 つのポートに 2048 コマンドを掛けて 100 + 28 の LUN で割った値、つまり LUN あたり 32 コマンドにするべきです。

待ち行列の最大の深さのチューニングはイニシエータに固有の作業ですが、Solaris では、大域変数 `ssd_max_throttle` を調整することによってこれが実現されます。

光学部品の破損や変形、不安定なケーブル配線などのリンクレベルの問題をトラブルシューティングするには、FC ポートごとのエラー統計情報を調べます。いずれかの数値が 0 から大幅に外れているか、または増加している場合は、リンクレベルの問題が発生していて、リンクレベルの診断の実行が必要なことを示している可能性があります。

### 関連トピック

- [FC ポートモードの構成 \(BUI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(BUI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(BUI\)](#)
- [LUN と FC イニシエータグループとの関連付け \(BUI\)](#)
- [FC ポートモードの変更 \(CLI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(CLI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(CLI\)](#)
- [LUN と FC イニシエータグループとの関連付け \(CLI\)](#)
- [イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 \(CLI\)](#)
- [SAN iSCSI イニシエータの構成](#)
- [分析ワークシートの作成 \(BUI\)](#)
- [自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 \(CLI\)](#)
- [iSCSI ターゲットグループの追加 \(CLI\)](#)
- [iSCSI イニシエータグループの追加 \(CLI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(BUI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(CLI\)](#)

## SAN iSCSI 構成

インターネット SCSI は、SCSI ベースのストレージをシェアするためにアプライアンスでサポートされるいくつかのブロックプロトコルのうちの 1 つです。

iSCSI プロトコルを使用している場合、ターゲットポータルは、イニシエータがターゲットに接続するときを使用できる IP アドレスと TCP ポート番号の一意の組み合わせを指します。

iSCSI プロトコルを使用している場合、ターゲットポータルグループは、ターゲットポータルのコレクションです。ターゲットポータルグループは透過的に管理されます。各ネットワークインタフェースには、そのインタフェースのアクティブなアドレスを含む、対応するターゲットポータルグループがあります。ターゲットをインタフェースにバインドすると、その iSCSI ターゲットが、そのインタフェースに関連付けられたポータルグループを使用して通知されます。

---

**注記** - セッションあたりの複数接続はサポートされていません。

---



IQN (iSCSI 修飾名) は、iSCSI ネットワーク内のデバイスの一意の識別子です。iSCSI では、IQN に対して `iqn.date.authority:uniqueid` の形式が使用されます。たとえば、アプライアンスは、iSCSI ターゲットの 1 つを識別するために `IQN: iqn.1986-03.com.sun:02:c7824a5b-f3ea-6038-c79d-ca443337d92c` を使用する可能性があります。この名前は、これが 1986 年 3 月に登録された、ある企業によって構築された iSCSI デバイスであることを示します。名前の `authority` は、単にその企業の DNS 名を逆にしただけのものです (この場合は、「com.sun」)。それ以降のすべては、Oracle がそのターゲットを識別するために使用している一意の ID です。

**表 28** iSCSI ターゲットのプロパティ

| ターゲットのプロパティ   | 説明                                          |
|---------------|---------------------------------------------|
| ターゲット IQN     | このターゲットの IQN。IQN は手動で指定することも、自動生成することもできます。 |
| 別名            | このターゲットの人間が読める形式のニックネーム。                    |
| 認証モード         | 「なし」、「CHAP」、または「RADIUS」のいずれか。               |
| CHAP 名        | CHAP 認証が使用されている場合は、CHAP ユーザー名。              |
| CHAP シークレット   | CHAP 認証が使用されている場合は、CHAP シークレット。             |
| ネットワークインタフェース | ターゲットポータルがこのターゲットをエクスポートするために使用されるインタフェース。  |

これらのプロパティに加えて、BUI では、ターゲットがオンラインまたはオフラインのどちらであるかが示されます。

表 29 ターゲットのステータスアイコン

| アイコン                                                                              | 説明          |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------|
|  | ターゲットはオンライン |
|  | ターゲットはオフライン |

クラスタ化されたプラットフォームでは、そのクラスタノード上に少なくとも 1 つのアクティブインターフェイスが存在するターゲットはオンラインになります。ターゲットにインターフェイスを割り当てる場合は注意してください。ターゲットは、不連続なヘッドノード上のポータルグループを使用するように構成されている可能性があります。その状況では、ターゲットは両方のヘッド上でオンラインになりますが、各ヘッドノードによって所有されているストレージに応じて異なる LUN をエクスポートします。ネットワークインターフェイスは、テイクオーバーやフェイルバックまたは所有者変更の一部としてクラスタヘッド間で移行するため、iSCSI ターゲットは、対応するネットワークインターフェイスがインポートおよびエクスポートされるに従ってオンラインおよびオフラインに移動します。

IPMP インターフェイスにバインドされたターゲットは、その IPMP グループのアドレスを介してのみ通知されます。そのターゲットに、そのグループのテストアドレスを介して到達することはできません。LACP アグリゲーションの上に構築されたインターフェイスにバインドされたターゲットは、そのアグリゲーションのアドレスを使用します。LACP アグリゲーションが IPMP グループに追加された場合は、そのアドレスが IPMP テストアドレスになるため、ターゲットはそのアグリゲーションのインターフェイスを使用できなくなります。

### 関連トピック

- [FC ポートモードの構成 \(BUI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(BUI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(BUI\)](#)
- [LUN と FC イニシエータグループとの関連付け \(BUI\)](#)
- [FC ポートモードの変更 \(CLI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(CLI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(CLI\)](#)
- [LUN と FC イニシエータグループとの関連付け \(CLI\)](#)
- [イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 \(CLI\)](#)
- [SAN iSCSI イニシエータの構成](#)
- [分析ワークシートの作成 \(BUI\)](#)
- [自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 \(CLI\)](#)
- [iSCSI ターゲットグループの追加 \(CLI\)](#)

- [iSCSI イニシエータグループの追加 \(CLI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(BUI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(CLI\)](#)

## SAN iSCSI イニシエータの構成

iSCSI イニシエータには、次の構成可能なプロパティがあります。

表 30 SAN iSCSI イニシエータのプロパティ

| プロパティ       | 説明                              |
|-------------|---------------------------------|
| イニシエータ IQN  | このイニシエータの IQN。                  |
| 別名          | このイニシエータの人間が読める形式のニックネーム。       |
| CHAP を使用    | CHAP 認証を有効または無効にします             |
| CHAP 名      | CHAP 認証が使用されている場合は、CHAP ユーザー名。  |
| CHAP シークレット | CHAP 認証が使用されている場合は、CHAP シークレット。 |

iSCSI クライアント構成を計画する場合は、次の情報が必要になります。

- どのイニシエータ (およびその IQN) が SAN にアクセスするか。
- CHAP 認証の使用を計画している場合、各イニシエータはどの CHAP 資格を使用するか。
- iSCSI ディスク (LUN) はいくつ必要で、どれだけの大きさにするべきか。
- LUN を複数のイニシエータ間でシェアする必要があるか。

アプライアンスが RADIUS を使用して CHAP 認証を実行できるようにするには、次の情報が一致する必要があります。

- アプライアンスは、RADIUS サーバーのアドレスと、この RADIUS サーバーと通信するとき使用するシークレットを指定する必要があります
- RADIUS サーバー (たとえば、クライアントファイル内) には、このアプライアンスのアドレスを提供し、かつ上と同じシークレットを指定するエントリが含まれている必要があります
- RADIUS サーバー (たとえば、ユーザーファイル内) には、CHAP 名を提供し、かつ各イニシエータの CHAP シークレットに一致するエントリが含まれている必要があります
- イニシエータが CHAP 名として自身の IQN 名を使用する場合 (推奨される構成) は、アプライアンスに、イニシエータボックスごとに個別のイニシエータエントリは必要ありません。RADIUS サーバーは、すべての認証手順を実行できます。

- インシエータが個別の CHAP 名を使用する場合は、アプライアンスに、IQN 名から CHAP 名へのマッピングを指定する、そのインシエータのためのインシエータエントリが存在する必要があります。このインシエータエントリで、そのインシエータの CHAP シークレットを指定する必要はありません。

iSCSI の一般的な構成の誤りのトラブルシューティングに関するヒントについては、[iSCSI](#)を参照してください。

iSCSI のパフォーマンスは「分析」を通して監視できます。その場合、操作またはスループットをインシエータ、ターゲット、または LUN ごとに分解できます。

### 関連トピック

- [FC ポートモードの構成 \(BUI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(BUI\)](#)
- [FC インシエータグループの作成 \(BUI\)](#)
- [LUN と FC インシエータグループとの関連付け \(BUI\)](#)
- [FC ポートモードの変更 \(CLI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(CLI\)](#)
- [FC インシエータグループの作成 \(CLI\)](#)
- [LUN と FC インシエータグループとの関連付け \(CLI\)](#)
- [インシエータとインシエータグループの別名のスクリプト作成 \(CLI\)](#)
- [SAN iSCSI インシエータの構成](#)
- [分析ワークシートの作成 \(BUI\)](#)
- [自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 \(CLI\)](#)
- [CHAP 認証を使用する iSCSI インシエータの追加 \(CLI\)](#)
- [iSCSI ターゲットグループの追加 \(CLI\)](#)
- [iSCSI インシエータグループの追加 \(CLI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(BUI\)](#)
- [SRP ターゲットの構成 \(CLI\)](#)

## SAN SRP 構成

SCSI RDMA プロトコルは、RDMA サービスを提供するネットワーク (つまり、InfiniBand) を経由して SCSI ベースのストレージをシェアするためにアプライアンスでサポートされるプロトコルです。



SRP ポートは、IPoIB や RDMA などのほかの IB ポートサービスとシェアされます。SRP サービスは、ターゲットモードでのみ動作できます。SRP ターゲットには、次の構成可能なプロパティがあります。

表 31 SRP ターゲットのプロパティ

| プロパティ     | 説明                                                                                                    |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ターゲット EUI | このターゲットの EUI (Extended Unique Identifier)。EUI はシステムによって自動的に割り当てられ、SRP ポートサービスが実行されている HCA GUID と同じです。 |
| 別名        | このターゲットの人間が読める形式のニックネーム。                                                                              |

これらのプロパティに加えて、BUI では、ターゲットがオンラインまたはオフラインのどちらであるかが示されます。

表 32 SRP ターゲットのステータスアイコン

| アイコン                                                                              | 説明          |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------|
|  | ターゲットはオンライン |
|  | ターゲットはオフライン |

クラスタ化されたプラットフォームでは、可用性の高い (マルチパス) 構成にするために、ピアターゲットは同じターゲットグループに構成する必要があります。SRP のマルチパス I/O は、イニシエータ側の構成オプションです。

SRP イニシエータには、次の構成可能なプロパティがあります。

表 33 SRP イニシエータのプロパティ

| プロパティ      | 説明                        |
|------------|---------------------------|
| イニシエータ EUI | このイニシエータの EUI。            |
| 別名         | このイニシエータの人間が読める形式のニックネーム。 |

SRP のパフォーマンスは「分析」を通して監視できます。その場合、操作またはスループットをイニシエータまたはターゲットごとに分解できます。

### 関連トピック

- [FC ポートモードの構成 \(BUI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(BUI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(BUI\)](#)
- [LUN と FC イニシエータグループとの関連付け \(BUI\)](#)
- [FC ポートモードの変更 \(CLI\)](#)
- [FC ポートの検出 \(CLI\)](#)
- [FC イニシエータグループの作成 \(CLI\)](#)

- LUN と FC イニシエータグループとの関連付け (CLI)
- イニシエータとイニシエータグループの別名のスクリプト作成 (CLI)
- SAN iSCSI イニシエータの構成
- 分析ワークシートの作成 (BUI)
- 自動生成された IQN による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- 特定の IQN と RADIUS 認証による iSCSI ターゲットの追加 (CLI)
- CHAP 認証を使用する iSCSI イニシエータの追加 (CLI)
- iSCSI ターゲットグループの追加 (CLI)
- iSCSI イニシエータグループの追加 (CLI)
- SRP ターゲットの構成 (BUI)
- SRP ターゲットの構成 (CLI)

## SAN の用語

アプライアンスを SAN 上で動作するように構成するには、次のいくつかの基本的な SAN の用語を理解しておく必要があります。

表 34 SAN の用語

| 用語          | 説明                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SCSI ターゲット  | SCSI ターゲットは、イニシエータからの SCSI コマンドと入出力リクエストを処理するためのサービスを提供するストレージシステムエンドポイントです。SCSI ターゲットはストレージシステムの管理者によって作成され、一意のアドレス指定方法によって識別されます。構成済みの SCSI ターゲットは、0 個以上の論理ユニットで構成されています。                                                             |
| SCSI イニシエータ | SCSI イニシエータは、SCSI コマンドと入出力リクエストを送信することによって SCSI セッションを開始できるアプリケーションまたは運用システムエンドポイントです。SCSI イニシエータもまた、一意のアドレス指定方法によって識別されます (「SCSI ターゲット」を参照)。                                                                                           |
| 論理ユニット      | 論理ユニットは、ストレージシステム内のコンポーネントを説明するために使用される用語です。一意に番号付けされ、LUN (Logical Unit Number) と呼ばれる番号が作成されます。高度な構成が可能なストレージシステムには、多数の LUN を含めることができます。これらの LUN を 1 つ以上の SCSI ターゲットに関連付けることにより、1 つ以上の SCSI イニシエータからアクセスできるデバイスである一意の SCSI デバイスが形成されます。 |
| iSCSI       | インターネット SCSI。IP ネットワークを経由して SCSI ベースのストレージをシェアするためのプロトコル。アプライアンスは SCSI-3 Persistent Reservations 仕様をサポートします。                                                                                                                            |



| 用語            | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| iSER          | RDMA のための iSCSI 拡張機能。RDMA サービスを提供するネットワーク (つまり、InfiniBand) を経由して iSCSI プロトコルをマップするプロトコル。iSER プロトコルは、正しく構成された IB ハードウェアの存在に基づいて、iSCSI サブシステムによって透過的に選択されます。CLI および BUI では、iSER に対応したすべてのコンポーネント (ターゲットとイニシエータ) が iSCSI コンポーネントとして管理されます。                                                                                                                                                                                            |
| FC            | ファイバチャネル。光ファイバケーブル、FC スイッチ、および HBA から成る SAN (Storage Area Network) を経由して SCSI ベースのストレージをシェアするためのプロトコル。アプライアンスは 4G バイトおよび 8G バイトの FC-AL (Fibre Channel Arbitrated Loop) トポロジをサポートします。                                                                                                                                                                                                                                               |
| SRP           | SCSI RDMA プロトコル。RDMA サービスを提供するネットワーク (つまり、InfiniBand) を経由して SCSI ベースのストレージをシェアするためのプロトコル。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| IQN           | iSCSI 修飾名。iSCSI ネットワーク内のデバイスの一意の識別子。iSCSI では、IQN に対して <code>iqn.date.authority:uniqueid</code> の形式が使用されます。たとえば、アプライアンスは、iSCSI ターゲットの 1 つを識別するために <code>IQN: iqn.1986-03.com.sun:02:c7824a5b-f3ea-6038-c79d-ca443337d92c</code> を使用する可能性があります。この名前は、これが 1986 年 3 月に登録された、ある企業によって構築された iSCSI デバイスであることを示します。名前の <code>authority</code> は、単にその企業の DNS 名を逆にしただけのものです (この場合は、「com.sun」)。それ以降のすべては、Sun がそのターゲットを識別するために使用している一意の ID です。 |
| ターゲットポータル     | iSCSI プロトコルを使用している場合、ターゲットポータルは、イニシエータがターゲットに接続するときに使用できる IP アドレスと TCP ポート番号の一意の組み合わせを指します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| ターゲットポータルグループ | iSCSI プロトコルを使用している場合、ターゲットポータルグループは、ターゲットポータルのコレクションです。ターゲットポータルグループは透過的に管理されます。各ネットワークインタフェースには、そのインタフェースのアクティブなアドレスを含む、対応するターゲットポータルグループがあります。ターゲットをインタフェースにバインドすると、その iSCSI ターゲットが、そのインタフェースに関連付けられたポータルグループを使用して通知されます。                                                                                                                                                                                                        |
| CHAP          | チャレンジハンドシェイク認証プロトコル。イニシエータに対するターゲット、ターゲットに対するイニシエータ、またはその両方を認証できるセキュリティプロトコル。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |

| 用語         | 説明                                                                                                                                                |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| RADIUS     | ストレージノードに代わって、集中管理されたサーバーを使用して CHAP 認証を実行するためのシステム。                                                                                               |
| ターゲットグループ  | ターゲットのセット。LUN は、1つの特定のターゲットグループ内のすべてのターゲットにエクスポートされます。                                                                                            |
| イニシエータグループ | イニシエータのセット。イニシエータグループが LUN に関連付けられている場合は、そのグループからのイニシエータだけがその LUN にアクセスできます。                                                                      |
| ターゲット      | イニシエータからの SCSI コマンドと入出力リクエストを処理するためのサービスを提供するストレージシステムエンドポイント。ターゲットはストレージシステム管理者によって作成され、一意のアドレス指定方法によって識別されます。構成済みのターゲットは、0 個以上の論理ユニットで構成されています。 |
| イニシエータ     | SCSI コマンドと入出力リクエストを送信することによって SCSI セッションを開始できるアプリケーションまたは運用システムエンドポイント。イニシエータもまた、一意のアドレス指定方法によって識別されます。                                           |

各 LUN には、ボリュームのエクスポート方法を制御するためのいくつかのプロパティがあります。詳細は、[プロトコル](#)を参照してください。

## ユーザーの構成

このセクションでは、アプライアンスのユーザー、ユーザーに付与された承認を管理するロール、および BUI または CLI を使用してこれらをシステムに追加する方法について説明します。

ユーザーとロールを構成するには、次のセクションを使用してください。


- 管理者またはユーザーの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーパスワードの変更 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの承認の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールからの承認の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ダッシュボードのみを表示できるユーザーの追加 [BUI](#)

ユーザーとロールを理解するには、次のセクションを参照してください。

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ 管理者またはユーザーの追加 (BUI)

管理者ロールとともに、または管理者ロールなしでユーザーを作成するには、次の手順を使用します。ユーザータイプの説明については、[177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)を参照してください。

1. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
2. 「ユーザー」 の横にある追加アイコン  をクリックします。
3. ドロップダウンメニューから適切なタイプのユーザーを選択します。

**Properties**

This is an appliance administrator managed by a directory service.

Type  Directory

Username

User ID

Full Name

Password

Confirm

Require session annotation

Kiosk user

Kiosk screen

---

**Roles** ⌵ **Exceptions**

1 Total

| NAME ▲                                    | DESCRIPTION          |
|-------------------------------------------|----------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> basic | Basic administration |

4. 必要なプロパティを入力します。

5. (オプション) ローカルユーザーとディレクトリユーザーにロールを割り当てるには、適切なロールのチェックボックスにチェックマークを付けます。
6. (オプション) ローカルユーザーとディレクトリユーザーの例外を追加するには:
  - a. 「例外」をクリックします。
  - b. 追加する例外のチェックボックスにチェックマークを付けます。
  - c. 「例外」セクションで「追加」をクリックします。
7. ダイアログボックスの上部にある「追加」をクリックします。  
「ユーザー」一覧に新規ユーザーが表示されます。

#### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ 管理者またはユーザーの追加 (CLI)

管理者ロールとともに、または管理者ロールなしでユーザーを作成するには、次の手順を使用します。ユーザータイプの説明については、[177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)を参照してください。

1. **configuration users** に移動します。

```
hostname:> configuration users
```

2. 次のいずれかのユーザータイプに続いて名前を入力します。

directory- ディレクトリユーザー (NIS、LDAP) の場合。

local- ローカルユーザーの場合。

data- データ専用ユーザーの場合。

nologin- 非ログインユーザーの場合。

3. 設定する必要があるプロパティを一覧表示するには、**get** と入力します。

```
hostname:configuration users john (uncommitted)> get
 logname = john
 uid = (unset)
```

```

 fullname = (unset)
 initial_password = (unset)
 require_annotation = false

```

4. **set**、設定するプロパティ、その後に **commit** を入力します。

```

hostname:configuration users john (uncommitted)> set initial_password=password
 initial_password = ***** (uncommitted)
hostname:configuration users john (uncommitted)> commit

```

この時点で、ユーザーは作成されていますが、すべてのプロパティがカスタマイズされているとは限りません。

5. (オプション) ローカルユーザーまたはディレクトリユーザーのロールを追加するには、**select** とユーザー名を入力します。
6. (オプション) **show** と入力すると、プリファレンスの完全な一覧が表示されます。これで、ユーザーのロールおよび承認の例外を追加できます。

## 例 2 ローカルユーザーの作成

```

hostname:configuration users > local john
hostname:configuration users john (uncommitted) > get
 logname = john
 uid = (unset)
 fullname = (unset)
 initial_password = (unset)
 require_annotation = false
hostname:configuration users john (uncommitted) > set initial_password=password
 initial_password = ***** (uncommitted)
hostname:configuration users john (uncommitted) > commit
hostname:configuration users > select john
hostname:configuration users john > show
Properties:
 logname = john
 type = local
 uid =
 fullname =
 initial_password = *****
 require_annotation = false
 roles =
 kiosk_mode = false
 kiosk_screen = status/dashboard

Children:
 exceptions => Configure this user's exceptions
 preferences => Configure user preferences

hostname:configuration users john > set roles=
basic basic2 test_role1 test_role2
hostname:configuration users john > set roles=basic
 roles = basic (uncommitted)
hostname:configuration users john > commit
hostname:configuration users > select john
hostname:configuration users john > show
Properties:
 logname = john

```

```
 type = local
 uid =
 fullname =
 initial_password = *****
 require_annotation = false
 roles = basic
 kiosk_mode = false
 kiosk_screen = status/dashboard
```

Children:


```
 exceptions => Configure this user's exceptions
 preferences => Configure user preferences
```

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ユーザーパスワードの変更 (BUI)

ユーザーのパスワードを変更するには、次の手順を使用します。自分以外の任意のユーザーのパスワードを変更するには、スーパーユーザー (root) 権限か、ユーザーの承認/例外を持つロールが必要です。

1. 「構成」 > 「ユーザー」に移動します。
2. パスワードを変更するユーザーの横にある編集アイコン  をクリックします。
3. 「ローカルユーザーを編集」ダイアログボックスで、新しいパスワードを入力してから、再度入力して確認します。
4. 「適用」をクリックします。

### 関連トピック

- [ユーザーの例外の編集 BUI](#)
- [ロールの承認の編集 BUI](#)

## ▼ ユーザーパスワードの変更 (CLI)

ユーザーのパスワードを変更するには、次の手順を使用します。自分以外の任意のユーザーのパスワードを変更するには、スーパーユーザー (root) 権限か、ユーザーの承認/例外を持つロールが必要です。

1. **configuration users** に移動して、**show** と入力してユーザーのリストを表示します。

```
hostname:> configuration users
hostname:configuration users > show
Users:

NAME USERNAME UID TYPE
Super-User root 0 Loc
```

2. **select** と、パスワードを変更するユーザーのユーザー名を入力します。その後、**show** と入力します。

```
hostname:configuration users > select root
hostname:configuration users root > show
Properties:

 logname = root
 fullname = Super-User
 initial_password = *****
 require_annotation = false

Children:

 preferences => Configure user preferences
```

3. **set initial\_password=** と新しいパスワードを入力します。

```
hostname:configuration users root > set initial_password=[new password]
initial_password = ***** (uncommitted)
```

4. 「**commit**」 と入力します。


```
hostname:configuration users root > commit
```

## 関連トピック

- ユーザーの例外の編集 [CLI](#)
- ロールの承認の編集 [CLI](#)

## ▼ ユーザーの例外の編集 (BUI)

ユーザーの例外を編集するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
2. 「ユーザー」 リスト内のユーザーの上にマウスのポインタを置いて、編集アイコン  をクリックします。
3. 「例外」 をクリックします。

4. 「**スコープ**」を選択します。  
このスコープでフィルタが使用可能な場合は、「スコープ」セレクトタの下にフィルタが一覧表示されます。
5. 追加する各例外のチェックボックスにチェックマークを付けます。
6. 「例外」セクションで「追加」をクリックします。

#### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ユーザーの例外の編集 (CLI)

ユーザーの例外を編集するには、次の手順を使用します。

1. **configuration users** に移動します。
2. 「**select**」に続いてユーザー名を入力します。
3. 「**exceptions**」を入力します。
4. 「**create**」を入力します。
5. 「**set scope=**」に続いてスコープ名を入力します。タブ補完を使用して、一覧を表示します。
6. 「**show**」を入力してプロパティを一覧表示します。
7. 目的のプロパティを **true** に設定するには、**set** と入力します。
8. 「**commit**」と入力します。  
これで、例外が追加されました。

#### 例 3 スコープ承認を除外するための例外の追加

この例では、例外を追加して、ユーザー "brendan" の svc スコープ認証を除外します。

```
hostname:configuration users brendan > exceptions
```



```

hostname:configuration users brendan exceptions > create
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > show
Properties:
 scope = (unset)
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > set scope=svc
 scope = svc
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > show
Properties:
 scope = svc
 service = *
 allow_administer = false
 allow_configure = false
 allow_restart = false
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > commit
hostname:configuration users brendan exceptions > show
Auths:

NAME OBJECT PERMISSIONS
auth-000 svc.* none

hostname:configuration users brendan exceptions > select auth-000
hostname:configuration users brendan auth-000 > show
Properties:
 scope = svc
 service = *
 allow_administer = false
 allow_configure = false
 allow_restart = false

hostname:configuration users brendan auth-000 >

```

#### 例 4 スコープ承認を含めるための例外の追加

この例では、例外を追加して、ロール「webadmin」に含まれないスコープ承認を含めます。

```

hostname:configuration users brendan exceptions > create
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > set scope=appliance
 scope = appliance
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > show
Properties:
 scope = appliance
 service = *
 allow_audit = false
 allow_factoryReset = false
 allow_powerOff = false
 allow_reboot = false
 allow_setName = false
 allow_shell = false

hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > set allow_audit=true
 allow_audit = true (uncommitted)
hostname:configuration users brendan auth (uncommitted) > commit
hostname:configuration users brendan exceptions > show
Auths:

NAME OBJECT PERMISSIONS
auth-000 svc.* none
auth-001 appliance.* audit

hostname:configuration users brendan exceptions >



```

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ユーザーの例外の削除 (BUI)

ユーザーの例外を削除するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
2. 「ユーザー」 リスト内のユーザーの上にマウスのポインタを置いて、編集アイコン  をクリックします。
3. 「例外」 をクリックします。
4. 下部のリスト内の例外の上にマウスのポインタを置いて、ごみ箱アイコン  をクリックします。
5. ダイアログボックスの上部にある「適用」 をクリックします。

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ユーザーの例外の削除 (CLI)

ユーザーの例外を削除するには、次の手順を使用します。

1. `configuration users` に移動します。
2. 「select」 に続いてユーザー名を入力します。
3. 「exceptions」 を入力します。

4. **show** と入力して例外を一覧表示します。
5. **destroy** に続いて例外名を入力します。これで、例外が破棄されました。

例 5 ユーザーの例外の削除

```
hostname:configuration users > select john
hostname:configuration users john > ls
Properties:
 logname = john
 type = local
 uid = 2000000001
 fullname = john
 initial_password = *****
 require_annotation = false
 kiosk_mode = false
 kiosk_screen = status/dashboard

Children:
 exceptions => Configure this user's exceptions
 preferences => Configure user preferences

hostname:configuration users john > exceptions
hostname:configuration users john exceptions > show
Auths:
NAME OBJECT PERMISSIONS
auth-000 ad.* domain
 workgroup


hostname:configuration users john exceptions > destroy auth-000
This will destroy "auth-000". Are you sure? (Y/N)
hostname:configuration users john exceptions > show
hostname:configuration users john exceptions >
```

関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールの追加 (BUI)

ロールを追加するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
2. 「ロール」 の横にある追加アイコン  をクリックします。
3. ロールの名前および説明を設定します。

4. (オプション) 「承認」で、スコープを選択します。  
このスコープでフィルタが使用可能な場合は、「スコープ」セレクタの下にフィルタが表示されます。
5. (オプション) 該当する場合、スコープのフィルタを選択します。
6. (オプション) 追加する各承認のチェックボックスのチェックマークを付けます。
7. ダイアログボックスの上部にある「追加」をクリックします。  
「ロール」一覧に新規ロールが表示されます。

#### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールの追加 (CLI)

ロールを追加するには、次の手順を使用します。

1. `configuration roles` に移動します。
2. 「role」に続いて、作成するロール名を入力します。
3. 説明を設定してから、「commit」と入力してロールをコミットします。
4. (オプション) 「authorizations」と入力します。
5. (オプション) 「create」と入力して承認を追加します。
6. (オプション) 「set scope=」に続いてスコープ名を入力します。タブ補完を使用して、一覧を表示します。
7. (オプション) 「show」と入力して、使用可能なフィルタと承認の両方を表示します。
8. (オプション) 「set」と入力して目的の承認を `true` に設定して、フィルタを設定します (使用可能な場合)。タブ補完は、有効なフィルタ設定を表示する際に役立ちます。
9. 「commit」と入力します。

これで、新しいロールが追加されました。

例 6 ロール「webadmin」の作成

```
hostname:> configuration roles
hostname:configuration roles > role webadmin
hostname:configuration roles webadmin (uncommitted) > set
 description="web server administrator"
 description = web server administrator (uncommitted)
hostname:configuration roles webadmin (uncommitted) > commit
hostname:configuration roles > show
Roles:


NAME DESCRIPTION
basic Basic administration
webadmin web server administrator
```

関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールの承認の編集 (BUI)

ロールとは、ユーザーに割り当てることができる権限のコレクションです。ロールの承認を編集するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「ユーザー」に移動します。
2. 「ロール」リスト内のロールの上にマウスのポインタを置いて、編集アイコン  をクリックします。
3. 「承認」で、スコープを選択します。  
このスコープでフィルタが使用可能な場合は、「スコープ」セレクトタの下にフィルタが表示されます。
4. 該当する場合、スコープのフィルタを選択します。
5. 追加する各承認のチェックボックスのチェックマークを付けます。
6. 「承認」セクションで「追加」をクリックします。  
ダイアログボックスの下部に承認が追加されます。
7. ダイアログボックスの上部にある「適用」をクリックします。

## 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールの承認の編集 (CLI)

ロールとは、ユーザーに割り当てることができる権限のコレクションです。ロールの承認を編集するには、次の手順を使用します。

1. `configuration roles` に移動します。
2. 「`select`」に続いてロール名を入力します。
3. 「`authorizations`」と入力します。
4. 「`create`」と入力して承認を追加します。
5. 「`set scope=`」に続いてスコープ名を入力します。タブ補完を使用して、一覧を表示します。
6. 「`show`」と入力して、使用可能なフィルタと承認の両方を表示します。
7. 「`set`」と入力して目的の承認を `true` に設定して、フィルタを設定します (使用可能な場合)。タブ補完は、有効なフィルタ設定を表示する際に役立ちます。
8. 「`commit`」と入力します。  
これで、承認が追加されました。

### 例 7 HTTP サービスを再起動するための承認の追加

この例は承認を追加して HTTP サービスを再起動します。この例には有効な入力を一覧表示するタブ補完の出力も含まれています。これは有効なスコープとフィルタオプションを確認するときに便利です。

```
hostname:configuration roles > select webadmin
hostname:configuration roles webadmin > authorizations
hostname:configuration roles webadmin authorizations > create
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > set scope=tab
ad cluster net schema update
alert hardware replication stat user
appliance nas role svc worksheet
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > set scope=svc
```

```

scope = svc
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > show
Properties:
scope = svc
service = *
allow_administer = false
allow_configure = false
allow_restart = false

hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > set service=tab
* ftp ipmp nis ssh
ad http iscsi ntp tags
smb identity ldap routing vscan
datalink:igb0 idmap ndmp scrk
dns interface:igb0 nfs snmp
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > set service=http
service = http (uncommitted)
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > set allow_restart=true
allow_restart = true (uncommitted)
hostname:configuration roles webadmin auth (uncommitted) > commit
hostname:configuration roles webadmin authorizations > list
NAME OBJECT PERMISSIONS
auth-000 svc.http restart



```

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールからの承認の削除 (BUI)

ロールから承認を削除するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
2. 「ロール」 リスト内のロールの上にマウスのポインタを置いて、編集アイコン  をクリックします。
3. 下部のリスト内の承認の上にマウスのポインタを置いて、ごみ箱アイコン  をクリックします。
4. ダイアログボックスの上部にある「適用」 をクリックします。

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)

- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ロールからの承認の削除 (CLI)

ロールから承認を削除するには、次の手順を使用します。

1. **configuration roles** に移動します。
2. 「**select**」 に続いてロール名を入力します。
3. 「**authorizations**」 と入力します。
4. 「**show**」 と入力して、承認を一覧表示します。
5. **destroy** に続いて承認名を入力します。

### 例 8 ロールからの承認の削除

```
hostname:configuration roles > select test_role1
hostname:configuration roles test_role1 > authorizations
hostname:configuration roles test_role1 authorizations > show
Auths:

NAME OBJECT PERMISSIONS
auth-000 ad.* domain
 workgroup

hostname:configuration roles test_role1 authorizations > destroy auth-000
This will destroy "auth-000". Are you sure? (Y/N)
hostname:configuration roles test_role1 authorizations > show
hostname:configuration roles test_role1 authorizations >
```

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ▼ ダッシュボードを表示できるユーザーの追加

ダッシュボードのみを表示できるユーザーを追加するには、次の手順を使用します。

1. [163 ページの「管理者またはユーザーの追加 \(BUI\)」](#)の説明に従って、ディレクトリユーザーまたはローカルユーザーのいずれかを追加します。



2. 「キオスクユーザー」チェックボックスにチェックマークを付けます。キオスク画面が **status/dashboard** に設定されていることを確認します。
3. 「追加」をクリックします。  
これでユーザーはログインできますが、ダッシュボードしか表示できません。

### 関連トピック

- [ユーザーとロールについて](#)
- [ユーザー承認](#)
- [ユーザープロパティの管理](#)

## ユーザーとロールについて

ユーザーには、次のいずれかのタイプを指定できます。

| 管理者ユーザータイプ                                                                                                                     | 管理者以外のユーザータイプ                                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>ローカル</b> - ローカルで定義されたアプライアンス管理者。カスタムロールを割り当てることで権限を付与でき、オプションで UID を指定できます。データサービスでローカルユーザーはサポートされていますが、ローカルグループはサポートされません。 | <b>データ専用</b> - 管理者アクセスを持たない、データ (SMB、NFS、FTP など) のためにローカルで定義されたデータ専用ユーザー。オプションで UID を指定できます。       |
| <b>ディレクトリ</b> - ディレクトリサービス (NIS または LDAP) によって管理されるアプライアンス管理者。カスタムロールを割り当てることで権限を付与できます。                                       | <b>非ログイン</b> - アイデンティティマッピングのために予約されたユーザー名と UID。このユーザータイプにはアプライアンスへのログインが許可されず、オプションで UID を指定できます。 |

ローカルユーザーとディレクトリユーザーは管理者タイプであり、カスタムのロールを割り当てることで権限を付与できます。

ロールとは、ユーザーに割り当てることのできる権限のコレクションです。たとえば、承認レベルが異なる管理者ロールとオペレータロールを作成できます。スタッフメンバーには、不要な権限を割り当てずに、必要に応じて適切なロールを割り当てることができます。

*root* パスワードをすべてのユーザーに割り当てるより、ロールを使用した方がセキュアです。ロールは、必要な承認だけにユーザーを制限し、ログではユーザーのアクションが個々のユーザー名に帰属すると見なします。

### 関連トピック

- [管理者またはユーザーの追加 BUI、CLI](#)
- [ユーザーパスワードの変更 BUI、CLI](#)
- [ユーザーの例外の編集 BUI、CLI](#)

- ユーザーの例外の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの承認の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールからの承認の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ダッシュボードのみを表示できるユーザーの追加 [BUI](#)

## ユーザー承認

承認を使用すると、ユーザーはシェアの作成、アプライアンスのリポート、システムソフトウェアの更新などの特定のタスクを実行できます。承認はスコープに分類され、各スコープには承認のスコープを狭くするオプションのフィルタセットがあります。たとえば、すべてのサービスを再起動する承認の代わりにフィルタを使用すると、この承認で HTTP サービスだけを再起動できます。

次の表は、使用可能なスコープを示しています。

表 35 ユーザーの使用可能なスコープ

| BUI のスコープ        | CLI のスコープ | 承認の例                            | フィルタの例         |
|------------------|-----------|---------------------------------|----------------|
| Active Directory | ad        | Active Directory ドメインへの参加       | ドメイン名          |
| アラート             | alert     | アラートフィルタとしきい値の構成                | -              |
| 分析               | stat      | このドリルダウンが存在する統計の読み取り            | ドリルダウン         |
| アプライアンス          | appliance | アプライアンスのリポート                    | アプライアンス名       |
| クラスタ化            | cluster   | クラスタピアへのリソースのフェイルバック            | -              |
| データセット           | dataset   | 分析データセットのさまざまな面の管理              | 構成             |
| ハードウェア           | hardware  | オンラインおよびオフラインのディスクの管理           | -              |
| キーストア            | keystore  | キーストアの構成                        | -              |
| ネットワーク           | net       | ネットワークデバイス、データリンク、およびインタフェースの構成 | -              |
| プロジェクトおよびシェア     | nas       | プロジェクトおよびシェアの一般プロパティの変更         | プール、プロジェクト、シェア |
| ロール              | role      | ロールへの承認の構成                      | ロール名           |
| SAN              | stmf      | SAN への承認の構成                     | -              |
| サービス             | svc       | サービスの再起動                        | サービス名          |

| BUI のスコープ     | CLI のスコープ | 承認の例          | フィルタの例  |
|---------------|-----------|---------------|---------|
| プロパティスキーマのシェア | schema    | プロパティスキーマの変更  | -       |
| 更新            | update    | システムソフトウェアの更新 | -       |
| ユーザー          | user      | パスワードの変更      | ユーザー名   |
| ワークフロー        | workflow  | ワークフローの変更     | ワークフロー名 |
| ワークシート        | worksheet | ワークシートの変更     | ワークシート名 |

## 関連トピック

- 管理者またはユーザーの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーパスワードの変更 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの承認の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールからの承認の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ダッシュボードのみを表示できるユーザーの追加 [BUI](#)

## ユーザープロパティの管理







「構成」>「ユーザー」ページには、ユーザーとグループの両方が管理用のボタンとともに一覧表示されます。エントリの上にマウスのポインタを置くと、クローン、編集、および破棄ボタンが表示されます。編集画面を表示するには、ユーザーまたはロールをダブルクリックするか、編集アイコン  をクリックします。アイコンは次のとおりです。

表 36 BUI の「ユーザー」ページのアイコン

| アイコン                                                                                | 説明                                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  | 新しいユーザーまたはロールを追加します。必要なプロパティを入力する新しいダイアログボックスが表示されます。                                                        |
|  | 検索ボックスを開きます。検索文字列を入力して Enter ボタンを押すと、ユーザーまたはロール一覧で該当するテキストが検索され、一致するエントリのみが表示されます。アイコンを再度クリックすると、完全な一覧に戻ります。 |
|  | ユーザーまたはロールのクローンを作成します。このエントリの値に基づいたフィールドで始まる新規ユーザーまたはロールを追加します。                                              |

| アイコン                                                                              | 説明                    |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|
|  | ユーザーまたはロールを編集します。     |
|  | ユーザー、ロール、または承認を削除します。 |

ユーザーのタイプによっては、ユーザーの追加時には次のプロパティのすべてを設定でき、ユーザーの編集時にはこれらのサブセットを設定できます。

表 37 ユーザープロパティ

| プロパティ         | 説明                                                                                                                                                                         |
|---------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| タイプ           | ユーザータイプの説明については、 <a href="#">177 ページの「ユーザーとロールについて」</a> を参照してください。                                                                                                         |
| ユーザー名         | ユーザーの一意の名前                                                                                                                                                                 |
| ユーザー ID       | ローカル、データ、および非ログインユーザーでのみ有効です。自動的に割り当てられたユーザー ID を使用することも、自分でユーザー ID を指定することもできます。自分で割り当てた ID を、100 より小さくしたり、2147483646 より大きくしたり、60001、60002、または 65534 と同じにしたりすることは許可されません。 |
| フルネーム         | ユーザーの説明                                                                                                                                                                    |
| パスワード/確認      | ローカルユーザーまたはデータユーザーの場合は、これらのフィールドの両方に初期パスワードを入力します                                                                                                                          |
| セッションの注釈が必要です | 有効にした場合、ユーザーがアプライアンスにログインするときに、ログインの目的について説明するテキストを入力する必要があります。この注釈は、チケットシステムでのリクエストで実行される作業を追跡する際に使用される場合があります。セッション注釈としてチケット ID を使用できます。セッション注釈はログに表示されます。               |
| キオスクユーザー      | 有効にした場合、ユーザーは「キオスク画面」設定の画面のみを表示できます。たとえば、これを使用すると、ダッシュボードのみを表示するようにユーザーを制限できます。キオスクユーザーは、CLI 経由でアプライアンスにアクセスできなくなります。                                                      |
| キオスク画面        | 「キオスクユーザー」を有効にした場合に、このキオスクユーザーに許可される画面                                                                                                                                     |
| ロール           | ディレクトリユーザーまたはローカルユーザーに割り当てられたロール                                                                                                                                           |
| 例外            | これらの承認は、通常は選択したロールで使用可能な承認に含まれたり除外されたりします。たとえば、例外を追加すると、ユーザーに割り当てられたロールのスコープ認証をすべてまたは一部除外したり、ロールにそのスコープが定義されていないユーザーのスコープ認証を含めることができます。                                    |

ロールの管理時には、次のプロパティを設定できます。

表 38          ロールのプロパティ

| プロパティ | 説明                |
|-------|-------------------|
| 名前    | 一覧に表示されるロールの名前    |
| 説明    | ロールの詳細な説明 (必要な場合) |
| 例外    | このロールの例外          |

### 関連トピック

- 管理者またはユーザーの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーパスワードの変更 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーの例外の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの追加 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールの承認の編集 [BUI](#)、[CLI](#)
- ロールからの承認の削除 [BUI](#)、[CLI](#)
- ダッシュボードのみを表示できるユーザーの追加 [BUI](#)

## アプライアンスのプリファレンス設定

このセクションでは、ロケール、セッションプロパティ、高度な分析、および SSH 鍵のプリファレンス設定について説明します。

プリファレンスを構成するには、次のセクションを参照してください。

- [プリファレンス設定 - BUI、CLI](#)
- [SSH 公開鍵の設定 - BUI、CLI](#)
- [プリファレンスのプロパティ](#)

### ▼ プリファレンス設定 (BUI)

現在のユーザーアカウントのプリファレンスを設定するには、次の手順を使用します。自分のアカウント以外を使用して BUI にログインしている場合、root ユーザーなど、そのユーザーのプリファレンスが保存されます。

現在ログインしているユーザーアカウント以外のユーザーアカウントのプリファレンスを変更するには、[182 ページ](#)の「[プリファレンス設定 \(CLI\)](#)」を参照してください。

1. 「構成」 > 「プリファレンス」 に移動します。
2. [プリファレンスのプロパティ](#)に記載されている値を使用して、プロパティを変更します。

3. 「適用」 をクリックします。

## ▼ プリファレンス設定 (CLI)

ユーザーアカウントのプリファレンスを設定するには、次の例を使用します。自分のアカウント以外を使用して CLI にログインしている場合、root ユーザーなど、そのユーザーのプリファレンスが保存されます。現在ログインしているユーザーアカウント以外のユーザーアカウントのプリファレンスを変更する方法については、「例 2」を参照してください。

- 適切な例を選択します。

### 例 9 現在のユーザーアカウントのプリファレンスの設定

現在のユーザーアカウントのプリファレンスを設定するには、次の CLI コマンドを使用します。

この例は、現在ログインしているユーザーについてのみ設定できるセッションの注釈プロパティの設定を示しています。

```
hostname:> configuration preferences
hostname:configuration preferences> show
Properties:
 locale = c
 login_screen = status/dashboard
 session_timeout = 15
 session_annotation =
 advanced_analytics = false
```

```

Children:
 keys => Manage SSH public keys

hostname:configuration preferences> set session_annotation="Editing my user preferences"
 session_annotation = Editing my user preferences (uncommitted)
hostname:configuration preferences> commit

```

#### 例 10 別のユーザーアカウントのプリファレンスの設定

別のユーザーアカウントのプリファレンスを設定するには、次の CLI コマンドを使用します。現在ログインしているユーザー以外のユーザーのセッションの注釈は設定できません。

この例は、選択したユーザーの高度な分析を有効にする方法を示しています。

```

hostname:> configuration users
hostname:configuration users> select brendan
hostname:configuration users brendan> preferences
hostname:configuration users brendan preferences> show
Properties:
 locale = C
 login_screen = status/dashboard
 session_timeout = 15
 advanced_analytics = false

Children:
 keys => Manage SSH public keys


hostname:configuration users brendan preferences> set advanced_analytics=true
 advanced_analytics = true (uncommitted)
hostname:configuration users brendan preferences> commit

```

## ▼ SSH 公開鍵の設定 (BUI)

SSH 公開鍵は、パスワードを使わずに SSH 接続を許可するのに使用できます。この機能は、管理者の利便性を高め、スクリプトの自動実行に役立ちます。

現在のユーザーの SSH 公開鍵を設定するには、次の手順を使用します。ほかのユーザーの鍵を設定するには、[184 ページ](#)の「SSH 公開鍵の設定 (CLI)」を参照してください。

1. 「構成」 > 「プリファレンス」 に移動します。
2. 「SSH 公開鍵」の横にある追加アイコン  をクリックします。
3. 「タイプ」を選択してから、「SSH 公開鍵」と「鍵のコメント」に入力します。
4. 「追加」をクリックします。

## ▼ SSH 公開鍵の設定 (CLI)

SSH 公開鍵は、パスワードを使わずに SSH 接続を許可するのに使用できます。この機能は、管理者の利便性を高め、スクリプトの自動実行に役立ちます。

ユーザーアカウントの SSH 公開鍵を設定するには、次の例を使用します。自分のアカウント以外を使用して CLI にログインしている場合、`root` ユーザーなど、そのユーザーの鍵が保存されます。現在ログインしているユーザーアカウント以外のユーザーアカウントの鍵を変更する方法については、「例 2」を参照してください。

- 適切な例を選択します。

### 例 11 現在のユーザーアカウントの SSH 公開鍵の設定

現在のユーザーアカウントの SSH 公開鍵を設定するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:> configuration preferences
hostname:configuration preferences> show
Properties:
 locale = C
 login_screen = status/dashboard
 session_timeout = 15
 advanced_analytics = false

Children:
 keys => Manage SSH public keys

hostname: configuration preferences> keys
hostname:configuration preferences keys> create
hostname:configuration preferences key (uncommitted)> set type=DSA
hostname:configuration preferences key (uncommitted)> set key="...DSA key text..."
 key = ...DSA key text...(uncommitted)
hostname:configuration preferences key (uncommitted)> set comment="fw-log1"
 comment = fw-log1 (uncommitted)
hostname:configuration preferences key (uncommitted)> commit
hostname:configuration preferences keys> show
Keys:
NAME MODIFIED TYPE COMMENT
key-000 07/12/2015 10:54:58 DSA fw-log1
```

### 例 12 別のユーザーアカウントの SSH 公開鍵の設定

別のユーザーアカウントの SSH 公開鍵を設定するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:> configuration users
hostname:configuration users> select john
hostname:configuration users john> preferences show
Properties:
```



```

 locale = C
 login_screen = status/dashboard
 session_timeout = 15
 advanced_analytics = false

Children:
 keys => Manage SSH public keys

hostname: configuration users john> preferences keys
hostname: configuration users john preferences keys> create
hostname: configuration users john preferences key (uncommitted)> set type=DSA
hostname: configuration users john preferences key (uncommitted)> set key="...DSA key text..."
 key = ...DSA key text...(uncommitted)
hostname: configuration users john preferences key (uncommitted)> set comment="fw-log2"
 comment = fw-log2 (uncommitted)
hostname: configuration users john preferences key (uncommitted)> commit
hostname: configuration users john preferences keys> show
Keys:

NAME MODIFIED TYPE COMMENT
key-001 07/13/2015 10:57:58 DSA fw-log2

```

## プリファレンスのプロパティ

次の表では、ユーザープリファレンスを設定するためのプロパティについて説明します。

表 39 プリファレンスのプロパティ

| プロパティ       | 説明                                                                                                                                                                                                                    |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 初期ログイン画面    | 正常なログイン後に BUI でロードされる最初のページ。デフォルトでは、ステータスダッシュボードです。                                                                                                                                                                   |
| ロケール        | デフォルトでは C です。C および POSIX ロケールでは、ASCII 文字または標準テキストのみがサポートされています。ISO 8859-1 では、アフリカーンス語、バスク語、カタロニア語、デンマーク語、オランダ語、英語、フェロー語、フィンランド語、フランス語、ガリシア語、ドイツ語、アイスランド語、アイルランド語、イタリア語、ノルウェー語、ポルトガル語、スペイン語、およびスウェーデン語の各言語がサポートされています。 |
| セッションタイムアウト | BUI から離れたあとに、ブラウザが自動的にセッションをログアウトする時間                                                                                                                                                                                 |
| 現在のセッションの注釈 | 監査ログに追加される注釈テキスト                                                                                                                                                                                                      |
| 高度な分析統計     | これにより、分析で追加の統計が使用可能になります                                                                                                                                                                                              |
| SSH 公開鍵     | RSA/DSA 公開鍵。テキストコメントを鍵に関連付けると、鍵が追加された理由を管理者が追跡できます。BUI では、これらの鍵は現在のユーザーにのみ適用されるため、ほかのユーザーの鍵を追加する場合は CLI を使用します。                                                                                                       |

## アラートの構成

このセクションでは、システムアラート、そのカスタマイズ方法、およびアラートログの検索場所について説明します。分析から統計をモニターするには、カスタムしきい値アラートを作成します。特定タイプのアラートに応答するようにシステムを構成するには、アラートアクションを使用します。

アラートを構成するには、次のセクションを使用します。

- [アラートアクションの追加 \(BUI\)](#)
- [アラートアクションの追加 \(CLI\)](#)
- [電子メールアラートの送信 \(CLI\)](#)
- [SNMP トラップの送信 \(CLI\)](#)

アラートの詳細は、次のセクションを参照してください。

- [アラートのカテゴリ](#)
- [Syslog メッセージの送信](#)
- [ワークフローの実行](#)
- [しきい値アラート](#)
- [データセットおよびワークシートの再開/一時停止](#)

### ▼ アラートアクションの追加 (BUI)

1. 「アラートアクション」の横にある追加アイコンをクリックします。
2. カテゴリを選択するか、すべてを選択する場合は「すべてのイベント」を選択します。
3. すべてのイベントまたはイベントのサブセットを選択します。サブセットを選択した場合は、目的のアラートイベントと一致するようにチェックボックスリストをカスタマイズします。
4. 「アラートアクション」のドロップダウンメニューを使用して、アラートタイプを選択します。
5. アラートアクションの詳細を入力します。「テスト」ボタンをクリックすると、テストアラートを作成し、このアラートアクションを実行できます (電子メールや SNMP が正しく構成されているかどうかのチェックに役立ちます)。
6. 「アラートアクション」の横にある追加アイコンをクリックすると、複数のアラートアクションを追加できます。

7. 右上にある「追加」をクリックします。

#### 関連トピック

- [アラートのカテゴリ](#)
- [Syslog メッセージの送信](#)
- [ワークフローの実行](#)
- [しきい値アラート](#)
- [データセットおよびワークシートの再開/一時停止](#)

## ▼ アラートアクションの追加 (CLI)

1. `configuration alerts actions` コンテキストを入力して、`create` コマンドを入力します。
2. 「`get category = (unset)`」を入力して「`category`」プロパティに移動します。
3. 「`set category=thresholds`」を入力します。
4. 「`set thresholdid=[id` は自動的に作成されたしきい値アラートの識別子である `ID`」を入力します。
5. 「`commit`」と入力します。
6. 「`list`」と入力して、新しいアラートアクションの名前や番号を特定します。アクションおよびハンドラが割り当てられていないしきい値を探します。
7. 「`select actions-[number` は前のステップで特定した番号と同じもの」を入力します。
8. 「`action`」、続いて「`get`」を入力します。
9. デフォルトでは、アラートタイプは電子メールです。その選択内容によれば、スキップして次のステップに進みます。選択を変更する場合は、「`set handler=[type` は `snmptrap`、`syslog`、`resumedataset`、`suspenddataset`、`resumeworksheet`、`suspendworksheet`、または`executeworkflow`」を入力します。続いて「`get`」と入力して、必要な引数を表示します。引数を持たないのは、「`snmptrap`」および「`syslog`」のみです。
10. 必要なそれぞれの引数を設定します。たとえば、電子メールアラートの件名を設定するには、「`set subject=[subject` は目的の電子メール件名」を入力します。

11. `show` コマンドを使用して、すべての引数が入力されていることを確認します。
12. 「`commit`」、続いて「`list`」と入力します。必要に応じて、ここで引数を修正します。
13. 「`done`」と入力し、続いてもう一度「`done`」と入力します。

### 関連トピック

- [アラートのカテゴリ](#)
- [Syslog メッセージの送信](#)
- [ワークフローの実行](#)
- [しきい値アラート](#)
- [データセットおよびワークシートの再開/一時停止](#)

## 電子メールアラートの送信 (CLI)

アラートの詳細を示す電子メールを送信できます。構成には、電子メールアドレスおよび電子メール件名行が必要です。次の例に、電子メールしきい値アラートを示します。アプライアンスで電子メールを送信する方法についての詳細は、SMTPサービス画面で構成できます。

```
From aknobody@caji.com Mon Oct 13 15:24:47 2009
Date: Mon, 13 Oct 2009 15:24:21 +0000 (GMT)
From: Appliance on caji <noreply@caji.com>
Subject: High CPU on caji
To: admin@hostname.com
```

```
SUNW-MSG-ID: AK-8000-TT, TYPE: Alert, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Mon Oct 13 15:24:12 2009
PLATFORM: i86pc, CSN: 0809QAU005, HOSTNAME: caji
SOURCE: svc:/appliance/kit/akd:default, REV: 1.0
EVENT-ID: 15a53214-c4e7-eae4-dae6-a652a51ea29b
DESC: cpu.utilization threshold of 90 is violated.
AUTO-RESPONSE: None.
IMPACT: The impact depends on what statistic is being monitored.
REC-ACTION: The suggested action depends on what statistic is being monitored.
```

```
SEE: https://192.168.2.80:215/#maintenance/alert=15a53214-c4e7-eae4-dae6-a652a51ea29b
```

### 関連トピック

- [アラートのカテゴリ](#)
- [Syslog メッセージの送信](#)
- [ワークフローの実行](#)
- [しきい値アラート](#)
- [データセットおよびワークシートの再開/一時停止](#)

## SNMP トラップの送信 (CLI)

SNMP トラップの宛先がSNMPサービスに構成され、そのサービスがオンラインになっている場合、アラートの詳細を示す SNMP トラップを送信できます。次の例では、Net-SNMP ツール `snmptrapd -P` によって表示される SNMP トラップを送信します。

```
/usr/sfw/sbin/snmptrapd -P
2009-10-13 15:31:15 NET-SNMP version 5.0.9 Started.
2009-10-13 15:31:34 caji.com [192.168.2.80]:
 iso.3.6.1.2.1.1.3.0 = Timeticks: (2132104431) 246 days, 18:30:44.31
 iso.3.6.1.6.3.1.1.4.1.0 = OID: iso.3.6.1.4.1.42.2.225.1.3.0.1
 iso.3.6.1.4.1.42.2.225.1.2.1.2.36.55.99.102.48.97.99.100.52.45.51.48.
99.49.45.52.99.49.57.45.101.57.99.98.45.97.99.50.55.102.55.49.50.54.
98.55.57 = STRING: "7cf0acd4-30c1-4c19-e9cb-ac27f7126b79"
 iso.3.6.1.4.1.42.2.225.1.2.1.3.36.55.99.102.48.97.99.100.52.45.51.48.
99.49.45.52.99.49.57.45.101.57.99.98.45.97.99.50.55.102.55.49.50.54.
98.55.57 = STRING: "alert.ak.xmlrpc.threshold.violated"
 iso.3.6.1.4.1.42.2.225.1.2.1.4.36.55.99.102.48.97.99.100.52.45.51.
48.99.49.45.52.99.49.57.45.101.57.99.98.45.97.99.50.55.102.55.49.50.
54.98.55.57 = STRING: "cpu.utilization threshold of 90 is violated."
```

### 関連トピック

- [アラートのカテゴリ](#)
- [Syslog メッセージの送信](#)
- [ワークフローの実行](#)
- [しきい値アラート](#)
- [データセットおよびワークシートの再開/一時停止](#)

## アラートのカテゴリ

重要なアプライアンスイベントでは、ハードウェアおよびソフトウェアの障害などのアラートがトリガーされます。これらのアラートは、「ログ」に表示されます。また、アラートアクションのいずれかを実行するように構成することもできます。

アラートは、次のカテゴリにグループ化されます。

表 40 アラートのカテゴリ

| カテゴリ       | 説明                         |
|------------|----------------------------|
| クラスタ       | クラスタイベント (リンクの障害やピアのエラーなど) |
| カスタム       | カスタムアラートの構成から生成されたイベント     |
| ハードウェアイベント | アプライアンスのブートおよびハードウェア構成の変更  |
| ハードウェア障害   | 任意のハードウェア障害                |

| カテゴリ         | 説明                                                                                                          |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| NDMP 操作      | NDMP の TAR または DUMP のバックアップおよび復元の開始イベントと終了イベント。このグループは「NDMP: バックアップのみ」および「NDMP: 復元のみ」として使用できます              |
| ネットワーク       | ネットワークポート、データリンク、および IP インタフェースのイベントと障害                                                                     |
| フォンホーム       | バンドルのアップロードイベントをサポートします                                                                                     |
| リモートレプリケーション | イベントおよび障害を送受信します。ソースイベントのみまたはターゲットイベントのみの場合、このグループは「リモートレプリケーション: ソースのみ」および「リモートレプリケーション: ターゲットのみ」として使用できます |
| サービス障害       | ソフトウェアサービス障害のイベント                                                                                           |
| しきい値         | 分析の統計に基づくカスタムアラート                                                                                           |
| ZFS プール      | ストレージプールのイベント (スクラブやホットスペースの起動など)                                                                           |

## Syslog メッセージの送信

Syslog サービスが有効になっている場合は、アラートの詳細を含む syslog メッセージを 1 つ以上のリモートシステムに送信できます。syslog メッセージの送信の詳細は、[Syslog Syslog リレーサービス](#)を参照してください。

## ワークフローの実行

ワークフローは、オプションでアラートアクションとして実行できます。ワークフローをアラートアクションとして使用できるようにするには、その `alert` アクションが `true` に設定されている必要があります。ワークフローの実行の詳細は、[595 ページの「保守のワークフロー」](#)を参照してください。

## しきい値警告

分析による統計に基づくアラートです。しきい値アラートの作成時のプロパティは次のとおりです。

表 41 しきい値警告のプロパティ

| プロパティ | 説明                                                      |
|-------|---------------------------------------------------------|
| しきい値  | しきい値統計は分析で生成され、自己記述性があります (例: 「プロトコル: 秒あたりの NFSv4 操作数」) |

| プロパティ                                   | 説明                                                              |
|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 超える/下回る                                 | しきい値と現在の統計とを比較する方法を定義します。                                       |
| タイミング: 最低                               | 現在の統計値がしきい値を上回る、または下回る必要がある期間                                   |
| 間のみ/途中のみ                                | これらのプロパティは、特定の時間帯 (勤務時間など) にのみしきい値が送信されるように設定できます。              |
| この状況が続く場合にアラートを再送信する間隔。                 | 有効にすると、しきい値違反が存在するときに、設定した間隔ごとにアラートアクション (電子メールの送信など) が再実行されます。 |
| 少なくとも次の時間、この条件がクリアされた場合にもアラートを再送信します... | 少なくとも設定した間隔でしきい値違反がクリアされた場合に、フォローアップアラートを送信します。                 |

「しきい値アラートを追加」ダイアログは、アラートについて説明したパラグラフとして参照できるように構成されています。デフォルトでは次のようになります。

しきい値 CPU: 使用率が 95 % を超える。

タイミング最低 5 分、0:00 と 0:00 の間のみ、平日の途中のみ。

この状況が続く場合にアラートを再送信する間隔 5 分間。

少なくとも 5 分間、この条件がクリアされた場合にもアラートを再送信します。

### 関連トピック

- [『Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド、Release OS8.6.x』の「しきい値アラートの構成 \(BUI\)」](#)
- [『Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド、Release OS8.6.x』の「しきい値アラートの構成 \(CLI\)」](#)
- [アラートアクションの追加 \(BUI\)](#)
- [アラートアクションの追加 \(CLI\)](#)
- [電子メールアラートの送信 \(CLI\)](#)
- [SNMP トラップの送信 \(CLI\)](#)

## 分析データセットおよびワークシートの再開/一時停止

分析のデータセットは再開または一時停止が可能です。これは、散発的なパフォーマンス課題を追跡するとき、およびこれらのデータセットを 24 時間毎日有効にすることが望ましくないときに特に役立ちます。

たとえば、CPU アクティビティのスパイクが1週間に1回または2回通知され、その他の分析で関連するドロップがNFS パフォーマンスに表示されたとします。一部の追加データセットを有効にしても、問題点を検証するには情報がまったく足りません。ホスト名およびファイル名のデータセットでNFSを有効にした場合は、原因をより深く理解できます。ただし、このような特定のデータセットは負荷が高くなる可能性があります。24時間毎日有効なままにすると、すべてのユーザーのパフォーマンスが低下します。これは、データセットの再開/一時停止アクションが役立つ可能性のある状況です。しきい値アラートは、CPU アクティビティのスパイクが検出されたときにのみ、ホスト名とファイル名のデータセットで一時停止中されたNFSを再開するように構成できます。2番目のアラートは、短い間隔のデータが収集されたあとに、これらのデータセットを一時停止するように構成できます。最終結果として、課題発生時にのみ必要なデータが収集され、このデータ収集によるパフォーマンス影響は最小化されます。

データセットの詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド](#)、Release OS8.6.x』の「[分析データセットについて](#)」を参照してください。

これらのアクションでは、大量のデータセットが含まれる可能性のある分析ワークシート全体を再開または一時停止します。これを行う理由は、データセットを再開および一時停止する理由と同様です。詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド](#)、Release OS8.6.x』の「[ワークシートのグラフとプロット](#)」を参照してください。

### 関連トピック

- 『[Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド](#)』の「[しきい値アラートの構成 \(BUI\)](#)」
- 『[Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド](#)』の「[しきい値アラートの構成 \(CLI\)](#)」
- [186 ページの「アラートアクションの追加 \(BUI\)」](#)
- [187 ページの「アラートアクションの追加 \(CLI\)」](#)
- [188 ページの「電子メールアラートの送信 \(CLI\)」](#)
- [189 ページの「SNMP トラップの送信 \(CLI\)」](#)

## アプライアンスのクラスタ構成

Oracle ZFS Storage Appliance では、アプライアンスの協調的なクラスタ化がサポートされています。この方針は、クライアント側の負荷分散、適切なサイト計画、プロアクティブおよびリアクティブな保守と修復、すべての Oracle ZFS Storage Appliance に組み込まれた単一アプライアンスのハードウェア冗長性などを含む可用性拡張への統合的なアプローチの一部である場合もあります。



---

注記 - 新しい2つのコントローラのクラスタ化を構成する場合は、『Oracle ZFS Storage Appliance インストールガイド』の「アプライアンスの初回の構成」の手順に従ってください。

---

アプライアンスのクラスタ化に関連するタスクについては、次を参照してください。

- 『Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド』の「クラスタケーブルの接続」
- 193 ページの「クラスタ構成の BUI ビュー」
- 195 ページの「クラスタ化構成へのスタンドアロンアプライアンスのアップグレード (BUI)」
- 199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン (CLI)」

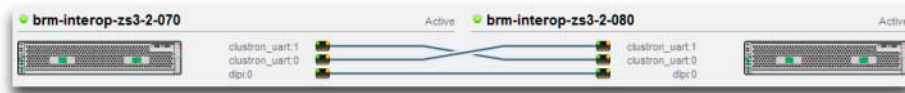
アプライアンスのクラスタ化について理解を深めるには、次を参照してください。

- 201 ページの「クラスタの用語」
- 202 ページの「クラスタ化の理解」
- 203 ページの「クラスタの長所と短所」
- 206 ページの「クラスタ相互接続 I/O」
- 207 ページの「クラスタリソース管理」
- 210 ページの「クラスタのテイクオーバーとフェイルバック」
- 213 ページの「クラスタ化された環境での構成変更」
- 214 ページの「クラスタ化におけるストレージの考慮点」
- 216 ページの「クラスタ化におけるネットワークの考慮点」
- 218 ページの「プライベートのローカル IP インタフェース」
- 219 ページの「クラスタ化における Infiniband の考慮点」
- 220 ページの「「スプリットブレイン」状態の回避」
- 223 ページの「テイクオーバーの影響の見積もりと削減」

## クラスタ構成の BUI ビュー



「構成」>「クラスタ」ビューには、クラスタカードのステータス、クラスタコントローラノードの状態、およびすべてのリソースの概要がグラフィカルに表示されます。

図 14 クラスタ接続



注記 - BUI に 3 つの実線が表示するには、2 つのコントローラをクラスタケーブルで接続する必要があります。クラスタ配線の詳細については、『[Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド](#)』の「[クラスタケーブルの接続](#)」を参照してください。

このインタフェースには次のオブジェクトがあります。

- 各システムのサムネイルピクチャー。管理インタフェースがアクセスされているシステムが左側に表されます。各サムネイルには、標準的なアプライアンス名および現在のクラスタ状態 (上記のアイコンと、説明のラベル) を示すラベルが付けられます。
- ハードウェアで動的に更新する各クラスタカード接続のサムネイル。そのリンクが接続されアクティブなときは実線でリンクを接続し、その接続が切断された場合や、ほかのシステムが再起動/リブートしている間は線が消えます。
- 各システムに現在割り当てられているプライベートリソースとシングルトンリソースの一覧。各クラスタノードのサムネイルの下に、さまざまなリソース属性とともに表示されます。
- リソースごとに、そのリソースが割り当てられるアプライアンス (つまり、両方が CLUSTERED 状態のときにリソースを提供するアプライアンス)。現在のアプライアンスが OWNER 状態のときは、所有者フィールドがポップアップメニューとして表示されます。これは編集可能で、「適用」をクリックするとコミットできます。
- リソースごとに、リソースがプライベートであるかどうかを示すロックアイコン 。現在のアプライアンスが OWNER または CLUSTERED 状態のときは、ロックアイコン  をクリックしてから「適用」をクリックすると、リソースをロック (プライベートにする) またはロック解除 (シングルトンにする) できます。リモートピアに属するプライベートリソースは、どちらかのリソース一覧には表示されないことに注意してください。

この BUI には次のボタンがあります。

表 42 クラスタインタフェースボタン

| ボタン     | 説明                                                                                                         |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| セットアップ  | クラスタがまだ構成されていない場合は、クラスタ設定ガイド付きタスクを実行してから、現在の画面に戻ります。                                                       |
| 構成解除    | クラスタの構成を解除して、ノードをスタンドアロン操作にアップグレードします。                                                                     |
| 適用      | リソース変更が保留中 (黄色で強調表示された行) の場合、その変更をクラスタにコミットします。                                                            |
| 戻す      | リソース変更が保留中 (黄色で強調表示された行) の場合、その変更を元に戻し、現在のクラスタ構成を表示します。                                                    |
| フェイルバック | 現在のアプライアンス (左側) が OWNER の場合、他方のアプライアンスが所有するリソースをここにフェイルバックします。両方のノードは、CLUSTERED 状態 (アクティブ/アクティブ) のままです。    |
| テイクオーバー | 現在のアプライアンス (左側) が CLUSTERED または STRIPPED の場合、他方のアプライアンスを強制的にリポートし、そのリソースをテイクオーバーして、現在のアプライアンスを OWNER にします。 |

#### 関連トピック

- 『Oracle ZFS Storage Appliance インストールガイド』の「初期構成の実行 (BUI)」
- 195 ページの「クラスタ化構成へのスタンドアロンアプライアンスのアップグレード (BUI)」
- 199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン (CLI)」

## ▼ クラスタ化構成へのスタンドアロンアプライアンスのアップグレード (BUI)

スタンドアロンアプライアンスをクラスタ化構成にアップグレードするには、この手順を使用します。

注記 - クラスタ化コントローラを構成するには BUI を使用することを強くお勧めします。


始める前に 次を確認してください。



- 2 番目のコントローラが新しいコントローラであるか、工場出荷時の設定にリセットされたコントローラである。『Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル』の「出荷時リセットの実行」を参照してください。
  - 両方のコントローラは同じモデルでなければならない。7420 (2GHz または 2.40 GHz CPU) は、同じプラットフォームをベースにしているため、7420 (1.86GHz または 2.00GHz CPU) とクラスタ化できます。
  - スタンドアロンアプライアンスの電源が投入されている。この手順でスタンドアロンアプライアンスの電源を切断する必要はありません。
1. **スタンドアロンアプライアンスと 2 番目のコントローラをクラスタケーブルで接続します。**  
クラスタ配線の詳細については、『Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド』の「クラスタケーブルの接続」を参照してください。
  2. **2 番目のコントローラで、電源ケーブルを電源装置 0 と電源装置 1 に接続します。次に、各ケーブルを外部電源に接続します。**  
2 番目のコントローラの電源が自動的に投入されます。
  3. **2 番目のコントローラをディスクシェルフに接続します。**  
アプライアンスに付属しているドキュメントを参照するか、『Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド』の「配線の入門」を参照してください。
  4. **スタンドアロンコントローラで、「構成」>「クラスタ」に移動します。**
  5. **2 つのコントローラの間通信リンクが接続されアクティブであることを確認します。**  
3 つの実線が表示されない場合、3 本のクラスタケーブルが適切に接続されていて、コネクタにしっかり取り付けられていることを確認します。
  6. **「設定」をクリックします。**
  7. **2 番目のコントローラのホスト名と、最初のコントローラに設定されているものと同じ root パスワードを入力します。**

---

注記 - 初期クラスタ構成の設定は、完了するのに数分かかることがあります。

---

8. **スタンドアロンコントローラで、「構成」>「クラスタ」に移動し、管理インタフェースのロックアイコン  をクリックします。**  
コントローラへの管理インタフェースをロックすると、フェイルバックが発生したときのリソースの転送を防ぎます。
9. **スタンドアロンコントローラから、2 番目のコントローラの管理インタフェースを構成します。**

- a. 「構成」 > 「ネットワーク」に移動し、インターフェースの横の追加アイコン  をクリックします。
  - b. 管理インターフェースの名前を入力して、「インターフェースを有効化」および「管理を許可」のボックスをチェックします。
  - c. IP アドレスを選択し、「適用」をクリックします。
10. 「構成」 > 「クラスタ」に移動し、「フェイルバック」をクリックして、クラスタをアクティブ/アクティブモードにします。  
2つのコントローラは、クラスタ化されたピアとして構成されます。
  11. 2番目のコントローラで、「構成」 > 「クラスタ」に移動し、管理インターフェースのロックアイコン  をクリックします。

#### 関連トピック

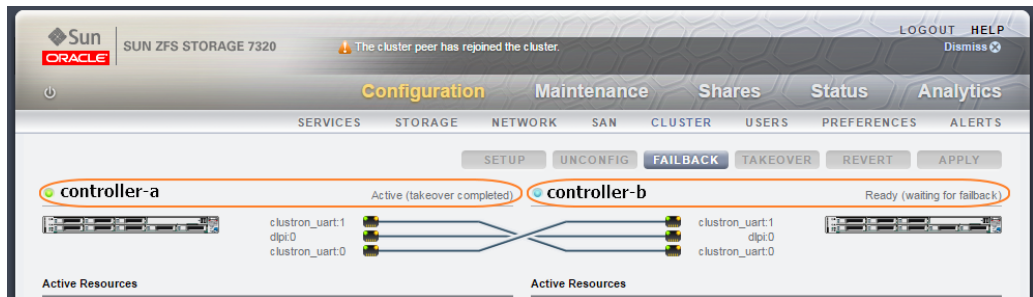
- [214 ページの「クラスタ化におけるストレージの考慮点」](#)
- [193 ページの「クラスタ構成の BUI ビュー」](#)

## ▼ クラスタ構成のシャットダウン (BUI)

クラスタ構成をシャットダウンするには、この手順を使用します。

1. いずれかのピアコントローラから、「構成」 > 「クラスタ」に移動します。
2. 両方のコントローラの状態を確認します。

次の図では、アクティブコントローラが controller-a で、スタンバイコントローラが controller-b です。




次の表を使用して各コントローラの状態を確認します。

| controller-a           | controller-b       | 状態                                                                                                                      |
|------------------------|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アクティブ                  | アクティブ              | 両方のコントローラは通常のクラスタ化された状態で実行されています。                                                                                       |
| アクティブ (テイクオーバーが完了しました) | 準備完了 (フェイルバックを待機中) | controller-a はすべてのリソースを所有し、アクティブコントローラです。controller-b はスタンバイモードで、リソースがありません。プールの移動回数を制限するために、最初にスタンバイコントローラをシャットダウンします。 |
| アクティブ (テイクオーバーが完了しました) | クラスタに再度参加していません... | controller-b はリブート中で、controller-a がすべてのリソースを所有します。                                                                      |
| アクティブ (テイクオーバーが完了しました) | 不明 (切断または再起動中)     | controller-b の電源が切られているかリブート中であるか、クラスタ相互接続リンクがすべて停止しているか、またはクラスタ化がまだ構成されていません。                                          |

3. コントローラ B の BUI にログインし、マストヘッドの下の左側にある電源アイコン をクリックします。

注記 - プールの移動回数を制限するために、最初にスタンバイコントローラをシャットダウンします。

4. コントローラ A の BUI から、「構成」 > 「クラスタ」に移動し、コントローラ B の電源が切断されており、クラスタの状態が不明 (切断または再起動中) であることを確認します。
5. コントローラ A の BUI から、マストヘッドの下の左側にある電源アイコン  をクリックします。
6. (オプション) 両方のコントローラの電源が切断されていることを確認するために、Oracle ILOM にログインして次のように入力します。

```
->show /SYS power_state
```

ILOM へのアクセスの詳細については、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』の「[コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン](#)」を参照してください。

7. ディスクシェルフの電源を切断します。
  - a. 電源装置のオン/オフスイッチを「O」(オフ)の位置に入れます。
  - b. キャビネットの外部電源から電源コードを取り外します。

---

注記 - ディスクシェルフへの電力供給を完全に停止するには、すべての電源コードを取り外す必要があります。

---

詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance インストールガイド](#)』の「[ディスクシェルフの電源切断](#)」を参照してください。

## ▼ クラスタ構成のシャットダウン (CLI)

クラスタ構成をシャットダウンするには、この手順を使用します。

---

注記 - この手順では、クラスタ化コントローラを controller-a および controller-b と呼びます。

---

1. 次のコマンドを使用して、各コントローラのクラスタ状態を検証します。  
次の例では、controller-a は所有者で、アクティブな状態です。そのピアの controller-b はスタンバイコントローラで、STRIPPED 状態です。

```
controller-a:>configuration cluster
controller-a:configuration cluster> show
state = AKCS_OWNER
description = Active (takeover completed)
```

```
peer_asn = 365ed33c-3b9d-c533-9349-8014e9da0408
peer_hostname = controller-b
peer_state = AKCS_STRIPPED
peer_description = Ready (waiting for failback)
```

2. 次の表を使用して、各コントローラのステータスを確認します。

| controller-a   | controller-b   | 状態                                                                                                                           |
|----------------|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| AKCS_CLUSTERED | AKCS_CLUSTERED | 両方のコントローラは通常のクラスタ化された状態で実行されています。                                                                                            |
| AKCS_OWNER     | AKCS_STRIPPED  | controller-a はすべてのリソースを所有し、アクティブコントローラです。controller-b はスタンバイモードで、リソースがありません。プールの移動回数を制限するために、最初に STRIPPED コントローラをシャットダウンします。 |
| AKCS_OWNER     | rebooting      | controller-b はリブート中で、controller-a がすべてのリソースを所有します。                                                                           |
| AKCS_OWNER     | unknown        | controller-b の電源が切られているかリブート中であるか、クラスタ相互接続リンクがすべて停止しているか、またはクラスタ化がまだ構成されていません。                                               |

注記 - 各コントローラのステータスが一致しない場合、クラスタに問題が発生している可能性があります。続行する前に、Oracle サポートに連絡してください。

3. 次のコマンドを使用して、controller-b をシャットダウンします。

```
controller-b:configuration cluster> cd /
controller-b:> maintenance system poweroff
This will turn off power to the appliance. Are you sure? (Y/N)Y
```

注記 - 両方のコントローラのステータスが AKCS\_CLUSTERED である場合は、動作している方のコントローラのテイクオーバーが自動的に開始されます。

4. controller-a から、show コマンドを使用して、controller-b の電源が切断され、状態が OWNER/unknown であることを確認します。

```
controller-a:configuration cluster> show
state = AKCS_OWNER
description = Active (takeover completed)
peer_asn = 365ed33c-3b9d-c533-9349-8014e9da0408
peer_hostname = controller-b
peer_state = OWNER/unknown
```



```
peer_description =
```

5. 次のコマンドを使用して **controller-a** をシャットダウンします。

```
controller-a:configuration cluster> cd /
controller-a:> maintenance system poweroff
This will turn off power to the appliance. Are you sure? (Y/N) y
```

6. (オプション) 両方のコントローラの電源が切断されていることを確認するために、**Oracle ILOM** にログインして次のように入力します。

```
->show /SYS power_state
```

ILOM へのアクセスの詳細については、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニユアル](#)』の「[コマンド行インタフェースを使用した Oracle ILOM へのリモートログイン](#)」を参照してください。

7. ディスクシェルフの電源を切断します。
  - a. 電源装置のオン/オフスイッチを「O」(オフ)の位置に入れます。
  - b. キャビネットの外部電源から電源コードを取り外します。

---

**注記** - ディスクシェルフへの電力供給を完全に停止するには、すべての電源コードを取り外す必要があります。

---

詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance インストールガイド](#)』の「[ディスクシェルフの電源切断](#)」を参照してください。

## 関連トピック

- [202 ページの「クラスタ化の理解」](#)
- [201 ページの「クラスタの用語」](#)
- [207 ページの「クラスタリソース管理」](#)
- [210 ページの「クラスタのテイクオーバーとフェイルバック」](#)
- [213 ページの「クラスタ化された環境での構成変更」](#)

## クラスタの用語

ここで定義する用語は、ドキュメント全体で使用されます。ほとんどの場合は、従来よりも広いコンテキストで詳細に説明されており、幅広い概念が含まれています。クラスタ状態およびリソースタイプについては、次のセクションで説明します。必要に応じて、このセクションに戻って参照してください。

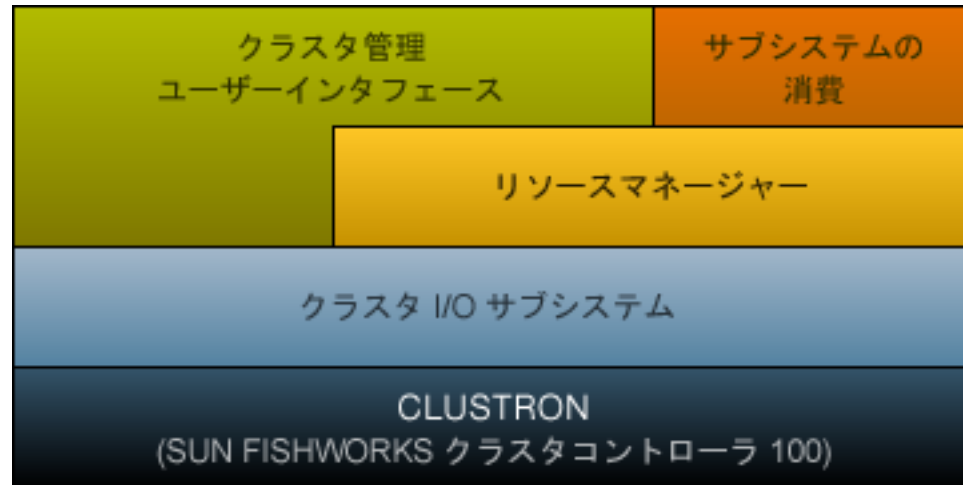
- **エクスポート**: 特定のコントローラ上でリソースを非アクティブにするプロセス

- **フェイルバック:** AKCS\_OWNER 状態から AKCS\_CLUSTERED に移行するプロセス (すべての外部リソース (ピアに割り当てられたリソース) はエクスポートされてから、そのピアによってインポートされる)
- **インポート:** 特定のコントローラ上でリソースをアクティブにするプロセス
- **ピア:** クラスタ内のその他のアプライアンス
- **再度参加:** リソースマップをピアから取得して再同期すること
- **リソース:** 1つまたは両方のコントローラに存在する物理または仮想オブジェクト (アクティブの可能性あり)
- **テイクオーバー:** AKCS\_CLUSTERED または AKCS\_STRIPPED 状態から AKCS\_OWNER に移行するプロセス (すべてのリソースがインポートされる)

## クラスタ化の理解

シリーズに組み込まれたクラスタ化サブシステムは、3つの主要な構成単位で構成されています (次の図を参照)。クラスタ I/O サブシステムおよびハードウェアデバイスは、クラスタ内でのコントローラ間通信用のトランスポートを提供し、ピアの状態のモニタリングを受け持ちます。このトランスポートは、リソースマネージャーによって使用されます。これにより、データサービスプロバイダおよびほかの管理サブシステムがクラスタ化システムと接続できます。最後に、クラスタ管理ユーザーインタフェースは、設定タスク、リソースの割り当て、モニタリング、およびテイクオーバーとフェイルバックの操作を提供します。これらの各構成単位については、以降のセクションで詳細に説明します。

図 15 クラスタ化サブシステム



## クラスタ化の構成解除

クラスタ化の構成解除は、クラスタ化されたストレージコントローラのいずれかを出荷時のデフォルト構成に戻して、すべてのリソースの所有権を動作しているピアに再度割り当てる破壊的な操作です。クラスタ化の構成を解除する理由は2つあります。

- クラスタ化の使用をやめて、代わりに独立した2つのストレージアプライアンスを構成する。
- 障害が発生したストレージコントローラを新しいハードウェアに交換するか、またはストレージコントローラを出荷時のアプライアンスソフトウェアに交換する（一般に、この交換はサービスプロバイダが行います）。

データ損失の可能性があるため、クラスタ化の構成を解除する場合は Oracle サポートに連絡してください。

## クラスタの長所と短所

重要なことは、Oracle ZFS Storage Appliance のクラスタ化実装の範囲を理解することです。「クラスタ」とは、さまざまな目的を持った数多くの異なるテクノロジーを呼ぶときに業界で使用される用語です。ここでは、2つのアプライアンスコントロー

ラおよび共有ストレージで構成されるメタシステムを意味し、それらのコントローラのどちらかで特定のハードウェアまたはソフトウェアの障害が発生した場合に、改善された可用性を提供するために使用されます。クラスタには、正確に2つのアプライアンスまたはストレージコントローラが含まれます。このドキュメント全体では、簡潔にコントローラと呼びます。各コントローラには、クラスタで使用可能なセットからストレージ、ネットワーク、およびその他のリソースのコレクションを割り当てることができます。これにより、2つの主なトポロジのいずれかを構成できます。アクティブ/アクティブとは、クラスタに2つ(以上)のストレージプールがあり、そのうちの1つのプールに各コントローラと、そのプールに格納されたデータにクライアントがアクセスするときに使用されるネットワークリソースが割り当てられている状態を表す用語です。アクティブ/パッシブとは、単一のストレージプールに、アクティブと指定されたコントローラと、関連付けられたネットワークインターフェースが割り当てられている状態を表します。Oracle ZFS Storage Appliance では、どちらのトポロジもサポートされています。両者の区別は人為的です。つまり、両者間にはソフトウェアまたはハードウェアの違いはなく、単にストレージプールを追加または削除することによって任意に切り替えることができます。どちらの場合も、コントローラに障害が発生すると、他方(そのピア)がすべての既知のリソースを制御し、これらのリソースに関連付けられたサービスを提供します。

コントローラの修復中に数時間または数日の停止時間を発生させる代わりとして、クラスタ化を使用することでピアアプライアンスは修復または交換の実行中でもサービスを提供できます。さらに、クラスタではソフトウェアの順次アップグレードもサポートされています。これにより、新しいソフトウェアへの移行に関連する業務の混乱を減らすことができます。一部のクラスタ化テクノロジーには、可用性拡張機能を超越する特定の追加機能が備わっています。Oracle ZFS Storage Appliance のクラスタ化サブシステムは、このような機能を提供するように設計されていません。特に、複数コントローラ間における負荷分散の提供、ストレージ障害における可用性の改善、クライアントへの複数アプライアンス間での統合されたファイルシステム名前空間の提供、障害回復の目的で広範囲な領域でのサービス責任の分割は行われません。これらの機能も同様に、このドキュメントの範囲外です。ただし、Oracle ZFS Storage Appliance およびそれが提供するデータプロトコルでは、次のように可用性を改善できる数多くのその他の機能と方針がサポートされています。

- データのレプリケーション。1つ以上の地理的にリモートのサイトでの障害回復で使用可能
- クライアント側でのデータのミラー化。任意に配置された複数のストレージサーバーで提供される冗長 iSCSI LUN を使用して実行可能
- 負荷分散。NFS プロトコルに組み込まれ、外部ハードウェアまたはソフトウェアによってほかの一部のプロトコルに提供可能(読み取り専用データに適用)
- 冗長ハードウェアコンポーネント(電源装置を含む)、ネットワークデバイス、およびストレージコントローラ
- 障害管理ソフトウェア。障害が発生したコンポーネントの特定、サービスからの削除、および正常なハードウェアの修復または交換を行う技術者への指針の提供が可能
- ネットワークファブリック冗長性(LACP および IPMP 機能で提供)

- 冗長ストレージデバイス (RAID)

ほかの可用性機能についての追加情報は、このドキュメントの適切なセクションを参照してください。

クラスタ化とスタンドアロンのどちらの Oracle ZFS Storage Appliance 構成を選択するのかを決定する際は、クラスタ化操作のコストと利点を比較検討することが重要になります。クラスタ化を自動的な構造決定であると見なすことが IT 業界全体の常識ですが、この認識はこの業界の一部のベンダーによって広められた、クラスタ化のリスクと利益の理想像が反映されています。クラスタ化では、2 番目のコントローラに伴う明らかに高い先行投資、現在進行中のハードウェアおよびサポートのコストに加えて、技術上および運用上のリスクも課されます。このようなリスクの一部は、すべての担当者にクラスタ化操作の訓練を徹底的に行うことによって軽減できます。その他のリスクは、クラスタ化操作の概念に固有のもので、リスクには次のものがあります。

- テイクオーバー中のプロトコル依存の動作で、アプリケーションの耐性がなくなる可能性がある
- クラスタソフトウェア自体で障害が発生したり、スタンドアロン操作では発生しないような障害が別のサブシステムで発生したりする可能性がある
- 管理の複雑さが増し、管理タスクの実行時にオペレータエラーが発生する可能性が高い
- 多重障害や重大なオペレータエラーにより、スタンドアロン構成では発生しないようなデータ損失や破損が発生する可能性がある
- 予期しないソフトウェアやハードウェアの状態から回復することがより困難になる。

このようなコストやリスクは基本的なものであり、さまざまな方法で市場のすべてのクラスタ化製品またはクラスタ対応製品 (Oracle ZFS Storage Appliance を含む) に適用されるため、完全に除去したり軽減したりできません。ストレージ設計者は、クラスタ化の主な利点 (まれに発生する壊滅的なハードウェアまたはソフトウェアの障害時に使用できなくなる期間を数時間から数分以下に削減できること) について比較検討する必要があります。コストと利点の分析において、Oracle ZFS Storage Appliance の配備でクラスタ化を使用することが優先されるかどうかは、SLA 条件などのローカル要素、対応可能なサポート担当者とその資格、予算の制約、さまざまな障害が発生する可能性、および可用性を拡張するための代替方針の適切性によって異なります。これらの要素はサイト、アプリケーション、および業務に大きく依存するため、個別に評価する必要があります。このセクションの残りの資料について理解すれば、統合されたストレージインフラストラクチャーの設計および導入時に適切な選択を行うことができます。

## 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタ相互接続 I/O

コントローラ間のすべての通信は、CLUSTERON ハードウェアによって提供される 3 つのクラスタ I/O リンクのいずれか 1 つを介して転送される 1 つ以上のメッセージで構成されます (『Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド』の「コントローラのクラスタ I/O ポート」を参照)。このデバイスは、2 つの低速シリアルリンクと 1 つの Ethernet リンクを提供します。シリアルリンクを使用すると、信頼性が高まります。極端に負荷が高い状態のシステムでは、Ethernet リンクが十分な速さでサービスを提供できない可能性があります。不正な障害検出および不要なテイクオーバーは、クラスタ化されたシステムが負荷に対応するための最悪の手段です。テイクオーバー中に、リクエストは処理されず、代わりにクライアントによってキューに入れられます。これにより、すでに高負荷な状態に加えて、テイクオーバー後に遅延したリクエストが大量に発生します。Oracle ZFS Storage Appliance で使用されるシリアルリンクは、このような障害モードの影響を受けにくくなっています。Ethernet リンクは、再度参加時の同期などのハートビート以外のメッセージに対して、より高パフォーマンスのトランスポートを提供し、バックアップハートビートを提供します。

3 つのリンクはすべて、通常の EIA/TIA-568B (8 線式、ギガビット Ethernet) ストレートケーブルを使用して形成されます。2 つの同じコントローラ間でストレートケーブルを使用するには、『Oracle ZFS Storage Appliance 配線ガイド』の「クラスタケーブルの接続」で示すように、2 つのコネクタの反対のソケットを接続するようにケーブルを使用する必要があります。

クラスタ化コントローラが相互に通信を行うのは、クラスタ相互接続により確立されたセキュアなプライベートネットワーク経由だけで、サービスや管理向けのネットワークインタフェース経由では相互通信を行いません。メッセージは、リモートコントローラの障害を検出するときに使用される通常のハートビートと、リソースマネージャーおよびクラスタ管理サブシステムに関連する、より高いレベルのトラフィックの 2 つの一般的なカテゴリに分類されます。ハートビートは 3 つのすべてのリンク上で送信 (および予期) されます。ハートビートは一定の間隔で継続的に転送され、すべてのハートビートが同一であり、一意の情報が含まれないときは肯定応答も再転送も行われません。その他のトラフィックは、任意のリンク (通常は転送時に最速のリンク) 上に送信できます。このトラフィックでは、より高レベルのソフトウェアで信頼できる転送を保持するために、必要に応じて肯定応答、検証、および再転送が行われます。

メッセージのタイプまたは送信元に関係なく、すべてのメッセージは単一の 128 バイトパケットとして送信され、1 - 68 バイトのデータペイロード、およびデータ整合性を確認するための 20 バイトの検証ハッシュが含まれます。シリアルリンクは 115200 ビット/秒で動作し、9 データビットおよび単一のスタートビットとストップビットが含まれます。Ethernet は 1G ビット/秒で動作します。したがって、シリアルリンクにおける効率的なメッセージ待機時間は約 12.2 ミリ秒です。Ethernet の待機時間は大幅に変動します。一般的な待機時間は数マイクロ秒ですが、アプライアンス管理ソフトウェアにとって効率的な待機時間は、システム負荷のためにより大きくなる可能性があります。

通常、ハートビートメッセージは、3つのすべてのクラスタ I/O リンクで各コントローラによって 50 ミリ秒間隔で送信されます。メッセージ受信の失敗は、200 ミリ秒 (シリアルリンク) または 500 ミリ秒 (Ethernet リンク) 後にリンク障害と見なされます。3つのすべてのリンクで障害が発生した場合、ピアで障害が発生したと想定され、テイクオーバーアービトレーションが実行されます。パニックの場合は、パニックが発生したコントローラが単一の通知メッセージを各シリアルリンク上に転送します。ほかのリンクの状態に関係なく、そのピアではすぐにテイクオーバーが開始されます。このような特徴を考慮すると、通常、クラスタ化サブシステムは次の時間内にそのピアに障害が発生したことを検出できます。

- 550 ミリ秒 (ピアが応答を停止した場合、または電源を喪失した場合)、または
- 30 ミリ秒 (ピアでオペレーティングシステムのパニックを引き起こす致命的なソフトウェアエラーが発生した場合)。

このセクションで説明する値はすべて固定値です。Oracle ZFS Storage Appliance はアプライアンスとして、これらのパラメータを調整する機能を提供しません (必要ありません)。これらの値は、実装の詳細と見なされており、ここでは情報目的でのみ提供されます。いつでも通知なしで変更されることがあります。

---

**注記** - クラスタの物理的な再配置のあとのデータ破損を回避するために、すべてのクラスタ配線が新しい場所に正しく設置されていることを確認してください。詳細は、[220 ページの「スプリットブレイン」状態の回避](#)を参照してください。

---

### 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタリソース管理

リソースマネージャーは、適切なネットワークインタフェースセットが plumb され、適切なストレージプールがアクティブであり、多数の構成パラメータが2つのクラスタ化コントローラ間で同期化された状態であることを確認する役割があります。このサブシステムのアクティビティの大部分は、管理者には表示されません。ただし、重要な側面が1つ表示されます。リソースは、インポート (アクティブ化) されるタイミングおよびインポート (アクティブ化) するかどうかによって複数のタイプに分類されます。アクティブの定義は、リソースクラスによって異なることに注意してください。たとえば、ネットワークインタフェースはネットクラスに属し、インタフェースが起動したときにアクティブになります。

もっとも重要な3つのリソースタイプは、シングルトン、プライベート、およびレプリカです。

- **レプリカリソース** - レプリカはもっとも単純です。管理者には表示されず、クラスタ構成画面にも表示されません。レプリカは常に存在し、両方のコントローラで常



にアクティブです。一般に、これらのリソースは単純に、2つのコントローラ間で同期化する必要があるサービスプロパティ用のコンテナとして動作します。

- **シングルトンリソース** - レプリカと同様に、シングルトンリソースでは状態が同期化されます。ただし、シングルトンは正確に1つのコントローラで常にアクティブになっています。管理者は、各シングルトンが通常アクティブになっているコントローラを選択できます。該当コントローラに障害が発生すると、そのピアでシングルトンがインポートされます。シングルトンは、クラスタ化の可用性特性にとって重要です。シングルトンは、通常、障害が発生したコントローラから動作しているピアに移動すると考えられているリソースであり、ネットワークインタフェースおよびストレージプールが含まれます。ネットワークインタフェースはクライアントが既知のストレージサービスセットを検索するとき使用する IP アドレスのコレクションであるため、該当するインタフェースのアドレスへのアクセス時にクライアントに表示されるであろうストレージプールと同じコントローラに、各インタフェースが割り当てられることが重要となります。図 4 では、PrimaryA インタフェースに関連付けられたすべてのアドレスは、常にインポート済みのプール 0 を含むコントローラで提供されます。一方、PrimaryB インタフェースに関連付けられたすべてのアドレスは、常にプール 1 と同じコントローラで提供されます。
- **プライベートリソース** - プライベートリソースは、割り当てられたコントローラにのみ認識され、障害発生時にテイクオーバーされません。一般に、これはネットワークインタフェースでのみ役立ちます。特定のユースケースについては、以降の説明を参照してください。

図 16 ZS3-2 のクラスタ化の例





リソースタイプは、ほかにも複数存在します。これらは、管理者には表示されない実装の詳細です。このようなタイプの1つがシンビオートです。このリソースでは、インポートおよびエクスポートされたときに別のリソースに従うことができます。このリソースタイプのもっとも重要な使用法は、ストレージプールのディスクおよびフラッシュデバイスを表現するときです。このようなリソースはディスクセットと呼ば



れ、リソースが含まれる ZFS プールよりも前に常にインポートされる必要があります。各ディスクセットは、外部ストレージエンクロージャー内のディスクの半分で構成されます。クラスタ化されたストレージシステムには、任意の数のディスクセットを接続でき (ハードウェアサポートによって異なる)、各 ZFS プールは 1 つ以上のディスクセット内のストレージデバイスで形成されます。ディスクセットには ATA デバイスが含まれる場合があるため、マルチパス環境で使用される ATA デバイスに固有のアフィリエーション関連の動作を回避するには、明示的にインポートおよびエクスポートする必要があります。ディスクをリソースとして表現することは、これらのアクティビティーを適切なときに実行するための簡単な方法です。管理者がストレージプールの所有権を設定または変更すると、同時にこれに関連付けられたディスクセットの所有権の割り当ても透過的に変更されます。すべてのシンビオートと同様に、ディスクセットリソースはクラスタ構成ユーザーインタフェースには表示されません。

表 43 クラスタリソース管理

| リソース   | アイコン                                                                              | 偏在      | 障害時のテイクオーバー |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------|---------|-------------|
| シングルトン |  | いいえ     | はい          |
| レプリカ   | なし                                                                                | はい      | 該当なし        |
| プライベート |  | いいえ     | いいえ         |
| シンビオート | なし                                                                                | 親タイプと同じ | 親タイプと同じ     |

新規リソースが作成されると、まずリソースが作成されるコントローラに割り当てられます。コントローラが AKCS\_OWNER 状態でないかぎり、この所有権は変更できません。したがって、通常はリソースを所有するコントローラ上にリソースを作成するか、またはリソースの所有権を変更する前にテイクオーバーする必要があります。一般に、どちらか一方のコントローラからリソースを削除できますが、エクスポートされたストレージプールを削除することはできません。通常、割り当てられた所有者がどちらのコントローラであるかに関係なく、現在管理されているコントローラ上のリソースを破棄すると最適な結果が得られます。

大部分の構成設定 (サービスプロパティ、ユーザー、ロール、アイデンティティマッピング規則、SMB 自動ホーム、iSCSI イニシエータ定義など) は、両方のコントローラで自動的にレプリケートされます。したがって、クラスタの状態に関係なく、これらの設定を両方のコントローラで構成する必要はありません。構成が変更されたときに一方のアプライアンスが停止した場合は、サービスを提供する前に、次のブートでクラスタに再度参加するときに他方のアプライアンスにレプリケートされます。次のような例外が多少あります。

- シェアおよび LUN の定義およびオプションは、そのプールが通常割り当てられているコントローラに関係なく、基になるプールを制御するコントローラにのみ設定できます。
- 「アイデンティティ」サービスの構成 (アプライアンス名や場所など) はレプリケートされません。

- シャーシに指定された名前は、割り当てられたコントローラにのみ表示されます。
- 各ネットワークルートは、特定のインタフェースにバインドされます。各コントローラに特定のサブネット内のアドレスを持つインタフェースが割り当てられ、そのサブネットにアプライアンスがトラフィックを制御するためのルーターが存在する場合は、同じゲートウェイアドレスが使用されている場合でも、インタフェースごとにルートを作成する必要があります。これにより、基になるネットワークリソースが2つのコントローラ間をシフトするときに、各ルートが個別にアクティブになることが可能になります。詳細は、[216 ページの「クラスタ化におけるネットワークの考慮点」](#)を参照してください。
- SSH ホスト鍵はレプリケートされず、シェアも行われません。したがって、プライベート管理インタフェースが構成されていない場合、障害が発生したノードに割り当てられたアドレスを使用して CLI にログインしようとすると、鍵が一致しない可能性があります。同じ制限が、BUI へのアクセスに使用される SSL 証明書に適用されます。

そのあと、共通構成が透過的にレプリケートされ、管理者が各アプライアンスコントローラにリソースのコレクションを割り当てることが基本モデルとなります。次に、これらのリソース割り当てによって、クライアントに表示されるストレージリソースにネットワークアドレスがバインドされます。どちらのアプライアンスがリソースのコレクションを制御するのかに関係なく、クライアントは予期されるネットワークの場所で必要なストレージにアクセスできます。



### 関連トピック


- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタのテイクオーバーとフェイルバック

クラスタ化コントローラノードは、常に次の状態のいずれかになります。

表 44 クラスタの状態

| 状態           | アイコン                                                                                | CLI/BUI の表示            | 説明                                                                   |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|----------------------------------------------------------------------|
| UNCONFIGURED |  | クラスタ化が構成されていません        | まったくクラスタ化されていないシステムは、この状態になります。システムが設定中であるか、またはクラスタ設定タスクがまだ完了していません。 |
| OWNER        |  | アクティブ (テイクオーバーが完了しました) | クラスタ化が構成され、このノードでクラスタ内のすべてのシェアリソースが制御されます。クラスタ設定がユーザーインタフェースから完了し    |

| 状態        | アイコン                                                                                | CLI/BUI の表示        | 説明                                                                                                                                                          |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| STRIPPED  |    | 準備完了 (フェイルバックを待機中) | た直後、およびそのピアに障害が発生したことが検出されたとき (テイクオーバー後など) に、システムはこの状態に移行します。管理者が手動でフェイルバック操作を実行するまで、この状態のままです。                                                             |
| CLUSTERED |   | アクティブ              | クラスタ化が構成され、このノードではシェアリソースが制御されません。クラスタ設定がほかのノードのユーザーインタフェースから完了した直後、またはリブート、電源切断、その他の障害が発生したあとに、システムは STRIPPED になります。管理者が手動でフェイルバック操作を実行するまで、ノードはこの状態のままです。 |
| -         |  | クラスタに再度参加しています...  | アプライアンスは最近リブートされたか、内部障害が発生したあとにアプライアンス管理ソフトウェアが再起動しています。リソース状態は再同期化されています。                                                                                  |
| -         |                                                                                     | 不明 (切断または再起動中)     | ピアアプライアンスの電源が切られているか、リブート中であるか、クラスタ相互接続リンクがすべて停止しているか、またはクラスタ化がまだ構成されていません。                                                                                 |

これらの状態間の遷移は、2つの操作 (テイクオーバーとフェイルバック) の一部として発生します。

テイクオーバーは常時発生する可能性があり、ピアの障害が検出されるたびに試みられます。クラスタ構成 CLI または BUI を使用して手動でトリガーすることもでき、これはテストのために役立つことがあります。最後に、テイクオーバーはコントローラがブートし、そのピアが存在しないことを検出すると発生します。これにより、通常は片方のコントローラで永続的に障害が発生したり、両方のコントローラが一時的に電源を喪失したりするときにサービスを再開できます。

フェイルバックは自動的に発生しません。障害が発生したコントローラが修復されブートされると、そのコントローラはクラスタに再度参加し (すべてのリソースのビュー、プロパティ、および所有権の再同期化)、管理者がフェイルバック操作を実行するまで待機を継続します。そのときまで、元の動作しているコントローラはすべてのサービスの提供を継続します。これにより、コントローラが本番サービスに戻る前に、最初にテイクオーバーをトリガーした問題の詳細な調査、新規ソフトウェアリビジョンの検証、またはその他の管理タスクを実行できます。フェイルバックはクライアントに大きな影響を与えるため、業務固有の要件およびプロセスに応じてスケジュールするようにしてください。例外が 1 つあります。コントローラ A に障害が発生して、コントローラ B がテイクオーバーしたと想定します。コントローラ A がクラスタに再度参加すると、コントローラ B が存在しないか、障害が発生したことが検出された場合にテイクオーバーの対象になります。原則として、元の問題を調査する機会がない場合でも、サービスを提供しないよりは提供する方が適切です。したがって、以前に障害が発生したコントローラへのフェイルバックは自動的に発生しませんが、テイクオーバーはいつでも実行できます。

クラスタを設定すると、初期状態は設定を OWNER 状態で開始したノードと、STRIPPED 状態のその他のノードで構成されます。初期フェイルバック操作を実行して、STRIPPED ノードにシェアリソースのその部分を渡すと、両方のノードが CLUSTERED 状態になります。両方のクラスタノードに障害が発生するか、電源が切られると、同時起動時にノードが調停され、一方が OWNER 状態になり、他方が STRIPPED 状態になります。

フェイルバック中に、すべての外部リソース (ピアに割り当てられたリソース) がエクスポートされ、そのピアによってインポートされます。障害が発生したためにインポートできないプールでは、STRIPPED ノードのリポートがトリガーされます。障害が発生したプールでフェイルバックを試みると、インポート失敗の結果として STRIPPED ノードがリポートする可能性があります。

サービスの停止時間を最小限に抑えるため、フェイルバックとテイクオーバーの操作中は統計およびデータセットを使用できません。データの収集は行われず、統計を一時停止または再開する試みは、フェイルバックとテイクオーバーの操作が完了してデータの収集が自動的に再開されるまで、すべて遅延されます。

## 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタ化された環境での構成変更

大部分のアプライアンス構成は、サービスプロパティとシェア/LUN プロパティのどちらかで表現されます。シェアおよび LUN プロパティはストレージプール自体のユーザーデータとともに格納されます (したがって、そのストレージリソースの現在の所有者に常にアクセス可能です) が、サービス構成は各コントローラ内に格納されます。両方のコントローラが一貫性のあるサービスを確実に提供するためには、変更が発生したとき、または以前に停止したコントローラがそのピアに再度参加するときに、すべてのサービスプロパティが同期化される必要があります。すべてのサービスはレプリカリソースで表現されるため、どちらかのコントローラでプロパティが変更されるたびに、この同期化はアプライアンスソフトウェアによって自動的に実行されます。

そのため、管理者が構成変更をレプリケートすることは不要で冗長となります。標準の操作手順では、この属性が反映され、初期クラスタ構成が完了したら 2 つのコントローラのどちらかにのみ変更を加えることが求められます。初期クラスタ構成のプロセスでは、既存のすべての構成が新規に構成されたピアにレプリケートされることにも注意してください。一般に、クラスタ化された構成変更では、次の 2 つのベストプラクティスがあります。

- 基になるストレージまたはネットワークインタフェースリソースを現在制御している (新規リソースの作成中の場合は、制御する予定の) コントローラ上で、ストレージおよびネットワーク関連のすべての構成変更を行います。
- 両方のコントローラではなく、どちらかのコントローラ上で、ほかのすべての変更を行います。サイトポリシーでは、この目的でマスターと見なされるコントローラを指定する必要があります。また、機能しているコントローラと構成されているストレージプールの数によって異なります。アプライアンスソフトウェアでは、この区別が行われないことに注意してください。

アムネジア (ピアが機能していない間に個々の構成変更が行われた結果、各コントローラでの変更が失われる) の問題は、大幅に誇張して説明されています。これは、各コントローラ上のシステム構成に個々の変更を行うメカニズムが存在しない Oracle ZFS Storage Appliance で特に当てはまります。このような単純化によって、集中管理された構成リポジトリの必要性と、単純なアプローチに対する議論が大幅に緩和されます。現在どちらのコントローラが動作していても、適切な構成であると想定され、そのピアがブート時に同期化されます。今後の製品拡張では、構成の不一致を解決するための代替ポリシーを選択できるようになりますが、この基本アプローチは簡単で、理解のしやすさも備えています。つまり、2 番目のコントローラでは、既存の本番システムですでに使用されている構成パラメータセットが採用されます (したがって、適切である可能性が高くなります)。確実に適切な状態を維持するために、管理者はクラスタが修復されたらすぐに、障害が発生したコントローラがクラスタに再度参加することを確認してください。

### 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタ化におけるストレージの考慮点

Oracle ZFS Storage Appliance をクラスタ構成で使用するようサイズ変更する際は、次の2つの考慮点が重要となります。

- すべてのプールが同じコントローラによって所有されているか、または2つのコントローラの間で分割されているか。
- 単一障害点なし (NSPF) のプールが必要かどうか。

**ストレージプールの所有権の割り当て** - おそらく、もっとも重要な決定は、すべてのストレージプールの所有権を同じコントローラに割り当てるか、ストレージプール間で分割するかです。表45に示すようないくつかのトレードオフを考慮する必要があります。

通常、公称動作中のスループットを最適化する場合や、フェイルオーバー後のパフォーマンスに問題がない場合を除いて、プールは単一のコントローラに構成するようにしてください。フェイルオーバーした状態時のパフォーマンス特性の正確な変更は、ワークロードの性質やサイズに大きく依存します。一般に、コントローラが特定の軸で最大パフォーマンスに近づくほど、そのコントローラのピアでワークロードをテイクオーバーしたときの、その軸のパフォーマンス低下が大きくなります。当然、複数のプールがある場合は、この低下が両方のワークロードに適用されます。

読み取りキャッシュデバイスは、構成によってコントローラまたはディスクシェルフにあります。

コントローラスロット (内部 L2ARC) に位置する読み取りキャッシュデバイスは、テイクオーバーまたはフェイルバックの状況でデータプールに従いません。読み取りキャッシュデバイスは、デバイスが存在するノード上で読み取りキャッシュデバイスに割り当てられたプールがインポートされる場合のみ、特定のクラスタノードでアクティブになります。追加の構成手順がない場合、フェイルオーバーのために移行されたプールで読み取りキャッシュを使用できません。クラスタピアに所有されていないプールで読み取りキャッシュデバイスを有効にするため、所有されていないノード上のプールを引き継いだあと、ストレージを追加し、構成するキャッシュデバイスを選択します。クラスタノードでの読み取りキャッシュデバイスは、[86 ページの「ストレージの構成」](#)のドキュメントの説明どおりに構成する必要があります。書き込み最適化ログデバイスはストレージファブリックに配置され、どちらのコントローラがプールをインポートしても常にアクセス可能です。

読み取りキャッシュデバイスがディスクシェルフ (外部 L2ARC) にある場合、読み取りキャッシュは常に使用可能です。フェイルバックまたはテイクオーバー操作中に、読み取りキャッシュはコントローラ間で共有可能のままになります。この場合、読み取りパフォーマンスが維持されます。外部読み取りキャッシュ構成の詳細については、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』の「[ディスクシェルフの構成](#)」を参照してください。

**NSPF の構成** - 2 番目に重要なストレージの考慮点は、単一障害点なし (NSPF) でプール構成を使用することです。クラスタ化を使用することはアプリケーションが可用

性を非常に重視することを意味するため、単一のディスクシェルフの障害で可用性が失われるような方法でストレージプールを構成する正当な理由はほとんどありません。このアプローチの弱点は、NSPF 構成では、単一障害点で構成を行うよりディスクシェルフの数がきわめて多く必要になる点です。必要とされる容量が非常に少ない場合、目的の RAID レベルで NSPF を提供するのに十分なディスクシェルフを設置することが経済的ではない場合があります。

次の表では、クラスタ構成についてのストレージプールの所有権について説明します。

表 45 クラスタ化におけるストレージプールの考慮点

| 変数                  | 単一コントローラのプールの所有権                                                                                                                                                                                                                                   | 異なるコントローラによって所有される複数のプール                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 合計スループット (通常の操作)    | いつでも最大で合計 CPU リソースの 50%、DRAM の 50%、および合計ネットワーク接続の 50% をサービスの提供に使用できます。この方法は単純です。単一のコントローラのみがクライアントリクエストを処理するため、他方のコントローラはアイドル状態です。                                                                                                                 | いつでも全 CPU および DRAM リソースをサービスの提供に使用できます。いつでも最大で全ネットワーク接続の 50% を使用できます (フェイルオーバーをサポートするには、各コントローラにダークネットワークデバイスが必要です)。                                                                                                                                                                                                                                         |
| 合計スループット (フェイルオーバー) | 公称動作に関連するスループットの変更はありません。                                                                                                                                                                                                                          | 動作しているコントローラのリソースの 100% がサービスの提供に使用されます。公称動作に関連する合計スループットは、公称動作中の使用率に応じて、およそ 40% から 100% の範囲です。                                                                                                                                                                                                                                                              |
| I/O 待機時間            | フェイルバックまたはテイクオーバー操作中は内部読み取りキャッシュを使用できず、このことにより、使用可能な読み取りキャッシュに適合する読み取りの多いワークロードの待機時間が大幅に増加する可能性があります。書き込み操作の待機時間は影響を受けません。<br><br>外部読み取りキャッシュ構成 (EL2ARC) の場合、読み取りパフォーマンスは影響を受けません。フェイルバックまたはテイクオーバー操作中に読み取りキャッシュがクラスタピア間で共有され、結果として読み取り待機時間はありません。 | フェイルバックまたはテイクオーバー操作中は内部読み取りキャッシュを使用できず、このことにより、使用可能な読み取りキャッシュに適合する読み取りの多いワークロードの待機時間が大幅に増加する可能性があります。コントローラリソースの競合が大きくなると、読み取り操作と書き込み操作の両方の待機時間が増加する可能性があります。これは、通常のコントローラではなく、動作しているコントローラで 2 つのワークロードが実行されると発生します。各コントローラでの公称ワークロードがコントローラの最大性能に達すると、フェイルオーバー状態の待機時間が非常に長くなる可能性があります。<br><br>外部読み取りキャッシュ構成 (EL2ARC) の場合、読み取りパフォーマンスは影響を受けません。フェイルバックまたはテイク |



|          |                                                        |                                                                                                                                |
|----------|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 変数       | 単一コントローラのプールの所有権                                       | 異なるコントローラによって所有される複数のプール<br>オーバー操作中に読み取りキャッシュがクラスタピア間で共有され、結果として読み取り待機時間はありません。                                                |
| ストレージ柔軟性 | 使用可能な物理ストレージはすべて、シェアおよび LUN で使用できます。                   | 特定のプールに割り当てられたストレージのみが、そのプールのシェアおよび LUN で使用できます。ストレージはプール間でシェアされないため、他方のプールには空き領域があるときに 1 つのプールが満杯になると、一部のストレージが無駄になる可能性があります。 |
| ネットワーク接続 | 各コントローラ上のすべてのネットワークデバイスを、そのコントローラがサービスを提供している間に使用できます。 | 各コントローラ上の全ネットワークデバイスの半分のみを、そのコントローラがサービスを提供している間に使用できます。したがって、物理的に別々のネットワークの半数にしか各プールを接続できません。                                 |

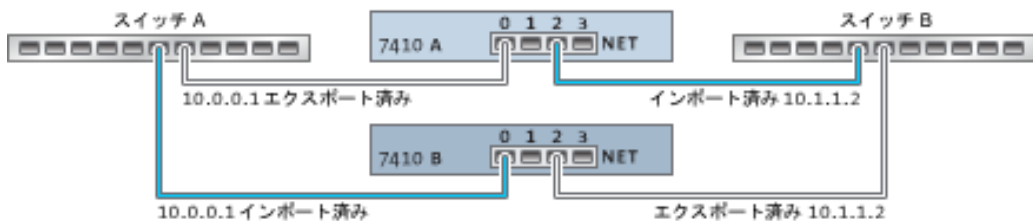
関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## クラスタ化におけるネットワークの考慮点

ネットワークデバイス、データリンク、およびインタフェースに障害が発生しても、クラスタ化サブシステムではコントローラに障害が発生しません。アプライアンスの内部または外部で発生したネットワーク障害から保護するには、IPMP または LACP あるいはその両方を使用する必要があります。可用性に対する包括的なアプローチには、ネットワークの正しい構成、およびネットワーク全体の冗長化計画が必要です。

図 17 ネットワークのクラスタ化





ネットワークインタフェースに静的な IP 構成が含まれる場合は、シングルtonリソースとプライベートリソースのどちらかとして構成できます。DHCP を使用して構成したインタフェースはプライベートにする必要があります、クラスタで DHCP を使用することは推奨されていません。シングルtonリソースとして構成された場合、インタフェースの構築に使用されるすべてのデータリンクおよびデバイスは、一度に1つのコントローラでのみアクティブにできます。同様に、フェイルオーバー状態でサービスを提供するには、各コントローラ上の対応するデバイスを同じネットワークに接続する必要があります。この例は前の図で示しています。

ネットワークインタフェースをデバイスおよびデータリンクから構成する場合は、クラスタが正しく動作するように、各シングルtonインタフェースに同じ識別子を使用するデバイス、および両方のコントローラで使用可能な機能が含まれることが重要になります。デバイス識別子はデバイスタイプおよび最初にアプライアンスで検出される順序によって異なるため、クラスタ化コントローラに同じハードウェアを設置する必要があります。両方のコントローラの各スロットには同じハードウェアを装着する必要があります。公認の Oracle 再販業者またはサービス担当者は、これらの要件を満たすハードウェアアップグレードの計画を支援できます。

常に、ルートは明示的に単一のネットワークインタフェースにバインドされます。ルートはリソースマネージャー内でシブオートとして表現され、バインド先のインタフェースが運用可能なときのみアクティブにできます。したがって、現在スタンバイモードのインタフェースにバインドされたルート (エクスポート済み) は、そのインタフェースがテイクオーバープロセス中に有効化されるまで無効です。これは、2つのプールが構成され、共通のサブネットで使用可能にされる場合に重要です。サブネットが、ほかの1つ以上のネットワークに到達するためにアプライアンスで使用されるルーターのホームであれば、個別のルート (たとえば、2番目のデフォルトルート) を構成して、そのサブネットに接続するアクティブおよびスタンバイの各インタフェースにバインドする必要があります。

例:

- インタフェース e1000g3 は 'alice' に割り当てられ、e1000g4 は 'bob' に割り当てられています。
- 各インタフェースは 172.16.27.0/24 ネットワーク内のアドレスを持ち、172.16.27.1 経由で到達可能な 172.16.64.0/22 ネットワーク内のクライアントにサービスを提供するために使用できます。
- 172.16.27.1 経由で 172.16.64.0/22 に到達するルートを 2つ作成する必要があります。1つは e1000g3 にバインドし、もう1つは 1000g4 にバインドします。

各クラスタ化コントローラに、管理のみに使用される IP アドレス (ほとんどの場合は専用の管理ネットワーク上にある) を割り当て、インタフェースをプライベートリソースとして指定することは得策です。これにより、AKCS\_STRIPPED 状態で、フェイルバックの待機中である場合でも、管理ネットワークから動作中のコントローラに到達できるようになります。これが重要なのは、コントローラがサービスを提供し

ていないときに、LDAP や Active Directory などのサービスが使用中で、ほかのネットワークリソースへのアクセスが必要となる場合です。これが現実的でない場合は、システムコンソールを使用してコントローラを管理できるように、信用できるネットワークまたはシリアル端末あるいはその両方にサービスプロセッサを接続する必要があります。

これらのアクションのどちらも実行しない場合は、フェイルバックが完了するまで、新規にブートしたコントローラの管理またはモニターができません。特定のストレージプール用のサービスを提供しているコントローラをモニターまたは管理することが必要な場合があります。これが役立つ可能性が高いのは、ストレージ自体の一部を変更 (シェアプロパティの変更や新規 LUN の作成など) する必要がある場合です。これを行うには、管理タスクを実行するサービスインタフェースのいずれかを使用するか、一致するプールを管理するためにのみ使用される個別のシングルトンインタフェースを割り当てます。どちらの場合でも、管理に使用されるプールと同じコントローラにインタフェースを割り当てるようにしてください。

#### 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## プライベートのローカル IP インタフェース

プライベートのローカル IP インタフェースを作成する際は、次のガイドラインを使用してください。

- クラスタピアのプライベート IP インタフェースと同じ名前 IP インタフェースを作成すると、プライベート IP インタフェースがローカルで作成されます。
- ピアのプライベートインタフェースが使用しているデータリンクは削除できず、削除ボタンはグレー表示されます。
- IPMP グループに属する IP インタフェースは、すべて同じタイプで、同じコントローラに属する必要があります。IPMP グループを作成する場合は、すべてシングルトンインタフェースを使用するか、すべてプライベート IP インタフェースを使用する必要があります。またクラスタノードがこれらのインタフェースの所有者である必要があります。
- IPMP グループのタイプは作成時にのみ設定され、ベースとなるリンクのタイプによって決まります。
- IP インタフェースの所有権は IPMP グループの所有権から独立して変更できないため、IPMP グループに属する IP インタフェースは「クラスタ:リソース」ページに表示されません。
- プライベート IPMP グループのタイプまたは所有権は変更できないため、このグループは「クラスタ:リソース」ページに表示されません。

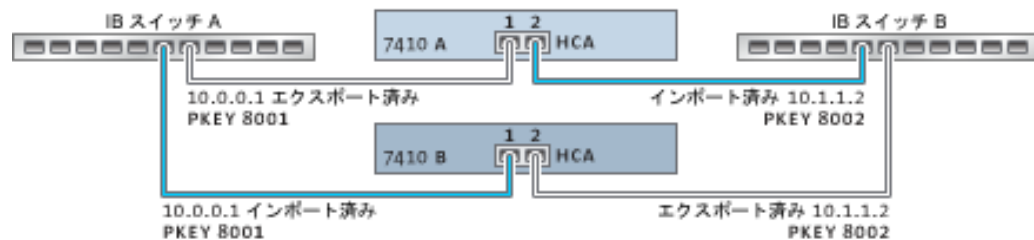
#### 関連トピック

- 199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン (CLI)」

## クラスタ化における Infiniband の考慮点

Ethernet デバイス上に組み込まれたネットワークと同様に、アプライアンスの内部および外部でのネットワーク障害から保護するには、Infiniband ネットワークを冗長フェブリックトポロジの一部にする必要があります。ネットワークトポロジには、HCA、スイッチ、およびサブネットマネージャーの広範囲な冗長計画とともに、リンクレベルでのネットワーク障害から保護する IPMP を追加するようにしてください。

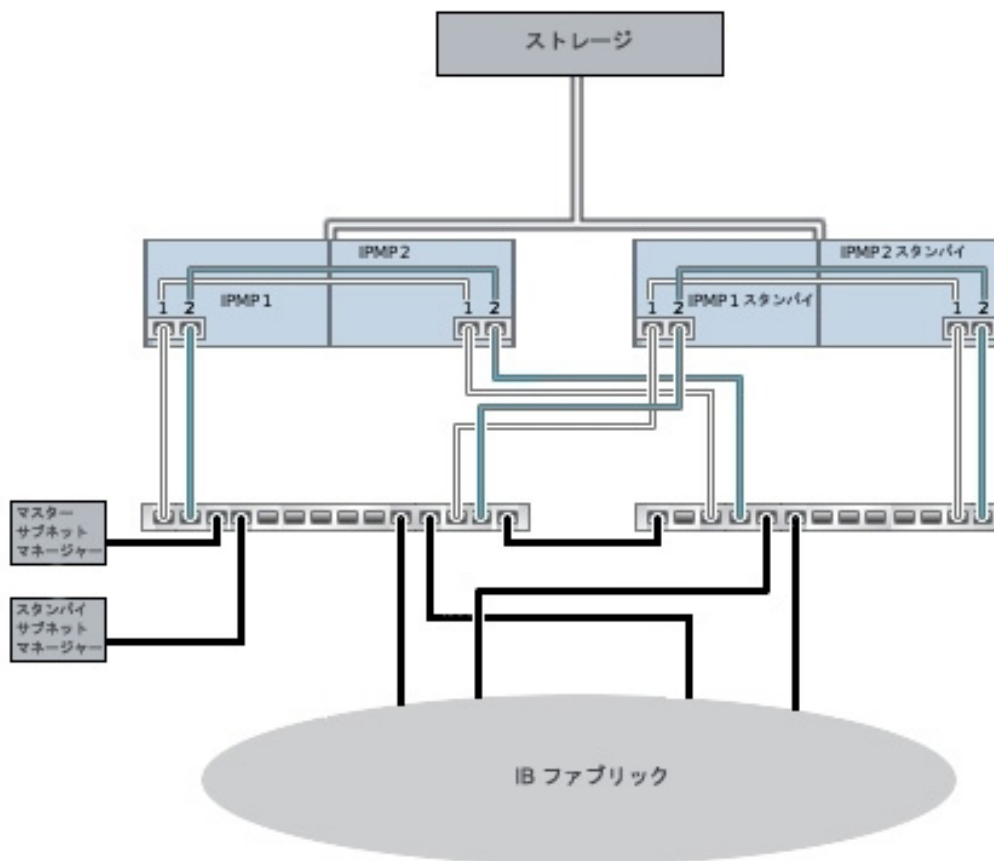
図 18 クラスタ化における Infiniband の考慮点



適切なクラスタ構成を確保するには、各コントローラに同一スロットの同一 HCA を装着する必要があります。さらに、対応する各 HCA ポートを、同一メンバーシップ権限を持つサブネットマネージャー上の同じパーティション (pkey) に構成し、同じネットワークに接続する必要があります。複雑さを減らして適切な冗長性を確保するには、各ポートが Infiniband サブネットワーク内の 1 つのパーティションにのみ属することをお勧めします。ネットワークインタフェースに静的な IP 構成が含まれる場合は、シングルトニリソースとプライベートリソースのどちらかとして構成できます。シングルトニリソースとして構成された場合、インタフェースの構築に使用されるすべての IB パーティションデータリンクおよびデバイスは、いつでも 1 つのコントローラでのみアクティブにできます。この具体的な例が上の図に示されています。対応するポートのパーティションメンバーシップの変更は、前述のクラスタ化規則と整合性がある方法で同時に発生する必要があります。公認の Oracle 再販業者またはサービス担当者は、これらの要件を満たすハードウェアアップグレードの計画を支援できます。

次の図は、サブネットマネージャー冗長性のためのクラスタ構成を示しています。2 つのデュアルポート HCA をサーバスイッチの冗長ペアに接続すると、冗長性が高くなります。

図 19 サブネットマネージャー冗長性のためのクラスタ構成



### 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## 「スプリットブレイン」状態の回避

クラスタ化されたシステムの一般的な障害モードは、スプリットブレインと呼ばれます。この状況では、各クラスタ化コントローラは、そのピアに障害が発生したと見なされ、テイクオーバーが試みられます。追加ロジックが存在しない状況では、診断

や修正が困難な予期しない壊滅的な動作が広範囲にわたって発生する可能性があります。この状況は、一般的にコントローラでシェアされた通信媒体に障害が発生することが要因となります。Oracle ZFS Storage Appliance の場合は、クラスタ I/O リンクに障害が発生すると生じます。アプライアンスソフトウェアでは、組み込みトリプルリンク冗長に加えて (テイクオーバーの発生を回避するには、単一リンクのみが必要です)、コントローラがテイクオーバーを継続する必要があるかどうかを決定するアービトレーション手順も実行されます。

同様の製品では、数多くのアービトレーションメカニズムが採用されています。一般には、定足数ディスク (SCSI 予約を使用) または定足数サーバーを使用する必要があります。追加ハードウェアを必要としない ATA ディスクの使用をサポートするために、Oracle ZFS Storage Appliance は、ストレージファブリック自体に依存する別のアプローチを使用して、必要な相互排他性を提供します。アービトレーションプロセスは、ストレージファブリックに定義済みの順序で表示される各 SAS エクスパンダ上での SAS ZONE LOCK コマンドの実行で構成されます。どちらかのアプライアンスで、このようなすべてのロック取得の試みに成功すると、テイクオーバーが続行されます。他方のアプライアンスは自分自身をリセットします。ブートして、そのピアが到達不能であることを検出したクラスタ化されたアプライアンスは、テイクオーバーを試みて、同じアービトレーションプロセスに移行するため、1 つ以上のクラスタ I/O リンクが復元されるまで、繰り返しリセットされます。これにより、他方のコントローラであとに発生する障害によって、機能停止が延長されることはありません。これらの SAS ゾーンのロックは、フェイルバックが実行されるか、AKCS\_OWNER 状態のコントローラがストレージファブリックへの自分のアクセスを最後に更新してから約 10 秒経過すると解除されます。

このアービトレーションメカニズムは単純で、費用がかからず、追加のハードウェアも必要ありませんが、ストレージファブリック内の 1 つ以上の共通 SAS エクスパンダにアクセスしている両方のクラスタ化されたアプライアンスに依存します。通常の場合では、各アプライアンスがすべてのエクスパンダにアクセスし、アービトレーションは 2 つ以上の SAS ゾーンのロックで構成されます。ただし、アプライアンスが共通のエクスパンダにアクセスしない多重障害シナリオが発生する可能性があります。たとえば、2 本の SAS ケーブルが取り除かれるか、ディスクシェルフの電源が切られると、各アプライアンスはエクスパンダの個々のサブネットにアクセスします。この場合、各アプライアンスは正常に到達可能なすべてのエクスパンダをロックし、そのピアに障害が発生したと判断して、テイクオーバーの続行を試みます。これにより、ディスクアフィリエーションの競合や重大なデータ破損のために、回復不能なハングアップに至る可能性があります。

この状況の結果は重大ですが、これは多重障害の場合にしか発生しないことに注意してください (4 つ以上の障害の場合にのみ、しばしば発生します)。Oracle ZFS Storage Appliance に組み込まれたクラスタ化解決方法は、単一障害点なしを実現し、不要なコストや複雑さをシステムに追加せずに、発生しやすい障害からデータと可用性の両方を保護するように設計されています。大規模な多重障害が発生すると、サービスまたはデータあるいはその両方が失われる可能性があります。これは RAID なしのレイアウトでは無制限のディスク障害から保護できないのと同様です。

図 20 スプリットブレインの回避



さいわいにも、このような障害シナリオの大部分はヒューマンエラーから発生し、ハードウェアを正しくインストールして、クラスタ設定および管理のベストプラクティスの訓練をスタッフに実施すれば完全に回避できます。管理者は3つのすべてのクラスタ I/O リンクが接続され機能していること (図を参照)、およびすべてのストレージ配線がアプライアンスに付属するセットアップポスターで示すとおり接続されていることを常に確認する必要があります。クラスタを本稼動に移行する前およびそのあとはいつでも、各ディスクシェルフ (図を参照) への2つのパスが検出されることが特に重要になります。容量の増加や障害のあるコンポーネントの交換をサポートするために一時的に配線を変更する場合は、当然例外です。管理者はアラートを使用して、クラスタ相互接続リンクおよびディスクシェルフパスの状態をモニターし、障害を迅速に修正するようにしてください。適切な接続を保持すると、ハードウェアまたはソフトウェアコンポーネントに障害が発生した場合でも、可用性とデータ整合性の両方が保護されます。

図 21 クラスタの 2 つのパス



## 関連トピック

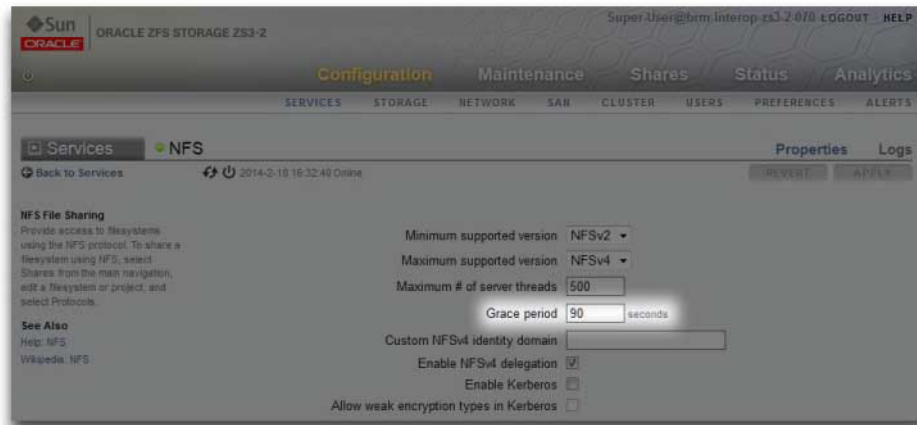
- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)

## テイクオーバーの影響の見積もりと削減

テイクオーバーおよびフェイルバックの最中には間隔があり、この間はストレージへのアクセスをクライアントに提供できません。この間隔の長さは構成によって異なり、クライアントに与える正確な影響は、データアクセスに使用しているプロトコルに依存します。これらの影響を理解して緩和することにより、正常なクラスタ配備と最悪のタイミングでのコストのかかる障害とを区別できるようになります。

一般に、NFS (すべてのバージョン) クライアントは機能停止をアプリケーションソフトウェアから非表示にします。これにより、サーバーが使用不可の間は I/O 操作が遅延します。NFSv2 および NFSv3 は、サービス復元のほぼ直後に回復するステートレスプロトコルです。NFSv4 は起動時にクライアント猶予期間を組み込み、一般にこの間は I/O を実行できません。Oracle ZFS Storage Appliance では、この猶予期間を調整できます。猶予期間を短縮すると、テイクオーバーまたはフェイルバックあるいはその両方の明らかな影響が少なくなります。計画的な停止の場合、Oracle ZFS Storage Appliance は、NFSv4 クライアントに対して猶予なしの回復を提供するため、猶予期間の遅延が回避されます。猶予なしの回復の詳細は、[239 ページの「NFS サービスのプロパティ」](#)の猶予期間プロパティを参照してください。

図 22 クラスタの猶予期間



サービス中断中の iSCSI 動作はイニシエータに依存しますが、一般に、サービスがクライアント固有のタイムアウト期間内に復元されると、イニシエータは回復します。詳細は、イニシエータのドキュメントを確認してください。一般に、iSCSI ターゲットはテイクオーバーの完了直後に、追加の遅延なしでサービスを提供できます。

SMB、FTP、および HTTP/WebDAV はコネクション型のプロトコルです。これらのサービスに関連付けられたセッション状態は、基になるストレージおよびネットワーク接続とともに転送できないため、これらのプロトコルのいずれかを使用するすべてのクライアントはテイクオーバーまたはフェイルバック中に切断され、操作の完了後に再接続する必要があります。

複数の要素でテイクオーバー時間 (およびこれに密接に関連するフェイルバック時間) が影響を受けますが、大部分の構成で、これらの時間はディスクセットリソースのインポートに必要な時間で占められます。ディスクセットごとの一般的なインポート時間は、15 秒から 20 秒の範囲です (ディスクセット数にリニアに比例します)。半分のディスクシェルフのディスクベイがストレージプールに取り込まれて割り当てられた場合、ディスクセットは 1つのディスクシェルフの半分で構成されます。未割り当てのディスクおよび空のディスクベイは、テイクオーバー時間に影響を与えません。ディスクセットリソースのインポートにかかる時間は、管理者によって調整または変更可能なパラメータの影響を受けません。したがって、クラスタ化された配備を計画している管理者は、次のいずれかを行うようにしてください。

- 関連するテイクオーバー時間をクライアントが許容できるように、インストール済みのストレージを制限します。または
- 予測される最大テイクオーバー時間を超えるようにクライアント側タイムアウト値を調整します。



通常はディスクセットのインポートは大部分がテイクオーバー時間で構成されますが、唯一の要素ではないことに注意してください。プールのインポートプロセス中に、インテントログの記録を再実行する必要があります。各シェアおよび LUN は適切なサービスを使用してシェアする必要があります。単一のシェアまたは LUN におけるこれらのアクティビティの実行に必要な時間の合計は、非常に短い時間 (数十ミリ秒程度) ですが、シェア数が多くなると、テイクオーバー時間に大きく影響する可能性があります。したがって、シェア数を比較的少なく (数千個以下に) 保持すると、これらの時間を大幅に短縮できます。

通常、どのような構成でも、フェイルバック時間はテイクオーバー時間よりも長くなります。これは、フェイルバックが次のような 2 段階の操作であるためです。まず、ソースアプライアンスが、割り当てられた所有者以外のすべてのリソースをエクスポートします。次にターゲットアプライアンスが、独自に割り当てられたリソースでのみ標準テイクオーバー手順を実行します。したがって、障害発生時には、常にコントローラ A からコントローラ B へのフェイルバックの方が、コントローラ B からコントローラ A へのテイクオーバーよりも時間がかかります。この追加のフェイルバック時間は、テイクオーバー時間に比べるとエクスポートされるディスクセットの数に依存しません。したがって、シェアおよび LUN の数を少なく維持すると、フェイルバックへの影響はテイクオーバーよりも大きくなる可能性があります。フェイルバックは常に管理者によって開始される点に留意することも重要です。したがって、フェイルバックにより発生するサービス中断が長くなる場合は、業務の混乱がもっとも少ない時間にスケジュールできます。

---

**注記** - このセクションに記載した推定時間は、ソフトウェア/ファームウェアバージョン 2009.04.10.1-0 の場合のものです。その他のバージョンでの実行は異なり、実際のパフォーマンスは異なる可能性があります。クラスタ化されたアプライアンスを本番環境に配備する前に、テイクオーバーおよびクライアントアプリケーションへの正確な影響をテストすることが重要です。

---

## 関連トピック

- [199 ページの「クラスタ構成のシャットダウン \(CLI\)」](#)



# アプライアンスサービス

---

アプライアンスサービスは、BUIの「構成」>「サービス」画面またはCLIの `configuration services` コンテキストから容易に管理できます。

アプライアンスサービスの表示と管理には、次のタスクを使用します。

- [228 ページの「BUIでのサービスの表示」](#)
- [229 ページの「CLIでのサービスの選択」](#)
- サービスの有効化 - BUI、CLI
- サービスの無効化 - BUI、CLI
- [231 ページの「CLIでのサービスの状態の表示」](#)
- [231 ページの「CLIでのサービスヘルプの表示」](#)
- サービスプロパティの設定 - BUI、CLI
- サービスログの表示 - BUI、CLI
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

個々のサービスの構成については、次の表からいずれかのサービスを選択します。

| データサービス                      | ディレクトリサービス                       | システム設定                   | リモートアクセス                    |
|------------------------------|----------------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| <a href="#">NFS</a>          | <a href="#">NIS</a>              | <a href="#">DNS</a>      | <a href="#">SSH</a>         |
| <a href="#">iSCSI</a>        | <a href="#">LDAP</a>             | <a href="#">IPMP</a>     | <a href="#">RESTful API</a> |
| <a href="#">SMB</a>          | <a href="#">Active Directory</a> | <a href="#">NTP</a>      |                             |
| <a href="#">FTP</a>          | <a href="#">アイデンティティーマッピング</a>   | <a href="#">フォンホーム</a>   |                             |
| <a href="#">HTTP</a>         |                                  | <a href="#">動的ルーティング</a> |                             |
| <a href="#">NDMP</a>         |                                  | <a href="#">サービスタグ</a>   |                             |
| <a href="#">リモートレプリケーション</a> |                                  | <a href="#">SMTP</a>     |                             |
| <a href="#">シャドウ移行</a>       |                                  | <a href="#">SNMP</a>     |                             |
| <a href="#">SFTP</a>         |                                  | <a href="#">Syslog</a>   |                             |
| <a href="#">SRP</a>          |                                  | <a href="#">システム識別情報</a> |                             |
| <a href="#">TFTP</a>         |                                  |                          |                             |



| データサービス                  | ディレクトリサービス | システム設定 | リモートアクセス |
|--------------------------|------------|--------|----------|
| <a href="#">ウイルススキャン</a> |            |        |          |

## サービスの管理

アプライアンスサービスの管理には、次のタスクを使用します。

- [228 ページの「BUI でのサービスの表示」](#)
- [229 ページの「CLI でのサービスの選択」](#)
- サービスの有効化 - BUI、CLI
- サービスの無効化 - BUI、CLI
- [231 ページの「CLI でのサービスの状態の表示」](#)
- [231 ページの「CLI でのサービスヘルプの表示」](#)
- サービスプロパティの設定 - BUI、CLI
- サービスログの表示 - BUI、CLI
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

### ▼ BUI でのサービスの表示

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. 特定のサービスのプロパティを表示または編集するには、サービス名の左側にあるサービスのステータスアイコンの上にマウスポインタを置きます。  
ステータスアイコンが矢印アイコン  に変わります。
3. 矢印アイコン  をクリックすると、選択したサービスのプロパティ画面が表示されます。
4. どのサービス画面でも、サービスのタイトル (各画面の左上近く) の左にある小さい矢印のアイコンをクリックすると、すべてのサービスのサイドパネルを表示できます。このアイコンを再度クリックすると、リストが非表示になります。

#### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(BUI\)」](#)
- [232 ページの「サービスプロパティの設定 \(BUI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ CLI でのサービスの選択

サービスを選択すると、その状態の表示、有効化や無効化、およびプロパティの設定を行うことができます。

1. **configuration services** に移動します。
2. サービスを選択するには、その名前を入力します。たとえば、**nis** と入力します。



```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis>
```

### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(CLI\)」](#)
- [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスの有効化 (BUI)

オンラインではないサービスを有効にするには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. 電源アイコン  をクリックして、サービスをオンライン  にします。

### 関連トピック

- [230 ページの「サービスの無効化 \(BUI\)」](#)
- [232 ページの「サービスプロパティの設定 \(BUI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスの有効化 (CLI)

オンラインではないサービスを有効にするには、次の手順を使用します。

1. **configuration services** に移動します。
2. サービスを有効にするには、サービスを選択してから **enable** コマンドを入力します。



```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis> enable
```

#### 関連トピック

- [230 ページの「サービスの無効化 \(CLI\)」](#)
- [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスの無効化 (BUI)

オンラインのサービスを無効にするには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. 電源アイコン  をクリックして、サービスをオフライン  にします。

#### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(BUI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスの無効化 (CLI)

オンラインのサービスを無効にするには、次の手順を使用します。

1. **configuration services** に移動します。
2. サービスを無効にするには、サービスを選択してから **disable** コマンドを入力します。

```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis> disable
```

### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ CLI でのサービスの状態の表示

サービスの状態を表示するには、次の手順を使用します。

1. **configuration services** に移動します。
2. すべてのサービスの現在の状態を一覧表示するには、**show** コマンドを入力します。
3. 個々のサービスの状態を表示するには、サービスを選択してから **show** と入力します。

```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis> show
Properties:
 <status> = online
 domain = fishworks
 broadcast = true
 ypservers =
```

### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(CLI\)」](#)
- [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ CLI でのサービスヘルプの表示

サービスに使用可能なコマンドを表示するには、次の手順を使用します。

1. **configuration services** に移動します。
2. サービスを選択し、**help** と入力します。

```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis> help
Subcommands that are valid in this context:
```








|              |                                                                                                                                                                     |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| help [topic] | => Get context-sensitive help. If [topic] is specified, it must be one of "builtins", "commands", "general", "help", "script" or "properties".                      |
| show         | => Show information pertinent to the current context                                                                                                                |
| commit       | => Commit current state, including any changes                                                                                                                      |
| done         | => Finish operating on "nis"                                                                                                                                        |
| enable       | => Enable the nis service                                                                                                                                           |
| disable      | => Disable the nis service                                                                                                                                          |
| get [prop]   | => Get value for property [prop]. ("help properties" for valid properties.) If [prop] is not specified, returns values for all properties.                          |
| set [prop]   | => Set property [prop] to [value]. ("help properties" for valid properties.) For properties taking list values, [value] should be a comma-separated list of values. |

### 関連トピック


- [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスプロパティの設定 (BUI)

「構成」>「サービス」画面では、サービスを表示して変更できます。次の表に、サービス画面のアイコンおよびボタンを示します。

| アイコン                                                                                | 説明                                                              |
|-------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
|  | プロパティの構成やログの表示を行うサービス画面に移動します。このボタンは、サービスの上にマウスのポインタを置くと表示されます。 |
|  | サービスが有効で正常に機能しています。                                             |
|  | サービスがオフラインまたは無効です。                                              |
|  | サービスに問題があり、オペレータの注意が必要です。                                       |
|  | サービスを有効または無効にします                                                |
|  | サービスを再起動します。                                                    |
|  | このサービスの有効/無効が使用できません                                            |



| アイコン                                                                              | 説明                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
|  | 現在使用不可能なサービスを再起動します。最初にサービスを有効にしてください。 |

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. サービスをダブルクリックします。
3. プロパティを変更して、「適用」をクリックします。  
プロパティをリセットするには、「戻す」をクリックします。

### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(BUI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスプロパティの設定 (CLI)

サービスのプロパティを定義するには、次の手順を使用します。プロパティ名は BUI で表示される名前と似ていますが、CLI での名前は通常はそれよりも短く、短縮されている場合もあります。

1. **configuration services** に移動します。
2. サービスを選択して **show** と入力すると、そのサービスに対して設定できるプロパティのリストが、現在の値とともに表示されます。

```
hostname:configuration services> nis
hostname:configuration services nis> show
Properties:
 <status> = online
 domain =
 broadcast = true
 ypservers =
```

3. プロパティを設定するには、**set** コマンドを使用します。

```
hostname:configuration services nis> set domain="mydomain"
 domain = mydomain (uncommitted)
```

4. プロパティを設定したあとで **commit** と入力すると、新しい構成が保存されアクティブになります。

```
hostname:configuration services nis> commit
hostname:configuration services nis> show
Properties:
 <status> = online
```

```

 domain = mydomain
 broadcast = true
 ypservers =

```

### 関連トピック

- [229 ページの「サービスの有効化 \(CLI\)」](#)
- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスログの表示 (BUI)

一部のサービスでは、サービスの問題を診断するのに役立つ情報がサービスのログに記録されます。サービス画面の右上に「ログ」ボタンがある場合、そのサービスにはログが用意されています。サービスログは、サービスの状態が変更された時間と、サービスからのエラーメッセージを示していることがあります。ログの内容は個々の各サービスに固有であり、変更される可能性があります。

1. 「構成」 > 「サービス」に移動し、サービスをダブルクリックします。
2. 「サービス」画面の右上にある「ログ」ボタンをクリックします。

次に、一般的なメッセージの例を示します。

| ログメッセージの例                    | 説明                                                                         |
|------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 起動メソッドの実行中                   | サービスが起動しています                                                               |
| 「起動」メソッドがステータス 0 で終了しました     | サービスが正常に起動したことを報告しました (0 == 成功)                                            |
| 「リフレッシュ」メソッドがステータス 0 で終了しました | サービスの設定がそのサービス構成に基づいて正常にリフレッシュされました                                        |
| 停止メソッドの実行中                   | サービスがシャットダウンしています                                                          |
| 有効                           | (システムのブート中などに) サービスを起動するべきかどうかを確認するためにサービス状態がチェックされ、サービスが有効な状態であることがわかりました |
| 無効                           | (システムのブート中などに) サービスを起動するべきかどうかを確認するためにサービス状態がチェックされ、サービスが無効な状態であることがわかりました |

次の例は、NTP サービスのログです。

```

[Oct 15 21:05:31 Enabled.]
[Oct 15 21:07:37 Executing start method (...).]

```

```
[Oct 15 21:13:38 Method "start" exited with status 0.]
```

例の最初のログイベントは、システムが 21:05 にブートされたことを示しています。21:07:37 の 2 番目のエントリでこのサービスの起動が開始されたことが記録され、21:13:38 に起動が完了しました。NTP の性質とシステムクロックの調整のため、ログに示されるように、このサービスの起動が完了するのに数分かかることがあります。

### 関連トピック

- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)
- [237 ページの「必要なサービスポート」](#)

## ▼ サービスログの表示 (CLI)

- CLI からサービスのログは表示できません。[234 ページの「サービスログの表示 \(BUI\)」](#)の説明に従って BUI を使用してください。

## 使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示

このセクションには、使用可能なアプライアンスサービスが、簡単な説明とポート情報とともに一覧表示されます。次の表で説明されているように、特定のサービスは常にオンになっており無効にできません。

表 46 データサービス

| サービス                  | 説明                                    | 使用されるポート                                                                                     |
|-----------------------|---------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| <a href="#">NFS</a>   | NFSv3 および NFSv4 プロトコル経由でのファイルシステムアクセス | 111 および 2049                                                                                 |
| <a href="#">iSCSI</a> | iSCSI プロトコル経由での LUN アクセス              | 3260 および 3205                                                                                |
| <a href="#">SMB</a>   | SMB プロトコル経由でのファイルシステムアクセス             | SMB-over-NetBIOS 139<br>SMB-over-TCP 445<br>NetBIOS Datagram 138<br>NetBIOS Name Service 137 |
| <a href="#">FTP</a>   | FTP プロトコル経由でのファイルシステムアクセス             | 21                                                                                           |
| <a href="#">HTTP</a>  | HTTP プロトコル経由でのファイルシステムアクセス            | 80                                                                                           |

サービスログの表示 (CLI)

| サービス         | 説明                         | 使用されるポート    |
|--------------|----------------------------|-------------|
| NDMP         | NDMP ホストサービス               | 10000       |
| リモートレプリケーション | リモートレプリケーション               | 216 および 217 |
| シャドウ移行       | シャドウデータ移行                  |             |
| SFTP         | SFTP プロトコル経由でのファイルシステムアクセス | 218         |
| SRP          | SRP プロトコル経由でのブロックアクセス      |             |
| TFTP         | TFTP プロトコル経由でのファイルシステムアクセス |             |
| ウイルススキャン     | ファイルシステムのウイルススキャン          |             |

注記 - 0 - 99 の UID および GID は、将来のアプリケーションで使用するためにオペレーティングシステムベンダーによって予約されています。階層化された製品のエンドシステムユーザーまたはベンダーによるそのような使用はサポートされておらず、使用した場合は今後アプリケーションでセキュリティー関連の問題が発生する可能性があります。

表 47 ディレクトリサービス

| サービス             | 説明                                                                               | 使用されるポート |
|------------------|----------------------------------------------------------------------------------|----------|
| NIS              | NIS サービスからのユーザーおよびグループ認証                                                         |          |
| LDAP             | LDAP ディレクトリからのユーザーおよびグループ認証                                                      | 389      |
| Active Directory | Microsoft Active Directory サーバーによるユーザー認証<br>注記 - 有効にすると、これは常にオンのサービスになり、無効にできません |          |
| アイデンティティマッピング    | Windows エンティティと UNIX ID との対応付け<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません                        |          |

表 48 サービス設定

| サービス     | 説明                                                | 使用されるポート                |
|----------|---------------------------------------------------|-------------------------|
| DNS      | ドメインネームサービスクライアント<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません      | 53                      |
| 動的ルーティング | RIP および RIPng 動的ルーティングプロトコル                       |                         |
| IPMP     | IP フェイルオーバー用の IP マルチパス<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません |                         |
| NTP      | ネットワークタイムプロトコルクライアント                              |                         |
| フォンホーム   | 製品の登録およびサポート構成                                    | 8000 (プロキシで開いているポートに依存) |
| サービスタグ   | 製品のインベントリサポート                                     | 6481                    |

| サービス    | 説明                                                                 | 使用される<br>ポート |
|---------|--------------------------------------------------------------------|--------------|
| SMTP    | 送信メールサーバーの構成<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません                            |              |
| SNMP    | 警告に関するトラップを送信したり、アプライアンスのステータス情報を提供したりするための SNMP                   |              |
| syslog  | 警告に関する syslog メッセージを送信したり、サービスの syslog メッセージを転送したりするための syslog リレー |              |
| システム ID | システムの名前および場所<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません                            |              |

表 49 リモートアクセスサービス

| サービス | 説明                                     | 使用される<br>ポート |
|------|----------------------------------------|--------------|
| SSH  | CLI アクセス用の SSH                         | 22           |
| REST | RESTful API<br>注記 - 常にオンのサービスは無効にできません |              |

表 50 使用可能なセキュリティーサービス

| サービス                                   | 説明             | 使用される<br>ポート |
|----------------------------------------|----------------|--------------|
| NFS のための Kerberos レalm                 | Kerberos V の認証 | 88           |
| Kerberos V のパスワードの変更および設定 (SET_CHANGE) | 464            |              |
| Kerberos V のパスワードの変更および設定 (RPCSEC_GSS) | 749            |              |

## 必要なサービスポート

ネットワーク上のセキュリティーを提供するため、ネットワークアーキテクチャー内部にファイアウォールを配備できます。ポート番号は、ファイアウォール規則の作成に使われ、ホストとサービスを指定して、ネットワーク上でトランザクションを一意に識別します。

次のリストに、アプライアンスの全機能を使用可能にするファイアウォール規則を作成するために最小限必要なポートを示します。

インバウンドポート

- icmp/0-65535 (PING)
- tcp/1920 (EM)

- tcp/215 (BUI)
- tcp/22 (SSH)
- udp/161 (SNMP)

アウトバウンドポート

- tcp/80 (WEB)
- tcp/443 (SSL WEB)

---

注記 - tcp/443 のアウトバウンドポートは、フォンホームメッセージの送信、サポートバンドルのアップロード、および更新通知に使用されます。レプリケーションの場合、可能なかぎり GRE (Generic Routing Encapsulation) トンネルを使用します。これにより、トラフィックがバックエンドインタフェースで実行し、トラフィックを遅くする可能性のあるファイアウォールを回避できます。NFS コアで GRE トンネルを使用できない場合、フロントエンドインタフェース経由でレプリケーションを実行する必要があります。この場合、ポート 216 およびポート 217 も開いている必要があります。

---

Kerberos ポートの場合、[241 ページの「NFS のための Kerberos レルムの構成」](#)を参照してください。

## サービスの構成

サービスの構成については、次の表からいずれかのサービスを選択します。

| データサービス                      | ディレクトリサービス                       | システム設定                   | リモートアクセス                    |
|------------------------------|----------------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| <a href="#">NFS</a>          | <a href="#">NIS</a>              | <a href="#">DNS</a>      | <a href="#">SSH</a>         |
| <a href="#">iSCSI</a>        | <a href="#">LDAP</a>             | <a href="#">IPMP</a>     | <a href="#">RESTful API</a> |
| <a href="#">SMB</a>          | <a href="#">Active Directory</a> | <a href="#">NTP</a>      |                             |
| <a href="#">FTP</a>          | <a href="#">アイデンティティーマッピング</a>   | フォンホーム                   |                             |
| <a href="#">HTTP</a>         |                                  | <a href="#">動的ルーティング</a> |                             |
| <a href="#">NDMP</a>         |                                  | <a href="#">サービスタグ</a>   |                             |
| <a href="#">リモートレプリケーション</a> |                                  | <a href="#">SMTP</a>     |                             |
| <a href="#">シャドウ移行</a>       |                                  | <a href="#">SNMP</a>     |                             |
| <a href="#">SFTP</a>         |                                  | <a href="#">Syslog</a>   |                             |
| <a href="#">SRP</a>          |                                  | <a href="#">システム識別情報</a> |                             |
| <a href="#">TFTP</a>         |                                  |                          |                             |
| <a href="#">ウイルススキャン</a>     |                                  |                          |                             |

## 関連トピック

- [235 ページの「使用可能なアプライアンスサービスの一覧表示」](#)

## NFS 構成

ネットワークファイルシステム (NFS) とは、ネットワーク上でファイルをシェアするための業界標準のプロトコルです。Oracle ZFS Storage Appliance では、NFS バージョン 2、3、および 4 がサポートされています。ファイルシステムの名前空間の構築方法の詳細は、[406 ページの「ファイルシステムの名前空間の操作」](#)を参照してください。ローカルユーザーを含む NFS については、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)を参照してください。

NFS を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [239 ページの「NFS サービスのプロパティ」](#)
- [241 ページの「NFS のための Kerberos レルムの構成」](#)
- [242 ページの「NFS ログと解析」](#)
- [243 ページの「NFS のプロパティ」](#)
- [243 ページの「NFS を介したファイルシステムのシェア」](#)

## NFS サービスのプロパティ

「構成」>「サービス」で、次の NFS サービスのプロパティが使用できます。

- **サポートされる最小バージョン** - このドロップダウンリストを使用して、アプライアンスでサポートされる NFS のバージョンを制御します。
- **サポートされる最大バージョン** - このドロップダウンリストを使用して、アプライアンスでサポートされる NFS のバージョンを制御します。


---

**注記** - NFS の最小バージョンと最大バージョンを同じ値に設定すると、アプライアンスはそのバージョンだけを使用してクライアントと通信します。これは、ある NFS バージョンまたはその他 (ワークロードを含むその NFS バージョンのパフォーマンス特性など) に問題が見つかり、もっとも有効に機能するバージョンだけをクライアントに使用させたい場合に役立つことがあります。

---

- **サーバスレッドの最大数** - 同時に実行される NFS リクエストの最大数を定義します (20 - 1000)。これは、最低でも予測される並行 NFS クライアント数に及ぶようにしてください。デフォルト値は 500 です。
- **猶予時間** - 計画外の停止によるアプライアンスのリブート後に、すべてのクライアントがロック状態を回復する必要がある秒数を定義します (15 - 600 秒)。このプロパティは NFS v4 クライアントのみに影響します (NFS v3 はステートレスで

あるため、再生する状態はありません)。この期間中、NFS サービスは古いロック状態の再生のみを処理します。猶予期間が終了するまで、ほかのサービスリクエストは処理されません。デフォルトの猶予期間は 90 秒です。猶予期間を短くすると、サーバーのリブート後に NFS クライアントはより迅速に処理を再開できますが、そのすべてのロック状態を回復できない可能性が高くなります。計画的な停止期間中、Oracle ZFS Storage Appliance は、NFSv4 クライアントに対して猶予なしのロック状態の回復を提供します。計画的な停止は、更新や、CLI コマンド

`maintenance system reboot` または BUI 電源アイコン  を使用したアプライアンスのリブートなどのイベント中に発生します。計画的な停止の場合、NFS サービスは、猶予期間の遅延を生じさせることなく、すべてのサービスリクエストを処理します。

- **カスタム NFSv4 識別情報ドメイン** - このプロパティを使用して、NFSv4 ユーザーおよびグループ識別情報のマップ用のドメインを定義します。このプロパティを設定しない場合、アプライアンスでは DNS を使用して識別情報のドメインを取得するために、まず `_nfsv4idmapdomain` DNS リソースレコードを確認し、次に DNS ドメイン自体にフォールバックします。
- **NFSv4 数値 ID 文字列を使用** - このプロパティを使用して、NFSv4 クライアントがユーザーおよびグループ ID に数値文字列を使用することを許可します。このプロパティを設定しない場合、ユーザーおよびグループ ID はデフォルトの `user@domain` の形式で交換されます。このプロパティは、認証タイプが `AUTH_SYS` である場合にのみ適用されます。CLI のプロパティは `use_numeric_ids` です。
- **NFSv4 委譲を有効にする** - このプロパティを選択すると、クライアントはファイルをローカルにキャッシュし、サーバーに接続しないで変更を行えます。このオプションはデフォルトで有効になっており、通常はパフォーマンスが向上しますが、ほんの一部の環境では問題が発生することがあります。この設定の無効化は、特定のワークロードのパフォーマンスを慎重に測定し、その設定によって測定可能なパフォーマンスの利点を得られることが検証された場合にのみ行うようにしてください。このオプションは NFSv4 のマウントにのみ影響します。
- **マウント表示** - このプロパティを使用すると、シェアアクセスリストや、NFS クライアントからのリモートマウントに関する情報の可用性を制限できます。「フル」はフルアクセスを許可します。「制限付き」は、クライアントがアクセスを許可されているシェアしか表示できないようにアクセスを制限します。クライアントでは、サーバーで定義されたシェアのアクセスリストや、ほかのクライアントが行なったサーバーからのリモートマウントは表示できません。このプロパティはデフォルトで「フル」に設定されています。
- **Kerberos を有効化** - Kerberos サービスを有効または無効にします。
  - Kerberos での脆弱な暗号化タイプを許可 - DES (`des-cbc-crc`、`des-cbc-md5`) およびエクスポート可能な ArcFour with HMAC/md5 (`arcfour-hmac-exp`) のサポートを有効または無効にします。このプロパティはデフォルトで無効になっています。
  - Kerberos レルム - レルムとはドメインのようなもので、同じマスター KDC の下にあるシステムをグループとして定義する論理ネットワークです。レルム



名は、任意の ASCII 文字列で構成できます。通常、レルム名は DNS ドメイン名と同じですが、このレルム名は大文字で指定します。この表記規則を使用すると、ありふれた名前を使用し続けているときに、Kerberos サービスの問題と DNS 名前空間の問題を区別することができます。

- Kerberos マスター KDC - 各レルムには、主体データベースのマスターコピーを保持するサーバーが含まれている必要があります。マスター KDC とスレーブ KDC のもっとも大きな違いは、マスター KDC だけがデータベース管理リクエストを処理することです。たとえば、パスワードの変更や新しい主体の追加はマスター KDC で行う必要があります。
- Kerberos スレーブ KDC - スレーブには、主体データベースの重複コピーが含まれています。マスター KDC サーバーとスレーブ KDC サーバーはどちらも、認証の確立に使用されるチケットを作成します。
- Kerberos admin 主体 - このプロパティは管理者を識別します。主体名は慣例により、プライマリ、インスタンス、レルムという 3 つのコンポーネントに分けられます。主体は、joe、joe/admin、または joe/admin@ENG.EXAMPLE.COM として指定できます。このプロパティはシステムの Kerberos サービス主体の設定にのみ使用され、保持されません。
- Kerberos admin パスワード - 管理者のパスワードを定義します。このプロパティはシステムの Kerberos サービス主体の設定にのみ使用され、保持されません。
- **Oracle Intelligent Storage Protocol** - NFSv4 サービスには、Oracle Database NFSv4 クライアントが ZFS Storage Appliance NFSv4 サーバーに最適化情報を渡すことができるようにする Oracle Intelligent Storage Protocol のサポートが含まれています。詳細は、[647 ページの「Oracle Intelligent Storage Protocol」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [243 ページの「NFS のプロパティ」](#)
- サービスプロパティの設定 [BUI](#)、[CLI](#)。

## NFS のための Kerberos レルムの構成

Kerberos レルムを構成すると、いくつかのサービス主体が作成され、システムのローカル keytab に必要な鍵が追加されます。NTP サービスの構成は、Kerberos 化された NFS を構成する前に行う必要があります。次のサービス主体が作成され、Kerberos 化された NFS をサポートするように更新されます。

```
host/node1.example.com@EXAMPLE.COM
nfs/node1.example.com@EXAMPLE.COM
```

アプライアンスがクラスタ化されている場合は、クラスタノードごとに主体と鍵が生成されます。

```
host/node1.example.com@EXAMPLE.COM
nfs/node1.example.com@EXAMPLE.COM
```

```
host/node2.example.com@EXAMPLE.COM
nfs/node2.example.com@EXAMPLE.COM
```

これらの主体がすでに作成されている場合は、レلمを構成すると、各主体のパスワードがリセットされます。

KDC と Kerberos 化されたクライアントの設定については、『[Oracle Solaris 11.1 の管理: セキュリティーサービス \(http://docs.oracle.com/cd/E26502\\_01/html/E29015/index.html\)](http://docs.oracle.com/cd/E26502_01/html/E29015/index.html)』を参照してください。NFS プロパティーを Kerberos 用に設定後、「シェア」->「ファイルシステム」->「プロトコル」画面でセキュリティーモードを Kerberos を使用するモードに変更します。

Kerberos 用に次のポートがアプライアンスで使用されます。

- Kerberos V の認証: 88
- Kerberos V のパスワード SET\_CHANGE の変更および設定: 464
- Kerberos V のパスワード RPCSEC\_GSS の変更および設定: 749

**注記** - Kerberos 化された NFS クライアントは、これらの主体の FQDN に解決される IP アドレスを使用してアプライアンスにアクセスする必要があります。たとえば、あるアプライアンスに複数の IP アドレスが構成されている場合、Kerberos 化された NFS クライアントで使用できるのは、そのアプライアンスの FQDN に解決される IP アドレスだけです。

## NFS ログと解析

NFS サービスで利用できるログは次のとおりです。

**表 51** NFS で利用できるログ

| ログ                            | 説明                                               |
|-------------------------------|--------------------------------------------------|
| network-nfs-server:default    | マスター NFS サーバーログです                                |
| appliance-kit-nfsconf:default | アプライアンスの NFS 構成イベントのログです                         |
| network-nfs-cbd:default       | NFSv4 コールバックデーモンのログです                            |
| network-nfs-mapid:default     | NFSv4 ユーザーおよびグループの資格をマップする NFSv4 mapid デーモンのログです |
| network-nfs-status:default    | NFS ロックのクラッシュおよび回復機能を支援する NFS statd デーモンのログです    |
| network-nfs-nlockmgr:default  | ファイルのレコードロック処理をサポートする NFS lockd デーモンのログです        |

「分析」セクションでは、NFS アクティビティーをモニターできます。これには、次のものが含まれます。

- 1 秒あたりの NFS 処理数
- ... 処理の種類別 (読み取り/書き込み/...)
- ... シェア名別
- ... クライアントのホスト名別
- ... アクセスされたファイル名別
- ... アクセス待機時間別

## NFS のプロパティ

次の表は、CLI のプロパティと上記の BUI のプロパティの対応付けを示しています。

表 52 NFS のプロパティ

| CLI のプロパティ             | BUI のプロパティ                                                                   |
|------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| version_min            | サポートされる最小バージョン                                                               |
| version_max            | サポートされる最大バージョン                                                               |
| nfsd_servers           | サーバースレッドの最大数                                                                 |
| grace_period           | 猶予期間                                                                         |
| mapid_domain           | カスタム NFSv4 識別情報ドメイン                                                          |
| use_numeric_ids        | NFSv4 数値文字列 ID を使用                                                           |
| enable_delegation      | NFSv4 委譲を有効にする                                                               |
| mount_visibility       | クライアントのシェア情報の制限レベル                                                           |
| krb5_allow_weak_crypto | Kerberos での脆弱な暗号化タイプ (arcfour-hmac-md5-exp, des-cbc-md5、および des-cbc-crc) を許可 |
| krb5_realm             | Kerberos レルム                                                                 |
| krb5_kdc               | Kerberos マスター KDC                                                            |
| krb5_kdc2              | Kerberos スレーブ KDC                                                            |
| krb5_admin             | Kerberos admin 主体                                                            |

## ▼ NFS を介したファイルシステムのシェア

1. 「構成」 > 「サービス」に移動します。
2. NFS サービスが有効でオンラインになっていることを確認します。有効でない場合は、サービスを有効にします。
3. 「シェア」画面に移動し、既存のシェアを編集するか、または新しいシェアを作成します。

4. 編集しているシェアの「プロトコル」タブをクリックし、NFS シェアが有効になっていることを確認します。

この画面では、NFS シェアモード (読み取り、読み取り/書き込み) の構成も行えます。

## iSCSI 構成

アプライアンスで LUN を構成すると、iSCSI (Internet Small Computer System Interface) ターゲットを介してそのボリュームをエクスポートできます。iSCSI サービスでは、iSCSI イニシエータは iSCSI プロトコルを使用してターゲットにアクセスできます。

このサービスは、iSNS プロトコルを使用した検出、管理、および構成をサポートします。iSCSI サービスは、CHAP を使用して単方向 (ターゲットがイニシエータを認証する) および双方向 (ターゲットとイニシエータが相互に認証する) の両方の認証をサポートします。また、RADIUS データベースでの CHAP 認証データ管理もサポートします。

システムでは、2つの独立した手順で、最初に認証を実行し、2番目に承認を実行します。

---

注記 - iSCSI イニシエータおよびターゲットの構成の例については、[129 ページの「Storage Area Network \(SAN\) の構成」](#)を参照してください。

---

表 53 iSCSI サービスのプロパティ

| プロパティ             | 説明                   |
|-------------------|----------------------|
| iSNS を使用          | iSNS 検出が有効かどうか       |
| iSNS サーバー         | iSNS サーバーです          |
| RADIUS を使用        | RADIUS が有効かどうか       |
| RADIUS サーバー       | RADIUS サーバーです        |
| RADIUS サーバーシークレット | RADIUS サーバーのシークレットです |

ローカルイニシエータに CHAP 名と CHAP シークレットが指定されている場合は、システムによって認証が行われます。ローカルイニシエータに CHAP プロパティが指定されていない場合は、認証が行われないため、すべてのイニシエータが承認の対象となります。

iSCSI サービスでは、イニシエータグループ内で使用できるイニシエータのグローバルリストを指定できます。

イニシエータがターゲットに接続できない場合:

- イニシエータの IQN がイニシエータリストで識別される IQN と一致していることを確認します。
- iSNS サーバーの IP アドレスが正しいことを確認し、さらにその iSNS サーバーが構成されていることも確認します。
- ターゲットの IP アドレスがイニシエータ側で正しいことを確認します。
- イニシエータの CHAP 名およびシークレットが両者で一致していることを確認します。
- ターゲットの CHAP 名およびシークレットがどのイニシエータの CHAP 名およびシークレットとも一致しないことを確認します。
- RADIUS サーバーの IP アドレスとシークレットが正しいことを確認し、さらにその RADIUS サーバーが構成されていることも確認します。
- LUN にアクセスするイニシエータがその LUN のイニシエータグループのメンバーであることを確認します。
- その LUN をエクスポートするターゲットがオンラインになっていることを確認します。
- LUN の動作ステータスがオンラインになっていることを確認します。
- 各 LUN の論理ユニット番号を確認します。

フェイルオーバーまたはフェイルバック中に Red Hat クライアントからの iSER 縮小コピー I/O が動作していない場合、`/etc/iscsi/iscsid.conf` ファイル内の `node.session.timeo.replacement_timeout` パラメータを 300sec に変更します。

### 関連トピック

- サービスプロパティの設定 [BUI](#)、[CLI](#)

## SMB 構成

SMB サービスでは、SMB プロトコルを使用してファイルシステムにアクセスできます。サポートされている SMB のバージョンは、SMB 1、SMB 2.0、および SMB 2.1 です。SMB を介してファイルシステムをシェアするには、[386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)の説明に従ってファイルシステムを構成します。次の表に、SMB 2.1 のサポートされている機能とサポートされていない機能を示します。

表 54 SMB 2.1 のサポートされている機能とサポートされていない機能

| サポートされている機能           | サポートされていない機能 |
|-----------------------|--------------|
| リース                   | ブランチキャッシュ    |
| マルチプロトコルネゴシエーションリクエスト | 耐障害性ハンドル     |
| 個別のライトスルー操作           |              |
| マルチクレジット操作            |              |

ローカルアカウントおよびユーザー ID は Windows のユーザー ID に対応付けられません。 *guest* アカウントは特別な読み取り専用のアカウントであり、アプライアンスで読み取り/書き込み用には構成できません。

SMB を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [246 ページの「SMB サービスのプロパティ」](#)
- [248 ページの「SMB を介してシェアをエクスポートするためのプロパティの設定」](#)
- [249 ページの「NFS と SMB の相互運用性」](#)
- [249 ページの「SMB の DFS 名前空間」](#)
- [250 ページの「SMB の Microsoft スタンドアロン DFS 名前空間管理ツールのサポートマトリックス」](#)
- [251 ページの「ローカル SMB グループへの DFS 名前空間の追加」](#)
- [252 ページの「SMB の自動ホーム」](#)
- [253 ページの「SMB の自動ホーム規則の追加 \(CLI\)」](#)
- [253 ページの「SMB ローカルグループへのユーザーの追加」](#)
- [254 ページの「SMB の MMC の統合」](#)
- [255 ページの「SMB のシェア管理」](#)
- [257 ページの「SMB のユーザー、グループ、および接続」](#)
- [258 ページの「SMB サービスの一覧表示」](#)
- [260 ページの「SMB の構成 \(BUI\)」](#)
- [262 ページの「SMB Active Directory の構成 \(BUI\)」](#)
- [262 ページの「SMB プロジェクトおよびシェアの構成 \(BUI\)」](#)
- [263 ページの「SMB データサービスの構成 \(BUI\)」](#)

## SMB サービスのプロパティ

サービスプロパティの変更は、[232 ページの「サービスプロパティの設定 \(BUI\)」](#) および [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#) にドキュメント化されています。

- **システムコメント** - 意味のあるテキスト文字列です。
- **アイドルセッションタイムアウト** - セッションの非アクティブのタイムアウト設定です。
- **優先ドメインコントローラ** - Active Directory ドメインへの参加時に使用する優先ドメインコントローラ。このコントローラが使用できない場合、Active Directory は DNS SRV レコードや Active Directory サイトを利用して適切なドメインコントローラを見つけます。詳細は、[296 ページの「Active Directory の構成」](#) を参照してください。

- **Active Directory サイト** - Active Directory ドメインへの参加時に使用するサイト。サイトとは、すべてが高帯域で低待機時間のネットワークリンクを使用して接続されるマシンの論理的な集まりです。このプロパティを構成し、優先ドメインコントローラを指定しない場合、Active Directory ドメインに参加すると、このサイトにあるドメインコントローラが外部ドメインコントローラよりも優先されます。
- **サーバースレッドの最大数** - 同時に実行されるサーバースレッド (ワーカー) の最大数。デフォルトは 1024 です。
- **動的 DNS を有効化** - アプライアンスが Active Directory ドメインの DNS レコードを更新するために動的 DNS を使用するかどうかを選択します。デフォルトはオフです。
- **Oplocks を有効化** - アプライアンスが Opportunistic Locks を SMB クライアントに許可するかどうかを選択します。これにより、ほとんどのクライアントのパフォーマンスが向上します。デフォルトはオンです。SMB サーバーは oplock をクライアントプロセスに許可して、ロックが行われている間にクライアントがデータをキャッシュできるようにします。サーバーが oplock を取り消すと、クライアントはキャッシュされたデータをサーバーにフラッシュします。
- **リストを共有する匿名アクセスを制限** - このオプションを有効にした場合、クライアントはシェアリストを受信する前に SMB サービスを認証する必要があります。無効にした場合、匿名クライアントはシェアリストにアクセスできます。
- **プライマリ WINS サーバー** - TCP/IP の設定で構成されたプライマリ WINS アドレスです。
- **セカンダリ WINS サーバー** - TCP/IP の設定で構成されたセカンダリ WINS アドレスです。
- **WINS から除外された IP アドレス** - WINS への登録から除外された IP アドレスです。
- **LAN Manager 互換性レベル** - サポートされている認証モード (LM、NTLM、LMv2、NTLMv2)。それぞれの互換性レベルでサポートされる認証モードの詳細は、Oracle Solaris Information Library の *smb* を参照してください。NTLMv2 は、広く知られているセキュリティーの脆弱性を回避するための推奨の最小セキュリティーレベルです。
- **SMB 署名が有効** - SMB 署名機能を使用した SMB クライアントとの相互運用性が有効になります。パケットが署名されている場合は、署名が検証されます。署名されていないパケットは、署名の検証なしに受け入れられます (SMB 署名が必要な場合 - 下記を参照)。
- **SMB 署名が必要** - SMB 署名が必要な場合は、すべての SMB パケットに署名が必要で、署名がないと拒否されます。また、署名をサポートしないクライアントはサーバーに接続できません。
- **ゼロの VC を無視** - SMB クライアントで新しい接続を確立するときに、ゼロの Virtual Circuit (VC) 番号を指定して、アプライアンスが以前の接続やファイルロックをこのクライアントからすべて除去するようリクエストすることがあります。ただし、このプロトコルアーティファクトでは、クライアントのネットワークアドレス変換 (NAT) や同じホストに割り当てられた複数の DNS エントリを考慮しません。これと組み合わせて、マスクされたネットワークまたは冗長ネットワークの場

所同士でゼロの VC リクエストがやり取りされると、関係のないアクティブな接続がリセットされる可能性があります。デフォルトでは、古いファイルロックを防ぐためにゼロの VC リクエストが受け付けられます。ただし、SMB セッションがエラーで切断されている場合は、ゼロの VC リクエストを無視すると、問題が解決することがあります。

## SMB を介してシェアをエクスポートするためのプロパティの設定

SMB を介してシェアをエクスポートする際に、いくつかのシェアプロパティを特定の方法で設定する必要があります。

表 55 SMB のシェアプロパティ

| プロパティ        | 説明                                                                                                        |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大文字と小文字の区別   | SMB クライアントは大文字小文字を区別しない動作を想定しているため、このプロパティを「混在」または「区別しない」に設定する必要があります。375 ページの「静的プロパティ」を参照してください。         |
| 非 UTF-8 を拒否  | ファイルシステムで UTF-8 以外のファイル名が許可されている場合、SMB クライアントは正しく機能しないことがあります。375 ページの「静的プロパティ」を参照してください。                 |
| ブロック不可の必須ロック | このプロパティを有効にして、バイト範囲ロックが正常に機能できるようにする必要があります。375 ページの「静的プロパティ」を参照してください。                                   |
| リソース名        | クライアントがシェアを参照するときに使用する名前。プロジェクトからこの名前を継承する方法については、408 ページの「シェアおよびプロジェクトプロトコル」を参照してください。                   |
| シェアレベル ACL   | ファイルシステムに格納されている ACL の範囲を超えた別のレイヤーのアクセス制御を追加する ACL。このプロパティの詳細については、423 ページの「ファイルシステムのアクセス制御リスト」を参照してください。 |

「大文字と小文字の区別」および「非 UTF-8 を拒否」プロパティは、シェアの作成時にのみ設定できます。

同じシステムの 2 つの SMB シェアに、同じリソース名を使用することはできません。プロジェクトから継承されたリソース名は特別な動作をします。詳細は、345 ページの「シェアとプロジェクト」を参照してください。リソース名には、次の文字を除く任意の 80 文字未満の英数字を含めることができます。

"/ \ [ ] : | < > + ; , ? \* =



アクセススペースの列挙を有効にすると、クライアントが開くことができないファイルがディレクトリエントリとしてクライアントに表示されることがあります。ディレクトリエントリがフィルタリングされるのは、クライアントがそのファイルに対して何もアクセス権を持っていない場合だけです。たとえば、ACL で読み取りアクセス権だけが付与されている場合に、クライアントが読み取り/書き込みアクセスのためにファイルを開こうとすると、その要求は失敗しますが、ファイルはエントリのリストに含まれたままです。

## NFS と SMB の相互運用性

アプライアンスでは、NFS および SMB クライアントが同時に同じシェアにアクセスできます。アプライアンスを NFS と SMB の相互運用向けに正しく構成するには、次のコンポーネントを構成する必要があります。

- Active Directory サービスを構成します。296 ページの「Active Directory の構成」を参照してください。
- アイデンティティマッピングの方針を決めて、サービスを構成します。302 ページの「アイデンティティマッピングの構成」を参照してください。
- SMB を構成します。245 ページの「SMB 構成」を参照してください。
- シェアでのアクセス制御、ACL エントリ、および ACL 継承を構成します。

SMB および NFSv3 は同じアクセス制御モデルを使用しません。最良の結果を得るためには、SMB アクセス制御モデルがより冗長なモデルであるように、SMB クライアントからルートディレクトリに ACL を構成します。継承可能で簡単な ACL エントリについては、423 ページの「ファイルシステムのアクセス制御リスト」を参照してください。

## SMB の DFS 名前空間

分散ファイルシステム (Distributed File System、DFS) とは、SMB および MSRPC プロトコルを介して提供される仮想化技術です。DFS を使用すると、管理者は、異なるサーバー上にあるシェアフォルダを 1 つ以上の DFS 名前空間に透過的に関連付けることで、それらをグループ化できます。DFS 名前空間は、組織内にあるシェアフォルダの仮想ビューです。管理者は、名前空間に入れるシェアフォルダを選択したり、それらのフォルダが表示される際の階層を設計したり、シェアフォルダが名前空間で示す名前を決めたりできます。ユーザーが名前空間を表示すると、フォルダは単一の大容量ファイルシステムに常駐しているように見えます。ユーザーは、データを収容しているサーバー名やシェアフォルダを認識しなくても、名前空間のフォルダをナビゲートできます。

1 つのシステムにつき 1 つのシェアだけをスタンドアロンの DFS 名前空間としてプロビジョニングできます。ドメインベースの DFS 名前空間はサポートされません。各クラスターノードに別個のストレージプールが備わっている場合でも、1 つのクラスターに

つき 1 つの DFS 名前空間しかプロビジョニングできません。SMB シェアを DFS 名前空間としてプロビジョニングするには、DFS 管理 MMC スナップインを使用してスタンドアロンの名前空間を作成します。

アプライアンスが Active Directory ドメインに参加しない場合、ワークグループのユーザーが DFS 名前空間を変更できるようにするには追加の構成が必要です。SMB ローカルユーザーが DFS 名前空間を作成または削除できるようにするには、そのユーザーにサーバーで作成された別個のローカルアカウントが必要です。SMB ローカルユーザー `dfsadmin` が DFS 名前空間を操作できるようにする手順については、[251 ページの「ローカル SMB グループへの DFS 名前空間の追加」](#)を参照してください。

## SMB の Microsoft スタンドアロン DFS 名前空間管理ツールのサポートマトリックス

次の表に、Windows の各種オペレーティングシステムバージョンの Microsoft DFS ツールの操作 (サブコマンドまたはオプション) を示します。アプライアンスでスタンドアロンの DFS 名前空間を管理するために、これらのうちのどれがアプライアンスの DFS サービスでサポートされているかを識別します。

- **y** - サポートされている
- **n** - サポートされていない
- **NA** - 該当なし

| Microsoft Windows systems   | XP  | 2003 | 2003      | Vista | 2008 | 2008      | Win7 |
|-----------------------------|-----|------|-----------|-------|------|-----------|------|
|                             | SP3 | SP2  | R2<br>SP2 | SP2   | SP2  | R2<br>SP1 | SP1  |
| dfscmd CLI:                 |     |      |           |       |      |           |      |
| /map [comment] [/restore]   | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |
| /unmap                      | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |
| /add [/restore]             | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |
| /remove                     | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |
| /view [/partial   /full]    | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |
| dfsutil CLI (old format):   |     |      |           |       |      |           |      |
| /addstdroot [/comment]      | y   | y    | y         | n     | n    | y         | y    |
| /remstdroot                 | y   | y    | y         | n     | n    | y         | y    |
| /root:<DfsName> /view       | n   | n    | n         | y     | y    | y         | y    |
| /addlink [/comment]         | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /removelink                 | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /state /display             | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /state /enable              | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /state /disable             | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /ttl /display               | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /ttl /set                   | NA  | NA   | NA        | y     | y    | y         | y    |
| /server:<MachineName> /view | y   | y    | y         | y     | y    | y         | y    |

| dfsutil CLI (new format):        |                                   |    |    |    |   |   |   |
|----------------------------------|-----------------------------------|----|----|----|---|---|---|
| root addstd [comment]            | NA                                | NA | NA | n  | n | y | y |
| root remove                      | NA                                | NA | NA | n  | n | y | y |
| root (view namespace)            | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| link add [comment]               | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| link remove                      | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| link (view)                      | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| target add                       | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| target remove                    | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| target (view)                    | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property comment (view)          | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property comment set             | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property ttl (view)              | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property ttl set                 | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property state (view)            | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property state offline           | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| property state online            | NA                                | NA | NA | y  | y | y | y |
| DFS GUI:                         |                                   |    |    |    |   |   |   |
| add standalone root              | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| remove standalone root           | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| change root comment              | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| change root timeout              | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| add link                         | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| remove link                      | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| change link comment              | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| change link timeout              | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| add link's target                | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| remove link's target             | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| enable link's referral (target)  | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| disable link's referral (target) | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| hide root                        | y                                 | y  | y  | y  | y | y | y |
| show root                        | y                                 | y  | y  | y  | y | y | y |
| display links                    | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
| display targets                  | y                                 | y  | y  | n  | n | n | n |
|                                  | XP 2003 2003 Vista 2008 2008 Win7 |    |    |    |   |   |   |
|                                  |                                   | R2 |    | R2 |   |   |   |
|                                  | SP3  SP2  SP2  SP2  SP2  SP1  SP1 |    |    |    |   |   |   |

次のことに留意してください。

- Solaris では DFS リンクターゲットを検証しません。
- コメントおよびタイムアウト (TTL) を変更および表示するための CLI コマンドはルートとリンクの両方に適用されます。
- 状態を表示するための CLI コマンドは、ルート、ルートのターゲット、リンク、およびリンクのターゲットに適用できます。
- 状態を変更するための CLI コマンドは、リンクおよびリンクのターゲットにのみ適用できます。

## ▼ ローカル SMB グループへの DFS 名前空間の追加

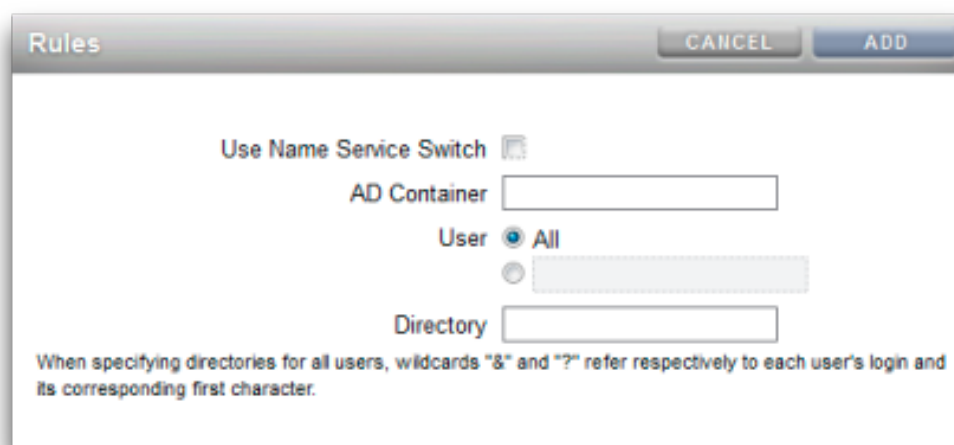
1. ユーザー `dfsadmin` のローカルユーザーアカウントをサーバーで作成します。**Windows マシンでローカルユーザーを最初に作成したときと同じパスワードを必ず使用してください。**

2. **dfsadmin** をローカル **SMB** グループの管理者に追加します。
3. **DFS** 名前空間を変更する **Windows** マシンで **dfsadmin** としてログインします。

## SMB の自動ホーム

Windows ファイル共有では、自動ホームは **SMB** プロトコルを使用してファイルシステムにアクセスできます。自動ホームは、**SMB** を介してシステムにアクセスするユーザーのホームディレクトリシェアを定義して保持します。自動ホーム規則では、**SMB** クライアントをホームディレクトリに対応付けます。

図 23 自動ホーム規則の設定



- **ネームサービススイッチを使用** - ネームサービススイッチ (NSS) をオンまたはオフに切り替えます。NSS 規則とすべてのユーザー用の規則を同時に作成することはできません。
- **AD コンテナ** - Active Directory のコンテナを設定します (例: dc=com,dc=fishworks,ou=Engineering,CN=myhome)。
- **ユーザー** - すべてのユーザーまたは指定したユーザー用の自動ホーム規則を設定します。ユーザーを指定する際の「&」および「?」のワイルドカードは、ユーザーのログインとそれに対応する最初の文字を意味します。
- **ディレクトリ** - その規則のディレクトリを設定します (例: /export/wdp)。

## ▼ SMB の自動ホーム規則の追加 (CLI)

1. `configuration services smb` に移動します。
2. 自動ホーム規則を追加するには `create` コマンドを使用し、既存の規則を一覧表示するには `list` コマンドを使用します。  
この例では、ユーザー「Bill」に対する規則を追加してから、規則を一覧表示します。

```
hostname:> configuration services smb
hostname:configuration services smb> create
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set use_nss=false
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set user=Bill
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set directory=/export/wdp
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set container="dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome"
hostname:configuration services rule (uncommitted)> commit
hostname:configuration services smb> list
RULE NSS USER DIRECTORY CONTAINER
rule-000 false Bill /export/wdp dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome
```

3. ワイルドカード文字を使用して自動ホーム規則を作成します。  
& 文字はユーザーのユーザー名に相当し、? 文字はユーザーのユーザー名の最初の文字に相当します。次の例では、ワイルドカードを使ってすべてのユーザーを適合させます。

```
hostname:configuration services smb> create
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set use_nss=false
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set user=*
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set directory=/export/?/&
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set container="dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome"
hostname:configuration services rule (uncommitted)> commit
hostname:configuration services smb> list
RULE NSS USER DIRECTORY CONTAINER
rule-000 false Bill /export/wdp dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome
```

4. ネームサービススイッチを使用して自動ホーム規則を作成することもできます。

```
hostname:configuration services smb> create
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set use_nss=true
hostname:configuration services rule (uncommitted)> set container="dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome"
hostname:configuration services rule (uncommitted)> commit
hostname:configuration services smb> list
RULE NSS USER DIRECTORY CONTAINER
rule-000 true Bill /export/wdp dc=com,dc=fishworks,
ou=Engineering,CN=myhome
```

## ▼ SMB ローカルグループへのユーザーの追加

ローカルグループとは、追加の権限が付与されるドメインやローカルのユーザーのグループです。

SMB のローカルグループ:

- **管理者** - 管理者は、ファイルの所有権を変更するためのファイルアクセス権を必要としません。
- **バックアップオペレータ** - バックアップオペレータは、ファイルのバックアップと復元のためのファイルアクセス制御を必要としません。

**1. configuration services smb groups に移動します。**

```
hostname:configuration services smb> groups
```

**2. 「create」と入力します。**

```
hostname:configuration services smb groups> create
```

**3. グループに追加するユーザーを指定します。**

```
hostname:configuration services smb member (uncommitted)> set user=Bill
```

**4. グループ名を入力してから、変更を確定します。**

```
hostname:configuration services smb member (uncommitted)> set group="Backup Operators"
hostname:configuration services smb member (uncommitted)> commit
```

**5. list と入力して、指定したグループにユーザーが追加されたことを確認します。**

```
hostname:configuration services smb groups> list
MEMBER USER GROUP
member-000 WINDOMAIN\Bill Backup Operators
```

## SMB の MMC の統合

Microsoft 管理コンソール (MMC) とは、スナップインと呼ばれる、登録されているコンポーネントの拡張フレームワークであり、ネットワーク上のローカルシステムとリモートシステムの両方に包括的な管理機能を提供します。コンピュータの管理は、Microsoft 管理コンソールツールの集まりであり、ローカルとリモートのサービスやリソースの構成、モニター、および管理に使用できます。

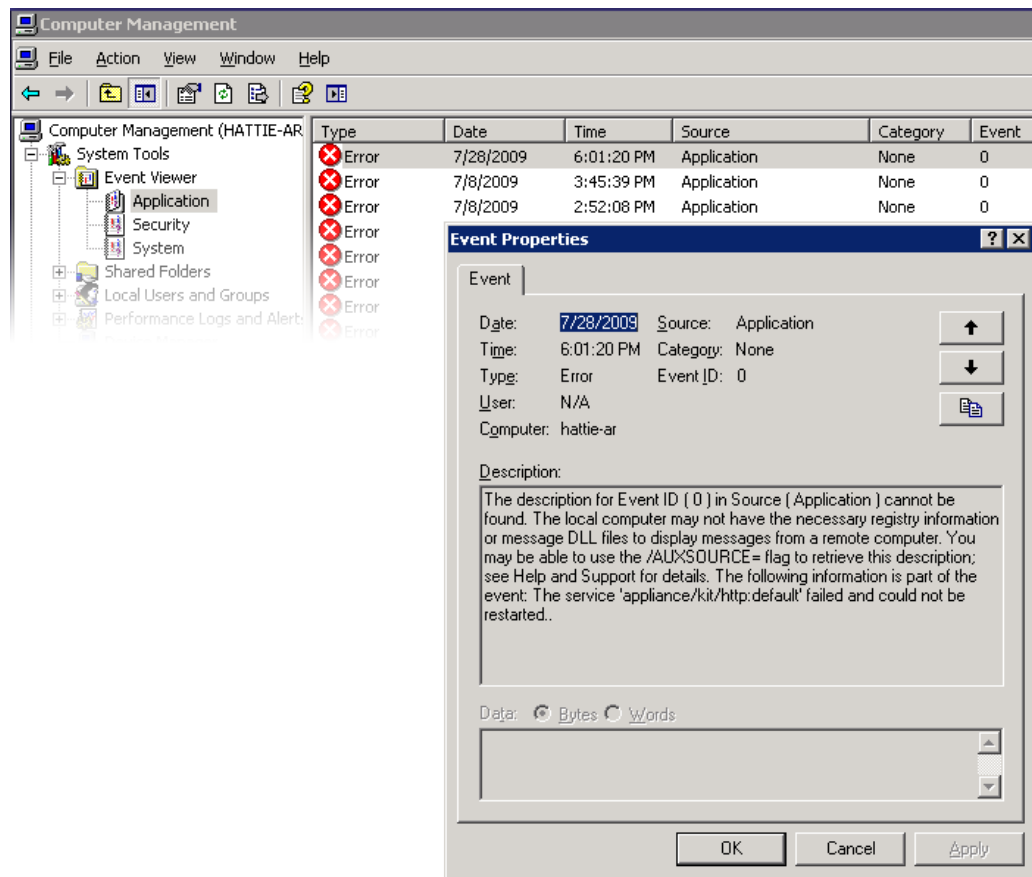
Oracle ZFS Storage Appliance のワークグループモードで MMC 機能を使用するためには、管理コンソールを使用する Windows 管理者をアプライアンスの管理者のローカルグループに必ず追加してください。そうしない場合は、MMC を使用してアプライアンスへの接続を試みたときに、Access is denied またはそれに類似したエラーが管理クライアントで表示されることがあります。

Oracle ZFS Storage Appliance では、次のコンピュータの管理機能をサポートしていません。

イベントビューア MMC スナップインに、アプリケーションログ、セキュリティーログ、およびシステムログが表示されます。これらのログには、Oracle ZFS Storage システムのアラートログ、監査ログ、およびシステムログの内容が表示されます。

次の画面は、アプリケーションログと、エラーイベントのプロパティダイアログの例を示しています。

図 24 SMB のイベントビューア



## SMB のシェア管理

シェア管理でサポートされている機能は次のとおりです。

- シェアの表示
- シェアでの ACL の設定
- シェアアクセス権の変更
- シェアの記述の設定

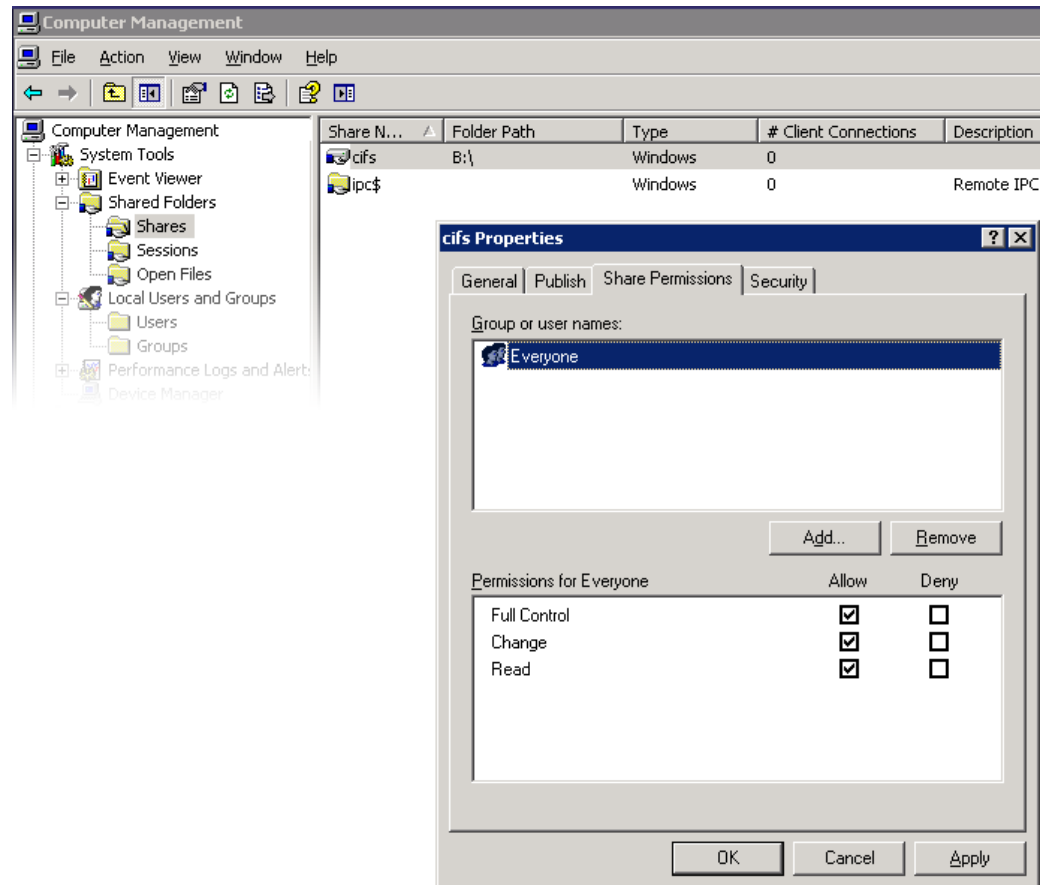
MMC によって現在サポートされていない機能は次のとおりです。

- シェアの追加または削除
- クライアント側のキャッシュプロパティの設定
- ユーザープロパティの最大許容数の設定

次の画面は、シェアのアクセス権プロパティの例を示しています。



図 25 「SMB シェアのアクセス権」プロパティ



## SMB のユーザー、グループ、および接続

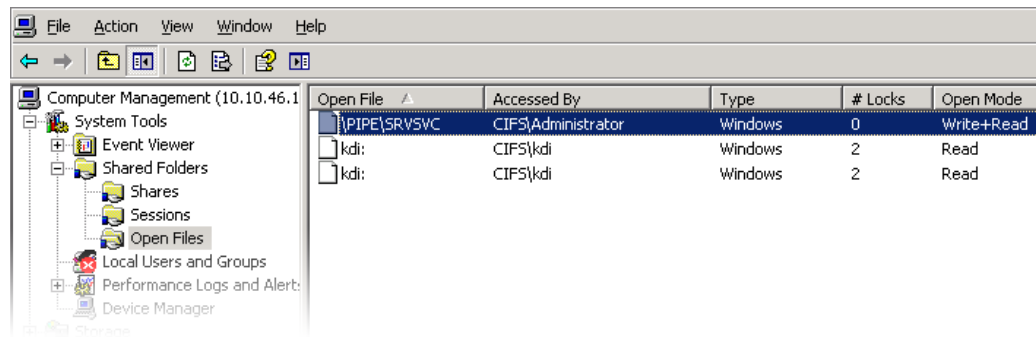
次の機能がサポートされています。

- ローカル SMB ユーザーおよびグループの表示
- ユーザーの接続のリスト (1つの接続で開いているファイルの数のリストなど)
- ユーザーの接続のクローズ
- 開いているファイルのリスト (ファイルモードやファイルオープンモードでのロックの数のリストなど)

- 開いているファイルのクローズ

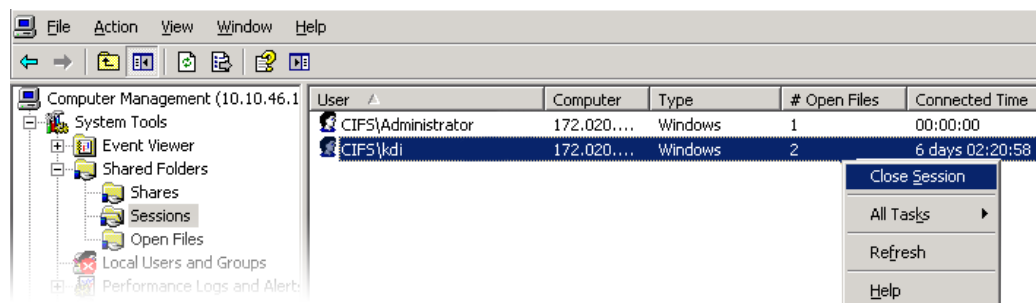
次の画面は、1つの接続で開いているファイルの例を示しています。

図 26 1つの接続で開いているファイル



次の画面は、開いているセッションの例を示しています。

図 27 開いているセッション



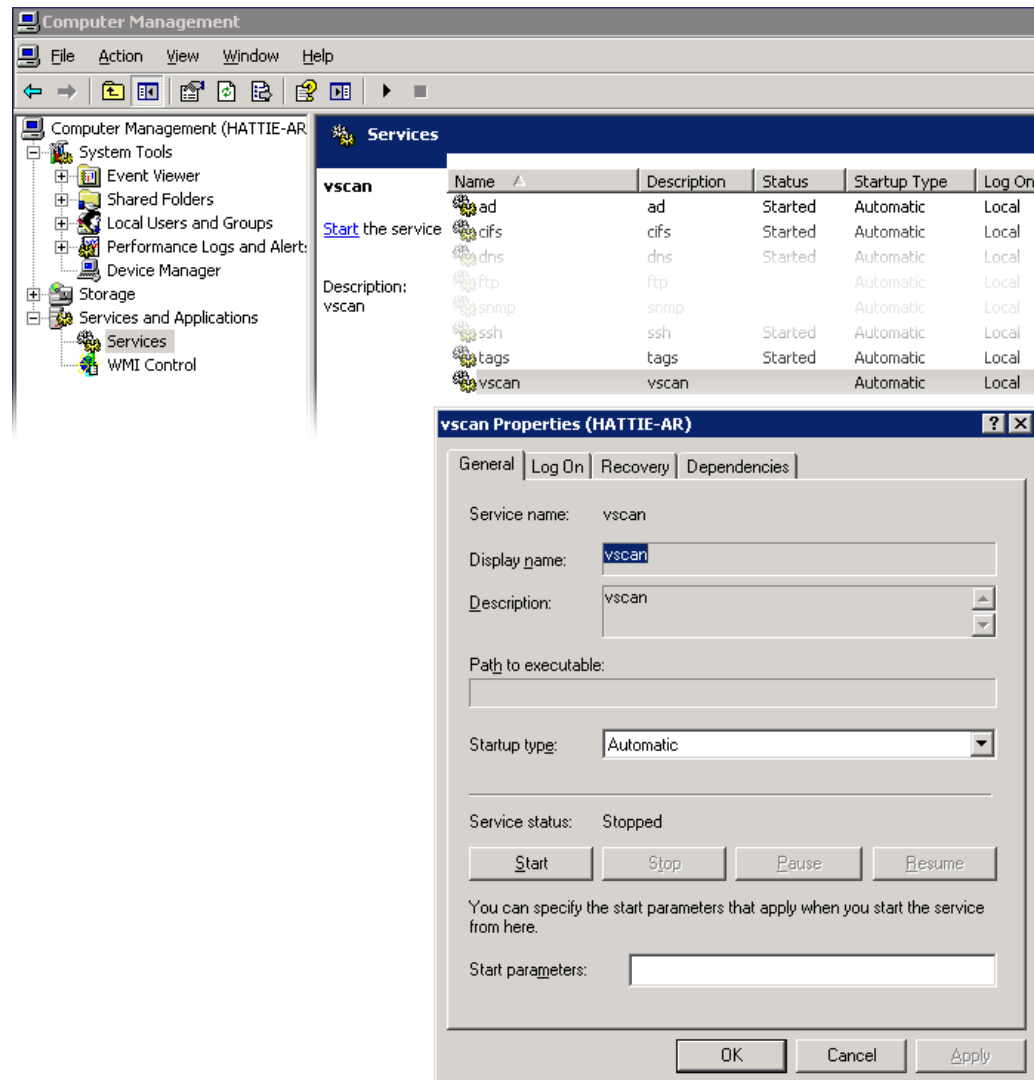
## SMB サービスの一覧表示

アプライアンスサービスの一覧表示は、MMC アプリケーションを使用してサポートされます。ただし、MMC アプリケーションを使用してサービスを有効または無効に

はできません。アプライアンスサービスの一覧表示がサポートされています。コンピュータの管理 MMC アプリケーションを使用してサービスを有効または無効にすることはできません。

次の画面は、vscan サービスの「一般」プロパティの例を示しています。

図 28 vscan のプロパティ




適切なユーザーだけが管理操作にアクセスできるようにするために、MMC を使用してリモートで実行される操作に対していくつかのアクセス制限が設けられています。



表 56 ユーザーおよび許可される操作

| ユーザー                       | 許可される操作                                            |
|----------------------------|----------------------------------------------------|
| 一般ユーザー                     | シェアの表示。                                            |
| 「管理者」または「パワーユーザー」グループのメンバー | シェアの管理、ユーザーの接続の表示。                                 |
| 「管理者」グループのメンバー             | 開いているファイルのリストとファイルのクローズ、ユーザーの接続の切断、サービスとイベントログの表示。 |

## ▼ SMB の構成 (BUI)

アプライアンスの初期構成は BUI または CLI を使って行うことができ、20 分もかかりません。初期設定は、あとで BUI の「保守」>「システム」コンテキストまたは CLI を使用して再度行うこともできます。初期構成は、次の手順を使って行われます。

1. ネットワークデバイス、データリンク、およびインタフェースを構成します。
  - a. データリンクの追加またはインタフェースの  アイコンを使用するか、データリンクまたはインタフェースリストへのデバイスのドラッグ&ドロップを使用して、インタフェースを作成します。
  - b. 必要なプロパティを設定し、「適用」ボタンをクリックしてそれらをリストに追加します。
  - c. 各インタフェースをそれぞれアクティブまたはスタンバイに設定します。
  - d. ページの上部にある「適用」をクリックして、変更を確定します。
2. DNS を構成します。
  - a. ベースドメイン名を指定します。
  - b. ドメイン名前空間の **Active Directory** 部分でホスト名とサーバーのレコードを解決できる 1 つ以上のサーバーの IP アドレスを指定します。
3. クロック同期が確保されるように NTP 認証鍵を構成します。




- a.  アイコンをクリックして、新しい鍵を追加します。
  - b. 新しい鍵の番号、種類、および非公開の値を指定して、変更を適用します。  
その鍵が、指定した各 NTP サーバーの横にオプションとして表示されます。
  - c. その鍵を適切な NTP サーバーに関連付けて、変更を適用します。クロック同期を確保するには、同じ NTP サーバーを使用するようにアプライアンスと SMB クライアントを構成します。
4. **Active Directory** をユーザーとグループのディレクトリサービスとして指定します。
    - a. ディレクトリドメインを設定します。
    - b. 「適用」をクリックして変更を確定します。
  5. ストレージプールを構成します。
    - a.  アイコンをクリックして、新しいプールを追加します。
    - b. プール名を設定します。
    - c. ストレージの割り当ておよび検証の画面で、ストレージプールのディスクシェルフ割り当てを構成します。  
ディスクシェルフが検出されない場合は、ディスクシェルフの配線や電源を確認してください。
    - d. 「コミット」をクリックして、次の画面に進みます。
    - e. 追加されたストレージの構成の画面で、目的のデータプロファイルを選択します。  
それぞれは、利用度、パフォーマンス、および容量の点で格付けされます。これらの格付けを使用して、ビジネスニーズにもっとも適した構成を判断します。
    - f. 「コミット」をクリックして、構成をアクティブにします。
  6. リモートサポートを構成します。
    - a. アプライアンスが直接インターネットに接続されていない場合は、リモートサポートサービスが Oracle との通信に使用する HTTP プロキシを構成します。


- b. オンラインアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。  
確認のためにプライバシーに関する説明が表示されます。
- c. 登録先のインベントリチームを選択します。  
各アカウントのデフォルトチームは、アカウントのユーザー名に接頭辞「\$」を付けたものと同じです。
- d. 初期構成の変更を確定します。

## ▼ SMB Active Directory の構成 (BUI)



1. **Active Directory** ドメインにアプライアンスのアカウントを作成します。  
詳細な手順については、[296 ページの「Active Directory の構成」](#)を参照してください。
2. 「構成」 > 「サービス」 > 「Active Directory」画面で、「ドメインに参加」ボタンをクリックします。
3. **Active Directory** ドメイン、管理ユーザー、および管理パスワードを指定します。
4. 「適用」をクリックして変更を確定します。

## ▼ SMB プロジェクトおよびシェアの構成 (BUI)

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動します。
2. プロジェクトを作成します。
  - a. 「シェア」画面で、開いたパネルアイコン  をクリックして「プロジェクト」パネルを展開します。
  - b. 追加アイコン  をクリックして新しいプロジェクトを追加します。
  - c. プロジェクト名を指定して、「適用」をクリックします。
3. 「プロジェクト」パネルから新しいプロジェクトを選択します。
4. 項目を追加アイコン  をクリックして、ファイルシステムを追加します。

5. ファイルシステムの編集アイコン  をクリックします。
6. 「一般」タブをクリックし、「プロジェクトから継承」チェックボックスのチェックマークを外します。
7. `/export` 下のマウントポイントを選択して (SMB シェアがリソース名でアクセスされる場合も含む)、「適用」をクリックします。
8. プロジェクトの「プロトコル」タブをクリックして、SMB リソース名をオンに設定します。
9. プロジェクトの `sharesmb` および「シェアレベル ACL」を有効にします。
10. 「適用」をクリックして、構成をアクティブにします。

## ▼ SMB データサービスの構成 (BUI)

1. 「構成」>「サービス」>「SMB」に移動して、電源アイコン  をクリックしてサービスを有効にします。
2. SMB プロパティを設定して、「適用」をクリックして構成をアクティブにします。246 ページの「SMB サービスのプロパティ」を参照してください。
3. 「構成」>「サービス」>「SMB」画面の「自動ホーム」タブをクリックし、252 ページの「SMB の自動ホーム」の説明に従って、SMB クライアントがホームディレクトリにマップされるように自動ホーム規則を設定します。「適用」をクリックして、構成をアクティブにします。
4. 「構成」>「サービス」>「SMB」画面で「ローカルグループ」タブをクリックし、項目を追加アイコン  を使用して、253 ページの「SMB ローカルグループへのユーザーの追加」の説明に従って、管理者ユーザーまたはバックアップオペレーターユーザーをローカルグループに追加します。「適用」をクリックして構成をアクティブにします。

## FTP 構成

FTP (ファイル転送プロトコル) サービスでは、FTP クライアントからファイルシステムにアクセスできます。匿名ログインは許可されません。ユーザーは「サービス」でどのネームサービスが構成されていても認証を行う必要があります。

FTP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [264 ページの「シェアへの FTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [264 ページの「FTP のプロパティ」](#)
- [265 ページの「FTP のログ」](#)

## ▼ シェアへの FTP アクセスの追加 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. FTP サービスが有効でオンラインになっていることを確認します。有効でない場合は、サービスを有効にします。
3. 「シェア」画面でシェアを選択または追加します。
4. 「プロトコル」タブをクリックして、FTP アクセスが有効になっていることを確認します。
5. (オプション) シェアモードのアクセスを「読み取り専用」または「読み取り/書き込み」に設定します。

### 関連トピック

- [264 ページの「FTP のプロパティ」](#)
- [265 ページの「FTP のログ」](#)

## FTP のプロパティ

表 57 FTP の一般プロパティ

| プロパティ                    | 説明                                                                                                                                 |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 受信接続用のポート                | FTP が待機するポート。デフォルトは 21 です。                                                                                                         |
| 最大接続数 (無限の場合「0」)         | 同時に実行される FTP 接続の最大数です。これは、予測される並行ユーザーの数に及ぶように設定します。デフォルトは 30 です。各接続でシステムプロセスが作成され、あまりにも多くの (何千もの) 接続を許可すると、DoS 攻撃が発生する可能性がありますからです |
| タイミグ攻撃を防ぐために遅延エンジンをオンにする | 認証中に小さな遅延を挿入して、タイミグ測定によるユーザー名推測の試みを欺きます。これをオンにすると、セキュリティが向上します                                                                     |
| デフォルトログイン root           | FTP ログインの場所です。デフォルトは「/」で、シェア階層の最上位を指します。すべてのユーザーは、FTP サービスの認証に成功したあとでこの場所にログインします                                                  |



| プロパティ                          | 説明                                                                                           |
|--------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| ロギングレベル                        | proftpd ログの詳細レベルです。                                                                          |
| 新規作成されたファイルとディレクトリからマスクするアクセス権 | ファイルが作成されるときに削除するファイルアクセス権です。最新のアップロードがだれでも書き込み可能にならないように、group と world の書き込みがデフォルトで非表示になります |

表 58 FTP のセキュリティープロパティ

| プロパティ             | 説明                                                                                        |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| SSL/TLS を有効化      | SSL/TLS で暗号化された FTP 接続を許可します。これによって FTP トランザクションが確実に暗号化されます。デフォルトでは無効です。                  |
| 受信 SSL/TLS 接続用ポート | SSL/TLS で暗号化された FTP サービスが待機するポート。デフォルトは 21 です。                                            |
| root ログインを許可      | root ユーザーの FTP ログインを許可します。これはデフォルトでオフになっています。FTP 認証は平文であり、ネットワーク盗聴攻撃のセキュリティーリスクをもたらすからです。 |
| 許容可能なログイン試行の最大数   | 失敗したログイン試行の回数。その回数を超えると、FTP 接続が切断されるため、ユーザーは再接続して再度試す必要があります。デフォルトは 3 です。                 |
| 外部データ接続アドレスを許可    | 外部 FTP 接続を許可して、FTP サーバー間の直接ファイル転送を可能にします。このプロパティはデフォルトでオフになっています。                         |

### 関連トピック

- [264 ページの「シェアへの FTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [265 ページの「FTP のログ」](#)

## FTP のログ

表 59 FTP のログ

| ログ           | 説明                                         |
|--------------|--------------------------------------------|
| proftpd      | FTP イベント (成功したログインおよび失敗したログイン試行を含む) を記録します |
| proftpd_xfer | ファイル転送のログです。                               |
| proftpd_tls  | SSL/TLS 暗号化に関連する FTP イベントを記録します            |

### 関連トピック

- [264 ページの「シェアへの FTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [264 ページの「FTP のプロパティ」](#)

## HTTP 構成

HTTP サービスでは、HTTP プロトコル、HTTPS プロトコル、および HTTP の拡張 WebDAV (Web ベースの分散オーサリングおよびバージョン管理) を使用してファイルシステムにアクセスできます。このサービスにより、クライアントは Web ブラウザを介してシェアファイルシステムにアクセスすることも、ローカルファイルシステムとして (クライアントソフトウェアでサポートされている場合) シェアファイルシステムにアクセスすることもできます。これらの HTTP および HTTPS シェアにアクセスするための URL の形式は、それぞれ次のようになっています。

- `http://hostname/shares/mountpoint/share_name`
- `https://hostname/shares/mountpoint/share_name`
- HTTPS サーバーは、自己署名付きセキュリティ証明書を使用します。

HTTP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [266 ページの「シェアへの HTTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [267 ページの「HTTP のプロパティとログ」](#)
- [267 ページの「HTTP の認証とアクセス制御」](#)

### ▼ シェアへの HTTP アクセスの追加 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 に移動します。
2. HTTP サービスが有効でオンラインになっていることを確認します。有効でない場合は、サービスを有効にします。
3. 「シェア」画面でシェアを選択または追加します。
4. 「プロトコル」タブをクリックして、HTTP アクセスが有効になっていることを確認します。
5. (オプション) シェアモードのアクセスを「読み取り専用」または「読み取り/書き込み」に設定します。

#### 関連トピック

- [267 ページの「HTTP のプロパティとログ」](#)
- [267 ページの「HTTP の認証とアクセス制御」](#)

## HTTP のプロパティとログ

表 60 HTTP のプロパティ

| プロパティ                  | 説明                                                                                                                                                                                |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| クライアントログインが必要          | シェアアクセスが許可されるためにはクライアントの認証が必要です。クライアントで作成されるファイルにはその所有権が割り当てられます。このプロパティを設定しない場合、作成されるファイルは HTTP サービスがユーザー「nobody」を使って所有します。267 ページの「 <a href="#">HTTP の認証とアクセス制御</a> 」を参照してください。 |
| プロトコル                  | サポートするアクセス方法 (HTTP、HTTPS、または両方) を選択します。                                                                                                                                           |
| HTTP ポート (受信接続用)       | HTTP ポート。デフォルトは 80 です。                                                                                                                                                            |
| HTTPS ポート (セキュアな受信接続用) | HTTPS ポート。デフォルトは 443 です。                                                                                                                                                          |

表 61 HTTP のログ

| ログ                    | 説明             |
|-----------------------|----------------|
| network-http:apache22 | HTTP サービスのログです |

### 関連トピック

- [266 ページの「シェアへの HTTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [267 ページの「HTTP の認証とアクセス制御」](#)

## HTTP の認証とアクセス制御

「クライアントログインが必要」オプションを有効にした場合、アプライアンスはローカルユーザー、NIS ユーザー、または LDAP ユーザーに有効な認証資格を提供しないクライアントへのアクセスを拒否します。Active Directory 認証はサポートされていません。

基本的な HTTP 認証だけがサポートされています。HTTPS を使用していなければ、ユーザー名とパスワードは暗号化されていない状態で送信されます。その方法がすべての環境に適切であるとは限りません。

通常、認証されたユーザーには、NFS や FTP で割り当てられるのと同じアクセス権が HTTP で割り当てられます。ほかのプロトコルで説明したように、認証されたユーザーが作成したファイルやディレクトリはそのユーザーが所有します。特権ユーザー (100 未満の UID 番号を持つユーザー) は、アクセス制御のために「nobody」とみなされます。特権ユーザーが作成したファイルは「nobody」が所有します。

「クライアントログインが必要」オプションを無効にした場合、アプライアンスは、クライアントが資格を提供しても、その認証を試みません。新しく作成されたファイ

ルは「nobody」が所有し、すべてのユーザーはアクセス制御のために「nobody」とみなされます。

認証の有無にかかわらず、作成されたファイルやディレクトリでアクセス権はマスクされません。作成されたファイルには UNIX アクセス権 666 (すべてのユーザーによる読み取りと書き込みが可能) が割り当てられ、作成されたディレクトリには UNIX アクセス権 777 (すべてのユーザーによる読み取り、書き込み、実行が可能) が割り当てられます。

### 関連トピック

- [266 ページの「シェアへの HTTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [267 ページの「HTTP のプロパティとログ」](#)

## NDMP 構成

ネットワークデータ管理プロトコル (NDMP) サービスを使用すると、システムは、データ管理アプリケーション (DMA) と呼ばれるリモート NDMP クライアントで制御される NDMP ベースのバックアップおよび復元操作に参加できます。NDMP を使用すると、アプライアンスで管理者が作成したシェアに格納されているデータをローカルに接続されたテープデバイスとリモートシステムの両方にバックアップおよび復元できます。ローカルに接続されたテープデバイスは、リモートシステムへのバックアップや復元のために DMA に公開することもできます。

NDMP は、システム構成データのバックアップや復元には使用できません。代わりに、構成のバックアップと復元機能 (『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[構成のバックアップ](#)」を参照) を使用してください。

NDMP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [268 ページの「NDMP のローカル構成とリモート構成の違い」](#)
- [269 ページの「NDMP のバックアップの形式とタイプ」](#)
- [270 ページの「タイプ dump と tar による NDMP のバックアップ」](#)
- [271 ページの「タイプ zfs による NDMP のバックアップ」](#)
- [273 ページの「NDMP の増分バックアップ」](#)
- [274 ページの「レプリカのバックアップ」](#)
- [276 ページの「NDMP のプロパティとログ」](#)

## NDMP のローカル構成とリモート構成の違い

アプライアンスでは、ローカル構成 (テープドライブがアプライアンスに物理的に接続されている) およびリモート構成 (データが同じネットワーク上の別のシステムにストリーミングされる) の両方を使用したバックアップと復元をサポートしています。

どちらの場合も、サポートされている DMA でバックアップを管理する必要があります。

ローカル構成では、サポートされているテープデバイス (ドライブとチェンジャー (ロボット) の両方を含む) は、サポートされている SCSI またはファイバチャネル (FC) カード (イニシエータモードで構成) を使ってシステムに物理的に接続されます。これらのデバイスは、NDMP のステータス画面に表示できます。DMA がデバイスを走査すると、NDMP サービスによってこれらのデバイスが DMA に提供されます。これらのデバイスを DMA で構成すると、アプライアンスまたは同じネットワーク上のほかのシステムのバックアップや復元にそれらを使用できるようになります。テープドライブまたはチェンジャーをシステムに追加したり、そのようなデバイスをシステムから削除したりしたあとで、変更が NDMP サービスで認識されるようにするには、リブートが必要な場合があります。その後、テープデバイス名が変わった可能性があるため、DMA の再構成が必要となる場合があります。

リモート構成では、テープデバイスはバックアップまたは復元の対象となるシステム (データサーバー) に物理的には接続されず、DMA が実行されているシステムまたは別のシステム (テープサーバー) に接続されます。DMA がほかの 2 つのシステムを制御するため、これらは一般に「3 ウェイ構成」と呼ばれます。この構成では、データストリームは IP ネットワークを介してデータサーバーとテープサーバーの間で転送されます。

## NDMP のバックアップの形式とタイプ

NDMP プロトコルでは、バックアップデータの形式を指定しません。アプライアンスでは、それぞれの実装に対応する 3 つのバックアップタイプとオンテープ形式をサポートします。DMA では、NDMP 環境変数 TYPE に次の値を指定してバックアップタイプを選択できます。

表 62 NDMP のバックアップの形式とタイプ

| バックアップタイプ | 詳細                                                                                                               |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| dump      | ファイルシステム専用のファイルベース。ファイル履歴とダイレクトアクセスリカバリ (DAR) をサポートします。                                                          |
| tar       | ファイルシステム専用のファイルベース。ファイル履歴とダイレクトアクセスリカバリ (DAR) をサポートします。                                                          |
| zfs       | ファイルシステムとボリューム用のシェアベース。ファイル履歴やダイレクトアクセスリカバリ (DAR) をサポートしませんが、一部のデータセットではバックアップ速度が向上することがあります。NDMPv4 でのみサポートされます。 |

標準の NDMP データストリーム形式は存在しないため、アプライアンスで生成されるバックアップストリームは、互換性のあるソフトウェアが実行されている ZFS ス

トレージアプライアンスでのみ復元できます。アプライアンスソフトウェアの将来のバージョンでは通常、そのソフトウェアの古いバージョンからバックアップされたストリームを復元できますが、その反対が必ずしも当てはまるとは限りません。たとえば、「zfs」バックアップタイプが 2010.Q3 で新しく追加された場合、2010.Q1 (以前) が実行されているシステムで、2010.Q3 の「zfs」タイプを使って作成されたバックアップストリームを復元できません。

## タイプ `dump` と `tar` による NDMP のバックアップ

「`dump`」および「`tar`」バックアップタイプを使用してバックアップを行う場合、管理者はバックアップパスと呼ばれるファイルシステムパスによってバックアップするデータを指定します。たとえば、管理者が `/export/home` のバックアップを構成した場合、そのパスにマウントされたシェアがバックアップされます。同様に、バックアップストリームが `/export/code` に復元される場合、ファイルは、別のパスからバックアップされていてもそのパスに復元されます。

バックアップに指定できるのは、既存のシェアのマウントポイントであるパスか、または既存のシェアの中に含まれているパスだけです。バックアップパスがシェアのマウントポイントと一致する場合は、そのシェアだけがバックアップされます。一致しなければ、パスはシェアの中に含まれている必要があり、その場合は、そのパスの下にあるそのシェアの部分だけがバックアップされます。どちらの場合も、バックアップパス下の指定されたシェア内にマウントされたほかのシェアはバックアップされません。これらのシェアはバックアップ対象として個別に指定する必要があります。

**スナップショット** - バックアップパスがライブファイルシステム (`/export/code` など) またはライブファイルシステムの中に含まれるパス (`/export/code/src` など) を示す場合、アプライアンスはただちに新しいスナップショットを取得し、そのスナップショットから指定のパスをバックアップします。バックアップが完了すると、スナップショットは破棄されます。バックアップパスがスナップショット (`/export/code/zfs/snapshot/mysnap` など) を示す場合、新しいスナップショットは作成されず、システムは指定のスナップショットからバックアップします。

**シェアメタデータ** - 複雑なシェア構成のバックアップと復元を簡略化するため、「`dump`」と「`tar`」のバックアップには、バックアップパスに関連付けられたプロジェクトおよびシェア用のシェアメタデータが含まれています。このメタデータには、プロトコルシェアプロパティ、割り当て制限プロパティ、「シェア」画面で構成されるその他のプロパティなど、アプライアンスのシェア構成が記述されています。これを、NDMP でもバックアップおよび復元される、ディレクトリ構造やファイルアクセス権のようなファイルシステムメタデータと混同しないようにしてください。

たとえば、`/export/proj` をバックアップする場合は、マウントポイントが `/export/proj` で始まるすべてのシェアのシェアメタデータと、その親プロジェクトのシェアメタデータがバックアップされます。同様に、`/export/someshare/somedir` をバックアップする場合は、シェアが `/export/someshare` にマウントされていれば、そのシェアとそのプロジェクトのシェアメタデータがバックアップされます。

復元時は、復元パスの宛先が既存のシェアの中に含まれていない場合、必要に応じてバックアップストリーム内のプロジェクトとシェアが、バックアップに格納されているそれぞれの元のプロパティを使って再作成されます。たとえば、プロジェクト `proj1` とシェア `share1` および `share2` が含まれる `/export/foo` をバックアップしたあとで、そのプロジェクトを破棄してバックアップから復元する場合、これらの2つのシェアとプロジェクトは、復元操作の一部としてバックアッププロパティを使用して再作成されます。

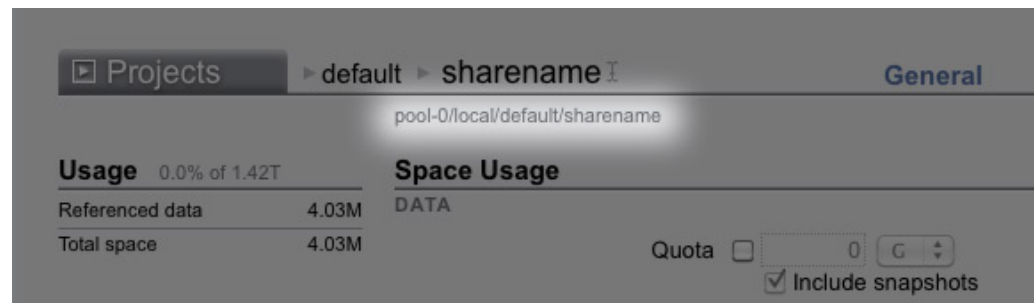
復元中は、自動的に再作成されるプロジェクトが存在すれば、その既存のプロジェクトが使用され、新しいプロジェクトが自動的に作成されることはありません。自動的に再作成されるシェアが存在し、そのマウントポイントが、アプライアンスで元のバックアップパスと復元の宛先に基づいて予測されるものと一致する場合は、その既存のシェアが使用され、新しいシェアが自動的に作成されることはありません。そうでない場合は、バックアップのメタデータから新しいシェアが自動的に作成されます。同じ名前のシェア (マウントポイントは異なる) がすでに存在する場合は、新しく作成されるシェアに `ndmp-` で始まる一意の名前と適切なマウントポイントが付けられます。

アプライアンスにもう存在しないデータセットを含むストリームを復元して、アプライアンスでそのバックアップストリームに指定されたとおりにデータセットを再作成できるようにするか、復元先のシェアを事前に作成しておくことをお勧めします。このどちらかを行うことで、前述の自動シェア作成に関連する予期しない結果を回避できます。

## タイプ `zfs` による NDMP のバックアップ

「`zfs`」タイプを使用してバックアップを行う場合、管理者はアプライアンスでバックアップするデータを指定するときにその正規名を使用します。BUI では、これはシェアの名前の下に表示されます。

図 29 NDMP のシェアの名前



CLI では、`canonical_name` プロパティの値で確認できます。正規名は「/」で始まりませんが、バックアップパスの構成時は正規名に接頭辞「/」を付ける必要があります。

プロジェクトとシェアのどちらも「zfs」タイプを使ったバックアップに指定できません。正規名をそのまま指定する場合は、新しいスナップショットが作成されてバックアップに使用されます。接尾辞 `@snapshot` を使用すると、特定のスナップショットをバックアップ用に指定できます。その場合は、新しいスナップショットは作成されず、指定したスナップショットがバックアップされます。例:

表 63 正規名とバックアップされるシェア

| 正規名                                              | バックアップされるシェア                                                                                                                                        |
|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>pool-0/local/default</code>                | <code>default</code> というローカルプロジェクトとそのすべてのシェアの新しいスナップショット。                                                                                           |
| <code>pool-0/local/default@yesterday</code>      | ローカルプロジェクト <code>default</code> の <code>yesterday</code> という名前の付いたスナップショットと、スナップショット <code>yesterday</code> を含むすべてのシェア。                             |
| <code>pool-0/local/default/code</code>           | ローカルプロジェクト <code>default</code> に含まれるシェア <code>code</code> の新しいスナップショット。 <code>code</code> にはファイルシステムまたはボリュームを指定できます。                               |
| <code>pool-0/local/default/code@yesterday</code> | ローカルプロジェクト <code>default</code> に含まれるシェア <code>code</code> の <code>yesterday</code> という名前の付いたスナップショット。 <code>code</code> にはファイルシステムまたはボリュームを指定できます。 |

「zfs」バックアップタイプを使用したレベルベースの増分バックアップには以前の増分バックアップから作成されるベーススナップショットが必要なため、新しいスナップショットが作成されるレベルバックアップでは、デフォルトで新しいスナップショットがその後の増分バックアップに使用できるように保持されます。DMA で `UPDATE=n` の設定により、バックアップがその後の増分バックアップに使用されないことを指定した場合、新しく作成されたスナップショットはバックアップ後に破棄されます。既存のユーザースナップショットがバックアップ後に破棄されることはありません。詳細は、273 ページの「NDMP の増分バックアップ」を参照してください。

**シェアメタデータ** - シェアメタデータ (シェアの構成) は、常に「zfs」バックアップに含まれています。「zfs」タイプを使用してフルバックアップを復元する場合、復元先のプロジェクトまたはシェアはもう存在していない必要があります。これは、バックアップストリームのメタデータから再作成されます。「zfs」タイプを使用して増分バックアップを復元する場合、復元先のプロジェクトまたはシェアはすでに存在している必要があります。そのプロパティが、バックアップストリームのメタデータから更新されます。詳細は、273 ページの「NDMP の増分バックアップ」を参照してください。



## NDMP の増分バックアップ

アプライアンスでは、上記のすべてのバックアップタイプを対象にレベルベースの増分バックアップをサポートしています。レベルバックアップを指定するには、通常 DMA で次の 3 つの環境変数を指定します。

| 変数       | 詳細                                                                        |
|----------|---------------------------------------------------------------------------|
| LEVEL    | バックアップレベルを識別する 0-9 の整数です。                                                 |
| DMP_NAME | 特定の増分バックアップセットを指定します。DMP_NAME に異なる値を指定することで、複数のレベル増分バックアップセットを同時に使用できません。 |
| UPDATE   | このバックアップをその後の増分バックアップのベースとして使用できるかどうかを指定します                               |

定義によると、レベル N のバックアップには、N よりも小さい LEVEL を使用した同じシェアの同じバックアップセット (「DMP\_NAME」で指定) の前回のバックアップ以降に変更されたすべてのファイルが含まれます。レベル 0 のバックアップには常にすべてのファイルが含まれます。UPDATE の値が「y」(デフォルト) の場合は、現在のバックアップが記録され、N よりも大きいレベルの将来のバックアップではこのバックアップがベースとして使用されます。これらの変数は通常 DMA によって管理されるため、管理者が直接構成する必要はありません。

増分バックアップスケジュールの例を次に示します。

表 64 増分バックアップスケジュールの例

| 日                 | 詳細                                                             |
|-------------------|----------------------------------------------------------------|
| 月初め               | レベル 0 のバックアップ。バックアップには、シェア内のすべてのファイルが含まれます。                    |
| 各月の 7 日、14 日、21 日 | レベル 1 のバックアップ。バックアップには、最後のフル (月次) バックアップ以降に変更されたすべてのファイルが含まれます |
| 毎日                | レベル 2 のバックアップ。バックアップには、最後のレベル 1 のバックアップ以降に変更されたすべてのファイルが含まれます  |

その月の 24 日になったときにファイルシステムの状態を回復するには、通常、管理者はその月の 1 日に作成したレベル 0 のバックアップを新しいシェアに復元し、次にその月の 21 日に作成したレベル 1 のバックアップを復元し、最後にその月の 24 日に作成したレベル 2 のバックアップを復元します。

レベルベースの増分バックアップを実装するには、アプライアンスでシェアごとにレベルバックアップ履歴を追跡する必要があります。「tar」と「dump」のバックアップ

では、レベルバックアップ履歴はシェアメタデータに保持されます。増分バックアップではファイルシステムがトラバースされ、前回のレベルバックアップ以降に変更されたファイルがバックアップに含まれます。復元時には、システムはバックアップストリーム内のすべてのファイルを復元するだけです。したがって、上記の例では 24 日のレベル 2 のバックアップを任意のファイルシステムに復元することが可能で、そのバックアップストリームに含まれるファイルは、復元先のファイルシステムがそのファイルのバックアップ元のファイルシステムと一致しなくても復元されます。ただし、元のファイルシステムの状態を回復するためには、空のツリーから始めて以前のレベルバックアップを復元する上記のような手順を使用することを最良事例としてお勧めします。

「zfs」タイプの効率的なレベルベースの増分バックアップを実施するには、別の方法が使用されます。増分セットに含まれているバックアップでは、バックアップに使用されたスナップショットを破棄するのではなくシステムに残します。その後の増分バックアップでは、このスナップショットをベースとして使用し、変更されたファイルシステムブロックをすばやく特定して、バックアップストリームを生成します。結果として、その後の増分バックアップを作成する場合は、バックアップ後に NDMP サービスによって残されたスナップショットを破棄してはいけません。

この動作のもう 1 つの重要な結論は、増分ストリームを復元するためには、ファイルシステムの状態が、増分ストリームのベーススナップショットでの状態とぴったり一致する必要があることです。つまり、レベル 2 のバックアップを復元するためには、ファイルシステムが前回のレベル 1 のバックアップが完了したときとまったく同じようになっている必要があります。上記の一般的な手順では、24 日のレベル 2 のバックアップストリームの復元時にシステムの状態は 21 日のレベル 1 のバックアップが完了したときとまったく同じであるため (そのバックアップが復元されたばかりなので)、このことが保証されます。

NDMP サービスでは、「zfs」の増分バックアップストリームを、最新のスナップショットが増分ストリームのベーススナップショットと一致しないファイルシステムに復元しようとした場合、またはファイルシステムがそのスナップショット以降に変更されている場合にエラーを報告します。復元が開始される直前にベーススナップショットにロールバックするよう NDMP サービスを構成できます。そのためには、NDMP 環境変数「ZFS\_FORCE」に値「y」を指定するか、NDMP サービスの「データセットをロールバック」プロパティを構成します (276 ページの「NDMP のプロパティとログ」を参照)。

## レプリカのバックアップ

Oracle ZFS Storage Appliance では、レプリカおよび「zfs」バックアップタイプのレプリカスナップショットの直接バックアップをサポートしています。レプリカデータセット (プロジェクトまたはシェア) をバックアップするために先にそのクローンを作成する必要はありません。

---

**注記** - バックアップはレプリカのバックアップであるため、ターゲットではなくソースのデータセットプロパティがバックアップされます。

---

### レプリカのバックアップの有効化

- レプリカのバックアップを有効にするには、対応する遅延更新を適用します。詳細は、『Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル』、「遅延更新」を参照してください。
- レプリカのバックアップには、ソース上のソフトウェアバージョン 2011.1.0 (以降) が必要です。
- レプリカのバックアップが元のレプリケートされたデータセットでソースに復元される場合、ソースはソフトウェアバージョン 2013.1.4 (以降) を実行する必要があります。

### レプリカのバックアップ構文

レプリケートされたプロジェクトまたはシェアをバックアップするには、DMA にスナップショット拡張子なしで ZFS データセット名を入力します。ndmpd はアプライアンスソフトウェアを使用して、バックアップする最新の完全なレプリカスナップショットを決定します。バックアップ用のレプリカデータセットを指定するには、UUID を含む可能性のある、長いレプリカデータセット名の入力を間違えないように、コピー&ペーストを使用します。

ユーザーが生成したスナップショット拡張子が含まれる場合、ndmpd は示されたユーザースナップショットをバックアップします。システムにより生成された拡張子 (.rr で開始) が含まれる場合、バックアップは失敗し、メッセージが生成されて DMA コンソールに記録されます。

### レプリカのバックアップの永続的ホールド

永続的ホールドは、バックアップ完了時にバックアップスナップショットに作成されます。現在のスナップショットをベースとして使用する、今後の増分バックアップに必要で、不要な場合、レプリケーションサブシステムは不要なレプリカスナップショットを削除する場合があります。ホールドはスナップショットが必要なくなったときに、ndmpd によって解放されます。

永続的ホールドは手動でクリアできます。ホールドのあるレプリカスナップショットを削除するとき、進行中または将来の NDMP バックアップに与える潜在的な影響を警告する確認が表示されます。レプリケーションサブシステムで必要とされるスナップショットは削除できません。

増分バックアップが不要な場合、DMA の UPDATE パラメータを (UPDATE=n) なしに設定すると、永続的ホールドを防ぎます。UPDATE=y がデフォルトのモードです。UPDATE NDMP 環境変数の詳細は、ホワイトペーパー [NDMP Implementation Guide for the Sun ZFS Storage Appliance \(http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-unified-storage/documentation/index.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-unified-storage/documentation/index.html) を参照してください。

## 増分レプリカのバックアップ

レプリケーションの逆転またはサーバーにわたるバックアップシリーズの継続 (増分) はサポートされていません。代わりに、新しいバックアップシリーズを開始します。逆転またはサーバーの発生後の新しいソース上などで、レプリケーションの状態の変更が発生したあとは、最初のバックアップに完全 (レベル 0) バックアップを使用します。

レベルごとに変更しない静的スナップショット拡張子は、ユーザー生成のレプリカスナップショット (.rr で開始しないスナップショット) ではサポートされません。これは、エラーが発生してレプリケーションの失敗を引き起こす可能性のある名前の競合を防ぎます。

一部の DMA では、zfs タイプのレプリカ増分バックアップをサポートせず、スナップショット拡張子名の復元操作がレベルごとに変ります。アプライアンスの容量を節約し、このようなスナップショットが今後の増分バックアップ用に保持されないようにするには、レプリカのバックアップ時に UPDATE=n を設定します。ユーザー生成のスナップショットは手動で削除できます。

復元されたデータセット内でユーザーデータが変更されていない場合でも、変更されたメタデータにより、増分レプリカの復元が失敗する可能性があります。これを回避するため、ZFS rollback before restore パラメータを Always に設定して、増分レプリカの復元の前に常にベーススナップショットにロールバックします。

1 回かぎりのバックアップなどの増分レプリカバックアップ以外のバックアップでは、今後のスナップショットを保存せず、領域を消費しないように、UPDATE=n を設定します。UPDATE=y を設定して作成した増分バックアップなど、今後の増分バックアップ用に保持された一部の古いレプリカスナップショットは、不要になり、容量の無駄になる場合があります。これらのスナップショットは手動で破棄しても安全です。レプリケーションサブシステムで必要とされるスナップショットは削除できません。不要なスナップショットは、スナップショットが削除された場合の、進行中または今後の NDMP バックアップへの起こり得る影響についての警告メッセージを確認後に削除できます。

## NDMP のプロパティとログ

NDMP サービスの構成は、次のプロパティとログで構成されています。

表 65 NDMP のプロパティ

| プロパティ           | 説明                                                  |
|-----------------|-----------------------------------------------------|
| バージョン           | 使用している DMA でサポートされている NDMP のバージョンです。                |
| TCP ポート (v4 のみ) | NDMP のデフォルトの接続ポートは 10000 です。NDMPv3 では常にこのポートを使用します。 |

| プロパティ                   | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                         | NDMPv4 では必要に応じて別のポートも使用できません。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| メタデータのみの変更を無視           | 内容が変更されたファイルのみをバックアップし、アクセス権や所有権などのメタデータしか変更されていないファイルは無視するようシステムに指示します。このオプションは「tar」と「dump」の増分バックアップにだけ適用され、デフォルトでは無効になっています。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| ターゲット復元プール              | 「tar」または「dump」を使用して完全な復元を実行する場合、システムは、ターゲットにシェアがマウントされていないデータセットを再作成します。NDMP プロトコルではマウントポイントしか指定しないため、システムはプロジェクトやシェアを再作成するプールを選択します。複数のプールを備えたシステムでは、このプロパティを使用して1つ以上のプールを指定できます。複数のプールを指定する必要があるのは、各ヘッドにアクティブなプールを備えたクラスタだけです。このリストが、ストレージのすべての構成変更と同期された状態に維持されるようにする必要があります。プールが存在しないか、またはどのプールもオンラインになっていない場合、システムはランダムにデフォルトプールを選択します。                                                                                                    |
| トークンベースのバックアップを許可       | ZFS バックアップ用のトークンベースの方法を有効または無効にします。このプロパティはデフォルトでオフになっています。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 復元前の ZFS ロールバック (v4 のみ) | 「zfs」タイプのバックアップだけに適用されます。増分バックアップの復元時にターゲットのプロジェクトおよびシェアを、増分復元のベースとして使用するスナップショットにロールバックするかどうかを決めます。プロジェクトおよびシェアがロールバックされる場合、そのスナップショット以降に行われた変更はすべて失われます。この設定は通常「ZFS_FORCE」環境変数を介して DMA によって制御されますが、このプロパティを使って DMA 設定をオーバーライドして、常にこれらのデータセットがロールバックされるようにしたり、ロールバックされないようにしたりできます。詳細は、 <a href="#">273 ページの「NDMP の増分バックアップ」</a> を参照してください。それらをロールバックしないと、手動でロールバックされていないかぎり、復元に失敗します。このプロパティは、管理者に ZFS_FORCE などのカスタム環境変数の構成を許可しない DMA で使用します。 |
| 直接アクセス復元を許可             | 復元操作時に、システムが順次検索でなく、位置でファイルを見つけられるようにします。このオプションを有効にすると、多数のテープから少数のファイルを回復するのにかかる時間を短縮できます。個々のファイルをあとで回復できるようにするためには、バックアップ時にこのオプションを指定する必要があります。                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

| プロパティ                        | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 直接パスを復元 (v3 のみ)              | ファイルの復元時に、そのファイルだけでなく、そのファイルへの完全な絶対パスも復元されることを指定します。デフォルトでは、このオプションは無効です。                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 復元時のシェアの作成                   | バックアップタイプに基づいて新しいシェアを作成するように、復元操作を構成します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>すべて</b> - すべてのバックアップタイプで、復元時に新しいシェアを作成できます。</li> <li>■ <b>Tar_Dump</b> - バックアップタイプ「tar」と「dump」で、復元時に新しいシェアを作成できます。</li> <li>■ <b>ZFS</b> - バックアップタイプ「zfs」で、復元時に新しいシェアを作成できます。</li> <li>■ <b>なし</b> - どのバックアップタイプでも、復元時に新しいシェアを作成できません。</li> </ul> |
| DMA テープモード (ローカルに接続されたドライブ用) | DMA が System V または BSD セマンティクスどちらを受け付けるかを指定します。デフォルトは System V で、ほとんどの DMA にはこれが推奨されます。このオプションは、NDMP 経由でエクスポートされるローカルに接続されたテープドライブにのみ適用できます。使用している DMA がどちらのモードを受け付けるかについては、DMA のドキュメントを参照してください。このオプションを変更すると、DMA がデバイスを走査するときにエクスポートされるデバイスが変更されるだけでなく、この設定の変更後は DMA でそのテープデバイスを再構成する必要があります。                                        |
| DMA ユーザー名およびパスワード            | DMA の認証に使用されます。システムは MD5 をユーザー認証に使用します                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |

表 66 NDMP のログ

| ログ                   | 説明             |
|----------------------|----------------|
| system-ndmpd:default | NDMP サービスのログです |

## シャドウ移行の構成

シャドウ移行サービスは、外部または内部ソースからのデータの自動移行を可能にします。この機能については、[435 ページの「シャドウ移行」](#)に詳しく説明されています。このサービス自体は、自動バックグラウンド移行を制御するだけです。このサービスが有効か無効かに関係なく、データは帯域内リクエストに合わせて同期的に移行されます。

テストを目的とする場合、またはシャドウ移行のせいでシステムにかかる負荷が大きくなりすぎている場合だけは、このサービスを無効にするようにしてください。無効

にすると、ファイルシステムが移行を終了することはありません。このサービスの主な目的は、バックグラウンド移行専用のスレッドの数を調整できるようにすることです。

**スレッドの数プロパティ** - データのバックグラウンド移行専用のスレッドの数。これらのスレッドはマシン全体に影響し、その数を増やすと、リソース (ネットワーク、I/O、および CPU) の消費量が増えるという問題がありますが、並行性および移行全体の速度が向上する可能性があります。

## SFTP 構成

SFTP (SSH File Transfer Protocol) サービスでは、SFTP クライアントからファイルシステムにアクセスできます。匿名ログインは許可されません。ユーザーは「サービス」でどのネームサービスが構成されていても認証を行う必要があります。

SFTP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [279 ページの「シェアへの SFTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [280 ページの「リモートアクセスのための SFTP の構成 \(CLI\)」](#)
- [281 ページの「SFTP のプロパティ、ポート、およびログ」](#)

### ▼ シェアへの SFTP アクセスの追加 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」に移動します。
2. SFTP サービスが有効でオンラインになっていることを確認します。有効でない場合は、サービスを有効にします。
3. 「シェア」 > 「シェア」に移動し、シェアを選択または追加します。
4. 「プロトコル」タブに移動し、SFTP アクセスが有効になっていることを確認します。
5. (オプション) シェアモードのアクセスを「読み取り専用」または「読み取り/書き込み」に設定します。

#### 関連トピック

- [280 ページの「リモートアクセスのための SFTP の構成 \(CLI\)」](#)
- [281 ページの「SFTP のプロパティ、ポート、およびログ」](#)

## ▼ リモートアクセスのための SFTP の構成 (CLI)

1. 適切な管理者ロールを持つローカルユーザーまたはネットワークユーザー (LDAP または NIS) を作成します。(162 ページの「ユーザーの構成」を参照してください)。
2. Solaris ホスト/クライアントで `ssh-keygen -t dsa` コマンドを入力して、SSH 認証鍵を生成します。
3. その鍵を格納するファイルの名前を入力します。
4. 必要に応じてパスフレーズを入力するか、このフィールドを空白のままにして、SFTP シェアに直接ログオンします。

その鍵の場所が表示されます。次のような鍵が表示されます。


```
ssh-dss AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAPMMs5h8UWk1NPf/
VJDDEo0OAwT+s6iZxkCmmrgAmLfTX9izWk+ bsvNldOlXN/6EgkusLjo/
+UaEt5+704vMHClRaq3AlVHL55tVjeX3iCs+fDo0qwXZg3Brh8QBAaWk3
ywr2osuI1tHh4v/HwEAHZq5mVWXav0pO3bgmxl0/
+VAAAAFQDIJxnm52DfyEdQQMTY+jRVvzGwMQA AAIhTP6Ey
+2gGFiCKkvUofsc04d8pbqH8duE9P6Y88s0+opuj52GkAdRUt2fRdM9Cf3h4lIOc8Bw9
bZlBzrCKBNWBudZG56tsfLdilW6vS6gxKrmL2v7fSp9WYPsxZGhOLfU29zW4n2WVcVHbGyFEoVe
+taq aq+AYJaWoHnjZL1/
LpQAAAIAOLc8+uc3hDOcK3pAkYdg8b2rYIGOAZU4py0rq24DGPevHd5h5jbe4p
WDM70uYqGCOPYiOKeEoMnJpczRX5qjI+BfoUY4sH24WWwsKkT8XX9PUAa0WT
+7axEqg2N6YelaTJ95J vMaj6E7HkAIra2Sj2H/LSdktL42UL+j1Wx5A== username sunray
```

5. 「構成」 > 「サービス」 > 「SFTP」に移動します。「鍵」の下にあるプラス記号 (+) をクリックします。
6. 「新しい鍵」ウィンドウで、「DSA」を選択します。
7. 鍵の部分 (上記の例では AAAA で始まり、Wx5A== で終わる部分) のみをコピーし、「鍵」フィールドに貼り付けます。


---

注記 - 鍵には空白を含めないでください。

---

8. ユーザー名を入力し、リマインダとしてコメントを追加します。
9. 「シェア」 > 「シェア」に移動し、項目を追加アイコン  をクリックしてファイルシステムを作成します。
10. 「ファイルシステムを作成」ウィンドウで、ファイルシステム名 (sftp など) を入力し、シェアのアクセス権を「読み取り/書き込み」に変更して、「適用」をクリックします。



11. **編集アイコン**  をクリックして、シェアのプロパティを設定します。  
(386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」を参照してください。)
12. シェアにアクセスするには、これらの例に示すように、`sftp` コマンドを使用します。

```
sftp -o "port=218" <username> 10.x.x.151:/export/sftp
Connecting to 10.x.xx.151...
Changing to: /export/sftp
sftp>
```

Example with `-v` option:

```
sftp -v -o "IdentityFile=/home/<username>/.ssh/id_dsa" -o "port=218"
root 10.x.xx.151:/export/sftp
```

## 関連トピック

- 279 ページの「シェアへの SFTP アクセスの追加 (BUI)」
- 281 ページの「SFTP のプロパティ、ポート、およびログ」

## SFTP のプロパティ、ポート、およびログ

### SFTP のプロパティ

表 67 SFTP のプロパティ

| プロパティ        | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ポート (受信接続用)  | SFTP が待機するポート。デフォルトは 218 です。                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| root ログインを許可 | root ユーザーの SFTP ログインを許可します。このプロパティはデフォルトでオフになっています。                                                                                                                                                                                                                                          |
| ロギングレベル      | SFTP ログメッセージの詳細レベルです                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| SFTP 鍵       | SFTP 認証用の RSA/DSA 公開鍵です。テキストコメントを鍵に関連付けると、鍵が追加された理由を管理者が追跡できます。2011.1 ソフトウェアリリースの時点で、SFTP の鍵管理が変更され、セキュリティが強化されました。SFTP 鍵を作成するときに、有効なユーザー割り当てで <code>user</code> プロパティを含めることが求められます。SFTP 鍵はユーザー別にグループ化され、SFTP でユーザー名を使用して認証されます。「ユーザー」プロパティが含まれていない既存の SFTP 鍵は、これまでどおり認証されますが再作成することをお勧めします。 |

### SFTP ポート

SFTP サービスでは、アプライアンスへの接続に非標準のポート番号を使用します。これは、ポート 22 への管理上の SSH 接続との競合を回避するためです。デフォルトでは、SFTP ポートは 218 であり、接続前に SFTP クライアントで指定する必要があります。

ます。たとえば、SFTP を使用する OpenSolaris クライアントは次のコマンドで接続を行います。

```
manta# sftp -o "Port 218" root@guppy
```

### SFTP ログ

network-sftp:default - SFTP サービスのイベントを記録します

### 関連トピック

- [279 ページの「シェアへの SFTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)
- [280 ページの「リモートアクセスのための SFTP の構成 \(CLI\)」](#)

## SRP 構成

アプライアンスで LUN を構成すると、SCSI リモートプロトコル (SRP) ターゲットを介してそのボリュームをエクスポートできます。SRP サービスでは、イニシエータは SRP プロトコルを使用してターゲットにアクセスできます。

SRP ターゲットおよびイニシエータについては、[129 ページの「Storage Area Network \(SAN\) の構成」](#)を参照してください。

## TFTP 構成

簡易ファイル転送プロトコル (TFTP) とは、ファイル転送のための簡易プロトコルです。TFTP は、軽量で簡単に実装できるように設計されているため、通常の FTP の機能の大部分が省略されています。TFTP は、リモートサーバーとの間でファイル (または電子メール) のみを読み書きします。ディレクトリを表示することはできず、現時点ではユーザー認証もありません。

表 68 TFTP のプロパティ

| プロパティ          | 説明                                                                                        |
|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| デフォルトルートディレクトリ | TFTP ログインの場所です。デフォルトは /export で、シェア階層の最上位を示します。すべてのユーザーは、TFTP サービスの認証に成功したあとでこの場所にログインします |

シェアで TFTP を使用するには、[283 ページの「シェアへの TFTP アクセスの追加 \(BUI\)」](#)を参照してください。

## ▼ シェアへの TFTP アクセスの追加 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」に移動します。
2. TFTP サービスが有効でオンラインになっていることを確認します。有効でない場合は、サービスを有効にします。
3. 「シェア」 > 「シェア」に移動し、シェアを選択または追加します。
4. 「プロトコル」タブに移動し、TFTP アクセスが有効になっていることを確認します。
5. (オプション) シェアモードのアクセスを「読み取り専用」または「読み取り/書き込み」に設定します。

## ウイルススキャンの構成

ウイルススキャンサービスでは、ファイルシステムレベルでウイルスをスキャンします。いずれかのプロトコルからファイルがアクセスされると、ウイルススキャンサービスは最初にそのファイルをスキャンし、ウイルスが見つかった場合はファイルのアクセス拒否と隔離を行います。最新のウイルス定義でスキャンされたファイルは、次の変更が行われるまで再スキャンされません。キャッシュされたファイルデータが含まれているか、NFSv4 サーバーによって読み取り権限が委任されている NFS クライアントからアクセスされたファイルは、すぐに隔離されない可能性があります。

ウイルススキャンを構成するには、次のセクションを参照してください。

- [283 ページの「シェアに対するウイルススキャンの構成 \(BUI\)」](#)
- [284 ページの「ウイルススキャンのプロパティとログ」](#)
- [285 ページの「ウイルススキャンのファイル拡張子」](#)
- [286 ページの「スキャンエンジン」](#)

## ▼ シェアに対するウイルススキャンの構成 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「ウイルススキャン」に移動します。
2. サービスを有効にします。
3. 適切なプロパティを設定します。
4. 「適用」をクリックして構成をコミットします。

5. 「シェア」に移動します。
6. ファイルシステムまたはプロジェクトを編集します。
7. 「一般」タブを選択します。
8. 「ウイルススキャン」オプションを有効にします。

### 関連トピック

- [284 ページの「ウイルススキャンのプロパティとログ」](#)
- [285 ページの「ウイルススキャンのファイル拡張子」](#)
- [286 ページの「スキャンエンジン」](#)

## ウイルススキャンのプロパティとログ

表 69 ウイルススキャンのプロパティ

| プロパティ                      | 説明                                                                                                                                                                                |
|----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| スキャンする最大ファイルサイズ            | このサイズよりも大きいファイルはスキャンされません。パフォーマンスの著しい低下を回避するためです。これらの大規模ファイルは実行可能ファイルになりそうもないため (データベースファイルなど)、それらが脆弱なクライアントにリスクをもたらす可能性は低くなります。デフォルト値は 1G バイトです。                                 |
| 最大ファイルサイズを超えるファイルへのアクセスを許可 | デフォルトで有効になっており、最大スキャンサイズよりも大きいファイル (したがって、クライアントに返される前にスキャンされていない) にアクセスできます。セキュリティー要件の厳しいサイトの管理者は、このオプションを無効にし、最大ファイルサイズを大きくすることで、アクセス可能なすべてのファイルが確実にウイルススキャンの対象になるようにすることができます。 |

表 70 ウイルススキャンのログ

| ログ    | 説明                |
|-------|-------------------|
| vscan | ウイルススキャンサービスのログです |

### 関連トピック

- [283 ページの「シェアに対するウイルススキャンの構成 \(BUI\)」](#)
- [285 ページの「ウイルススキャンのファイル拡張子」](#)

- [286 ページの「スキャンエンジン」](#)

## ウイルススキャンのファイル拡張子

このセクションでは、スキャンされるファイルの制御方法について説明します。デフォルト値「\*」を使用すると、すべてのファイルがスキャンされます。すべてのファイルのスキャンすると、パフォーマンスに影響が出る可能性があるため、スキャンするファイルのサブセットを指定できます。

たとえば、リスクの高いファイルのみ (zip ファイルを含む) をスキャンするが、パターン「data-archive\*.zip」に一致する名前のファイルはスキャンしないようにするには、構成を次のように設定できます。

表 71 ウイルススキャンのファイル拡張子

| アクション   | パターン              |
|---------|-------------------|
| スキャン    | exe               |
| スキャン    | com               |
| スキャン    | bat               |
| スキャン    | doc               |
| スキャン    | zip               |
| スキャンしない | data-archive*.zip |
| スキャンしない | *                 |

注記 - スキャンリストに明示的に含まれていないほかのすべてのファイルタイプを除外するには、「スキャンしない\*」を使用する必要があります。file.name.exe.bat.jpg123 という名前のファイルは、名前の「jpg123」部分 (拡張子) のみが規則と比較されるため、スキャンされません。

含める設定の前に除外する設定を使用しないでください。たとえば、「スキャンしない\*」設定は、それ以降のすべてのファイルタイプを除外してしまうため、含める設定の前に使用しないでください。

表 72 ウイルススキャンのアクション

| アクション   | パターン |
|---------|------|
| スキャンしない | *    |
| スキャン    | exe  |
| スキャン    | com  |
| スキャン    | bat  |
| スキャン    | doc  |

| アクション   | パターン              |
|---------|-------------------|
| スキャン    | zip               |
| スキャンしない | data-archive*.zip |

### 関連トピック

- [283 ページの「シェアに対するウイルススキャンの構成 \(BUI\)」](#)
- [284 ページの「ウイルススキャンのプロパティとログ」](#)
- [286 ページの「スキャンエンジン」](#)

## スキャンエンジン

このセクションでは、使用するスキャンエンジンを指定します。スキャンエンジンとは、ファイルをスキャンさせるためにアプライアンスが ICAP (Internet Content Adaptation Protocol、RFC 3507) を使用してアクセスする、サードパーティーの外部ウイルススキャンサーバーです。

表 73 スキャンエンジンのプロパティ

| プロパティ | 説明                                               |
|-------|--------------------------------------------------|
| 有効    | このスキャンエンジンを使用します                                 |
| ホスト   | スキャンエンジンサーバーのホスト名または IP アドレスです                   |
| 最大接続  | 同時接続の最大数です。一部のスキャンエンジンは、接続数を 8 に制限するとより適切に動作します。 |
| ポート   | このスキャンエンジンのポートです                                 |

### 関連トピック

- [283 ページの「シェアに対するウイルススキャンの構成 \(BUI\)」](#)
- [284 ページの「ウイルススキャンのプロパティとログ」](#)
- [285 ページの「ウイルススキャンのファイル拡張子」](#)

## NIS 構成

ネットワーク情報サービス (NIS) とは、集中管理用のネームサービスです。アプライアンスはユーザーとグループに対して NIS クライアントとして動作できるため、次の操作が可能になります。

- NIS ユーザーは FTP サービスと HTTP サービスにログインできます。
- アプライアンス管理用の権限を NIS ユーザーに付与できます。アプライアンスでは NIS 情報に独自の権限設定を付加します。

---

注記 - 0 - 99 (両端を含む) の UID および GID は、将来のアプリケーションで使用するためにオペレーティングシステムベンダーによって予約されています。階層化された製品のエンドシステムユーザーまたはベンダーによる使用はサポートされておらず、使用した場合は将来のアプリケーションでセキュリティ関連の問題が発生する可能性があります。

---

NIS を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [287 ページの「NIS からのアプライアンス管理者の追加 \(BUI\)」](#)
- [288 ページの「NIS のプロパティとログ」](#)

## ▼ NIS からのアプライアンス管理者の追加 (BUI)

NIS の資格を使ってログインし、アプライアンスを管理する既存のユーザーが NIS に含まれている場合:

---

注記 - NIS と LDAP の両方がアプライアンスで構成され、それらのサービスが特定の項目について異なる情報を返す場合、アプライアンスは NIS によって提供されるデータを使用します。

---

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「NIS」 に移動します。
2. NIS ドメインとサーバーのプロパティを設定します。
3. 「適用」 をクリックして構成をコミットします。
4. 「構成」 > 「ユーザー」 に移動します。
5. タイプ「ディレクトリ」を使ってユーザーを追加します。
6. ユーザー名を NIS ユーザー名に設定します。
7. このユーザーに承認を追加するために、引き続き [162 ページの「ユーザーの構成」](#) に記載されている手順を実行します。

### 関連トピック

- [288 ページの「NIS のプロパティとログ」](#)

## NIS のプロパティとログ

表 74 NIS のプロパティ

| プロパティ                 | 説明                                                 |
|-----------------------|----------------------------------------------------|
| ドメイン                  | 使用する NIS ドメインです。                                   |
| サーバー: ブロードキャストを使用して検索 | アプライアンスは、NIS ブロードキャストを送信して、そのドメインの NIS サーバーを見つけます。 |
| サーバー: リスト表示されたサーバーを使用 | NIS サーバーのホスト名または IP アドレスです                         |

アプライアンスは、リストに記載されている最初の NIS サーバーか、ブロードキャストを使って見つかったサーバーに接続し、応答が停止した場合は次の NIS サーバーに切り替えます。

表 75 NIS のログ

| ログ                             | 説明                                         |
|--------------------------------|--------------------------------------------|
| network-nis-client:default     | NIS クライアントサービスのログです                        |
| appliance-kit-nsswitch:default | アプライアンスのネームサービスのログ。そのログを介して NIS クエリーが行われます |
| system-identity:domain         | アプライアンスのドメイン名コンフィギュレータのログ。                 |

### 関連トピック

- [287 ページの「NIS からのアプライアンス管理者の追加 \(BUI\)」](#)

## LDAP 構成

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) とは、ユーザー、グループ、ホスト名、およびその他のリソース (オブジェクトと呼ばれる) の管理を集中して行うためのディレクトリサービスです。このサービスはアプライアンス上で LDAP クライアントとして機能するため、次の操作が可能になります。

- LDAP ユーザーは FTP サービスと HTTP サービスにログインできます。
- シェアでルートディレクトリの ACL を構成する際に、(数値 ID ではなく) LDAP ユーザー名を使用できます。
- アプライアンス管理用の権限を LDAP ユーザーに付与できます。アプライアンスでは LDAP 情報に独自の権限設定を付加します。
- LDAP サーバーの証明書は自己署名付きでもかまいません。
- 信頼できる CA 証明書のリストを指定することはできません。各証明書は、アプライアンス管理者によって個別に受け入れられる必要があります。



- LDAP サーバーの証明書が期限切れの場合は、そのサーバーをリストから削除してから再度追加して、その新しい証明書を受け入れる必要があります。

---

注記 - 0 - 99 (両端を含む) の UID は、将来のアプリケーションで使用するためにオペレーティングシステムベンダーによって予約されています。階層化された製品のエンドシステムユーザーまたはベンダーによるそのような使用はサポートされておらず、使用した場合はほかのアプリケーションでセキュリティの問題が発生する可能性があります。

---

LDAP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [289 ページの「アプライアンス管理者の追加 \(BUI\)」](#)
- [290 ページの「複数の属性値ペアを持つプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- LDAP セキュリティ設定の構成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)
- [294 ページの「LDAP のカスタムマッピング」](#)


## ▼ アプライアンス管理者の追加 (BUI)

既存の LDAP ユーザーが LDAP 資格を使ってログインし、アプライアンスを管理できるようにするには、次の手順を使用します。

---

注記 - NIS と LDAP の両方がアプライアンスで構成され、それらのサービスが特定の項目について異なる情報を返す場合、アプライアンスは NIS によって提供されるデータを使用します。

---

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「LDAP」 に移動して、使用するプロパティを入力します。  
使用できるプロパティについては、[293 ページの「LDAP のプロパティ」](#) を参照してください。
2. 選択したプロパティを適用するには「適用」をクリックします。もう一度やり直すには「戻す」をクリックします。
3. LDAP サーバーを追加するには、「サーバー」セクションで項目を追加アイコン  をクリックします。  
サーバーについては、[293 ページの「LDAP のプロパティ」](#) の「サーバー」セクションを参照してください。
4. LDAP サーバーを構成するには、「新しい LDAP サーバー」ボックスに LDAP サーバーのアドレスを入力し、使用する LDAP 証明書ソースを選択します。

「証明書ソース」では、「サーバー」を選択して、現在のサーバーを検索して(セキュアな方法で) 証明書を取得し、これを使用してあとで提示される証明書を検証します。

5. 「構成」>「ユーザー」に移動して、必要に応じて LDAP ユーザー名を使用してユーザーを追加します。

ユーザーの追加方法については、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [290 ページの「複数の属性値ペアを持つプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)
- [294 ページの「LDAP のカスタムマッピング」](#)

## ▼ 複数の属性値ペアを持つプロパティの設定 (CLI)

等号 (=) で結ばれた複数の属性値ペアを持つ LDAP プロパティ値を設定するには、各属性値ペアを二重引用符で囲みます。

1. `configuration services ldap` に移動します。
2. 複数の属性値ペアを設定するには、次のコマンドを使用します。

```
hostname:configuration services ldap> set user_mapattr="uid=uid",
"uidnumber=uidNumber","gidnumber=gidNumber",
"gecos=displayName","description=distinguishedName",
"homedirectory=unixHomeDirectory"
```

### 関連トピック

- [289 ページの「アプライアンス管理者の追加 \(BUI\)」](#)
- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)
- [294 ページの「LDAP のカスタムマッピング」](#)

## ▼ LDAP セキュリティー設定の構成 (BUI)

LDAP サービスのセキュリティー設定を構成するには、次の手順を実行します。

1. 「構成」>「サービス」に移動します。
2. 「ディレクトリサービス」で「LDAP」を選択します。
3. 「セキュリティー設定」で、次のいずれかの認証オプションを選択します。

- **匿名** - アプライアンスにすべてのユーザーが使用できるデータに対してのみアクセス権を付与します。オプションで SSL および TLS プロトコルを有効にするには、「SSL/TLS を有効化」のチェックボックスを選択します。
  - **自己** - ユーザーの ID と証明書を使用してアプライアンスを認証します。自己認証では、Kerberos 暗号化と SASL/GSSAPI 認証方法を使用します。
  - **プロキシ** - 特定のユーザーアカウントに対してプロキシを介した認証を指定します。次のオプションを設定します。
    - (オプション) **SSL/TLS を有効化** - SSL および TLS プロトコルを有効化するにはこのチェックボックスを選択します。ユーザーの識別名およびパスワードが平文で送信されないため、簡易認証方法を使用するときは強くお勧めします。
    - **認証方法** - 「簡易 (RFC 4513)」または「SASL/DIGEST-MD5」を選択します。
    - **プロキシ DN** - プロキシ認証に使用されるアカウントの識別名です。
    - **プロキシパスワード** - プロキシ認証に使用されるアカウントのパスワード。
4. 「適用」をクリックします。

#### 関連トピック

- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)

## ▼ LDAP セキュリティー設定の構成 (CLI)

LDAP サービスのセキュリティー設定を構成するには、次の手順を実行します。有効なプロパティ設定の組み合わせについては、このタスクの最後にある表を参照してください。

1. **configuration services ldap** に移動し、「show」と入力してプロパティを表示します。

```
hostname:configuration services ldap> show
Properties:
 <status> = enabled
 default_servers =
 proxy_dn =
 proxy_password =
 base_dn =
 search_scope = one
 cred_level = anonymous
 auth_method = none
 use_tls = false
 user_search =
 user_mapattr =
 user_mapobjclass =
 group_search =
 group_mapattr =
 group_mapobjclass =
 netgroup_search =
 netgroup_mapattr =
 netgroup_mapobjclass =
```

2. 資格レベルを設定するには、「set cred\_level=」と次のいずれかのオプションを入力します。

- anonymous - すべてのユーザーが使用可能なデータにアクセスするための匿名認証を許可します。
- self-ID および資格に基づいてユーザーに自己認証を提供します。自己認証では、Kerberos 暗号化および SASL/GSSAPI 認証方法を使用します。
- proxy - 特定のユーザーアカウントに対してプロキシを介した認証を指定します。

```
hostname:configuration services ldap> set cred_level=proxy
cred_level = proxy (uncommitted)
```

3. 承認方法を設定するには、「set auth\_method=」と次のいずれかのオプションを入力します。

- none - なし (anonymous と併用)
- sasl/GSSAPI - SASL/GSSAPI (self と併用)
- simple - 簡易、RFC 4513 (proxy と併用)
- sasl/DIGEST-MD5 - SASL/DIGEST-MD5 (proxy と併用)

```
hostname:configuration services ldap> set auth_method=simple
auth_method = simple (uncommitted)
```

4. SSL/TLS を有効または無効にするには、「set use\_tls=」と「true」または「false」を入力します。

ユーザーの識別名およびパスワードが平文で送信されないため、簡易認証方法を使用するときは SSL/TLS の有効化を強くお勧めします。

```
hostname:configuration services ldap> set use_tls=true
use_tls = true (uncommitted)
```

5. 資格レベルが proxy に設定されている場合は、「set proxy\_dn=」と、プロキシ認証に使用されるアカウントの識別名を入力します。次に、「set proxy\_password=」とアカウントのパスワードを入力します。

```
hostname:configuration services ldap> set proxy_dn=ProxyName
proxy_dn = ProxyName (uncommitted)
hostname:configuration services ldap> set proxy_password=MyPassword5
proxy_password = ***** (uncommitted)
```

6. 「commit」と入力します。

```
hostname:configuration services ldap> commit
```

7. 有効なセキュリティープロパティー設定の組み合わせについては、次の表を参照してください。

| cred_level | auth_method | use_tls |
|------------|-------------|---------|
| anonymous  | none        | true    |

| cred_level | auth_method     | use_tls |
|------------|-----------------|---------|
|            | none            | false   |
| self       | sasl/GSSAPI     | false   |
| proxy      | simple          | true    |
|            | simple          | false   |
|            | sasl/DIGEST-MD5 | true    |
|            | sasl/DIGEST-MD5 | false   |

許可されますが、ユーザーの識別名 (DN) およびパスワードが平文で送信されるため、お勧めしません。

## 関連トピック

- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)

## LDAP のプロパティ

使用している環境に適した設定については、LDAP サーバー管理者に問い合わせてください。

### スキーマ

- **ベース検索 DN** - ディレクトリ検索の開始位置になる、ベースオブジェクトの識別名を指定します。
- **検索範囲** - ベースオブジェクトを基準にした、検索対象となる LDAP ディレクトリ内のオブジェクトを定義します。検索結果は、ベース検索オブジェクトの直下にあるオブジェクト (1 レベル) だけに制限することも、ベース検索オブジェクトの下にあるすべてのオブジェクト (サブツリー) を含めることもできます。デフォルトは 1 レベルです。
- **スキーマ定義** - アプライアンスで使用されるスキーマ。管理者は、このプロパティを使用して、ユーザー、グループ、およびネットグループのデフォルトの検索記述子、属性マッピング、およびオブジェクトクラスマッピングをオーバーライドできます。詳細は、[294 ページの「LDAP のカスタムマッピング」](#)を参照してください。

### セキュリティ設定

- **次として認証** - LDAP サーバーにアプライアンスを認証させるために使用される証明書。
- **SSL/TLS を有効化** - TLS (Transport Layer Security、SSL の後継) を切り替えて、LDAP サーバーへのセキュアな接続を確立します。「自己」として認証する場合、「自己」では Kerberos 暗号化を使用するため、このオプションは使用できません。

- **認証方法** - LDAP サーバーにアプライアンスを認証させるために使用する方法。「プロキシ」として認証する場合にのみこの設定を構成できます。

### LDAP サーバー

- **サーバー** - 使用する LDAP サーバーのリスト。サーバーを 1 つだけ指定した場合、アプライアンスはそのサーバーだけを使用し、そのサーバーに障害が発生すると、LDAP サービスは使用できなくなります。複数のサーバーを指定した場合、優先順位はなく、機能している任意のサーバーをいつでも使用できます。いずれかのサーバーに障害が発生すると、リスト内の別のサーバーが使用されます。指定されたすべてのサーバーに障害が発生しないかぎり、LDAP サービスは引き続き使用できます。

### 関連トピック

- [290 ページの「LDAP セキュリティー設定の構成 \(BUI\)」](#)
- [291 ページの「LDAP セキュリティー設定の構成 \(CLI\)」](#)

## LDAP のカスタムマッピング

LDAP ディレクトリでユーザーとグループを検索するには、アプライアンスは検索記述子を使用し、どのオブジェクトクラスがユーザーとグループに対応するか、およびどの属性が必要なプロパティーに対応するかを認識する必要があります。デフォルトでは、アプライアンスは RFC 2307 によって指定されたオブジェクトクラス (*posixAccount* と *posixGroup*) および次のリストに示すデフォルトの検索記述子を使用しますが、これは環境ごとにカスタマイズできます。次の例で使用されるベース検索 DN は `dc=example,dc=com` です。

表 76 LDAP のカスタムマッピング

| 検索記述子     | デフォルト値                                  | 例                                          |
|-----------|-----------------------------------------|--------------------------------------------|
| users     | <code>ou=people,base search DN</code>   | <code>ou=people,dc=example,dc=com</code>   |
| groups    | <code>ou=group,base search DN</code>    | <code>ou=group,dc=example,dc=com</code>    |
| netgroups | <code>ou=netgroup,base search DN</code> | <code>ou=netgroup,dc=example,dc=com</code> |

使用される検索記述子、オブジェクトクラス、および属性のカスタマイズには、「スキーマ定義」プロパティーを使用します。デフォルトの検索記述子をオーバーライドするには、使用する DN 全体を入力します。アプライアンスでは、この値を未変更のまま使用し、「ベース検索 DN」および「検索範囲」プロパティーの値は無視します。ユーザー、グループ、およびネットグループの属性およびオブジェクトをオーバーライドするには、適切なタブ(「ユーザー」、「グループ」、または「ネットグループ」)を選択し、`default = new` 構文を使用してマッピングを指定します。この場合、`default` はデフォルト値であり、`new` は使用する値です。例:

- ユーザーのオブジェクトクラスとして *posixAccount* の代わりに *unixaccount* を使用するには、「ユーザー」タブの「オブジェクトクラスマッピング」に *posixAccount* = *unixaccount* と入力します。
- ユーザーオブジェクトの属性として *uid* の代わりに *employeenumber* を使用するには、「ユーザー」タブの「属性マッピング」に *uid* = *employeenumber* と入力します。
- グループのオブジェクトクラスとして *posixGroup* の代わりに *unixgroup* を使用するには、「グループ」タブの「オブジェクトクラスマッピング」に *posixGroup* = *unixgroup* と入力します。
- グループオブジェクトの属性として *cn* の代わりに *groupaccount* を使用するには、「グループ」タブの「属性マッピング」に *cn* = *groupaccount* と入力します。

次に、マッピングに適したオブジェクトクラスと属性のリストを示します。

#### クラス

- *posixAccount*
- *posixGroup*
- *shadowAccount*

#### 属性 - ユーザー

- *uid*
- *uidNumber*
- *gidNumber*
- *gecos*
- *homeDirectory*
- *loginShell*
- *userPassword*

#### 属性 - グループ

- *uid*
- *memberUid*
- *cn*
- *userPassword*
- *gidNumber*
- *member*
- *uniqueMember*
- *memberOf*
- *isMemberOf*

### 関連トピック

- [289 ページの「アプライアンス管理者の追加 \(BUI\)」](#)
- [290 ページの「複数の属性値ペアを持つプロパティの設定 \(CLI\)」](#)
- [293 ページの「LDAP のプロパティ」](#)

## Active Directory の構成

Active Directory サービスでは、Microsoft Active Directory データベースにアクセスできます。このデータベースには、ユーザー、グループ、シェア、およびその他のシェアオブジェクトに関する情報が格納されています。このサービスにはドメインモードとワークグループモードの2つのモードがあり、それによってSMBユーザーの認証方法が決まります。ドメインモードで動作している場合、SMB クライアントはAD ドメインコントローラを介して認証されます。ワークグループモードでは、SMB クライアントはローカルユーザーとしてローカルに認証されます。ローカルユーザーの詳細は、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)を参照してください。

Active Directory を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

### ▼ AD ドメインへの参加 (BUI)

1. (オプション) SMB コンテキストで Active Directory サイトを構成します。
2. (オプション) SMB コンテキストで優先ドメインコントローラを構成します。
3. NTP を有効にするか、またはアプライアンスとドメインコントローラのクロックが5分以内のところまで確実に同期されるようにします。
4. DNS インフラストラクチャーで Active Directory ドメインへの委任が正しく行われるようにするか、または DNS コンテキストでドメインコントローラの IP アドレスを追加のネームサーバーとして追加します。
5. 「構成」 > 「サービス」 > 「Active Directory」に移動して、「ドメインに参加」をクリックします。



6. **Active Directory** ドメイン、管理ユーザー名、および管理パスワードを構成します。
7. 「適用」をクリックして構成をコミットします。

#### 関連トピック

- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

### ▼ AD ワークグループへの参加 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「Active Directory」に移動して、「ワークグループに参加」をクリックします。
2. **Windows** ワークグループ名を入力します。
3. 「適用」をクリックして構成をコミットします。

#### 関連トピック

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

### ▼ Active Directory の構成 (CLI)

1. **configuration services ad** に移動します。

```
hostname:> configuration services ad
```

2. 既存の構成を表示するには、**show** と入力します。

```
hostname:configuration services ad> show
Properties:
```

```
<status> = online
mode = domain
domain = eng.fishworks.com
```

```
Children:
```

```
domain => Join an Active Directory domain
workgroup => Join a Windows workgroup
```

3. アプライアンスが現在、ドメイン `eng.fishworks.com` で動作していることを確認してください。

次の例では、そのドメインを切り離し、ワークグループに参加します。

```
hostname:configuration services ad> workgroup
hostname:configuration services ad workgroup> set workgroup=WORKGROUP
hostname:configuration services ad workgroup> commit
hostname:configuration services ad workgroup> done
hostname:configuration services ad> show
Properties:
 <status> = disabled
 mode = workgroup
 workgroup = WORKGROUP
```

4. 別のドメインに参加する準備として、サイトおよび優先ドメインコントローラを構成するには、次のコマンドを入力します。

```
hostname:configuration services ad> done
hostname:> configuration services smb
hostname:configuration services smb> set ads_site=sf
hostname:configuration services smb> set pdc=192.168.3.21
hostname:configuration services smb> commit
hostname:configuration services smb> show
Properties:
 <status> = online
 lmauth_level = 4
 pdc = 192.168.3.21
 ads_site = sf
hostname:configuration services smb> done
```

5. プロパティの構成後に新しいドメインに参加するには、次のコマンドを入力します。

AD ドメインへの参加時は、ノードをコミットするたびにユーザーおよびパスワードを設定する必要があります。

```
hostname:> configuration services ad
hostname:configuration services ad> domain
hostname:configuration services ad domain> set domain=fishworks.com
hostname:configuration services ad domain> set user=Administrator
hostname:configuration services ad domain> set password=*****
hostname:configuration services ad domain> commit
hostname:configuration services ad domain> done
hostname:configuration services ad> show
Properties:
 <status> = online
 mode = domain
 domain = fishworks.com
```

## 関連トピック

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

## Active Directory のドメインへの参加

デフォルトで Active Directory にアカウントがまだ存在しない場合は、ドメインへの参加操作の一環としてシステムのマシン信頼アカウントがコンピュータアカウント (cn=Computers) のデフォルトコンテナ内に自動的に作成されます。次のユーザーがドメインへの参加を実行できます。

- **ドメイン管理者** - マシン信頼アカウントがいずれかのコンテナに格納されているドメインに任意の数のシステムを参加させることができます。
- **1つ以上の組織単位に対する権限を持つ、委任された管理者** - 担当する組織単位にマシンアカウントの場所が指定されているドメインに任意の数のシステムを参加させることができます。
- **管理者によって事前にステージングされたマシンアカウントを持つ通常のユーザー** - 管理者による事前承認済みとして1つのシステムをドメインに参加させることができます。
- **通常のユーザー** - 通常、限定された数のシステムの参加が承認されます。

Active Directory ドメインに参加するための使用可能なプロパティを次に示します。

- **Active Directory ドメイン** - Active Directory ドメインの完全修飾名または NetBIOS 名です
- **ユーザー** - Active Directory でコンピュータアカウントを作成するための資格を持つ AD ユーザーです
- **パスワード** - 管理ユーザーのパスワードです
- **組織単位** - システムのマシン信頼アカウントが作成される代替の組織単位を指定します。組織単位は、ドメインを基準とした識別名 (DN) 形式を使用した、1つ以上の名前と値のペアのコンマ区切りリスト (ou=innerOU,ou=outerOU など) として指定されます。
- **事前作成アカウントを使用** - システムのアカウントが存在するが、指定された組織単位にそのアカウントが含まれていない場合は、事前に作成されたアカウントが使用されます。

### 関連トピック

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

## Active Directory のドメインとワークグループ

ワークグループに参加するための構成可能なプロパティは Windows ワークグループです。

サービスを直接有効にしたり無効にしたりするのではなく、ドメインやワークグループに参加することによってサービスが変更されます。ドメインに参加するには、指定の Active Directory ドメインにアプライアンスのアカウントを作成する必要があります。アカウント名は、最大 15 文字を設定でき、Active Directory ドメインに登録されているほかの名前に対して一意である必要があります。さもないと、類似の名前のアプライアンスとの競合が発生し、機能に問題が起こる可能性があります。コンピュータアカウントが確立されると、アプライアンスはセキュアにデータベースのクエリーを実行してユーザー、グループ、およびシェアに関する情報を検索できます。

暗黙のうちにワークグループに参加すると、Active Directory ドメインから切り離され、Active Directory データベースに格納されている SMB クライアントはシェアに接続できなくなります。

## Active Directory の LDAP 署名

LDAP 署名には構成オプションがありません。ドメインコントローラとの通信時にそのオプションが自動的にネゴシエーションされるからです。LDAP 署名がストレージアプライアンスとドメインコントローラの間で行われるのに対して、SMB 署名は SMB クライアントとストレージアプライアンスの間の通信時に行われます。

### 関連トピック

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [300 ページの「Active Directory の Windows Server でのサポート」](#)

## Active Directory の Windows Server でのサポート

Windows Server 2012 は、2011.1.5 (以降) のソフトウェアバージョンで完全にサポートされています。

表 77 Active Directory の Windows Server 2008 でのサポート

| Windows バージョン           | サポートされるソフトウェアバージョン     | 回避方法                                               |
|-------------------------|------------------------|----------------------------------------------------|
| Windows Server 2003     | すべて                    | なし                                                 |
| Windows Server 2008 SP1 | 2009.Q2 3.1 以前         | 必要に応じて KB957441 のホットフィックスを適用します。セクション B を参照してください。 |
|                         | 2009.Q2 4.0 - 2011.1.1 | KB951191 のホットフィックスを適用し、必要に応じて KB957441             |

| Windows バージョン           | サポートされるソフトウェアバージョン     | 回避方法                                              |
|-------------------------|------------------------|---------------------------------------------------|
|                         |                        | のホットフィックスを適用する必要があります。セクション A および B を参照してください。    |
|                         | 2011.1.2 以降            | KB951191 のホットフィックスを適用する必要があります。セクション A を参照してください。 |
| Windows Server 2008 SP2 | 2009.Q2 4.0 - 2011.1.1 | セクション C を参照してください。                                |
|                         | 2011.1.2 以降            | なし                                                |
| Windows Server 2008 R2  | 2009.Q2 4.0 - 2011.1.1 | セクション C を参照してください。                                |
|                         | 2011.1.2 以降            | なし                                                |

#### Active Directory の Windows Server 2008 でのサポートのセクション A: Kerberos の問題 (KB951191)

- 2009.Q2.4.0 以降にアップグレードし、Windows 2008 ドメインコントローラで Windows Server 2008 SP2 または R2 が実行されている場合は、アクションを行う必要はありません。
- 2009.Q2.4.0 以降にアップグレードし、Windows 2008 ドメインコントローラで Windows Server 2008 SP1 が実行されている場合は、KB951191 に記載されているホットフィックスを適用するか、Windows 2008 SP2 をインストールする必要があります。

#### Active Directory の Windows Server 2008 でのサポートのセクション B: NTLMv2 の問題 (KB957441)

- 次は、アプライアンスで 2011.1.2 より前のソフトウェアバージョンが実行されている場合にのみ適用されます。
- ドメインコントローラで Windows Server 2008 SP1 が実行されている場合は、<http://support.microsoft.com/kb/957441/> (<http://support.microsoft.com/kb/957441/>) のホットフィックスも適用するようにしてください。これにより、アプライアンスがデフォルトの LMCompatibilityLevel 設定を使用してドメインに参加できないという NTLMv2 の問題が解決されます。
- Windows 2008 SP1 ドメインコントローラの LMCompatibilityLevel が 5 に設定されている場合は、このホットフィックスをインストールする必要があります。ホットフィックスの適用後は、KB957441 の説明に従って新しいレジストリキーを作成および設定する必要があります。
- 2011.1.2 以降にアップグレードした場合は、前述のホットフィックスは必要ありません。

#### Active Directory の Windows Server 2008 でのサポートのセクション C: NTLMv2 に関する注意点

- 次は、アプライアンスで 2011.1.2 より前のソフトウェアバージョンが実行されている場合にのみ適用されます。ドメインコントローラで Windows Server 2008 SP2 または R2 が実行されている場合は、ホットフィックスを適用する必要はありませんが、KB957441 の説明に従ってレジストリ設定を適用する必要があります。
- 2011.1.2 以降にアップグレードした場合は、アクションを行う必要はありません。

#### 関連トピック

- [296 ページの「AD ドメインへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「AD ワークグループへの参加 \(BUI\)」](#)
- [297 ページの「Active Directory の構成 \(CLI\)」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインへの参加」](#)
- [299 ページの「Active Directory のドメインとワークグループ」](#)

## アイデンティティマッピングの構成

アイデンティティマッピングにより、Windows ID と UNIX ID を関連付けることで、SMB クライアントおよび NFS クライアントから同じファイルセットにアクセスできます。アイデンティティマッピングサービスは、UNIX ユーザー識別子 (UID) とグループ識別子 (GID) と Windows セキュリティー識別子 (SID) 間のマッピングのデータベースを作成し、保守することによって、Windows と UNIX のユーザー ID を同時に管理します。

アイデンティティマッピングを管理するには、次のタスクを使用します。

- [アイデンティティマッピングの構成 - BUI、CLI](#)
- [マッピング規則の作成 - BUI、CLI](#)
- [308 ページの「マッピングの表示 \(BUI\)」](#)
- [キャッシュからのマッピングのフラッシュ - BUI、CLI](#)

アイデンティティマッピングを理解するには、次のトピックを使用します。

- [310 ページの「アイデンティティマッピングのベストプラクティス」](#)
- [311 ページの「アイデンティティマッピングの概念」](#)
- [312 ページの「キャッシュされている一時的マッピング」](#)
- [313 ページの「アイデンティティマッピングの大文字小文字の区別」](#)
- [313 ページの「マッピング規則の方向を示す記号」](#)

### ▼ アイデンティティマッピングの構成 (BUI)

アイデンティティマッピングを構成するには、次の手順を実行します。

始める前に 少なくとも 1 つの Active Directory ドメインに参加していることを確認します。Active Directory については、[296 ページの「Active Directory の構成」](#)を参照してください。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「アイデンティティマッピング」 > 「プロパティ」に移動します。
2. 次のいずれかのマッピングモードを選択します。
  - ルールベース
  - ディレクトリベース - 次のすべての属性を設定します。
    - AD 属性 - UNIX ユーザー名 - UNIX ユーザー名に相当する Active Directory データベース内の名前
    - AD 属性 - UNIX グループ名 - UNIX グループ名に相当する Active Directory データベース内の名前
    - ネイティブ LDAP 属性 - Windows ユーザー名 - Windows ID に相当する LDAP データベース内の名前
  - IDMU
3. 設定を保存するには、「適用」をクリックします。設定をクリアするには、「元に戻す」をクリックします。

#### 関連トピック

- さまざまなマッピングモードについては、[311 ページの「アイデンティティマッピングの概念」](#)を参照してください。
- 「許可」または「拒否」マッピング規則を作成するには、[304 ページの「マッピング規則の作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。

## ▼ アイデンティティマッピングの構成 (CLI)

アイデンティティマッピングを構成するには、次の手順を実行します。

始める前に 少なくとも 1 つの Active Directory ドメインに参加していることを確認します。

1. `configuration services idmap` に移動します。
2. `get` と入力して、アイデンティティマッピングのプロパティを表示します。

```
hostname:configuration services idmap> get
<status> = online
ad_unixuser_attr =
ad_unixgroup_attr =
```

```
nldap_winname_attr =
directory_based_mapping = none
```

The three \*\_attr properties correspond to the three fields on C>S>Identity Mapping>Properties.

### 3. `directory_based_mapping` を次のいずれかのマッピングモードに設定します。

- ルールベースのマッピングを使用するには、`directory_based_mapping` を `none` に設定します。

```
hostname:configuration services idmap> set directory_based_mapping=none
hostname:configuration services idmap>
```

- ディレクトリベースのマッピングを使用するには、`directory_based_mapping` を `name` に設定し、次の各属性を割り当てます。
  - `ad_unixuser_attr` - UNIX ユーザー名に相当する Active Directory データベース内の名前
  - `ad_unixgroup_attr` - UNIX グループ名に相当する Active Directory データベース内の名前
  - `nldap_winname_attr` - Windows ID に相当する LDAP データベース内の名前

```
hostname:configuration services idmap> set directory_based_mapping=name
hostname:configuration services idmap> set ad_unixuser_attr=demo_unixuser
hostname:configuration services idmap> set ad_unixgroup_attr=demo_group
hostname:configuration services idmap> set nldap_winname_attr=demo_winuser
```

- **Identity Management for UNIX (IDMU)** を使用するには、`directory_based_mapping` を `idmu` に設定します。

```
hostname:configuration services idmap> set directory_based_mapping=idmu
hostname:configuration services idmap>
```

### 関連トピック

- さまざまなマッピングモードについては、[311 ページの「アイデンティティーマッピングの概念」](#)を参照してください。
- 「許可」または「拒否」マッピング規則を作成するには、[306 ページの「マッピング規則の作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

## ▼ マッピング規則の作成 (BUI)

アイデンティティーマッピングサービスによって、特定のユーザーへの証明書を付与または拒否するには、次の手順を実行します。「許可」マッピング規則は、UNIX ID から Windows ID 証明書を付与するか、またはその逆も同様です。「拒否」マッピング規則は、Windows ID の UNIX ID の証明書の受け取りをブロックするか、またはその逆も同様です。




---

注記 - たとえば、特定のユーザーをブロックするマッピング規則を作成し、そのあとそのユーザーの名前が変更された場合、そのマッピングはそのユーザーをブロックしなくなります。

---

始める前に 302 ページの「アイデンティティーマッピングの構成 (BUI)」に説明されているように、ルールベースのマッピングを構成します。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「アイデンティティーマッピング」 > 「規則」に移動します。
2. 「規則」の横にある「項目を追加」アイコン  をクリックします。
3. 「マッピング規則を追加」ダイアログボックスで、マッピングタイプとして「許可」または「拒否」を選択します。
4. 選択したマッピングタイプに従って、残りのフィールドを完成させます。
  - 許可マッピング:
    - **マッピング方向** - 方向を選択します。
    - **Windows ドメイン** - Windows ID の Active Directory ドメインを入力するか、「すべて」を選択します。
    - **Windows ID** - Windows ID の名前を入力します。
    - **Unix ID** - UNIX ID の名前を入力します。
    - **Unix ID タイプ** - 「ユーザー」または「グループ」を選択します。
  - 拒否マッピング:
    - a. 「マッピング方向」では、2つのオプションのいずれかを選択します。
      - **Windows ID マッピングをブロック** - Windows ID の UNIX ID の証明書の取得を妨げます。
      - **UNIX ID マッピングをブロック** - UNIX ID の Windows ID の証明書の取得を妨げます。
    - b. **Windows または UNIX ID 情報**を入力します。
      - 「Windows ID マッピングをブロック」を選択した場合、ブロックする Windows ドメインと ID を入力します。
      - 「UNIX ID マッピングをブロック」を選択した場合、ブロックする UNIX ID と ID タイプを入力します。

5. 「追加」をクリックします。  
「規則」一覧に新しいマッピングが表示されます。

### 関連トピック

- [313 ページの「マッピング規則の方向を示す記号」](#)

## ▼ マッピング規則の作成 (CLI)

アイデンティティマッピングサービスによって、特定のユーザーへの証明書を付与または拒否するには、次の手順を実行します。「許可」マッピング規則は、UNIX ID から Windows ID 証明書を付与するか、またはその逆も同様です。「拒否」マッピング規則は、Windows ID の UNIX ID の証明書の受け取りをブロックするか、またはその逆も同様です。

---

**注記** - たとえば、特定のユーザーをブロックするマッピング規則を作成し、そのあとそのユーザーの名前が変更された場合、そのマッピングはそのユーザーをブロックしなくなります。

---

始める前に [303 ページの「アイデンティティマッピングの構成 \(CLI\)」](#) に説明されているように、ルールベースのマッピングを構成します。

1. **configuration services idmap** に移動します。
2. 「create」と入力します。

```
hostname:configuration services idmap> create
hostname:configuration services idmap (uncommitted)>
```

3. プロパティを適切に設定します。

list コマンドを使用して、使用可能なプロパティを表示できます。

```
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> list
Properties:
 windomain = (unset)
 winname = (unset)
 direction = (unset)
 unixname = (unset)
 unixtype = (unset)
```

- a. **windomain** - Windows ID の Active Directory ドメイン。
- b. **winname** - 次のオプションのいずれかに設定します。
  - 「許可」マッピングを作成するには、winname を Windows ID の名前に設定します。

指定したドメイン内のすべてのユーザーを指示するには、\* と入力します。

- **UNIX ID の、Windows ID の証明書の受け取りをブロックする「拒否」マッピング規則を作成するには、Windows ID の名前に設定します。**
- **Windows ID の、UNIX ID の証明書の受け取りをブロックする「拒否」マッピング規則を作成するには、winname を設定しないでください。**

c. **direction** - マッピングの方向に設定します。

- **win2unix** - Windows から UNIX へのマッピング
- **unix2win** - UNIX から Windows へのマッピング
- **bi** - 双方向マッピング

d. **unixname** - 次のオプションのいずれかに設定します。

- 「許可」マッピングを作成するには、UNIX ID の名前に設定するか、\* と入力して、指定したタイプのすべてのユーザーを指示します。
- **Windows ID の、UNIX ID の証明書の受け取りをブロックする「拒否」マッピングを作成するには、UNIX ID の名前に設定します。**
- **UNIX ID の、Windows ID の証明書の受け取りをブロックする「拒否」マッピングを作成するには、unixname を設定しないでください。**

e. **unixtype** - UNIX ID タイプを **user** または **group** に設定します。

```
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set windomain=demo.domain.com
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set winname=*
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set direction=win2unix
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixname=
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixtype=user
```

4. **commit** と入力して、変更をコミットし、マッピング規則を作成します。

```
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> commit
hostname:configuration services idmap>
```

**list** コマンドを使用して、「規則」リストに新しい規則を表示できます。

```
hostname:configuration services idmap> list
```

| MAPPING   | WINDOWS ENTITY        | DIRECTION | UNIX ENTITY |
|-----------|-----------------------|-----------|-------------|
| idmap-000 | Alice@demo.domain.com | (U) ==    | wdp (U)     |
| idmap-001 | *@demo.domain.com     | (U) =>    | "" (U)      |

**例 13** 双方向マッピングの作成 (CLI)

この例では、Windows ユーザーと UNIX ユーザーの間の双方向の名前ベースのマッピングを作成します。

```
hostname:> configuration services idmap
hostname:configuration services idmap> create
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set
 windomain=eng.fishworks.com
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set winname=Bill
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set direction=bi
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixname=wdp
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixtype=user
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> commit
hostname:configuration services idmap> list
MAPPING WINDOWS ENTITY DIRECTION UNIX ENTITY
idmap-000 Bill@eng.fishworks.com (U) == wdp (U)
```

**例 14** 拒否マッピングの作成 (CLI)

この例では、拒否マッピングを作成して、ドメイン内のすべての Windows ユーザーが証明書を取得できないようにします。

```
hostname:configuration services idmap> create
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> list
Properties:
 windomain = (unset)
 winname = (unset)
 direction = (unset)
 unixname = (unset)
 unixtype = (unset)

hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set
 windomain=guest.fishworks.com
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set winname=*
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set direction=win2unix
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixname=
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> set unixtype=user
hostname:configuration services idmap (uncommitted)> commit
hostname:configuration services idmap> list
MAPPING WINDOWS ENTITY DIRECTION UNIX ENTITY
idmap-000 Bill@eng.fishworks.com (U) == wdp (U)
idmap-001 *@guest.fishworks.com (U) => "" (U)
```

**▼ マッピングの表示 (BUI)**

既存のマッピングを表示するには、次の手順を実行します。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「アイデンティティマッピング」 > 「マッピングの表示」に移動します。
2. ID のマッピング元のプラットフォームとして、「Windows」または「UNIX」を選択します。

### 3. Windows または UNIX ID 情報を入力します。

- 「Windows」を選択した場合、Windows ドメインとユーザーの名前を入力します。
- 「UNIX」を選択した場合、タイプとして「ユーザー」または「グループ」を選択し、エンティティ名を入力します。

### 4. 「マッピングの表示」をクリックします。

ID ユーザーまたはグループのプロパティが表示されます。マッピングのソースとバックエンドの起点も表示されます。

#### ソース

- **新しいマッピング** - マッピングは新しく作成され、キャッシュから取得されておらず、事前定義もされていません。
- **キャッシュされたマッピング** - マッピングはキャッシュから取得されました。キャッシュにはマッピングが要求後 10 分間保存されます。
- **ハードコーディングされたマッピング** - マッピングは事前定義され、アプライアンスに固定されています。これらのマッピングはデフォルトの UNIX および Windows ID で作成されました。
- **アルゴリズムマッピング** - 一時的でない UNIX UID や GID は名前でもマッピングできなかつたため、アルゴリズムで生成された SID にマッピングされます。

#### バックエンド

- **AD ディレクトリ** - これは、Active Directory の注釈を使用して作成されたディレクトリベースのマッピングです。
- **ネイティブ LDAP ディレクトリ** - これは、LDAP ディレクトリの注釈を使用して作成されたディレクトリベースのマッピングです。
- **IDMU** - このマッピングは、Windows の機能 Identity Management for UNIX を使用して作成されました。
- **名前の規則** - このマッピングは、名前の規則を使用して作成されました。
- **一時的** - マッピングの作成時点で相当する ID がなかつたため、システムは一時的 UID または GID を使用して一時的な ID を作成しました。
- **ローカル SID** - 一時的でない UNIX UID や GID は名前でもマッピングできなかつたため、アルゴリズムで生成されたローカル SID にマッピングされました。
- **既知のマッピング** - マッピングで「既知の SID」が使用されます。これらの Windows SID は汎用ユーザーまたは汎用グループを識別します。それらの値はすべてのオペレーティングシステムで定数のままです。

## ▼ キャッシュからのマッピングのフラッシュ (BUI)

キャッシュからすべてのマッピングをフラッシュ、または期限切れにするには、次の手順を実行します。

リクエストされたマッピングが提供されたあと、それは 10 分間キャッシュに格納されてから、期限切れになります。マッピングを即座に期限切れにするには、フラッシュ機能を使用します。これにより、キャッシュに格納されているすべてのマッピングが期限切れになります。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「アイデンティティーマッピング」 > 「マッピングの表示」に移動します。
2. 「マップキャッシュのフラッシュ」をクリックします。  
キャッシュに格納されているすべてのマッピングが期限切れになります。

## ▼ キャッシュからのマッピングのフラッシュ (CLI)

キャッシュからすべてのマッピングをフラッシュ、または期限切れにするには、次の手順を実行します。

リクエストされたマッピングが提供されたあと、それは 10 分間キャッシュに格納されてから、期限切れになります。マッピングを即座に期限切れにするには、フラッシュ機能を使用します。これにより、キャッシュに格納されているすべてのマッピングが期限切れになります。

1. `configuration services idmap` に移動します。
2. `flush` と入力します。

```
hostname:configuration services idmap> flush
hostname:configuration services idmap>
```

キャッシュに格納されているすべてのマッピングが期限切れになります。

## アイデンティティーマッピングのベストプラクティス

- ユーザーに NFS および SMB クライアントから共通の一連のファイルにアクセスさせる場合、ユーザー固有のアイデンティティーマッピング規則を構成します。NFS および SMB クライアントがばらばらのファイルシステムにアクセスしている場合は、アイデンティティーマッピング規則を構成する必要はありません。
- アイデンティティーマッピングサービスを再構成しても、アクティブな SMB セッションには影響ありません。接続ユーザーが接続されたまま、10 分以内はその以

前の名前マッピングが、追加のシェアへのアクセスを承認するために使用できません。承認されていないアクセスを防ぐには、シェアをエクスポートする前にマッピングを構成します。

- アイデンティティーマッピングが提供するセキュリティは、ディレクトリサービスとの同期化と同程度にすぎません。たとえば、特定のユーザーへのアクセスを拒否する名前ベースのマッピングを作成し、そのユーザーの名前が変わった場合、マッピングはそのユーザーへのアクセスを拒否しなくなります。
- Windows ドメインのすべてのユーザーをすべての UNIX ID にマップする双方向マッピングは、Windows ドメインごとに 1 つしか作成できません。ドメイン全体の規則を複数作成する場合は、必ずそれらの規則が Windows から UNIX へのみマップするように指定してください。
- 可能なかぎりディレクトリベースのマッピングではなく IDMU マッピングモードを使用します。

## アイデンティティーマッピングの概念

SMB サービスでは、アイデンティティーマッピングサービスを使用して Windows と UNIX の ID を関連付けます。SMB サービスでは、ユーザーを認証するときに、アイデンティティーマッピングサービスを使用してユーザーの Windows ID を適切な UNIX ID にマップします。Windows ユーザーに対する UNIX ID が存在しない場合は、一時的な UID と GID を使用して一時的な ID が生成されます。これらのマッピングにより、SMB および NFS クライアントは同時に同じシェアをエクスポートしたり、同じシェアにアクセスしたりできます。Windows ID と UNIX ID を関連付けることで、NFS および SMB クライアントは同じ ID をシェアできるため、同じファイルセットにアクセスできるようになります。

Windows オペレーティングシステムでは、アクセストークンの中にログインセッションに関するセキュリティ情報が含まれており、アクセストークンによってユーザー、ユーザーのグループ、およびユーザーの権限が識別されます。管理者は、Windows ユーザーおよびグループをワークグループ内に定義するか、または Active Directory ドメインコントローラで管理される SAM データベース内に定義します。各ユーザーとグループは SID を持ちますが、SID は、ホストとローカルドメイン内、および考えられるすべての Windows ドメインにわたってユーザーまたはグループを一意に識別します。

UNIX では、ユーザー認証とファイルアクセス権に基づいてユーザー証明書を作成します。管理者は、UNIX ユーザーおよびグループをローカルパスワードおよびグループファイル内に定義するか、または NIS や LDAP などのネームサービスまたはディレクトリサービス内に定義します。各 UNIX ユーザーおよびグループには UID および GID が割り当てられます。通常、UID または GID は 1 つの UNIX ドメイン内のユーザーまたはグループを一意に識別します。ただし、これらの値は複数のドメインにわたって一意ではありません。

次のオプションはマッピングモードを選択するときに使用できます。

- **ルールベースのマッピング** - 名前 ID をマッピングする各種規則を作成するために使用し、それによって Windows ID と UNIX ID の等価性を確立します。マッピング規則は、ユーザーに SMB クライアントと NFS クライアントの両方から同じ一連のファイルにアクセスさせる場合に便利です。
- **ディレクトリベースのマッピング** - ID が相手方プラットフォームの同等の ID にどのようにマップされるかについての情報を LDAP または Active Directory オブジェクトに注釈として付けるために使用します。
- **IDMU ベースのマッピング** - Identity Management for UNIX (IDMU) は、Microsoft が Windows Server 2003 用に提供している機能で、Windows Server 2003 R2 以降にバンドルされています。IDMU は、「UNIX 属性」パネルを「Active Directory ユーザーとコンピューター」ユーザーインターフェースに追加して、Windows を NIS/NFS サーバーとしてサポートします。これにより管理者は、UID、GID、ログインシェル、およびホームディレクトリを含む多数の UNIX 関連パラメータを指定できます。これらのパラメータは、RFC 2307 に類似した (ただし同じではない) スキーマを使用して Active Directory 経由で、および NIS サービス経由でも使用できます。IDMU マッピングモードを選択すると、アイデンティティマッピングサービスは、これらの UNIX 属性を使用して Windows ID と UNIX ID の間のマッピングを確立します。この方法はディレクトリベースのマッピングに非常によく似ていますが、アイデンティティマッピングサービスはカスタムスキーマを許可するのではなく、IDMU ソフトウェアによって作成されたプロパティスキーマをクエリー検索する点が異なります。この方法を使用した場合、ほかのディレクトリベースのマッピングは行われられない可能性があります。

## キャッシュされている一時的マッピング

アイデンティティマッピングサービスが名前マッピングを提供する場合、マッピングはキャッシュに 10 分間保存され、10 分たった時点で期限切れとなります。マッピングの 10 分間の有効期間内は、アイデンティティマッピングサービスの再起動後もマッピングは維持されます。マッピングやネームサービスディレクトリを変更しても、マッピングの 10 分間の有効期間内は既存の接続に影響しません。サービスによってマッピングが評価されるのは、クライアントがシェアへの接続を試みる場合と期限切れでないマッピングが存在しない場合のみです。たとえば、マッピングが期限切れになったあとで SMB サーバーがユーザーにそのマッピングを要求すると、サービスによってそのマッピングが再評価されます。

特定のユーザーに適用される名前ベースのマッピング規則がない場合、ほかのマッピングによってブロックされないかぎり、そのユーザーには一時的なマッピングを通じて一時的な証明書が付与されます。一時的な UNIX 名を持つ Windows ユーザーがシステム上にファイルを作成すると、SMB を使用してそのファイルにアクセスする Windows クライアントは、ファイルがその Windows ID によって所有されていると認識します。しかし、NFS クライアントはファイルが「nobody」によって所有されていると認識します。



## アイデンティティーマッピングの大文字小文字の区別

Windows 名は大文字小文字を区別しませんが、UNIX 名は大文字小文字を区別します。ユーザー名 JSMITH、JSmith、および jsmith は、Windows では同じ名前ですが、UNIX では 3 つの異なる名前になります。大文字小文字の区別が名前マッピングに与える影響はマッピングの方向によって異なります。

- Windows から UNIX へのマッピングで一致とみなされる場合、Windows ユーザー名の大文字小文字が UNIX ユーザー名のそれに一致している必要があります。たとえば、Windows ユーザー名「jsmith」は UNIX ユーザー名「jsmith」のみに一致します。Windows ユーザー名「Jsmith」は一致しません。
- Windows から UNIX へのマッピングの大文字小文字の一致要件の例外は、マッピングでワイルドカード文字「\*」を使用して複数のユーザー名をマップする場合に発生します。






アイデンティティーマッピングサービスで、Windows ユーザー `*@some.domain` を UNIX ユーザー「\*」にマップするマッピングが検出された場合、最初に Windows 名に正確に一致する UNIX 名が検索されます。一致するものが見つからない場合、Windows 名全体が小文字に変換されて、再度一致する UNIX 名が検索されます。たとえば、Windows ユーザー名「JSmith@some.domain」は UNIX ユーザー名「jsmith」にマップされます。サービスが Windows ユーザー名に小文字を使用したあとも一致するものを見つけられない場合、ユーザーはマッピングを得られません。

大文字小文字だけが異なる文字列を一致させる規則を作成できます。たとえば、Windows ユーザー「JSmith@some.domain」を UNIX ユーザー「jSmith」にマップするユーザー固有のマッピングを作成できます。それ以外では、サービスによって一時的な ID が Windows ユーザーに割り当てられます。

- UNIX から Windows へのマッピングで一致とみなされる場合、大文字小文字が一致している必要はありません。たとえば、UNIX ユーザー名「jsmith」は、大文字小文字に関係なく「JSMITH」の文字を含むすべての Windows ユーザー名に一致します。

## マッピング規則の方向を示す記号

名前ベースのマッピングの作成後は、次の記号によって各規則のセマンティクスが示されます。

-  - Windows ID を UNIX ID にマップし、UNIX ID を Windows ID にマップします
-  - Windows ID を UNIX ID にマップします
-  - UNIX ID を Windows ID にマップします
-  - Windows ID が証明書を取得できないようにします
-  - UNIX ID が証明書を取得できないようにします

アイコンが黒ではなく灰色である場合、規則は解決できない UNIX ID に一致します。

## DNS 構成

DNS (ドメインネームサービス) クライアントは、IP アドレスをホスト名に、およびその逆方向に解決する機能を提供し、有効または無効にできます。オプションで、NIS または LDAP (あるいはその両方) によるセカンダリホスト名の解決が構成され有効になっている場合は、DNS で解決できないホスト名とアドレスのためにそれらをリクエストできます。ホスト名の解決は、アプライアンスのユーザーインターフェース全体で使用され、ユーザーが監査可能なアクションを実行した場所を示すログや、クライアントごとの統計情報を提供する分析に組み込まれます。

DNS を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [314 ページの「DNS の構成 \(CLI\)」](#)
- [314 ページの「DNS のプロパティとログ」](#)
- [315 ページの「Active Directory と DNS」](#)
- [316 ページの「DNS 以外での解決」](#)
- [316 ページの「DNS を使用しない操作」](#)

## DNS の構成 (CLI)

CLI には `nslookup` および `getent hosts` のビルトインが含まれています。これらを使用してホスト名の解決が機能していることをテストできます。

```
hostname:> nslookup deimos
192.168.1.109 deimos.sf.fishworks.com
hostname:> getent hosts deimos
192.168.1.109 deimos.sf.fishworks.com
```

## DNS のプロパティとログ

DNS クライアントの構成可能なプロパティには、ベースドメイン名とサーバーリスト (IP アドレスで指定) が含まれています。1つのドメイン名と1つ以上のサーバーアドレスを指定する必要があります。サーバーは、指定されたドメインに対して自身が権限を持っている必要はありませんが、そのドメインの NS (NameServer) レコードを返せる必要があります。

表 78 DNS のプロパティ

| プロパティ    | 説明                            |
|----------|-------------------------------|
| DNS ドメイン | ホスト名の部分検索の実行時に最初に検索されるドメイン名です |

| プロパティ            | 説明                                                                                                        |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| DNS サーバー         | 1 つ以上の DNS サーバー。IP アドレスを使用する必要があります。                                                                      |
| DNS 検索ドメイン       | Active Directory ドメイン、非推奨の Active Directory 検索ドメイン、および指定された DNS ドメインのあとで検索する最大 4 つのドメインのリスト。              |
| IPv4 非 DNS 解決を許可 | NIS または LDAP (あるいはその両方) が構成され有効になっている場合は、それを使って IPv4 アドレスをホスト名に、ホスト名を IPv4 アドレスに解決できます。                   |
| IPv6 非 DNS 解決を許可 | NIS または LDAP (あるいはその両方) が構成され有効になっている場合は、それを使って IPv4 および IPv6 アドレスをホスト名に、ホスト名を IPv4 および IPv6 アドレスに解決できます。 |

サービスプロパティの変更は、[232 ページの「サービスプロパティの設定 \(BUI\)」](#) および [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#) にドキュメント化されています。CLI のプロパティ名は、上記のプロパティ名の短縮版です。

表 79 DNS のログ

| ログ                         | 説明                  |
|----------------------------|---------------------|
| network-dns-client:default | DNS サービスのイベントを記録します |

## 関連トピック

- [315 ページの「Active Directory と DNS」](#)

## Active Directory と DNS

Active Directory を使用する予定の場合は、サーバーがドメイン名前空間の Active Directory 部分でホスト名とサーバーのレコードを解決できる必要があります。たとえば、アプライアンスがドメイン example.com にあり、名前空間の Active Directory 部分が redmond.example.com である場合、ネームサーバーは example.com に対して権限のあるサーバーに到達できる必要があります、さらにドメイン redmond.example.com を 1 つ以上の Active Directory サーバーに委譲してそのドメインを処理する必要があります。これらの要件は、アプライアンス自体ではなく Active Directory で要求されるものです。要件が満たされない場合は、Active Directory ドメインに参加できません。

## 関連トピック

- [314 ページの「DNS 構成」](#)
- [296 ページの「Active Directory の構成」](#)

## DNS 以外での解決

DNS は、ホスト名と IP アドレスをマップするための標準的でエンタープライズグレードの高度にスケーラブルな信頼できるメカニズムです。機能している DNS サーバーを使用することはベストプラクティスの 1 つであり、通常は最良の結果をもたらします。環境によっては、一部のホストが NIS または LDAP マップでしか解決できない場合があります。使用している環境にこれが当てはまる場合は、DNS 以外でのホスト解決を有効にし、適切なディレクトリサービスを構成します。ホスト解決に LDAP を使用する場合は、ホストマップがデータベースの標準 DN である `ou=Hosts,(ベース DN)` にあり、標準スキーマを使用する必要があります。このモードがネットグループによって NFS シェアで使用されるときは、クライアントシステムではアプライアンスで構成されたのと同じホスト名解決メカニズムを使用することが必要な場合があります。そうしないと、NFS シェア例外が正しく機能しない可能性があります。

DNS 以外でのホスト解決が有効になっているときも、DNS は引き続き使用されます。DNS を使ってアドレスまたはホスト名を解決できない場合にのみ、最初に NIS (有効な場合)、次に LDAP (有効な場合) が名前またはアドレスの解決に使用されます。これは、紛らわしく一見矛盾したような結果を招く可能性があります。ホスト解決の結果は、前述の `getent CLI` コマンドを使用して検証できます。

これらのオプションは、使用しないことが強く推奨されています。

## DNS を使用しない操作

アプライアンスがネットワーク上のインストール場所から DNS サーバーにアクセスできない場合は、サーバーアドレス `127.0.0.1` を指定して、DNS を使用しないで操作するよう選択できます。DNS を使用しないで操作するには:

- **BUI:** 「構成」 > 「サービス」 > 「DNS」に移動します。「DNS サーバー」フィールドに `127.0.0.1` と入力します。
- **CLI:** `configuration services dns` に移動し、`show` と入力します。`set servers=127.0.0.1` と入力してから、`commit` と入力します。

このモードは、次のように、いくつかの機能が正しく動作しなくなるため、使用しないことを強く推奨します。

- 分析がクライアントアドレスをホスト名に解決できなくなります。
- Active Directory 機能が動作しなくなる (ドメインに参加できなくなる)。
- `ssl` で保護された `ldap` がホスト名を含む証明書で正しく機能しなくなります。
- 電子メールの送信を伴うアラートやしきい値のアクションが、接続されたサブネット上のメールサーバーにしか送信できず、そのメールサーバーの IP アドレスを使用してすべてのアドレスを指定する必要がある。
- ホスト名の解決がタイムアウトとなるため、一部の処理に通常よりも長い時間がかかることがある。

これらの制限は、別のホスト解決サービスを使用することで部分的に軽減されることがあります。316 ページの「DNS 以外での解決」を参照してください。

### 関連トピック

- サービスの有効化 [BUI](#)、[CLI](#)
- サービスの無効化 [BUI](#)、[CLI](#)

## IPMP 構成

IPMP (Internet Protocol Network Multipathing) では、ネットワークの帯域幅と信頼性 (インタフェース冗長性) の両方を向上させるために、複数のネットワークインタフェースを 1 つにグループ化できます。このセクションでは、いくつかのプロパティを構成できます。IPMP グループのネットワークインタフェースの構成については、53 ページの「ネットワーク構成」を参照してください。

表 80 IPMP のプロパティ

| プロパティ       | 説明                                                          |
|-------------|-------------------------------------------------------------|
| 失敗検出待機時間    | IPMP でネットワークインタフェースが失敗したことを宣言し、その IP アドレスをフェイルオーバーするための時間です |
| フェイルバックを有効化 | このサービスで、修復されたインタフェースへの接続を再開できるようにします                        |

サービスプロパティの変更は、232 ページの「サービスプロパティの設定 (BUI)」および 233 ページの「サービスプロパティの設定 (CLI)」にドキュメント化されています。CLI のプロパティ名は、上記のプロパティ名の短縮版です。

表 81 IPMP のログ

| ログ                      | 説明                 |
|-------------------------|--------------------|
| network-initial:default | ネットワーク構成プロセスを記録します |

## NTP 構成

時間情報プロトコル (NTP) サービスは、アプライアンスのクロックを正確に保つために使用できます。これは、ファイルシステムでの正確なタイムスタンプの記録とプロトコル認証のために重要です。アプライアンスでは UTC タイムゾーンを使用して時間を記録します。BUI に表示される時間は、使用しているブラウザのタイムゾーンオフセットを使用します。

BUI 画面の右側に、アプライアンスの時間 (サーバーの時間) とブラウザの時間 (クライアントの時間) の両方が表示されます。NTP サービスがオンラインでない場合は、「SYNC」ボタンをクリックして、アプライアンスの時間が使用しているクライアントブラウザの時間に一致するように設定できます。

SMB を使用してファイルシステムをシェアしている場合、ユーザー認証エラーが発生しないように、クライアントのクロックをアプライアンスのクロックの 5 分以内のところまで同期させる必要があります。クロック同期を確保する方法の 1 つは、同じ NTP サーバーを使用するようにアプライアンスと SMB クライアントを構成することです。

表 82 NTP のクロック同期

| ログ                  | 説明            |
|---------------------|---------------|
| network-ntp:default | NTP サービスのログです |

NTP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [318 ページの「クロック同期の設定 \(BUI\)」](#)
- [318 ページの「NTP の構成 \(CLI\)」](#)
- [320 ページの「NTP のプロパティ」](#)

## ▼ クロック同期の設定 (BUI)

アプライアンスの時間が使用しているブラウザの時間に一致するように設定します。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「NTP」に移動します。
2. NTP サービスを無効にします。
3. 「SYNC」をクリックします。

## ▼ NTP の構成 (CLI)

1. `configuration services ntp` の下で、`authkey` コマンドを使用して承認を編集します。

```
hostname:configuration services ntp> authkey
hostname:configuration services ntp authkey>
```

2. このコンテキストから、`create` コマンドを使用して新しい鍵を追加できます。

```
hostname:configuration services ntp authkey> create
```

```

hostname:configuration services ntp authkey-000 (uncommitted)> get
 keyno = (unset)
 type = (unset)
 key = (unset)
hostname:configuration services ntp authkey-000 (uncommitted)> set keyno=1
 keyno = 1 (uncommitted)
hostname:configuration services ntp authkey-000 (uncommitted)> set type=A
 type = A (uncommitted)
hostname:configuration services ntp authkey-000 (uncommitted)> set key=coconuts
 key = ***** (uncommitted)
hostname:configuration services ntp authkey-000 (uncommitted)> commit
hostname:configuration services ntp authkey>

```

3. CLI によって認証鍵をサーバーに関連付けるには、**serverkeys** プロパティを、**servers** プロパティの対応するサーバーに関連付けられる鍵の値のリストに設定します。

サーバーが認証を使用しない場合、対応するサーバー鍵は 0 に設定されます。たとえば、上記で作成された鍵を使用してサーバー「gefilte」と「carp」を認証するには、次のように入力します。

```

hostname:configuration services ntp> set servers=gefilte,carp
 servers = gefilte,carp (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> set serverkeys=1,1
 serverkeys = 1,1 (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> commit
hostname:configuration services ntp>

```

4. 認証鍵をサーバーに関連付けるには、**serverkeys** プロパティを、**servers** プロパティの対応するサーバーに関連付けられる鍵の値のリストに設定します。

サーバーが認証を使用しない場合、対応するサーバー鍵は 0 に設定されます。たとえば、上記で作成された鍵を使用してサーバー「gefilte」と「carp」を認証するには、次のように入力します。

```

hostname:configuration services ntp> set servers=gefilte,carp
 servers = gefilte,carp (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> set serverkeys=1,1
 serverkeys = 1,1 (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> commit
hostname:configuration services ntp>

```

5. 鍵 1 を使ってサーバー「gefilte」を認証し、鍵 2 を使って「carp」を認証し、鍵 3 を使って「dory」を認証するには、次のように入力します。

```

hostname:configuration services ntp> set servers=gefilte,carp,dory
 servers = gefilte,carp,dory (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> set serverkeys=1,2,3
 serverkeys = 1,2,3 (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> commit
hostname:configuration services ntp>

```

6. 鍵 1 を使ってサーバー「gefilte」と「carp」を認証し、さらに NTP サーバー「dory」の認証が行われないようにするには、次のように入力します。

```

hostname:configuration services ntp> set servers=gefilte,carp,dory
 servers = gefilte,carp,dory (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> set serverkeys=1,1,0

```

```

serverkeys = 1,1,0 (uncommitted)
hostname:configuration services ntp> commit
hostname:configuration services ntp>

```

## NTP のプロパティ

「構成」 > 「サービス」 > 「NTP」 で、次の NTP プロパティを使用できます。

表 83 NTP のプロパティ

| プロパティ                     | 説明                                                                    | 例                                |
|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| マルチキャストアドレスから NTP サーバーを検出 | 自動的に検出される NTP サーバーのマルチキャストアドレスをここに入力します                               | 224.0.1.1                        |
| NTP サーバーを手動で指定            | アプライアンスが直接接続する 1 つ以上の NTP サーバー (対応する認証鍵があればそれも) を入力します                | 0.pool.ntp.org                   |
| NTP 認証鍵                   | NTP サーバーの有効期間を認証する際にアプライアンスで使用する 1 つ以上の NTP 認証鍵を入力します。表 84 を参照してください。 | 認証鍵: 10、タイプ: ASCII、非公開鍵: SUN7000 |

**検証** - 無効な構成が入力された場合は、警告メッセージが表示され、その構成は確定されません。これは次の場合に起こります。

- マルチキャストアドレスが使用されているが、NTP 応答が見つからない。
- NTP サーバーアドレスが使用されているが、そのサーバーが NTP に正しく応答しない。

**認証** - 認証されていないサーバーからの NTP なりすまし攻撃を防ぐために、NTP には非公開鍵暗号化スキームが備わっています。それによって、クライアントは NTP サーバーに関連付けられた非公開鍵を使ってその ID を検証できます。これらの鍵はトラフィックの暗号化やクライアントの認証には使用されず、NTP クライアント (つまりアプライアンス) で NTP サーバーを認証するためだけに使用されます。非公開鍵を NTP サーバーに関連付けるには、最初に非公開鍵を指定する必要があります。各非公開鍵には、それに関連付けられた一意の整数を種類および鍵とともに指定します。この種類には次のいずれかを指定する必要があります。

表 84 NTP の非公開鍵と整数

| タイプ | 説明                      | 例                |
|-----|-------------------------|------------------|
| DES | DES 形式の 64 ビットの 16 進数です | 0101010101010101 |



| タイプ   | 説明                                     | 例                |
|-------|----------------------------------------|------------------|
| NTP   | NTP 形式の 64 ビットの 16 進数です                | 8080808080808080 |
| ASCII | 1 - 8 文字の ASCII 文字列です                  | topsecret        |
| MD5   | MD5 認証スキームを使用する、1 - 8 文字の ASCII 文字列です。 | md5secret        |

鍵を指定したあとは、NTP サーバーを特定の非公開鍵に関連付けることができます。指定した鍵に対して、認証される NTP サーバーのクライアントとサーバーの間で鍵番号、鍵の種類、および非公開鍵の値がすべて一致する必要があります。

## フォンホーム構成

フォンホームサービスの画面は、アプライアンス登録とフォンホームリモートサポートサービスの管理に使用します。

登録によって、使用しているアプライアンスが [Oracle Auto Service Request \(http://www.oracle.com/us/support/auto-service-request/index.html\)](http://www.oracle.com/us/support/auto-service-request/index.html) に結び付けられます。Oracle ASR は、アプライアンスによって報告された特定の問題のサービスリクエスト (SR) を自動的に開きます。登録によって、アプライアンスが My Oracle Support (MOS) にも結び付けられて、更新通知が検出されます。

フォンホームサービスは、Oracle サポートと通信して、次の機能を提供します。

- **障害報告** - システムは自動サービス応答に関するアクティブな問題を Oracle に報告します。障害の性質によっては、サポートケースが開かれることがあります。これらのイベントの詳細は、「アクティブな問題」の表示で確認できます。詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[問題への対処](#)」を参照してください。
- **ハートビート** - システムが起動し動作中であることを示すために日単位のハートビートメッセージが Oracle に送信されます。Oracle サポートでは、アクティブになっているシステムの 1 つが長期間にわたってハートビートの送信に失敗すると、アカウントの技術担当者に通知することがあります。
- **システム構成** - 現在のソフトウェアとハードウェアのバージョンと構成、およびストレージ構成を説明する定期メッセージが Oracle に送信されます。このメッセージではユーザーデータやメタデータは送信されません。
- **サポートバンドル** - サポートバンドルを Oracle サポートにアップロードする前に、フォンホームサービスを有効にする必要があります。詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[サポートバンドルの使用](#)」を参照してください。
- **更新通知** - My Oracle Support (MOS) で新しいソフトウェア更新が入手可能になると、アラートを作成します。詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ソフトウェア通知および更新の操作](#)」を参照してください。

フォンホームサービスを使用するには登録が必要です。

フォンホームサービスの障害報告およびハートビート機能を使用するには、有効な Oracle シングルサインオンアカウントのユーザー名とパスワードが必要です。My Oracle Support (<http://support.oracle.com>) に移動し、「登録」をクリックしてアカウントを作成します。

フォンホームを構成するには、次のセクションを参照してください。

- アプライアンスの登録 BUI、CLI
- 323 ページの「アカウント情報の変更 (BUI)」
- 323 ページの「フォンホームのプロパティ」

## ▼ アプライアンスの登録 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「フォンホーム」 に移動します。
2. **Oracle シングルサインオンアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。**  
プライバシーポリシーについては、「プライバシーに関する説明」をクリックします。この説明は BUI および CLI のどちらからでもいつでも確認できます。
3. 「適用」 をクリックして変更を確定します。
4. **My Oracle Support (<http://support.oracle.com/>)** を使用して、**Auto Service Request (ASR) (<http://www.oracle.com/us/support/auto-service-request/index.html>)** のアクティブ化を完了します。  
My Oracle Support で保留中の ASR アセットを管理および承認する方法 (Doc ID 1329200.1) を参照してください。

## ▼ アプライアンスの登録 (CLI)

1. `configuration services scrk` に移動します。
2. `soa_id` および `soa_password` をそれぞれ、Oracle シングルサインオンアカウントのユーザー名およびパスワードに設定します。
3. 変更を確定します。
4. **My Oracle Support (<http://support.oracle.com/>)** を使用して、**Auto Service Request (ASR) (<http://www.oracle.com/us/support/auto-service-request/index.html>)** のアクティブ化を完了します。

My Oracle Support で保留中の ASR アセットを管理および承認する方法 (Doc ID 1329200.1) を参照してください。

#### 例 15 CLI の登録

```
hostname:> configuration services scrk
hostname:configuration services scrk>set soa_id=myuser
soa_id = myuser(uncommitted)
hostname:configuration services scrk> set soa_password=mypass
soa_password = ***** (uncommitted)
hostname:configuration services scrk> commit
```

### ▼ アカウント情報の変更 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「フォンホーム」 に移動します。
2. アプライアンスで使用される **Oracle シングルサインオンアカウント**を変更するには、「アカウントを変更しています...」をクリックします。
3. 変更を確定します。
4. **My Oracle Support** を使用して **Auto Service Request (ASR)** のアクティブ化を完了します。

My Oracle Support で保留中の ASR アセットを管理および承認する方法 (Doc ID 1329200.1) を参照してください。

### フォンホームのプロパティ

アプライアンスが直接インターネットに接続されていない場合は、フォンホームサービスが Oracle との通信に使用する HTTP プロキシを構成する必要があることがあります。このプロキシ設定は、サポートバンドルのアップロードにも使用されます。サポートバンドルの詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[サービスバンドルの使用](#)」を参照してください。

表 85 フォンホームの Web プロキシ設定

| プロパティ       | 説明                                |
|-------------|-----------------------------------|
| Web プロキシを使用 | Web プロキシ経由で接続します                  |
| ホスト : ポート   | Web プロキシのホスト名または IP アドレス、およびポートです |
| ユーザー名       | Web プロキシのユーザー名です                  |
| パスワード       | Web プロキシのパスワードです                  |

表 86 フォンホームのステータス

| プロパティ             | 説明                             |
|-------------------|--------------------------------|
| 最後にハートビートが送信された時間 | 最後のハートビートが Oracle サポートに送信された時間 |

有効な Oracle シングルサインオンアカウントを入力する前にフォンホームサービスが有効になっている場合は、保守状態でサービスが表示されます。フォンホームサービスを使用するには、有効な Oracle シングルサインオンアカウントを入力する必要があります。

フォンホームイベントのログは、「保守」>「ログ」>「フォンホーム」にあります。

## 動的ルーティング構成

ルーティング情報プロトコル (RIP) とは、ほかの RIP 対応のオンリンクホスト (通常はルーター) から受信されたメッセージに基づいて最適なルートを自動的に構成するためにアプライアンスが使用するディスタンスベクタ型の動的ルーティングプロトコルです。アプライアンスでは、IPv4 用に RIPv1 と RIPv2、IPv6 用に RIPng をサポートしています。

これらのプロトコルを介して構成されるルートは、ルーティングテーブルで「dynamic」タイプとしてマーク付けされます。RIP および RIPng は、それぞれ UDP ポート 520 および 521 で待機します。

表 87 動的ルーティング

| ログ                            | 説明                    |
|-------------------------------|-----------------------|
| network-routing-route:default | RIP サービスのイベントを記録します   |
| network-routing-ripng:quagga  | RIPng サービスのイベントを記録します |

## サービスタグの構成

サービスタグを使用すると、次のようなデータをアプライアンスに問い合わせることができるため、製品のインベントリ処理やサポートが容易になります。

- システムのシリアル番号
- システムタイプ
- ソフトウェアのバージョン番号

サービスタグは Oracle サポートに登録できます。これにより、Oracle 機器を簡単に追跡したり、保守呼び出しを円滑に行なったりできます。サービスタグはデフォルトで有効になっています。

表 88 UDP/TCP ポートのプロパティ

| プロパティ   | 説明                                           |
|---------|----------------------------------------------|
| 検出ポート   | サービスタグの検出に使用される UDP ポート。デフォルトは 6481 です       |
| リスナーポート | サービスタグデータの問い合わせに使用される TCP ポート。デフォルトは 6481 です |

## SMTP 構成

SMTP サービスは、通常アラート画面で構成したアラートに対応して、アプライアンスで生成されたすべてメールを送信します。SMTP サービスでは外部メールを受け入れません。アプライアンス自体で自動的に生成されたメールのみを送信します。

デフォルトでは、SMTP サービスは DNS (MX レコード) を使用してメールの送信先を判断します。DNS がアプライアンスのドメイン用に構成されていない場合、または送信メールの宛先ドメインに DNS MX レコードが正しく設定されていない場合は、一般にスマートホストと呼ばれる送信メールサーバーを介してすべてのメールを転送するようアプライアンスを構成できます。

表 89 SMTP のプロパティ

| プロパティ            | 説明                                                                                                      |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| スマートホスト経由でメールを送信 | 有効にした場合は、指定した送信メールサーバーを介してすべてのメールが送信されます。それ以外の場合は、DNS を使用して特定のドメインのメールの送信先が判断されます。                      |
| スマートホストホスト名      | 送信メールサーバーのホスト名です。                                                                                       |
| アドレスからカスタムを許可    | 有効にした場合は、電子メールの送信元アドレスが「アドレスからカスタム」プロパティに設定されます。デフォルトの送信元アドレスがスパムとわかっている場合など、これをカスタマイズすることが望ましいことがあります。 |
| アドレスからカスタム       | アウトバウンド電子メールに使用する送信元アドレスです。                                                                             |

プロパティを変更するときは、アラートを使用して、プロパティが正しいことを検証するためにテスト電子メールを送信できます。電子メールが配信されないもっとも一般的な理由は、DNS の構成が間違っていることです。これにより、アプライアンスはどのメールサーバーにメールを配信したらよいか判断できません。前述のとおり、DNS を構成できない場合はスマートホストを使用できます。

表 90 SMTP のログ

| ログ                    | 説明                   |
|-----------------------|----------------------|
| network-smtp:sendmail | SMTP サービスのイベントを記録します |

| ログ   | 説明                               |
|------|----------------------------------|
| mail | SMTP アクティビティのログ (送信されたメールを含む) です |

## SNMP 構成

簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) サービスには、アプライアンスに関する 2 つの異なる機能があります。

- SNMP によってアプライアンスのステータス情報を配信できます。
- SNMP トラップを送信するようにアラートを構成できます。186 ページの「アラートの構成」を参照してください。

このサービスが有効になっている場合は、SNMP バージョン 1、v2c、および v3 を使用できます。アプライアンスは、最大 128 個の物理および論理ネットワークインタフェースをサポートします。128 を超えるネットワークインタフェースでは、snmpwalk や snmpget などのコマンドのタイムアウトが発生する可能性があります。128 を超えるネットワークインタフェースが必要な場合は、Oracle サポートに連絡してください。

SNMP を構成するには、次のセクションを参照してください。

- 326 ページの「アプライアンスのステータスを表示するための SNMP の構成 (BUI)」
- 327 ページの「トラップを送信するための SNMP の構成」
- 327 ページの「SNMP のプロパティ」
- 328 ページの「SNMP の MIB」
- 328 ページの「Sun FM MIB」
- 329 ページの「Sun AK MIB」

### ▼ アプライアンスのステータスを表示するための SNMP の構成 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「SNMP」 に移動します。
2. コミュニティ名、承認ネットワーク、および連絡先の文字列を設定します。
3. (オプション) トラップの宛先をリモート SNMP ホストに設定します。それ以外は 127.0.0.1 に設定します。
4. 「適用」をクリックして構成をコミットします。

5. サービスを再起動します。

## ▼ トラップを送信するための SNMP の構成

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「SNMP」に移動します。
2. コミュニティー名、連絡先の文字列、およびトラップの宛先を設定します。
3. (オプション) SNMP クライアントを許可するよう承認ネットワークを設定します。それ以外は 127.0.0.1/8 に設定します。
4. 「適用」をクリックして構成をコミットします。
5. サービスを再起動します。
6. 受信するトラップを送信するようにアラートを構成する必要があります。  
アラートの詳細は、186 ページの「アラートの構成」を参照してください。

### 関連トピック

- 327 ページの「SNMP のプロパティ」

## SNMP のプロパティ

表 91 SNMP のプロパティ

| プロパティ          | 説明                                                                                    |
|----------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| バージョン          | 「v1/2c」と「v3」を切り替えます。                                                                  |
| コミュニティー名       | パブリックとユーザー入力を切り替えます。ユーザー入力を選択した場合は、コミュニティー名も入力する必要があります。「v3」を選択した場合は、このプロパティを使用できません。 |
| 承認ネットワーク/サブネット | 適切な IPv4 アドレスおよびサブネット (0 - 32 の整数) を入力します。「v3」を選択した場合は、このプロパティを使用できません。               |
| アプライアンス連絡先     | 適切なアプライアンスの連絡先を入力します。                                                                 |
| ユーザー名/パスワード    | 有効なユーザー名 (最大 501 文字) およびパスワード (8 - 501 文字) を入力します。「v1/2c」を選択した場合は、このプロパティを使用できません。    |
| 認証             | 「MD5」と「SHA」の認証アルゴリズムを切り替えます。「v1/2c」を選択した場合は、このプロパティを使用できません。                          |
| プライバシー         | 「なし」と「DES」の暗号化アルゴリズムを切り替えます。「v1/2c」を選択した場合は、このプロパティを使用できません。                          |
| エンジン ID        | snmpd でハッシュされた EngineID 値。SNMP があらかじめ有効になっていなかった場合、そのラベルには「0x000」が表示されます。             |

| プロパティ  | 説明                                                    |
|--------|-------------------------------------------------------|
| トラップ宛先 | IPv4 アドレスを追加できます。「+」および「-」ボタンを使用すると、アドレスを追加または削除できます。 |

SNMP サービスには、MIB-II の場所を示す文字列もあります。このプロパティは、システム ID の構成から取り込まれます。

## SNMP の MIB

SNMP サービスがオンラインの場合、承認ネットワークで次の MIB (管理情報ベース) にアクセスできます。

表 92 SNMP の MIB

| MIB                   | 目的                                              |
|-----------------------|-------------------------------------------------|
| .1.3.6.1.2.1.1        | MIB-II システム - ホスト名、連絡先、場所などの一般的なシステム情報          |
| .1.3.6.1.2.1.2        | MIB-II インタフェース - ネットワークインタフェースの統計               |
| .1.3.6.1.2.1.4        | MIB-II IP - IP アドレスやルーティングテーブルなどのインターネットプロトコル情報 |
| .1.3.6.1.4.1.42       | Sun Enterprise MIB (SUN-MIB.mib.txt)            |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.195 | Sun FM - 障害管理の統計 (下記でリンクされる MIB ファイル)           |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.225 | Sun AK - アプライアンスの情報と統計 (下記でリンクされる MIB ファイル)     |

注記 - Sun MIB ファイルは、<https://IP アドレスまたはホスト名:215/docs/snmp/> で入手できます。

## Sun FM MIB

Sun FM MIB (SUN-FM-MIB.mib) は、次のような SUN Fault Manager の情報にアクセスできるようにします。

- システム上のアクティブな問題
- Fault Manager のイベント
- Fault Manager の構成情報

読み取るべきメインテーブルが 4 つあります。



表 93 Sun FM MIB

| OID                       | 内容             |
|---------------------------|----------------|
| .1.3.6.1.4.1.42.2.195.1.1 | 障害管理の問題        |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.195.1.2 | 障害管理のフォルトイベント  |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.195.1.3 | 障害管理のモジュール構成   |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.195.1.5 | 障害管理の障害のあるリソース |

詳細は、MIB ファイルを参照してください。

## Sun AK MIB

Sun AK MIB (SUN-AK-MIB.mib) は、次の情報を提供します。

- 製品の説明の文字列およびパーツ番号
- アプライアンスソフトウェアのバージョン
- アプライアンスとシャーシのシリアル番号
- インストール、更新、およびブート時間
- クラスタの状態
- シェアのステータス - シェアの名前、サイズ、使用済みのバイト数、利用可能なバイト数

読み取るべきメインテーブルが3つあります。

表 94 Sun AK MIB

| OID                       | 内容            |
|---------------------------|---------------|
| .1.3.6.1.4.1.42.2.225.1.4 | 一般的なアプライアンス情報 |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.225.1.5 | クラスタのステータス    |
| .1.3.6.1.4.1.42.2.225.1.6 | シェアのステータス     |

詳細は、MIB ファイルを参照してください。

## syslog 構成

Syslog リレーサービスには、アプライアンスに関する2つの異なる機能があります。

- syslog メッセージを1つ以上のリモートシステムに送信するようにアラートを構成できます。186 ページの「アラートの構成」を参照してください。

- アプライアンス上の syslog 対応のサービスではその syslog メッセージがリモートシステムに転送されます。

syslog メッセージとは、アプライアンスから 1 つ以上のリモートシステムに転送される小さなイベントメッセージです (つまり「大陸間の printf」と呼ぶのが望ましい)。このメッセージには、次の要素が含まれます。

- このメッセージを発行したシステムコンポーネントの種類を記述する facility
- このメッセージに関連付けられた状態の重要度を記述する severity
- 関連付けられたイベントの時間を UTC で記述する timestamp
- アプライアンスの正規名を記述する hostname
- このメッセージを発行したシステムコンポーネントの名前を記述する tag。メッセージの書式の詳細は、[332 ページの「syslog アラートメッセージの書式」](#)を参照してください。
- イベントそのものを記述する message。メッセージの書式の詳細は、[332 ページの「syslog アラートメッセージの書式」](#)を参照してください。

syslog レシーバーは、Solaris や Linux などのほとんどのオペレーティングシステムに備わっています。一部のサードパーティーやオープンソースの管理ソフトウェアパッケージでも Syslog をサポートしています。管理者は、syslog レシーバーを使用して、いくつかのシステムから発行されたメッセージを 1 つの管理システム上に集約し、1 組のログファイルに組み込むことができます。

Syslog リレーは、RFC 3164 で説明されている「classic」出力形式を使用するように構成することも、RFC 5424 で説明されている、より新しいバージョン管理された出力形式を使用するように構成することもできます。syslog メッセージは UDP データグラムで転送されます。そのため、ネットワークによってドロップされやすかったり、送信側のシステムのメモリーが少ない場合やネットワークが輻輳している場合にまったく送信されないことがあつたりします。したがって、管理者はネットワーク内に複雑な不具合のあるシナリオでは一部のメッセージが欠けていたり、ドロップされていることを想定するようにしてください。

#### syslog のプロパティ

- **プロトコルバージョン** - 使用する Syslog プロトコルのバージョン (Classic Syslog (RFC 3164) または Updated Syslog (RFC 5424)) です。
- **宛先** - メッセージの中継先となる IPv4、IPv6、および FQDN の宛先アドレスのリストです。

syslog を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [331 ページの「Classic Syslog: RFC 3164」](#)
- [331 ページの「最新の Syslog: RFC 5424」](#)
- [331 ページの「syslog メッセージの書式」](#)

- [332 ページの「syslog アラートメッセージの書式」](#)
- [334 ページの「Solaris レシーバの構成例 \(CLI\)」](#)
- [334 ページの「Linux レシーバの構成例 \(CLI\)」](#)

## Classic Syslog: RFC 3164

Classic Syslog プロトコルには、優先度を表す単一の整数としてエンコードされる facility および level 値、timestamp、hostname、tag、およびメッセージ本文が含まれています。

tag は、[331 ページの「syslog メッセージの書式」](#) で説明されているいずれかのタグになります。

hostname は、システム IDの構成で定義されているアプライアンスの正規名になります。詳細は、[335 ページの「システム識別情報の構成」](#) を参照してください。

## 最新の Syslog: RFC 5424

Classic Syslog プロトコルには、優先度を表す単一の整数としてエンコードされる facility および level 値、バージョンフィールド (1)、timestamp、hostname、app-name、およびメッセージ本文が含まれています。Sun Storage システムによって中継される syslog メッセージでは、RFC 5424 の procid、msgid、および structured-data フィールドを nil 値 (-) に設定して、これらのフィールドにデータが含まれていないことを示します。

app-name は、[331 ページの「syslog メッセージの書式」](#) で説明されているいずれかのタグになります。

hostname は、システム IDの構成で定義されているアプライアンスの正規名になります。詳細は、[335 ページの「システム識別情報の構成」](#) を参照してください。

## syslog メッセージの書式

Syslog プロトコル自体はメッセージペイロードの形式を定義せず、どの種類の構造化データまたは構造化されていない人間が読める文字列をメッセージに含めるかは送信側に任せています。Sun Storage アプライアンスでは、次に示すように、syslog サブシステムタグ ak を使用して構造化された解析可能なメッセージペイロードを示します。ほかのサブシステムタグは人間が読める任意のテキストを示しますが、管理者はこれらの文字列の書式が不安定で、Sun Storage ソフトウェアの将来のリリースで予告なしに変更されたり、削除されたりする可能性があることを考慮してください。

表 95 syslog メッセージの書式

| 機能   | タグ名   | 説明                                                                                  |
|------|-------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| デーモン | ak    | アプライアンスサブシステムの汎用タグです。すべてのアラートには ak タグが付けられ、そのあとに SUNW-MSG-ID が続くことを示します。            |
| デーモン | idmap | POSIX および Windows の ID 変換用のアイデンティティマッピングサービスです。302 ページの「アイデンティティマッピングの構成」を参照してください。 |
| デーモン | smbd  | シェアにアクセスするための SMB データプロトコルです。245 ページの「SMB 構成」を参照してください。                             |

## syslog アラートメッセージの書式

syslog メッセージ送信アクションでアラートが構成されている場合は、次の標準フィールドから成るローカライズされたテキストを含む syslog メッセージペイロードが生成されます。各フィールドには、大文字のフィールド名とそのあとにコロンと空白文字が接頭辞として付けられます。

表 96 syslog アラートメッセージの書式

| フィールド名      | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SUNW-MSG-ID | アラートに関連付けられた安定した Sun 障害メッセージ識別子です。管理者へのアラートを発生させる各システムの状態と障害の診断には、Sun の障害メッセージカタログで永続的な一意の識別子が割り当てられます。これらの識別子を簡単に電話で読み取るかノートブックで走り書きして、 <a href="https://support.oracle.com/">My Oracle Support (https://support.oracle.com/)</a> にある予測的自己修復に関する対応するナレッジ記事 (ドキュメント ID 1154428.1) にリンクできます。 |
| TYPE        | 状態の種類です。これは次のいずれかのラベルになります。ハードウェアコンポーネントやコネクタの障害を示す「失敗」、ソフトウェアの欠陥や構成の間違いを示す「欠陥」、バックアップアクティビティやリモートレプリケーションの完了など、障害や欠陥に関連しない状態を示す「アラート」。                                                                                                                                                     |
| VER         | このエンコード形式自体のバージョンです。この説明は、SUNW-MSG-ID 形式のバージョン「1」に相当します。VER フィールドが「1」の場合、解析コードは後続のすべてのフィールドが存在することを前提としている可能性があります。1 よりも大きい 10 進整数が指定されている場合は、追加フィー                                                                                                                                         |

| フィールド名        | 説明                                                                                                                                                                                                                                |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|               | ルドが処理または無視されるように解析コードが書き込まれます。                                                                                                                                                                                                    |
| SEVERITY      | アラートをトリガーした問題に関連付けられた状態の重要度です。重要度のリストについては後述します。                                                                                                                                                                                  |
| EVENT-TIME    | このイベントに対応する時間です。時間の書式は、UTC による「Day Mon DD HH:MM:SS YYYY」となります。例: Fri Aug 14 21:34:22 2009。                                                                                                                                        |
| PLATFORM      | アプライアンスのプラットフォーム識別子です。このフィールドは Oracle Service でのみ使用されます。                                                                                                                                                                          |
| CSN           | アプライアンスのシャーシのシリアル番号です。                                                                                                                                                                                                            |
| HOSTNAME      | システム ID の構成で定義されているアプライアンスの正規名です。 <a href="#">システム識別情報を参照してください</a> 。                                                                                                                                                             |
| SOURCE        | イベントを発行したアプライアンスソフトウェア内のサブシステムです。このフィールドは Oracle Service でのみ使用されます。                                                                                                                                                               |
| REV           | サブシステムの内部リビジョンです。このフィールドは Oracle Service でのみ使用されます。                                                                                                                                                                               |
| EVENT-ID      | このイベントに関連付けられた汎用一意識別子 (UUID) です。Oracle の障害管理システムでは、管理者が 1 つの状態に関連した複数のメッセージを集めて相互に関連付け、重複メッセージを検出できるように、UUID を各アラートおよび障害診断に関連付けます。Oracle Service 要員は、EVENT-ID を使用して、問題に関連付けられた追加の事後分析情報を取得できます。この情報は Oracle が問題に対処する際に役立つ場合があります。 |
| DESC          | イベントに関連付けられた状態の説明です。                                                                                                                                                                                                              |
| AUTO-RESPONSE | システムに組み込まれている障害管理ソフトウェアによる問題 (存在する場合) への自動応答です。自動応答には、障害のあるディスク、DRAM メモリーチップ、およびプロセッサコアを事前にオフラインにするなどの機能があります。                                                                                                                    |
| REC-ACTION    | 推奨される保守アクションです。ここには推奨されるアクションのサマリーが記述されていますが、管理者は詳細な修復手順についてナレッジ記事やこのドキュメントを参照するようにしてください。                                                                                                                                        |

SEVERITY フィールドは次のいずれかの値に設定されます。

表 97 syslog の重大度フィールド

| 重大度  | syslog レベル  | 説明                             |
|------|-------------|--------------------------------|
| マイナー | LOG_WARNING | 現時点ではサービスを低下させない状態が発生しました。ただし、 |

| 重大度    | syslog レベル | 説明                                      |
|--------|------------|-----------------------------------------|
|        |            | 状態が深刻になる前に修正する必要があります。                  |
| メジャー   | LOG_ERR    | サービスを低下させる状態が発生しましたが、深刻ではありません。         |
| クリティカル | LOG_CRIT   | サービスを著しく低下させる状態が発生しました。ただちに修正する必要があります。 |

## Solaris レシーバの構成例 (CLI)

ほとんどのオペレーティングシステムには syslog レシーバが組み込まれていますが、レシーバをオンにするためにはいくつかの構成手順が必要な場合があります。それぞれの syslog レシーバの構成の詳細は、使用しているオペレーティングシステムまたは管理ソフトウェアのドキュメントを参照してください。

Solaris には syslog レシーバとして動作できるバンドル版の syslogd(1M) が含まれていますが、リモート受信機能はデフォルトで無効になっています。Solaris で syslog トラフィックを受信できるようにするには、次のように svccfg と svcadm を使用して syslog 設定を変更します。

```
svccfg -s system/system-log setprop config/log_from_remote = true
svcadm refresh system/system-log
```

Solaris syslogd では Classic Syslog プロトコルのみを認識しています。受信されたメッセージのフィルタリングやロギングを構成する方法については、Solaris の syslog.conf (4) のマニュアルページを参照してください。

デフォルトでは、Solaris syslogd はメッセージを /var/adm/messages に記録し、テスト用のアラートが次のように記録されます。

```
Aug 14 21:34:22 poptart.sf.fishpong.com poptart ak: SUNW-MSG-ID: AK-8000-LM, \
TYPE: alert, VER: 1, SEVERITY: Minor\nEVENT-TIME: Fri Aug 14 21:34:22 2009\n\
PLATFORM: i86pc, CSN: 12345678, HOSTNAME: poptart\n\
SOURCE: jsui.359, REV: 1.0\n\
EVENT-ID: 92dfeb39-6e15-e2d5-a7d9-dc3e221becea\n\
DESC: A test alert has been posted.\n\
AUTO-RESPONSE: None.\nIMPACT: None.\nREC-ACTION: None.
```

## Linux レシーバの構成例 (CLI)

ほとんどのオペレーティングシステムには syslog レシーバが組み込まれていますが、レシーバをオンにするためにはいくつかの構成手順が必要な場合があります。それぞれの syslog レシーバの構成の詳細は、使用しているオペレーティングシステムまたは管理ソフトウェアのドキュメントを参照してください。

ほとんどの Linux ディストリビューションには syslog レシーバーとして動作できるバンドル版の `syslogd(8)` デーモンが含まれていますが、リモート受信機能はデフォルトで無効になっています。Linux で syslog トラフィックを受信できるようにするには、`-r` オプションが含まれる (リモートロギングを可能にする) ように `/etc/sysconfig/syslog` 構成ファイルを編集します。

```
SYSLOGD_OPTIONS="-r -m 0"
```

その後、ロギングサービスを再起動します。

```
/etc/init.d/syslog stop
/etc/init.d/syslog start
```

一部の Linux ディストリビューションには、デフォルトで syslog UDP パケットを拒否する `ipfilter` パケットフィルタが含まれており、それらのパケットを許可するようにフィルタを変更する必要があります。これらのディストリビューションで、次のようなコマンドを使用して INPUT 規則を追加し、syslog UDP パケットが受け入れられるようにします。

```
iptables -I INPUT 1 -p udp --sport 514 --dport 514 -j ACCEPT
```

デフォルトでは、Linux `syslogd` はメッセージを `/var/log/messages` に記録し、テスト用のアラートが次のように記録されます。

```
Aug 12 22:03:15 192.168.1.105 poptart ak: SUNW-MSG-ID: AK-8000-LM, \
TYPE: alert, VER: 1, SEVERITY: Minor EVENT-TIME: Wed Aug 12 22:03:14 2009 \
PLATFORM: i86pc, CSN: 12345678, HOSTNAME: poptart SOURCE: jsui.3775, REV: 1.0 \
EVENT-ID: 9d40db07-8078-4b21-e64e-86e5cac90912 \
DESC: A test alert has been posted. AUTO-RESPONSE: None. IMPACT: None. \
REC-ACTION: None.
```

## システム識別情報の構成

このサービスでは、システムの名前と場所を構成できます。アプライアンスを別のネットワークの場所に移動したり、ほかの目的で使用したりする場合は、これらの変更が必要になることがあります。

アプライアンスは、顧客が所有する証明書をサポートします。証明書のライフサイクルは、証明書署名リクエスト (CSR) の生成から始まります。その後、CSR は署名のため認証局 (CA) に送信されます。署名付き証明書が CA から返されると、アプライアンス上にインストールできます。証明書がルート以外の CA によって署名された場合、次のレベルまたは上位レベルの CA から証明書を取得する必要があります。

システム識別情報を構成するには、次のタスクを使用します。

- 新しい証明書の作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ルート以外の CA からの証明書のアップロード - [BUI](#)、[CLI](#)
- CSR および証明書の詳細の表示 - [BUI](#)、[CLI](#)
- アプライアンス証明書の設定 - [BUI](#)、[CLI](#)





- CSR または証明書の破棄 - [BUI](#)、[CLI](#)

システム ID を理解するには、次のトピックを参照してください。

- [342 ページの「システム ID のプロパティとログ」](#)

## ▼ 新しい証明書の作成 (BUI)

新しい証明書を作成するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「システム識別情報」に移動します。
2. 「証明書」タブをクリックします。
3. 新しい CSR を作成するには、項目を追加アイコン  をクリックします。  
既存の CSR または証明書に基づいて新しい CSR を作成するには、マウスを既存のエントリの上に移動し、コピーアイコン  をクリックします。
4. CSR のフォームに入力します。
5. 「作成」をクリックします。
6. CSR を開くか保存するか求められたら、今すぐ CSR を保存する場合は「ファイルの保存」を選択して「了解」をクリックし、あとで CSR を保存する場合は「取り消し」をクリックします。  
あとで CSR を保存するには、マウスエントリの上に移動し、ダウンロードアイコン  をクリックします。
7. 前述の方法で、CSR を CA に転送します。
8. 署名付き証明書を CA から受信したら、アップロードアイコン  をクリックします。
9. 署名付き証明書を参照して選択します。
10. 「アップロード」をクリックします。

## ▼ 新しい証明書の作成 (CLI)

新しい証明書を作成するには、次の手順を使用します。



1. 新しい CSR を作成するには、コンテキスト `configuration services identity certificates` を入力し、コマンド `create` を入力します。

または、既存の CSR または証明書に基づいて新しい CSR を作成するには、前述のコンテキスト、次にコマンド `clone CSR or certificate number` を入力します。例:

```
hostname:configuration services identity certificates> clone cert-000
```

2. CSR のフォームに入力するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:configuration services identity cert (uncommitted)> get
 subject_commonname = hostname.us.example.com
 subject_organizationname = (unset)
 subject_organizationalunitname = (unset)
 subject_localityname = (unset)
 subject_stateorprovincename = (unset)
 subject_countryname = (unset)
 subject_emailaddress = (unset)
 dns = hostname.us.example.com
 ip = 192.0.2.1
 uri = (unset)
 comment = (unset)
hostname:configuration services identity cert (uncommitted)> set comment="test certificate"
 comment = test certificate (uncommitted)
hostname:configuration services identity cert (uncommitted)> commit
```

3. CSR を表示するには、次のコマンドを使用します。


```
hostname:configuration services identity certificates> show
Properties:
 default = auto
Certificates:
CERT TYPE FOR ISSUER EXPIRES
cert-000 req hostname.us.example.com hostname.us.example.com
cert-001 CA Joe Test CA Joe Test CA 2015-1-2
cert-002 cert hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-3

hostname:configuration services identity certificates> dump cert-000
-----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
MIICwzCCAAsCAQIwIjEgMB4GA1UEAxMxAG9zdG5hbWUudXMuzXhhbXBsZS5jb20w
ggEiMA0GCSqGSIb3DQEBAQUAA4IBDwAwggEKAoIBAQU4ErPuRrVfy21K2qyfgY9
P4bSXMlZxP48HKI/jVuS4MNeVHCL3TILvuiXx217qjacCKiIKDG5z1TFIApt2Ee
4rU7PC1YgYw8HAHDq+GJbSV2CWlVC78muNFntSuzsFAljdTr/f/5qQdQwfXvJ+Oi
a4JU03mTn2eUP75EA9ASEmGWH/V3bnWdzu0uc/LFuXRSm3W0gwYrIeHk6mcJzEE
zztLIF9KQzSisu4m2JjcScta0YSWIC0TP0war5Gc8vIoIC7gJahw4/wvZAFNZ/8
c/nVBs4/hXhyGMDsII0yULI03U8jJN3Ggssw+4C0KmcqQJMzWJ2Cax4GsSuu8MDh
AgMBAAGqXDBaBgkqhkiG9w0BCQ4xTTBLMB8GCWCGSAGG+EIBDQSFhB0ZXN0IGNl
cnRpZmlyeXRlMCMGGA1UdEQQhMB+CF2hvc3RuYw11LnVzLmV4Yw1wbGUuY29thwTA
AAIBMA0GCSqGSIb3DQEBCwUAA4IBAQBvGSGrS/DoStsAYyYCYu6y4TN5i903AS1W
m9+CXXbnj6XYXgWssqD0vJ0nw/TGoGHN3f3741Xgbf6snFQ3T1MN9Dm6rcZ95tOM
P1xfVY9ar8WYGSE8ttunxPDjNBRoK0aR7qMq5JMH0rKS9Iuz9WghiaGLw7WBa1N
akCjxFS8yh5sVqF9zAqoa00buXnQ3kfTDVzYvroy2yummBfXrJB5t35bbTqZNT/f
bRoSMtroHL+iWBx1zK+A70S5/+Zuow8PqpHRkf0/j7Y9Jz1tftVyu1bbxE6ZyLD
lhwb1MXqR/3xptwym1vy5dYBjsQLKroA8nr/xFb3nhJB8ni+dxSN
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
```

4. 前述の方法で CSR をコピーし、それを CA に転送します。
5. 署名付き証明書を CA から受信したら、コンテキスト `configuration services identity certificates` を入力し、コマンド `import` を入力します。





1. 「構成」 > 「サービス」 > 「システム識別情報」に移動します。
2. 「証明書」タブをクリックします。
3. マウスを既存のエントリの上に移動し、情報アイコン  をクリックします。
4. 完了したら、「了解」をクリックして「詳細」ウィンドウを閉じます。

## ▼ CSR および証明書の詳細の表示 (CLI)

CSR および証明書の詳細を表示するには、次の手順を使用します。

1. すべての証明書エントリを表示するには、**configuration services identity certificates** に移動し、コマンド **show** を入力します。

```
hostname:configuration services identity certificates> show
Properties:
 default = auto
Certificates:
CERT TYPE FOR ISSUER EXPIRES
cert-000 req hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-4
cert-001 CA Joe Test CA Joe Test CA 2015-1-2
cert-002 cert hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-3
```

2. CSR または証明書の詳細を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
hostname:configuration services identity certificates> select cert-000
hostname:configuration services identity cert-000> show
Properties:
 uuid = 195071da-66ac-43a6-edfa-bbbd7451f1d5
 subject_commonname = hostname.us.example.com
 issuer_commonname = Joe Test CA
 issuer_organizationname = Oracle
 issuer_organizationalunitname = Systems
 issuer_localityname = Los Angeles
 issuer_stateorprovincename = California
 issuer_countryname = US
 issuer_emailaddress = First.Last@example.com
 dns = hostname.us.example.com
 ip = 192.0.2.1
 comment = test certificate
 notbefore = 2014-12-4 00:31:33
 notafter = 2015-12-4 00:31:33
 sha1fingerprint = 81:A2:4B:C4:06:A9:14:1E:3E:0B:8A:70:FB:1A:30:45:2D:93:DD:02
 md5fingerprint = B7:B2:F4:3B:BB:04:8E:11:A2:64:3D:69:BF:8A:79:CC
hostname:configuration services identity cert-000> done
```

## ▼ アプライアンス証明書の設定 (BUI)

アプライアンス証明書を設定するには、次の手順を使用します。

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「システム識別情報」に移動します。

2. 「プロパティ」タブをクリックします。
3. 「デフォルトのシステム証明書」のドロップダウンメニューから、デフォルトとして設定する証明書を選択します。
4. 「適用」をクリックします。

## ▼ アプライアンス証明書の設定 (CLI)

アプライアンス証明書を設定するには、次の手順を使用します。

1. すべての証明書エントリを表示するには、**configuration services identity certificates** に移動し、コマンド **show** を入力します。

```
hostname:configuration services identity certificates> show
Properties:
 default = auto
Certificates:
CERT TYPE FOR ISSUER EXPIRES
cert-000 req hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-4
cert-001 CA Joe Test CA Joe Test CA 2015-1-2
cert-002 cert hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-3
```

2. 証明書をデフォルトとして設定するには、次のコマンドを使用します。

```
hostname:configuration services identity certificates> set default=cert-000
default= cert-000 (uncommitted)
hostname:configuration services identity certificates> commit
```


## ▼ CSR または証明書の破棄 (BUI)

CSR または証明書を破棄するには、次の手順を使用します。

---

注記 - CSR を破棄すると、関連する非公開鍵も破棄されます。そのため、CSR から派生された証明書はインポートできなくなります。証明書を破棄すると、関連する非公開鍵も破棄されます。そのため、その証明書の再インポートができなくなります。

---

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「システム識別情報」に移動します。
2. 「証明書」タブをクリックします。
3. マウスを既存のエントリの上に移動し、ごみ箱アイコン  をクリックします。
4. 「破棄」をクリックします。

## ▼ CSR または証明書の破棄 (CLI)

CSR または証明書を破棄するには、次の手順を使用します。

**注記** - CSR を破棄すると、関連する非公開鍵も破棄されます。そのため、CSR から派生された証明書はインポートできなくなります。証明書を破棄すると、関連する非公開鍵も破棄されます。そのため、その証明書の再インポートができなくなります。

1. すべての証明書エントリを表示するには、**configuration services identity certificates** に移動し、コマンド **show** を入力します。

```
hostname:configuration services identity certificates> show
Properties:
 default = auto

Certificates:
CERT TYPE FOR ISSUER EXPIRES
cert-000 req hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-4
cert-001 CA Joe Test CA Joe Test CA 2015-1-2
cert-002 cert hostname.us.example.com Joe Test CA 2015-12-3
```

2. CSR または証明書を破棄するには、次のコマンドを使用します。

```
hostname:configuration services identity certificates> destroy cert-002
Caution: Destroying a certificate issued by a certificate authority
also destroys the associated private key.Re-importing the certificate will not be possible.
Destroy appliance certificate? (Y/N) Y
```

## システム ID のプロパティとログ

次の表で、システム識別情報のプロパティについて説明します。

表 98 システム ID のプロパティ

| BUI のプロパティ    | 説明                                                                                                           |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| システム名         | ユーザーインターフェイスに表示される、アプライアンスの単一の標準的な識別名。この名前は、システムへの接続に使用される (リモート DNS サーバーで構成される) DNS 名とは別です。この名前はいつでも変更できます。 |
| システムの場所       | アプライアンスが物理的に置かれている場所を記述するテキスト文字列。SNMP が有効になっている場合は、これが MIB-II の <i>syslocation</i> 文字列としてエクスポートされます。         |
| デフォルトのシステム証明書 | すべての既存証明書から選択できるドロップダウンメニュー。                                                                                 |

サービスプロパティの変更は、[232 ページの「サービスプロパティの設定 \(BUI\)」](#) および [233 ページの「サービスプロパティの設定 \(CLI\)」](#) にドキュメント化されています。CLI のプロパティ名は、上記のプロパティ名の短縮版です。

表 99 システム ID のログ

| ログ                   | 説明                          |
|----------------------|-----------------------------|
| system-identity:node | システム ID サービスのイベントとエラーを記録します |

サービスログを表示するには、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「[ログの使用](#)」を参照してください。

## SSH 構成

SSH (Secure Shell) サービスを使用すると、ユーザーはアプライアンスの CLI にログインして、BUI で実行できるのと同じ管理アクションのほとんどを実行できます。SSH サービスはまた、日単位のログや分析統計を取り出すためなど、リモートホストから自動スクリプトを実行する方法としても使用できます。

SSH 鍵は、[181 ページ](#)の「[アプライアンスのプリファレンス設定](#)」で説明されているプリファレンス機能を使用してアカウントごとに構成できます。

SSH を構成するには、次のセクションを参照してください。

- [343 ページ](#)の「[root による SSH アクセスの無効化 \(CLI\)](#)」
- [343 ページ](#)の「[SSH のプロパティとログ](#)」

### ▼ root による SSH アクセスの無効化 (CLI)

1. `configuration services ssh` に移動します。
2. 「root ログインを許可」を `false` に設定します。
3. 構成を確定します。

## SSH のプロパティとログ

表 100 SSH のプロパティ

| プロパティ    | 説明                  | 例    |
|----------|---------------------|------|
| サーバー鍵の長さ | 一時的な鍵に含まれるビット数です。   | 768  |
| 鍵再生成間隔   | 一時的な鍵の再生成間隔 (秒) です。 | 3600 |

| プロパティ        | 説明                                           | 例   |
|--------------|----------------------------------------------|-----|
| ログイン猶予期間     | クライアントが認証に失敗した場合、指定された秒数を過ぎると、SSH 接続が切断されます。 | 120 |
| root ログインを許可 | root ユーザーが SSH を使用してログインできるようになります。          | はい  |
| ポート (受信接続用)  | 受信接続用に指定されたポートです。                            | 22  |

表 101 SSH のログ

| ログ                  | 説明                     |
|---------------------|------------------------|
| network-ssh:default | SSH サービスのイベントとエラーのログです |

## RESTful API 構成

Oracle ZFS Storage Appliance RESTful API によって、リソース URL のパスに対して GET、PUT、POST、DELETE HTTP などの単純なリクエストを使用してアプライアンスを管理できます。

アプライアンス RESTful ベースのアーキテクチャーは、階層化されたクライアントサーバーモデルとして定義されています。このモデルの利点は、クライアント構成を使わずに標準のハブ、ルーター、およびその他のネットワークシステム経由でサービスを透過的にリダイレクトできることを意味します。このアーキテクチャーは情報のキャッシングをサポートしており、多数のクライアントが同じ静的リソースをリクエストする際に役立ちます。

Oracle ZFS Storage Appliance RESTful API の完全なドキュメントについては、[『Oracle ZFS Storage Appliance RESTful API ガイド』](#)を参照してください。



## シェアとプロジェクト

---

Oracle ZFS Storage Appliance では、ストレージプール、プロジェクト、およびシェアを使用してデータを編成します。シェアは、サポートされるデータプロトコルを介してアプライアンスのクライアントにエクスポートされるファイルシステムと LUN です。プロジェクト内のすべてのシェアは共通の設定をシェアでき、割り当て制限はシェアレベルだけでなくプロジェクトレベルで強制的に適用できます。アプライアンスがデータを編成する方法の詳細については、[362 ページの「ストレージプール、プロジェクト、およびシェアについて」](#)を参照してください。

プロジェクトを作成および変更するには、次のタスクを使用します。

- プロジェクトの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- プロジェクトの編集 - [BUI](#)、[CLI](#)
- プロジェクトの名前変更 - [BUI](#)、[CLI](#)
- プロジェクトの削除 - [BUI](#)、[CLI](#)

ファイルシステムおよび LUN を作成および変更するには、次のタスクを使用します。

- プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ファイルシステムまたは LUN の編集 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ファイルシステムまたは LUN の名前変更 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ファイルシステムまたは LUN の別のプロジェクトへの移動 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ファイルシステムまたは LUN の削除 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定 - [BUI](#)、[CLI](#)


アプライアンスがストレージを編成する方法について詳しく理解するには、次のトピックを参照してください。

- [362 ページの「ストレージプール、プロジェクト、およびシェアについて」](#)
- [401 ページの「シェアの領域管理」](#)
- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)
- [406 ページの「ファイルシステムの名前空間の操作」](#)
- [407 ページの「シェアの使用状況統計」](#)
- [408 ページの「シェアおよびプロジェクトプロトコル」](#)

- [423 ページの「ファイルシステムのアクセス制御リスト」](#)
- [430 ページの「スキーマの操作」](#)

## ▼ プロジェクトの作成 (BUI)

非暗号化プロジェクトを作成するにはこのタスクを使用します。暗号化プロジェクトを作成するには、[574 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。

1. 「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. プロジェクトの横または展開された「プロジェクト」パネル内にある追加アイコン  をクリックします。「プロジェクト」パネルを展開するには、矢印のアイコンをクリックします。
3. 「プロジェクトを作成」ウィンドウに新しいプロジェクトの名前を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
4. 「適用」をクリックします。  
新しいプロジェクトが「プロジェクト」リストに追加されます。

### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [574 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(BUI\)」](#)

## ▼ プロジェクトの作成 (CLI)

非暗号化プロジェクトを作成するにはこのタスクを使用します。暗号化プロジェクトを作成するには、[575 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

1. **shares** に移動します。  

```
hostname:> shares
```
2. **project** およびプロジェクト名を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です

```
hostname:shares> project home
```

3. プロジェクトプロパティを一覧表示するには、`get` コマンドを使用します。

```
hostname:shares home(uncommitted)> get
 mountpoint = /export (default)
 quota = 0 (default)
 reservation = 0 (default)
 sharesmb = off (default)
 sharenfs = on (default)
 encryption = off (default)
 sharedav = off (default)
 shareftp = off (default)
 sharesftp = off (default)
 sharetftp = off (default)
 default_group = other (default)
 default_permissions = 700 (default)
 default_sparse = true (default)
 default_user = nobody (default)
 default_volblocksize = 8K (default)
 default_volsize = 0 (default)
 aclinherit = (default)
 aclmode = (default)
 atime = (default)
 checksum = (default)
 compression = (default)
 dedup = (default)
 copies = (default)
 logbias = (default)
 readonly = (default)
 recordsize = (default)
 rstchown = (default)
 secondarycache = (default)
 nbmand = (default)
 snapdir = (default)
 vscan = (default)
 defaultuserquota = (default)
 defaultgroupquota = (default)
 snaplabel = (default)
 canonical_name = (default)
 keyname = (default)
 keystore = (default)
 exported = (default)
 nodestroy = (default)
hostname:shares home (uncommitted)>
```

4. プロジェクトプロパティを変更するには、`set` コマンドを使用します。プロジェクトプロパティについては、[378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)に記載されています。
5. 「`commit`」と入力します。


```
hostname:shares home> commit
```

### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [575 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(CLI\)」](#)

## ▼ プロジェクトの編集 (BUI)

プロジェクトプロパティを変更するには、次のステップを使用します。

1. 「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. 次のいずれかの方法でプロジェクトを選択します。
  - マウスのポインタをプロジェクトの上に置いて、編集アイコン  をクリックします。
  - プロジェクト名をダブルクリックします。
  - プロジェクトの横の矢印アイコンをクリックしてパネルを展開し、プロジェクト名をクリックします。

プロジェクトが選択され、プロパティを編集するためのタブが表示されます。

3. プロジェクトプロパティを編集するためのいずれかのタブをクリックします。
4. 必要に応じてプロジェクトのプロジェクトプロパティを変更します。[378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [445 ページの「スナップショットとクローン」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ プロジェクトの編集 (CLI)

プロジェクトプロパティを変更するには、次のステップを使用します。

1. **shares** に移動します。

```
hostname:> shares
```
2. **select** およびプロジェクト名を入力します。

```
hostname:shares> select home
```
3. プロジェクトプロパティを一覧表示するには、**get** コマンドを使用します。

```
hostname:shares home> get
aclinherit = restricted
aclmode = discard
atime = true
checksum = fletcher4
compression = off
```

```

compressratio = 100
copies = 1
creation = Thu Oct 23 2009 17:30:55 GMT+0000 (UTC)
mountpoint = /export
quota = 0
readonly = false
recordsize = 128K
reservation = 0
rstchown = true
secondarycache = all
nbmand = false
sharesmb = off
sharenfs = on
snapdir = hidden
snaplabel = project1:share1
vscan = false
defaultuserquota = 0
defaultgroupquota = 0
encryption = off
snaplabel =
sharedav = off
shareftp = off
sharesftp = off
sharetftp = off
pool = Pool1
canonical_name = Pool1/local/default
default_group = other
default_permissions = 700
default_sparse = false
default_user = nobody
default_volblocksize = 8K
default_volsize = 0
space_data = 43.9K
space_unused_res = 0
space_unused_res_shares = 0
space_snapshots = 0
space_available = 12.0T
space_total = 43.9K
origin =
hostname:shares home>

```

4. プロジェクトプロパティーを変更するには、**set** コマンドを使用します。プロジェクトプロパティーおよび値については、[378 ページの「プロジェクトのプロパティー」](#)に記載されています。

たとえば、プロジェクトの `vscan` を有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
hostname:shares home >set vscan=true
```

5. 「**commit**」と入力します。

```
hostname:shares home> commit
```

## ▼ プロジェクトの名前変更 (BUI)



**注意** - プロジェクト名を変更すると、アクティブなクライアント I/O 操作が中断します。

1. プロジェクトに接続されているアクティブなクライアントを切断します。
2. 「シェア」 > 「プロジェクト」 に移動します。
3. プロジェクト一覧内のプロジェクト名をクリックします。
4. プロジェクトの新しい名前を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
5. **Return** を押します。
6. 「了解」 をクリックして確定します。

## ▼ プロジェクトの名前変更 (CLI)



---

注意 - プロジェクト名を変更すると、アクティブなクライアント I/O 操作が中断します。

---

1. プロジェクトに接続されているアクティブなクライアントを切断します。
2. **shares** に移動します。  

```
hostname:> shares
```
3. プロジェクトを表示するには、**list** コマンドを使用します。  

```
hostname:shares> list
default
home
```
4. **rename**、既存のプロジェクト名、および新しいプロジェクト名を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です  

```
hostname:shares> rename home project1
```
5. プロジェクトが名前変更されたことを確認するには、**list** コマンドを使用します。  

```
hostname:shares> list
default
project1
```


### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)

## ▼ プロジェクトの削除 (BUI)



注意 - プロジェクトを削除すると、そのファイルシステムおよび LUN を削除することによってプロジェクト内のすべてのデータが破棄されます。

1. 「シェア」 > 「プロジェクト」 に移動します。
2. 削除するプロジェクトの上にマウスを移動し、破棄アイコン  をクリックします。
3. 「OK」 をクリックします。

## ▼ プロジェクトの削除 (CLI)



注意 - プロジェクトを削除すると、そのファイルシステムおよび LUN を削除することによってプロジェクト内のすべてのデータが破棄されます。

1. **shares** に移動します。  

```
hostname:> shares
```
2. **destroy** およびプロジェクト名を入力します。  


```
hostname:shares> destroy home
```
3. **Y** と入力します。

```
This will destroy all data in "home"! Are you sure? (Y/N)
hostname:shares> Y
```

## ▼ プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 (BUI)

プロジェクト内で作成されるファイルシステムまたは LUN は、プロジェクトのプロパティを継承します。継承できる標準プロパティの一覧については、[365 ページの「継承されるプロパティ」](#)を参照してください。プロジェクトが暗号化されている場合は、プロジェクト内に作成されたファイルシステムまたは LUN も暗号化されます。

ファイルシステムまたは LUN をデフォルト以外のプロジェクトに追加する場合、そのプロジェクトがすでに存在する必要があります。新しいプロジェクトを作成するには、[346 ページの「プロジェクトの作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。

1. 「シェア」 > 「シェア」 に移動します。
2. 「ファイルシステム」 または 「LUN」 を選択します。
3. 追加アイコン  をクリックします。
4. 「ファイルシステムを作成」 または 「LUN を作成」 ダイアログボックス内のフィールドに入力します。
  - ファイルシステムの場合、プロジェクトを選択し名前を入力します。
  - LUN の場合、プロジェクトを選択し、名前を入力してボリュームサイズを指定します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
5. 「適用」 をクリックします。

#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)
- [365 ページの「継承されるプロパティ」](#)
- [578 ページの「暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 \(BUI\)」](#)

## ▼ プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 (CLI)

プロジェクト内で作成されるファイルシステムまたは LUN は、プロジェクトのプロパティを継承します。継承できる標準プロパティの一覧については、[365 ページの「継承されるプロパティ」](#)を参照してください。プロジェクトが暗号化されている場合は、プロジェクト内に作成されたファイルシステムまたは LUN も暗号化されます。

ファイルシステムまたは LUN をデフォルト以外のプロジェクトに追加する場合、そのプロジェクトがすでに存在する必要があります。新しいプロジェクトを作成するには、[346 ページの「プロジェクトの作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

1. **shares** に移動します。

```
hostname:> shares
```
2. **select** とプロジェクト名を入力します。この例では、**default** プロジェクトを選択します。



```
hostname:shares > select default
```

### 3. filesystem とファイルシステム名、または lun と LUN 名を入力します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 `_ - . :` です

次の例では、default プロジェクトに fs-1 という名前のファイルシステムを作成しています。

```
hostname:shares default> filesystem fs-1
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)>
```

### 4. LUN を作成する場合、set volsize= およびボリュームサイズを入力します。

```
hostname:shares default/lun1 (uncommitted)> set volsize=2G
volsize = 2G (uncommitted)
```

### 5. 「commit」と入力します。

```
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)> commit
```

### 6. select およびファイルシステム名または LUN 名を入力します。

```
hostname:shares default> select fs-1
```

### 7. get コマンドを使用して、シェアのプロパティを一覧表示します。

```
hostname:shares default/fs-1> get
aclinherit = restricted (inherited)
aclmode = discard (inherited)
atime = true (inherited)
casesensitivity = mixed
checksum = fletcher4 (inherited)
compression = off (inherited)
dedup = false (inherited)
compressratio = 100
copies = 1 (inherited)
creation = Wed Apr 29 2015 17:57:18 GMT+0000(UTC)
logbias = latency (inherited)
mountpoint = /export/fs-1 (inherited)
normalization = none
quota = 0
quota_snap = true
readonly = false (inherited)
recordsize = 128K (inherited)
reservation = 0
reservation_snap = true
rstchown = true(inherited)
secondarycache = all (inherited)
shadow = none
nbmand = false (inherited)
sharesmb = off (inherited)
sharenfs = on (inherited)
snapdir = hidden (inherited)
utf8only = false
vscan = false (inherited)
encryption = off (inherited)
```

```

snaplabel =
 sharedav = off (inherited)
 shareftp = off (inherited)
 sharesftp = off (inherited)
 sharetftp = off (inherited)
 pool = pool_demo
canonical_name = pool_demo/local/default/fs-1
 exported = true (inherited)
 nodestroy = false
 maxblocksize = 1M (inherited)
 lz4supported = (inherited)
 space_data = 31K
space_unused_res = 0
space_snapshots = 0
space_available = 29.4T
 space_total = 31K
 root_group = other
root_permissions = 700
 root_user = nobody
 origin =

```

8. ファイルシステムまたは LUN のプロパティを変更するには、`set` コマンドを使用します。プロパティについては、[364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)に記載されています。

たとえば、`fs-1` という名前のファイルシステムの NFS プロトコルを無効にするには、次のように入力します。

```

hostname:shares default/fs-1> set sharenfs=off
sharenfs = off (uncommitted)

```

9. 「commit」と入力します。

```

hostname:shares default/fs-1> commit
hostname:shares default/fs-1>

```


### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)
- [365 ページの「継承されるプロパティ」](#)
- [578 ページの「暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 \(CLI\)」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の編集 (BUI)

個々のファイルシステムまたは LUN のプロパティを変更するには、次のステップを使用します。

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動します。
2. 「ファイルシステム」または「LUN」を選択します。

- マウスのポインタをファイルシステムまたは LUN の上に置いて、編集アイコン  をクリックするか、編集するファイルシステムまたは LUN をダブルクリックします。ファイルシステムまたは LUN の一般プロパティが表示されます。
- 「プロトコル」、「アクセス」、「スナップショット」、または「レプリケーション」タブをクリックします。
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#) および [395 ページの「LUN プロパティ」](#) の説明に従って、ファイルシステムまたは LUN のプロパティを変更します。

### 関連トピック

- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の編集 (CLI)

個々のファイルシステムまたは LUN のプロパティを変更するには、次のステップを使用します。

- shares に移動します。**  
hostname:> shares
- select および編集するファイルシステムまたは LUN が含まれているプロジェクト名を入力します。**  
hostname:shares> select default
- select およびファイルシステム名または LUN 名を入力します。**  
hostname:shares default> select fs-1
- get コマンドを使用して、シェアのプロパティを一覧表示します。**

```
hostname:shares default/fs-1> get
 aclinherit = restricted (inherited)
 aclmode = discard (inherited)
 atime = true (inherited)
casesensitivity = mixed
 checksum = fletcher4 (inherited)
 compression = off (inherited)
 dedup = false (inherited)
compressionratio = 100
 copies = 1 (inherited)
 creation = Wed Apr 29 2015 17:57:18 GMT+0000(UTC)
 logbias = latency (inherited)
 mountpoint = /export/fs-1 (inherited)
normalization = none
 quota = 0
 quota_snap = true
```

```
 readonly = false (inherited)
 recordsize = 128K (inherited)
 reservation = 0
 reservation_snap = true
 rstchown = true(inherited)
 secondarycache = all (inherited)
 shadow = none
 nbmand = false (inherited)
 sharesmb = off (inherited)
 sharenfs = on (inherited)
 snapdir = hidden (inherited)
 utf8only = false
 vscan = false (inherited)
 encryption = off (inherited)
 snaplabel =
 sharedav = off (inherited)
 shareftp = off (inherited)
 sharesftp = off (inherited)
 sharetftp = off (inherited)
 pool = pool_demo
 canonical_name = pool_demo/local/default/fs-1
 exported = true (inherited)
 nodestroy = false
 maxblocksize = 1M (inherited)
 space_data = 31K
 space_unused_res = 0
 space_snapshots = 0
 space_available = 29.4T
 space_total = 31K
 root_group = other
 root_permissions = 700
 root_user = nobody
 origin =
```

5. [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#) および [395 ページの「LUN プロパティ」](#) の説明に従って、`set` コマンドを使用してファイルシステムまたは LUN のプロパティを変更します。

たとえば、`fs-1` という名前のファイルシステムの NFS プロトコルを無効にするには、次のように入力します。

```
hostname:shares default/fs-1> set sharenfs=off
sharenfs = off (uncommitted)
```

6. 「`commit`」と入力します。

```
hostname:shares default/fs-1> commit
```

#### 関連トピック

- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の名前変更 (BUI)



---

注意 - シェア名を変更すると、アクティブなクライアント I/O 操作が中断します。

---

1. 名前変更するファイルシステムまたは LUN に接続されているアクティブなクライアントをすべて切断します。
2. 「シェア」 > 「シェア」 に移動します。
3. 「ファイルシステム」 または 「LUN」 を選択します。
4. 一覧にあるファイルシステム名または LUN 名をクリックします。
5. ファイルシステムまたは LUN の新しい名前を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
6. **Return** を押します。
7. 「了解」 をクリックして確定します。

#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の名前変更 (CLI)



注意 - シェア名を変更すると、アクティブなクライアント I/O 操作が中断します。

1. ファイルシステムまたは LUN に接続されているアクティブなクライアントをすべて切断します。
2. **shares** に移動します。  
`hostname:> shares`
3. プロジェクトを表示するには、**list** コマンドを使用します。  
`hostname:shares>list`  
default  
home
4. **select** および名前変更するファイルシステムまたは LUN が含まれているプロジェクト名を入力します。  
`hostname:shares>select default`
5. **rename**、既存のファイルシステム名または LUN 名、および新しいファイルシステム名または LUN 名を入力します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です


```
hostname:shares default> rename fs-1 fs-2
```

#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の別のプロジェクトへの移動 (BUI)

プロジェクト内のファイルシステムおよび LUN はプロジェクトのプロパティを継承します。

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動します。
2. 「ファイルシステム」または「LUN」を選択します。
3. ファイルシステムまたは LUN の上にマウスを移動し、移動アイコン  をクリックします。
4. ファイルシステムまたは LUN を「プロジェクト」の下にある別のプロジェクトにドラッグします。  
プロジェクトパネルが展開されていない場合は、シェアがプロジェクト上にドロップされるまで自動的にパネルが展開されます。

#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の別のプロジェクトへの移動 (CLI)

プロジェクト内のファイルシステムおよび LUN はプロジェクトのプロパティを継承します。

1. `shares` に移動し、移動するファイルシステムまたは LUN を含むプロジェクトを選択します。

この例では、移動するファイルシステムまたは LUN は default プロジェクトに含まれています。

```
hostname> shares
hostname:shares> select default
```

2. **move**、移動するファイルシステム名または LUN 名、および移動先のプロジェクト名を入力します。

```
hostname:shares default> move foo home
```


#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の削除 (BUI)



注意 - ファイルシステムまたは LUN を削除するとシェア内のすべてのデータが破棄され、元に戻すことはできません。

1. 「シェア」 > 「シェア」 に移動します。
2. 「ファイルシステム」 または 「LUN」 を選択します。
3. 削除するファイルシステムまたは LUN の上にマウスを移動し、破棄アイコン  をクリックします。
4. 「OK」 をクリックします。

#### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ファイルシステムまたは LUN の削除 (CLI)



注意 - ファイルシステムまたは LUN を削除するとシェア内のすべてのデータが破棄され、元に戻すことはできません。

1. **shares** に移動します。

```
hostname> shares
```

2. **select** およびファイルシステムまたは LUN が含まれているプロジェクト名を入力します。

```
hostname:shares> select default
```

3. **select** およびファイルシステム名または LUN 名を入力します。

```
hostname:shares default>select fs-1
```

4. **destroy** と入力します。

```
hostname:shares default/fs-1> destroy
This will destroy all data in "fs-1"! Are you sure? (Y/N)
```

5. 「Y」を入力します。

```
hostname:shares default> y
```

### 関連トピック

- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

## ▼ ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定 (BUI)

割り当て制限は、プロジェクトレベルまたはファイルシステムレベルでユーザーまたはグループに設定できます。

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動し、プロジェクトまたはシェアを選択します。
2. 「一般」 タブをクリックします。
3. 「領域の使用」 - 「ユーザーとグループ」 セクションで、ドロップダウンメニューから「ユーザー」、「グループ」、または「ユーザーまたはグループ」を選択します。

---

注記 - ファイルシステムの領域を消費しておらず、割り当て制限が設定されていないユーザーは、アクティブユーザーのリストに表示されません。

---

4. プロジェクトレベルで割り当て制限を設定するには、次の 3 つのオプションのいずれかを選択します。
  - 「なし」 - このファイルシステムに割り当て制限を設定しません。



- 「デフォルト」- 割り当て制限を、プロジェクトレベルでのデフォルトの割り当て制限に設定します。デフォルトが設定されていない場合、このファイルシステムに割り当て制限を設定しません。
- ラジオボタンをクリックし、サイズフィールドに割り当て制限を入力し、測定値を選択します。

#### 5. 「適用」をクリックします。

ユーザーおよびグループ割り当て制限のプロパティは、ほかのプロパティとべつに検証されます。ただし、無効なユーザー/グループおよび別の無効なプロパティを入力した場合、検証エラーが1つのみ表示されることがあります。1つのエラーを修正して変更を適用すると、残りのエラーメッセージが表示されます。

無効なプロパティが入力されたというエラーメッセージが表示された場合、これは無効なユーザー/グループ、または別の無効なプロパティ、あるいはその両方がページに存在する可能性があります。1つの無効なプロパティを修正してから変更を適用すると、残りのエラーメッセージが表示されます。

#### 関連トピック

- [404 ページの「ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定」](#)

## ▼ ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定 (CLI)

割り当て制限は、プロジェクトレベルまたはファイルシステムレベルでユーザーまたはグループに設定できます。

1. 次の例に示すように、`shares` に移動し、プロジェクトを選択し、シェアを選択します。

```
hostname:> shares select default select eschrock
```

2. `users`、`list` の順に入力し、現在のユーザーを表示します。

```
hostname:shares default/eschrock> users
hostname:shares default/eschrock users> list
USER NAME USAGE QUOTA SOURCE
user-000 root 321K - -
user-001 ahl 9.94K - -
user-002 eschrock 20.0G - -
```

---

注記 - ファイルシステムの領域を消費しておらず、割り当て制限が設定されていないユーザーは、アクティブユーザーのリストに表示されません。

---

3. `select`、`name=` およびユーザーを入力します。

```
hostname:shares default/eschrock users> select name=eschrock
```

```
hostname:shares default/eschrock user-002> get
 name = eschrock
 unixname = eschrock
 unixid = 132651
 winname = (unset)
 winid = (unset)
 usage = 20.0G
 quota = (unset)
 source = (unset)
```

4. **quota= および値を入力します。commit および done と入力します。**

---

注記 - 割り当て制限をクリアするには、値を「0」に設定します。

---

```
hostname:shares default/eschrock user-002> set quota=100G
 quota = 100G (uncommitted)
hostname:shares default/eschrock user-002> commit
hostname:shares default/eschrock user-002> done
```

5. そのようなユーザーまたはグループの割り当て制限を設定するために、**quota** コマンドを使用すると、そのあとで名前と割り当て制限を設定できます。

「ソース」列には、「local」(割り当て制限をファイルシステムレベルで設定した場合)、「default」(割り当て制限をプロジェクトレベルで設定した場合)、または「-」(割り当て制限を設定しなかった場合)が表示されます。次の例では、プロジェクトレベルで設定されたデフォルトのユーザー割り当て制限は 50G バイトになります。

デフォルトのユーザーまたはグループ割り当て制限がプロジェクトレベルで設定された場合、この手順ではその値をオーバーライドします。

```
hostname:shares default/eschrock users> quota
hostname:shares default/eschrock users quota (uncommitted)> set name=bmc
 name = bmc (uncommitted)
hostname:shares default/eschrock users quota (uncommitted)> set quota=default
 quota = default (uncommitted)
hostname:shares default/eschrock users quota (uncommitted)> commit
hostname:shares default/eschrock users> list
USER NAME USAGE QUOTA SOURCE
user-000 root 321K - -
user-001 ahl 9.94K - -
user-002 eschrock 20.0G 100G local
user-003 bmc - 50G default
```

### 関連トピック

- [404 ページの「ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定」](#)

## ストレージプール、プロジェクト、およびシェアについて

Oracle ZFS Storage Appliance は、共通の領域をすべてのファイルシステムと LUN でシェアする、プールされたストレージモデルを使用して物理ストレージを管理しま

す。このトピックでは、ストレージプール、プロジェクト、およびシェアを使用してストレージを編成する方法について説明します。

## ストレージプール

アプライアンスは、基本のストレージデバイスをプールにグループ化する ZFS ファイルシステムに基づいています。ファイルシステムおよび LUN は、総称してシェアと呼ばれ、必要に応じてこのストレージプールから割り当てられます。ファイルシステムまたは LUN を作成する前に、まずアプライアンスでストレージを構成する必要があります。ストレージプールが構成されると、静的にファイルシステムのサイズ変更を行う必要はありませんが、割り当て制限と予約を使ってサイズを変更できます。

複数のストレージプールがサポートされていますが、[86 ページの「ストレージの構成」](#) セクションで説明されているように、この種の構成には重大な欠点があるため、通常はお勧めできません。複数のプールは、データベースのミラー化されたプールやストリーミングワークロードの RAID-Z プールなど、2つの異なるプロファイルのパフォーマンスや信頼性の特性が大幅に異なる場合にのみ使用するようになっています。

1つのホストで複数のプールがアクティブになっている場合、BUI ではメニューバーにドロップダウンリストが表示され、それを使ってプールを切り替えることができます。CLI では、現在のプールの名前が括弧に囲まれて表示され、この名前は「pool」プロパティを設定することで変更できます。プールが1つしか構成されていない場合、これらのコントロールは表示されません。複数のプールを選択した場合、UI で選ばれるデフォルトプールは任意なので、シェアを操作する前に、スクリプト化された処理によってプール名が明示的に設定されるようになっています。

## プロジェクト

すべてのファイルシステムおよび LUN はプロジェクトにグループ化されます。プロジェクトは、シェアを管理するための共通の管理制御点を定義する、一貫性グループと見なすことができます。プロジェクト内のすべてのシェアは共通の設定をシェアでき、割り当て制限はシェアレベルに加え、プロジェクトレベルでも強制できます。プロジェクトはまた、論理的に関連するシェアをグループ化して、1か所から共通の属性(累積された領域など)にアクセスできるようにするためだけでも使用できます。

デフォルトでは、ストレージプールが最初に構成されるときにデフォルトプロジェクトが1つ作成されます。このデフォルトプロジェクト内にすべてのシェアを作成できますが、適度な大きさの環境に対しては、組織上の目的のためであっても、追加のプロジェクトを作成することを強くお勧めします。

## シェア

シェアは、サポートされるデータプロトコルを介してアプライアンスのクライアントにエクスポートされるファイルシステムと LUN です。エクスポートされたファイルシステムには SMB、NFS、HTTP/WebDav、および FTP を介してアクセスできます。

LUN はブロックベースのボリュームをエクスポートし、iSCSIまたはファイバチャネルを介してアクセスできます。

プロジェクト/シェアはプール内のシェアの一意識別子です。プール内のプロジェクトに同じ名前のシェアが含まれています。すでに使用中の名前を使用してシェアに名前を付けたりシェアの名前を変更したりしようとすると、マウントポイントエラーが発生します。

デフォルトプロパティに加え、シェアとプロジェクトに追加のプロパティをいくつでも構成できます。これらのプロパティには、検証のための基本型が設定され、ほかのほとんどの標準プロパティと同様に継承されます。これらの値は、どのような方法でもソフトウェアで使用されることはなく、エンドユーザーだけが使用します。プロパティのスキーマはすべてのプールにわたってシステム全体に適用され、クラスタピア間で同期されます。

### 関連トピック

- [401 ページの「シェアの領域管理」](#)
- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)
- [445 ページの「スナップショットとクローン」](#)

## プロジェクトとシェアのプロパティ

すべてのプロジェクトおよびシェアには、BUI または CLI を使用して設定できる、関連するプロパティがいくつかあります。プロパティ名および説明の一覧については、次のいずれかのリンクをクリックします。

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [395 ページの「LUN プロパティ」](#)

プロジェクトおよびシェアのプロパティは、次のいずれかのタイプが可能です。

表 102 プロジェクトおよびシェアのプロパティタイプ

| プロパティタイプ           | 説明                                                                                                                                                                                                   |
|--------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <a href="#">継承</a> | 継承プロパティはもっとも一般的なプロパティタイプで、ほとんどの構成可能なプロジェクトとシェアのプロパティを表します。プロジェクトに属しているシェアは、プロパティのローカル設定を持つことも、親プロジェクトからその設定を継承することもできます。デフォルトでは、シェアはプロジェクトからすべてのプロパティを継承します。プロジェクトでプロパティが変更されると、そのプロパティを継承するすべてのシェアが |

| プロパティタイプ     | 説明                                                                                                                                                                                               |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|              | 新しい値を反映して更新されます。継承されると、マウントポイントと SMB のプロパティを除くすべてのプロパティは親プロジェクトと同じ値になります。継承されると、これらのプロパティはプロジェクト設定をその独自のシェア名と連結させます。                                                                             |
| 読み取り専用       | 読み取り専用プロパティはプロジェクトとシェアに関する統計を表すもので、変更できません。このタイプのもっとも一般的なプロパティは、領域使用状況の統計です。                                                                                                                     |
| スペース管理       | スペース管理プロパティ (割り当て制限と予約) はシェアとプロジェクトの両方に適用されますが、継承されません。100G の割り当て制限があるプロジェクトはシェア全体に強制的に適用されますが、明示的に設定しないかぎり、個々のシェアには割り当て制限は適用されません。                                                              |
| 静的 (作成時間)    | 静的プロパティはファイルシステムまたは LUN の作成時間に指定できますが、シェアが作成されたあとは変更できません。これらのプロパティはディスク上のデータ構造を制御するもので、国際化設定、大文字と小文字の区別、およびボリュームのブロックサイズが含まれます。                                                                 |
| プロジェクトデフォルト  | プロジェクトデフォルトプロパティはプロジェクトに設定されますが、プロジェクト自体には影響しません。これらのプロパティは、ファイルシステムまたは LUN の作成時に初期設定を生成するために使用され、共通の継承不可能なプロパティセットがシェアに含まれている場合に役立つことがあります。これらのプロパティを変更しても既存のシェアには影響しないため、シェアの作成前または作成後に変更できます。 |
| ファイルシステムローカル | ファイルシステムローカルプロパティはファイルシステムにのみ適用され、ファイルシステムのルートディレクトリの管理に便利なプロパティです。これらをプロジェクトで設定することはできません。これらのアクセス制御プロパティは帯域内プロトコル操作によっても設定できます。                                                                |
| LUN ローカル     | LUN ローカルプロパティは LUN にのみ適用され、継承されません。これらをプロジェクトで設定することはできません。                                                                                                                                      |
| カスタム         | カスタムプロパティはユーザー定義のプロパティです。                                                                                                                                                                        |

## 継承されるプロパティ

継承プロパティは、プロジェクトから継承するかシェアに明示的に設定することができる標準プロパティです。BUI では一度にすべてのプロパティを継承することしかできませんが、CLI では個別のプロパティを継承できます。

プロジェクトに属しているシェアは、プロパティのローカル設定を持つことも、親プロジェクトからその設定を継承することもできます。デフォルトでは、シェアはプロジェクトからすべてのプロパティを継承します。プロジェクトでプロパティが変更されると、そのプロパティを継承するすべてのシェアが新しい値を反映して更新されます。継承されると、マウントポイントと SMB のプロパティを除くすべてのプロパティは親プロジェクトと同じ値になります。継承されると、これらのプロパティはプロジェクト設定をその独自のシェア名と連結させます。

## マウントポイント

マウントポイントプロパティは、ファイルシステムがマウントされる場所です。このプロパティはファイルシステムに対してのみ有効です。

マウントポイントプロパティには次の制限事項があります。

- /export の下の場所を指定する必要があります
- ほかのシェアと競合することはできません
- フェイルオーバーを正しく行うには、クラスタピア上のほかのシェアと競合することはできません。

マウントポイントプロパティを継承するとき、現在のデータセット名がプロジェクトのマウントポイント設定に付加され、スラッシュ (「/」) で結合されます。たとえば、「home」プロジェクトのマウントポイント設定が /export/home の場合、「home/bob」が継承するマウントポイントは /export/home/bob になります。

SMB シェアはそのリソース名を介してエクスポートされ、マウントポイントはプロトコル上では見えません。ただし、SMB 専用のシェアにも、アプライアンス上に有効な一意のマウントポイントが必要です。

いくつかの制限事項がありますが、マウントポイントはほかのシェアの下に入れ子できます。詳細は、[406 ページの「ファイルシステムの名前空間の操作」](#)を参照してください。

## 読み取り専用

読み取り専用プロパティは、ファイルシステムの内容を読み取り専用にするかどうかを制御します。このプロパティはファイルシステムに対してのみ有効です。

読み取り専用ファイルシステムの内容は、どのようなプロトコル設定であっても変更できません。ファイルシステムの名前の変更、破棄、およびプロパティの変更を行う機能は、この設定に影響されません。さらに、ファイルシステムが読み取り専用の場合、アクセス制御のプロパティを変更するにはファイルシステムのルートディレ

クトリの属性を変更する必要があるため、アクセス制御のプロパティーは変更できません。

## 読み取り時のアクセス時間の更新

読み取り時のアクセス時間の更新プロパティーは、ファイルのアクセス時間を読み取り時に更新するかどうかを制御します。このプロパティーはファイルシステムに対してのみ有効です。

POSIX 標準では、ファイルのアクセス時間は、ファイルが最後に読み取られた時間を適切に反映する必要があります。したがって、ほとんどが読み取り専用のワークロードであっても、ベースとなるファイルシステムに対して書き込みを発行する必要があります。主に多数のファイルの読み取りから成る作業セットの場合は、このプロパティーをオフにすると、標準には準拠しなくなりますが、パフォーマンスが向上する可能性があります。このような更新は非同期に発生し、グループ化されているため、この効果が見えるのは重い負荷がかかっている場合だけです。

## ブロック不可の必須ロック

ブロック不可の必須ロックプロパティーは、SMB ロックセマンティクスを POSIX セマンティクスよりも優先するかどうかを制御します。このプロパティーはファイルシステムに対してのみ有効です。

デフォルトでは、ファイルシステムには POSIX 標準に従ってファイル動作が実装されます。これらの標準は、SMB プロトコルに必要な動作とは基本的に互換性を持ちません。シェアのプライマリプロトコルが SMB の場合は、このオプションを常に有効にしてください。このプロパティーを変更した場合は、すべてのクライアントの接続を切断し、再度接続する必要があります。

## データ複製解除

データ複製解除プロパティーは、データの重複コピーを削除するかどうかを制御します。複製解除は、プール全体に対してブロックベースで同期式に実行されます。プロジェクト単位またはシェア単位で有効化できます。

複製解除を有効にするには、プロジェクトまたはシェアの一般プロパティーの画面で「データ複製解除」チェックボックスにチェックマークを付けます。ステータスダッシュボードの使用状況の領域に、複製解除の比率が表示されます。複製解除が有効になっているときに書き込まれたデータは、複製解除テーブルに入力され、データのチェックサムによってインデックスが付けられます。複製解除では、暗号として強力な SHA-256 チェックサムの使用が強制されます。後続の書き込みでは重複データが識別され、既存のコピーだけがディスク上に保持されます。複製解除は、同じサイ



ズのブロック間で、同じレコードサイズで書き込まれたデータに対してのみ実行できません。最適な結果を得るには、そのデータを使用しているアプリケーションと同じレコードサイズを設定してください。ストリーミングワークロードの場合は、大きいレコードサイズを使用してください。

データに重複が含まれていない場合に「データ複製解除」を有効にすると、オーバーヘッドが増加し (CPU 負荷がかかるチェックサム、ディスク上の複製解除テーブルの入力)、利点は何もありません。データに重複が含まれている場合は、「データ複製解除」を有効にすると、あるブロックのコピーは何度発生しても保存されるのは1つだけであるため、領域を節約できます。チェックサムの計算によって負荷が増加すること、および複製解除テーブルのメタデータに対するアクセスと管理が必要になることから、複製解除は必然的にパフォーマンスに影響を与えます。

複製解除は、シェアの計算されたサイズには影響しませんが、プールに使用される領域の量には影響を与えます。たとえば、2つのシェアに同じ 1G バイトのファイルが含まれている場合、それぞれ 1G バイトのサイズで表示されますが、プールの合計は 1G バイトだけで、複製解除の比率は 2x と報告されます。

複製解除では、その性質から、ブロックへの書き込みまたはブロックの解放が行われたときに複製解除テーブルの変更が必要になります。複製解除テーブルが DRAM に収まらない場合は、書き込みや解放により、それまでは発生していなかったランダムな読み取りアクティビティが大量に発生する可能性があります。結果として、複製解除を有効にするとパフォーマンスに重大な影響を与えることがあります。さらに、特にシェアやスナップショットを削除する場合などに、複製解除を有効にしたことによるパフォーマンス低下がプール全体に現れることがあります。一般に、シェアに高い比率で複製データが含まれていることと、複製データとそれを参照するためのテーブルが DRAM に十分に収まることとがわかっている場合以外は、複製解除を有効にすることは推奨されません。

複製解除がパフォーマンスに悪影響を与えているかどうかを調べるには、高度な分析を有効にしてから、分析を使用して「DMU オブジェクトタイプ別の ZFS DMU 操作内訳」を測定し、維持された DDT 操作 (データ複製解除テーブル操作) が ZFS 操作よりも高い比率で発生しているかどうかを確認します。発生している場合は、ファイル I/O よりも複製解除テーブルのためにより多くの I/O が使用されています。

複製解除を暗号化と一緒に使用する場合、CCM モード暗号化を使用した AES のみが複製解除に対応していることに留意してください。詳細は、[589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)を参照してください。

## データ圧縮

データ圧縮プロパティは、ディスクに書き込む前にデータを圧縮するかどうかを制御します。シェアは、オプションで、データを圧縮してからストレージプールに書き込むことができます。これにより、ストレージの利用率は大幅に向上しますが、CPU の使用率が高くなります。デフォルトでは、圧縮は行われません。圧縮によって領域



がまったく節約されない場合は、データを再度読み取るときの不要な圧縮解除を避けるために、データがディスクにコミットされていません。圧縮アルゴリズムを選択する前に、必要なパフォーマンステストをすべて実行し、達成された圧縮率を測定することをお勧めします。

| BUI の値         | CLI の値 | 説明                                                        |
|----------------|--------|-----------------------------------------------------------|
| オフ             | オフ     | 圧縮は行われません                                                 |
| LZJB (最速)      | lzjb   | 単純なランレングスエンコードで、かなり単純な入力にしか機能しませんが、CPU をあまり消費しません。        |
| GZIP-2 (高速)    | gzip-2 | gzip 圧縮アルゴリズムの軽量版。                                        |
| GZIP (デフォルト)   | gzip   | 標準の gzip 圧縮アルゴリズム。                                        |
| GZIP-9 (最大の圧縮) | gzip-9 | gzip で達成できる最大限の圧縮。これは大量の CPU を消費し、わずかな利点しか得られないことがよくあります。 |

## チェックサム

チェックサムプロパティーは、データブロックに使用するチェックサムを制御します。アプライアンスでは、ディスク上のすべてのデータにチェックサムが付けられ、従来の欠点 (特に実体のない読み書き) を回避しています。これにより、デバイスから無効なデータが返された場合にシステムで検出できます。通常の動作にはデフォルトのチェックサム (fletcher4) で十分ですが、ユーザーは CPU 負荷の増加を犠牲にチェックサムの強度を上げることができます。メタデータには常に同じアルゴリズムを使用してチェックサムが付けられるため、この影響を受けるのはユーザーのデータ (ファイルまたは LUN のブロック) だけです。

| BUI の値            | CLI の値    | 説明                     |
|-------------------|-----------|------------------------|
| Fletcher 2 (レガシー) | fletcher2 | 16 ビット Fletcher チェックサム |
| Fletcher 4 (標準)   | fletcher4 | 32 ビット Fletcher チェックサム |
| SHA-256 (最強)      | sha256    | SHA-256 チェックサム         |
| SHA-256-MAC       | sha256mac |                        |

## デバイス使用をキャッシュ

キャッシュデバイスの使用状況プロパティーは、キャッシュデバイスをシェアで使用するかどうかを制御します。デフォルトでは、すべてのデータセットがシステム上の任意のキャッシュデバイスを使用します。キャッシュデバイスはストレージプールの一部として構成され、もう 1 段のキャッシュを提供して、より高速な階層型アクセス

を実現します。キャッシュデバイスの詳細は、[86 ページの「ストレージの構成」](#)を参照してください。このプロパティは、ストレージプールに現在キャッシュデバイスが構成されているかどうかには依存しません。たとえば、キャッシュデバイスが存在しない場合でも、このプロパティを「all」に設定できます。あとでそのようなデバイスが追加されると、シェアは向上したパフォーマンスを自動的に利用します。プライマリ (DRAM) キャッシュの使用は、このプロパティに影響されません。

| BUI の値          | CLI の値   | 説明                                                                                                    |
|-----------------|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| すべてのデータとメタデータ   | all      | 通常のファイルまたは LUN データ、およびメタデータをすべてキャッシュします。                                                              |
| メタデータのみ         | metadata | メタデータだけをキャッシュデバイスに保持します。これを使用すると、ディレクトリ構造をすばやくたどることができますが、ファイルの内容を取得するには、データデバイスからの読み取りが必要になることがあります。 |
| キャッシュデバイスを使用しない | none     | このシェアのデータはキャッシュデバイスにキャッシュされません。データはプライマリキャッシュにキャッシュされるか、データデバイスに保存されるだけです。                            |

## 同期書き込みバイアス

同期書き込みバイアスプロパティは、同期書き込みを処理するときの動作を制御します。デフォルトでは、システムは待機時間に関して同期書き込みを最適化します。つまり、ログデバイスを活用して応答時間を短くします。システムに個別のファイルシステムが複数存在する場合、ログデバイスに競合が発生し、すべてのコンシューマで待機時間が増加する可能性があります。複数のファイルシステムが同期セマンティクスを要求している場合でも、一部のファイルシステムがほかのファイルシステムよりも待機時間の影響を受けやすくなる可能性があります。

よくあるのが、個別のログを持つデータベースのケースです。ログは待機時間の影響を特に受けやすく、データベース自体は、同様に同期セマンティクスを要求していても、待機時間ではなく帯域幅の影響を受けます。このような環境では、このプロパティをメインデータベースでは「throughput」に設定し、ログファイルシステムでは「latency」のままにしておく、パフォーマンスが大幅に向上する可能性があります。ログデバイスが存在しない場合でも、この設定によって動作が変更されますが、それほど大きな影響はない可能性があります。

Oracle Intelligent Storage Protocol では、「同期書き込みバイアス」設定を省略できます。Oracle Intelligent Storage Protocol では、ファイルシステムで定義されている書き込

みバイアスを使用する代わりに、Oracle Database NFSv4 クライアントによって提供される書き込みバイアス値を使用できます。Oracle Database NFSv4 クライアントによって送信された書き込みバイアス値は、その書き込み要求のためにのみ使用されます。

| BUI の値 | CLI の値     | 説明                                                                                           |
|--------|------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 待機時間   | latency    | 同期書き込みは、専用のログデバイスがあればそれを活用して、待機時間に関して最適化されます。                                                |
| スループット | throughput | 同期書き込みはスループットに関して最適化されます。データはログデバイスではなくプライマリデータディスクに書き込まれ、システムの合計帯域幅が最適になるような方法で書き込みが実行されます。 |

## データベースレコードサイズ

データベースレコードサイズプロパティーは、ファイルシステム内のファイルの推奨ブロックサイズを指定します。このプロパティーは、ファイルシステムに対してのみ有効であり、レコードサイズが固定されているファイルにアクセスするデータベースワークロードで使用するよう設計されています。このシステムでは、標準的なアクセスパターンに最適化された内部アルゴリズムに従って、ブロックサイズが自動的に調整されます。作成されるファイルのサイズが非常に大きく、それらのファイルにさまざまなパターンの小さなブロック単位でアクセスするデータベースの場合には、このようなアルゴリズムが最適でないことがあります。データベースのレコードサイズ以上のレコードサイズを指定すると、パフォーマンスが大幅に向上することがあります。このプロパティーを汎用目的のファイルシステムに使用することは、パフォーマンスが低下する可能性があるため、できるだけ避けてください。

デフォルトのレコードサイズは 128K バイトです。指定するサイズは、512 バイト - 1M バイトの 2 の累乗にしてください。ファイルシステムのレコードサイズの変更は、その後作成したファイルにのみ適用され、既存のファイルと受信データには影響しません。128K より大きいブロックサイズがプロジェクトまたはシェアに使用される場合、大きなブロックサイズをサポートしていないシステムへの、それらのプロジェクトまたはシェアのレプリケーションは失敗します。

Oracle Intelligent Storage Protocol では、「データベースレコードサイズ」設定を省略できます。Oracle Intelligent Storage Protocol では、ファイルシステムで定義されているレコードサイズを使用する代わりに、Oracle Database NFSv4 クライアントによって提供されるブロックサイズ値を使用できます。Oracle Database NFSv4 クライアントによって提供されるブロックサイズは、新しいデータベースファイルまたはテーブルを作成する場合にのみ適用できます。既存のファイルやテーブルのブロックサイズは変更されません。詳細は、[647 ページの「Oracle Intelligent Storage Protocol」](#)を参照してください。

## 追加レプリケーション

追加のレプリケーションプロパティは、ストレージプールの冗長性の範囲を超えている各ブロックの格納コピー数を制御します。メタデータは常に複数のコピーで保存されますが、このプロパティを使用すると、同じ動作をデータブロックにも適用できます。ストレージプールは、これらの追加ブロックを異なるデバイスに保存しようと試みますが、保証はされません。さらに、論理デバイス全体 (RAID ストライプやミラー化されたペアなど) が失われた場合、ストレージプールをインポートすることはできません。このプロパティは、ストレージプールでの正式なレプリケーションに代わるものではありませんが、こだわりの強い管理者に安心を与えることができます。

## ウイルススキャン

ウイルススキャンプロパティは、ファイルシステムに対してウイルススキャンを行うかどうかを制御します。このプロパティはファイルシステムに対してのみ有効です。このプロパティの設定は、ウイルススキャンサービスの状態には依存しません。ウイルススキャンサービスが有効になっていても、ファイルシステムのスキャンはこのプロパティで明示的に有効にする必要があります。同様に、ウイルススキャンサービス自体がオフになっていても、特定のシェアに対してウイルススキャンを有効化できます。ウイルススキャンの構成の詳細は、[ウイルススキャン](#)を参照してください。

## 破棄の防止

設定されている場合、そのシェアまたはプロジェクトを破棄することはできません。これには、従属クローンを介したシェアの破棄、プロジェクト内のシェアの破棄、およびレプリケーションパッケージの破棄も含まれます。ただし、レプリケーションの更新を介して破棄されるシェアは、このプロパティに影響されません。レプリケーションのソースになっているアプライアンス上のシェアが破棄される場合、このプロパティが設定されていても、ターゲット上の対応するシェアは破棄されます。シェアを破棄するには、別の段階としてこのプロパティをまず明示的にオフにする必要があります。このプロパティはデフォルトでオフになっています。

## 所有権の変更の制限

デフォルトでは、(適切なクライアント上で root 対応のエクスポートで) root ユーザーが行う場合を除き、ファイルの所有権を変更することはできません。このプロパティをオフにすることによって、ファイルシステム単位またはプロジェクト単位でこのプロパティをオフにすることができます。オフの場合、ファイルまたはディレクトリの所有者がファイルの所有権を変更でき、自分のファイルを実質的に「譲渡」

できます。所有権を変更すると、setuid ビットと setgid ビットがすべて取り除かれ、ユーザーがこの操作によって権限を上げることを防ぎます。

## LUN ローカルプロパティー

これらのプロパティーは LUN にのみ適用され、継承されません。これらをプロジェクトで設定することはできません。

### ボリュームサイズ

ボリュームサイズプロパティーは、iSCSI でエクスポートされる LUN の論理サイズです。このプロパティーは LUN のサイズを制御します。デフォルトでは、LUN はボリュームを完全に満たす十分な領域を予約します。LUN がクライアントにアクティブにエクスポートされている間にサイズを変更すると、結果は不定になることがあります。その場合、クライアントが再度接続を行う必要が生じたり、LUN 上のファイルシステムのデータが破壊されたりする可能性があります。この操作を実行する前に、使用している特定の iSCSI クライアントのベストプラクティスを確認してください。

### シンプロビジョニング済み

シンプロビジョニング済みプロパティーは、ボリュームの領域を予約するかどうかを制御します。デフォルトでは、LUN はボリュームを完全に満たすだけの十分な領域を予約します。これにより、不適切なときにクライアントで領域不足エラーが発生することはなくなります。このプロパティーにより、利用可能な領域の量を超えるボリュームサイズが可能になります。設定されている場合、LUN は LUN に書き込まれている領域だけを消費します。これで LUN のシンプロビジョニングが可能になりますが、ほとんどのファイルシステムは基になるデバイスから「領域不足」を受け取ることは想定していないため、シェアで領域不足が発生すると、クライアントが不安定になったりクライアントのデータが破壊されたりする可能性があります。

設定されていない場合、ボリュームサイズの動作は、スナップショットを除いて予約と同様になります。したがって同じ欠点もあります。たとえば、利用可能な領域の量を超える点にスナップショットが理論上到達する場合は、スナップショットの作成に失敗します。詳細は、[402 ページの「ファイルシステムとプロジェクト領域の管理」](#)の予約プロパティーを参照してください。

### ボリュームブロックサイズ

ボリュームブロックサイズプロパティーは、LUN のネイティブブロックサイズを設定します。512 バイトから 1M までの 2 の累乗を指定でき、デフォルトは 8K です。このプロパティーは静的であり、LUN の作成時に設定されて、変更できません。

## その他のプロパティ

「プロジェクトのデフォルト」、「ファイルシステムローカル」、「スペース管理」、「読み取り専用」、「カスタム」のプロパティを利用できます。

### プロジェクトのデフォルト

プロジェクトデフォルトプロパティはプロジェクトに設定されますが、プロジェクト自体には影響しません。これらのプロパティは、ファイルシステムまたは LUN の作成時に初期設定を生成するために使用され、共通の継承不可能なプロパティセットがシェアに含まれている場合に役立つことがあります。これらのプロパティを変更しても既存のシェアには影響しないため、シェアの作成前または作成後に変更できます。

### ファイルシステムローカル

ファイルシステムローカルプロパティはファイルシステムにのみ適用され、ファイルシステムのルートディレクトリの管理に便利なプロパティです。これらは継承されず、プロジェクトで設定することはできません。これらのアクセス制御プロパティは帯域内プロトコル操作によっても設定できます。

### スペース管理

スペース管理プロパティ (割り当て制限と予約) はシェアとプロジェクトの両方に適用されますが、継承されません。100G の割り当て制限があるプロジェクトはシェア全体に強制的に適用されますが、明示的に設定しないかぎり、個々のシェアには割り当て制限は適用されません。

### 読み取り専用

読み取り専用プロパティはプロジェクトとシェアに関する統計を表すもので、変更できません。このタイプのもっとも一般的なプロパティは、領域使用状況の統計です。

### カスタム

カスタムプロパティは、スキーマを使用したユーザー定義のプロパティです。詳細は、[430 ページの「スキーマの操作」](#)を参照してください。

## 静的プロパティ

静的 (作成時間) プロパティはファイルシステムまたは LUN の作成時間に指定できますが、シェアが作成されたあとは変更できません。これらのプロパティはディスク上のデータ構造を制御するもので、国際化設定、大文字と小文字の区別、およびボリュームのブロックサイズが含まれます。

静的プロパティは、BUI でファイルシステムまたは LUN の編集中にインタフェースの左側に表示できます。

表 103 ファイルシステムおよび LUN の静的プロパティ

| BUI 名                  | CLI 名           | 説明                                                                                                                                                  |
|------------------------|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 作成日                    | creation        | 作成日を示します。                                                                                                                                           |
| 圧縮率                    | compressratio   | 圧縮アルゴリズムの結果である、ファイルシステムまたは LUN の現在の圧縮率。詳細は、 <a href="#">376 ページの「圧縮率」</a> を参照してください。                                                                |
| 大文字と小文字の区別             | casesensitivity | 大文字と小文字の区別プロパティは、ディレクトリ検索で大文字と小文字を区別するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">376 ページの「大文字と小文字の区別」</a> を参照してください。                                               |
| 非 UTF-8 を拒否            | utf8only        | このプロパティは、すべてのファイルおよびディレクトリに対して UTF-8 エンコーディングを強制的に適用します。詳細は、 <a href="#">377 ページの「非 UTF-8 を拒否」</a> を参照してください。                                       |
| 正規化                    | normalization   | 正規化プロパティは、ファイルシステムやディレクトリに対して実行される Unicode 正規化がある場合に、それを制御します。Unicode は、同じ論理名を異なるエンコードで表す機能をサポートしています。詳細は、 <a href="#">377 ページの「正規化」</a> を参照してください。 |
| ボリュームのブロックサイズ (LUN のみ) | volblocksize    | ボリュームブロックサイズプロパティは、LUN のネイティブブロックサイズを設定します。詳細は、 <a href="#">378 ページの「ボリュームブロックサイズ」</a> を参照してください。                                                   |
| 起点                     | origin          | クローンの作成元のスナップショットの名前を示します。詳細は、 <a href="#">378 ページの「起点」</a> を参照してください。                                                                              |
| データの移行ソース (ファイルシステムのみ) | shadow          | ファイルシステムがローカルで、または NFS を介して既存のファイルシステムのシャドウをアクティブに作成している場合のソースの場所。詳細                                                                                |

| BUI 名 | CLI 名 | 説明                                              |
|-------|-------|-------------------------------------------------|
|       |       | は、 <a href="#">378 ページの「データ移行ソース」</a> を参照してください |

## 圧縮率

圧縮が有効になっている場合、このプロパティにはシェアに対して現在適用される圧縮率が表示されます。圧縮率は乗数で表されます。たとえば、2x という圧縮は、圧縮されていない内容の半分の領域をデータが消費していることを意味します。圧縮アルゴリズムの選択の詳細は、[365 ページの「継承されるプロパティ」](#)で説明されている「データ圧縮」を参照してください。

## 大文字と小文字の区別

大文字と小文字の区別プロパティは、ディレクトリ検索で大文字と小文字を区別するかどうかを制御します。次のオプションがサポートされています。

| BUI の値 | CLI の値      | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|--------|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 混在     | mixed       | 大文字と小文字の区別は、使用されるプロトコルによって決まります。NFS、FTP、および HTTP の場合は、検索で大文字と小文字を区別します。SMB の場合は、検索で大文字と小文字を区別しません。これはデフォルトであり、プロトコル間の一貫性よりも各種プロトコルの適合性を優先しています。このモードの使用時は、大文字と小文字を区別するプロトコルを使用して別個のファイルを作成できますが、SMB 経由でアクセスするとそのファイルはクラッシュします。このような状況では、SMB サーバーは、ファイル名を一意に識別する「符号化された」バージョンの競合を作成しません。 |
| 区別しない  | insensitive | すべての検索で大文字と小文字を区別せず、最初から大文字と小文字を区別する (NFS などの) プロトコルよりも優先されます。これにより、このようなプロトコルのクライアントで混乱が起きる可能性があります。符号化された名前が SMB 経由で使用される原因となる名前の重複がクライアント                                                                                                                                            |



| BUI の値 | CLI の値    | 説明                                                                                                                                                            |
|--------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|        |           | で発生しなくなります。この設定は、SMB がプライマリプロトコルでほかのプロトコルが二次的なものとみなされる場合、つまり想定される標準への適合性が問題とならない場合にのみ使用するようになっています。                                                           |
| 区別する   | sensitive | すべての検索で大文字と小文字を区別し、最初から検索で大文字小文字を区別しない SMB よりも優先されます。SMB サーバーは符号化された名前を使って名前の重複に対処でき、また、この設定によって Windows アプリケーションが正常ではない動作をする可能性があるため、通常はこの設定を使用しないようにしてください。 |

## 非 UTF-8 を拒否

このプロパティは、すべてのファイルおよびディレクトリに対して UTF-8 エンコーディングを強制的に適用します。これを設定した場合、無効な UTF-8 エンコードを使用してファイルまたはディレクトリを作成しようとしても失敗します。この設定は、エンコードが標準によって定義されていない NFSv3 にのみ影響します。NFSv4 では常に UTF-8 が使用され、SMB では適切なエンコードがネゴシエーションされます。通常はこの設定を「オン」にしてください。そうしない場合、(特に大文字と小文字を区別して比較を行うためにエンコードを認識する必要がある) SMB が、無効な UTF-8 エンコードで作成されるファイル名をデコードできません。この設定は、クライアントが別のエンコードを使用するように構成された既存の NFSv3 を配備する場合にのみ「オフ」にしてください。このプロパティが「オフ」に設定されているときに SMB または NFSv4 を有効にすると、NFSv3 クライアントが無効な UTF-8 エンコードのファイルまたはディレクトリを作成した場合に結果は不定になる可能性があります。正規化プロパティが「なし」以外の値に設定されている場合は、このプロパティを「オン」に設定する必要があります。

## 正規化

正規化プロパティは、ファイルシステムやディレクトリに対して実行される Unicode 正規化がある場合に、それを制御します。Unicode は、同じ論理名を異なるエンコードで表す機能をサポートしています。正規化を使わないと、格納されているディスク上の名前が異なってしまう、いずれかの代替形式を使った検索がファイルの作成方法やアクセス方法によっては失敗します。このプロパティが「なし」(デフォルト)以外の値に設定されている場合は、「非 UTF-8 を拒否」プロパティも「オン」に設定する必要があります。

| BUI の値 | CLI の値 | 説明                                                                                               |
|--------|--------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| なし     | none   | 正規化は行われません。                                                                                      |
| 形式 C   | formC  | <i>Normalization Form Canonical Composition (NFC)</i> - 文字は正準等価性によって分解され、再度合成されます。               |
| 形式 D   | formD  | <i>Normalization Form Canonical Decomposition (NFD)</i> - 文字は正準等価性によって分解されます。                    |
| 形式 KC  | formKC | <i>Normalization Form Compatibility Composition (NFKC)</i> - 文字は互換等価性によって分解され、正準等価性によって再度合成されます。 |
| 形式 KD  | formKD | <i>Normalization Form Compatibility Decomposition (NFKD)</i> - 文字は互換等価性によって分解されます。               |

## ボリュームブロックサイズ

ボリュームブロックサイズプロパティは、LUN のネイティブブロックサイズを設定します。512 バイトから 1M までの 2 の累乗を指定でき、デフォルトは 8K です。

## 起点

これがクローンの場合は、クローンの作成元のスナップショットの名前になります。

## データ移行ソース

これを設定した場合、このファイルシステムはローカルで、または NFS を介して既存のファイルシステムのシャドウをアクティブに作成します。データ移行の詳細は、[435 ページの「シャドウ移行」](#)を参照してください。

## プロジェクトのプロパティ

注記 - CLI で、`get` コマンドを使用して、すべてのプロパティの一覧を表示します。

すべての子を一覧表示するには、`list` コマンドを使用します。

表 104 プロジェクトのプロパティー

| BUI の場所                      | BUI 名            | CLI 名             | プロパティータイプ | 説明                                                                               |
|------------------------------|------------------|-------------------|-----------|----------------------------------------------------------------------------------|
| プロジェクトの作成                    | 名前               | project           | 静的        | プロジェクトの名前を定義します。                                                                 |
|                              | 暗号化              | 暗号化               | 継承        | 暗号化タイプを定義します。                                                                    |
|                              | 鍵                | 鍵                 | 継承        | 特定のローカル鍵または OKM 鍵を設定します。                                                         |
|                              | 鍵名               | keyname           | 静的        | 鍵を識別します。                                                                         |
| 「一般」 - 「領域の使用」 - 「データ」       | 割り当て制限           | quota             | スペース管理    | 特定のエンティティーで消費できる領域の量に対する制限を設定します。                                                |
|                              | 予約               | reservation       | スペース管理    | 特定のエンティティーで消費できる領域の確保を表します。                                                      |
| 「一般」 - 「領域の使用」 - 「ユーザーとグループ」 | デフォルトのユーザー割り当て制限 | defaultuserquota  | スペース管理    | ユーザーが消費できる領域の量に対する制限を設定します。                                                      |
|                              | デフォルトのグループ割り当て制限 | defaultgroupquota | スペース管理    | グループが消費できる領域の量に対する制限を設定します。                                                      |
|                              | ユーザーとグループ        | ユーザー/グループ         | --        | ユーザーまたはグループあるいはその両方を指定します。                                                       |
|                              | 使用状況             | --                | スペース管理    | ユーザーまたはグループあるいはその両方が使用するデータの量を表示します。                                             |
| 「一般」 - 「継承されるプロパティー」         | マウントポイント         | mountpoint        | 継承        | ファイルシステムのエクスポートに使用されるパスを制御します。詳細は、 <a href="#">366 ページの「マウントポイント」</a> を参照してください。 |
|                              | 読み取り専用           | readonly          | 継承        | ファイルシステムの内容を読み取り専用にするかどうかを制御します。詳細                                               |

| BUI の場所 | BUI 名           | CLI 名          | プロパティタイプ | 説明                                                                                                     |
|---------|-----------------|----------------|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         |                 |                |          | は、 <a href="#">366 ページの「読み取り専用」</a> を参照してください。                                                         |
|         | 読み取り時のアクセス時間の更新 | atime          | 継承       | ファイルのアクセス時間を読み取り時に更新するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「読み取り時のアクセス時間の更新」</a> を参照してください。             |
|         | ブロック不可の必須ロック    | nbmand         | 継承       | SMB ロックのセマンティクスを POSIX セマンティクスよりも優先するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「ブロック不可の必須ロック」</a> を参照してください。 |
|         | データ複製解除 (警告)    | dedup          | 継承       | データの重複コピーを削除するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「データ複製解除」</a> を参照してください。                             |
|         | データ圧縮           | compression    | 継承       | ディスクに書き込む前にデータを圧縮するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">368 ページの「データ圧縮」</a> を参照してください。                          |
|         | チェックサム          | checksum       | 継承       | データブロックに使用するチェックサムを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「チェックサム」</a> を参照してください。                              |
|         | デバイス使用をキャッシュ    | secondarycache | 継承       | シェアにキャッシュデバイスを使用するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「デバイス使用をキャッシュ」</a> を参照してください。                    |

| BUI の場所 | BUI 名         | CLI 名      | プロパティタイプ | 説明                                                                                            |
|---------|---------------|------------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
|         | 同期書き込みバイアス    | logbias    | 継承       | 同期書き込みを処理するときの動作を制御します。詳細は、 <a href="#">370 ページの「同期書き込みバイアス」</a> を参照してください。                   |
|         | データベースレコードサイズ | recordsize | 継承       | ファイルシステムに格納するファイルの推奨ブロックサイズを指定します。詳細は、 <a href="#">371 ページの「データベースレコードサイズ」</a> を参照してください。     |
|         | 追加レプリケーション    | copies     | 継承       | ストレージプールの冗長性に加え、各ブロックのコピーをいくつ保存するかを制御します。詳細は、 <a href="#">372 ページの「追加レプリケーション」</a> を参照してください。 |
|         | ウイルススキャン      | vscan      | 継承       | ファイルシステムに対してウイルススキャンを行うかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">372 ページの「ウイルススキャン」</a> を参照してください。          |
|         | 破棄の防止         | nodestroy  | 継承       | シェアまたはプロジェクトが設定されるときに破棄されないようにします。詳細は、 <a href="#">372 ページの「破棄の防止」</a> を参照してください。             |
|         | 所有権の変更の制限     | rstchown   | 継承       | 所有権を制御し、ファイルシステムごとまたはプロジェクトごとにオフにできます。詳細は、 <a href="#">372 ページの「所有権の変更の制</a>                  |

プロジェクトのプロパティ

| BUI の場所                    | BUI 名        | CLI 名                | プロパティタイプ        | 説明                                                                                                           |
|----------------------------|--------------|----------------------|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                            |              |                      |                 | <a href="#">限</a> を参照してください。                                                                                 |
| 「一般」-「カスタムプロパティ」           | スキーマ         | custom               | --              | 必要に応じて追加して、ユーザー定義のタグをプロジェクトとシェアに添付できます。詳細は、 <a href="#">432 ページの「スキーマプロパティ」</a> を参照してください。                   |
| 「一般」-「デフォルトの設定」-「ファイルシステム」 | ユーザー         | default_user         | 作成のデフォルト        | ユーザー ID またはユーザー名を指定します。                                                                                      |
|                            | グループ         | default_group        | 作成のデフォルト        | グループ ID またはグループ名を指定します。                                                                                      |
|                            | アクセス権        | default_permissions  | 作成のデフォルト        | ファイルシステムのデフォルトのアクセス権を設定します。                                                                                  |
| 「一般」-「デフォルトの設定」-「LUN」      | ボリュームサイズ     | default_volsize      | LUN のみ、作成のデフォルト | 最大ボリュームサイズおよび測定単位を表示します。詳細は、 <a href="#">373 ページの「ボリュームサイズ」</a> を参照してください。                                   |
|                            | シンプロビジョニング済み | default_sparse       | LUN のみ、作成のデフォルト | 選択した場合、データによって物理的に消費される領域の量のみが指示されます。詳細は、 <a href="#">373 ページの「シンプロビジョニング済み」</a> を参照してください。                  |
|                            | ボリュームブロックサイズ | default_volblocksize | 作成のデフォルト        | LUN のネイティブブロックサイズを示し、512 バイトから 1M に設定できます (デフォルトは 8K)。詳細は、 <a href="#">373 ページの「ボリュームブロックサイズ」</a> を参照してください。 |
| 「プロトコル」-「NFS」              | NFS          | sharenfs             | 継承              | NFS プロトコルのプロパティ                                                                                              |

| BUI の場所                      | BUI 名  | CLI 名     | プロパティタイプ | 説明                                                                                                         |
|------------------------------|--------|-----------|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                              |        |           |          | 設定と値については、 <a href="#">410 ページの「NFS プロトコルのプロパティ」</a> に記載されています。                                            |
| 「プロトコル」 - 「NFS 例外」           |        |           |          | 全体的なシェアモードに対する例外は、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。詳細は、 <a href="#">411 ページの「NFS シェアモードの例外」</a> を参照してください   |
| 「プロトコル」 - 「SMB」              | SMB    | sharesmb  | 継承       | SMB プロトコルのプロパティ設定と値については、 <a href="#">416 ページの「SMB プロトコルのプロパティ」</a> に記載されています。                             |
| 「プロトコル」 - 「SMB 例外」           |        |           |          | 全体的なシェアモードに対する例外は、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。 <a href="#">418 ページの「SMB プロトコルのシェアモード例外」</a> を参照してください。 |
| 「プロトコル」 - 「HTTP」(プロジェクトから継承) | シェアモード | sharedav  | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。                                     |
| 「プロトコル」 - 「FTP」(プロジェクトから継承)  | シェアモード | shareftp  | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。                                     |
| 「プロトコル」 - 「SFTP」(プロジェクトから継承) | シェアモード | sharesftp | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。                                     |
| 「プロトコル」 - 「TFTP」(プロジェクトから継承) | シェアモード | sharetftp | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。                                                           |

プロジェクトのプロパティ

| BUI の場所               | BUI 名           | CLI 名         | プロパティタイプ | 説明                                                                              |
|-----------------------|-----------------|---------------|----------|---------------------------------------------------------------------------------|
|                       |                 |               |          | CLI では、「on」は「rw」の別名です。                                                          |
| アクセス                  | モード変更時の ACL 動作  | aclmode       | 継承       | モード変更リクエストが既存の ACL と対話する方法を制御します。                                               |
|                       | ACL 継承動作        | aclinherit    | 継承       | 新しいファイルまたはディレクトリが既存の ACL 設定を親ディレクトリから継承する方法を制御します。                              |
| 「スナップショット」-「プロパティ」    | .zfs/スナップショット表示 | snapdir       | 継承       | ファイルシステムのルートの .zfs/snapshot にあるファイルシステムのスナップショットにデータプロトコルを介してアクセスできるかどうかを制御します。 |
|                       | 定期スナップショットラベル   | snaplabel     | 継承       | ユーザー定義のラベルを各定期スナップショットに追加し、デフォルトは空白です。                                          |
| 「スナップショット」-「スナップショット」 | 名前              | snapshot name | --       | スナップショットの名前を指定します。                                                              |
|                       | 作成              | creation      | --       | スナップショットが作成される日時を指定します。                                                         |
|                       | 一意              | space_unique  | --       | スナップショットで使用されている一意の領域の量を指示します。                                                  |
|                       | 合計              | space_data    | --       | スナップショットで参照されている領域の合計量を指示します。                                                   |
| 「スナップショット」-「スケジュール」   | 頻度              | frequency     | 作成時間     | スナップショットを作成する頻度を指示します。                                                          |
|                       | 最大保持時間          | keep          | 作成時間     | スナップショットの保持ポリシーを制御します。                                                          |
| 「レプリケーション」(プロジェクト)    | ターゲット           | target        | 継承       | レプリケーションのターゲットシ                                                                 |



| BUI の場所          | BUI 名                    | CLI 名                       | プロパティタイプ | 説明                                                                             |
|------------------|--------------------------|-----------------------------|----------|--------------------------------------------------------------------------------|
| から継承)新しいアクションの作成 |                          |                             |          | ステムを識別します。                                                                     |
|                  | プール                      | pool                        | 継承       | プロジェクトのレプリケーション先となるターゲット上のストレージプールを指定します。                                      |
|                  | エクスポートデータパス              | export_path                 | 継承       | エクスポートデータパスを指示します。                                                             |
|                  | 帯域幅の制限                   | max_bandwidth               | 継承       | このレプリケーション更新の最大速度を指定します (ネットワーク上で 1 秒あたりに転送されるデータ量で表す)。                        |
|                  | SSL 暗号化を有効化              | use_ssl                     | 継承       | SSL を使用してワイヤ上でデータを暗号化するかどうかを制御します。                                             |
|                  | 圧縮の無効化                   | --                          | 継承       | 圧縮を有効にするか無効にするかを制御します。                                                         |
|                  | スナップショットを含める             | include_snaps               | 継承       | レプリケーションの更新にレプリケーション以外のスナップショットを含めるかどうかを制御します。                                 |
|                  | ターゲットでユーザーのスナップショットを保持する | retain_user_snaps_on_target | 継承       | 設定した場合、ターゲットアプリケーション上にあるユーザー生成のスナップショットを保持します。無効化されるまでターゲット上のスナップショットを保持し続けます。 |
|                  | 更新頻度                     | continuous                  | 継承       | このアクションが連続してレプリケートされるか、手動でレプリケートされるか、定期的にレプリケートされるかを制御します。                     |

## ファイルシステムのプロパティ

注記 - CLI で、`get` コマンドを使用して、すべてのプロパティの一覧を表示します。

表 105 ファイルシステムのプロパティ

| BUI の場所     | BUI 名                               | CLI 名                            | プロパティタイプ     | 説明                                                                               |
|-------------|-------------------------------------|----------------------------------|--------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| ファイルシステムを作成 | プロジェクト                              | <code>select project_name</code> | --           | ファイルシステムがパラメータ設定を継承するために使用するプロジェクトを定義します。デフォルトのプロジェクトを選択することもできます。               |
|             | 名前                                  | <code>filesystem</code>          | --           | ファイルシステムの名前を定義します。                                                               |
|             | データ移行ソース                            | <code>shadow</code>              | 作成時間         | データを移行する場合のソースの場所を表示します。                                                         |
|             | ユーザー                                | <code>root-user</code>           | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリの所有者を指定します。                                                             |
|             | グループ                                | <code>root_group</code>          | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリのグループを指定します。                                                            |
|             | 「アクセス権」または「Windows のデフォルトのアクセス権を使用」 | <code>root_permission</code>     | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリに対する標準の UNIX アクセス権または Windows のデフォルトのアクセス権を指定します。                       |
|             | マウントポイントを継承                         | --                               | --           | 選択した場合、マウントポイントが継承されることを指示します。                                                   |
|             | マウントポイント                            | <code>mountpoint</code>          | 継承           | ファイルシステムのエクスポートに使用されるパスを制御します。詳細は、 <a href="#">366 ページの「マウントポイント」</a> を参照してください。 |
|             | 非 UTF-8 を拒否                         | <code>utf8only</code>            | 作成時間         | すべてのファイルシステムおよ                                                                   |

| BUI の場所                | BUI 名          | CLI 名           | プロパティタイプ | 説明                                                                                               |
|------------------------|----------------|-----------------|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                        |                |                 |          | びディレクトリに対して UTF-8 エンコーディングを強制的に適用します。詳細は、 <a href="#">377 ページの「非 UTF-8 を拒否」</a> を参照してください。       |
|                        | 大文字と小文字の<br>区別 | casesensitivity | 作成時間     | ディレクトリ検索で大文字と小文字を区別するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">376 ページの「大文字と小文字の区別」</a> を参照してください。             |
|                        | 正規化            | normalization   | 作成時間     | ファイルシステムおよびディレクトリで実行される Unicode 正規化がある場合に、それを制御します。詳細は、 <a href="#">377 ページの「正規化」</a> を参照してください。 |
|                        | 暗号化            | 暗号化             | 継承       | 暗号化タイプを定義します。詳細は、 <a href="#">589 ページの「暗号化鍵の管理」</a> を参照してください。                                   |
|                        | 鍵を継承する         | --              | --       | 選択した場合、暗号化鍵が親プロジェクトから継承されることを指示します。                                                              |
|                        | 鍵              | 鍵               | 継承       | 特定のローカル鍵または OKM 鍵を設定し、鍵が親プロジェクトから継承されない場合に使用されます。                                                |
|                        | 鍵名             | keyname         | 静的       | 鍵を識別します。                                                                                         |
| 「一般」 - 「領域の使用」 - 「データ」 | 割り当て制限         | quota           | スペース管理   | 特定のエンティティで消費できる領域の量に対す                                                                           |

| BUI の場所                              | BUI 名                       | CLI 名            | プロパティタイプ | 説明                                                                                                             |
|--------------------------------------|-----------------------------|------------------|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                      |                             |                  |          | る制限を設定し<br>ます。                                                                                                 |
|                                      | 割り当て制限/ス<br>ナップショットを<br>含める | quota_snap       | スペース管理   | スナップショット<br>を含む特定のエン<br>ティティで消費<br>できる領域の量に<br>対する制限を設定<br>します。                                                |
|                                      | 予約                          | reservation      | スペース管理   | 特定のエンティ<br>ティで消費でき<br>る領域の確保を表<br>します。                                                                         |
|                                      | 予約/スナップ<br>ショットを含める         | reservation_snap | スペース管理   | スナップショット<br>を含む特定のエン<br>ティティで消費<br>できる領域の確保<br>を表します。                                                          |
| 「一般」 - 「領域の<br>使用」 - 「ユーザー<br>とグループ」 | ユーザーとグルー<br>プ               | --               | --       | ユーザーまたはグ<br>ループあるいはそ<br>の両方を指定しま<br>す。                                                                         |
|                                      | 使用状況                        | --               | --       | ユーザーまたはグ<br>ループあるいはそ<br>の両方が使用する<br>データの量を表示<br>します。                                                           |
|                                      | 割り当て制限                      | quota            | スペース管理   | 特定のエンティ<br>ティで消費でき<br>る領域の量に対す<br>る制限を設定しま<br>す。                                                               |
| 「一般」 - 「プロパ<br>ティ」 (プロジェ<br>クトから継承)  | マウントポイント                    | mountpoint       | 継承       | ファイルシステ<br>ムのエクスポートに<br>使用されるパスを<br>制御します。詳細<br>は、 <a href="#">366 ページの「マ<br/>ウントポイン<br/>ト」</a> を参照してく<br>ださい。 |
|                                      | 読み取り専用                      | readonly         | 継承       | ファイルシス<br>テムの内容を読<br>み取り専用にす<br>るかどうかを制<br>御します。詳細<br>は、 <a href="#">366 ページの「読<br/>み取り専用」</a> を参<br>照してください。  |
|                                      | 読み取り時のアク<br>セス時間の更新         | atime            | 継承       | ファイルのアク<br>セス時間を読み<br>取り時に更新す<br>るかどうかを制                                                                       |

| BUI の場所 | BUI 名        | CLI 名          | プロパティタイプ | 説明                                                                                                     |
|---------|--------------|----------------|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         |              |                |          | 御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「読み取り時のアクセス時間の更新」</a> を参照してください。                                         |
|         | ブロック不可の必須ロック | nbmand         | 継承       | SMB ロックのセマンティクスを POSIX セマンティクスよりも優先するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「ブロック不可の必須ロック」</a> を参照してください。 |
|         | データ複製解除 (警告) | dedup          | 継承       | データの重複コピーを削除するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「データ複製解除」</a> を参照してください。                             |
|         | データ圧縮        | compression    | 継承       | ディスクに書き込む前にデータを圧縮するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">368 ページの「データ圧縮」</a> を参照してください。                          |
|         | チェックサム       | checksum       | 継承       | データブロックに使用するチェックサムを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「チェックサム」</a> を参照してください。                              |
|         | デバイス使用をキャッシュ | secondarycache | 継承       | シェアにキャッシュデバイスを使用するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「デバイス使用をキャッシュ」</a> を参照してください。                    |
|         | 同期書き込みパイアス   | logbias        | 継承       | 同期書き込みを処理するときの動作を制御します。詳細は、 <a href="#">370 ページの「同期書き込みパイアス」</a> を参照してください。                            |

| BUI の場所 | BUI 名                           | CLI 名      | プロパティタイプ | 説明                                                                                            |
|---------|---------------------------------|------------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
|         |                                 |            |          | ス」を参照してください。                                                                                  |
|         | データベースレコードサイズ                   | recordsize | 継承       | ファイルシステムに格納するファイルの推奨ブロックサイズを指定します。詳細は、 <a href="#">371 ページの「データベースレコードサイズ」</a> を参照してください。     |
|         | 追加レプリケーション                      | copies     | 継承       | ストレージプールの冗長性に加え、各ブロックのコピーをいくつ保存するかを制御します。詳細は、 <a href="#">372 ページの「追加レプリケーション」</a> を参照してください。 |
|         | ウイルススキャン                        | vscan      | 継承       | ファイルシステムに対してウイルススキャンを行うかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">372 ページの「ウイルススキャン」</a> を参照してください。          |
|         | 破棄の防止                           | nodestroy  | 継承       | シェアまたはプロジェクトが設定されるときに破棄されないようにします。詳細は、 <a href="#">372 ページの「破棄の防止」</a> を参照してください。             |
|         | 所有権の変更の制限                       | rstchown   | 継承       | 所有権を制御し、ファイルシステムごとまたはプロジェクトごとにオフにできます。詳細は、 <a href="#">372 ページの「所有権の変更の制限」</a> を参照してください。     |
|         | 「一般」 - 「カスタムプロパティ」 (プロジェクトから継承) | -- custom  | --       | 必要に応じてカスタムプロパティを追加して、ユーザー定義のタグを                                                               |

| BUIの場所                       | BUI名                                                                                                       | CLI名     | プロパティタイプ | 説明                                                                             |
|------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|----------|--------------------------------------------------------------------------------|
|                              |                                                                                                            |          |          | プロジェクトとシェアに添付できます。                                                             |
| 「プロトコル」 - 「NFS」              | NFS                                                                                                        | sharenfs | 継承       | NFS プロトコルのプロパティ設定と値については、 <a href="#">410 ページの「NFS プロトコルのプロパティ」</a> に記載されています。 |
| 「プロトコル」 - 「NFS 例外」           | 全体的なシェアモードに対する例外は、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。詳細は、 <a href="#">411 ページの「NFS シェアモードの例外」</a> を参照してください   |          |          |                                                                                |
| 「プロトコル」 - 「SMB」              | SMB                                                                                                        | sharesmb | 継承       | SMB プロトコルのプロパティ設定と値については、 <a href="#">416 ページの「SMB プロトコルのプロパティ」</a> に記載されています。 |
| 「プロトコル」 - 「SMB 例外」           | 全体的なシェアモードに対する例外は、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。 <a href="#">418 ページの「SMB プロトコルのシェアモード例外」</a> を参照してください。 |          |          |                                                                                |
| 「プロトコル」 - 「シェアレベル ACL」       | タイプ                                                                                                        | --       | --       | ACL のタイプを指示します。                                                                |
|                              | ターゲット                                                                                                      | --       | --       | ACL のターゲットを指示します。                                                              |
|                              | アクセス                                                                                                       | --       | --       | ACL アクセスが許可または拒否されるかを指示します。                                                    |
|                              | アクセス権:継承                                                                                                   | --       | --       | ACL に対する標準の UNIX アクセス権を指定します。                                                  |
| 「プロトコル」 - 「HTTP」(プロジェクトから継承) | シェアモード                                                                                                     | sharedav | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。         |
| 「プロトコル」 - 「FTP」(プロジェクトから継承)  | シェアモード                                                                                                     | shareftp | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」                    |

| BUI の場所                        | BUI 名          | CLI 名            | プロパティタイプ     | 説明                                                                     |
|--------------------------------|----------------|------------------|--------------|------------------------------------------------------------------------|
|                                |                |                  |              | は「rw」の別名です。                                                            |
| 「プロトコル」 - 「SFTP」(プロジェクトから継承)   | シェアモード         | sharesftp        | 継承           | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。 |
| 「プロトコル」 - 「TFTP」(プロジェクトから継承)   | シェアモード         | sharetfoot       | 継承           | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。CLI では、「on」は「rw」の別名です。 |
| 「アクセス」 - 「ルートディレクトリアクセス」       | ユーザー           | root_user        | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリの所有者を指定します。                                                   |
|                                | グループ           | root_group       | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリのグループを指定します。                                                  |
|                                | アクセス権          | root_permissions | ファイルシステムローカル | ルートディレクトリに対する標準の UNIX アクセス権を指定します。                                     |
| 「アクセス」 - 「ACL の動作」(プロジェクトから継承) | モード変更時の ACL 動作 | aclmode          | 継承           | モード変更リクエストが既存の ACL と対話する方法を制御します。                                      |
|                                | ACL 継承動作       | aclinherit       | 継承           | 新しいファイルまたはディレクトリが既存の ACL 設定を親ディレクトリから継承する方法を制御します。                     |
| 「アクセス」 - 「ルートディレクトリ ACL」       | タイプ            | --               | --           | ACL のタイプを指示します。                                                        |
|                                | ターゲット          | --               | --           | ACL のターゲットを指示します。                                                      |
|                                | アクセス           | --               | --           | ACL アクセスが許可または拒否されるかを指示します。                                            |



| BUI の場所                        | BUI 名           | CLI 名     | プロパティタイプ | 説明                                                                                                                                 |
|--------------------------------|-----------------|-----------|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                | アクセス権:継承        | --        | --       | ACL に対する標準の UNIX アクセス権を指定します。                                                                                                      |
| 「スナップショット」-「プロパティ」(プロジェクトから継承) | .zfs/スナップショット表示 | snapdir   | 継承       | ファイルシステムのルートの .zfs/snapshot にあるファイルシステムのスナップショットにデータプロトコルを介してアクセスできるかどうかを制御します。                                                    |
|                                | 定期スナップショットラベル   | snaplabel | 継承       | ユーザー定義のラベルを各定期スナップショットに追加し、デフォルトは空白です。                                                                                             |
| 「スナップショット」-「スナップショット」          | 名前              | --        | --       | スナップショットの名前を指定します。                                                                                                                 |
|                                | 作成              | --        | --       | スナップショットが作成される日時を指定します。                                                                                                            |
|                                | 一意              | --        | --       | スナップショットで使用されている一意の領域の量を指示します。                                                                                                     |
|                                | 合計              | --        | --       | スナップショットで参照されている領域の合計量を指示します。これは、スナップショットが作成された時点のファイルシステムのサイズを表します。データブロックは書き換えられるため、どのスナップショットも理論上はこの合計サイズに等しい量の領域を使用する可能性があります。 |
|                                | クローン            | --        | --       | スナップショットのクローンの数を示します。                                                                                                              |
| 「スナップショット」-「スケジュール」            | 頻度              | frequency | 作成時間     | スナップショットを作成する頻度を指示します。                                                                                                             |

| BUI の場所                            | BUI 名                    | CLI 名                       | プロパティタイプ | 説明                                                                            |
|------------------------------------|--------------------------|-----------------------------|----------|-------------------------------------------------------------------------------|
|                                    | 最大保持時間                   | keep                        | 作成時間     | スナップショットの保持ポリシーを制御します。                                                        |
| 「レプリケーション」(プロジェクトから継承)/新しいアクションの作成 | ターゲット                    | target                      | 継承       | レプリケーションのターゲットシステムを識別します。                                                     |
|                                    | プール                      | pool                        | 継承       | プロジェクトのレプリケーション先となるターゲット上のストレージプールを指定します。                                     |
|                                    | エクスポートデータパス              | export_path                 | 継承       | エクスポートデータを指示します。                                                              |
|                                    | 帯域幅の制限                   | max_bandwidth               | 継承       | このレプリケーション更新の最大速度を指定します(ネットワーク上で1秒あたりに転送されるデータ量で表す)。                          |
|                                    | SSL 暗号化を有効化              | use_ssl                     | 継承       | SSL を使用してワイヤ上でデータを暗号化するかどうかを制御します。                                            |
|                                    | 圧縮の無効化                   | compression                 | 継承       | 圧縮を有効にするか無効にするかを制御します。                                                        |
|                                    | スナップショットを含める             | include_snaps               | 継承       | レプリケーションの更新にレプリケーション以外のスナップショットを含めるかどうかを制御します。                                |
|                                    | ターゲットでユーザーのスナップショットを保持する | retain_user_snaps_on_target | 継承       | 設定した場合、ターゲットアプライアンス上にあるユーザー生成のスナップショットを保持します。無効化されるまでターゲット上のスナップショットを保持し続けます。 |
|                                    | 更新頻度                     | continuous                  | 継承       | このアクションが連続してレプリケートされるか、手動でレプリケー                                               |

| BUI の場所 | BUI 名       | CLI 名            | プロパティタイプ | 説明                                              |
|---------|-------------|------------------|----------|-------------------------------------------------|
|         |             |                  |          | トされるか、定期的にレプリケートされるかを制御します。                     |
| 使用状況    | 参照されているデータ  | space_data       | 読み取り専用   | スナップショットとは関係なく、アクティブなシェアによって参照されている領域の合計量を示します。 |
|         | 未使用予約       | space_unused_res | 読み取り専用   | ファイルシステム用に予約されている領域の残りの量を表示します。                 |
|         | スナップショットデータ | space_snapshots  | 読み取り専用   | シェアのすべてのスナップショットによって現在保持されているデータの合計量を示します。      |
|         | 使用可能なデータ    | space_available  | 読み取り専用   | シェアまたはプロジェクト上のすべての割り当て制限、またはプールの絶対容量を反映します。     |
|         | 合計領域        | space_total      | 読み取り専用   | 参照データ、スナップショットデータ、および未使用予約の合計を示します。             |

## LUN プロパティ

注記 - CLI で、get コマンドを使用して、すべてのプロパティの一覧を表示します。

表 106 LUN プロパティ

| BUI の場所 | BUI 名  | CLI 名 | プロパティタイプ | 説明                                    |
|---------|--------|-------|----------|---------------------------------------|
| LUN を作成 | プロジェクト | --    | --       | LUN がパラメータ設定を継承するために使用するプロジェクトを定義します。 |
|         | 名前     | --    | --       | LUN の名前を定義します。                        |

| BUI の場所 | BUI 名        | CLI 名          | プロパティタイプ | 説明                                                                                          |
|---------|--------------|----------------|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
|         | ボリュームサイズ     | volsize        | LUN ローカル | 最大ボリュームサイズおよび測定単位を定義します。詳細は、 <a href="#">373 ページの「ボリュームサイズ」</a> を参照してください。                  |
|         | シンプロビジョニング済み | sparse         | LUN ローカル | 選択した場合、データによって物理的に消費される領域の量のみが指示されます。詳細は、 <a href="#">373 ページの「シンプロビジョニング済み」</a> を参照してください。 |
|         | ボリュームブロックサイズ | volblocksize   | 作成時間     | LUN のネイティブブロックサイズで、512 バイトから 1M までの 2 の累乗を指定でき、デフォルトは 8K です。                                |
|         | オンライン        | status         | LUN ローカル | オンラインかどうかを示します。                                                                             |
|         | ターゲットグループ    | targetgroup    | LUN ローカル | LUN をエクスポートするときに使用されるターゲットのグループを示します。                                                       |
|         | イニシエータグループ   | initiatorgroup | LUN ローカル | LUN にアクセスできるイニシエータのグループを示します。                                                               |
|         | マウントポイント     | mountpoint     | 継承       | ファイルシステムのエクスポートに使用されるパスを制御します。詳細は、 <a href="#">366 ページの「マウントポイント」</a> を参照してください。            |
|         | LU 番号        | lunumber       | LUN ローカル | 論理ユニット番号を 0 に設定するか、または番号を自動的に割り当てます。                                                        |
|         | 暗号化          | 暗号化            | 継承       | 暗号化タイプを定義します。                                                                               |

| BUI の場所                     | BUI 名        | CLI 名       | プロパティタイプ        | 説明                                                                                          |
|-----------------------------|--------------|-------------|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
|                             | 鍵を継承する       | --          | --              | 選択した場合、暗号化鍵が親プロジェクトから継承されることを指示します。詳細は、 <a href="#">589 ページの「暗号化鍵の管理」</a> を参照してください。        |
|                             | 鍵            | 鍵           | 継承              | 特定のローカル鍵または OKM 鍵を設定し、鍵が親プロジェクトから継承されない場合に使用されます。                                           |
|                             | 鍵名           | keyname     | 静的              | 鍵を識別します。                                                                                    |
|                             | GUID         | lunguid     | 読み取り専用、LUN ローカル | SCSI デバイスを識別する、グローバルに一意的読み取り専用識別子です。                                                        |
| 「一般」 - 「領域の使用」 - 「データ」      | ボリュームサイズ     | volsize     | LUN ローカル        | 最大ボリュームサイズおよび測定単位を定義します。詳細は、 <a href="#">373 ページの「ボリュームサイズ」</a> を参照してください。                  |
|                             | シンプロビジョニング済み | sparse      | LUN ローカル        | 選択した場合、データによって物理的に消費される領域の量のみが指示されます。詳細は、 <a href="#">373 ページの「シンプロビジョニング済み」</a> を参照してください。 |
| 「一般」 - 「プロパティ」 (プロジェクトから継承) | データ複製解除 (警告) | dedup       | 継承              | データの重複コピーを削除するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">367 ページの「データ複製解除」</a> を参照してください。                  |
|                             | データ圧縮        | compression | 継承              | ディスクに書き込む前にデータを圧縮するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">368 ページの「デ</a>                               |

| BUI の場所               | BUI 名        | CLI 名          | プロパティタイプ | 説明                                                                                            |
|-----------------------|--------------|----------------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
|                       |              |                |          | <a href="#">タ圧縮</a> を参照してください。                                                                |
|                       | チェックサム       | checksum       | 継承       | データブロックに使用するチェックサムを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「チェックサム」</a> を参照してください。                     |
|                       | 追加レプリケーション   | copies         | 継承       | ストレージプールの冗長性に加え、各ブロックのコピーをいくつ保存するかを制御します。詳細は、 <a href="#">372 ページの「追加レプリケーション」</a> を参照してください。 |
|                       | デバイス使用をキャッシュ | secondarycache | 継承       | シェアにキャッシュデバイスを使用するかどうかを制御します。詳細は、 <a href="#">369 ページの「デバイス使用をキャッシュ」</a> を参照してください。           |
|                       | 同期書き込みバイアス   | logbias        | 継承       | 同期書き込みを処理するときの動作を制御します。詳細は、 <a href="#">370 ページの「同期書き込みバイアス」</a> を参照してください。                   |
|                       | 破棄の防止        | nodestroy      | 継承       | シェアまたはプロジェクトが設定されるときに破棄されないようにします。詳細は、 <a href="#">372 ページの「破棄の防止」</a> を参照してください。             |
| カスタムプロパティ(プロジェクトから継承) | スキーマ         | schema         | --       | 必要に応じて追加して、ユーザー定義のタグをプロジェクトとシェアに添付できます。詳細は、 <a href="#">430 ページの「スキーマの操作」</a> を               |

| BUI の場所                           | BUI 名             | CLI 名          | プロパティタイプ | 説明                                     |
|-----------------------------------|-------------------|----------------|----------|----------------------------------------|
| 「プロトコル」<br>- 「共有オプション」            | オンライン             | status         | LUN ローカル | 参照してください。                              |
|                                   | ターゲットグループ         | targetgroup    | LUN ローカル | オンラインかどうかを示します。                        |
|                                   | イニシエータグループ: LU 番号 | initiatorgroup | LUN ローカル | LUN をエクスポートするときに使用されるターゲットのグループを示します。  |
| 「プロトコル」 - 「書き込みキャッシュ動作」           | 書き込みキャッシュ有効       | writocache     | LUN ローカル | LUN にアクセスできるイニシエータのグループを示します。          |
| 「スナップショット」 - 「プロパティ」 (プロジェクトから継承) | 定期スナップショットラベル     | snaplabel      | 継承       | LUN で書き込みをキャッシュするかどうかを制御します。           |
| 「スナップショット」 - 「スナップショット」           | 名前                | --             | --       | ユーザー定義のラベルを各定期スナップショットに追加し、デフォルトは空白です。 |
|                                   | 作成                | --             | --       | スナップショットの名前を指定します。                     |
|                                   | 一意                | --             | --       | スナップショットが作成される日時を指定します。                |
|                                   | 合計                | --             | --       | スナップショットで使用されている一意の領域の量を指示します。         |
|                                   | クローン              | --             | --       | スナップショットで参照されている領域の合計量を指示します。          |
| 「スナップショット」 - 「スケジュール」             | 頻度                | frequency      | 作成時間     | スナップショットのクローンの数を示します。                  |
|                                   | 最大保持時間            | keep           | 作成時間     | スナップショットを作成する頻度を指示します。                 |
| 「レプリケーション」 (プロジェクト)               | ターゲット             | target         | 継承       | スナップショットの保持ポリシーを制御します。                 |
|                                   |                   |                |          | レプリケーションのターゲットシ                        |

| BUI の場所          | BUI 名                    | CLI 名                       | プロパティタイプ | 説明                                                         |
|------------------|--------------------------|-----------------------------|----------|------------------------------------------------------------|
| から継承)新しいアクションの作成 |                          |                             |          | システムを識別します。                                                |
|                  | プール                      | pool                        | 継承       | プロジェクトのレプリケーション先となるターゲット上のストレージプールを指定します。                  |
|                  | エクスポートデータパス              | export_path                 | 継承       | エクスポートデータパスを指示します。                                         |
|                  | 帯域幅の制限                   | max_bandwidth               | 継承       | このレプリケーション更新の最大速度を指定します (ネットワーク上で 1 秒あたりに転送されるデータ量で表す)。    |
|                  | SSL 暗号化を有効化              | use_ssl                     | 継承       | SSL を使用してワイヤ上でデータを暗号化するかどうかを制御します。                         |
|                  | 圧縮の無効化                   | compression                 | 継承       | 圧縮を有効にするか無効にするかを制御します。                                     |
|                  | スナップショットを含める             | include_snaps               | 継承       | レプリケーションの更新にレプリケーション以外のスナップショットを含めるかどうかを制御します。             |
|                  | ターゲットでユーザーのスナップショットを保持する | retain_user_snaps_on_target | 継承       | 設定した場合、ターゲットアプライアンス上にあるユーザー生成のスナップショットを保持します。              |
|                  | 更新頻度                     | continuous                  | 継承       | このアクションが連続してレプリケートされるか、手動でレプリケートされるか、定期的なレプリケートされるかを制御します。 |
| 使用状況             | 参照されているデータ               | space_data                  | 読み取り専用   | スナップショットとは関係なく、アクティブなシェアによって参照され                           |



| BUI の場所 | BUI 名       | CLI 名           | プロパティタイプ | 説明                                          |
|---------|-------------|-----------------|----------|---------------------------------------------|
|         |             |                 |          | ている領域の合計量を示します。                             |
|         | スナップショットデータ | space_snapshots | 読み取り専用   | シェアのすべてのスナップショットによって現在保持されているデータの合計量を示します。  |
|         | 使用可能なデータ    | space_available | 読み取り専用   | シェアまたはプロジェクト上のすべての割り当て制限、またはプールの絶対容量を反映します。 |
|         | 合計領域        | space_total     | 読み取り専用   | 参照データ、スナップショットデータ、および未使用予約の合計を示します。         |

## シェアの領域管理

Oracle ZFS Storage Appliance は、共通の領域をすべてのファイルシステムと LUN でシェアする、プールされたストレージモデルを使用して物理ストレージを管理します。ファイルシステムには明示的なサイズが割り当てられることはなく、ファイルシステムで必要とされる大きさの領域が使用されるだけです。LUN では、シンプロビジョニングされないかぎり、デバイスの内容全体を書き込むのに十分な物理領域が予約されます。シンプロビジョニングされる場合、LUN はファイルシステムのように機能し、データによって物理的に消費される領域の量のみを使用します。

ユーザーが適切な操作を行なっている場合、このシステムでは環境内での管理の柔軟性と簡易性が最大限に発揮されます。ユーザーのデータ使用量がモニターまたは制限される厳格な環境では、より注意深い管理が必要です。

これらのトピックでは、用語を定義し、割り当て制限と予約を使用してシェアごとまたはユーザーごとに領域の使用を管理する方法を定義します。

- [402 ページの「シェアの用語」](#)
- [402 ページの「ファイルシステムとプロジェクト領域の管理」](#)
- [404 ページの「ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定」](#)
- [405 ページの「アイデンティティ管理の操作」](#)
- [407 ページの「シェアの使用状況統計」](#)

## シェアの用語

詳細に進む前に、アプライアンスでの領域使用状況について説明する際に使われるいくつかの基本用語を理解することが重要です。

- **物理データ** - ディスク上に物理的に格納されるデータのサイズです。通常、対応するデータの論理サイズに等しくなりますが、圧縮またはほかの要因によってサイズが異なる場合があります。これには、アクティブなシェアやすべてのスナップショットの領域が含まれます。通常、領域の計算は物理領域に基づいて強制的に適用され、管理されます。
- **論理データ** - ファイルシステムによって論理的に消費される領域の量です。圧縮は考慮されず、ファイルシステムによって消費される領域の量の理論的な上限として表示できます。異なる圧縮アルゴリズムを使用してファイルシステムを別のアプライアンスにコピーすると、消費量がこの量よりも少なくなります。この統計は明示的にエクスポートされず、通常は、消費される物理領域の量を測定し、現在の圧縮率を掛け合わせる方法でのみ算出できます。
- **参照データ** - スナップショットとは関係なく、アクティブなシェアによって参照されている領域の合計量を表します。これは、すべてのスナップショットが破棄された場合にシェアによって消費される領域の量です。また、ユーザーがデータプロトコルを介して直接管理できるデータの量でもあります。
- **スナップショットデータ** - シェアのすべてのスナップショットによって現在保持されているデータの合計量を表します。これは、すべてのスナップショットが破棄された場合に解放される領域の量です。
- **割り当て制限** - 割り当て制限は、特定のエンティティで消費できる領域の量に対する制限を表します。ファイルシステム、プロジェクト、ユーザー、またはグループに基づいて設定でき、現在の領域使用状況には依存しません。
- **予約** - 予約は、特定のプロジェクトまたはファイルシステム用の領域の確保を表しています。ファイルシステムによって消費される実際の領域を増やさずに、プールの残りから使用可能領域を確保します。この設定は、ユーザーやグループには適用できません。従来のような、静的なファイルシステムのサイズ変更は、割り当て制限と予約を同じ値に設定することで実現できます。

## ファイルシステムとプロジェクト領域の管理

割り当て制限と予約を強制するもっとも簡単な方法は、プロジェクトまたはファイルシステムごとにそれを行うことです。割り当て制限と予約は LUN には適用されませんが、それらの使用状況はプロジェクトの割り当て制限または予約の合計の中で表示されます。

**データの割り当て制限** - データの割り当て制限は、ファイルシステムまたはプロジェクトが使用できる領域の量に対して制限を強制します。デフォルトでは、これには

ファイルシステム内のデータおよびすべてのスナップショットが含まれます。新しいデータの書き込みを試みているクライアントでは、ファイルシステムがいっぱいになるとエラーが発生しますが、これは割り当て制限のためか、またはストレージプールの領域不足のためです。447 ページの「スナップショットの領域管理」で説明しているように、この動作は、特にスナップショットを使用している状況では理解しにくいことがあります。データブロックがスナップショットによって参照される場合、ファイルを削除するとファイルシステムによって新しいデータが書き込まれる可能性があります。このため、領域使用量を減少させる唯一の方法が既存のスナップショットを破棄することになる場合があります。

「スナップショットを含める」プロパティを設定しない場合、割り当て制限はファイルシステムによって参照される即時データにのみ適用され、スナップショットには適用されません。スナップショットで使用される領域はプロジェクトレベルの割り当て制限によって強制的に設定されますが、それ以外の場合には設定されません。この状況では、スナップショットによって参照されるファイルを削除すると、システムが全体として使用している領域が増えても、ファイルシステムで参照されるデータは減少します。(ファイルシステムが事前設定の割り当て制限に到達した場合とは対照的に) ストレージプールがいっぱいになった場合、領域を解放する唯一の方法がスナップショットを破棄することになる場合があります。

データの割り当て制限は厳格に強制されます。つまり、書き込みが認識されるまで正確なデータの書き込み量がわからないため、領域使用量が限界に近づいたときに、書き込めるデータ量を調整する必要があります。割り当て制限に到達したか、またはそれに近づいた状態で操作すると、パフォーマンスに影響する可能性があります。このため、一般的には、通常の操作手順の実行中には割り当て制限を下回ったままになるようにすることをお勧めします。

BUI で割り当て制限を管理するには、「シェア」>「一般」>「領域の使用」>「データ」に移動します。CLI で管理するには、`quota` および `quota_snap` プロパティを使用します。

**データの予約** - データの予約は、システム内のほかのシェアがより多くの領域を使用しようとしている場合でも、ファイルシステムまたはプロジェクトに少なくとも一定量の使用可能な領域を確保するために使用します。この未使用の予約はファイルシステムの一部とみなされるため、プール (またはプロジェクト) の残りが容量に達した場合、ほかのシェアが領域不足になってもファイルシステムでは引き続き新しいデータを書き込むことができます。

デフォルトでは、予約にはファイルシステムのすべてのスナップショットが含まれます。「スナップショットを含める」プロパティを設定しない場合、予約はファイルシステムの即時データにのみ適用されます。スナップショット取得時の動作は理解しにくいことがあります。(スナップショットではなく) ファイルシステムデータに対する予約が有効な場合、スナップショットを取得するときは必ず、たとえそうなることなくとも、そのスナップショットが完全に分岐するのに十分な領域をシステムで予約する必要があります。たとえば、スナップショットのない 50G のファイルシステムで 100G を予約している場合、最初のスナップショットの取得で 50G の追加領域が予

約され、最終的にはこのファイルシステムで合計 150G の領域が予約されます。データの完全な分岐を保證できるだけの十分な領域がない場合、スナップショットの取得は失敗します。

BUI で予約を管理するには、「シェア」>「一般」>「領域の使用」>「データ」に移動します。CLI で管理するには、reservation および reservation\_snap プロパティを使用します。

**LUN のレプリケーションのための領域管理** - LUN を作成すると、(シンプロビジョニングされないかぎり) その LUN 用に構成した十分な物理領域が予約され、ほかのファイルシステムでは使用できません。レプリケーションでは、任意のサイズの LUN のスナップショットを取る場合、使用された LUN 領域の大きさに応じて、最大で LUN の 2 倍のサイズの領域も予約されます。

次のリストに、LUN のレプリケート時に必要な最大オーバーヘッド領域を示します。

- 更新と更新の合間のソースでは最大 100%
- 更新中のソースでは最大 200%
- ターゲットでは最大 200%

## ユーザーまたはグループ割り当て制限の設定

割り当て制限は、ファイルシステムレベルに加え、プロジェクトレベルでもユーザーまたはグループに設定できます。これにより、ファイルやディレクトリの所有者またはグループの posix または windows アイデンティティに基づいて、強制的に物理データが使用されます。ユーザーとグループの割り当て制限、およびファイルシステムとプロジェクトデータの割り当て制限との間には、いくつかの大きな相違点があります。

- ユーザーとグループの割り当て制限はファイルシステムおよびプロジェクトにのみ適用できます。
- デフォルトの割り当て制限はプロジェクトレベルで設定でき、プロジェクトのファイルシステムによって継承できます。
- プロジェクトレベルで設定されたデフォルトの割り当て制限はファイルシステムレベルで変更できます。
- デフォルトの割り当て制限は、SMB プロトコルを介して取得または変更できます。
- ユーザーとグループの割り当て制限は遅延実施を使用して実装されます。これは、データがディスクに書き込まれる前に、ユーザーが短時間だけその割り当て制限を超過できることを意味します。データがディスクに送られると、ファイルシステムレベルの割り当て制限の場合と同様に、ユーザーは新しい書き込みに関するエラーを受け取ります。

- ユーザーとグループの割り当て制限は、常に参照データに対して強制的に適用されます。これは、スナップショットがどの割り当て制限にも影響を与えないことを意味し、基になるブロックがシェアされていても、スナップショットのクローンは同じ量の有効な割り当てを消費します。
- ユーザーとグループの予約はサポートされていません。
- データの割り当て制限とは異なり、ユーザーとグループの割り当て制限は通常のファイルシステムデータで格納されます。これは、ファイルシステムの領域が不足している場合に、ユーザーとグループの割り当て制限に変更を加えられないことを意味します。最初に追加領域を使用できるようにしてから、ユーザーとグループの割り当て制限を変更する必要があります。
- ユーザーとグループの割り当て制限は、リモートレプリケーションの一部として送信されます。管理者は、ネームサービス環境が送信元と送信先で確実に同じになるようにする必要があります。
- シェア全体の NDMP バックアップおよび復元には、ユーザーとグループの割り当て制限が含まれます。既存のシェアへの復元は、現在の割り当て制限には影響しません。

## アイデンティティ管理の操作

ユーザーとグループの割り当て制限には、アプライアンスのアイデンティティマッピングサービスが使用されます。このサービスでは、環境に応じて、ユーザーとグループを UNIX または Windows のアイデンティティとして指定できます。ファイル所有権と同様に、これらのアイデンティティは次の方法で追跡されます。

- UNIX マッピングがない場合、Windows アイデンティティへの参照が格納されません。
- UNIX マッピングがある場合、その UNIX アイデンティティが格納されます。

これは、アイデンティティの正規の形式が UNIX アイデンティティであることを意味します。マッピングがあとで変更された場合は、新しいマッピングが新しい UNIX アイデンティティに基づいて強制されます。マッピングが存在しないときに Windows ユーザーによってファイルが作成され、あとでマッピングが作成された場合、新しいファイルは、アクセス制御と使用状況の形式のために別の所有者のものとして扱われます。これはまた、ユーザー ID が再利用された (つまり、新しいユーザー名の関連付けが作成された) 場合、既存のファイルまたは割り当て制限がその新しいユーザー名で所有されているように見えることを意味します。

ファイルシステムの積極的な活用を試みる前に、アイデンティティマッピングの規則を確立することをお勧めします。それ以外の場合、マッピングに何らかの変更を加えると予期しない結果が生じることがあります。

## ファイルシステムの名前空間の操作

アプライアンス上のすべてのファイルシステムには、ファイルシステムデータのアクセスポイントとして機能する一意のマウントポイントを指定する必要があります。プロジェクトにもマウントポイントを指定できますが、このマウントポイントは、継承されたプロパティを使用して名前空間を管理するためのツールとしてのみ機能しません。プロジェクトはマウントされないため、プロトコルを介してデータがエクスポートされることはありません。

すべてのシェアは `/export` の下にマウントされる必要があります。ファイルシステムを作成して `/export` にマウントすることは可能ですが、必須ではありません。そのようなシェアが存在しない場合は、必要に応じて階層のこの部分の下にディレクトリが動的に作成されます。各マウントポイントはクラスタ内で一意である必要があります。

- **名前空間の入れ子のマウントポイント** - マウントポイントがほかのファイルシステムのマウントポイントの下にあるファイルシステムを作成できます。このシナリオでは、親ファイルシステムは子ファイルシステムの前にマウントされ、またその逆も同様です。入れ子のマウントポイントを使用するときは、次の場合を考慮するようにしてください。
  - マウントポイントが存在しない場合は、マウントポイントが作成され、`root` およびモード `0755` によって所有されます。状況によっては、ファイルシステムの名前変更、破棄、または移動が行われると、このマウントポイントが解除されることがあります。念のため、子ファイルシステムを作成する前に親のシェア内にマウントポイントを作成するようにしてください。
  - 親ディレクトリが読み取り専用で、マウントポイントが存在しない場合、ファイルシステムのマウントは失敗します。これはファイルシステムの作成時に同期的に発生することがありますが、継承されたマウントポイントを持つファイルシステムの名前変更など、大規模な変更を行うときに非同期的に発生することもあります。
  - ファイルシステムの名前を変更したり、そのマウントポイントを変更したりすると、現在のマウントポイントの下にあるすべての子マウントポイントと新しいマウントポイント (異なる場合) がアンマウントされ、変更の適用後に再マウントされます。これにより、現在そのシェアにアクセスしているデータサービスがすべて中断します。
  - 入れ子のマウントポイントの自動トラバースをサポートするかどうかは、下記で説明するように、プロトコルによって決まります。
- **名前空間の NFSv2 / NFSv3 / NFSv4** - NFS では、各ファイルシステムは MOUNT プロトコル経由で表示できる一意のエクスポートです。NFSv2 と NFSv3 には入れ子のファイルシステムをトラバースする手段がなく、各ファイルシステムにはそのフルパスによってアクセスする必要があります。入れ子のマウントポイントは引き続き機能していますが、入れ子のマウントポイントを越えようとする、空のディレクトリがクライアント上に作成されます。この問題は自動マウントによるマウント

を使用することで軽減できますが、動的な環境で入れ子のマウントポイントを透過的にサポートするには NFSv4 が必要です。

NFSv4 では、NFSv3 と比べてマウントポイントの処理にいくつかの改善が加えられています。まず、階層内のそのポイントで使用できるシェアがない場合でも、その親ディレクトリをマウントできます。たとえば、`/export/home` がシェアされていた場合、`/export` をクライアント上にマウントして、実際のエクスポートを透過的にトラバースできます。さらに重要なことに、一部の NFSv4 クライアント (Linux を含む) はクライアント側での自動マウントをサポートしており、これは「ミラーマウント」と呼ばれることがあります。このようなクライアントがあれば、ユーザーがマウントポイントをトラバースすると、子ファイルシステムは適切なローカルマウントポイントで自動的にマウントされ、ファイルシステムがそのクライアント上でアンマウントされると無効になります。サーバー側から見ると、これらは別々のマウントリクエストですが、1 つにまとめてクライアントに送られ、シームレスなファイルシステムの名前空間を形成します。

- **名前空間 SMB** - SMB プロトコルでは、各シェアがリソース名によって使用できるようになるため、マウントポイントを使用しません。ただし、各ファイルシステムには引き続き一意のマウントポイントが必要です。入れ子のマウントポイント (1 つのリソース内に複数のファイルシステムがある) は現在サポートされていないため、マウントポイントのトラバースを試みると空のディレクトリが作成されます。
- **名前空間 FTP / FTPS / SFTP** - ファイルシステムは標準のマウントポイントを使用してエクスポートされます。入れ子のマウントポイントは完全にサポートされており、ユーザー対して透過的です。ただし、親がシェアされているときに入れ子のファイルシステムをシェアしないようにはできません。親のマウントポイントがシェアされている場合は、子もすべて同様にシェアされます。
- **名前空間 HTTP / HTTPS** - ファイルシステムは `/shares` ディレクトリの下にエクスポートされるため、`/export/home` にあるファイルシステムは HTTP または HTTPS を介して `/shares/export/home` に表示されます。入れ子のマウントポイントは完全にサポートされており、ユーザー対して透過的です。FTP プロトコルのセクションで説明されているシェアオプションの競合に関する動作と同じ動作が、HTTP にも当てはまります。

## シェアの使用状況統計

ビューの左側に (縮小された場合はプロジェクトパネルの下に)、現在の領域の使用状況統計を示す表があります。これらの統計は、特定のシェア (シェアを編集している場合)、またはプール全体 (シェアリストを表示している場合) が対象です。値が 0 のプロパティがあれば、そのプロパティは表から除外されます。

使用状況統計の一部は、CLI コンテキスト `shares show` にも表示されます。

次の表では、BUI および CLI の使用状況プロパティについて説明します。

| BUI 名       | CLI 名           | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-------------|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 使用可能な容量     | --              | この統計は、タイトルの容量を容量の割合で表したもので、暗黙的に表示されます。使用可能な容量は、シェアまたはプロジェクト上のすべての割り当て制限、またはプールの絶対容量を反映します。ここに表示される数値は、使用済みの合計領域に使用可能な領域を加えた値です。                                                                                                                                   |
| 参照されているデータ  | usage_data      | データで参照されているデータの量。これには、必要なメタデータだけでなく、すべてのファイルシステムデータまたは LUN ブロックも含まれます。圧縮を使用すると、この値はシェア内に含まれるデータの論理サイズよりもかなり小さくなる可能性があります。シェアがスナップショットのクローンである場合、この値はシェア内に理論的に含めることができる物理ストレージよりも小さくなり、0 になる場合があります。                                                               |
| スナップショットデータ | usage_snapshots | プロジェクトのスナップショットを含む、シェアのすべてのスナップショットで使用される領域の量です。このサイズは、すべてのスナップショットで消費される一意の領域の合計と同じではありません。複数のスナップショットによって参照されるブロックは、スナップショットごとの使用状況統計には含まれませんが、シェアのスナップショットデータの合計に表示されます。                                                                                       |
| 未使用予約       | --              | ファイルシステムに予約が設定されている場合、この値はファイルシステム用に予約されている残りの領域の量を示します。この値は LUN には設定されません。アプライアンスでは、この領域がほかのシェアによって消費されないようにして、ファイルシステムに十分な領域を確保します。予約にスナップショットが含まれていない場合は、スナップショットの取得時にスナップショット全体を上書きするのに十分な領域が必要です。予約の詳細は、 <a href="#">386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」</a> を参照してください。 |
| 合計領域        | usage_total     | 参照データ、スナップショットデータ、および未使用予約の合計。                                                                                                                                                                                                                                    |

## シェアおよびプロジェクトプロトコル

各シェアにはプロトコル固有のプロパティがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティは、シェアごとに定義することも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。

iSCSI の場合、イニシエータは [129 ページの「Storage Area Network \(SAN\) の構成」](#) で説明されているメカニズムのいずれかを使用することで、ターゲットを発見できます。



サポートされるプロトコルプロパティについては、次のセクションを参照してください。

- [409 ページの「NFS プロトコル」](#)
- [416 ページの「SMB プロトコル」](#)
- [421 ページの「HTTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「FTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「SFTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「TFTP プロトコル」](#)

#### 関連トピック

- [239 ページの「NFS 構成」](#)
- [245 ページの「SMB 構成」](#)

## NFS プロトコル

このセクションには、次のトピックが含まれています。

- [410 ページの「NFS プロトコルのプロパティ」](#)
- [411 ページの「NFS シェアモードの例外」](#)
- [414 ページの「NFS プロトコルの文字セットエンコーディング」](#)
- [415 ページの「NFS プロトコルのセキュリティーモード」](#)

NFS プロトコルの詳細は、次のトピックを使用してください。

- [239 ページの「NFS 構成」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)
- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [NFSv2 および NFSv3 のセキュリティー \(RFC 2623\) \(http://www.ietf.org/rfc/rfc2623.txt\)](http://www.ietf.org/rfc/rfc2623.txt)
- [NFSv4 プロトコル \(RFC 3530\) \(http://www.ietf.org/rfc/rfc3530.txt\)](http://www.ietf.org/rfc/rfc3530.txt)

サポートされるほかのプロトコルについては、次のセクションを参照してください。

- [416 ページの「SMB プロトコル」](#)
- [421 ページの「HTTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「FTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「SFTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「TFTP プロトコル」](#)

## NFS プロトコルのプロパティー

各シェアにはプロトコル固有のプロパティーがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティーは、シェアごとに定義することも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。次の表に、NFS プロトコルのプロパティーと指定可能な値を示します。

表 107 NFS プロトコルのプロパティー

| プロパティー                         | CLI の値                                                           | プロパティータイプ | 説明                                                                                                                                                                   |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| シェアモード                         | off/rw/ro                                                        | 継承        | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。408 ページの「 <a href="#">シェアおよびプロジェクトプロトコル</a> 」を参照してください。                                                              |
| setuid/setgid ファイル作成を無効にする     | nosuid                                                           | 継承        | 選択すると、クライアントは setuid (S_ISUID) ビットと setgid (S_ISGID) ビットを設定してファイルを作成することも、chmod(2) システム呼び出しによって既存のファイルでこれらのビットを有効にすることもできなくなります。                                     |
| クライアントがサブディレクトリをマウントできないようにします | nosub                                                            | 継承        | 選択すると、クライアントがサブディレクトリを直接マウントすることはできなくなります。シェアのルートのみをマウントするように強制されます。注: これは NFSv2 プロトコルと NFSv3 プロトコルだけに適用され、NFSv4 には適用されません。                                          |
| 匿名ユーザーマッピング                    | anon                                                             | 継承        | 特定のクライアントで「root」オプションが有効になっている場合を除き、そのクライアントの root ユーザーは不明なユーザーとして扱われ、そのユーザーがシェアのファイルにアクセスを試みると、すべてこの uid のユーザーによる操作として扱われます。そのあと、このファイルのアクセス権ビットと ACL は通常どおり評価されます。 |
| 文字セット                          | 指定可能な値については、「 <a href="#">文字セットエンコーディング</a> 」を参照してください。          | 継承        | すべてのクライアントのデフォルトの文字セットを設定します。                                                                                                                                        |
| セキュリティーモード                     | sec=<br>指定可能な値のリストについては、「 <a href="#">セキュリティーモード</a> 」を参照してください。 | 継承        | すべてのクライアントのセキュリティーモードを設定します。                                                                                                                                         |
| システム認証に対して予約されたポートを強制します       | resvport                                                         | 継承        | システム認証のセキュリティーモードとともにシェアまたはプロジェクトで設定されたとき、NFS クライアントは小さい番号の                                                                                                          |

| プロパティ | CLI の値 | プロパティタイプ | 説明                                                                                                                                   |
|-------|--------|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|       |        |          | (「予約された」) TCP ポートを使用する必要があります。Solaris および Linux など一部の NFS クライアントは、デフォルトで番号の小さい TCP ポートを使用します。Windows など、ほかのクライアントでは構成が必要になる可能性があります。 |

## NFS シェアモードの例外

グローバルなシェアモードに対する例外は、クライアント固有のシェアモードまたは例外を設定することによって、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。特定のクライアントへのアクセスを制限するために、グローバルなシェアモードを `none` に設定して、アクセスを付与するグループを徐々に小さくしていくことをお勧めします。たとえば、グローバルなシェアモードが `none` に設定されたシェアを作成できます。これは、すべてのクライアントへのアクセスを拒否したあとで、クライアントのサブセットに読み取り専用アクセスを付与します。さらに、クライアントのより小さいサブセットに読み取り/書き込みアクセスを付与して、最後に信頼できるホストのみが読み取り/書き込みアクセスと `root` 対応のアクセスを持つようにできます。

クライアント固有のシェアモードはグローバルなシェアモードよりも優先されます。クライアントには、例外で指定されるクライアント固有のシェアモードに応じたアクセス権が付与されます。例外が存在しない場合、グローバルなシェアモードに応じたアクセス権がクライアントに付与されます。

表 108 クライアントタイプ

| タイプ                    | CLI の接頭辞          | 説明                                                                                | 例                                  |
|------------------------|-------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| ホスト (FQDN) または ネットグループ | <code>none</code> | 指定された完全修飾名に解決される IP アドレスを持つ単一のクライアント、または、クライアントの IP アドレスを解決した完全修飾名を含んでいる ネットグループ。 | <code>caji.sf.example.com</code>   |
| DNS ドメイン               | <code>.</code>    | この接尾辞で終わる完全修飾名に解決される IP アドレスを持つすべてのクライアント。                                        | <code>sf.example.com</code>        |
| IPv4 サブネット             | <code>@</code>    | CIDR 表記で表現される、指定された IPv4 サブネットに含まれる IP アドレスを持つすべてのクライアント                          | <code>192.0.2.254/22</code>        |
| IPv6 サブネット             | <code>@</code>    | CIDR 表記で表現される、指定された IPv6 サブネットに含まれる IP アドレスを持つすべてのクライアント                          | <code>2001:db8:410:d43::/64</code> |

クライアントごとまたはクライアントの集まりごとに、クライアントがシェアに対して読み取り専用アクセス権を持つか、または読み取り/書き込みアクセス権を持つかを

指定します。NFS 例外を設定する場合、クライアントが root ユーザー権限を持つか、または root アクセス権を持たないユーザーとして扱われるかについても指定します。

## ネットグループの管理

ネットグループは、NFS エクスポートのアクセスを制御するために使用できます。ただし、ネットグループの管理は複雑になることがあります。代わりに IP サブネット規則または DNS ドメイン規則を使用することを検討してください。

ネットグループを使用する場合、有効になっているサービスに応じて、ネットグループが NIS または LDAP から解決されます。LDAP を使用する場合、それぞれのネットグループがデフォルトの場所 ou=Netgroup,(Base DN) に存在し、標準スキーマを使用している必要があります。

通常、ネットグループエントリのユーザー名コンポーネントは NFS に影響を与えず、ホスト名だけが意味を持ちます。ネットグループに含まれるホスト名は正規名であること、また、DNS で解決される場合は完全修飾名であることが必要です。つまり、NFS サブシステムは、要求しているクライアントの IP アドレスを解決すると、指定された FQDN、または指定されたネットグループのいずれかのメンバーに一致する正規ホスト名になることを検証しようとしています。ドメインのコンポーネントも含めて正確に一致する必要があります。それ以外の場合、その例外には一致せず、次の例外が調べられます。ホスト名の解決の詳細は、DNS を参照してください。

2013.1.0 ソフトウェアリリースでは、UNIX クライアントユーザーはパフォーマンスを低下させることなく、最大 1024 グループに所属することが可能です。それ以前のリリースでは、UNIX クライアントユーザーにつき最大 16 グループをサポートしていました。

## NFS シェアモードおよび例外オプション

CLI では、すべての NFS シェアモードと例外を、sharenfs プロパティの 1 つのオプション文字列で指定します。この文字列は、値をコンマで区切ったリストです。これは、BUI に関して説明したグローバルなシェアモードに相当する、ro、rw、on、または off のいずれかで始める必要があります。

表 109 NFS シェアモード値 (BUI および CLI)

| BUI シェアモード値 | CLI シェアモード値 | 説明                                                                                                           | 例                                |
|-------------|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| なし          | off         | シェアモードは無効化されています。                                                                                            | sharesmb=off                     |
|             | on          | シェア名はデータセット名で、rw または ro の NFS 例外が定義されている場合にかぎりシェア名を読み取り/書き込みまたは読み取り専用にご利用できます。ほかのすべてのクライアントについてはシェアモードが無効です。 | sharesmb="on, ro=sf.example.com" |

| BUI シェアモード値 | CLI シェアモード値         | 説明                                                                                                           | 例                                                                 |
|-------------|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
|             | <resource name>     | シェア名はリソースセット名で、rw または ro の NFS 例外が定義されている場合にかぎりシェア名を読み取り/書き込みまたは読み取り専用に利用できます。ほかのすべてのクライアントについてはシェアモードが無効です。 | sharesmb="myshare,ro=sf.example.com"                              |
| 読み取り/書き込み   | on                  | シェア名はデータセット名で、NFS 例外がない場合はシェア名をすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                                 | sharesmb=on                                                       |
|             | rw                  | シェア名はデータセット名で、ro 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                            | sharesmb=rw または sharesmb="rw,ro=sf.example.com"                   |
|             | <resource name>     | シェア名はリソース名で、NFS 例外がない場合はシェア名をすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                                   | sharesmb=myshare                                                  |
|             | <resource name>, rw | シェア名はリソース名で、ro 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。NFS 例外は定義される場合もされない場合もあります。                   | sharesmb="myshare,rw" または sharesmb="myshare,rw,ro=sf.example.com" |
| 読み取り専用      | ro                  | シェア名はデータセット名で、rw 例外が定義されているホストを除くすべてのホスト用の読み取り専用利用に利用できます。                                                   | sharesmb="ro,rw=sf.example.com"                                   |
|             | <resource name>, ro | シェア名はリソース名で、rw 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り専用利用に利用できます。NFS 例外は定義される場合もされない場合もあります。                    | sharesmb="myshare,ro" または sharesmb="myshare,ro,rw=sf.example.com" |

次の例では、すべてのクライアントのシェアモードが読み取り専用に設定されます。すべてのクライアントで、root ユーザーは一般的な「nobody」ユーザーとしてシェアのファイルにアクセスします。

```
set sharenfs=ro
```

nosuid オプションまたは anon オプション、あるいはその両方を追加することもできます。したがって、不明なユーザーをすべて uid 153762 にマッピングするように定義するには、次のように指定します。

```
set sharenfs="ro,anon=153762"
```

---

**注記** - 「=」文字を含む CLI プロパティ値は引用符で囲む必要があります。

---

追加の NFS 例外は、「option=collection」という形式のテキストを追加することで指定でき、ここで「option」は、クライアントの集まり(collection)に付与するアクセス権のタイプを定義する、ro、rw、または root のいずれかです。collection の指定には、

「クライアントタイプ」表の接頭辞文字と、DNS ホスト名/ドメイン名または CIDR ネットワーク番号を使用します。たとえば、sf.example.com ドメイン内のすべてのホストに読み取り/書き込みアクセス権を付与し、192.168.44.0/24 ネットワーク内のホストに root アクセス権を付与するには、次のようなコマンドを使用します。

```
set sharenfs="ro,anon=153762,rw=.sf.example.com,root=@192.168.44.0/24"
```

---

**注記** - この例は NFS 例外にのみ該当します。

---

ネットグループ名は、個別の完全修飾ホスト名を使用できる場所であればどこでも使用できます。たとえば、「engineering」ネットグループに読み取り/書き込みアクセス権を付与するには、次のように指定します。

```
set sharenfs="ro,rw=engineering"
```

## NFS プロトコルの文字セットエンコーディング

通常、ファイル名に使用する文字セットエンコードは指定されません。NFSv3 プロトコルと NFSv2 プロトコルは文字セットを指定しません。NFSv4 では UTF-8 を使用することになっていますが、すべてのクライアントが従うわけではなく、この制限がサーバーによって強制されることもありません。シェアの「UTF-8 のみ」オプションが無効になっている場合、これらのファイル名は、エンコードが認識されることなく、文字どおりにファイルシステムに書き込まれます。したがって、同じエンコードを使用しているクライアントのみがこれらを解釈できます。ただし、SMB では、ファイル名をサーバー側で解釈できるように、ファイル名を UTF-8 で保存することが要求されます。これにより、任意のクライアントエンコードをサポートすることはできなくなりますが、SMB でのアクセスは引き続き可能です。

そのような構成をサポートするには、文字セットエンコードをシェア全体またはクライアント単位で設定します。サポートされている文字セットエンコードは次のとおりです。

|          |           |            |           |
|----------|-----------|------------|-----------|
| cp932    | euc-tw    | iso8859-7  | koi8-r    |
| euc-cn   | iso8859-1 | iso8859-8  | shift_jis |
| euc-jp   | iso8859-2 | iso8859-9  |           |
| euc-jpms | iso8859-5 | iso8859-13 |           |
| euc-kr   | iso8859-6 | iso8859-15 |           |

デフォルトの動作では、文字セットエンコードは指定されません (パススルー)。BUI では、標準の例外リストメカニズムによって文字セットを選択できます。CLI では、各文字セット自体がオプションになり、そこに 1 つ以上のホストを指定します。「\*」は、シェア全体の設定であることを示します。たとえば、次を確認してください。

```
hostname:shares default> set sharenfs="rw,euc-kr=*
```

これは、「euc-kr」をデフォルトのエンコードとしてファイルシステムをシェアします。次を確認してください。

```
hostname:shares default> set sharenfs="rw,euc-kr=host1.domain.com,euc-jp=host2.domain.com"
```

これは、host1 には「euc-kr」、host2 には「euc-jp」を使用し、ほかのすべてのクライアントにはデフォルトのエンコードを使用します。ホストのリストの形式は、ほかの CLI NFS オプションの形式に従います。

一部の NFS クライアントでは、代替ロケールが正しくサポートされません。詳細は、使用している NFS クライアントのドキュメントを参照してください。

## NFS プロトコルのセキュリティーモード

セキュリティーモードは、シェアベースで設定します。次のリストでは、Kerberos セキュリティー設定について説明します。

- **krb** - Kerberos V5 によるエンドユーザー認証
- **krb5i** - krb5 に完全性保護を加えたもの (データパケットに改ざんがないことが保証される)
- **krb5p** - krb5i にプライバシー保護を加えたもの (データパケットに改ざんがないことと暗号化されていることが保証される)

セキュリティーモードは、「*option=mode*」という形式のテキストを追加することで指定します。ここで、*option* は *sec*、*mode* はセキュリティー設定です。例:

```
hostname: shares default> set sharenfs="sec=krb5"
```

---

**注記** - 「=」文字を含む CLI プロパティー値は引用符で囲む必要があります。

---

複数の Kerberos タイプの組み合わせをセキュリティーモード設定で指定できます。次の表に示すように、組み合わせのセキュリティーモードにより、クライアントは一覧表示されている任意の Kerberos タイプでマウントできます。

**表 110** Kerberos タイプの組み合わせ

| 設定         | 説明                                                             |
|------------|----------------------------------------------------------------|
| sys        | システム認証                                                         |
| krb5       | Kerberos v5 のみ - クライアントはこのフレーバを使用してマウントする必要があります。              |
| krb5:krb5i | Kerberos v5 に完全性を加えたもの - クライアントは一覧表示されている任意のフレーバを使用してマウントできます。 |
| krb5i      | Kerberos v5 完全性のみ - クライアントはこのフレーバを使用してマウントする必要があります。           |

| 設定               | 説明                                                                      |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| krb5:krb5i:krb5p | Kerberos v5 に完全性またはプライバシーを加えたもの - クライアントは一覧表示されている任意のフレーバを使用してマウントできます。 |
| krb5p            | Kerberos v5 プライバシのみ - クライアントはこのフレーバを使用してマウントできます。                       |

### 予約されたポート

システム認証に予約されたポートを設定するには、この例に示すように、`resvport` を使用します。

```
set sharenfs="sec=sys,rw,resvport"
```

`resvport` は、システム認証のセキュリティーモード `sec=sys` でのみ使用できます。

## SMB プロトコル

このセクションには、次のトピックが含まれています。

- [416 ページの「SMB プロトコルのプロパティー」](#)
- [417 ページの「クライアント側のキャッシュプロパティー」](#)
- [418 ページの「SMB プロトコルのシェアモード例外」](#)
- [421 ページの「シェアレベル ACL」](#)

SMB プロトコルの詳細は、次のトピックを使用してください。

- [245 ページの「SMB 構成」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティー」](#)
- [378 ページの「プロジェクトのプロパティー」](#)

サポートされるほかのプロトコルについては、次のセクションを参照してください。

- [409 ページの「NFS プロトコル」](#)
- [421 ページの「HTTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「FTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「SFTP プロトコル」](#)
- [422 ページの「TFTP プロトコル」](#)

### SMB プロトコルのプロパティー

各シェアにはプロトコル固有のプロパティーがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティーは、シェアごとに定義するこ



とも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。次の表に、SMB プロトコルのプロパティと指定可能な値を示します。

表 111 SMB プロトコルのプロパティ

| プロパティ             | CLI の値           | プロパティタイプ | 説明                                                                                                                              |
|-------------------|------------------|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| シェアモード            | off/rw/ro        | 継承       | シェアが読み取り専用か、読み取り/書き込みに使用できるか、どちらにも使用できないかを決定します。418 ページの「SMB プロトコルのシェアモード例外」を参照してください。                                          |
| リソース名             | resource_name/on | 継承       | SMB クライアントがこのシェアを参照するときに使用する名前を表示します。リソース名 off はどの SMB クライアントもこのシェアにアクセスできないことを示し、リソース名 on はこのシェアがファイルシステムの名前でエクスポートされることを示します。 |
| アクセスベースの列挙を有効化    | abe              | 継承       | 有効にすると、アクセスベースの列挙が実行されます。                                                                                                       |
| ゲストアクセスを有効化       | guestok          | 継承       | 有効にすると、ゲストアクセスを付与します。                                                                                                           |
| DFS 名前空間です        | dfsroot          | 継承       | このシェアをスタンドアロンの DFS 名前空間としてプロビジョニングするかどうかを指示します。                                                                                 |
| クライアント側のキャッシュポリシー | csc              | 継承       | クライアント側キャッシュをサポートするために提供されるシェアごとの構成オプションを指示します。詳細は、417 ページの「クライアント側のキャッシュプロパティ」を参照してください。                                       |

## クライアント側のキャッシュプロパティ

クライアント側のキャッシュプロパティ (csc) は、シェアからのファイルおよびプログラムが、アプライアンスから切断されたオフラインでの使用について、ローカルクライアント上でキャッシュされるかどうかを制御します。

| BUI の値  | CLI の値 | 説明                                                                                         |
|---------|--------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| キャッシュなし | none   | シェアについてのクライアント側のキャッシュを無効にします。シェアからのファイルまたはプログラムはオフラインで利用できません。                             |
| 手動キャッシュ | manual | 指定されたファイルおよびプログラムのみがローカルクライアント上でキャッシュされ、オフラインで利用できます。オンラインのとき、指定されたプログラムはローカルクライアントから実行されま |

| BUI の値        | CLI の値    | 説明                                                                                                                                                                                              |
|---------------|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|               |           | す。オフラインファイルは、ローカルクライアントがふたたびオンラインになったときに自動的に再統合されません。これがデフォルト値です。                                                                                                                               |
| 自動ドキュメントキャッシュ | documents | シェアからアクセスされたすべてのファイルがローカルクライアント上でキャッシュされ、オフラインで利用できます。ファイルはローカルクライアントがふたたびオンラインになったときに自動的に再統合されます。シェアからアクセスされたプログラムは、以前ローカルでキャッシュされた場合を除き、オフラインで利用できません。                                        |
| 自動プログラムキャッシュ  | programs  | シェアからアクセスされたすべてのプログラムがローカルクライアント上でキャッシュされ、オフラインで利用できます。オンラインのとき、プログラムはローカルクライアントから実行されます。さらに、シェアからアクセスされたすべてのファイルがローカルクライアント上でキャッシュされ、オフラインで利用できます。ファイルはローカルクライアントがふたたびオンラインになったときに自動的に再統合されます。 |

## SMB プロトコルのシェアモード例外

グローバルなシェアモードに対する例外は、クライアント固有のシェアモードまたは例外を設定することによって、クライアントごと、またはクライアントの集まりごとに定義できます。特定のクライアントへのアクセスを制限するために、グローバルなシェアモードを `none` に設定して、アクセスを付与するグループを徐々に小さくしていくことをお勧めします。たとえば、グローバルなシェアモードが `none` に設定されたシェアを作成できます。これは、すべてのクライアントへのアクセスを拒否したあとで、クライアントのサブセットに読み取り専用アクセスを付与します。さらに、クライアントのより小さいサブセットに読み取り/書き込みアクセスを付与して、最後に信頼できるホストのみが読み取り/書き込みアクセスを持つようにできます。

表 112 クライアントタイプ

| タイプ                    | CLI の接頭辞 | 説明                                             | 例                   |
|------------------------|----------|------------------------------------------------|---------------------|
| ホスト (FQDN) または ネットグループ | none     | 指定された完全修飾名に解決される IP アドレスを持つ単一のクライアント、または、クライアン | caji.sf.example.com |

| タイプ        | CLIの接頭辞 | 説明                                                       | 例                     |
|------------|---------|----------------------------------------------------------|-----------------------|
|            |         | トの IP アドレスを解決した完全修飾名を含んでいるネットグループ。                       |                       |
| DNS ドメイン   | .       | この接尾辞で終わる完全修飾名に解決される IP アドレスを持つすべてのクライアント。               | sf.example.com        |
| IPv4 サブネット | @       | CIDR 表記で表現される、指定された IPv4 サブネットに含まれる IP アドレスを持つすべてのクライアント | 192.0.2.254/22        |
| IPv6 サブネット | @       | CIDR 表記で表現される、指定された IPv6 サブネットに含まれる IP アドレスを持つすべてのクライアント | 2001:db8:410:d43::/64 |

クライアントごとまたはクライアントの集まりごとに、クライアントがシェアに対して読み取り専用アクセス権を持つか、または読み取り/書き込みアクセス権を持つかを指定します。

**ネットグループの管理** - ネットグループは、SMB エクスポートのアクセスを制御するために使用できます。ただし、ネットグループの管理は複雑になることがあります。代わりに IP サブネット規則または DNS ドメイン規則を使用することを検討してください。

ネットグループを使用する場合、有効になっているサービスに応じて、ネットグループが NIS または LDAP から解決されます。LDAP を使用する場合、それぞれのネットグループがデフォルトの場所 `ou=Netgroup,(Base DN)` に存在し、標準スキーマを使用している必要があります。

通常、ネットグループエントリのユーザー名コンポーネントは SMB に影響を与えず、ホスト名だけが意味を持ちます。ネットグループに含まれるホスト名は正規名であること、また、DNS で解決される場合は完全修飾名であることが必要です。つまり、SMB サブシステムは、要求しているクライアントの IP アドレスを解決すると、指定された FQDN、または指定されたネットグループのいずれかのメンバーに一致する正規ホスト名になることを検証しようとします。ドメインのコンポーネントも含めて正確に一致する必要があります。それ以外の場合、その例外には一致せず、次の例外が調べられます。ホスト名の解決の詳細は、[DNS](#) を参照してください。

2013.1.0 ソフトウェアリリースでは、UNIX クライアントユーザーはパフォーマンスを低下させることなく、最大 1024 グループに所属することが可能です。それ以前のリリースでは、UNIX クライアントユーザーにつき最大 16 グループをサポートしていました。

### SMB シェアモードおよび例外オプション

CLI では、すべての SMB シェアモードと例外を、`sharesmb` プロパティの 1 つのオプション文字列で指定します。この文字列は、値をコンマで区切ったリストです。これは、BUI に関して説明したグローバルなシェアモードに相当する、`ro`、`rw`、`on`、または `off` のいずれかで始める必要があります。

表 113 SMB シェアモード値 (BUI および CLI)

| BUI シェアモード値 | CLI シェアモード値                            | 説明                                                                                                                                      | 例                                                                                              |
|-------------|----------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| なし          | <code>off</code>                       | シェアモードは無効化されています。                                                                                                                       | <code>sharesmb=off</code>                                                                      |
|             | <code>on</code>                        | シェア名はデータセット名で、 <code>rw</code> または <code>ro</code> の SMB 例外が定義されている場合にかぎりシェアを読み取り/書き込みまたは読み取り専用に利用できます。ほかのすべてのクライアントについてはシェアモードが無効です。   | <code>sharesmb="on, ro=sf.example.com"</code>                                                  |
|             | <code>&lt;resource name&gt;</code>     | シェア名はリソースセット名で、 <code>rw</code> または <code>ro</code> の SMB 例外が定義されている場合にかぎりシェア名を読み取り/書き込みまたは読み取り専用に利用できます。ほかのすべてのクライアントについてはシェアモードが無効です。 | <code>sharesmb="myshare, ro=sf.example.com"</code>                                             |
| 読み取り/書き込み   | <code>on</code>                        | シェア名はデータセット名で、SMB 例外がない場合はシェア名をすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                                                            | <code>sharesmb=on</code>                                                                       |
|             | <code>rw</code>                        | シェア名はデータセット名で、 <code>ro</code> 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                                         | <code>sharesmb=rw</code> または <code>sharesmb="rw, ro=sf.example.com"</code>                     |
|             | <code>&lt;resource name&gt;</code>     | シェア名はリソース名で、SMB 例外がない場合はシェア名をすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。                                                                              | <code>sharesmb=myshare</code>                                                                  |
|             | <code>&lt;resource name&gt;, rw</code> | シェア名はリソース名で、 <code>ro</code> 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り/書き込みに利用できます。SMB 例外は定義される場合もされない場合もあります。                                | <code>sharesmb="myshare, rw"</code> または <code>sharesmb="myshare, rw, ro=sf.example.com"</code> |
| 読み取り専用      | <code>ro</code>                        | シェア名はデータセット名で、 <code>rw</code> 例外が定義されているホストを除くすべてのホスト用の読み取り専用利用に利用できます。                                                                | <code>sharesmb="ro, rw=sf.example.com"</code>                                                  |
|             | <code>&lt;resource name&gt;, ro</code> | シェア名はリソース名で、 <code>rw</code> 例外が定義されているクライアントを除くすべてのクライアント用の読み取り専用利用に利用できます。SMB 例外は定義される場合もされない場合もあります。                                 | <code>sharesmb="myshare, ro"</code> または <code>sharesmb="myshare, ro, rw=sf.example.com"</code> |

次の例では、すべてのクライアントのシェアモードが読み取り専用に設定されます。

```
set sharesmb=ro
```

追加の SMB 例外は、「option=collection」という形式のテキストを追加することで指定できます。ここで、「option」は、ro または rw のいずれかです。SMB 例外には root アクセス権を付与できません。collection の指定には、表 114 の接頭辞文字と、DNS ホスト名/ドメイン名または CIDR ネットワーク番号を使用します。

たとえば、sf.example.com ドメイン内のすべてのホストに読み取り/書き込みアクセス権を付与するには:

```
set sharesmb="ro,rw=sf.example.com"
```

この例では IP アドレス 2001:db8:410:d43::/64 および 192.0.2.254/22 を持つクライアントに読み取り専用アクセスを付与します。

```
set sharesmb="on,ro=@[2001:db8:410:d43::/64]:@192.0.2.254/22"
```

ネットグループ名は、個別の完全修飾ホスト名を使用できる場所であればどこでも使用できます。たとえば、「engineering」ネットグループに読み取り/書き込みアクセス権を付与するには、次のように指定します。

```
set sharesmb="ro,rw=engineering"
```

## シェアレベル ACL

シェアレベルアクセス制御リスト (ACL) は、シェア内のファイルまたはディレクトリの ACL と組み合わせた場合に、そのファイルの実質的なアクセス権を決定します。デフォルトでは、この ACL はすべてのユーザーに完全な制御を許可します。この ACL は、ファイルの ACL の上にもう 1 段のアクセス制御を提供して、より詳細なアクセス制御構成を可能にします。このプロパティは、SMB リソース名を構成することによってファイルシステムがエクスポートされたあとでのみ構成できます。ファイルシステムが SMB プロトコルでエクスポートされない場合は、シェアレベルの ACL を設定しても何も効果はありません。

アクセススペースの列挙を有効にすると、クライアントが開くことができないファイルがディレクトリエントリとしてクライアントに表示されることがあります。ディレクトリエントリがフィルタリングされるのは、クライアントがそのファイルに対して何もアクセス権を持っていない場合だけです。たとえば、ACL で読み取りアクセス権だけが付与されている場合に、クライアントが読み取り/書き込みアクセスのためにファイルを開こうとすると、その要求は失敗しますが、ファイルはエントリのリストに含まれたままです。

ACL の詳細は、[423 ページの「ファイルシステムのアクセス制御リスト」](#)を参照してください。

## HTTP プロトコル

各シェアにはプロトコル固有のプロパティがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティは、シェアごとに定義す

ることも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。HTTP プロトコル (sharedav) では、ファイルシステムが読み取り専用 (ro) で使用可能であるか、読み取り/書き込み (rw または on) で使用可能であるか、いずれでも使用不可 (off) であるかを判別するために、ユーザーはシェアモードを設定できます。

#### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)

## FTP プロトコル

各シェアにはプロトコル固有のプロパティがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティは、シェアごとに定義することも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。FTP プロトコル (shareftp) では、ファイルシステムが読み取り専用 (ro) で使用可能であるか、読み取り/書き込み (rw または on) で使用可能であるか、いずれでも使用不可 (off) であるかを判別するために、ユーザーはシェアモードを設定できます。

#### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)

## SFTP プロトコル

各シェアにはプロトコル固有のプロパティがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティは、シェアごとに定義することも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。SFTP プロトコル (sharesftp) では、ファイルシステムが読み取り専用 (ro) で使用可能であるか、読み取り/書き込み (rw または on) で使用可能であるか、いずれでも使用不可 (off) であるかを判別するために、ユーザーはシェアモードを設定できます。

#### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)

## TFTP プロトコル

各シェアにはプロトコル固有のプロパティがあり、そのシェアに対してさまざまなプロトコルの動作を定義します。これらのプロパティは、シェアごとに定義す

ることも、シェアのプロジェクトから継承することもできます。TFTP プロトコル (shareftp) では、ファイルシステムが読み取り専用 (ro) で使用可能であるか、読み取り/書き込み (rw または on) で使用可能であるか、いずれでも使用不可 (off) であるかを判別するために、ユーザーはシェアモードを設定できます。

#### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)
- [386 ページの「ファイルシステムのプロパティ」](#)

## ファイルシステムのアクセス制御リスト

ACL の動作を制御するオプションと、ファイルシステムのルートディレクトリに対するアクセスを制御するオプションを設定できます。

---

注記 - ACL はファイルシステムに対してのみ使用できます。

---

ACL の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [423 ページの「ルートディレクトリアクセス」](#)
- [424 ページの「モード変更時の ACL 動作」](#)
- [425 ページの「ACL 継承動作」](#)
- [427 ページの「ルートディレクトリ ACL」](#)

## ルートディレクトリアクセス

ファイルシステムのルートディレクトリに対する基本的なアクセス制御を設定するには、「シェア」>「シェア」>「ファイルシステム」>「アクセス」に移動します。これらの設定は、使用されている任意のプロトコルを介して帯域内で管理できますが、便宜上ここで指定することもできます。読み取り専用ファイルシステムでは、これらのプロパティを変更するにはファイルシステムのルートディレクトリのメタデータを変更する必要があるため、これらのプロパティは変更できません。

- **ユーザー** - ルートディレクトリの所有者。これはユーザー ID またはユーザー名で指定できます。UNIX ユーザーと Windows ユーザーのマッピングの詳細は、「[アイデンティティマッピング](#)」を参照してください。UNIX ベースの NFS アクセスの場合、これはクライアントから `chown` コマンドを使用すると変更できます。
- **グループ** - ルートディレクトリのグループ。これはグループ ID またはグループ名で指定できます。UNIX グループと Windows グループのマッピングの詳細は、

「[アイデンティティマッピング](#)」を参照してください。UNIX ベースの NFS アクセスの場合、これはクライアントから `chgrp` コマンドを使用すると変更できません。

- **アクセス権** - ルートディレクトリに対する標準の UNIX アクセス権。UNIX ベースの NFS アクセスの場合、これはクライアントから `chmod` コマンドを使用すると変更できます。アクセス権は 3 つのタイプに分かれています。

| アクセスタイプ | 説明                    |
|---------|-----------------------|
| ユーザー    | ディレクトリの現在の所有者であるユーザー。 |
| グループ    | ディレクトリの現在のグループ。       |
| その他     | ほかのすべてのアクセス。          |

各アクセスタイプには、次のアクセス権を付与できます。

| タイプ  |   | 説明                                                                                                                |
|------|---|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 読み取り | R | ディレクトリの内容を一覧表示するアクセス権。                                                                                            |
| 書き込み | W | ディレクトリにファイルを作成するアクセス権。*                                                                                           |
| 実行   | X | ディレクトリのエントリを検索するアクセス権。実行アクセス権はあるが読み取りアクセス権がない場合、ユーザーはファイル名を指定して明示的にファイルにアクセスすることはできませんが、ディレクトリの内容を一覧表示することはできません。 |

### 関連トピック

- [424 ページの「モード変更時の ACL 動作」](#)
- [425 ページの「ACL 継承動作」](#)
- [427 ページの「ルートディレクトリ ACL」](#)

## モード変更時の ACL 動作

`chmod(2)` で標準的な UNIX ユーザー/グループ/その他アクセス権を使用して ACL が変更される場合、このプロパティの設定に応じて、単純なモード変更要求がさまざまな方法で既存の ACL と作用します。モード変更時に ACL 動作を編集するには、「プロジェクトの編集」([BUI](#)、[CLI](#))を参照してください。



表 114 モード変更の値

| BUI の値          | CLI の値      | 説明                                                                                                                                                                                              |
|-----------------|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ACL を破棄         | discard     | ディレクトリまたはファイルのモードを表さないすべての ACL エントリが破棄されます。これはデフォルトの動作です。                                                                                                                                       |
| モードによる ACL のマスク | mask        | グループアクセス権ビットより大きくならないように、アクセス権が縮小されます。ただし、ユーザーエントリの UID がファイルまたはディレクトリの所有者と同じである場合は例外です。この場合は、所有者アクセス権ビットよりも大きくならないように ACL アクセス権が縮小されます。マスク値によって、明示的な ACL 設定操作が実行されていない場合は、モード変更時も ACL が維持されます。 |
| ACL を変更しない      | passthrough | ファイルまたはディレクトリの新しいモードを表すのに必要な ACL エントリを生成する以外に、ACL は変更されません。                                                                                                                                     |

### 関連トピック

- [427 ページの「ルートディレクトリ ACL」](#)
- [425 ページの「ACL 継承動作」](#)
- [427 ページの「ルートディレクトリ ACL」](#)

## ACL 継承動作

新しいファイルまたはディレクトリの作成時に、既存の ACL 設定を親ディレクトリから継承できます。このプロパティーは、この継承の動作を制御します。通常、これらのプロパティーの設定は、継承可能としてフラグがつけられている ACL エントリだけに影響を与えます。ほかのエントリは、このプロパティーの設定にかかわらず、伝播されません。ただし SMB で使用される場合は、簡単な ACL エントリはすべて継承可能です。簡単な ACL とは、従来の UNIX owner/group/other エントリのことです。ACL 継承動作を編集するには、「プロジェクトの編集」(BUI、CLI)を参照してください。

表 115 ACL 継承動作の値

| BUI の値     | CLI の値  | 説明                              |
|------------|---------|---------------------------------|
| エントリを継承しない | discard | ACL のエントリは継承されません。ファイルやディレクトリは、 |

| BUI の値                          | CLI の値                    | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------------------------|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                 |                           | 使用されているクライアントとプロトコルに従って作成されます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 拒否エントリのみを継承する                   | noallow                   | 「deny」アクセス権を指定している継承可能な ACL エントリだけが継承されます。                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 「ACL の書き込み」および「所有者の変更」以外のすべてを継承 | restricted                | ACL エントリを継承するときに「write_acl」アクセス権と「write_owner」アクセス権を削除します。ただし、それ以外の場合は、継承可能な ACL エントリを変更しません。これはデフォルトです。                                                                                                                                                                                                                             |
| すべてのエントリを継承                     | passthrough               | 継承可能な ACL エントリがすべて継承されます。通常、「passthrough」モードを使用するのは、ディレクトリツリー内のすべての「データ」ファイルが同一のモードで作成されるようにする場合です。管理者は、すべてのファイルが 0664 や 0666 などの同一モードで作成されるように ACL の継承を設定します。                                                                                                                                                                       |
| 指定がない場合、「実行」以外のすべてを継承           | passthrough-x             | 「passthrough」と同様ですが、相違点は、所有者、グループ、およびすべてのユーザーの ACL エントリが、ファイル作成モードも実行ビットを要求している場合のみ、実行アクセス権を継承することです。「passthrough」設定はデータファイルに対して期待どおりに機能しますが、継承された ACL にファイル作成モードの実行ビットをオプションで含めることもできます。「cc」や「gcc」などのツールから生成される出力ファイルはその一例です。継承された ACL に実行ビットが含まれていない場合、コンパイラから出力された実行可能ファイルは、 <code>chmod(1)</code> を使用してファイルのアクセス権を変更するまで実行できません。 |
| すべてを継承するが、クライアントからのモードを保持       | passthrough-mode-preserve | 継承可能な ACL エントリは継承され、アプリケーションによって指定された作成モードは保持されます。これによって継承ビットが保持されるため、SMB は、NFS と SMB を介して同時にアクセスされるシェアと適切に相互運用する ACL を作成します。このプロパティ設定は、モード保持を使用した ACL パススルーの遅                                                                                                                                                                       |

| BUI の値 | CLI の値 | 説明                                                                                                    |
|--------|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|        |        | 延更新を適用したあとでのみ使用できます。詳細は、『Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル』、「 <a href="#">遅延更新</a> 」を参照してください。 |

SMB を使用して簡単な ACL の設定されたディレクトリにファイルを作成すると、すべての ACL エントリが継承されます。この結果、次の動作が生じます。

- 継承ビットの表示方法は、SMB と NFS とで異なります。SMB で ACL ディレクトリを表示すると、継承ビットが表示されます。NFS では継承ビットが表示されません。
- SMB を使用してファイルをディレクトリに作成すると、その ACL エントリは継承されたとおりに表示されます。しかし NFS を使用して表示した場合、ディレクトリには継承可能な ACL エントリがありません。
- アクセス制御エントリ (ACE) を追加するなどして ACL が変更されて簡単ではなくなった場合、この動作は発生しません。
- SMB を使用して ACL を変更すると、得られる ACL では前の継承ビットを合成したものが実際の継承ビットになります。

#### 関連トピック

- [378 ページの「プロジェクトのプロパティ」](#)

## ルートディレクトリ ACL

ファイルとディレクトリに対する詳細なアクセス権は、アクセス制御リストによって管理されます。ACL は、特定のユーザーまたはグループにどのようなアクセス権を付与するかを記述します。アプライアンスでは NFSv4 形式の ACL がサポートされており、SMB でのアクセスも可能です。POSIX ドラフト ACL (NFSv3 で使用される) はサポートされていません。簡単な ACL であれば NFSv3 で表現できる場合もありますが、ACL に複雑な変更を加えると、NFSv3 でアクセスしたときの動作が不定になることがあります。

「ルートディレクトリアクセス」と同様に、このプロパティはファイルシステムのルートディレクトリだけに影響を与えます。ACL は帯域内プロトコル管理によって制御できますが、BUI にはファイルシステムのルートディレクトリだけに ACL を設定する方法が用意されています。ルートディレクトリの ACL を CLI から設定する方法はありません。BUI がオプションではない場合は、帯域内管理ツールを使用できます。この ACL を変更しても、ファイルシステム内の既存のファイルとディレクトリに影響はありません。新しく作成されるファイルとディレクトリにこれらの設定が継承されるかどうかは、ACL の継承動作によって異なります。ただし、SMB を使用して簡単な ACL の設定されたディレクトリにファイルを作成すると、すべての ACL エントリが継承されます。

ACL は任意の数の ACE (アクセス制御エントリ) から成ります。各 ACE は、タイプ/ターゲット、モード、一連のアクセス権、および継承フラグを記述します。ACE は ACL の先頭から順に適用され、特定のアクションを許可するかどうかを決定します。データプロトコルを介した帯域内構成 ACL については、該当するクライアントのドキュメントを参照してください。ACL を管理するための BUI インタフェースとルートディレクトリに対する影響については、ここで説明します。

表 116 シェア - ACL のタイプ

| タイプ      | 説明                                                                         |
|----------|----------------------------------------------------------------------------|
| 所有者      | ディレクトリの現在の所有者。所有者が変更された場合、この ACE は新しい所有者に適用されます。                           |
| グループ     | ディレクトリの現在のグループ。グループが変更された場合、この ACE は新しいグループに適用されます。                        |
| 全員       | 任意のユーザー。                                                                   |
| 名前付きユーザー | 「ターゲット」フィールドで指定されたユーザー。ユーザーは、ユーザー ID で指定したり、現在のネームサービス構成で解決可能な名前指定したりできます。 |
| 名前付きグループ | 「ターゲット」フィールドで指定されたグループ。グループは、グループ ID で指定したり、現在のネームサービス構成で解決可能な名前指定したりできます。 |

表 117 シェア - ACL のモード



| モード                                                                                    | 説明                           |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|
|  許可 | ACE のターゲットにアクセス権が明示的に許可されます。 |
|  拒否 | ACE のターゲットにアクセス権が明示的に拒否されます。 |

表 118 シェア - ACL のアクセス権

|     | アクセス権                 | 説明                                                             |
|-----|-----------------------|----------------------------------------------------------------|
|     | 読み取り                  |                                                                |
| (r) | データの読み取り/ディレクトリをリスト表示 | ディレクトリの内容を一覧表示するアクセス権。ファイルによって継承された場合は、ファイルのデータを読み取るアクセス権。     |
| (x) | ファイルの実行/ディレクトリのトラバース  | ディレクトリ内のエントリをたどる (検索する) アクセス権。ファイルによって継承された場合は、ファイルを実行するアクセス権。 |
| (a) | 属性の読み取り               | ファイルの基本的な属性 (ACL 以外) を読み取るアクセス権。基本的な属性は stat レベルの属性とみ          |

|     | アクセス権              | 説明                                                                                                                         |
|-----|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     |                    | なされ、このアクセス権を許可すると、ユーザーは <code>ls</code> と <code>stat</code> に相当する操作を実行できるようになります。                                          |
| (R) | 拡張属性の読み取り          | ファイルの拡張属性を読み取る、あるいは拡張属性ディレクトリの検索を実行するアクセス権。                                                                                |
|     | 書き込み               |                                                                                                                            |
| (w) | データを書き込み/ファイルを追加   | ディレクトリに新しいファイルを追加するアクセス権。ファイルによって継承された場合は、ファイルのオフセット範囲内で任意の位置のファイルのデータを変更するアクセス権。これには、ファイルを拡大する機能や、任意のオフセットに書き込む機能も含まれません。 |
| (p) | データの追加/サブディレクトリの追加 | ディレクトリ内にサブディレクトリを作成するアクセス権。ファイルによって継承された場合は、ファイルの末尾以降のデータを変更するアクセス権。ファイルに適用される場合、このアクセス権は現在サポートされていません。                    |
| (d) | 削除                 | ファイルを削除するアクセス権。                                                                                                            |
| (D) | 子の削除               | ディレクトリ内のファイルを削除するアクセス権。2011.1 ソフトウェアリリースでは、スティックビットが設定されている場合はファイルの所有者のみが子ファイルを削除できます。                                     |
| (A) | 属性を書き込む            | ファイルまたはディレクトリに関連付けられた時間を変更するアクセス権。                                                                                         |
| (W) | 拡張属性を書き込む          | 拡張属性を作成する、あるいは拡張属性ディレクトリに書き込むアクセス権。                                                                                        |
|     | Admin              |                                                                                                                            |
| (c) | ACL/アクセス権を読み取る     | ACL を読み取るアクセス権。                                                                                                            |
| (C) | ACL/アクセス権を書き込む     | ACL を書き込む、あるいは基本的なアクセスモードを変更するアクセス権。                                                                                       |
| (o) | 所有者を変更             | 所有者を変更するアクセス権。                                                                                                             |
|     | 継承                 |                                                                                                                            |
| (f) | ファイルに適用            | ディレクトリ内に新しく作成されるすべてのファイルに継承します。                                                                                            |

|     | アクセス権      | 説明                                                                                             |
|-----|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (d) | ディレクトリに適用  | ディレクトリ内に新しく作成されるすべてのディレクトリに継承します。                                                              |
| (i) | 自己に適用しない   | 現在の ACE は現在のディレクトリには適用されませんが、子には適用されます。このフラグを設定するには、「ファイルに適用」または「ディレクトリに適用」のいずれかを設定する必要があります。  |
| (n) | 過去の子に適用しない | 現在の ACE は、ツリーの 1 レベルのみ、つまり直接の子のみに継承されます。このフラグを設定するには、「ファイルに適用」または「ディレクトリに適用」のいずれかを設定する必要があります。 |

シェアの作成時に「Windows のデフォルトのアクセス権を使用」オプションを使用した場合は、次の 3 つのエントリを含む ACL がシェアのルートディレクトリに対して作成されます。

表 119 シェアのルートディレクトリのエントリ

| タイプ  | アクション | アクセス     |
|------|-------|----------|
| 所有者  | 許可    | フルコントロール |
| グループ | 許可    | 読み取りと実行  |
| 全員   | 許可    | 読み取りと実行  |

## スキーマの操作

標準の組み込みプロパティーに加え、すべてのシェアとプロジェクトに使用できる追加のプロパティーをいくつでも構成できます。これらのプロパティーには、検証のための基本型が設定され、ほかのほとんどの標準プロパティーと同様に継承されます。これらの値は、どのような方法でもソフトウェアで使用されることはなく、エンドユーザーだけが使用します。プロパティーのスキーマはすべてのプールにわたってシステム全体に適用され、クラスタピア間で同期されます。

スキーマを使用するには、次のセクションを参照してください。

- [431 ページの「スキーマの作成 \(BUJ\)」](#)
- [431 ページの「スキーマの作成 \(CLJ\)」](#)
- [432 ページの「スキーマプロパティー」](#)

## ▼ スキーマの作成 (BUI)

1. 「シェア」 > 「スキーマ」 に移動します。
2. 「+」 アイコンをクリックし、スキーマプロパティリストに新しいプロパティを追加します。
3. プロパティの名前を入力します ( 「contact」 )。
4. プロパティの説明を入力します ( 「所有者連絡先」 )。
5. 新しいプロパティの型を選択します ( 「電子メールアドレス」 )。
6. 「適用」 をクリックします。
7. 既存のシェアまたはプロジェクトに移動します。
8. 「カスタムプロパティ」 セクションで 「所有者連絡先」 プロパティを変更します。

## ▼ スキーマの作成 (CLI)

1. スキーマコンテキストに移動します (shares schema)。
2. 「contact」という名前の新しいプロパティを作成します (create contact)。
3. プロパティの説明を設定します (set description="Owner Contact")。
4. プロパティの型を設定します (set type=EmailAddress)。
5. 変更を確定します (commit)。
6. 既存のシェアまたはプロジェクトに移動します。
7. 「custom:contact」 プロパティを設定します。

### 例 16 スキーマの例

スキーマコンテキストは「シェア」 > 「スキーマ」 にあります。

```
carp:> shares schema
carp:shares schema> show
Properties:
```

| NAME  | TYPE         | DESCRIPTION   |
|-------|--------------|---------------|
| owner | EmailAddress | Owner Contact |

各プロパティは、プロパティの名前をトークンとして使用して、スキーマコンテキストの子になっています。プロパティを作成するには、`create` コマンドを使用します。

```
carp:shares schema> create department
carp:shares schema department (uncommitted)> get
 type = String
 description = department
carp:shares schema department (uncommitted)> set description="Department Code"
 description = Department Code (uncommitted)
carp:shares schema department (uncommitted)> commit
carp:shares schema>
```

特定のプロパティのコンテキスト内で、標準の CLI コマンドを使用してフィールドを設定できます。

```
carp:shares schema> select owner
carp:shares schema owner> get
 type = EmailAddress
 description = Owner Contact
carp:shares schema owner> set description="Owner Contact Email"
 description = Owner Contact Email (uncommitted)
carp:shares schema owner> commit
```

カスタムプロパティを定義したあとは、ほかのプロパティと同様に、「`custom:<property>`」という名前でアクセスできます。

```
carp:shares default> get
...
 custom:department = 123-45-6789
 custom:owner =
...
carp:shares default> set custom:owner=bob@corp
 custom:owner = bob@corp (uncommitted)
carp:shares default> commit
```

## スキーマプロパティ

カスタムプロパティを定義するには、「シェア」>「スキーマ」ナビゲーション項目にアクセスします。現在のスキーマがリストとして表示され、必要に応じてエントリを追加または削除できます。各プロパティには次のフィールドがあります。

表 120 スキーマプロパティのフィールド

| フィールド | 説明                                                         |
|-------|------------------------------------------------------------|
| 名前    | このプロパティの CLI 名。これには英数字と文字 <code>._:\</code> のみを含める必要があります。 |



| フィールド | 説明                                                   |
|-------|------------------------------------------------------|
| 説明    | このプロパティの BUI 名。これは任意の文字を含むことができ、CLI のヘルプセクションで使用されます |
| TYPE  | 検証のための、プロパティの型。これは、次に示すいずれかの型でなければなりません。             |

プロパティに有効な型は次のとおりです。

**表 121** プロパティに有効な型

| BUI の型     | CLI の型          | 説明                                                                       |
|------------|-----------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 文字列        | 文字列             | 任意の文字列データ。これは検証しないことを意味します。                                              |
| Integer    | Integer         | 正または負の整数                                                                 |
| 正の整数       | PositiveInteger | 正の整数                                                                     |
| ブール値       | ブール値            | true または false の値。これは、BUI ではチェックボックスで表示され、CLI では「true」または「false」のどちらかです。 |
| 電子メールアドレス  | EmailAddress    | 電子メールアドレス。最小限の構文検証だけが行われます。                                              |
| ホスト名または IP | ホスト             | 有効な DNS ホスト名または IP (v4 または v6) アドレス。                                     |

定義されたプロパティは、一般プロパティのタブで、プロパティ表の説明に従って使用できます。プロパティは CLI 名で識別されるため、プロパティの名前を変更すると、システム上の既存の設定がすべて削除されます。削除されたあとで元の名前に戻されたプロパティは、以前の設定値を引き続き参照します。プロパティの型を変更することは可能ですが、システム上の既存のプロパティに予期しない影響を与えることがあります。既存のプロパティは、新しいプロパティの型では無効な設定であっても、現在の設定を保持します。



## シャドウ移行

---

管理者の一般的なタスクの1つは、ある場所から別の場所にデータを移動することです。もっとも抽象的な意味では、この問題は、サーバー間でデータをレプリケートすることからラップトップ上のユーザーデータをサーバーと同期された状態に保つことまで、多数のユースケースを含んでいます。このタスクには多数の外部ツールを利用できますが、アプライアンスには、もっとも一般的なユースケースに対応するデータ移行用の総合的な解決方法が2つ用意されています。1つ目はレプリケーションで、これは1つ以上のアプライアンス間でデータをレプリケートするためのものであり、別途説明します。[477 ページの「リモートレプリケーション」](#)を参照してください。2つめはシャドウ移行で、ここで説明します。

シャドウ移行とは、移行が完了した時点で元のデータを置換または廃棄するために、外部のNASソースからデータを移行するためのプロセスです。これは、新しいアプライアンスを既存の環境に導入する際に別のサーバーのファイルシェア業務を引き継ぐためにもっともよく使われますが、下記で説明するように、ほかにもいくつかの新しい使い方が可能です(下記参照)。

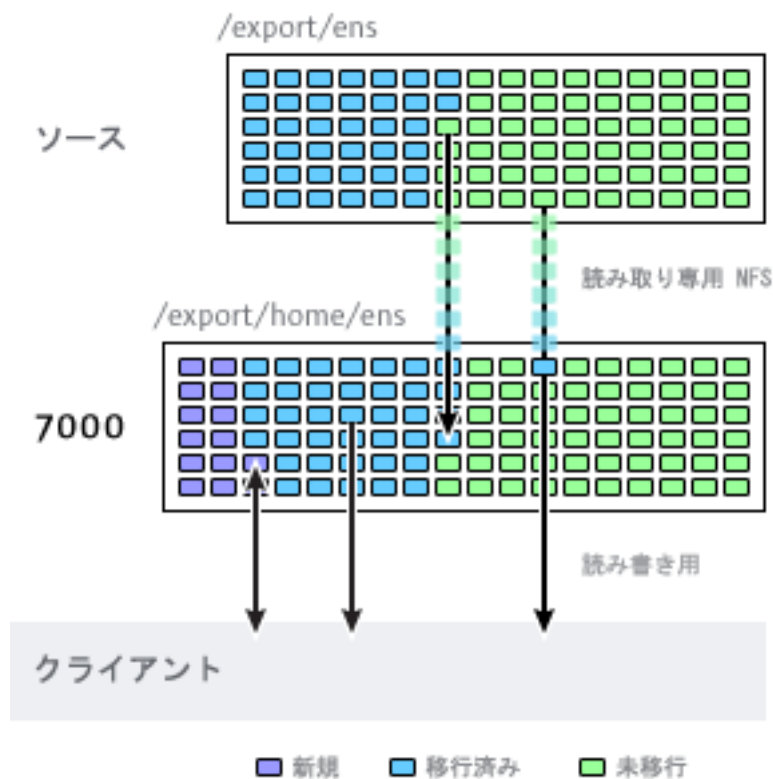
シャドウ移行を使用するには、次のセクションを参照してください。

- [436 ページの「シャドウ移行について」](#)
- [439 ページの「シャドウファイルシステムの作成」](#)
- [439 ページの「バックグラウンド移行の管理」](#)
- [439 ページの「移行エラーの処理」](#)
- [440 ページの「移行の進行状況のモニタリング」](#)
- [441 ページの「移行の取り消し」](#)
- [441 ページの「シャドウファイルシステムのスナップショット取得」](#)
- [441 ページの「シャドウファイルシステムのバックアップ」](#)
- [442 ページの「シャドウファイルシステムのレプリケート」](#)
- [442 ページの「ローカルファイルシステムの移行」](#)
- [442 ページの「シャドウ移行分析の使用」](#)
- [443 ページの「CLIを使用したシャドウ移行の可能性のテスト」](#)
- [444 ページの「CLIを使用したアクティブなNFSサーバーからのデータの移行」](#)

## シャドウ移行について

シャドウ移行は介入を使用しますが、アプライアンスに組み込まれているため、個別の物理マシンは必要ありません。ファイルシステムが作成されると、それらはオプションで、ローカルに、または NFS を介して既存のディレクトリの「シャドウを作成」できます。このシナリオでは停止時間が一度スケジュールされ、その時間にソースアプライアンス X が読み取り専用モードになり、シャドウプロパティが設定されたシェアが作成され、Oracle ZFS Storage Appliance でクライアントがその新しいシェアを指すように更新されます。その後、クライアントは読み取り/書き込みモードでアプライアンスにアクセスできます。

図 30 シャドウ移行



シャドウプロパティが設定されると、データはローカルでソースアプライアンスからバックグラウンドで透過的に移行されます。まだ移行されていないファイルの要

求がクライアントから出された場合、アプライアンスはその要求に応答する前にこのファイルをローカルサーバーに自動的に移行します。この操作では、一部のクライアントリクエストで初期遅延が発生することがありますが、ファイルが移行されると、すべてのアクセスがアプライアンスに対してローカルになり、パフォーマンスが回復します。ファイルシステムの現在の作業セットは合計サイズに比べてかなり小さいことが多いため、この作業セットが移行されると、ソース上の元の合計サイズに関係なく、パフォーマンスへの影響は認められなくなります。

シャドウ移行の欠点はデータの移行が完了する前に確定が必要なことです。このことはどの介入方法にも当てはまります。移行中は、データ部分は2つの場所に存在するため、バックアップがより複雑になり、スナップショットが不完全になったり、1つのホストにしか存在しなかったりすることがあります。このため、2つのホスト間の移行を最初に十分にテストして、アイデンティティ管理やアクセス制御が正しく設定されていることを確認することがきわめて重要です。データ移行全体をテストする必要はありませんが、新しいシステム上で、ワールドリーダーでないファイルまたはディレクトリが正しく移行されていること、ACL (存在する場合) が保持されていること、およびアイデンティティが適切に表現されていることを検証するようにしてください。

シャドウ移行はファイルシステム内のディスク上のデータを使用して実装されるため、ストレージプールの外側にローカルに格納される外部データベースやデータはありません。クラスタ内でプールがフェイルオーバーされた場合、または両方のシステムディスクが故障して新しいヘッドノードが必要になった場合、割り込みなしでシャドウ移行を続行するのに必要なすべてのデータはストレージプールで保持されます。

次に、シャドウソースの制限事項を一覧表示します。

- データを適切に移行するためには、ソースのファイルシステムまたはディレクトリが「読み取り専用である必要があります」。ファイルソースに加えられた変更が反映されるかどうかはタイミングによって異なり、ディレクトリ構造に対する変更はアプライアンスで回復不可能なエラーを発生させる可能性があります。
- シャドウ移行は NFS ソースからの移行のみをサポートします。NFSv4 ファイルシステムは最適な結果をもたらします。NFSv2 および NFSv3 移行も可能ですが、その過程で ACL が失われ、NFSv2 に対して大きすぎるファイルはそのプロトコルを使って移行できません。SMB ソースからの移行はサポートされません。
- LUN のシャドウ移行はサポートされません。

移行中に、クライアントがまだ移行されていないファイルまたはディレクトリにアクセスする場合、動作への影響を確認できます。次に、シャドウファイルシステムのセマンティクスを一覧表示します。

- ディレクトリの場合、インフラストラクチャーがまだ確立されていない途中のディレクトリに対して、移行ターゲットにメタデータインフラストラクチャーが作成されるまで、クライアント要求がブロックされます。ファイルの場合、ファイルの要求されている部分だけが移行されるため、複数のクライアントが同時にファイルのさまざまな部分を移行できます。

- シャドウファイルシステムでのファイルおよびディレクトリの名前変更、削除、または上書きは、移行プロセスに影響を及ぼすことなく任意に実行できます。
- ハードリンクを持つファイルの場合、移行が完了するまでハードリンク数がソースと一致しないことがあります。
- ファイル属性のほとんどはディレクトリが作成されるときに移行されますが、ディスク上のサイズ (UNIX stat 構造体の `st_nblocks`) はそのファイルに対する読み取りまたは書き込み操作が完了するまでわかりません。論理サイズは正しくなりますが、ファイルの内容が実際に移行されるまで、`du(1)` などのコマンドはサイズ 0 を報告します。
- アプライアンスをリブートした場合、移行はアプライアンスがもともと中止された場所を取り出します。データを再移行する必要はありませんが、場合によってはローカルファイルシステムの移行済みの部分をトラバースする必要があり、その割り込みのために移行の合計時間にいくらか影響が及ぶ可能性があります。
- データ移行では、ファイルに対して非公開の拡張属性を使用します。これらは通常、ファイルシステムのルートディレクトリ上で、またはスナップショットを通じてしか確認できません。SUNWshadow で始まる拡張属性の追加、変更、または削除は、移行プロセスに予測できない影響を及ぼし、不完全な状態または破壊された状態をもたらします。また、ファイルシステム全体の状態はファイルシステムのルートにある `.SUNWshadow` ディレクトリに格納されます。この内容に何らかの変更を加えると、同様の影響があります。
- ファイルシステムの移行が完了すると、アラートが送信され、シャドウ属性が適切なメタデータとともに削除されます。その後、このファイルシステムは通常のファイルシステムと見分けがつかなくなります。
- NFSv4 自動クライアントマウント (「ミラーマウント」と呼ばれることもある) または入れ子のローカルマウントを使用すると、データを複数のファイルシステムから 1 つのファイルシステムに移行できます。

ファイルのアイデンティティ情報 (ACL を含む) を移行するには、次の規則を使用します。

- 移行元と移行先のアプライアンスのネームサービス構成が同じである必要があります。
- 移行元と移行先のアプライアンスの NFSv4 mapid ドメインが同じである必要があります。
- 移行元で NFSv4 がサポートされている必要があります。NFSv3 も使用できますが、いくらかの情報の損失が発生します。基本的なアイデンティティ情報 (所有者とグループ) および POSIX アクセス権は保持されますが、ACL はすべて失われます。
- 移行元が root アクセス権を使ってアプライアンスにエクスポートされる必要があります。

「nobody」によって所有されているファイルまたはディレクトリが見つかった場合は、アプライアンスのネームサービス設定が正しくなかったり、NFSv4 mapid ドメインが異なっていたりする可能性があります。クライアントが本来ならアクセスでき

るはずのファイルシステムをトラバースしているときに「アクセス権が拒否されました」エラーが発生した場合、もっとも起こりうる問題は root アクセス権を使った移行元のエクスポートに失敗することです。

## シャドウファイルシステムの作成

シャドウ移行の転送元は、ファイルシステムを作成するときのみ設定できます。BUI では、ファイルシステムの作成ダイアログで使用できます。CLI では、`shadow` プロパティとして使用できます。このプロパティは、次のいずれかの書式を取ります。

- ローカル - `file:///<path>`
- NFS - `nfs://<host>/<path>`

BUI では、NFS マウントに対して別の書式 `<host>:/<path>` も使用できます。この書式は UNIX システムで使用される構文に一致します。BUI では、プルダウンメニューを使用すると、設定のプロトコル部分 (`file://` または `nfs://`) も指定できます。ファイルシステムの作成時に、サーバーは、そのパスが存在し、マウントできることを確認します。

## バックグラウンド移行の管理

シェアが作成されると、インラインリクエストが処理されるだけでなく、移行がバックグラウンドで自動的に開始されます。この移行は、シャドウ移行サービスによって制御されます。このタスク専用のスレッドの数を示すチューニング可能なグローバルプロパティが 1 つあります。スレッドの数を増やすと、追加のリソースが必要になりますが、そのおかげで並列性が向上します。

シャドウ移行サービスは無効にできますが、テスト目的の場合、またはアクティブなシャドウ移行によってシステムの一時停止が必要になるまでシステムに負荷がかかっている場合のみ無効にしてください。シャドウ移行サービスを無効にすると、同期リクエストは引き続き必要に応じて移行されますが、バックグラウンド移行は行われません。このサービスが無効になっていると、ファイルシステムのすべての内容が手動で読み取られても、シャドウ移行が完了することはありません。このサービスは常に有効にしておくことを強くお勧めします。

## 移行エラーの処理

シャドウ移行では、移行が完了する前にサーバーへの新しい書き込みを確定する必要があるため、移行をテストしエラーがないかどうかをモニターすることが非常に重

要です。バックグラウンド移行中に発生したエラーは保持され、BUIでシャドウ移行ステータスの一部として表示されます。ほかの同期移行中に発生したエラーは追跡されませんが、影響を受けたファイルにバックグラウンドプロセスがアクセスするとエラーとして表示されます。ファイルごとに、リモートファイル名とそれぞれのエラーが保持されます。エラー件数の横にある情報アイコンをクリックすると、エラーの詳細なリストが表示されます。エラーリストはエラーが修正されても更新されず、移行が正常に完了することによってのみクリアされます。

シャドウ移行は、すべてのファイルが正常に移行されるまで完了しません。エラーがある場合は、バックグラウンド移行で移行が成功するまで継続的に再試行されます。これにより、管理者はエラー(アクセス権の問題など)を修正し、移行を完了させ、確実に成功させることができます。永続的なエラーのために移行を完了できない場合は、移行を取り消すと、移行できたデータとともにローカルファイルシステムをそのままにしておくことができます。これは最後の手段としてのみ使用するようしてください。移行は取り消すと再開できません。

## 移行の進行状況のモニタリング

シャドウ移行の進行状況をモニターするために、アプライアンスでは次のような統計が提供されます。

- これまでに転送されたデータのサイズ
- 推定される残りの移行サイズ
- これまでの移行時間
- 移行エラー

移行の開始時に、アプライアンスがソースのファイルシステム統計を取得し、そのサイズを計算します。これらの値を使用して、適度に正確な移行の進行状況および推定の残りの移行データを視覚的に表示します。残りのバイト数は、ファイルシステム全体が移行されるという前提に基づいた推定です。ソースファイルシステムの一部のみが移行される場合、推定の残りのバイト数は正確ではありません。ソースファイルシステムに入れ子のファイルシステムがある場合、移行中に入れ子のマウントポイントが発見された際に、ファイルシステムサイズの合計が再計算され、新たに計算された合計に基づいて残りのバイト数が再度推定されます。ソースファイルシステムが圧縮を使用している場合には、推定の残りバイト数は不正確になる場合があります。これらの値は、BUIおよびCLIで、標準のファイルシステムプロパティとシャドウ移行ノード(UIパネル)のプロパティの両方を通じて利用できます。

---

**注記** - スパースファイル(空のブロックを含むファイル)が移行されると、ターゲットファイルはソースファイルのサイズより小さくなります。シャドウ移行では、空のブロックはターゲットファイルに書き込まれないため、領域使用量は少なくなります。

---



## 移行の取り消し

移行の取り消しは可能ですが、これはソースが利用できなくなるような危機的な状況でのみ行うようにしてください。移行を取り消すと、再開することはできません。主な目的は、ソースに訂正不能なエラーがあるときに移行を完了できるようにすることです。少数のファイルまたはディレクトリを除いてファイルシステム全体の移行が完了し、これらのエラーを修正する方法がない(ソースが完全に壊れている)場合は、移行を取り消すことで、ローカルファイルシステムを「通常の」ファイルシステムのステータスに戻すことができます。

BUI で移行を取り消すには、問題になっているシェアの左側の列で、進行状況バーの横にある閉じるアイコンをクリックします。CLI では、ファイルシステムの下 shadow ノードに移動して、cancel コマンドを実行します。

## シャドウファイルシステムのスナップショット取得

シャドウファイルシステムのスナップショットの取得は可能ですが、どの項目のステータスをスナップショットに含めるかは任意に選択できます。まだ移行されていないファイルは存在しないため、実装の詳細 (SUNWshadow 拡張属性など) をスナップショットで確認できることがあります。このスナップショットを使用すると、最初の移行が開始されたあとで移行または変更された個々のファイルも復元できます。このため、移行が完了するまですべてのスナップショットをソースに保持しておくことをお勧めします。そうすることで、移行されていないファイルを必要に応じて引き続きソースから取得できます。保持ポリシーによっては、サービス要件を満たすためにソースでの保持期間を延長することが必要な場合があります。スナップショットの取得は可能ですが、このスナップショットをロールバックしたり、クローンのソースにしたりすることはできません。

## シャドウファイルシステムのバックアップ

シャドウデータをアクティブに移行しているファイルシステムは、ほかのファイルシステムと同様に NDMP を使用してバックアップできます。シャドウ設定はバックアップストリームで保持されますが、ファイルシステムの完全な復元が行われ、シェアが存在しなくなった場合にのみ復元されます。そのようなバックアップストリームから個々のファイルを復元したり、既存のファイルシステムに復元したりすると、矛盾した状態やデータの破壊が発生する可能性があります。ファイルシステム全体の復元中には、ファイルシステムが (部分的な復元による通常の矛盾以上に) 矛盾した状態となり、シャドウ移行はアクティブになりません。復元が完了したときにのみシャドウ設定が復元されます。シャドウソースが存在しなくなったかまたは移動した場合、管理者はエラーがないかどうかを監視し、必要に応じてエラーを修正できます。

## シャドウファイルシステムのレプリケート

シャドウデータをアクティブに移行しているファイルシステムは、通常メカニズムを使用してレプリケートできますが、移行されたデータのみがデータストリームに送信されます。このため、リモート側には部分的なデータだけが含まれ、これらのデータは矛盾した状態を示す場合があります。シャドウ設定はレプリケーションストリームとともに送信されるため、リモートターゲットがフェイルオーバーされると、同じシャドウ設定が保持されます。NDMP バックアップストリームの復元と同様に、この設定はリモートターゲットのコンテキストでは正しくないことがあります。ターゲットのフェイルオーバー後、管理者はエラーがないかどうかを監視し、必要に応じてシャドウ設定を新しい環境に合わせて修正できます。

## ローカルファイルシステムの移行

リモートソースからデータを移行するという主な目的のほかに、同じメカニズムを使用してローカルファイルシステムからアプライアンス上の別のファイルシステムにデータを移行することもできます。これは、ファイルシステムの圧縮バージョンを作成したり、ファイルシステムのレコードを作成したあとでレコードサイズを変更したりするなど、本来なら変更できない設定を変更するために使用できます。このモデルでは、古いシェア（またはシェア内のサブディレクトリ）は読み取り専用になるか、または使用されなくなり、file プロトコルを使用してシャドウプロパティが設定された新しいシェアが作成されます。クライアントがこの新しいシェアにアクセスすると、データがその新しいシェアの設定を使用して書き込まれます。

## シャドウ移行分析の使用

シェアごとの標準的なモニタリングのほかに、分析を通してシステム全体のシャドウ移行をモニターすることもできます。シャドウ移行の分析は「データ移動」カテゴリの下で利用できます。次の3つの基本的な統計を利用できます。

- **シャドウ移行リクエスト** - この統計は、キャッシュされておらず、ファイルシステムのローカルにあることがわかっているファイルまたはディレクトリに対するリクエストを追跡します。これは移行が済んだものと移行が済んでいないものの両方のファイルおよびディレクトリを考慮に入れ、シャドウ移行の一部として発生する待機時間を追跡したり、バックグラウンド移行の進捗状況を追跡するために使用できます。この統計は、ファイル、シェア、プロジェクト、または待機時間ごとに分類できます。現在は同期と非同期の両方の（バックグラウンド）移行が含まれるため、クライアントに表示される待機時間だけを表示することはできません。
- **シャドウ移行バイト数** - この統計は、ファイルまたはディレクトリの内容の移行の一部として転送されるバイト数を追跡します。これはメタデータには当てはまりま

せん(拡張属性、ACL など)。これは転送されるデータの概算を示しますが、ソースデータセットに大量のメタデータがある場合、帯域幅が不釣り合いなほど小さくなります。完全な帯域幅は、ネットワーク分析を表示することによって観察できません。この統計は、ローカルファイル名、シェア、またはプロジェクトごとに分類できます。

- **シャドウ移行の操作** - この統計は、ソースファイルシステムに到達する必要がある操作を追跡します。この統計を使用すると、シャドウ移行のソースからのリクエストの待機時間を追跡できます。この統計は、ファイル、シェア、プロジェクト、または待機時間ごとに分類できます。

## ▼ CLI を使用したシャドウ移行の可能性のテスト

完全な移行を試みる前に、移行をテストして、アプライアンスに適切なアクセス権があることやセキュリティ属性が正しく変換されることを確認することが重要です。基本設定が機能していることを確認できたら、最終移行用にファイルシステムを設定できます。

---

**注記** - 容量計画の一環として、デフォルトのユーザー/グループ割り当て制限を忘れずに考慮してください。これは、ソースが宛先よりも大きい場合にそれらの割り当て制限を超えてしまう可能性があるからです。また、ターゲットのディスク領域が不足すると、シャドウ移行が失敗します。

---

1. アプライアンスがシェアへの root アクセス権を持つようにソースを構成します。通常、このためには NFS ホストベースの例外を追加したり、匿名ユーザーのマッピングを設定したりする必要があります(後者はセキュリティ面でより重要な意味があります)。
2. シャドウ属性を CLI で「nfs://<host>/<snapshotpath>」に設定したり、BUI で「<host>/<snapshotpath>」に設定したりして(プロトコルには「NFS」を選択)、ローカルファイルシステム上にシェアを作成します。スナップショットは、ソースの読み取り専用コピーにするようにしてください。使用できるスナップショットがない場合、読み取り/書き込み可能なソースを使用できますが、未定義のエラーが発生する可能性があります。
3. ファイル構造をトラバースして、ファイルの内容およびアイデンティティーマッピングが正しく保持されていることを検証します。
4. データソースが(スナップショットと同様に)読み取り専用の場合、移行を完了させて、転送中にエラーが発生しなかったことを確認します。

## ▼ CLI を使用したアクティブな NFS サーバーからのデータの移行

次の手順を使用して、アクティブな NFS サーバーから CLI を使用してデータを移行します。procfsの下にあるファイル、または特殊なファイルタイプ(ドア、ソケットおよびイベントポート)に遭遇すると、シャドウ移行が失敗することに注意してください。

1. クライアントを休止させて、新しいサーバーを指すように再構成するための停止時間をスケジュールします。
2. アプライアンスがシェアへの root アクセス権を持つようにソースを構成します。通常、このためには NFS ホストベースの例外を追加したり、匿名ユーザーのマッピングを設定したりする必要があります(後者はセキュリティ面でより重要な意味があります)。
3. ソースを読み取り専用になるように構成します。この段階は技術的にはオプションですが、移行の進行中に誤った構成のクライアントがソースへの書き込みを実行できない場合、適合性を保証するのが非常に簡単になります。
4. シャドウ属性を CLI で「nfs://<host>/<path>」に設定したり、BUI で「<host>/<path>」に設定したりして(プロトコルには「NFS」を選択)、ローカルファイルシステム上にシェアを作成します。
5. クライアントがアプライアンス上のローカルシェアを指すように再構成します。  
この時点で、シャドウ移行がバックグラウンドで実行され、クライアントリクエストが必要に応じて処理されます。上で説明したように、進行状況を監視できます。CLI をスクリプト化することによって、スケジュールされた 1 回の停止時間中に複数のファイルシステムを作成できます。

## スナップショットとクローン

---

**ライセンスについて:** クローニングは無償で評価することが許可されていますが、本番環境で使用するには、機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価期間を過ぎたら、この機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

スナップショットを使用すると、シェアまたはプロジェクトのポイントインタイムコピーを作成できます。これらのコピーは、バックアップとして、または別の作業バージョンとして役に立つ場合があります。

スナップショットとは、ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの読み取り専用のコピーです。プロジェクトのスナップショットを取得することは、プロジェクト内のすべてのシェアのスナップショットを取得することに相当します。スナップショットは最初の作成時に追加の領域を占有しませんが、アクティブなシェアの変更に伴って、スナップショットは最大でスナップショットが取得された時点のシェアのサイズに等しい追加領域を占有します。

クローンはファイルシステムまたは LUN のスナップショットの書き込み可能コピーであり、独立したシェアとして扱えます。プロジェクトのクローンはサポートされていません。スナップショットと同様に、クローンは最初の作成時に追加の領域を使用しませんが、新しいデータがクローンに書き込まれるのに伴って、変更に必要な領域がクローンに関連付けられます。

スナップショットは手動で取得でき、またはスナップショットが 30 分ごと、毎時間、毎日、毎週、または毎月自動的に取得されるように、スケジュールを設定することもできます。一部のスナップショットは、レプリケーション更新時に自動的にアプリケーションによって取得され、これらは名前に `.ndmp` および `.rr` が付いて、スナップショットページに表示されます。

スナップショットの領域管理については、次を参照してください。

### [447 ページの「スナップショットの領域管理」](#)

プロジェクトまたはシェアの手動のスナップショットを取得するか、または自動スナップショットをスケジュールするには、次のタスクを実行します。

- 
- 449 ページの「スナップショットの取得 (BUI)」
  - 450 ページの「スナップショットの取得 (CLI)」
  - 450 ページの「スナップショットのスケジュール (BUI)」
  - 452 ページの「スナップショットのスケジュール (CLI)」
  - 454 ページの「定期スナップショットラベルの設定 (BUI)」
  - 455 ページの「定期スナップショットラベルの設定 (CLI)」

スナップショットのクローンを作成できますが、これは1つのシェアの多数の作業バージョンを作成するために役立つ場合があります。クローンを作成するには、次のタスクを実行します。

- 470 ページの「スナップショットのクローニング (BUI)」
- 472 ページの「スナップショットのクローニング (CLI)」
- 473 ページの「クローンのクローニング」
- 511 ページの「レプリケーションパッケージのクローニング (BUI)」
- 515 ページの「レプリケーションパッケージのクローニング (CLI)」

既存のスナップショットとクローンの関係を判断するには、次のタスクを実行します。

- 474 ページの「スナップショットのクローンの表示 (BUI)」
- 475 ページの「スナップショットのクローンの表示 (CLI)」
- 475 ページの「クローン元の表示 (BUI)」
- 475 ページの「クローン元の表示 (CLI)」

既存のスナップショット、スナップショットスケジュール、およびスナップショット保持ポリシーを表示し、編集するには、次のタスクを実行します。

- 455 ページの「スナップショットとスケジュールの表示 (BUI)」
- 456 ページの「スナップショットとスケジュールの表示 (CLI)」
- 464 ページの「スナップショットの名前の変更 (BUI)」
- 465 ページの「スナップショットの名前の変更 (CLI)」
- 457 ページの「スナップショット保持ポリシーの編集 (BUI)」
- 458 ページの「スナップショット保持ポリシーの編集 (CLI)」

ファイルシステムスナップショットの内容は、`.zfs/snapshot` ファイルシステムディレクトリから参照できます。LUN のスナップショットには直接アクセスできませんが、それらをロールバックターゲットまたはクローンのソースとして使用することはできます。`.zfs/snapshot` ディレクトリを管理し、アクセスするには、次のタスクを実行します。

- 463 ページの「非表示のファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス (CLI)」
- 461 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する (BUI)」

- [462 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する \(CLI\)」](#)
- [464 ページの「表示されているファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス \(CLI\)」](#)

既存のスナップショットを使用して、ファイルシステムや LUN をスナップショットが取得されたときの正確な状態に復元できます。ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトを既存のスナップショットにロールバックするには、次のタスクを実行します。

- [466 ページの「スナップショットへのロールバック \(BUI\)」](#)
- [467 ページの「スナップショットへのロールバック \(CLI\)」](#)

スナップショットを破棄するには、次のタスクを実行します。

- [468 ページの「スナップショットの破棄 \(BUI\)」](#)
- [469 ページの「スナップショットの破棄 \(CLI\)」](#)

## スナップショットの領域管理

スナップショットは、領域管理にとって興味深い問題を抱えています。スナップショットは、ある特定の時点でシェアによって参照される物理ブロックのセットを表します。最初は、このスナップショットで追加の領域が消費されることはありません。しかし、新しいデータが新しいシェア内で上書きされると、アクティブなシェア内のブロックには新しいデータのみが含まれ、古いブロックは最新（および場合によっては古い方）のスナップショットによって「保持」されます。アクティブなシェア内で内容が分岐するにつれて、スナップショットが徐々に追加の領域を消費するようになる可能性があります。所定のサイズのファイルシステムのスナップショットを取り、ファイルシステム内のデータを 100% 書き換える場合は、最初にファイルシステム内にあったデータの 2 倍のデータへの参照を維持する必要があります。

各スナップショットには、一意の領域と参照領域という 2 つの関連する領域統計があります。参照領域の量は、スナップショットが取られたときにファイルシステムによって消費された合計領域です。これは、スナップショットがすべてのデータブロックへの唯一の参照であり続けた場合に、そのスナップショットの理論上の最大サイズを表します。一意の領域は、現在のスナップショットによってのみ参照される物理領域の量を示します。スナップショットが破棄されると、一意の領域はプールの残りで使用できるようになります。

すべてのスナップショットで消費される領域の量は、すべてのスナップショットにまたがる一意の領域の合計と同じではありません。1 つのシェアと 1 つのスナップショットがある場合、すべてのブロックは、そのスナップショット、シェア、またはその両方によって参照される必要があります。しかし、複数のスナップショットがある場合は、特定のスナップショットではなく、スナップショットの一部のサブセット

トによってブロックを参照できます。たとえば、ファイルを作成し、2つのスナップショット X と Y を取り、そのファイルを削除して、別のスナップショット Z を取った場合、ファイル内のブロックは X と Y によって保持され、Z では保持されません。この場合、Z を破棄しても領域は解放されませんが、X と Y の両方を破棄すると解放されます。このことから、スナップショットを破棄すると、隣接したスナップショットによって参照される一意の領域が影響を受ける可能性があります。ただし、スナップショットで消費される領域の合計量は常に減少します。

使用状況の内訳も利用できますが、プロジェクトまたはシェアの合計サイズは、常にすべてのスナップショットによって消費される領域から成ります。割り当て制限と予約をプロジェクトレベルで設定すると、この合計領域全体に物理的な制約を強制できます。また、割り当て制限と予約をファイルシステムレベルで設定して、これらの設定を参照データのみまたは合計データに適用できます。

割り当て制限と予約を参照データまたは合計物理データに適用するかどうかは、管理環境によって異なります。通常、ユーザーがスナップショットを管理していない(つまり、自動スナップショットスケジュールが設定されている)場合には、割り当て制限の計算にスナップショットは含まれません。それ以外の場合、領域不足になっているのにファイルを削除できず、ユーザーが困惑する可能性があります。スナップショットの知識とそれらのスナップショットを管理する手段がなければ、管理者の介入なしにそのような状況を修復できなくなる可能性があります。このシナリオでは、スナップショットは、バックアップ機能を提供するためにシステムの動作に含まれるオーバーヘッドコストを表しています。一方、物理領域の要件に従ってユーザーが課金される環境もあります。その場合、スナップショットは、ユーザーがデータセットの解約率を考慮して要件を満たす、ある程度のバックアップを確保できる選択肢となります。このような環境では、スナップショットを含め、物理データの合計に基づいて割り当て制限を強制する方が理にかなっています。スナップショットのコストを理解すれば、ユーザーは(アプライアンスの専用のロールを使用して)スナップショットをアクティブに管理する手段を手に入れることができます。

### ユーザー生成スナップショットの管理

「ターゲットでユーザー生成スナップショットを保持します」プロパティーにより、ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスで、ユーザー生成のスナップショットを独立して管理できます。このオプションが設定されていると、ソースで元のスナップショットが削除された場合でも、ユーザー生成のスナップショットがターゲットに残されます。このプロパティーが設定されているかぎり、ターゲットでユーザー生成のスナップショットは破棄されません。必要なくなった保持されているユーザー生成のスナップショットは、ターゲットアプライアンスから明示的に破棄する必要があります。詳細については、スナップショットの破棄 (**BUI** または **CLI**) に関するセクションを参照してください。

### 関連トピック



- [401 ページの「シェアの領域管理」](#)
- [530 ページの「ディスク間バックアップでのレプリケーションの使用」](#)

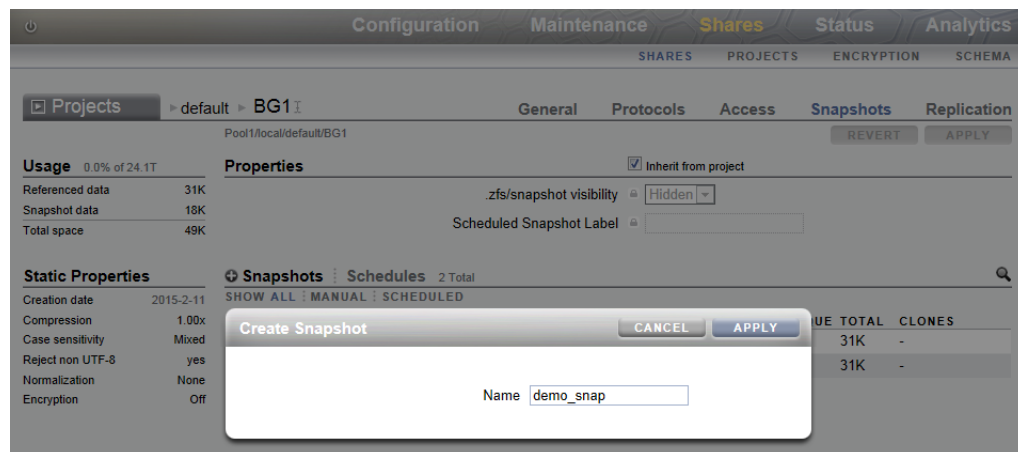


## ▼ スナップショットの取得 (BUI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの手動のスナップショットを取得するには、次の手順を実行します。

定期的な間隔で自動スナップショットをスケジュールするには、[450 ページの「スナップショットのスケジュール \(BUI\)」](#)を参照してください。

1. スナップショットを取得するシェアまたはプロジェクトに移動します。
  - a. ファイルシステムのスナップショットを取得するには、「シェア」>「シェア」に移動します。
  - b. LUN のスナップショットを取得するには、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
  - c. プロジェクトのスナップショットを取得するには、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. マウスのポインタをシェアまたはプロジェクトの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 「スナップショット」の横の「追加」アイコン  をクリックします。
5. スナップショットの名前を入力します。



6. 「適用」をクリックします。

## ▼ スナップショットの取得 (CLI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの手動のスナップショットを取得するには、次の手順を実行します。

定期的な間隔で自動スナップショットをスケジュールするには、[452 ページの「スナップショットのスケジュール \(CLI\)」](#)を参照してください。

1. スナップショットを取得するシェアまたはプロジェクトに移動します。
  - a. プロジェクトのスナップショットを取得するには、**shares** に移動して、プロジェクトを選択します。

```
hostname:shares> select myproject
hostname:shares myproject>
```
  - b. ファイルシステムまたは LUN のスナップショットを取得するには、**shares** に移動して、シェアを含むプロジェクトを選択し、シェアを選択します。

```
hostname:shares> select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```
2. **snapshots** と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
```
3. **snapshot** コマンドに続けて、新しいスナップショットに付ける名前を使用します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> snapshot demo_snap
```

## ▼ スナップショットのスケジュール (BUI)



ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの自動スナップショットを構成し、これらのスナップショットの保持ポリシーを設定するには、次の手順を実行します。

自動スナップショットは、30 分ごと、毎時、毎日、毎週、または毎月取得でき、`.auto[-<snaplabel>]-<timestamp>` という名前が付けられます。「スナップショット」リストの「作成」列で、時間はローカル (クライアントブラウザ) のタイムゾーンで表示されます。ただし、時間は UTC 形式で保存および実行され、サマータイムなどの慣習は考慮されません。たとえば、PST 午前 10 時 (UTC-8) にスケジュールされたスナップショットは、UTC 18:00 に保存および実行され、この時間がスナップショット名にタイムスタンプとして表示されます。

自動スナップショットは、プロジェクトまたはシェアのどちらか一方だけに設定できます。それ以外の場合、スケジュールや保持ポリシーの重複によって、両方のスケジュールを保証することは不可能になります。間隔を削除した場合やその保持ポリシーを変更した場合、新しいスケジュールに当てはまらない自動スナップショットは

すべて、ただちに破棄されます。クローンが存在する自動スナップショットは無視されます。

**注記** - 以前のバージョンのソフトウェアでは、1分ごとの自動スナップショットも可能でした。ユーザーがシステムに過剰な負荷をかけることを防ぐため、この機能は 2010. Q3 リリースで削除されました。ソフトウェアがロールバックされた場合、既存の分数は保持されます。以前のインスタンスは既存のスケジュールに従って期限切れになりますが、新しいスナップショットが作成されることはありません。この間隔が指定されたシェアまたはプロジェクトが見つかった場合は、アラートが通知されます。

1. シェアまたはプロジェクトに移動します。
  - a. ファイルシステムのスナップショットをスケジュールするには、「シェア」 > 「シェア」に移動します。
  - b. LUN のスナップショットをスケジュールするには、「シェア」 > 「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
  - c. プロジェクトのスナップショットをスケジュールするには、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. マウスのポインタをシェアまたはプロジェクトの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 「スケジュール」をクリックします。
5. 「スケジュール」の横の「追加」アイコン  をクリックします。
6. 各フィールドを適切に設定します。
  - a. 頻度を 30 分ごと、毎時、毎日、毎週、または毎月を設定して、スナップショットが自動的に取得される頻度を指定します。
  - b. スナップショットが自動的に取得される正確な時間を設定します。  
30 分ごとまたは毎時のスナップショットの場合、30 分または毎時間後にスナップショットが取得される分数を選択できます。毎日のスナップショットの場合、スナップショットが取得される時間と分を選択でき、毎週または毎月のスナップショットの場合、日、時間、および分を指定できます。
  - c. 「最大保持時間」プロパティを設定して、保持するべきスナップショット数を指定するか、チェックボックスのチェックマークを外して、保持ポリシーを設定しません。

自動スナップショットは、無期限に保持することも (ただし、30 分ごとおよび毎時のスナップショットには、それぞれ 48 と 24 の上限があります)、特定の数に制限することもできます。スナップショットの数がここで指定した数を超えると、もっとも古いスナップショットが最初に削除されます。

7. 「適用」をクリックします。

## ▼ スナップショットのスケジュール (CLI)

シェアの自動スナップショットを構成し、それらのスナップショットの保持ポリシーを設定するには、次の手順を実行します。

自動スナップショットは、30 分ごと、毎時、毎日、毎週、または毎月取得でき、`.auto[-<snaplabel>-<timestamp>` という名前が付けられます。スナップショットの作成時間は UTC 形式で保存および実行され、サマータイムなどの慣習は考慮されません。たとえば、PST 午前 10 時 (UTC-8) にスケジュールされたスナップショットは、UTC 18:00 に保存および実行され、この時間がスナップショット名にタイムスタンプとして表示されます。

自動スナップショットは、プロジェクトまたはシェアのどちらか一方だけに設定できます。それ以外の場合、スケジュールや保持ポリシーの重複によって、両方のスケジュールを保証することは不可能になります。間隔を削除した場合やその保持ポリシーを変更した場合、新しいスケジュールに当てはまらない自動スナップショットはすべて、ただちに破棄されます。クローンが存在する自動スナップショットは無視されます。

---

**注記** - 以前のバージョンのソフトウェアでは、1 分ごとの自動スナップショットも可能でした。ユーザーがシステムに過剰な負荷をかけることを防ぐため、この機能は 2010. Q3 リリースで削除されました。ソフトウェアがロールバックされた場合、既存の分数は保持されます。以前のインスタンスは既存のスケジュールに従って期限切れになりますが、新しいスナップショットが作成されることはありません。この間隔が指定されたシェアまたはプロジェクトが見つかった場合は、アラートが通知されます。

---

1. **shares** に移動して、スナップショットを取得するプロジェクトまたはシェアを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```

2. **snapshots automatic** と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots automatic
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic>
```

3. **create** コマンドを使用して、コミットされていないスケジュールコンテキストを入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> create
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)>
```

4. **set** コマンドを使用して、各フィールドを適切に設定します。

- a. 頻度を **halfhour**、**hour**、**day**、**week**、または **month** に設定して、スナップショットが自動的に取得される頻度を指定します。
- b. 日、時、分を設定して、スナップショットが自動的に取得される正確な時間を指定します。

30 分ごとまたは毎時のスナップショットの場合、30 分または毎時間後にスナップショットが取得される分数を選択できます。毎日のスナップショットの場合、スナップショットが取得される時間と分を選択でき、毎週または毎月のスナップショットの場合、日、時間、および分を指定できます。

- c. **keep** プロパティをこのスケジュールで保持するスナップショット数に設定します。

自動スナップショットは、無期限に保持することも (ただし、30 分ごとおよび毎時のスナップショットには、それぞれ 48 と 24 の上限があります)、特定の数に制限することもできます。スナップショットの数がここで指定した数を超えると、もっとも古いスナップショットが最初に削除されます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> set frequency=day
frequency = day (uncommitted)
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> set hour=14
hour = 14 (uncommitted)
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> set minute=30
minute = 30 (uncommitted)
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> set keep=7
keep = 7 (uncommitted)
```

現在のコミットされていない設定を表示するには **get** コマンドを使用します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> get
frequency = day (uncommitted)
day = (unset)
hour = 14 (uncommitted)
minute = 30 (uncommitted)
keep = 7 (uncommitted)
```

5. **commit** と入力して変更をコミットし、自動スナップショットスケジュールを作成します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic (uncommitted)> commit
```

**list** コマンドを使用して、新しいスケジュールを表示できます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> list
NAME FREQUENCY DAY HH:MM KEEP
automatic-000 day - 14:30 7
```

6. **done** と入力して完了します。


```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> done
hostname:shares myproject/demo_share snapshots>
```

## ▼ 定期スナップショットラベルの設定 (BUI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの定期スナップショットのラベルを設定するには、次の手順を実行します。

このオプションのプロパティは、ユーザー定義のラベルを各定期スナップショットに追加し、デフォルトは空白です。ラベルは、個別のシェアに設定するか、プロジェクトに設定してそのシェアに継承できますが、両方に設定することはできません。

スナップショットラベルは、スナップショットが取得されたプロジェクトやシェアの識別に役立つ場合があります。たとえば、「project1:share1」は、project1 内の share1 に対して取得された定期スナップショットを示すことができます。ラベルには 35 文字までの英数字を使用でき、特殊文字 \_ - . : を含めることができます。

1. 定期スナップショットラベルを設定するシェアまたはプロジェクトに移動します。
  - a. ファイルシステムのラベルを設定するには、「シェア」>「シェア」に移動します。
  - b. LUN のラベルを設定するには、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
  - c. プロジェクトのラベルを設定するには、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. マウスのポインタを該当するシェアまたはプロジェクトの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 「プロパティ」で、設定するラベルを「定期スナップショットラベル」フィールドに入力します。
5. 「適用」をクリックして変更を保存します。  
このラベルは、今後取得される各定期スナップショットの名前に含まれます。ラベルはタイムスタンプの前に表示されるため、スナップショット名は `.auto-<snaplabel>-<timestamp>` になります。

## ▼ 定期スナップショットラベルの設定 (CLI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの定期スナップショットのラベルを設定するには、次の手順を実行します。

このオプションのプロパティは、ユーザー定義のラベルを各定期スナップショットに追加し、デフォルトは空白です。ラベルは、個別のシェアに設定するか、プロジェクトに設定してそのシェアに継承できますが、両方に設定することはできません。

スナップショットラベルは、スナップショットが取得されたプロジェクトやシェアの識別に役立つ場合があります。たとえば、「project1:share1」は、project1 内の share1 に対して取得された定期スナップショットを示すことができます。ラベルには 35 文字までの英数字を使用でき、特殊文字 \_-.: を含めることができます。

1. **shares** に移動して、ラベルを設定するファイルシステム、LUN、またはプロジェクトを選択します。


```
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```

2. **set snaplabel** コマンドを使用して、定期スナップショットラベルを作成します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> set snaplabel=myproject:demo_share
```

## ▼ スナップショットとスケジュールの表示 (BUI)

特定のファイルシステム、LUN、またはプロジェクトのスナップショットおよび自動スナップショットスケジュールを表示するには、次の手順を実行します。

1. シェアまたはプロジェクトに移動します。
  - a. ファイルシステムのスナップショットおよびスナップショットスケジュールを表示するには、「シェア」>「シェア」に移動します。
  - b. LUN のスナップショットおよびスナップショットスケジュールを表示するには、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
  - c. プロジェクトのスナップショットおよびスナップショットスケジュールを表示するには、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. マウスのポインタをシェアまたはプロジェクトの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。

#### 4. スナップショットまたはスナップショットスケジュールを表示します。

- a. 「スナップショット」でそのシェアのスナップショットを表示し、オプションで「手動」または「定期」を選択して、手動のスナップショットのみまたは定期スナップショットのみを表示します。

スナップショットごとに、名前 (名前)、作成時間 (作成)、スナップショットによって使用されている一意の領域の量 (一意)、スナップショットによって参照されている領域の合計量 (合計)、スナップショットのクローン数 (クローン) を参照できます。

- b. 「スケジュール」をクリックして、そのシェアの自動スナップショットスケジュールを表示します。

スケジュールごとに、スナップショットが取得される頻度、取得される正確な日時、および保存されているスナップショット数を参照できます。

## ▼ スナップショットとスケジュールの表示 (CLI)

特定のファイルシステム、LUN、またはプロジェクトのスナップショットおよび自動スナップショットスケジュールを表示するには、次の手順を実行します。

1. **shares** に移動して、プロジェクトまたはシェアを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```

2. **snapshots** と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
hostname:shares myproject/demo_share snapshots>
```

3. 該当するコマンドを使用して、スナップショットまたはスナップショットスケジュールを表示します。

- a. **list** と入力し、このシェアまたはプロジェクトのスナップショットのリストを表示します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> list
demo_snap1
demo_snap2
hostname:shares myproject/demo_share snapshots>
```

スナップショットを選択し、**list** コマンドを使用して、次のプロパティを表示できます。

- **creation** - UTC 形式でのスナップショットの作成の日時
- **numclones** - スナップショットのクローン数



- `isauto` - スナップショットは手動で作成された (`false`) か、または自動スナップショットスケジュールで作成された (`true`) か
- `pool` - スナップショットが含まれるストレージプール
- `canonical_name` - スナップショットの場所
- `shadowsnap` - スナップショットがシャドウ移行時に取得された (`true`) か、そうでない (`false`) か
- `space_unique` - スナップショットで使用されている一意の領域の量
- `space_data` - スナップショットが参照する領域の合計量。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> select demo_snap1
hostname:shares myproject/demo_share snapshots demo_snap1> list
Properties:
 creation = Thu Jan 22 2015 20:19:49 GMT+0000(UTC)
 numclones = 1
 isauto = false
 pool = pool1
 canonical_name = pool1/local/myproject/demo_share@demo_snap1
 shadowsnap = false
 space_unique = 0
 space_data = 31K
```

- b. `automatic` と入力し、`list` コマンドを使用して、このシェアまたはプロジェクトの自動スナップショットスケジュールのリストを表示します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> automatic
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> list
Properties:
 convert = false


Automatics:

NAME FREQUENCY DAY HH:MM KEEP
automatic-000 day - 00:00 4
automatic-001 month 01 00:00 12
```

## ▼ スナップショット保持ポリシーの編集 (BUI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトのスナップショット保持ポリシーを編集するには、次の手順を実行します。スナップショット保持ポリシーは、自動スナップショットスケジュールに含まれます。

1. 該当するプロジェクトまたはシェアに移動します。
  - a. スケジュールがプロジェクトに該当する場合は、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
  - b. スケジュールがファイルシステムに該当する場合は、「シェア」>「シェア」に移動します。

- c. スケジュールが LUN に該当する場合は、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
2. マウスのポインタを該当するプロジェクトまたはシェアの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 「スケジュール」をクリックします。
5. スケジュールの「最大保持時間」プロパティを設定して、スケジュールから保持すべき自動スナップショット数を指定するか、保持ポリシーを設定しないよう、チェックボックスのチェックマークを外します。

自動スナップショットは、無期限に保持することも (ただし、30 分ごとおよび毎時のスナップショットには、それぞれ 48 と 24 の上限があります)、特定の数に制限することもできます。スナップショットの数がここで指定した数を超えると、もっとも古いスナップショットが最初に削除されます。

## ▼ スナップショット保持ポリシーの編集 (CLI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトのスナップショット保持ポリシーを編集するには、次の手順を実行します。スナップショット保持ポリシーは、自動スナップショットスケジュールに含まれます。

1. **shares** に移動して、プロジェクトまたはシェアを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```

2. **snapshots automatic** と入力します。

`list` コマンドを使用して、このシェアまたはプロジェクトの自動スナップショットスケジュールのリストを表示できます。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots automatic
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> list
Properties:
 convert = false

Automatics:

NAME FREQUENCY DAY HH:MM KEEP
automatic-000 hour - -:02 4
```

3. 編集するスケジュールを選択します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> select automatic-000
```

4. **keep** プロパティをこのスケジュールで保持するスナップショット数に設定します。  
**keep** プロパティをこのスケジュールで保持するスナップショット数に設定します (30 分ごとおよび毎時のスナップショットの場合、この値はそれぞれ 48 と 24 の上限があります)。スナップショットの数がここで指定した数を超えると、もっとも古いスナップショットが最初に削除されます。

保持ポリシーを設定しない場合は、**keep=0** と設定できます。この場合、そのスケジュールからの自動スナップショットはいつまでも保持されます (30 分ごとおよび毎時のスナップショットの場合を除きます。この場合はそれぞれ 48 と 24 の上限があります)。



```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic-000> set keep=4
keep=4 (uncommitted)
```

5. **commit** と入力して変更を保存します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic-000> commit
```

## ▼ スナップショットスケジュールの削除 (BUI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの自動スナップショットスケジュールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 該当するプロジェクトまたはシェアに移動します。
  - a. スケジュールがプロジェクトに該当する場合は、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
  - b. スケジュールがファイルシステムに該当する場合は、「シェア」>「シェア」に移動します。
  - c. スケジュールが LUN に該当する場合は、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
2. マウスのポインタを該当するプロジェクトまたはシェアの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 「スケジュール」をクリックします。
5. マウスのポインタを削除するスケジュールの上に置いて、「削除」アイコン  をクリックします。  
既存の自動スナップショットが破棄される可能性があることを警告するウィンドウが表示されます。

6. 既存の自動スナップショットを維持する場合は、「変換」をクリックして、それらを手動のスナップショットに変換します。そうでない場合は、「破棄」をクリックして、それらを破棄します。

## ▼ スナップショットスケジュールの削除 (CLI)

ファイルシステム、LUN、またはプロジェクトの自動スナップショットスケジュールを削除するには、次の手順を実行します。

1. プロジェクトまたはシェアに移動して、選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
```

2. **snapshots automatic** と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots automatic
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic>
```

**list** コマンドを使用して、このシェアまたはプロジェクトの自動スナップショットスケジュールのリストを表示できます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> list
Properties:
 convert = false
```

Automatics:

| NAME          | FREQUENCY | DAY | HH:MM | KEEP |
|---------------|-----------|-----|-------|------|
| automatic-000 | day       | -   | 00:00 | 4    |

3. このスケジュールで取得された既存の自動スナップショットを維持する場合は、**convert** プロパティを **true** に設定します。

このプロパティを **convert = false** のままにした場合、スケジュールを破棄すると、このスケジュールで取得された自動スナップショットが破棄されます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> set convert=true
convert = true
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> commit
```

**list** コマンドを使用して、変更を表示できます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> list
Properties:
 convert = true
```

Automatics:

| NAME          | FREQUENCY | DAY | HH:MM | KEEP |
|---------------|-----------|-----|-------|------|
| automatic-000 | day       | -   | 00:00 | 4    |

4. **destroy** コマンドに、破棄する自動スナップショットスケジュールの名前を続けて使用します。

確認するように求められます。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots automatic> destroy automatic-000
This will destroy "automatic-000". Are you sure? (Y/N)
```

5. Y と入力して確定します。

```
This will destroy "automatic-000". Are you sure? (Y/N) Y
```

## ▼ ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する (BUI)


デフォルトで非表示にされている `.zfs/snapshot` ディレクトリがファイルシステム内のほかのディレクトリと同様に表示されるように設定するには、次の手順を実行します。

`.zfs/snapshot` ディレクトリにはファイルシステム上のすべてのスナップショットのリストが含まれます。スナップショットは、通常のファイルシステムデータと同じようにアクセスできますが、読み取り専用です。デフォルトでは、ディレクトリの内容を一覧表示するときに `.zfs` ディレクトリは非表示になります。この設定により、バックアップソフトウェアが新規データだけでなく誤ってスナップショットもバックアップすることを妨げます。

---

注記 - `.zfs/snapshot` ディレクトリを「表示」に設定すると、バックアップソフトウェアがライブデータのほかにスナップショットもバックアップする可能性があります。

---

1. 「シェア」 > 「シェア」 に移動します。
2. マウスのポインタをファイルシステムの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」 タブをクリックします。
4. 「プロパティ」の横の「プロジェクトから継承」ボックスをオフにするか、「`.zfs/スナップショット表示`」の横のロックアイコンをクリックします。
5. 「`.zfs/スナップショット表示`」の横のドロップダウンメニューから「表示」を選択します。
6. 「適用」をクリックして変更を保存します。

ディレクトリを再度非表示にするには、このページに戻って、ドロップダウンメニューから「非表示」を選択して、「適用」をクリックします。

## ▼ ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する (CLI)

デフォルトで非表示にされている `.zfs/snapshot` ディレクトリがファイルシステム内のほかのディレクトリと同様に表示されるように設定するには、次の手順を実行します。

`.zfs/snapshot` ディレクトリにはファイルシステム上のすべてのスナップショットのリストが含まれます。スナップショットは、通常のファイルシステムデータと同じようにアクセスできますが、読み取り専用です。デフォルトでは、ディレクトリの内容を一覧表示するときに `.zfs` ディレクトリは非表示になります。この設定により、バックアップソフトウェアが新規データだけでなく誤ってスナップショットもバックアップすることを妨げます。

---

注記 - `.zfs/snapshot` ディレクトリを「表示」に設定すると、バックアップソフトウェアがライブデータのほかにスナップショットもバックアップする可能性があります。

---

1. ファイルシステムシェアに移動して、選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
hostname:shares myproject/demo_share>
```

2. `set snapdir` コマンドを使用して、ファイルシステムスナップショットディレクトリを `visible` に設定します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> set snapdir=visible
snapdir=visible(uncommitted)
```

3. `commit` と入力して変更を保存します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> commit
```

4. ディレクトリを再度非表示にするには、このコンテキストに戻り、`set snapdir` コマンドを使用して、ディレクトリを非表示に設定してから、`commit` と入力して変更を保存します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> set snapdir=hidden
snapdir=hidden(uncommitted)
hostname:shares myproject/demo_share> commit
```

### 関連トピック

- [463 ページの「非表示のファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス \(CLI\)」](#)
- [461 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する \(BUI\)」](#)

- [464 ページの「表示されているファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス \(CLI\)」](#)

## ▼ 非表示のファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス (CLI)

次の手順を実行して、ファイルシステムのルートのある `.zfs/snapshot` にあるファイルシステムのスナップショットにデータプロトコルを介してアクセスします。

`.zfs/snapshot` ディレクトリにはファイルシステム上のすべてのスナップショットのリストが含まれます。スナップショットは、通常のファイルシステムデータと同じようにアクセスできますが、読み取り専用です。デフォルトでは、ディレクトリの内容を一覧表示したときに `.zfs` ディレクトリは表示されませんが、明示的に検索すればアクセスできます。これにより、バックアップソフトウェアが新規データだけでなく誤ってスナップショットもバックアップすることを防いでいます。

1. ターミナルウィンドウで、シェアをマウントしたディレクトリに移動します。
2. `.zfs/snapshot` を検索します。

ここから、このファイルシステムのスナップショットを一覧表示し、各スナップショットの内容を確認できます。

### 例 17 `.zfs/snapshot` へのアクセス

この例では、2つのファイルシステムのスナップショットがあります。最初のスナップショットには、3つのファイルが含まれます。

```
$ ls -l /mnt/demo
$ ls -l /mnt/demo/.zfs/snapshot
demo_snap1
demo_snap2
$ ls -l /mnt/demo/.zfs/snapshot/demo_snap1
file1
file2
file3
```

### 関連トピック

- [461 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する \(BUI\)」](#)
- [462 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する \(CLI\)」](#)
- [464 ページの「表示されているファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス \(CLI\)」](#)

## ▼ 表示されているファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス (CLI)

次の手順を実行して、`.zfs/snapshot` ディレクトリ内のファイルシステムのスナップショットを表示したあとにアクセスします。

始める前に [462 ページの「ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する \(CLI\)」](#) に説明するように、`.zfs/snapshot` ディレクトリを「表示」に設定します。

1. シェアをマウントしたディレクトリに移動します。
2. そのディレクトリ内の `.zfs/snapshot` に移動します。  
ここから、このファイルシステムのスナップショットを一覧表示し、各スナップショットの内容を確認できます。


## ▼ スナップショットの名前の変更 (BUI)

次の手順を使用して、既存の手動のスナップショットの名前を変更します。名前に `.auto`、`.rr`、または `.ndmp` が含まれる自動スナップショットの名前は変更できません。

大きなプロジェクトのスナップショットに含まれるシェアのスナップショットの名前を変更した場合、そのスナップショットは同じスナップショットの一部とはみなされなくなります。また、スナップショットの名前を親プロジェクト内のスナップショットと同じ名前になるように変更した場合、そのスナップショットはそのプロジェクトのスナップショットの一部として扱われます。

- 始める前に
- この手順を実行するには、スーパーユーザー特権か、プロジェクトおよびシェアの範囲内の次のいずれかのロール承認を持っている必要があります。
    - `renameSnap` - スナップショットの名前を変更できます。
    - `rename` - スナップショット名を含む、プロジェクトとシェアの名前を変更できます。
  - ロールに承認を追加するには、[173 ページの「ロールの承認の編集 \(BUI\)」](#) を参照してください。
1. 名前を変更するスナップショットを含むシェアまたはプロジェクトに移動します。
    - ファイルシステムのスナップショットの名前を変更するには、「シェア」>「シェア」に移動します。
    - LUN のスナップショットの名前を変更するには、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。



- プロジェクトのスナップショットの名前を変更するには、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. 名前を変更するスナップショットを含むシェアまたはプロジェクトにマウスを移動し、「編集」アイコン  をクリックします。
  3. 「スナップショット」タブをクリックします。
  4. 「スナップショット」で、名前を変更するスナップショットの名前をクリックします。  
スナップショット名がテキスト入力ボックスに変わります。
  5. スナップショットの新しい名前を入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。使用可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
  6. Enter キーを押して変更を確定します。

#### 関連トピック

- [177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)
- [178 ページの「ユーザー承認」](#)

## ▼ スナップショットの名前の変更 (CLI)

次の手順を使用して、既存の手動のスナップショットの名前を変更します。自動スナップショットの名前は変更できません。

大きなプロジェクトのスナップショットに含まれるシェアのスナップショットの名前を変更した場合、そのスナップショットは同じスナップショットの一部とはみなされなくなります。また、スナップショットの名前を親プロジェクト内のスナップショットと同じ名前になるように変更した場合、そのスナップショットはそのプロジェクトのスナップショットの一部として扱われます。

- 始める前に
- この手順を実行するには、スーパーユーザー特権か、プロジェクトおよびシェアの範囲内の次のいずれかのロール承認を持っている必要があります。
    - `renameSnap` - スナップショットの名前を変更できます。
    - `rename` - スナップショット名を含む、プロジェクトとシェアの名前を変更できます。
  - ロールに承認を追加するには、[174 ページの「ロールの承認の編集 \(CLI\)」](#) を参照してください。

1. **shares** に移動して、プロジェクトを選択するか、プロジェクトを選択してからシェアを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
```

2. **snapshots** と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
```

3. **list** と入力し、プロジェクトまたはシェアのスナップショットのリストを表示します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> list
demo_snap1
demo_snap2
```

4. スナップショットの名前を変更するには、**rename** に現在のスナップショット名、空白、次に新しいスナップショット名を続けて入力します。  
名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。使用可能な文字は、英数字と特殊文字 `_-.:` です

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> rename demo_snap1 new_name
```

#### 関連トピック

- [177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)
- [178 ページの「ユーザー承認」](#)

## ▼ スナップショットへのロールバック (BUI)



ファイルシステムまたは LUN を既存のスナップショットにロールバックまたは復元するには、次の手順を実行します。

ロールバックが発生すると、新しい方のスナップショット (および新しい方のスナップショットのクローン) が破棄され、アクティブなデータはスナップショットが取得されたときの状態に戻ります。スナップショットにはデータのみが含まれ、プロパティは含まれないため、スナップショットが取られたあとで変更されたプロパティ設定はすべて残ります。ロールバック時に、ファイルシステムルートディレクトリのアクセスの変更は失われます。



**注意** - この手順は元に戻せません。

1. 名前を変更するスナップショットを含むシェアまたはプロジェクトに移動します。
  - ファイルシステムのスナップショットを復元するには、「シェア」>「シェア」に移動します。

- LUN のスナップショットを復元するには、「シェア」>「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
- 2. 復元するスナップショットを含むシェアの上にマウスを移動し、「編集」アイコン  をクリックします。
- 3. 「スナップショット」タブをクリックします。
- 4. 復元するスナップショットの上にマウスを移動し、「ロールバック」アイコン  をクリックして、アクションを確定します。

## ▼ スナップショットへのロールバック (CLI)

ファイルシステムまたは LUN を既存のスナップショットにロールバックまたは復元するには、次の手順を実行します。

スナップショットの復元では、それよりも新しいスナップショットおよびそれらのクローンをすべて破棄する必要があります。これにより、シェアの内容は、スナップショットが作成された時点の内容に戻ります。シェアのプロパティ設定は影響を受けませんが、ロールバック時に、ファイルシステムルートディレクトリのアクセスの変更は失われます。



**注意** - この手順は元に戻せません。

1. 復元するスナップショットを含むシェアに移動し、選択します。
 

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
```
2. **snapshots** と入力します。
 

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
```
3. **list** と入力し、プロジェクトまたはシェアのスナップショットのリストを表示します。
 

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> list
demo_snap1
demo_snap2
```
4. 復元するスナップショットを選択してから、**rollback** コマンドを入力します。
 



```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> select demo_snap1
hostname:shares myproject/demo_share@demo_snap1> rollback
```
5. **Y** と入力して確定します。

```
hostname:shares myproject/demo_share@demo_snap1> rollback
Rolling back will revert data to snapshot, destroying newer data. Active initiators will be
disconnected.

Continue? (Y/N)
hostname: shares myproject/demo_share@demo_snap1> Y
```

## ▼ スナップショットの破棄 (BUI)

スナップショットを破棄するには、次の手順を実行します。

- 始める前に
- この手順を実行するには、スーパーユーザー特権か、プロジェクトおよびシェアの  
スコープ内の次のいずれかのロール承認を持っている必要があります。
    - `destroySnap` - スナップショットを破棄できます。
    - `destroy` - スナップショット名を含む、プロジェクトとシェアを破棄できま  
す。
  - ロールに承認を追加するには、[173 ページの「ロールの承認の編集 \(BUI\)」](#)を参照  
してください。
1. スナップショットに移動します。
    - ファイルシステムまたは LUN のスナップショットの場合、「シェア」>「シェ  
ア」に移動し、ファイルシステムまたは LUN のどちらのスナップショットを破  
棄するかに応じて、「ファイルシステム」または「LUN」をクリックします。
    - プロジェクトのスナップショットの場合、「シェア」>「プロジェクト」に移動  
します。
  2. 該当するシェアの上にマウスを移動し、「編集」アイコン  をクリックします。
  3. 「スナップショット」タブをクリックします。
  4. 破棄するスナップショットの上にマウスを移動し、「破棄」アイコン  をクリック  
します。  
確認のダイアログボックスが表示されます。  
クローンがこのスナップショットから作成された場合、影響を受けるクローンのリス  
トが表示されます。スナップショットを破棄すると、そのスナップショットのすべ  
てのクローンおよびそれらのクローンの子孫も破棄されます。
  5. 「了解」をクリックして確定します。

### 関連トピック

- [177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)

- [178 ページの「ユーザー承認」](#)

## ▼ スナップショットの破棄 (CLI)

スナップショットを破棄するには、次の手順を実行します。

- 始める前に
- この手順を実行するには、スーパーユーザー特権か、プロジェクトおよびシェアのスコープ内の次のいずれかのロール承認を持っている必要があります。
    - `destroySnap` - ユーザーはスナップショットのみを破棄できます。
    - `destroy` - スナップショットを含む、プロジェクトとシェアを削除するための権限を付与します。
  - ロールに承認を追加するには、[174 ページの「ロールの承認の編集 \(CLI\)」](#)を参照してください。

1. `shares` に移動して、プロジェクトを選択するか、プロジェクトを選択してからシェアを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_share
```

2. `snapshots` と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
```

3. `list` と入力し、プロジェクトまたはシェアのスナップショットのリストを表示します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> list
demo_snap1
demo_snap2
```

4. 2つの方法のいずれかを使用して、個々のスナップショットを削除するには、`destroy` コマンドを使用します。

- 削除するスナップショットを選択し、`destroy` と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> select demo_snap1
hostname:shares myproject/demo_share@demo_snap1> destroy
```

- `destroy` に続いてスナップショット名を入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> destroy demo_snap1
```

5. `Y` と入力してアクションを確認します。

```
This will destroy all data in "demo_snap1"! Are you sure? (Y/N) Y
```

### 関連トピック

- [177 ページの「ユーザーとロールについて」](#)

- [178 ページの「ユーザー承認」](#)

## ▼ スナップショットのクローニング (BUI)



**ライセンスについて:** クローニングは無償で評価することが許可されていますが、本番環境で使用するには、機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価期間を過ぎたら、この機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

ファイルシステムまたは LUN の既存のスナップショットのクローンを作成するには、次の手順を実行します。

---

**注記 - プロジェクトのクローンはサポートされていません。**

---

1. クローンを作成するシェアに移動します。
  - a. ファイルシステムのクローンを作成するには、「シェア」 > 「シェア」に移動します。
  - b. LUN のクローンを作成するには、「シェア」 > 「シェア」に移動し、「LUN」をクリックします。
2. マウスのポインタをシェアの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. クローンを作成するスナップショットの上にマウスを移動し、「クローン」アイコン  をクリックします。

新しいクローンの設定とオプションのダイアログボックスが表示されます。
5. 各フィールドを適切に設定します。
  - a. 「プロジェクト」ドロップダウンメニューから、宛先のプロジェクトを選択します。

デフォルトでは、クローンは現在のプロジェクト内に作成されますが、別のプロジェクト内に作成することもできます。
  - b. クローンの名前を入力します。

- c. (オプション)「マウントポイント」の横のロックアイコンをクリックして、クローンのマウントポイントを設定します。

このフィールドをロックしたままにすると、クローンのマウントポイントがデフォルトの /export/<sharename> のままになります。

- d. (オプション)「リソース名」の横のロックアイコンをクリックして、次の値のいずれかを入力します。

- **off** - SMB が無効になります。
- **on** - SMB が有効になるため、SMB を介してクローンをシェアできます。SMB のクローンの名前はアプライアンスのクローンの名前に一致します。
- **<pick\_a\_name>** - SMB が有効になるため、SMB を介してクローンを共有できます。SMB のクローンの名前は、アプライアンスのクローンの名前ではなくユーザーがここで指定した名前です。

このフィールドをロックしたままにすると、「リソース名」プロパティがクローニングするスナップショットから継承されます。

- e. (オプション)「鍵を継承する」チェックボックスにチェックマークを付けるかチェックボックスのチェックマークを外して、クローンに継承させるキーストア(ローカルまたは OKM) と暗号化鍵の名前を選択します。

ボックスにチェックマークを付けると、クローンのキーストアと鍵名は、宛先プロジェクトのキーストアと鍵名になります。

ボックスのチェックマークを外すと、クローンのキーストアと鍵名は、親シェアのキーストアと鍵名になります。または、ドロップダウンメニューから別のキーストアと鍵名を選択します。

- f. (オプション)「その他のローカル設定を保持」チェックボックスにチェックマークを付けて、継承されるプロパティをすべて、新しいクローンのローカル設定として保持させます。

このフィールドは、継承されるプロパティが、親データセットから継承されるか、宛先のプロジェクトから継承されるかを指定します。デフォルトで、ボックスはオフであり、継承されるすべてのプロパティが、宛先のプロジェクトから新しいクローンに継承されます。このボックスをオンにすると、現在継承されているすべてのプロパティが、新しいクローンにローカル設定として保持されます。

6. 「適用」をクリックして設定を確認し、クローンを作成します。

クローンは、設定した宛先プロジェクトのシェアのリストに表示されます。クローンはほかのシェアとまったく同じように操作できます。

## 関連トピック

- クローンに対してシェア操作を実行するには、[345 ページの「シェアとプロジェクト」](#)を参照してください。
- クローンのクローンを作成するには、[473 ページの「クローンのクローニング」](#)を参照してください。
- 特定のスナップショットのすべてのクローンを表示するには、[474 ページの「スナップショットのクローンの表示 \(BUI\)」](#)を参照してください。
- クローンの作成元のスナップショットを特定するには、[475 ページの「クローン元の表示 \(BUI\)」](#)を参照してください。

## ▼ スナップショットのクローニング (CLI)

**ライセンスについて:** クローニングは無償で評価することが許可されていますが、本番環境で使用するには、機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価期間を過ぎたら、この機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

ファイルシステムまたは LUN の既存のスナップショットのクローンを作成するには、次の手順を実行します。

---

**注記 -** プロジェクトのクローンはサポートされていません。

---

1. 該当するファイルシステム、LUN、またはプロジェクトに移動し、`snapshots` と入力します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
hostname:shares myproject/demo_share snapshots>
```

2. クローンを作成するスナップショットを選択します。

```
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> select snap1
```

3. `c1one` コマンドに、オプションでクローンを作成するプロジェクトの名前を続けて使用します。

デフォルトでは、クローンの作成元のスナップショットと同じプロジェクトにクローンが作成されます。

```
hostname:shares myproject/demo_share@snap1> c1one project1
```

コミットされていないシェアコンテキストに置かれます。ここで、必要に応じてプロパティを調整してから、変更を確定してクローンを作成できます。



#### 4. プロパティを表示するには、`get` コマンドを使用します。

```
hostname:shares myproject/demo_clone (uncommitted clone)> get
aclinherit = restricted (inherited)
aclmode = discard (inherited)
 atime = true (inherited)
checksum = fletcher4 (inherited)
compression = off (inherited)
 copies = 1 (inherited)
mountpoint = /export/testbed (inherited)
 quota = 0 (default)
 readonly = false (inherited)
recordsize = 128K (inherited)
reservation = 0 (default)
secondarycache = all (inherited)
 nbmand = false (inherited)
sharesmb = off (inherited)
sharenfs = on (inherited)
 snapdir = hidden (inherited)
 vscan = false (inherited)
shadedav = off (inherited)
shareftp = off (inherited)
 root_group = other (default)
root_permissions = 777 (default)
 root_user = nobody (default)
 quota_snap = true (default)
reservation_snap = true (default)
```

#### 5. プロパティを調整するには、`set` コマンドを使用します。

```
hostname:shares myproject/demo_clone (uncommitted clone)> set quota=10G
quota = 10G (uncommitted)
```

#### 6. `commit` コマンドを使用して、変更をコミットし、クローンを作成します。

```
hostname:shares myproject/demo_clone (uncommitted clone)> commit
hostname:shares myproject/demo_share@demo_clone>
```

### 関連トピック

- クローンに対してシェア操作を実行するには、[345 ページの「シェアとプロジェクト」](#)を参照してください。
- クローンのクローンを作成するには、[473 ページの「クローンのクローニング」](#)を参照してください。
- 特定のスナップショットのすべてのクローンを表示するには、[475 ページの「スナップショットのクローンの表示 \(CLI\)」](#)を参照してください。
- クローンの作成元のスナップショットを特定するには、[475 ページの「クローン元の表示 \(CLI\)」](#)を参照してください。

## ▼ クローンのクローニング

**ライセンスについて:** クローニングは無償で評価することが許可されていますが、本番環境で使用するには、機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価

期間を過ぎたら、この機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。


既存のクローンのクローンを作成するには、次の手順を実行します。

ファイルシステムまたは LUN のスナップショットからクローンを作成したら、そのクローンはほかのシェアと同じように操作できます。クローンのスナップショットを取得でき、そのスナップショットのクローンを作成できます。このプロセスを続行して、クローンのクローンを無限に作成できます。

1. 次のいずれかの手順を実行して、クローンのスナップショットを取得します。
  - 449 ページの「スナップショットの取得 (BUI)」
  - 450 ページの「スナップショットの取得 (CLI)」
2. 次のいずれかの手順を実行して、スナップショットのクローンを作成します。
  - 470 ページの「スナップショットのクローニング (BUI)」
  - 472 ページの「スナップショットのクローニング (CLI)」

## ▼ スナップショットのクローンの表示 (BUI)

特定のスナップショットから作成されたすべてのクローンの一覧を表示するには、次の手順を実行します。これらは、スナップショットの「依存クローン」とも呼ばれます。

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動し、ファイルシステムと LUN のどちらのクローンを表示するかに応じて、「ファイルシステム」または「LUN」をクリックします。
2. 該当するシェアの上にマウスを移動し、「編集」アイコン  をクリックします。
3. 「スナップショット」タブをクリックします。
4. 該当するスナップショットの上にマウスを移動し、「クローン」の下の「表示...」をクリックします。

スナップショットの依存クローンとそれらが存在するプロジェクトの一覧を含むウィンドウが表示されます。

「表示...」リンクが表示されない場合、そのスナップショットにはクローンがありません。
5. 「了解」をクリックしてウィンドウを閉じます。

## ▼ スナップショットのクローンの表示 (CLI)

特定のスナップショットから作成されたすべてのクローンの一覧を表示するには、次の手順を実行します。

1. スナップショットに移動して、選択します。

```
hostname:shares myproject/demo_share> snapshots
hostname:shares myproject/demo_share snapshots> select snap1
hostname:shares myproject/demo_share@snap1>
```

2. `list clones` コマンドを使用します。

```
hostname:shares myproject/demo_share@snap1> list clones


Clones: 2 total

PROJECT SHARE
myproject demo_clone1
myproject demo_clone2
hostname:shares myproject/demo_share@snap1
```

結果に、存在するクローン数、それぞれが存在するプロジェクト、および各クローンの名前が表示されます。

## ▼ クローン元の表示 (BUI)

クローンの作成元のスナップショットを特定するには、次の手順を実行します。

1. クローンに移動します。
  - a. 「シェア」 > 「シェア」 に移動します。
  - b. マウスのポインタをクローンの上に置いて、「編集」アイコン  をクリックします。
2. 左側の「静的プロパティ」の下に「クローン元」の横の「表示」をクリックします。

クローンの作成元のスナップショットの名前を示すウィンドウが表示されます。

## ▼ クローン元の表示 (CLI)

クローンの作成元のスナップショットを特定するには、次の手順を実行します。

1. `shares` に移動して、クローンを含むプロジェクトを選択し、クローンを選択します。

```
hostname:> shares select myproject
hostname:shares myproject> select demo_clone
hostname:shares myproject/demo_clone>
```

**2. get origin コマンドを使用します。**

このコマンドはクローンの作成元のスナップショットの場所と名前を返します。

```
hostname:shares myproject/demo_clone> get origin
origin = myproject/demo_share@demo_snapshot
```

# リモートレプリケーション

---

**ライセンスについて:** リモートレプリケーションとクローニングは無償で評価することが許可されていますが、本稼働環境で使用するには、各機能のライセンスを個別に購入する必要があります。評価期間を過ぎたら、これらの機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

Oracle ZFS Storage Appliance では、ソースアプライアンスからターゲットアプライアンスへ、同じアプライアンスの別のプールへ、またはオフラインのレプリケーションでは NFS サーバーへ、プロジェクトとシェアをスナップショットベースでレプリケートできます。レプリケーションは手動で、定期的に、あるいは連続して実行するように構成できます。リモートレプリケーションのユースケースには、障害回復、データ分散、ディスク間バックアップや、ハードウェアアップグレード時またはストレージリバランス時のアプライアンス間データ移行が含まれます。

リモートレプリケーションを構成、モニター、および管理するには、次のタスクを使用します。

- リモートレプリケーションのワークフロー
- ソースおよびターゲットアプライアンスの互換性の確認
- ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションターゲットの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションアクションの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- クラスタ構成のレプリケーションの構成
- オフラインレプリケーションの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 ([CLI](#))
- レプリケーション圧縮の無効化 - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションの進行状況のモニタリング - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションパッケージの編集 - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーション更新の取り消し - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションパッケージのクローニング - [BUI](#)、[CLI](#)
- レプリケーションパッケージの切断 - [BUI](#)、[CLI](#)
- 障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 - [BUI](#)、[CLI](#)

- [ディスク間バックアップでのリモートレプリケーションの使用](#)
- [レプリケーションパッケージの無効化 - BUI、CLI](#)

リモートレプリケーションの概念については、次を参照してください。

- [532 ページの「リモートレプリケーションの概念」](#)

## ▼ リモートレプリケーションのワークフロー

次の手順では、リモートレプリケーションを構成および使用するための一般的な方法を示します。リモートレプリケーションの概念については、[532 ページの「リモートレプリケーションの概念」](#)を参照してください。

1. **ソースおよびターゲットアプライアンスのソフトウェア互換性を確認します。**  
ソフトウェアの互換性については、[478 ページの「ソースおよびターゲットアプライアンスの互換性の確認」](#)を参照してください。
2. **ネットワークインタフェースおよびルーティングを設定します。**  
ネットワークルーティングの設定については、「[ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 - BUI、CLI](#)」を参照してください。
3. **レプリケーションターゲットを設定します。**  
レプリケーションターゲットの作成については、「[レプリケーションターゲットの作成 - BUI、CLI](#)」を参照してください。
4. **レプリケーションアクションを作成します。**  
レプリケーションアクションの作成については、「[レプリケーションアクションの作成 - BUI、CLI](#)」を参照してください。
5. **レプリケーション更新を送信します。**  
レプリケーション更新の送信については、「[レプリケーション更新の手動送信 - BUI、CLI](#)」を参照してください。
6. **オプションで、オフラインレプリケーションを作成します。**  
オフラインレプリケーションの作成アクションについては、「[オフラインレプリケーションの作成 - BUI、CLI](#)」を参照してください。

## ▼ ソースおよびターゲットアプライアンスの互換性の確認

リモートレプリケーションは、ほとんどの Oracle ZFS Storage Appliance ソフトウェアバージョンの間で互換性があります。ターゲットアプライアンスでサポートされてい

ない機能をレプリケーション更新で使用する場合に、互換性のエラーが発生します。機能は、ソフトウェア更新または遅延更新として配布されます。

各ソフトウェアバージョンの互換性および遅延更新機能の詳細は、[My Oracle Support \(http://support.oracle.com/\)](http://support.oracle.com/) で Oracle ZFS Storage Appliance のリモートレプリケーション互換性に関するドキュメント (Doc ID 1958039.1) を参照してください。

1. ソースおよびターゲットアプライアンスの現在のソフトウェアバージョンを確認します。  
BUIを使用する場合は、「保守」 > 「システム」に移動します。CLIを使用する場合は、`maintenance system updates` に移動し、`show` と入力します。
2. ソースプロジェクトまたはシェアで使用される遅延更新機能のサポートがターゲットアプライアンスで提供されていることを確認します。  
たとえば、ソースシェアが大きなブロックを使用する場合、ターゲットアプライアンスでこの機能のサポートが提供されることを確認します。
3. 必要に応じてターゲットアプライアンスでソフトウェアを更新し、遅延更新を適用します。  
詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)』、「遅延更新の適用」を参照してください。

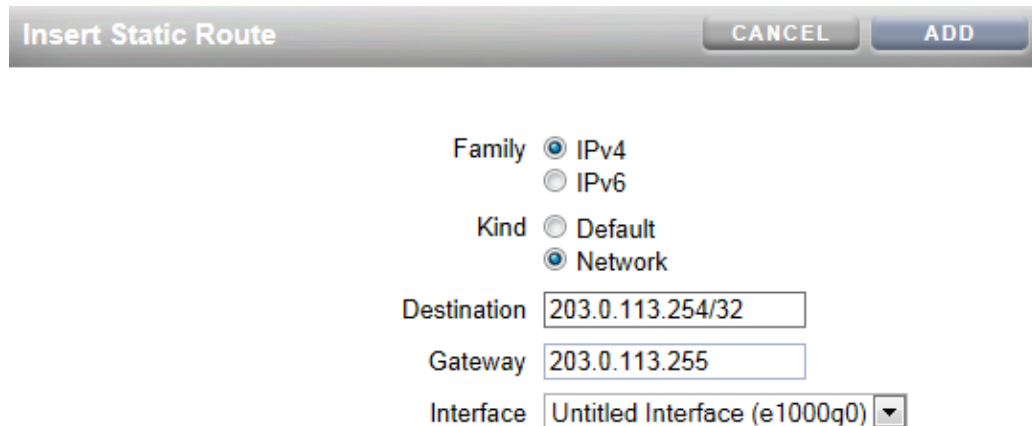
## ▼ ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 (BUI)

ソースとターゲットのアプライアンス間でレプリケーション接続に適切なネットワークインタフェースが確実に使用されるようにするため、静的な /32 (ホスト固有) ルートを構成します。

クラスタ構成用にレプリケーションを設定する場合は、クラスタのテイクオーバーまたはフェイルバックのあとにインタフェースがレプリケーション作業の実行ノードに移るように、シングルトン(ロック解除) ネットワークインタフェースを選択します。2つのソースクラスタノードを同じターゲットノードにレプリケートできるのは、ターゲットノードが2つの IP アドレスを提供し、ソースクラスタの各ノードで1つ使用できる場合のみです。ソースクラスタの両方のノードからの同じターゲット IP アドレスへのレプリケートはサポートされません。

1. 「構成」 > 「ネットワーク」 > 「ルーティング」 ページに移動します。

2. 追加アイコン  をクリックします。



Insert Static Route

CANCEL ADD

Family  IPv4  
 IPv6

Kind  Default  
 Network

Destination 203.0.113.254/32

Gateway 203.0.113.255

Interface Untitled Interface (e1000q0) ▼

3. 「静的ルートの挿入」画面で、次を指定します。
  - ファミリ: 「IPv4」または「IPv6」を選択します。
  - 種類: 「ネットワーク」を選択します。
  - 宛先: ターゲットアプライアンスの IP アドレスおよびネットマスク /32 を入力します。
  - ゲートウェイ: ターゲットアプライアンスのゲートウェイアドレスを入力します。
  - インタフェース: インタフェース名を入力します。
4. 「追加」をクリックします。
5. ソースアプライアンスからターゲットアプライアンスへの静的ルートを定義したら、ターゲットアプライアンスでこれらの手順を繰り返して、ターゲットからソースへと戻る静的ルートを定義します。
6. 適切なソースおよびターゲットインタフェースを介してトラフィックがルーティングされていることを確認するには、`tracert` コマンドを使用します。  
`tracert` の使用方法の詳細は、[83 ページの「ネットワークルーティングの構成」](#)を参照してください。

---

注記 - インタフェースを削除すると、そのインタフェースに関連付けられたすべてのルートも削除されます。

---



## 関連トピック

- [541 ページの「例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [532 ページの「リモートレプリケーションの概念」](#)

## ▼ ネットワークインタフェースと静的ルーティングの設定 (CLI)

始める前に ソースとターゲットのアプライアンス間でレプリケーション接続に適切なネットワークインタフェースが確実に使用されるようにするため、静的な /32 (ホスト固有) ルートを構成します。

クラスタ構成用にレプリケーションを設定する場合は、クラスタのテイクオーバーまたはフェイルバックのあとにインタフェースがレプリケーション作業の実行ノードに移るように、シングルトン (ロック解除) ネットワークインタフェースを選択します。2つのソースクラスタノードを同じターゲットノードにレプリケートできるのは、ターゲットノードが2つの IP アドレスを提供し、ソースクラスタの各ノードで1つ使用できる場合のみです。ソースクラスタの両方のノードからの同じターゲット IP アドレスへのレプリケートはサポートされません。

### 1. ソースアプライアンスで `configuration services routing` に移動します。

専用ネットワークインタフェース経由でターゲットシステム IP アドレスへの静的 /32 (ホスト固有) ルートを使用します。次の例では、`mask=32` はこれがホスト固有のルートであることを意味します。

```
host_source:configuration services routing> create

host_source:configuration services route (uncommitted)> get
 family = (unset)
 destination = (unset)
 mask = (unset)
 gateway = (unset)
 interface = (unset)
host_source:configuration services route (uncommitted)> set family=IPv4
host_source:configuration services route (uncommitted)> set destination=203.34.56.78
host_source:configuration services route (uncommitted)> set mask=32
host_source:configuration services route (uncommitted)> set gateway=203.34.56.254
host_source:configuration services route (uncommitted)> set interface=nge3
host_source:configuration services route (uncommitted)> commit
host_source:configuration services routing> show
route-000 0.0.0.0/0 203.24.30.254 nge0 static
route-001 203.24.30.0/32 203.24.30.28 nge0 dynamic
route-002 203.24.150.0/32 203.24.150.10 ibd0 dynamic
route-003 203.24.101.65/32 203.24.30.254 nge1 inactive
route-005 203.34.56.78/32 203.34.56.254 nge3 static
```

### 2. ソースアプライアンスからターゲットアプライアンスへの静的ルートを定義したら、ターゲットアプライアンスでこれらの手順を繰り返して、ターゲットからソースへと戻る静的ルートを定義します。

3. 適切なソースおよびターゲットインタフェースを介してトラフィックがルーティングされていることを確認するには、`traceroute` コマンドを使用します。

`traceroute` の使用方法の詳細は、83 ページの「ネットワークルーティングの構成」を参照してください。

---

注記 - インタフェースを削除すると、そのインタフェースに関連付けられたすべてのルートも削除されます。


---

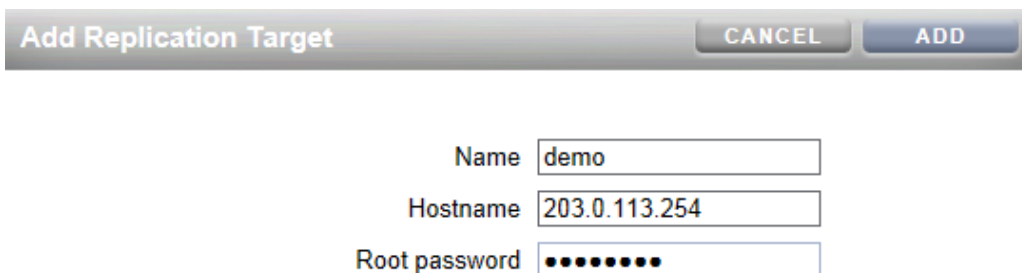
### 関連トピック

- 541 ページの「例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」
- 478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」
- 532 ページの「リモートレプリケーションの概念」

## ▼ レプリケーションターゲットの作成 (BUI)

レプリケーションターゲットは、ソースとターゲットのアプライアンスの間でセキュアな通信接続を確立します。レプリケーションターゲットを作成するには、次のようにします。

1. ソースアプライアンスの BUI から、「構成」>「サービス」>「リモートレプリケーション」に移動します。
2. 「ターゲット」の横にある追加アイコン  をクリックします。



3. 次を入力します。
  - **名前** - ソースアプライアンスの BUI または CLI に表示されるターゲットの名前。
  - **ホスト名** - ターゲットアプライアンスの IP アドレス、またはホスト名。

---

注記 - 特定のネットワークインタフェースを介するように強制するには、静的ルートで構成されている IP アドレスを使用します。

---

- **root パスワード** - ターゲットアプライアンスの root パスワード (接続を承認するため)。
4. 「追加」をクリックします。

#### 関連トピック

- [534 ページの「レプリケーションターゲット」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」](#)

## ▼ レプリケーションターゲットの作成 (CLI)

レプリケーションターゲットは、ソースとターゲットのアプライアンスの間でセキュアな通信接続を確立します。レプリケーションターゲットを作成するには、次のようにします。

1. ソースアプライアンスから **targets** ノードに移動し、**target** と入力して、リモートアプライアンスをレプリケーションターゲットとして構成します。

```
host_source:> configuration services replication targets> target
host_source:configuration services replication target (uncommitted)>
```

2. ターゲットの **hostname**、**root\_password**、および **label** を設定します。

---

注記 - 特定のネットワークインタフェースを介するように強制するには、静的ルートで構成されている IP アドレスを使用します。

---

```
host_source:configuration services replication target (uncommitted)> set hostname=203.123.225.201
host_source:configuration services replication target (uncommitted)> set root_password=password
host_source:configuration services replication target (uncommitted)> set label=repl_1
```

3. 変更を確定します。

```
host_source:configuration services replication target (uncommitted)> commit
```


#### 関連トピック

- [534 ページの「レプリケーションターゲット」](#)

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」](#)

## ▼ レプリケーションアクションの作成 (BUI)

レプリケーションアクションは、レプリケートされるプロジェクトまたはシェア、レプリケーションの送信先、レプリケーションのスケジュール、データ転送のプロパティ（ネットワークリンクの暗号化の有効化/無効化など）を記述します。

- はじめてリモートレプリケーションを設定する場合、空のプロジェクトをレプリケートするか、またはプロジェクト/シェア内のスナップショットをレプリケートしないように選択して、レプリケートするデータを最小限に抑えると便利な場合があります。
  - 大量のデータセットをレプリケートするが、ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスの距離があるため帯域幅が制限される場合は、[490 ページの「オフラインレプリケーションの作成 \(BUI\)」](#)の説明に従ってレプリケーションをオフラインのメディアにエクスポートできます。
1. ソースアプライアンスの BUI から、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
  2. プロジェクトまたはシェアを選択し、「レプリケーション」タブをクリックします。
  3. 「アクション」の横にある追加アイコン  をクリックします。

- ターゲットおよびプールを選択します。

**Add Replication Action**
CANCEL
ADD

---

**Properties**

Target

Pool

Export data path

Limit bandwidth

Enable SSL-encryption

Disable compression

Include snapshots

Retain user snapshots on target

Include clone origin as data

Update frequency  Scheduled  Continuous

---

**+ Schedule**

- このアクションのプロパティを選択します。  
すべてのプロパティの説明は、[554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)を参照してください。
- 「スケジュール済み」を選択してレプリケーション更新の頻度を設定するか、レプリケーション更新を連続して送信するために「連続」を選択します。  
または、レプリケーション更新を必要に応じて送信できます ([489 ページの「レプリケーション更新の手動送信 \(BUI\)」](#)を参照)。
- 「追加」をクリックします。

レプリケーションアクションが「アクション」に追加されます。

| + Actions                                                             |                                                         |                        |
|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|------------------------|
| TARGET ▲                                                              | UPDATES                                                 | STATUS                 |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>sashimi<br/>Manual</li> </ul>  | Never Synced<br>Never Attempted                         | Sync now               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>sushi<br/>Scheduled</li> </ul> | 2015-7-1 19:52:03 Synced<br>2015-7-1 19:52:03 Attempted | 2015-7-1 20:05:00 Next |

### 関連トピック

- [554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)
- [535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」](#)

## ▼ レプリケーションアクションの作成 (CLI)

レプリケーションアクションは、レプリケートされるプロジェクトまたはシェア、レプリケーションの送信先、レプリケーションのスケジュール、データ転送のプロパティ（ネットワークリンクの暗号化の有効化/無効化など）を記述します。

- はじめてリモートレプリケーションを設定する場合、確実に同期が正常に完了するように、レプリケートするデータを最小限に抑えることが役立つ場合があります。空のプロジェクトをレプリケートするか、またはプロジェクト/シェア内のスナップショットをレプリケートしないように選択できます。
- 大量のデータセットをレプリケートするが、ソースとターゲットのアプライアンスの距離があるため帯域幅が制限される場合は、[490 ページの「オフラインレプリケーションの作成 \(BUI\)」](#)の説明に従ってレプリケーションをエクスポートできます。

1. プロジェクトまたはシェアに移動し、**action** と入力します。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 replication> action
```

2. プロパティを表示します。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> get
Properties:
 target = (unset)
 pool = (unset)
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 use_ssl = true
```

3. このアクションのプロパティを設定します。

CLIのプロパティの説明は、554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」を参照してください。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> set target=repl_sys
 target = repl_sys (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> set pool=pool-0
 pool = pool-0 (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> set include_snaps=false
 include_snaps = false (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> set use_ssl=false
 use_ssl = false (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000> schedule
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000 schedule (uncommitted)> set frequency=day
 frequency = day (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000 schedule (uncommitted)> set hour=23
 hour = 23 (uncommitted)
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000 schedule (uncommitted)> set minute=05
 minute = 05 (uncommitted)
```

#### 4. 新しいレプリケーションアクションをコミットします。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action (uncommitted)> commit
```

#### 5. 新しく作成したアクションのプロパティを表示するには、ls と入力します。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 replication> ls
Properties:
 inherited = false
Actions:
 TARGET STATUS NEXT
 action-000 repl_sys idle manual

host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000> ls
Properties:
 id = a751dc0f-abcd-1234-6789-f5e8315eaffa
 target = repl_sys
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = false
 max_bandwidth = unlimited
 use_ssl = false
 state = idle
state_description = Idle (no update pending)
 next_update = Wed Sep 01 2013 23:05:00 GMT+0000 (UTC)
 last_sync = Wed Sep 01 2013 10:24:05 GMT+0000 (UTC)
 last_try = Wed Sep 01 2013 10:24:05 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success
```

#### 6. 新しく作成したアクションの ID を表示するには、last コマンド (新しいアクションのノードに移動) を get id (アクション ID を取得) と組み合わせて使用します。

ID は、あとで正しいレプリケーションアクションノードを選択する際に使用します。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 replication>last get id
 id =
fb1bb3fd-3361-42e1-e4a1-b06c426172fb
```

## 関連トピック

- [554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)
- [535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」](#)

## ▼ クラスタ構成のレプリケーションの構成

このタスクでは、クラスタ化された環境でレプリケーションを構成する方法について説明します。クラスタのテイクオーバー、クラスタのフェイルバック、またはターゲットアプライアンスでの逆向きレプリケーションの実行後に、プロジェクトのレプリケーションが続行されるようにレプリケーションを正しく構成するには、次の手順に従います。


始める前に はじめてクラスタ化アプリケーションのレプリケーションを構成する場合は、[541 ページの「例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」](#)を参照してください。

1. レプリケーションのソースアプライアンスとターゲットアプリケーションで、次のガイドラインを使用して、レプリケーショントラフィックに使用するネットワークインタフェースと IP アドレスを選択します。
  - a. クラスタのテイクオーバーまたはフェイルバック操作のあとで必ずピアノードによってテイクオーバーされるように、常にシングルトンネットワークインタフェースを選択してください。
  - b. ソースシステムで、選択したネットワークインタフェースと、データのレプリケーション元ストレージプールの両方を同じノードに割り当てます。これは、ソースクラスタが **CLUSTERED** 状態のときに常に当てはまります。
  - c. ターゲットシステムで、ターゲットアプライアンスで選択したネットワークインタフェースと、レプリケートされるデータの書き込み先ストレージプールを同じノードに割り当てます。これによって、ターゲットクラスタが **CLUSTERED** 状態のときにレプリケーション構成が実行された場合に関連付けが維持されます。
  - d. ソースシステムとターゲットシステムが、選択したネットワークインタフェースと IP アドレスを使用して通信できることを確認します。
2. ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスで、選択したネットワークインタフェースと IP アドレスを使用して静的な /32 (ホストベースの) ネットワークルートを作成します。
3. ソースアプライアンスで、ターゲットの選択した IP アドレスを使用してレプリケーションターゲットオブジェクトを構成します。



## ▼ レプリケーション更新の手動送信 (BUI)

連続または定期レプリケーションがすでに構成されている場合、レプリケーション更新は自動的に実行されます。BUI を使用して手動更新を実行することもできます。

1. ソースアプライアンスから、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. プロジェクトを開き、「レプリケーション」タブをクリックします。
3. 「今すぐ同期」アイコン  をクリックします

---

注記 - 更新がアクティブに送信されている場合、このアクションは使用できません (または機能しません)。更新を送信する前に、プロジェクト全体をレプリケーションするのに十分なディスク容量がターゲットにあることを確認してください。

---

BUI には、進行状況バーが表示され、いつ更新が完了したかが示されます。

4. レプリケーション更新が正常に完了しない場合は、古いアクションまたはスナップショットを削除し、再度開始します。

### 関連トピック

- [484 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(BUI\)」](#)
- [509 ページの「レプリケーション更新の取り消し \(BUI\)」](#)

## ▼ レプリケーション更新の手動送信 (CLI)

連続または定期レプリケーションがすでに構成されている場合、レプリケーション更新は自動的に実行されます。CLI を使用して手動更新を実行することもできます。

1. シェアに移動し、`sendupdate` コマンドを入力します。

```
host_source:shares PROJECT1/SHARE1 action-000> sendupdate
```

更新が現在アクティブである場合、CLI には `sending` という状態が表示されます。

2. レプリケーションが正常に完了しない場合は、古いアクションまたはスナップショットを削除し、再度開始します。

### 関連トピック

- [486 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(CLI\)」](#)

- [510 ページの「レプリケーション更新の取り消し \(CLI\)」](#)

## オフラインレプリケーションの作成 (BUI)

オフラインレプリケーション更新を作成するには、次の手順を使用します。

- [490 ページの「オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する」](#)
- [491 ページの「NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する \(BUI\)」](#)
- [491 ページの「レプリケーション更新をエクスポートする \(BUI\)」](#)
- [492 ページの「NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する」](#)
- [492 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(BUI\)」](#)
- [493 ページの「手動でのネットワーク更新を実行する \(BUI\)」](#)
- [493 ページの「オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 \(BUI\)」](#)

### ▼ オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する

NFS サーバーを設定する手順は、使用する NFS サーバーのタイプによって異なります。具体的な手順は、NFS サーバーのドキュメントを参照してください。

1. ネットワークに対応しており、NFS サービスが有効になっているサーバーを特定します。
2. NFS サーバーの root として、ファイルシステムまたはシェアを作成します。
3. ソースおよびターゲットのアプライアンスの IP アドレスのみに NFS シェアを公開するようにファイルアクセス権を設定します。
4. レプリケーションストリームを暗号化するには、NFS サーバー上の NFS シェアに対してディスク上の暗号化を有効にします。

---

注記 - エクスポートされたレプリケーションストリームは、アプライアンスによって暗号化されません。

---


5. NFS クライアントがアクセスするシェアをエクスポートします。
6. ファイルシステムが共有されていることを確認します。

### 次の手順

- [491 ページの「NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する \(BUI\)」](#)

## ▼ NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する (BUI)

始める前に ターゲットを識別または作成します。[482 ページの「レプリケーションターゲットの作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。

1. ソースアプライアンスの BUI から、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. プロジェクトを開き、「レプリケーション」タブをクリックします。
3. 「アクション」の横にある追加アイコン  をクリックします。
4. 「レプリケーションアクションの追加」画面で、「エクスポートデータパス」を選択し、NFS シェアのパスを `nfs://server/path` の形式で入力します。
5. このアクションの追加のプロパティーを選択し、「追加」をクリックします。

---


注記 - スケジュールを構成する場合、または連続レプリケーションモードを選択する場合、エクスポートおよびインポート操作が完了すると、更新が自動的に発生します。

---

### 次の手順

- [491 ページの「レプリケーション更新をエクスポートする \(BUI\)」](#)

## ▼ レプリケーション更新をエクスポートする (BUI)

1. ソースアプライアンスから、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. プロジェクトを開き、「レプリケーション」タブをクリックします。
3. 「レプリケーションデータをエクスポートする」アイコン  をクリックします。
4. レプリケーションステータスを確認し、レプリケーションが完了するまで待機します。

### 次の手順

- [492 ページの「NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する」](#)

## ▼ NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する

1. NFS ディレクトリに移動し、MD5 を確認し、メタデータを表示します。

```
bigfish25# pwd
/export/init_repl/rr_updates/96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
bigfish25# ls -l
total 67
-rw-r--r-- 1 nobody nobody 633 Nov 17 21:46 metadata.xml
-rw----- 1 nobody nobody 31016 Nov 17 21:46 stream
-rw----- 1 nobody nobody 33 Nov 17 21:46 stream.md5
bigfish25# md5sum stream
25b4671c9aaf34455a63e203bcecff49 stream
bigfish25# cat stream.md5
25b4671c9aaf34455a63e203bcecff49
bigfish25# cat metadata.xml
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE nvlist SYSTEM "/usr/share/lib/xml/dtd/nvlist.dtd.1">
<nvlist>
 <nvpair name='offline_rr_version'><string value='1.1'></nvpair>
 <nvpair name='source_asn'><string value='2ea4670f-bc17-cf8f-a420-9211d6edda04'></
nvpair>
 <nvpair name='project'><string value='default'></nvpair>
 <nvpair name='pkgid'><string value='96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c'></nvpair>
 <nvpair name='basesnap'><string value='/'></nvpair>
 <nvpair name='newsnap'><string value='.rr-96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c-1'></
nvpair>
 <nvpair name='compression'><string value='on'></nvpair>
</nvlist>
bigfish25#
```

2. NFS サーバーをターゲットアプライアンスサイトへ物理的に移動するか、または rr\_updates フォルダを外部媒体にコピーして出荷準備します。

### 次の手順

- [492 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(BUI\)」](#)

## ▼ NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする (BUI)

1. 「シェア」 > 「プロジェクト」 > 「レプリカ」に移動します。
2. 「ソース: インポートを待機中」と表示されているレプリカを選択します
3. 「レプリケーション」タブをクリックします。
4. 「データパスのインポート」フィールドで、レプリカのパスを入力します。

5. 外部媒体から更新のインポートアイコン  をクリックして、インポートを開始します。

#### 次の手順

レプリケーションストリームがターゲットのアプライアンスにインポートされたあとで、次のうちの1つに進みます。

- [493 ページの「手動でのネットワーク更新を実行する \(BUI\)」](#)
- [493 ページの「オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 \(BUI\)」](#)


## ▼ 手動でのネットワーク更新を実行する (BUI)

オフラインレプリケーションストリームをターゲットアプライアンスにインポートしたあとで、以後のネットワーク更新が正しく動作することを確認します。連続または定期レプリケーションがすでに構成されている場合、更新は自動的に実行されます。それ以外の場合は、手動更新を実行してください。

1. ソースアプライアンスに移動します。
2. [489 ページの「レプリケーション更新の手動送信 \(BUI\)」](#) を参照してください。


## ▼ オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 (BUI)

この手順に従って、オフラインのレプリケーションパッケージを、ソースアプライアンスにレプリケートして戻すように構成された新しいローカルプロジェクトに移動します。

1. [492 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(BUI\)」](#) の説明に従って、オフラインのレプリケーションパッケージを NFS サーバーからターゲットアプライアンスにインポートします。
2. ターゲットアプライアンスから、「シェア」>「プロジェクト」>「レプリカ」に移動し、レプリケートされたパッケージを見つけます。  
プロジェクトの名前は `target_appliance: new_project/share` です。
3. プロジェクトを選択して、レプリケーション方向を逆方向にするアイコン  をクリックします。

4. 「レプリケーションを逆向きにする」ウィンドウで、新しいローカルプロジェクトの名前を入力します。

このアクションは、このパッケージの内容を、ソースにレプリケートして戻すように構成された新しいローカルプロジェクトに移動します。最後の成功した更新以降にソースに対して行われたデータまたはメタデータの変更は、新しいプロジェクトがソースにレプリケートされて戻されたときに失われます。ソースでのレプリケーションアクションが無効になっていない場合、このパッケージに対する将来の更新は失敗します。

5. 「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
6. プロジェクトを開き、「レプリケーション」タブをクリックします。
7. 「レプリケーションデータをエクスポートする」アイコン  をクリックします。
8. レプリケーションステータスを確認し、レプリケーションが完了するまで待機します。
9. レプリケーション更新が完了したあと、新しいターゲットにある逆転された新しいパッケージに移動します。  
状態の説明はアイドル (インポートを待機中) にします。
10. NFS サーバーから更新をインポートします。  
関連トピック
  - [490 ページの「オフラインレプリケーションの作成 \(BUI\)」](#)

## オフラインレプリケーションの作成 (CLI)

オフラインレプリケーション更新を作成するには、次の手順を使用します。

- [495 ページの「オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する」](#)
- [495 ページの「NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する \(CLI\)」](#)
- [496 ページの「レプリケーション更新をエクスポートする \(CLI\)」](#)
- [497 ページの「NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する」](#)
- [498 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(CLI\)」](#)
- [500 ページの「手動でのネットワーク更新を実行する \(CLI\)」](#)
- [501 ページの「オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 \(CLI\)」](#)

## ▼ オフラインレプリケーション用に NFS サーバーを設定する

NFS サーバーを設定する手順は、使用する NFS サーバーのタイプによって異なります。具体的な手順は、NFS サーバーのドキュメントを参照してください。

1. ネットワークに対応しており、NFS サービスが有効になっているサーバーを特定します。
2. NFS サーバーの root として、ファイルシステムまたはシェアを作成します。
3. ソースおよびターゲットのアプライアンスの IP アドレスのみに NFS シェアを公開するようにファイルアクセス権を設定します。
4. レプリケーションストリームを暗号化するには、NFS サーバー上の NFS シェアに対してディスク上の暗号化を有効にします。

---

注記 - エクスポートされたレプリケーションストリームは、アプライアンスによって暗号化されません。

---

5. NFS クライアントがアクセスするシェアをエクスポートします。
6. ファイルシステムが共有されていることを確認します。

次の手順

- [495 ページの「NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する \(CLI\)」](#)

## ▼ NFS サーバーへのエクスポートパスを設定する (CLI)

1. レプリケーションターゲットを識別または作成します。
2. レプリケーションアクションを作成し、`export_path` を設定して新しいアクションをコミット (`commit`) します。

```
source:shares default replication> action
source:shares default action (uncommitted)> set target=target_a
 target = target_a (uncommitted)
source:shares default action (uncommitted)> set pool=pool2
 pool = pool2 (uncommitted)
source:shares default action (uncommitted)> set export_path=nfs://nfs_server/export/init_repl
 export_path = nfs://nfs_server/export/init_repl (uncommitted)
source:shares default action (uncommitted)>commit
```

---

**注記** - オプションで、定期または連続レプリケーションモードを設定できます。これにより、エクスポートおよびインポート操作が完了すると、更新が開始します。

---

### 3. 作成したレプリケーションアクションに戻り、現在のステータスを表示します。

```
source:shares default replication> ls
Actions:
 TARGET STATUS NEXT
action-000 target_a idle Export replication data

source:shares default replication> last
source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target_a
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path = nfs://nfs_server/export/init_repl
 state = idle
 state_description = Idle (export pending)
 export_pending = true
 offline = false
 next_update = Export replication data
 last_sync = <unknown>
 last_try = <unknown>
 last_result = <unknown>
```

#### 次の手順

- [496 ページの「レプリケーション更新をエクスポートする \(CLI\)」](#)

## ▼ レプリケーション更新をエクスポートする (CLI)

1. レプリケーション更新を NFS サーバーにエクスポートするには、`sendupdate` コマンドを使用します。

```
source:shares default action-000>sendupdate
```

2. この例に示すように、`ls` と入力してステータスを表示します。

```
source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target_a
 enabled = true
```



```

 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path = nfs://nfs_server/export/init_repl
 state = sending
 state_description = Exporting update
 export_pending = true
 offline = false
 next_update = Export replication data
 last_sync = <unknown>
 last_try = <unknown>
 last_result = <unknown>

```

3. エクスポートが完了したタイミングを特定するには、`ls` と入力してステータスを表示します。

この例に示すように、`last_result=success` を探します。

```

source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target_a
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path =
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = true
 next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try = Tue Nov 18 2014 04:40:40 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success
source:shares default action-000>

```

#### 次の手順

- [497 ページの「NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する」](#)

## ▼ NFS サーバー上のレプリケーションストリームを確認する

1. NFS ディレクトリに移動し、`MD5` を確認し、メタデータを表示します。

```
nfs_server# pwd
/export/init_repl/rr_updates/96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
nfs_server# ls -l
total 67
-rw-r--r-- 1 nobody nobody 633 Nov 17 21:46 metadata.xml
-rw----- 1 nobody nobody 31016 Nov 17 21:46 stream
-rw----- 1 nobody nobody 33 Nov 17 21:46 stream.md5
nfs_server# md5sum stream
25b4671c9aaf34455a63e203bcecff49 stream
nfs_server# cat stream.md5
25b4671c9aaf34455a63e203bcecff49
nfs_server# cat metadata.xml
<?xml version="1.0"?>
<!DOCTYPE nvlist SYSTEM "/usr/share/lib/xml/dtd/nvlist.dtd.1">
<nvlist>
 <nvpair name='offline_rr_version'><string value='1.1'/></nvpair>
 <nvpair name='source_asn'><string value='2ea4670f-bc17-cf8f-a420-9211d6edda04' /></
nvpair>
 <nvpair name='project'><string value='default' /></nvpair>
 <nvpair name='pkgid'><string value='96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c' /></nvpair>
 <nvpair name='basesnap'><string value='/'></nvpair>
 <nvpair name='newsnap'><string value='.rr-96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c-1' /></
nvpair>
 <nvpair name='compression'><string value='on' /></nvpair>
</nvlist>
nfs_server#
```

2. NFS サーバーをターゲットアプライアンスサイトへ物理的に移動するか、または rr\_updates フォルダを外部媒体にコピーして出荷準備します。

### 次の手順

- [498 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(CLI\)」](#)

## ▼ NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする (CLI)

1. NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートするには、ターゲット上の空のパッケージに移動します。

```
target_a:configuration services replication sources> ls
Sources:
source-000 203.80.49.153
 PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 <awaiting import> idle unknown
```

2. ソースシステムのアドレスに対応するソースノードを選択します。

```
target_a:configuration services replication sources> select source-000
target_a:configuration services replication source-000> ls
Properties:
 name = 203.80.49.153
```

```

 ip_address = 203.80.49.153:216
 asn = 2ea4670f-bc17-cf8f-a420-9211d6edda04
Packages:
 PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 <awaiting import> idle unknown

```

### 3. インポートを待機しているパッケージを選択します。

```

target_a:configuration services replication source-000> select package-000
target_a:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 enabled = true
 state = idle
state_description = Idle (awaiting import)
 offline = true
import_path =
 last_sync = unknown
 last_try = unknown
 last_result = unknown

```

### 4. レプリケートされたデータのインポートパスを設定し、commit と入力します。

```

target_a:configuration services replication source-000 package-000> set import_path=
nfs://nfs_server/export/init_repl
import_path = nfs://nfs_server/export/init_repl (uncommitted)
target_a:configuration services replication source-000 package-000> commit
target_a:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 enabled = true
 state = receiving
state_description = Importing update
 offline = true
import_path = nfs://nfs_server/export/init_repl
 last_sync = unknown
 last_try = unknown
 last_result = unknown

target_a:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 enabled = true
 state = idle
state_description = Idle (no update in progress)
 offline = false
import_path =
 last_sync = Tue Nov 18 2014 05:03:42 GMT+0000 (UTC)
 last_try = Tue Nov 18 2014 05:03:42 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success

Projects:
 default
target_a:configuration services replication source-000 package-000>

```

## 次の手順

レプリケーションストリームがターゲットのアプライアンスにインポートされたあとで、次のうちの1つに進みます。

- [500 ページの「手動でのネットワーク更新を実行する \(CLI\)」](#)

- [501 ページの「オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 \(CLI\)」](#)

## ▼ 手動でのネットワーク更新を実行する (CLI)

オフラインレプリケーションストリームをターゲットアプライアンスにインポートしたあとで、以後のネットワーク更新が正しく動作することを確認します。連続または定期レプリケーションがすでに構成されている場合、更新は自動的に実行されます。それ以外の場合は、次の例に示すように、手動更新を実行してください。

1. ソースアプライアンスに進み、シェアに移動します。

```
source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target_a
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path =
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = true
 next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try = Tue Nov 18 2014 04:40:40 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success
```

2. `sendupdate` を使用して更新を開始し、`ls` コマンドを使用してステータスを表示します。

```
source:shares default action-000> sendupdate
source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target1
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path =
 state = sending
```

```

state_description = Ready (awaiting available resources to send update)
export_pending = false
 offline = true
 next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try = Tue Nov 18 2014 04:40:40 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success

source:shares default action-000> ls
Properties:
 id = 96366bf2-0b3c-4eec-e85b-e36e1b5bc18c
 target = target1
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = true
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = true
 compression = on
 export_path =
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = false
 next_update = Sync now
 last_sync = Tue Nov 18 2014 04:40:40 GMT+0000 (UTC)
 last_try = Tue Nov 18 2014 04:40:40 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success

```

## ▼ オフラインレプリケーションのためのレプリケーションの逆向き処理 (CLI)

この手順に従って、オフラインのレプリケーションパッケージを、ソースアプライアンスにレプリケートして戻すように構成された新しいローカルプロジェクトに移動します。

始める前に [498 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(CLI\)」](#) の説明に従って、オフラインのレプリケーションストリームを NFS サーバーからターゲットアプライアンスにインポートします。

1. ターゲットアプライアンスからレプリケートされたパッケージに移動し、プロジェクトを検索します。

```

target:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:
 id = 1c0457eb-45bd-4f91-8e08-bc0dbacd40b7
 enabled = true
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 offline = false
 import_path =
 last_sync = Fri Jul 31 2015 21:59:19 GMT+0000 (UTC)

```

```
last_try = Fri Jul 31 2015 21:59:19 GMT+0000 (UTC)
last_result = success
```

```
Projects:
 proj1
```

## 2. reverse とプロジェクト名を入力します。

```
target:configuration services replication source-000 package-000> reverse proj1
This action will move the contents of this package to a new local project configured to
replicate back to the source.
Any data or metadata changes made on the source since the last successful update will be
lost when the new project is
replicated back to the source. If replication actions on the source are not disabled,
future updates to this package
will fail.
```

```
Are you sure? (Y/N) Y
```

## 3. 新しいレプリケーションアクションに移動します。

```
target:configuration services replication sources> cd /
target:> shares select proj1 replication
target:shares proj1 replication> select action-000
target:shares proj1 action-000> ls
Properties:
 id = 6a10ce61-cc87-4850-89dd-8673f7734d03
 target = new_target
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = false
 retain_user_snaps_on_target = false
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = false
 compression = on
 export_path =
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = false
 next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try = <unknown>
 last_result = <unknown>
```

## 4. 逆転後の初回のレプリケーション更新を NFS サーバーにエクスポートするには、export\_path と NFS サーバーのパス名を入力します。commit と入力してから sendupdate を実行します。

```
target:shares proj1 action-000> set export_path=nfs://nfs_server/export/init_repl
 export_path = nfs://nfs_server/export/init_repl (uncommitted)
target:shares proj1 action-000> commit
target:shares proj1 action-000> sendupdate
target:shares proj1 action-000> ls
Properties:
 id = 6a10ce61-cc87-4850-89dd-8673f7734d03
 target = new_target
 enabled = true
```

```

 continuous = false
 include_snaps = false
retain_user_snaps_on_target = false
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
estimated_time_left = 00:00:00
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = false
 compression = on
 export_path =
 state = idle
state_description = Idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = true
next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try = Fri Jul 31 2015 22:17:33 GMT+0000 (UTC)
last_result = success

```

5. レプリケーション更新が完了したあと、新しいターゲットにある逆転された新しいパッケージに移動します。次の例に示すように、状態の説明は、アイドル (インポートを待機中) にします。

```

new_target:configuration services replication sources> ls
Sources:

source-000 <unknown>
 PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 proj1 idle unknown

new_target:configuration services replication sources> select source-000 select package-000
new_target:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:

 id = 6a10ce61-cc87-4850-89dd-8673f7734d03
 enabled = true
 state = idle
state_description = Idle (awaiting import)
 offline = true
import_path =
 last_sync = unknown
 last_try = unknown
last_result = unknown

Projects:

 proj1
new_target:configuration services replication source-000 package-000> set import_path=nfs://
nfs_server/export/init_repl
import_path = nfs://nfs_server/export/init_repl (uncommitted)

```

6. NFS サーバーから更新をインポートします。

```

new_target:configuration services replication source-000 package-000> set import_path=nfs://
nfs_server/export/init_repl
import_path = nfs://nfs_server/export/init_repl (uncommitted)

```

7. `commit` と入力してパッケージのプロパティをリスト表示し、更新が完了したことを確認します。

```

new_target:configuration services replication source-000 package-000> commit
new_target:configuration services replication source-000 package-000> ls
Properties:

```

```

 id = 6a10ce61-cc87-4850-89dd-8673f7734d03
 enabled = true
 state = idle
 state_description = Idle (no update in progress)
 offline = false
 import_path =
 last_sync = Fri Jul 31 2015 22:11:32 GMT+0000 (UTC)
 last_try = Fri Jul 31 2015 22:11:32 GMT+0000 (UTC)
 last_result = success

```


Projects:  
proj1

#### 関連トピック

- [498 ページの「NFS サーバーからレプリケーションストリームをインポートする \(CLI\)」](#)

## ▼ レプリケーションの進行状況のモニタリング (BUI)

1. レプリケーション更新の進行状況をモニターするには、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. 「レプリケーション」タブをクリックします。進行状況バーの下で、送信バイト数、推定サイズ、平均スループット、および推定残り時間の割合を確認します。

TARGET ▲	UPDATES	STATUS
<ul style="list-style-type: none"> <li>● brmzs3-2-250 Scheduled</li> </ul>	2014-12-24 02:49:52 Synced 2014-12-24 02:49:52 Attempted	 78% of 2.5T @50MB/s (-03:13:10)

#### 関連トピック

- [505 ページの「レプリケーションの警告と監査イベント」](#)
- [506 ページの「レプリケーション分析の使用」](#)

## ▼ レプリケーションの進行状況のモニタリング (CLI)

1. レプリケーション更新の進行状況をモニターするには、プロジェクトまたはシェアに移動します。
2. `bytes_sent`、`estimate_size`、`estimated_time_left`、および `average_throughput` プロパティーを確認して、進行状況を判断します。

```
brmzs3-2-460:shares 460-non-encrypt action-000> ls
Properties:
```



```
id = 96329c98-6a97-4fd4-810e-be9529ce4dcf
target = brmzs3-2-250
enabled = true
continuous = false
include_snaps = true
max_bandwidth = unlimited
bytes_sent = 1.93T
estimated_size = 2.5T
estimated_time_left = 03:11:11
average_throughput = 50MB/s
use_ssl = true
compression = on
export_path =
 state = sending
state_description = Sending update
export_pending = false
offline = false
next_update = Wed Dec 24 2014 21:00:00 GMT+0000 (UTC)
last_sync = Wed Dec 24 2014 08:49:52 GMT+0000 (UTC)
last_try = Wed Dec 24 2014 08:49:52 GMT+0000 (UTC)
last_result = success
```

### 関連トピック

- [505 ページの「レプリケーションの警告と監査イベント」](#)
- [506 ページの「レプリケーション分析の使用」](#)

## レプリケーションの警告と監査イベント

次のいずれかのイベントが発生するとアラートが通知されます。

- 手動または定期的レプリケーション更新が正常に開始または終了した (ソースとターゲットの両方)。
- 管理者が明示的に取り消した場合も含め、レプリケーション更新が失敗した (ソースとターゲットの両方)。
- 同じアクションの別の更新がすでに進行中のため、定期レプリケーション更新が省略された。
- 連続レプリケーションをはじめて開始した場合。
- 連続レプリケーションが失敗した場合。
- 連続レプリケーションをはじめて開始した場合、失敗した場合、または障害のあとに再開した場合。

システムは、次のレプリケーションイベントを監査して、ログに記録します。

- レプリケーションアクションの作成、変更、または破棄
- レプリケーショングループに対するシェアの追加または削除
- ターゲット上のレプリケーションパッケージの作成、変更、クローニング、逆転、切断、または破棄
- レプリケーションターゲットの作成、変更、または破棄


## レプリケーション分析の使用

レプリケーションには次の分析を使用できます。

- データ移動: レプリケーション操作
- データ移動: レプリケーション (バイト)
- 高度な分析
- データ移動: レプリケーション送信/受信バイト数

分析の詳細は、『[Oracle ZFS Storage Appliance Analytics ガイド](#)』、「[分析の操作](#)」を参照してください。

### ▼ レプリケーションターゲットの編集 (BUI)

1. 「構成」 > 「サービス」 > 「リモートレプリケーション」 > 「ターゲット」に移動します。
2. 編集するターゲットで、カーソルをターゲット名の上に移動して、編集アイコン  をクリックします。
3. 「名前」や「ホスト名」を変更します。  
ホスト名または IP アドレスは、以前と同じアプライアンスに解決される必要があります (ターゲットのシリアル番号で確認)。

---

注記 - 以前に構成したのではないアプライアンスを指し示す場合は、新しいターゲットを作成して、新しいアプライアンスに対して認証を行う必要があります。

---

4. 「適用」をクリックして変更を保存します。

#### 関連トピック

- [532 ページの「リモートレプリケーションの概念」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

### ▼ レプリケーションターゲットの編集 (CLI)

1. `targets` ノードに移動し、ターゲットの `hostname`、`root_password`、および `label` を設定または設定解除します。  

```
knife:> configuration services replication targets
```
2. このコンテキストでは、次を実行できます。

- 新しいターゲットを追加します。
- 既存のターゲットで構成されているアクションを表示します。
- ターゲットの一意の識別子 (ラベル) またはホスト名、あるいはその両方を編集します。
- どのアクションでも使用されていないターゲットを破棄します。

---

注記 - アクションで使用されているターゲットは破棄しないようにしてください。破棄すると、アクションは破壊されたままになります。システムは、できるだけこれを防ごうとしますが、エクスポートされたストレージプールに特定のターゲットを使用しているアクションが存在しないとは保証できません。


---

3. レプリケートするシェアが暗号化される場合、ターゲットでもデータ暗号化がサポートされていることを確認します。

#### 関連トピック

- [592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」](#)
- [534 ページの「レプリケーションターゲット」](#)

## ▼ レプリケーションアクションの編集 (BUI)

1. プロジェクトまたはシェアに移動し、「レプリケーション」タブをクリックします。
2. 編集するプロジェクトまたはシェアを選択します。
3. 編集アイコン  をクリックします。
4. 「レプリケーションアクションの編集」画面で、プロパティを変更して「適用」をクリックします。  
レプリケーションアクションの説明については、[554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)を参照してください。

#### 関連トピック

- [535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

## ▼ レプリケーションアクションの編集 (CLI)

1. 編集するアクションに関連付けられたターゲットに移動して選択します。

```

otoro:configuration services replication targets> show
Targets:
 TARGET LABEL ACTIONS
 target-000 oakmeal 1
otoro:configuration services replication targets> select target-000
otoro:configuration services replication target-000> show
Properties:
 address = 10.153.34.167:216
 label = oakmeal
 hostname = oakmeal-7320-167
 asn = 4913649f-7549-6d2a-866b-987ddbc4e163
 actions = 1

```

2. **actions** コマンドを使用して、選択したターゲットに関連付けられたアクションを表示します。

```

oakmeal-7320-167:shares project1 replication target-000> actions
POOL PROJECT SHARE
pool1 project1 (multiple)

```


3. 必要に応じてアクションに移動し、プロパティを変更します。  
CLI のレプリケーションアクションコマンドの一覧については、[554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)を参照してください。

#### 関連トピック

- [486 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(CLI\)」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

## ▼ レプリケーション圧縮の無効化 (BUI)

レプリケーションアクションを作成または編集するときに、圧縮を無効にできます。デフォルトで、すべてのレプリケーションストリームがネットワーク上に送信される前に圧縮されます。

1. ソースアプライアンスから、「シェア」 > 「プロジェクト」 > に移動し、編集するプロジェクトをダブルクリックします。
2. 「レプリケーション」 タブをクリックします。
3. 編集アイコン  をクリックします。
4. 「圧縮の無効化」をクリックし、「適用」をクリックします。

#### 関連トピック

- [556 ページの「圧縮レプリケーション」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

## ▼ レプリケーション圧縮の無効化 (CLI)

レプリケーションアクションを作成または編集するときに、圧縮を無効にできます。デフォルトで、すべてのレプリケーションストリームがネットワーク上に送信される前に圧縮されます。詳細は、[556 ページの「圧縮レプリケーション」](#)を参照してください。

1. 圧縮を無効にするには、プロジェクトまたはシェアに移動し、**compression** プロパティを次の例に示すように設定します。

```
eel:shares proj1 action-000> set compression=off
```

2. **commit**、次に **show** と入力して、**compression** プロパティが **off** に設定されていることを確認します。

```
eel:shares proj1 action-000> commit
eel:shares proj1 action-000> show
Properties:
 id = 67f0d3d6-10af-6f30-9d4c-a60d19eb1200
 target = goby-10g
 enabled = true
 continuous = false
 include_snaps = false
 max_bandwidth = unlimited
 bytes_sent = 0
 estimated_size = 0
 estimated_time_left = 00:14:35
 average_throughput = 0B/s
 use_ssl = false
 compression = off
 export_path =
 state = idle
 state_description = idle (no update in progress)
 export_pending = false
 offline = false
 next_update = Sync now
 last_sync = <unknown>
 last_try =
 last_result =
```

### 関連トピック

- [556 ページの「圧縮レプリケーション」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

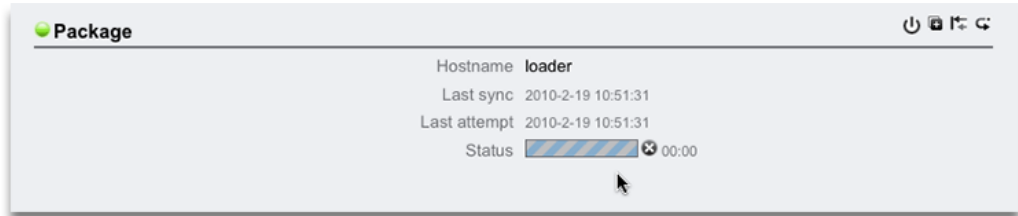
## ▼ レプリケーション更新の取り消し (BUI)

レプリケーションパッケージは、プロジェクトとしてレプリカフィルタの下に表示されます。

1. ターゲットアプライアンスから、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動し、「レプリカ」をクリックします。

2. 「レプリケーション」タブをクリックします。

更新が進行中の場合は、サインポール型の進捗バーとその横に取り消しアイコン (⊗) が表示されます。



3. 取り消しアイコン (⊗) をクリックします。

取り消しが完了するまでに数秒かかることがあります。

---

注記 - 手動更新は、ターゲットアプライアンスから開始できません。手動更新を開始するには、ソースアプライアンスにログインする必要があります。

---

#### 関連トピック

- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [489 ページの「レプリケーション更新の手動送信 \(BUI\)」](#)

## ▼ レプリケーション更新の取り消し (CLI)

ターゲット上で進行中のレプリケーション更新を取り消すことができます。レプリケーションパッケージは、CLI では shares replication sources の下でソース別に管理されます。

1. ターゲットアプライアンスから、レプリケーションパッケージに移動します。

```
loader:> shares replication sources
loader:shares replication sources> show
Sources:

source-000 ayu
 PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 oldproj idle unknown
package-001 aproj1 receiving Sun Feb 21 2010 22:04:35 GMT+0000 (UTC)
```

2. まずソースを選択し、次にパッケージを選択します。

```
loader:shares replication sources> select source-000
loader:shares replication source-000> select package-001
```

### 3. `cancelupdate` と入力します。

```
loader:shares replication source-000 package-001> cancelupdate
```

取り消しが完了するまでに数秒かかることがあります。

---

**注記** - 手動更新は、ターゲットアプライアンスから開始できません。手動更新を開始するには、ソースアプライアンスにログインする必要があります。

---

#### 関連トピック

- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [489 ページの「レプリケーション更新の手動送信 \(CLI\)」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージのクローニング (BUI)


レプリケーションパッケージのクローンは、最後に受信されたレプリケーションスナップショットに基づきます。

クローンが作成されたプロジェクトの作成時には、次のガイドラインに従って名前の競合を避けてください。

- クローンが作成されたプロジェクトは、同じプール内の既存のプロジェクトと競合しない一意の名前を持つ必要があります。
- クローンが作成されたプロジェクトのすべてのシェアについてのマウントポイントおよび SMB リソース名は、既存のすべてのマウントポイントまたは SMB リソース名と競合してはいけません。
- プロジェクトプロパティを継承するシェアの場合、プロジェクトレベルのマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方をオーバーライドすることによって競合を解決します。
- プロジェクトからプロパティを継承しないシェアの場合、マウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方に追加される接尾辞を設定して、競合を解決するか、各シェアのマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方を個別にオーバーライドします。

レプリケーションパッケージのクローンを作成するには次の手順を使用します。

1. ターゲットアプライアンスから、クローンを作成するレプリケーションパッケージに移動します。
2. 「レプリケーション」 タブをクリックします。

3. クローン作成アイコン  をクリックします。
4. 「レプリケーションプロジェクトのクローニング」ダイアログボックスで、次のフィールドに入力します。
  - a. 「新規プロジェクト」 - 新規プロジェクト (クローン) の一意の名前を入力します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です
  - b. (オプション) 「マウントポイント」 - クローンに対するプロジェクトレベルの一意のマウントポイントを入力します。

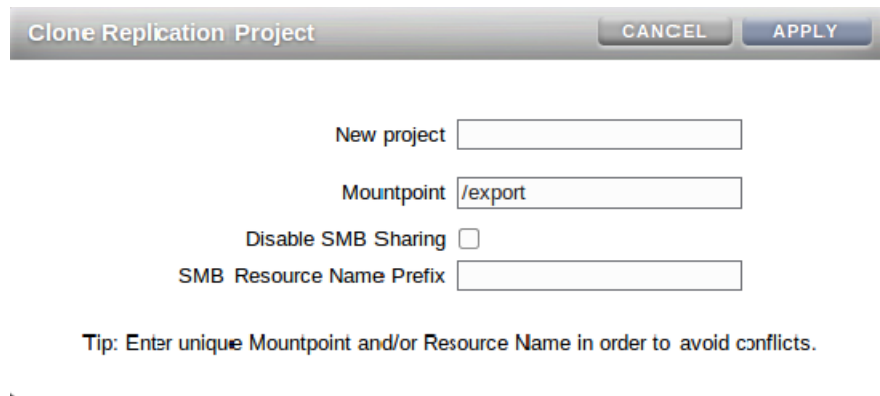
この設定は、プロジェクトからマウントポイントを継承するシェアに適用されます。一意のマウントポイントを入力すると、競合の回避に役立ちます。
  - c. (オプション) SMB シェアの無効化 - SMB を無効にするには、チェックマークを付けます。

この設定は、プロジェクトから SMB シェアを継承するシェアに適用されます。プロジェクトから SMB シェアを継承しないシェアは影響を受けません。プロジェクトレベルで SMB シェアを無効にしても、プロジェクトから SMB シェアを継承しないシェアでは SMB シェアは無効になりません。
  - d. (オプション) SMB リソース名接頭辞 - SMB リソース名を入力します。

この設定は、プロジェクトから SMB リソース名を継承するシェアに適用されます。一意のリソース名を入力すると、競合の回避に役立ちます。

SMB が有効になっている場合、SMB を介してクローンを共有できます。クローンされた新規プロジェクトの継承されたシェアを共有するために使用される SMB リソース名接頭辞は、追加した接頭辞に加えて対応するシェアの名前を使用して作成されます。





Clone Replication Project

CANCEL APPLY

New project

Mountpoint

Disable SMB Sharing

SMB Resource Name Prefix

Tip: Enter unique Mountpoint and/or Resource Name in order to avoid conflicts.

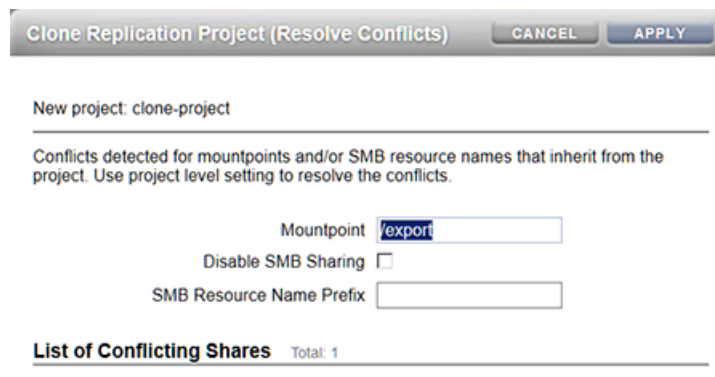
5. 「適用」をクリックします。

マウントポイントまたはリソース名の競合がなければ、クローン操作が開始されます。

プロジェクト名がすでに使用中の場合は、アラートが表示され、新しいプロジェクト名を入力する必要があります。

6. (オプション) 競合が検出された場合、追加のダイアログボックスを使用して競合を解決します。

- a. プロジェクトからマウントポイントまたは **SMB** リソース名、あるいはその両方を継承する競合を解決します。



Clone Replication Project (Resolve Conflicts)

CANCEL APPLY

New project: clone-project

---

Conflicts detected for mountpoints and/or SMB resource names that inherit from the project. Use project level setting to resolve the conflicts.

Mountpoint

Disable SMB Sharing

SMB Resource Name Prefix

---

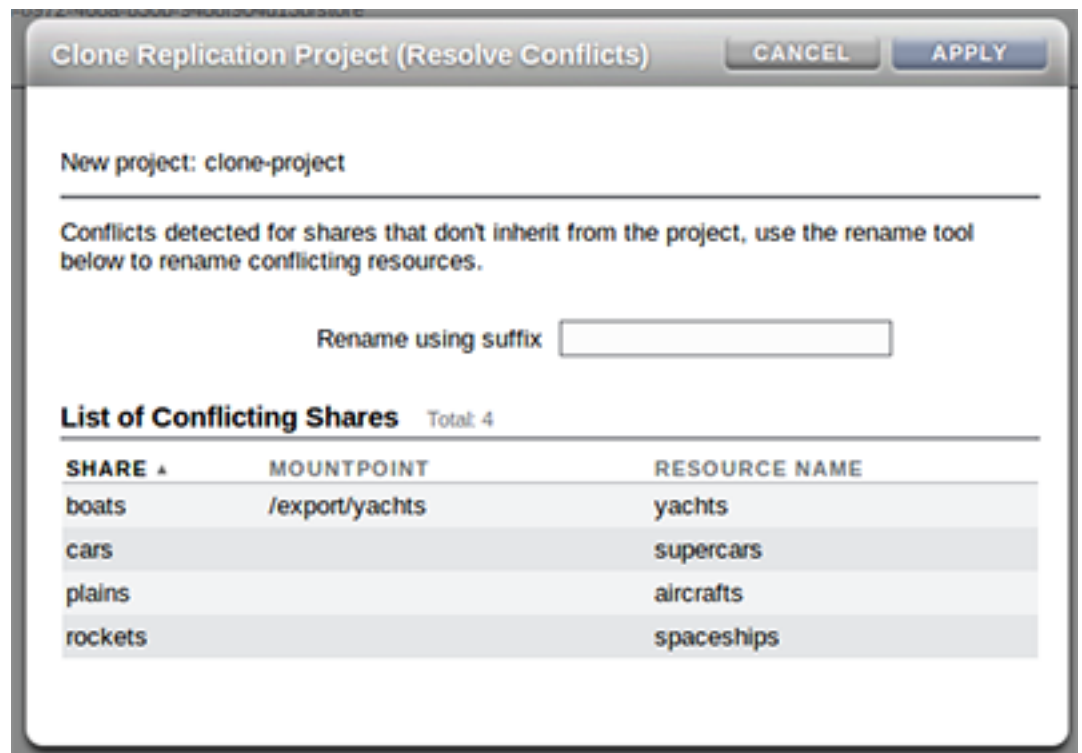
List of Conflicting Shares Total: 1

-----

- i. 一意のマウントポイントを入力します。
- ii. **SMB** シェアを無効にするか、一意の **SMB** リソース名接頭辞を入力します。
- iii. 「適用」をクリックします。

- b. プロジェクトからマウントポイントまたは **SMB** リソース名、あるいはその両方を継承しないシェアの競合を解決します。

このダイアログボックスは、継承するシェアのすべての競合を解決したあとにのみ表示されます。



- i. これらのシェアのマウントポイントまたは **SMB** リソース名、あるいはその両方に追加される一意の接尾辞を入力します。
- ii. 「適用」をクリックします。
7. まだ競合がある場合は、手順 6 を繰り返して該当する競合を解決します。

#### 関連トピック

- [558 ページの「レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング」](#)
- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージのクローニング (CLI)

レプリケーションパッケージのクローンは、最後に受信されたレプリケーションスナップショットに基づきます。

クローンが作成されたプロジェクトの作成時には、次のガイドラインに従って名前の競合を避けてください。

- クローンが作成されたプロジェクトは、同じプール内の既存のプロジェクトと競合しない一意の名前を持つ必要があります。
- クローンが作成されたプロジェクトのすべてのシェアについてのマウントポイントおよび SMB リソース名は、既存のすべてのマウントポイントまたは SMB リソース名と競合してはいけません。
- プロジェクトプロパティを継承するシェアの場合、プロジェクトレベルのマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方をオーバーライドすることによって競合を解決します。
- プロジェクトからプロパティを継承しないシェアの場合、マウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方に追加される接尾辞を設定して、競合を解決するか、各シェアのマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方を個別にオーバーライドします。

レプリケーションパッケージのクローンを作成するには次の手順を使用します。

1. ターゲットアプライアンスから、**shares replication sources** に移動し、クローンを作成するレプリケーションパッケージのソースを選択します。

```
hostname:shares replication sources> select source-000
hostname:share replication sources source-000>
```

2. 使用可能なレプリケーションパッケージを一覧表示し、クローンを作成するレプリケーションパッケージを選択します。

`list` コマンドを使用して、そのソースから使用可能なすべてのレプリケーションパッケージを表示します。次に、`select` と入力してパッケージ名を入力します。

```
hostname:shares replication source-000> list
PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 p3 idle Tue Apr 21 2015 19:50:43 GMT+0000 (UTC)
package-001 p2 idle Mon Apr 27 2015 17:05:16 GMT+0000 (UTC)
package-002 p1 idle Mon Apr 27 2015 17:00:25 GMT+0000 (UTC)
package-003 p4 idle Tue Apr 21 2015 21:37:16 GMT+0000 (UTC)
package-004 store idle Mon Apr 27 2015 16:40:26 GMT+0000 (UTC)
hostname:shares replication source-000> select package-004
```

3. `clone` と入力して、新しいクローンプロジェクトを作成します。

```
hostname:shares replication source-000 package-004> clone
hostname:shares replication source-000 package-004 clone>
```

4. `target_project` をプロジェクト名に設定します。

プロジェクト名は一意でなければならず、そうでなければクローン操作は失敗します。

プロジェクト名は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用したりしてはいけません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 `- . :` です

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> set target_project=clone
target_project = clone
```

#### 5. `conflicts` と入力して競合がないか検査します。

競合が存在する場合、次のようなメッセージが表示されます。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> conflicts
```

```
Cloning cannot proceed because the following shares have mountpoints or
SMB resource names that are invalid or conflict with those of other shares (either on the
system or also being failed over). Please specify valid mountpoints or SMB resource names
for
these shares:
```

SHARE	MOUNTPOINT	SHARESMB
appliances	/export/appliances	appliances
clothes	/export/clothes (inherited)	clothes (inherited)
electronics	/export/electronics	electronics
furniture	/export/furniture (inherited)	furniture (inherited)
groceries	/export/groceries (inherited)	groceries (inherited)
health	/export/health (inherited)	health (inherited)
toys	/export/toys	toys

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone>
```

---

注記 - `conflict` コマンドは、マウントポイントまたは名前の競合がないか検査するためにこの手順のあらゆる時点で使用できます。

---

#### 6. (オプション) プロジェクトからプロパティを継承するシェアについて競合を解決するには、プロジェクトレベルのプロパティを設定します。

`get` コマンドを使用してクローンのプロパティを表示します。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> get
target_project = clone
rename_suffix =
original_mountpoint = /export
mountpoint = /export
original_smb_resource_name = share
smb_resource_name = share
```

プロパティ `mountpoint` は現在のマウントポイントを示します。プロパティ `smb_resource_name` は現在のリソース名を示します。

##### a. クローンに対するプロジェクトレベルの一意のマウントポイントを入力します。

この設定は、プロジェクトからマウントポイントを継承するシェアに適用されません。set mountpoint を使用して、クローンの一意のマウントポイントを指定します。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> set mountpoint=/export/clone
mountpoint = /export/clone
```

**b. プロジェクトレベルの一意の SMB リソース名を入力します。**

この設定は、プロジェクトから SMB リソース名を継承するシェアに適用されます。smb\_resource\_name を一意の SMB リソース名に設定します。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> set smb_resource_name=clone
smb_resource_name = clone
```

**c. シェアの残りの競合を解決するために、rename\_suffix を設定します。**

このプロパティは、競合が発生した場合にマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方に追加される接尾辞を作成します。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> set rename_suffix=-clone
rename_suffix = -clone
```

---

**注記** - この操作は継承をオーバーライドします。たとえば、シェアは最初にプロジェクトからマウントポイントを継承したが、マウントポイントの名前がクローン操作中に接尾辞を使用して変更された場合、クローンが作成された新しいプロジェクト内のシェアはマウントポイントを継承せず、その代わりに名前が変更された一意のマウントポイントを使用します。

---

**7. (オプション) 個々のシェアのプロパティを設定するには:**

**a. 「シェア」を選択します。**

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> select appliances
```

**b. そのマウントポイントまたは SMB リソース名、あるいはその両方をオーバーライドします。**

次の例では、シェアのマウントポイントをオーバーライドします。

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone appliances> set mountpoint=/
export
hostname:shares replication source-000 package-004 clone appliances> set mountpoint=/
export/clone
```

**8. confirm commit と入力してクローン操作を開始します。**

```
hostname:shares replication source-000 package-004 clone> confirm commit
```

名前の競合が検出された場合、次のようなメッセージが表示されます。

```
Cloning cannot proceed because the following shares have mountpoints or
SMB resource names that are invalid or conflict with those of other shares (either on the
```

system or also being failed over). Please specify valid mountpoints or SMB resource names for these shares:

SHARE	MOUNTPOINT	SHARESMB
appliances	/export/appliances	appliances
clothes	/export/clothes (inherited)	clothes (inherited)
electronics	/export/electronics	electronics
furniture	/export/furniture (inherited)	furniture (inherited)

hostname:shares replication source-000 package-004 clone>

9. (オプション) 残りの名前の競合を解決します。  
競合がなくなるまで手順 6 および 7 を繰り返します。

### 関連トピック

- [558 ページの「レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの編集 (BUI)

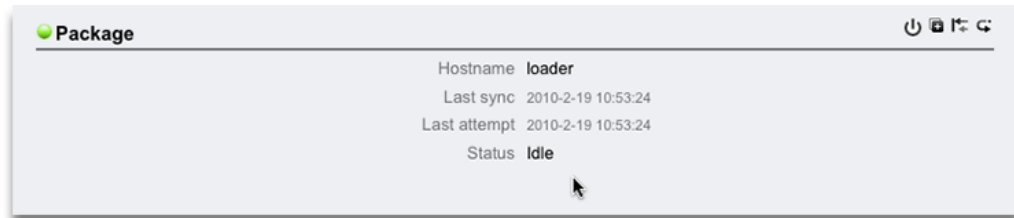
1. ターゲットアプライアンスから、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動し、「レプリカ」をクリックします。  
各レプリケーションパッケージの名前、サイズ、および作成日が表示されます。



注記 - パッケージは、最初のレプリケーション更新が開始したあとでのみ BUI に表示されます。最初の更新が完了したあと、しばらくはリストに表示されない場合があります。

2. 編集するレプリケーションパッケージを選択します。

パッケージのプロジェクトの「シェア」ビューが表示されます。



3. パッケージのプロパティを変更するには、「レプリケーション」タブをクリックします。

変更できるプロパティの一覧は、[557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)を参照してください。

#### 関連トピック

- [535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの編集 (CLI)

レプリケーションパッケージは、CLI では `shares replication sources` の下でソース別に管理されます。

1. ターゲットアプライアンスから、`shares replication sources` に移動し、パッケージを一覧表示します。

```
loader:> shares replication sources
loader:shares replication sources> show
Sources:

source-000 ayu
 PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 oldproj idle unknown
package-001 aproj1 receiving Sun Feb 21 2010 22:04:35 GMT+0000 (UTC)
```

2. ソースを選択し、次にパッケージを選択します。

このノードでは、パッケージレベルの操作を実行できます。

```
loader:shares replication sources> select source-000
loader:shares replication source-000> select package-001
loader:shares replication source-000 package-001> show
Properties:
 enabled = true
```

```

state = receiving
state_description = Receiving update
last_sync = Sun Feb 21 2010 22:04:40 GMT+0000 (UTC)
last_try = Sun Feb 21 2010 22:04:40 GMT+0000 (UTC)

```

Projects:

```
aproj1
```

```

loader:shares replication source-000 package-001> select aproj1
loader:shares replication source-000 package-001 aproj1> get mountpoint
mountpoint = /export
loader:shares replication source-000 package-001 aproj1> get sharenfs
sharenfs = on

```

- プロジェクトのプロパティおよびシェアを編集するには、プロジェクトを選択します。

変更できるプロパティの一覧は、[557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)を参照してください。

- `configuration services replication` からレプリケーションソースを表示するには、`show` プロパティを使用します。

```

loader:configuration services replication> show
Properties:
<status> = online
Children:
targets => Configure replication targets
sources => View and manage replication packages

```

## 関連トピック


- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの無効化 (BUI)

パッケージのレプリケーション更新を完全に無効にできます。その場合、進行中の更新は取り消され、ソースアプライアンスからの新しい更新は失敗します。

- ターゲットアプライアンスから、パッケージに移動します。
- 「レプリケーション」タブをクリックします。

- 電源アイコン  をクリックします。

左側のステータスアイコンは、パッケージのステータス (有効、無効、または失敗) を示します。この同じ電源アイコン  を使用して再度有効にするまで、パッケージは無効のままになります。



### 関連トピック

- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの無効化 (CLI)

パッケージのレプリケーション更新を完全に無効にできます。その場合、進行中の更新は取り消され、ソースアプライアンスからの新しい更新は失敗します。


1. ターゲットアプライアンスから、パッケージに移動します。
2. `enabled` プロパティを変更します。
3. 変更を確定します。  
`enabled` プロパティを `on` に設定するまで、パッケージは無効のままになります。

### 関連トピック

- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの切断 (BUI)

始める前に レプリケートされたファイルシステムとシステム上のほかのファイルシステムの間でマウントポイントまたは SMB シェア名の競合がないか確認します。マウントポイント (または SMB リソース名あるいはその両方) の競合を解決するには、レプリケーションパッケージを切断する前にレプリケーションパッケージ内のプロジェクトまたはシェアのマウントポイント (または SMB リソース名) を変更します。詳細は、[561 ページの「レプリケーションの切断」](#) を参照してください。

1. レプリケーションパッケージに移動します。
2. 「レプリケーション」 タブをクリックします。
3. 切断アイコン  をクリックします。
4. 新しいローカルプロジェクトの名前を入力します。

### 関連トピック

- [561 ページの「レプリケーションの切断」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ レプリケーションパッケージの切断 (CLI)

**始める前に** レプリケートされたファイルシステムとシステム上のほかのファイルシステムの間でマウントポイントまたは SMB シェア名の競合がないか確認します。マウントポイント (または SMB リソース名あるいはその両方) の競合を解決するには、レプリケーションパッケージを切断する前にレプリケーションパッケージ内のプロジェクトまたはシェアのマウントポイント (または SMB リソース名) を変更します。詳細は、[561 ページの「レプリケーションの切断」](#)を参照してください。

1. レプリケーションパッケージに移動し、`sever` コマンドを使用します。
2. `sever` コマンドの引数として、新しいローカルプロジェクトの名前を入力します。引数が指定されていない場合は、元の名前が使用されます。

### 関連トピック

- [561 ページの「レプリケーションの切断」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## 障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 (BUI)

2 システムの障害回復サイトは、地理的に異なる場所にある本番サイトのソースアプライアンスと、回復サイトにあるターゲットアプライアンスで構成されます。本番サイトの破局的な障害が発生した場合、管理者はターゲットアプライアンスのレプリケーションを逆向きに行うことによってクライアント操作を回復サイトにリダイレクトすることで、連続的な動作を可能にします。本番サイトが通常動作に復元されたあと、管理者は回復サイトのレプリケーションを逆向きに行うことによって本番サイトを更新します。そのあと、元のソース/ターゲット関係を復元するために、レプリケーションをふたたび逆向きに行います。

障害回復のためのリモートレプリケーションを設定するには、次のタスクを使用します。

- [523 ページの「回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 \(BUI\)」](#)
- [523 ページの「回復サイトへの操作の切り替え \(BUI\)」](#)
- [524 ページの「本番サイトの更新 \(BUI\)」](#)
- [524 ページの「本番サイトへのレプリケーションを逆向きにする \(BUI\)」](#)

### 関連トピック

- [562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ▼ 回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 (BUI)

障害回復のためのレプリケーションターゲットを作成するには、次のようにします。

1. 回復サイトのターゲットアプライアンスを特定します。  
ターゲットアプライアンスにはソースアプライアンスと互換性のあるソフトウェアバージョンが必要です。詳細は、「MOS Doc ID 1958039.1」を参照してください。
2. [482 ページの「レプリケーションターゲットの作成 \(BUI\)」](#)に記載されているように、ソースアプライアンスからターゲットを作成します。
3. レプリケーションアクションを作成し、連続レプリケーションのスケジュールを指定します。[484 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。

---

注記 - 連続的なレプリケーションは、本番サイトの災害時のデータ損失を最小限に抑えます。



---

### 次の手順

- [523 ページの「回復サイトへの操作の切り替え \(BUI\)」](#)

## ▼ 回復サイトへの操作の切り替え (BUI)

本番サイトに障害が発生したあと、回復サイトで逆向きレプリケーションを実行し、そのあとクライアント操作を回復サイトにリダイレクトします。

1. ターゲットアプライアンスから、「シェア」>「プロジェクト」>「レプリカ」に移動し、ソースアプライアンスからレプリケーションパッケージを探します。  
レプリカの名前は `source_appliance:project/share` です。
2. レプリケーションパッケージをダブルクリックするか、編集アイコンをクリックします 
3. 「レプリケーション」タブをクリックします。
4. レプリケーション方向を逆向きにするアイコン  をクリックします。
5. 「レプリケーションを逆向きにする」ウィンドウで、新しいローカルプロジェクトの名前を入力します。

レプリケーションを逆向きにするたびに、新しいプロジェクト名を指定すると、パッケージは書き込み可能なローカルプロジェクトに変換されます。

6. 「OK」をクリックします。
7. クライアントアクティビティを、回復サイトのアプライアンスの IP アドレスに転送します。  
使用されるプロトコルに応じて、回復サイトのアプライアンスの IP アドレスまたは名前を使用して、シェアをマップ (SMB クライアント) または再マウント (NFS クライアント) します。

#### 次の手順

- [524 ページの「本番サイトの更新 \(BUI\)」](#)

## ▼ 本番サイトの更新 (BUI)

本番サイトが復元されてオンラインに戻されたあと、停止中に回復サイトに書き込まれた変更内容を、本番サイトにレプリケートします。




1. 回復サイトのアプライアンスから、「シェア」>「プロジェクト」>「ローカル」に移動し、新しいローカルプロジェクトを選択します。  
新しいプロジェクトは `Never synced` のステータスでリストされます。
2. 「今すぐ同期」をクリックするとレプリケーションを開始します。
3. レプリケーションが完了するまで待機します。  
ウィンドウの上部に、「プロジェクト *project* のアプライアンス *source* からのレプリケートを完了しました」が表示されます。

#### 次の手順

- [524 ページの「本番サイトへのレプリケーションを逆向きにする \(BUI\)」](#)

## ▼ 本番サイトへのレプリケーションを逆向きにする (BUI)

すべての変更が回復サイトから本番サイトにレプリケーションされたあと、ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスの間の元のレプリケーション関係を復元するために、レプリケーションをふたたび逆方向にします。

1. 本番アプライアンスから、「シェア」>「プロジェクト」>「レプリカ」に移動し、新しいプロジェクト名を探します。  
プロジェクトの名前は `target_appliance: new_project/share` です。
2. 新しいプロジェクトを選択し、編集アイコン  をクリックします。
3. 「レプリケーション」タブをクリックします。
4. レプリケーション方向を逆向きにするアイコン  をクリックします。
5. 「レプリケーションを逆向きにする」ウィンドウで、新しいローカルプロジェクトの名前を入力します。  
このアクションにより、パッケージは元の回復サイトにレプリケーションするよう構成された新しいローカルプロジェクトに変換されます。
6. 使用されるプロトコルに応じて、シェアを回復サイトのアプライアンスに再マップ (SMB クライアント) または再マウント (NFS クライアント) します。
7. ソースアプライアンス上の元のプロジェクトを削除します。
  - a. 「シェア」>「プロジェクト」>「ローカル」に移動し、空になっているはずの元のプロジェクトを探します。
  - b. 空のプロジェクトを選択し、破棄アイコンをクリックします .
  - c. 「OK」をクリックします。

## 障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 (CLI)

2 システムの障害回復サイトは、地理的に異なる場所にある本番サイトのソースアプライアンスと、回復サイトにあるターゲットアプライアンスで構成されます。本番サイトの破局的な障害が発生した場合、管理者はターゲットアプライアンスのレプリケーションを逆向きに行うことによってクライアント操作を回復サイトにリダイレクトすることで、連続的な動作を可能にします。本番サイトが通常動作に復元されたあと、管理者は回復サイトのレプリケーションを逆向きに行うことによって本番サイトを更新します。そのあと、元のソース/ターゲット関係を復元するために、レプリケーションをふたたび逆向きに行います。

障害回復のためのリモートレプリケーションを設定するには、次のタスクを使用します。

- [526 ページの「回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 \(CLI\)」](#)

- 526 ページの「回復サイトへの操作の切り替え (CLI)」
- 527 ページの「本番サイトの更新 (CLI)」
- 528 ページの「本番サイトにレプリケーションを逆向きにする (CLI)」

#### 関連トピック

- 562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」
- 477 ページの「リモートレプリケーション」

## ▼ 回復サイトでのターゲットアプライアンスの設定 (CLI)

障害回復のためのレプリケーションターゲットを作成するには、次のようにします。

1. 回復サイトのターゲットアプライアンスを特定します。  
ターゲットアプライアンスにはソースアプライアンスと互換性のあるソフトウェアバージョンが必要です。詳細は、「MOS Doc ID 1958039.1」を参照してください。
2. [483 ページの「レプリケーションターゲットの作成 \(CLI\)」](#)に記載されているように、ソースアプライアンスからターゲットを作成します。
3. レプリケーションアクションを作成し、連続レプリケーションのスケジュールを指定します。[486 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

---

注記 - 連続的なレプリケーションは、本番サイトの災害時のデータ損失を最小限に抑えます。

---

#### 次の手順

- [526 ページの「回復サイトへの操作の切り替え \(CLI\)」](#)

## ▼ 回復サイトへの操作の切り替え (CLI)

本番サイトに障害が発生したあと、回復サイトで逆向きレプリケーションを実行し、そのあとクライアント操作を回復サイトにリダイレクトします。

1. ターゲットアプライアンスから、`shares replication` と入力します。

```
host-offsite:> shares replication
```

2. **sources** と入力して、このターゲットに関連付けられているソースアプライアンスを一覧表示します。

```
host-offsite:shares default replication> sources
```

3. ソースアプライアンスによってレプリケートされたパッケージを探します。

この例では、source-001 はソースアプライアンス番号、host-prod はソースアプライアンス名です。kmm2 は、レプリケーションパッケージ番号 package-001 内のローカルプロジェクト名です。

```
source-001 host-prod
 PROJECT
package-000 <unknown> idle unknown
package-001 kmm2 idle Wed May 01 2015 20:06:27 GMT
+0000
 (UTC)
```

4. **select** およびソースアプライアンス番号を入力します。

```
host-offsite:shares default replication sources> select source-001
```

5. **select** およびレプリケーションパッケージ番号を入力します。

```
host-offsite:shares default replication source-001> select package-001
```

6. **reverse** および新しいローカルプロジェクト名を入力し、確認のために Y を入力します。

```
host-offsite:shares default replication source-001 package-001> reverse new-kmm2
Are you sure? (Y/N) Y
```

これでレプリケーションが逆向きになり、レプリケーションパッケージは new-kmm2 という名前の書き込み可能なローカルプロジェクトに変換されます。

7. クライアントアクティビティーを、回復サイトのアプライアンスの IP アドレスに転送します。

使用されるプロトコルに応じて、回復サイトのアプライアンスの IP アドレスまたは名前を使用して、シェアをマップ (SMB クライアント) または再マウント (NFS クライアント) します。

## 次の手順

- [527 ページの「本番サイトの更新 \(CLI\)」](#)

## ▼ 本番サイトの更新 (CLI)

本番サイトが復元されてオンラインに戻されたあと、停止中に回復サイトに書き込まれた変更内容を、本番サイトにレプリケートします。

1. 回復サイトのアプライアンスから、**shares** に移動し、新しいプロジェクトを選択します。

```
host-offsite:> shares
host-offsite:shares pool> select new-kmm2
```

2. **list** と入力してシェアの名前を見つけます。

```
host-offsite:shares pool new-kmm2> list
Filesystems:

NAME SIZE
 ENCRYPTED MOUNTPOINT
karen2 31K off /export/karen2
host:shares pool new-kmm2> replication
host:shares pool new-kmm2 replication> show
Actions:

 TARGET
STATUS NEXT
action-000
host2 idle Sync now
```

3. アクション番号を選択し、**sendupdate** と入力して本番アプライアンスへのレプリケーションを開始します。

```
host-offsite:shares pool new-kmm2 replication> select action-000
host-offsite:shares pool new-kmm2 action-000> sendupdate
```

4. レプリケーションが完了するまで待機します。  
レプリケーションが完了すると、状態は **idle** に変更されます。

### 次の手順

- [528 ページの「本番サイトにレプリケーションを逆向きにする \(CLI\)」](#)

## ▼ 本番サイトにレプリケーションを逆向きにする (CLI)

すべての変更が回復サイトから本番サイトにレプリケーションされたあと、ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスの間の元のレプリケーション関係を復元するために、レプリケーションをふたたび逆方向にします。レプリケーションを逆向きにする前に、元のプロジェクトを削除します。

1. ソースアプライアンス上の元のプロジェクトを削除します。
  - a. **shares** に移動し、元のプロジェクトを選択します。

```
host-prod:> shares select kmm2
```



- b. **list** と入力して、プロジェクトが空であることを確認します。次に、**done** と入力します。

```
host-prod:shares kmm2> list
host-prod:shares kmm2> done
```

- c. **shares** に移動し、**destroy** および元のプロジェクト名を入力します。次に、アクションを確認するために **Y** を入力します。

```
host-prod:> shares
host-prod:shares> destroy kmm2
This will destroy all data in "kmm2"! Are you sure? (Y/N)Y
```

2. **shares** に移動し、次のコマンドを入力して、レプリケーションターゲットとして元の本番アプライアンスを使用するソースアプライアンスを一覧表示します。

```
host-prod:shares> replication
host-prod:shares replication> sources
host-prod:shares replication sources> list
```

次の例に示すように、元の本番アプライアンスをレプリケーションターゲットとして使用するすべてのアプライアンスが一覧表示されます。オフサイトの障害回復システムに該当するソースアプライアンスを探します。

```
source-000 ar7420-xxx
 PROJECT
 package-000 test
+0000(UTC)
 source-001 brmzs3-4-xxx
 PROJECT
 package-000 proj3
+0000(UTC)
 package-004 Proj-X
+0000(UTC)

 source-002 ar7110-xxx
 PROJECT
 package-000 <unknown>
 package-001 <unknown>
 package-002 <unknown>
 package-003 proj2
+0000 (UTC)

 source-003 ar7420-xxx
 PROJECT
 package-000 <unknown>
 package-001 project1
+0000(UTC)
 package-002 project1
+0000(UTC)
 package-003 proj1
+0000(UTC)

 source-004 aus7320-xxx
 PROJECT
 package-000 <unknown>
 package-003 default
+0000(UTC)
```

STATE	LAST UPDATE
receiving	Wed May 01 2015 20:45:21 GMT
idle	Tue Mar 24 2015 17:06:55 GMT
idle	Thu Mar 26 2015 20:01:42 GMT
idle	unknown
idle	unknown
idle	unknown
receiving	Wed Apr 02 2015 20:45:23 GMT
idle	unknown
idle	Wed Oct 08 2014 14:31:11 GMT
idle	Mon Mar 09 2015 21:18:51 GMT
idle	Mon Mar 23 2015 15:52:18 GMT
idle	unknown
idle	Wed Mar 25 2015 19:12:02 GMT

```
source-005 host-offsite << This is the name of the offsite disaster recovery system
PROJECT STATE LAST UPDATE
package-000 new-kmm2 idle Wed May 01 2015 20:44:34 GMT
+0000 (UTC)
```

3. 次の例に示すように、ソース番号およびパッケージ番号を選択します。

```
host-prod:shares replication sources> select source-005
host-prod:shares replication source-005> select package-000
```

4. **reverse** とプロジェクト名を入力します。次に、アクションを確認するために **Y** を入力します。

```
host-prod:shares replication source-005 package-000> reverse kmm2
Are you sure? (Y/N) Y
```

このアクションにより、パッケージは元の回復サイトにレプリケーションするよう構成された新しいローカルプロジェクトに変換されます。

5. 使用されるプロトコルに応じて、シェアを回復サイトのアプライアンスに再マップ (**SMB クライアント**) または再マウント (**NFS クライアント**) します。

#### 関連トピック

- [562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## ディスク間バックアップでのレプリケーションの使用

ターゲットアプライアンス上のレプリカには、最後に実行されたレプリケーション更新時点でのソースアプライアンスからレプリケートされたすべてのデータが含まれています。レプリカは、データが破棄または破壊される場合に備えて、元のソースのバックアップとして使用できます。

レプリケーションパッケージ内のデータには、次のいずれかの方法を使用してアクセスできます。

- **レプリケーションパッケージをエクスポートする** - 選択したレプリケーションパッケージをエクスポートした場合、エクスポートされたシェアには最後に実行されたレプリケーション更新のデータが含まれています。シェアをエクスポートしたあと、シェアのルートディレクトリの `.zfs/snapshot` ディレクトリに移動することによって、すべてのシェアの特定のスナップショットデータにアクセスできます。`.zfs` ディレクトリは通常は表示されませんが、[非表示のファイルシステムスナップショットディレクトリへのアクセス](#)の説明に従って、サブディレクトリまたはファイル名を明示的に指定することによってアクセスできます。スナップショット表示プロパティの変更については、「[ファイルシステムスナップショットディレクトリを表示する](#)」 (**BUI**、**CLI**) を参照してください。

- **レプリケーションパッケージのクローンを作成する** - レプリケーションパッケージのクローンの作成には、ソースアプライアンスから受け取った最新のデータが使用されます。クローニングによって、レプリケーションパッケージはプロジェクト内のすべてのデータに読み書きアクセス可能な新規プロジェクトに変換されます。クローンが作成されたプロジェクトには、どの既存のプロジェクトとも競合しない一意の名前、マウントポイント、および SMB リソース名を設定する必要があります。詳細は、「レプリケーションパッケージのクローニング」(BUI、CLI)を参照してください。
- **レプリケーションパッケージからシェアのクローンを作成する** - レプリケーションパッケージから最新のレプリケーションより前に作成された個々のシェアスナップショットのクローンを作成できます。レプリケーションパッケージから個々のスナップショットをクローニングすることにより、スナップショット作成時にソースアプライアンス上に存在していたデータへの読み書きアクセス権が提供されます。詳細は、「スナップショットのクローニング」(BUI、CLI)を参照してください。
- **レプリケーションパッケージを切断する** - 切断操作では、レプリケーションパッケージを新規プロジェクトに変換するため、プロジェクト内のデータに読み書きアクセスできるようになります。ソースアプライアンスとターゲットアプライアンス間のレプリケーション接続は、この操作のあとに切断されます。新規プロジェクトには、どの既存のプロジェクトとも競合しない一意の名前、マウントポイント、および SMB リソース名を設定する必要があることに注意してください。詳細は、レプリケーションパッケージの切断BUIおよびCLIを参照してください。
- **レプリケーションパッケージを逆方向にする** - 逆向きレプリケーションでは、レプリケーションパッケージを新規プロジェクトに変換するため、プロジェクト内のデータに読み書きアクセスできるようになります。レプリケーション接続は保持され、レプリケーションを元のソースアプライアンスに戻すことができる新しいレプリケーションアクションが作成されます。詳細は、562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」を参照してください。

### ユーザー生成のスナップショットを保持する

「ターゲットでユーザー生成スナップショットを保持する」プロパティにより、リモートレプリケーションを使用した無期限のディスク間増分バックアップソリューションが提供されます。ソースアプライアンス上で作成されたユーザースナップショットは、バックアップリポジトリとして機能するターゲットアプライアンスにレプリケートされます。

このプロパティを設定すると、ユーザー生成スナップショットをソースとターゲットのアプライアンス上で独立して管理できます。通常、ソースアプライアンス上のユーザー生成スナップショットを破棄すると、スナップショットは、レプリケーション更新のあとですぐにターゲットアプライアンス上で破棄されます。ターゲット上のユーザー生成スナップショットを保持するには、レプリケーションアクションを作成または編集するときにこのプロパティを設定します。

ユーザー生成スナップショットが必要なくなったときは、ターゲットアプライアンス上で手動で破棄します。スナップショットを破棄するには、「スナップショットの破棄」(BUI、CLI)を参照してください。アプライアンスでスナップショットの領域を管

理する方法の詳細は、[447 ページの「スナップショットの領域管理」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)
- レプリケーションアクションの作成[BUI](#)および[CLI](#)
- レプリケーションアクションの編集[BUI](#)および[CLI](#)

## リモートレプリケーションの概念

Oracle ZFS Storage Appliance リモートレプリケーションは、ソースアプライアンスから1つ以上のターゲットアプライアンスに、プロジェクトとシェアをスナップショットベースでレプリケートできるライセンス対象の機能です。リモートレプリケーションは、プロジェクト全体やシェアの内容の完全な更新を実行し、そのあとは、前回の更新以降に発生した変更だけを含む増分更新を実行します。

このトピックでは、重要なリモートレプリケーション(または単に「レプリケーション」)の概念とレプリケーションの用語について説明します。

リモートレプリケーションには、次の重要な特性があります。

- **スナップショットベースの非同期レプリケーション** - レプリケーションサブシステムは、各更新操作の一部としてスナップショットを取得します。初回更新の場合、プロジェクトやシェアの内容全体が送信されます。増分更新の場合は、同じアクションで最後にレプリケーションスナップショットを作成した時点以降の変更だけが送信されます。レプリケーションでは、スナップショットを作成してから送信するため、データは送信開始前に安定したストレージにすでにコミットされている必要があります。連続レプリケーションでは、ファイルシステムの変更が実質的に連続ストリームで送信されますが、NAS クライアントと SAN クライアントに関しては非同期のままです。
- **ブロックレベル** - 各更新処理は、ファイルシステムをブロックレベルでたどり、適切なファイルシステムデータとメタデータをターゲットに送信します。
- **すべてのメタデータを含める** - 基になるレプリケーションストリームでは、ユーザーデータとメタデータの両方が直列化されます。これには、「シェア」画面で構成されるほとんどのプロパティも含まれます。これらのプロパティは、最初のレプリケーション更新が完了したあとでターゲット上で変更できます。ただし、レプリケーション接続が切断されるまでは変更が有効にならないものもあります。たとえば、ソースとは異なる一連のホストに対して NFS でシェアすることが可能になります。詳細は、[557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)を参照してください。
- **セキュア** - Oracle ZFS Storage Appliance 製品間で使用されるレプリケーション制御プロトコルは、Secure Socket Layer (SSL) でセキュリティ保護されます。オプションで、データも SSL で保護できます。Oracle ZFS Storage Appliance は、初期の

手動認証プロセス後だけ、別の Oracle ZFS Storage Appliance 間でレプリケートできます。詳細は、534 ページの「レプリケーションターゲット」を参照してください。

- **暗号化されたプロジェクトとシェア** - 有効にすると、透過的なデータ暗号化により、個々のシェア (ファイルシステムと LUN) およびプロジェクトを保護します。詳細は、567 ページの「データ暗号化」を参照してください。
- **プロトコル非依存** - Oracle ZFS Storage Appliance は、ファイルとブロックベースの両方のストレージボリュームをサポートします。レプリケーションメカニズムは、プロトコルに依存しません。
- **圧縮レプリケーション** - 圧縮されたレプリケーションストリームのサポートにより、レプリケーションパフォーマンスが向上し、帯域幅のかぎられた接続を使用する複数サイト間でのスループット使用率が改善されます。詳細は、556 ページの「圧縮レプリケーション」を参照してください。

レプリケーションには次のような既知の制限事項があります。

- アクションをプール間で移動できない
- プロジェクトレベルのレプリケーションごとにネットワークスループットが最大 200M バイト/秒に制限されます。圧縮レプリケーションを使用すると、実効データ速度が実際の物理ネットワークのデータ速度を超えることがあります。

次に、一般的なレプリケーションの用語のリストを示します。

- **レプリケーションソース** - 定期的、連続的、または要求時にレプリケーション更新を 1 つまたは複数のターゲットアプライアンスに送信するアプライアンス。個々のアプライアンスは、ソースにもターゲットにもなり得ますが、特定のレプリケーションアクションのコンテキストではどちらか一方になります。
- **レプリケーションターゲット** - 1 つ以上のソースアプライアンスからレプリケートされるデータを受信して保存するアプライアンス。この用語は、別のアプライアンスへのレプリケーションを可能にする、アプライアンス上の構成オブジェクトを指すこともあります。
- **レプリケーションピア** - レプリケーションソースまたはレプリケーションターゲットとして構成されているアプライアンス。
- **レプリケーションアクション** - レプリケートされるデータ、レプリケーションのスケジュール、データ転送のプロパティ (ネットワークリンク暗号化の有効化/無効化など) を記述します。
- **レプリケーショングループ** - 1 単位としてレプリケートされる一連のデータセット (正確に 1 つのプロジェクトといくつかのシェア)。538 ページの「プロジェクトとシェアのレプリケーション」を参照してください。
- **レプリカ** - ターゲットアプライアンス上のレプリケーションパッケージに含まれる、レプリケートされたデータ。
- **レプリケーションパッケージ** - ターゲット上に存在し、レプリケーションアクションと関連付けられています。これは、レプリカが含まれる特別なオブジェクトです。どちらかのオブジェクトが失われた場合は、アクションとパッケージのペアおよび完全なレプリケーション更新を新たに作成する必要があります。アクションと

そのパッケージの間のリンクは切断されることがあります。その場合、将来の更新は妨げられますが、レプリカへの書き込みアクセスは可能です。

- **クローン** - レプリケートされたパッケージは、可変のプロジェクトにクローンを作成できます。これは、システムのほかのプロジェクトと同様に管理できます。
- **完全同期** (または**完全更新**) - プロジェクトとそのいくつかのシェアの内容全体を送信するレプリケーション操作。プロジェクトやシェアの初回同期は完全な同期になります。
- **増分更新** - 前回の更新 (完全更新か増分更新) 以降にプロジェクトとそのシェアに発生した差分だけを送信するレプリケーション操作。
- **逆向きレプリケーション** - ソースとターゲットのロールを交換するレプリケーション関係。障害回復の後、役割を再度逆向きにできます。

リモートレプリケーションの概念については、次を参照してください。

- [534 ページの「レプリケーションターゲット」](#)
- [535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」](#)
- [537 ページの「レプリケーションのストレージプール」](#)
- [538 ページの「プロジェクトとシェアのレプリケーション」](#)
- [539 ページの「レプリケーションの承認」](#)
- [540 ページの「クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」](#)
- [541 ページの「例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」](#)
- [548 ページの「レプリケーションスナップショットとデータ整合性」](#)
- [549 ページの「レプリケーションスナップショットの管理」](#)
- [550 ページの「iSCSI 構成およびレプリケーション」](#)
- [551 ページの「レプリケーションの失敗」](#)
- [554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)
- [556 ページの「圧縮レプリケーション」](#)
- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [558 ページの「レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング」](#)
- [560 ページの「レプリケートされたファイルシステムのエクスポート」](#)
- [561 ページの「レプリケーションの切断」](#)
- [562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」](#)
- [565 ページの「レプリケーションパッケージの破棄」](#)
- [565 ページの「ターゲットレプリカのバックアップ」](#)

## レプリケーションターゲット

ソースアプライアンス上にレプリケーションターゲットを作成するとき、ソースとターゲットアプライアンスの間でセキュアな通信を可能にする接続が確立されます。この操作には次の詳細情報が必要です:

- ターゲットアプライアンスの名前 - ソースアプライアンスの BUI または CLI でターゲットを識別するためだけに使用されます。
- ネットワーク IP アドレス - ターゲットアプライアンスのデータインタフェース。
- ターゲットアプライアンスの root パスワード - 管理者がターゲットアプライアンスで接続を設定できるようにするため。

アプライアンスは、以降の通信で互いに相手をセキュアに識別するために使用される鍵を交換します。これらの鍵はアプライアンス構成の一部として永続的に保存され、リポート後やアップグレード後も保持されます。アプライアンスを出荷時設定にリセットした場合や再インストールした場合には、鍵は失われます。root パスワードが永続的に保存されることはないため、どちらかのアプライアンスで root パスワードが変更された場合でも、レプリケーション構成を変更する必要はありません。最初のアイデンティティ交換は (すべてのレプリケーション制御操作と同様に) SSL で保護されているため、パスワードが平文で送信されることはありません。

---

**注記** - レプリケーションソースが NIS または LDAP を使用し、これらのサービスのユーザーまたはグループをシェア構成内で直接マッピングしている場合、同等の設定がターゲットアプライアンス上に存在する必要があります。そうしない場合、レプリケーションの切断および逆向きの操作に失敗することがあります。

---

デフォルトでは、レプリケーションターゲット接続は双方向ではありません。たとえば、管理者がソース A からターゲット B へのレプリケーションを構成した場合、ターゲット B はソース A を自動的にターゲットとして使用できるわけではありません。ただし、システムはレプリケーションの向きを逆にすることをサポートしており、これによってソース A のターゲットがターゲット B 上に自動的に作成され (まだ存在していない場合)、そのためターゲット B はソース A に向かって逆方向にレプリケートできます。詳細は、[562 ページの「逆向きレプリケーションの動作方法」](#)を参照してください。

レプリケーションターゲットを構成するには、[482 ページの「レプリケーションターゲットの作成 \(BUI\)」](#)または [483 ページの「レプリケーションターゲットの作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

#### 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## レプリケーションアクションおよびパッケージ

レプリケーションアクションは、レプリケートされるプロジェクトまたはシェア、更新の頻度、および選択されるオプションを指定します。レプリケーションアクションは、次を指定するソースアプライアンス上で作成されます。

- 1つのプロジェクトまたは個々のシェアを含むレプリケーショングループ



- ターゲットアプライアンスの名前
- ターゲットアプライアンス上のストレージプール (最初の設定時のみ使用される) の名前
- 更新の頻度 (定期または連続)
- データストリームの暗号化や圧縮の無効化などの追加オプション

レプリケーショングループは、アクションを構成するプロジェクトまたはシェアによって暗黙的に指定されます (537 ページの「レプリケーションのストレージプール」を参照)。アクションの作成後にターゲットアプライアンスとストレージプールを変更することはできませんが、ほかのオプションはいつでも変更できます。オプションが変更されたときにレプリケーション更新が進行中である場合、新しい値は次の更新が開始された時点でのみ有効になります。

ソースアプライアンス上でレプリケーションアクションが実行されると、指定されたストレージプールのターゲットアプライアンス上にパッケージが作成されます。ターゲットアプライアンス上のパッケージには、アクションが構成されているソースのプロジェクトとシェアの、最後のレプリケーション更新の開始時点での正確なコピーが含まれています。アクションはアプライアンスのレプリケーション構成の主要な単位です。

#### レプリケーションモード: 「定期」または「連続」

レプリケーションアクションでは、更新を、スケジュールを使用して、または連続して送信するように構成できます。レプリケーション更新の処理自体はどちらの場合も同じです。このプロパティは間隔のみを制御します。

連続レプリケーションアクションはできるかぎり頻繁に更新を送信するため、ファイルシステムのすべての変更が連続したストリームでターゲットシステムに送信されることとなります。変動の多い (多数のファイルの作成と破棄が短い間隔で発生する) ファイルシステムの場合は、これによって、実際に必要なデータよりはるかに大量のデータがレプリケートされることがあります。ただし、データの変化に遅れずにレプリケーションが行われるかぎり、ソースシステムでデータが失われる障害が発生した場合に失われるデータは最小限の量で済みます。

連続レプリケーションは非同期のままです。Oracle ZFS Storage Appliance は現在同期レプリケーションをサポートしていません。同期レプリケーションでは、プライマリストレージシステムとセカンダリストレージシステムの両方でデータが完全に確定されるまで、安定したストレージに確定されたデータを考慮しません。

#### 中間レプリケーションスナップショット

「スナップショットを含める」プロパティが `true` の場合、レプリケーション更新には、前回のレプリケーション更新のあとで (あるいは、最初の完全更新の場合はシェアの作成以降に) 作成された非レプリケーションスナップショットが含まれます。これには、自動スナップショットと管理者によって作成されたスナップショットが含まれます。このプロパティを無効にすると、各更新でこのようなスナップショットを除外し、レプリケーションスナップショットの間の変更だけを送信できます。



## レプリケーションアクションおよびパッケージの関係

レプリケーションアクションとパッケージは互いに結合されています。パッケージが何らかの形で破壊または破棄されると、アクションに関連するデータとスナップショットがターゲットに残っていても、アクションはレプリケーション更新を送信できなくなります。同様に、アクションが破棄されると、(同じデータとスナップショットがソースに残っていても)パッケージは新しいレプリケーション更新を受信できなくなります。アクションとパッケージの接続を破壊するような操作を実行しようとする、BUI と CLI の両方で警告が発生します。誤ってあるいは明示的な管理操作でアクションとパッケージの接続を破壊したために増分更新が不可能になった場合、パッケージとアクションを切断または破棄し、ソース上で新しいアクションを作成する必要があります。

---

**注記** - 管理者がそうすることを明示的にリクエストしないかぎり、アプライアンスはターゲット上のデータの破棄を防ぎます。その結果、アクションの最初のレプリケーション更新で一部のデータがレプリケートされたあとで更新が失敗し、パッケージ内に不完全なデータが残った場合、アプライアンスは以前に受信したデータを上書きできないため、同じアクションを使用する以降のレプリケーション更新は失敗します。これを解決するには、管理者は既存のアクションとパッケージを破棄し、新しいアクションを作成してレプリケーションを再開するようにしてください。

---

### 関連トピック

- [557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#)
- [554 ページの「レプリケーションアクションのプロパティ」](#)

## レプリケーションのストレージプール

管理者は、レプリケーションアクションを最初に構成するときに、レプリケートされたデータをターゲットのどのストレージプールに保存するかを選択できます。アクションを作成したあとで、アクションを保存するストレージプールを変更することはできません。アクションを作成すると、ターゲット上の指定されたストレージプールに空のパッケージが作成されます。この操作のあと、ターゲット上のストレージ構成はソースから認識されません。ソースは、どのプールにアクションがレプリケートされているかを追跡することも、ターゲット上のストレージ構成の変更で更新されることもありません。

ターゲットがクラスタ化されたシステムである場合、選択されたストレージプールは、ソースがレプリケーションに使用する IP アドレスを所有しているのと同じコントローラによって所有されるプールである必要があります。これらのプールが常にアクセス可能であることを保証されるのは、ソースがその IP アドレスを使用してターゲットに接続する場合だけであるためです。これは NFS や SMB などの NAS クライアントの構成とちょうど似ています。NAS クライアントの構成では、マウント操作でリクエストする IP アドレスとパスが同じ制約に従っている必要があります。管理者は、ク

クラスタ内のストレージプールおよび IP アドレスの所有者を変更する操作を実行する場合、そのクラスタにレプリケーションを行なっているソースに対する影響を考慮する必要があります。現在のところ、1つのストレージプールから別のストレージプールにパッケージを移動する方法はありません。

### 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## プロジェクトとシェアのレプリケーション

プロジェクトレベルとシェアレベルの両方でリモートレプリケーションを構成できますが、これらの理由のため、プロジェクトレベルのレプリケーションをお勧めします。このアプライアンスでは、管理者はプロジェクトレベルとシェアレベルの両方でリモートレプリケーションを構成できます。

- レプリケーションスナップショットは、常にプロジェクトレベルで作成されます。複数のシェアレベルレプリケーションが1つのプロジェクト内にあると、大量のオーバーヘッドが生じ、プール内のスペースが消費されることがあります。
- シェアレベルレプリケーションを逆向きにすると、シェアはそれ自体のプロジェクトに配置されます。つまり、レプリケーションの逆転により、すべてが同時にレプリケートされないかぎり、そのシェアはプロジェクトのほかのシェアから分割されます。

「シェア」画面で構成できるほかのプロパティと同様に、各シェアはその親プロジェクトの構成を継承するか、それをオーバーライドできます。構成を継承する場合、シェアはその親プロジェクトと同じスケジュールに従って、同じオプションで、同じターゲットにレプリケートされます。それだけではなく、プロジェクトの構成を継承しているほかのシェアと同じプロジェクトレベルのスナップショットを使用して、同じストリームでレプリケートされます。複数のシェアに保存されているデータの間で整合性を必要とするアプリケーションでは、これが重要になる場合があります。構成をオーバーライドする場合、シェアはプロジェクトレベルのアクションでレプリケートされることはありませんが、プロジェクトを含む独自のシェアレベルのアクションでレプリケートされることがあります。プロジェクトのレプリケーション構成の一部をオーバーライドし、残りを継承するということはできません。

より正確には、プロジェクトとそのシェアのレプリケーション構成により、いくつかのレプリケーショングループが定義されます。各グループは、同時に作成されたスナップショットを使用して、1つのストリームでレプリケートされます。すべてのグループには、プロジェクト自体が含まれています(プロジェクトは基本的にそのプロパティだけを含む)。1つのプロジェクトレベルのグループには、親プロジェクトのレプリケーション構成を継承しているすべてのシェアが含まれています。プロジェクトの構成をオーバーライドするシェアは、プロジェクトとシェア自体のみから成る新しいグループを形成します。

たとえば、次のような場合:

- プロジェクト home とシェア bill、cindi、および dave があります。
- home には、いくつかのアクションによるレプリケーションが構成されています。
- home/bill と home/cindi はプロジェクトのレプリケーション構成を継承します。
- home/dave はプロジェクトのレプリケーション構成をオーバーライドし、いくつかのアクションによる独自の構成を使用します。

この構成によって次のレプリケーショングループが定義され、その各グループは、プロジェクトとシェアに対して同時に作成されたスナップショットを使用して、アクションごとに1つのストリームでレプリケートされます。

- 1つのプロジェクトレベルのグループ。home、home/bill、および home/cindi が含まれます。
- 1つのシェアレベルのグループ。home と home/dave が含まれます。

**注記** - 現在の制限事項のため、プロジェクトレベルのレプリケーションとシェアレベルのレプリケーションを同じプロジェクト内に混在させないでください。これにより、レプリケーションの方向を逆にする場合やクローンを複製する場合に、予期しない結果が生じることを回避できます。詳細は、[557 ページの「レプリケーションパッケージ」](#) および [558 ページの「レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング」](#) を参照してください。

## 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## レプリケーションの承認

レプリケーションサブシステムには、「プロジェクトとシェア」スコープの下に2つのユーザー承認があります。

承認	詳細
rresource	管理者がレプリケーションターゲットおよびレプリケーションアクションを作成、編集、および破棄することを許可します。さらに、管理者がレプリケーションアクションの更新を送信および取り消すことができます。
rrtarget	レプリケートされたパッケージの管理を管理者に許可します。これには、パッケージレベルでのレプリケーションの無効化、パッケージやそのメンバーのクローニング、受信されたデータセットのプロパティの変更、レプリケーションの切断またはレブ

承認	詳細
	レプリケーションの向きを逆にする操作が含まれます。これらの操作の一部には、ほかの承認が必要になる場合もあります (プロパティの設定、個々のシェアのクローニングなど)。詳細は、「プロジェクトとシェア」スコープで使用可能な承認を参照してください。

アプライアンスにレプリケーションターゲットを構成するには、「リモートレプリケーション」サービス画面で構成する場合でも、`rrsource` 承認が必要です。承認の詳細は、[162 ページの「ユーザーの構成」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成

任意のソースアプライアンスから別の任意のターゲットアプライアンスに対してレプリケーションを構成できます。これは、それぞれがクラスタに属しているかどうか、また、アプライアンスのクラスタピアにいずれかの方向のレプリケーションが構成されているかどうかには依存しません。

クラスタ化アプライアンスでのレプリケーション更新の動作は、次の規則に従います。

- プロジェクトとシェアのレプリケーション更新は、それを格納しているストレージプールをインポートしたいいずれかのクラスタピアから送信されます。
- 各コントローラによって所有されるストレージプールは、両方のコントローラに OS8.6.0 (またはそれ以降) がインストールされている場合にかぎり、同じレプリケーションターゲットにレプリケートできます。
- レプリケーション更新は、ソース上のレプリケーションアクションに構成されている IP アドレスをインポートしたいいずれかのピアによって受信されます。管理者は必ず、この IP アドレスを使用しているコントローラが、インポートされたレプリカを格納するストレージプールを持つようにしてください。クラスタを構成する際にプールおよび IP アドレスのリソースを同じコントローラに割り当てることで、この条件が保証されます。
- アプライアンスが (テイクオーバーまたはフェイルバックの一部として) 対応するストレージプールまたは IP アドレスをエクスポートしたときに進行中のレプリケーション更新 (アプライアンスへと、アプライアンスからの両方) は失敗します。テイクオーバーまたはフェイルバック操作の影響を受けないストレージプールおよび IP アドレスを使用しているレプリケーション更新は、その操作の影響を受けません。

## 関連トピック

- [541 ページの「例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成」](#)

## 例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーション構成

この例の目的は、クラスタのテイクオーバー、クラスタのフェイルバック、またはターゲットアプライアンスでの逆向きレプリケーションの実行後に、プロジェクトのレプリケーションが継続されるようにレプリケーションを正しく構成することです。

- [構成ガイドライン](#)
- [例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーションの構成](#)
- [レプリケーションデータベースを示す例](#)

## 構成ガイドライン

クラスタ化アプライアンスのレプリケーションを構成するときは、次のガイドラインに従ってください。

- レプリケーションのソースアプライアンスとターゲットアプライアンスの両方が CLUSTERED 状態であることを確認します。詳細は、[表44](#)を参照してください。
- レプリケーションのソースアプライアンスとターゲットアプライアンスでのレプリケーショントラフィックに使用するネットワークインタフェースと IP アドレスを選択します。
  - シングルトンネットワークインタフェースを選択します。プライベートネットワークインタフェースとは異なり、シングルトンネットワークインタフェースは、クラスタ内のいずれかのコントローラが失われたあとで、動作しているコントローラによってテイクオーバーされます。シングルトンインタフェースを使用すると、クラスタのテイクオーバーまたはフェイルバックの遷移後にレプリケーションは確実に正常に行われます。シングルトンインタフェースの詳細は、[表43](#)を参照してください。
  - ソースアプライアンスで選択したネットワークインタフェースと、データのレプリケート元プールの両方を同じコントローラに割り当てます。これは、ソースクラスタが CLUSTERED 状態のときに常に当てはまります。
  - ターゲットクラスタの場合と同様に、ターゲットアプライアンスで選択したネットワークインタフェースと、データのレプリケート先プールの両方が、同じコントローラに割り当てられている必要があります。ターゲットクラスタが CLUSTERED 状態のときにレプリケーション構成が実行される場合に、この関連付けが保証されます。
  - ソースアプライアンスとターゲットアプライアンスは、選択したネットワークインタフェースと IP アドレスを使用して正常に通信できる必要があります。

- レプリケーションの逆転のあとで、逆転によって現在のターゲットがレプリケーションソースに変換されたら、選択したインターフェースがアウトバウンドレプリケーショントラフィックに確実に使用されるように、ターゲットアプライアンスとソースアプライアンスの間の静的な /32 ホストベースのルーティングを作成します。
- 静的ルートの作成後に、ターゲットの選択した IP アドレスを使用して、ソースアプライアンスでレプリケーションターゲットオブジェクトを構成します。
- ターゲットアプライアンスが OWNER 状態の場合、ネットワークインターフェースとストレージプールを含むすべての共有リソースが、動作中のコントローラのうち OWNER 状態になった 1 つのコントローラによってテイクオーバーされ所有されます。OWNER 状態のコントローラでは、あるコントローラに割り当てられたネットワークインターフェースを選択して、このネットワークインターフェースを使用して、別のコントローラに割り当てられたプールにレプリケーショントラフィックを配信できます。コントローラが CLUSTERED 状態に戻ると、ネットワークインターフェースとストレージプールが、割り当てられたコントローラに戻されます。その結果、ソースアプライアンスは、プールを所有しなくなったターゲットコントローラ上のネットワークインターフェースを使用するため、レプリケーションを更新できないことがあります。ターゲットアプライアンスが CLUSTERED 状態のときにレプリケーション構成を実行する場合、この構成エラーが発生することはありません。

## 例: クラスタ化アプライアンスのレプリケーションの構成

この例の手順では、次のソースとターゲットのネットワークインターフェースと IP アドレスを使用します。

ソースアプライアンスクラスタは、ソースコントローラ S1 および S2 で構成されません。ストレージプール sp1 は S1 に割り当てられ、プール sp2 は S2 に割り当てられています。クラスタネットワークインターフェースは次のもので構成されます。

- IP アドレス 198.51.100.81/24 を持つ S1 上のプライベートインターフェース ixgbe0
- IP アドレス 198.51.100.82/24 を持つ S2 上のプライベートインターフェース ixgbe0
- S1 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.101/25 を持つシングルトンインターフェース ixgbe1
- S2 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.102/25 を持つシングルトンインターフェース ixgbe2
- S1 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.201/25 を持つシングルトンインターフェース ixgbe3
- S2 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.202/25 を持つシングルトンインターフェース ixgbe4

次の場合、アプライアンスは最初は CLUSTERED 状態になっています。

- S1 は sp1、ixgbe1、および ixgbe3 を所有します

- S2 は sp2、ixgbe2、および ixgbe4 を所有します

ターゲットアプライアンスクラスタは、コントローラ T1 および T2 で構成されます。ストレージプール tp1 は T1 に割り当てられ、プール tp2 は T2 に割り当てられています。クラスタネットワークインタフェースは次のもので構成されます。

- IP アドレス 198.51.100.83/24 を持つ T1 上のプライベートインタフェース ixgbe0
- IP アドレス 198.51.100.84/24 を持つ T2 上のプライベートインタフェース ixgbe0
- T1 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.103/25 を持つシングルトンインタフェース ixgbe1
- T2 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.104/25 を持つシングルトンインタフェース ixgbe2
- T1 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.203/25 を持つシングルトンインタフェース ixgbe3
- T2 に割り当てられた IP アドレス 192.0.2.204/25 を持つシングルトンインタフェース ixgbe4

次の場合、アプライアンスは最初は CLUSTERED 状態になっています。

- T1 は tp1、ixgbe1、および ixgbe3 を所有します
- T2 は tp2、ixgbe2、および ixgbe4 を所有します

次の手順では、プロジェクト Red、Blue、および Green に CLI を使用してレプリケーションを構成する方法について説明します。

1. ネットワークインタフェースおよび IP アドレスを選択します。
  - 最初に、プロジェクト Red のレプリケーション用のネットワークインタフェースと IP アドレスを選択します。  
ソース s は CLUSTERED 状態であるため、選択したネットワークインタフェースと IP アドレスがプライベートではないようにすれば十分です。そのため、S1 では、ixgbe1 または ixgbe3 のいずれかを使用します。
  - 同じことがターゲット T に適用されるため、アプライアンス T1 で ixgbe1 または ixgbe3 のいずれかを使用します。S1 と T1 上の両方の ixgbe1 と ixgbe3 が同じサブネットに属するため、プロジェクト Red のレプリケーションの実行のためにいずれかを選択します。この例では、S1 および T1 上のインタフェース ixgbe1 を選択します。
2. S1 で静的ルートを設定します。

次の例では、ソースコントローラ S1 でプロジェクト Red のレプリケーションの静的ルートを設定します。

```
S1:configuration net routing> create
S1:configuration net route (uncommitted)> set family=IPv4
family = IPv4 (uncommitted)
S1:configuration net route (uncommitted)> set destination=192.0.2.103
destination = 192.0.2.103 (uncommitted)
```

```
S1:configuration net route (uncommitted)> set mask=32
 mask = 32 (uncommitted)
S1:configuration net route (uncommitted)> set interface=ixgbe1
 interface = ixgbe1 (uncommitted)
S1:configuration net route (uncommitted)> set gateway=192.0.2.1
 gateway = 192.0.2.1 (uncommitted)
S1:configuration net route (uncommitted)> commit
S1:configuration net routing> list
ROUTE DESTINATION GATEWAY INTERFACE TYPE STATUS
...
route-003 192.0.2.103/32 192.0.2.1 ixgbe1 static active
```

3. T1 で静的ルートを設定します。

次の例では、ターゲットコントローラ T1 でプロジェクト Red をレプリケートするための静的ルートを設定します。

```
T1:configuration net routing> create
T1:configuration net route (uncommitted)> set family=IPv4
 family = IPv4 (uncommitted)
T1:configuration net route (uncommitted)> set destination=192.0.2.101
 destination = 192.0.2.101 (uncommitted)
T1:configuration net route (uncommitted)> set mask=32
 mask = 32 (uncommitted)
T1:configuration net route (uncommitted)> set interface=ixgbe1
 interface = ixgbe1 (uncommitted)
T1:configuration net route (uncommitted)> set gateway=192.0.2.1
 gateway = 192.0.2.1 (uncommitted)
T1:configuration net route (uncommitted)> commit
T1:configuration net routing> list
ROUTE DESTINATION GATEWAY INTERFACE TYPE STATUS
...
route-003 192.0.2.101/32 192.0.2.1 ixgbe1 static active
```

4. S1 でレプリケーションターゲットを作成します。

次の例では、プロジェクト Red を sp1 から tp1 にレプリケートするために使用するレプリケーションターゲットオブジェクトを S1 で作成します。

```
S1:shares replication targets>target

S1:shares replication target (uncommitted)> set hostname=192.0.2.103

 hostname = 192.0.2.103 (uncommitted)
S1:shares replication target (uncommitted)> set label=t1-1
 label = t1-1 (uncommitted)
S1:shares replication target (uncommitted)> set root_password=*****
 root_password = (set) (uncommitted)
S1:shares replication target (uncommitted)> commit
```



5. 各プロジェクトのレプリケーションアクションを作成します。
  - プロジェクト Red をプール sp1 から tp1 にレプリケートします
  - プロジェクト Blue をプール sp1 からプール tp2 にレプリケートします
  - プロジェクト Green をプール sp2 から tp2 にレプリケートします

次の例では、プロジェクト Red のレプリケーションアクションを作成します。

```
S1:> shares select Red replication action
S1:shares Red action (uncommitted)> set target=t1-1

 target=t1-1 (uncommitted)
S1:shares Red action (uncommitted)> set pool=tp1
 pool=tp1 (uncommitted)
S1:shares Red action (uncommitted)> commit
```

6. プロジェクト Blue をプール sp1 から tp2 にレプリケートするように設定します。最初にインタフェースとアドレスを選択し、S と T の両方が CLUSTERED 状態であり、インタフェースアドレスが同じサブネット 192.0.2.128/25 上にあることを確認して、インタフェース S1/ixgbe3 および T2/ixgbe4 を選択します。次に、上の例と似た静的ルートを両方のアプライアンスで定義します。その後、S1 でレプリケーションターゲットオブジェクト t2-2 を作成して、ターゲットオブジェクト t2-2 を使用して S1 でプロジェクト Blue のレプリケーションアクションを作成します。
7. プロジェクト Green をプール sp2 から tp2 にレプリケートするように設定します。最初にインタフェースを選択します。インタフェース S2/ixgbe2 および T2/ixgbe2 を選択します。選択したインタフェースとそのアドレスを使用して S2 および T2 で静的ルートを作成して、T2/ixgbe2 のアドレスを使用してレプリケーションターゲットオブジェクト t2-1 を定義し、最後にターゲットオブジェクト t2-1 を使用してプロジェクト Green のレプリケーションアクションを作成します。
8. 3 つすべてのアクションのレプリケーションを開始します。
  - a. プロジェクト Red から開始します。

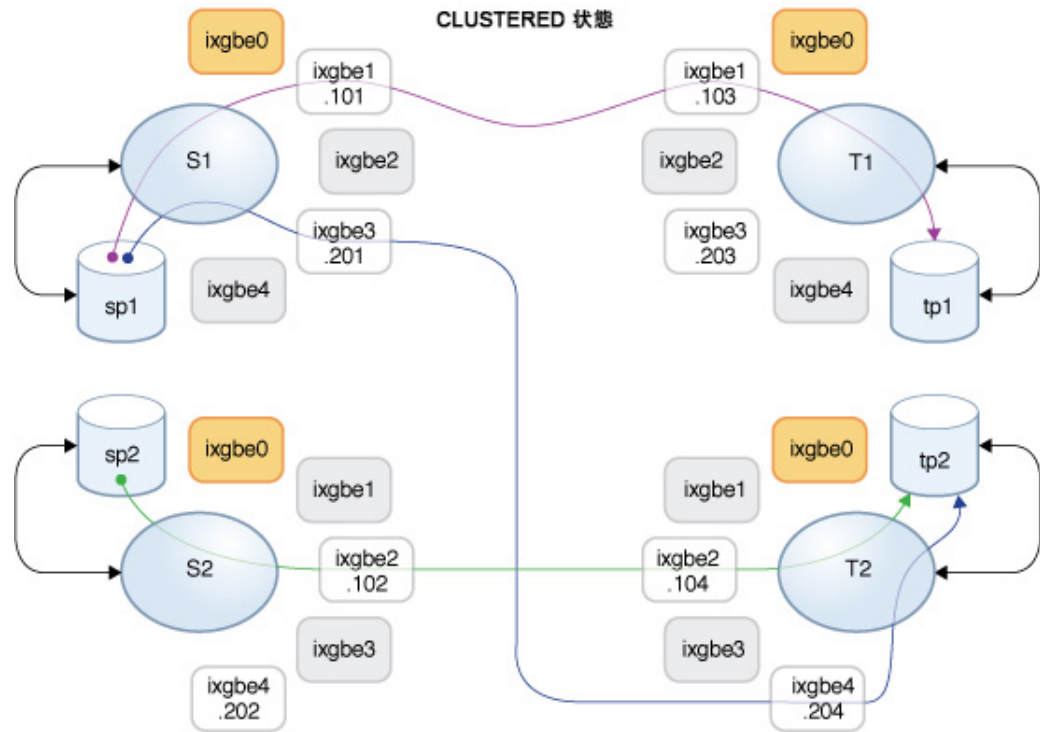
```
S1:> shares select Red replication select action-000
S1:shares Red action-000> sendupdate
```

- b. 前の例に従って、プロジェクト Blue と Green のアクションのレプリケーションを開始します。

## レプリケーションデータパスを示す例

次の図は、プロジェクト Red、Blue、および Green に対するレプリケーションアクションのレプリケーション更新中のレプリケーションデータパスを示しています。

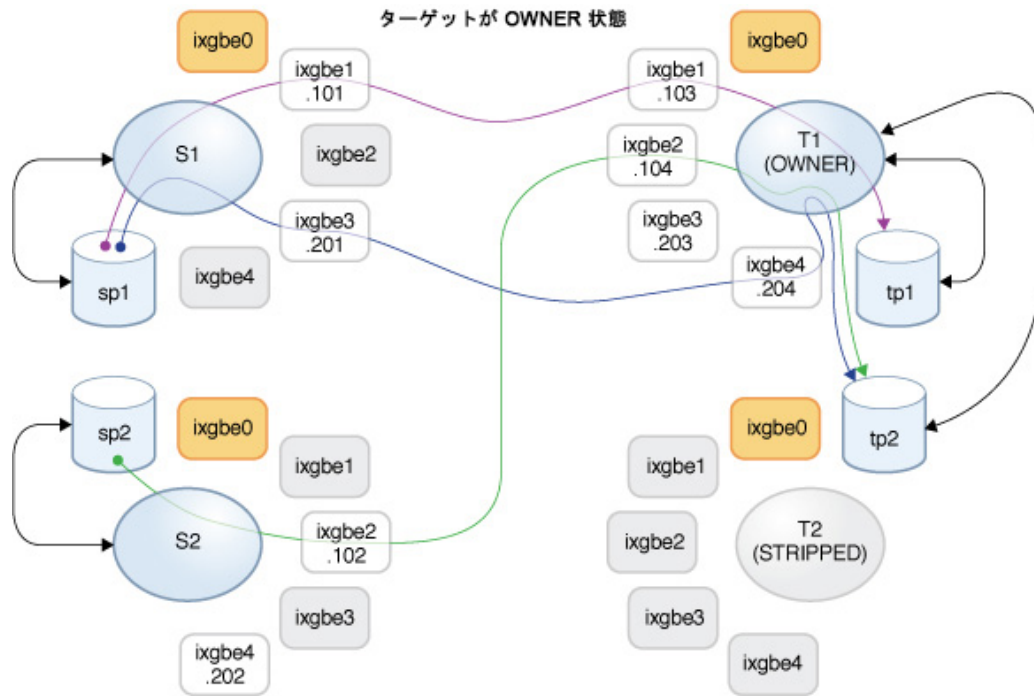
図 31 通常のレプリケーションデータベース



コントローラ T2 は保守のために停止されていると想定します。T1 はテイクオーバーを実行し、現在はすべてのリソースを所有しています。テイクオーバー中にプロジェクト Blue および Green のレプリケーション更新が進行中の場合、これらの更新は取り消されます。T1 のテイクオーバー後に、これらのレプリケーション更新は手動で再開でき、対応するレプリケーションアクションのスケジュールが構成されている場合は自動的に再開されます。

コントローラ T1 は、テイクオーバーの完了後に、プロジェクト Blue および Green のレプリケーション更新を続行するために必要なインターフェース ixgbe2 および ixgbe4 を所有します。次の図は、T1 がテイクオーバーを完了したあとのレプリケーションデータベースを示しています。

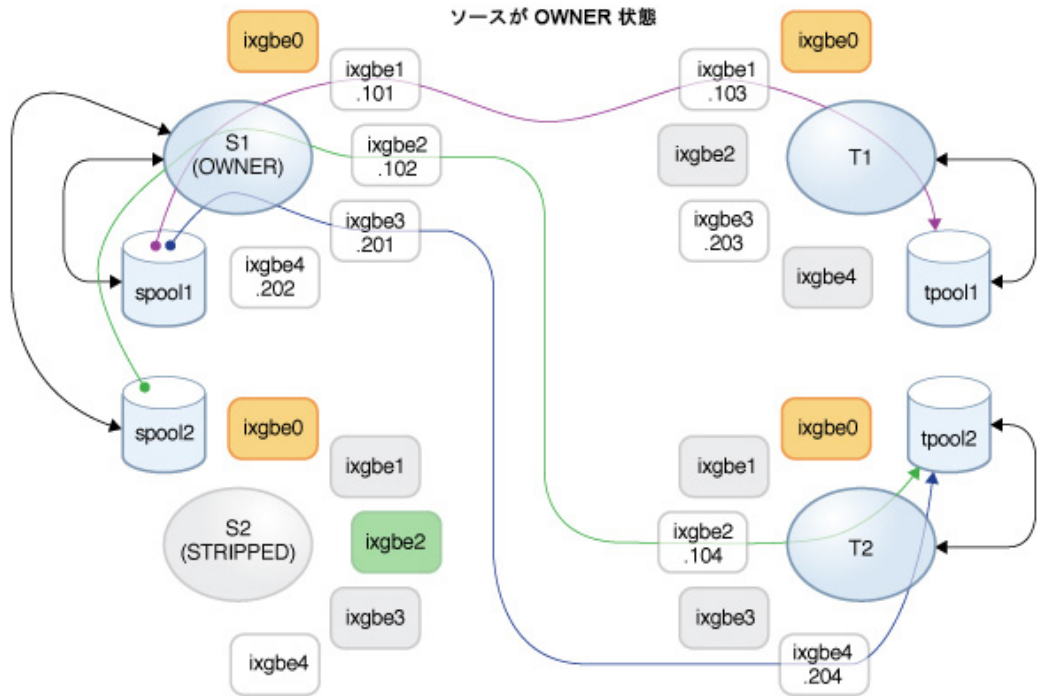
図 32 T1 のテイクオーバー後のレプリケーションデータパス



T2 がオンラインに戻ったあとで、T1 コントローラでフェイルバックが実行され、そのリソースがテイクオーバーされます。プロジェクト Blue および Green のレプリケーション更新が進行中の場合、これらの更新は取り消され、フェイルバックの完了後に再開できます。

次に、コントローラ S2 は保守のために停止され、S1 コントローラ上で実行されるテイクオーバーによって S1 はプロジェクト Green のレプリケーションを続行するために必要なインタフェースを含むすべてのリソースの所有権を取得します。プロジェクト Green のレプリケーション更新が進行中の場合、この更新は取り消され、テイクオーバーの完了後に再開できます。

図 33 T1 でのフェイルバックおよび S1 でのテイクオーバー後のデータパス



関連トピック

- [488 ページの「クラスタ構成のレプリケーションの構成」](#)
- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## レプリケーションスナップショットとデータ整合性

ソースアプライアンスはスナップショットをターゲットに原子的にレプリケートするため、レプリカの内容は、スナップショットが作成された時点におけるソースのシェアの内容と常に厳密に一致します。特定のグループで送信されるすべてのシェアのスナップショットは同時に作成されるため、レプリケーション更新が正常に完了したあとは、パッケージの内容全体が、ソース上でスナップショットが作成された時点のグループの内容と厳密に一致します。

ただし、各シェアのスナップショットは個別にレプリケートされるため、パッケージ内の一部のシェアが、同じパッケージ内のほかのシェアよりも新しいスナップショットで更新されていることはあり得ます。このことは、レプリケーション更新の実行中とレプリケーション更新の失敗後に起こり得ます。

まとめると、次のようになります。

- 各シェアには、ターゲット上で常にポイントインタイムの整合性があります。
- 前回のレプリケーション更新が成功した場合で、レプリケーション更新が進行中でないときは、パッケージの各シェア相互にもポイントインタイムの整合性があります。
- レプリケーション更新が進行中の場合、または前回の更新が失敗した場合、パッケージのシェア相互には整合性がない可能性があります。それぞれの自己整合性は保たれます。パッケージの整合性がアプライアンスに重要となる場合は、レプリケーションパッケージのクローンを作成する必要があります。これにより、各シェアのもっとも新しく正常に受信されたスナップショットのクローンが常に作成されます。

#### 関連トピック

- [549 ページの「レプリケーションスナップショットの管理」](#)

## レプリケーションスナップショットの管理

スナップショットはレプリケーションのベースとなります。増分レプリケーションを継続するためには、ソースとターゲットが常に共通のスナップショットをシェアする必要があります。また、ソースは、どれがターゲット上で最新のスナップショットかを把握する必要があります。これを簡単にするために、レプリケーションサブシステムは独自のスナップショットを作成して管理します。通常、管理者がこれらに注意を払う必要はありませんが、スナップショットはストレージの利用率にかなり影響することがあるため、ここで詳細に説明します。

特定のアクションのレプリケーション更新は、それぞれ次の手順で行われます。

- 次に当てはまるかどうかに基づいて、これが増分更新か完全な更新かを判別します。
  - 以前にこのアクションのレプリケートが試行されました
  - ターゲットに、増分更新のために必要なスナップショットがすでにあります
- 新しいプロジェクトレベルのスナップショットを作成します。
- 更新を送信します。完全更新の場合は、この新しいスナップショットまでのグループの内容全体を送信します。増分更新の場合は、前回のスナップショット (基礎) とこの新しいスナップショットの間の差分を送信します。
- この新しいスナップショットを次回の更新のベーススナップショットとして記録し、前回のベーススナップショットを破棄します (増分更新の場合)。ベーススナッ

プッシュは、次の更新を受信するまでターゲット上に残ります。次の更新の時点で、そのベーススナップショットは破棄される最初の項目となります。

これは、スナップショットの管理にいくつかの影響を与えます。

- 最初のレプリケーション更新の進行中、および最初の更新のあとレプリケーションがアクティブでないときは、グループのプロジェクトまたはシェアに構成されている各アクションに、プロジェクトレベルのスナップショットが正確に1つ存在します。レプリケーションアクションで、そのアクションによりレプリケートされているグループ内のシェアと同じプロジェクト内にあるが、そのグループ用の更新の一部として送信されていないシェア上にスナップショットが作成されることがあります。
- 特定のアクションによる以降のレプリケーション更新の進行中には、そのアクションに関連するプロジェクトレベルのスナップショットが2つ存在することがあります。ソースで、ターゲットが新しいスナップショットを正常に受信したかどうかを判定できなかった場合(更新中にネットワークの機能停止で障害が発生した場合など)、更新の完了後に両方のスナップショットが残ることがあります。
- 管理者は増分レプリケーションを破壊しなければ、レプリケーションアクションに関連付けられたスナップショットを破棄できません。管理者は、ソースまたはターゲット上にある、増分レプリケーションに必要なスナップショットを破棄することはできません。ソース上のそのようなスナップショットを破棄するには、アクションを破棄する必要があります(これにより、そのアクションに関連付けられたスナップショットが破棄される)。ターゲット上のそのようなスナップショットを破棄するには、まずパッケージを切断する必要があります(これにより、そのパッケージに増分更新を受信できなくなる)。
- 管理者はレプリケーションスナップショットより前に作成されたスナップショットにロールバックしてはいけません。この操作を行うと、それよりあとのレプリケーションスナップショットが破棄され、それらのスナップショットを使用するすべてのアクションの増分レプリケーションが破壊されます。
- レプリケーションでのスナップショットの使用方法から、レプリケーションを使用する管理者は、アプライアンスのスペース管理、特にそのスナップショットへの適用について理解することが求められます。

#### 関連トピック

- [401 ページの「シェアの領域管理」](#)
- [ディスク間バックアップでのリモートレプリケーションの使用](#)

## iSCSI 構成およびレプリケーション

レプリケーション更新には、プロジェクトとそのシェアの「シェア」画面で指定された構成のほとんどが含まれます。これには、レプリケートされる LUN に関連付けられたすべてのターゲットグループとイニシエータグループが含まれます。

デフォルト以外のターゲットグループとイニシエータグループを使用する場合、管理者は、プロジェクト内の LUN で使用されるターゲットグループとイニシエータグループがレプリケーションターゲット上にも存在することを確認する必要があります。ターゲットグループまたはイニシエータグループがターゲットシステムに存在しない場合、レプリケーションのクローニング、切断、逆転は失敗します。エラーメッセージで、イニシエータまたはターゲットグループ名がターゲットシステムで削除または名前変更されたことが報告されます。

LUN に関連付けられた SCSI GUID は、LUN とともにレプリケートされます。その結果、ターゲットアプライアンス上の LUN の SCSI GUID は、ソースアプライアンス上の LUN と同じになります。ただし、(ローカル LUN のクローンの GUID が元の GUID とは異なるように) レプリケートされた LUN のクローンの GUID は異なります。

### 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [477 ページの「リモートレプリケーション」](#)

## レプリケーションの失敗

個々のレプリケーション更新はいくつかの理由で失敗することがあります。可能な場合、アプライアンスは、ソースアプライアンスまたはターゲットアプライアンスで通知されるアラートか、失敗したアクションの「レプリケーション」画面で、失敗の理由を報告します。アクションのステータスを表すオレンジ色のアラートアイコンをクリックすると、失敗の詳細を取得できます。

もっとも一般的なレプリケーションの失敗の種類は次のとおりです。

失敗	詳細
取り消されました	レプリケーション更新は管理者によって取り消されました。レプリケーションはソースまたはターゲットで取り消すことができます。
ネットワーク接続失敗	ネットワークの問題のため、アプライアンスはターゲットアプライアンスに接続できませんでした。ソース、ターゲット、またはネットワークの構成に誤りがある可能性があります。
ピア検証失敗	アプライアンスはターゲットのアイデンティティを確認できませんでした。これは、ターゲットを再インストールまたは出荷時設定にリセットした場合によく発生します。ターゲットを再インストールまたは出荷時構成にリセットした場合は、新しい認証鍵セットを生成するために、そのターゲットに対する新しいレプリケーションターゲットをソースアプライアンス上で構成する必要があります。 <a href="#">534 ページの「レプリケーションターゲット」</a> を参照してください。

失敗	詳細
ピア RPC 失敗	ターゲットシステムでリモート手続き呼び出しが失敗しました。これは、ターゲットアプライアンスで互換性のないソフトウェアが実行されている場合によく発生します。
名前の競合	NDMP のターゲット上で保持されている @<snapname> との名前の競合により、<source> から <project/share> のレプリケーションが失敗しました。回復するには、ターゲット (アラートに表示されているもの) 上の NDMP で保持されているスナップショットと名前が同じである、レプリケーションソース上のスナップショットを名前変更 (または削除) します (.rr で始まる場合を除く)。次に、手動同期を実行するか、レプリケーションソースでレプリケーション更新を自動的に再試行できるようにします。
パッケージがありません	レプリケートされたデータを格納するパッケージがターゲット上に存在しないため、レプリケーションが失敗しました。パッケージはアクションの構成時に作成されるため、このエラーは通常、管理者がターゲット上のパッケージを破棄したあとに発生します。パッケージを格納しているストレージプールがターゲットシステムにインポートされていない場合にも、このエラーが発生する可能性があります。プールに障害が発生したときや、ターゲットアプライアンスでストレージまたはネットワークの再構成が行われたときに、このような状況になることがあります。
空でないパッケージが存在します	ターゲットパッケージに以前の失敗したレプリケーション更新のデータが含まれているため、レプリケーションが失敗しました。このエラーは、アクションの最初のレプリケーション更新が一部のデータをレプリケートしたあとで失敗した場合に、そのアクションのレプリケーション更新を送信しようとする発生します。ターゲットアプライアンスでは、明示的な管理操作で指示しないかぎりデータは破棄されないため、部分的に受信されたデータは上書きされません。管理者は既存のアクションとパッケージを削除し、ソース上で新しいアクションを作成してレプリケーションを再度開始するようにしてください。
無効	ターゲット上でレプリケーションが無効になっているため、レプリケーションが失敗しました。ターゲット上でレプリケーションサービスが無効になっているか、レプリケートされている特定のパッケージに対してレプリケーションが無効になっています。
ターゲットビジー	ターゲットシステムが同時レプリケーション更新の最大数に到達したため、レプリケーションが失敗しました。システムでは、リソース不足を防ぐために、進行中のレプリケーション処理の最大数が制限されます。この制限に到達した場合、それ以降は、更新の受信の試行はこのエラーで失敗しますが、更



失敗	詳細
	<p>新の送信の試行はリソースが使用可能になるまでキューに入れられます。</p>
容量不足	<p>ソースシステムに新しいスナップショットを作成するための領域が不足しているため、レプリケーションが失敗しました。ストレージプールに使用可能な物理的領域がないか、スナップショットを含まない予約のためプロジェクトまたはそのシェアの1つが割り当て制限を超えていることが、この原因になっている場合があります。</p>
鍵が使用不可	<p>シェアによって使用される暗号化鍵がソースシステムまたはターゲットシステムのいずれかで使用できないため、レプリケーションが失敗しました。ソースシステムとターゲットシステムの両方でアラートを調べて、鍵が両方のシステムで使用可能であることを確認してください。暗号化シェアとプロジェクトのレプリケーションの詳細は、<a href="#">592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」</a>を参照してください。</p>
互換性のないターゲット	<p>ターゲットシステムがソースシステムのデータストリーム形式を受信できないため、レプリケーションが失敗しました。ソースシステムにはアップグレードと遅延更新の適用を行なったが、ターゲットにはアップグレードおよび同じ更新の適用を行っていない場合に、これが発生する可能性があります。ソースシステムのソフトウェアバージョンのリリースノートで遅延更新のリストを調べ、リモートレプリケーションに関連するものがないか確認してください。</p>
iSCSI イニシエータ/ターゲットがありません	<p>レプリケーションパッケージに含まれる LUN にイニシエータグループまたはターゲットグループ LUN が存在しないため、レプリケーションのクローニング、切断、逆転が失敗しました。イニシエータまたはターゲットグループ名がターゲットアプライアンスで削除または名前変更されました。</p>
その他	<p>レプリケーションが失敗しましたが、ソースには使用可能な追加情報はありません。ターゲットシステムのアラートログを確認し、必要に応じてサポートに問い合わせてください。現在、このカテゴリに入る障害モードとしては、ターゲットに更新を受信するためのディスク容量が不足している、クローンの元のスナップショットがターゲットシステムに存在しない状態でクローンをレプリケートしようとした、などがあります。</p>

レプリケーション更新の一部が失敗した場合、その更新は失敗になります。現在の実装では、プロジェクト内のシェアが順次にレプリケートされ、失敗した更新から変更がロールバックされることはありません。そのため、更新が失敗した場合、ターゲット上の一部のシェアは最新の状態で、ほかのシェアは最新の状態でない可能性があります。詳細は、[548 ページの「レプリケーションスナップショットとデータ整合性」](#)を参照してください。

失敗した更新で一部のデータは正常にレプリケートされている可能性があります。現在の実装では、前回の (失敗した) 更新で送信されたすべてのデータが再度送信されます。つまり、失敗した更新は、中止したところから再開するのではなく、失敗した更新が開始したところから開始します。

定期レプリケーションまたは連続レプリケーションが失敗した場合、システムは数分待機してから再試行します。失敗した定期レプリケーションまたは連続レプリケーションの再試行は無限に繰り返されます。再試行手順の間のどの時点であっても、手動更新を開始すると、すぐに再試行が始まり、連続する再試行間の通常の遅延は回避されます。手動更新が正常に完了した場合は、再試行シーケンスが終了し、レプリケーションアクションは通常の定期更新または連続更新に戻ります。事前の定期レプリケーションアクションのない失敗した手動レプリケーションは再試行されません。

レプリケーション更新の進行中に別の更新がスケジュールされている場合、定期レプリケーションは前の更新が完了するまで延期され、アラートが通知されます。

### 関連トピック

- [My Oracle Support \(http://support.oracle.com/\)](http://support.oracle.com/) のレプリケーションの問題をトラブルシューティングする方法 (ドキュメント ID 1397959.1)

## レプリケーションアクションのプロパティ

レプリケーションアクションには次のプロパティがあります。

次の表で説明するように、BUI と CLI のレプリケーションアクションプロパティは若干異なります。

表 122 レプリケーションアクションの CLI プロパティ (BUI および CLI)

BUI のプロパティ	CLI のプロパティ	説明
ターゲット	target	レプリケーションのターゲットシステムを表す一意の識別子。このプロパティは、アクションを最初に構成するときに指定し、編集はできません。
プール	pool	このプロジェクトのレプリケーション先となるターゲット上のストレージプール。このプロパティは、アクションを最初に構成するときに指定し、そのあとは表示されません。
エクスポートデータパス	export_path	このアクションの NFS シェアへのパスを <code>NFS://server/path</code> のように入力します。これは、レプリケーションストリームを NFS サーバー上のファイルにエクスポートします。このファイルはリモートターゲットサイトに物理的に移動し、初期レプリカをターゲットアプライアンスにインポートできます。手順については、 <a href="#">490 ページの「オフラインレプリケーションの作成 (BUI)」</a> を参照してください。
帯域幅の制限	max_bandwidth	このレプリケーション更新の最大速度を指定します (ネットワーク上で 1 秒あたりに転送されるデータ量で表す)。レプリケーション

BUIのプロパティ	CLIのプロパティ	説明
		更新中にこのプロパティに行なった変更は、次回更新時まで反映されません。
SSL 暗号化の有効化	use_ssl	SSL を使用してワイヤ上でデータを暗号化するかどうか。この機能を使用すると、アクション単位のレプリケーションのパフォーマンスに影響することがあります。
圧縮の無効化	compression	レプリケーションストリームは、デフォルトで圧縮されます。圧縮が別の方法 (WAN アクセラレータなど) で提供される場合は無効にします。詳細は、 <a href="#">556 ページの「圧縮レプリケーション」</a> を参照してください。
スナップショットを含める	include_snaps	レプリケーション更新に非レプリケーションスナップショットを含めるかどうかを決定します。詳細については、 <a href="#">549 ページの「レプリケーションスナップショットの管理」</a> を参照してください。
ターゲットでユーザーのスナップショットを保持する	retain_user_snaps_on_target	スナップショットがソースアプライアンスで破棄されたあとも、関連するアクションのレプリケーションターゲットアプライアンスにユーザー生成のスナップショットを保持します。ターゲットに保持されたスナップショットは、ディスク間やデータのバックアップソリューションの一部として利用できます。詳細については、 <a href="#">ディスク間バックアップでのリモートレプリケーションの使用</a> を参照してください。
クローン元をデータとして含める	include_clone_origin_as_data	ターゲットのレプリケーションパッケージの外部にあるシェアからクローンが作成された各シェアのレプリケーションを制御します。クローンの元のスナップショットのデータの完全なコピーをクローンのレプリカに挿入するには、このオプションを選択します。このオプションを選択解除すると、外部の元のスナップショットから作成されるクローンは、レプリケーションターゲットのプールにあるクローンの元のスナップショットのレプリカとストレージを共有します。ストレージを共有すると領域が節約されますが、レプリケーションターゲットに外部のクローンの元のスナップショットが含まれていない場合、クローンのレプリケーションに失敗します。詳細については、 <a href="#">558 ページの「レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング」</a> を参照してください。
更新頻度	continuous	「スケジュール済み」または「連続」を選択します。詳細については、 <a href="#">535 ページの「レプリケーションアクションおよびパッケージ」</a> を参照してください。
スケジュール	schedule frequency	30 分、1 時間、1 日、1 週、1 月ごとの頻度および詳細を選択します。

次の表では、CLI で読み取り専用のレプリケーションアクションのプロパティについて説明します。

表 123 レプリケーションアクションのプロパティ (CLI 読み取り専用)

CLI のプロパティ	説明
送信バイト数	ターゲットに送信されたバイト数を示す読み取り専用プロパティ。
推定サイズ	レプリケートされるデータの推定サイズを示す読み取り専用プロパティ。
推定残り時間	完了までの推定残り時間を示す読み取り専用プロパティ。

CLIのプロパティ	説明
平均スループット	レプリケーションの平均スループットを示す読み取り専用プロパティ。
状態	アクションが現在アイドル状態か、更新を送信中か、更新を取り消し中かを示す読み取り専用プロパティ。
最終同期	更新が最後に正常に送信された時点を示す読み取り専用プロパティ。ブート以降に更新が正常に送信されていない場合、この値は不明になることがあります。
最後の試行	更新が最後に試行された時点を示す読み取り専用プロパティ。ブート以降に更新の送信が試行されていない場合、この値は不明になることがあります。
次の更新	次の試行がいつ行われるかを示す読み取り専用プロパティ。この値は、日付(定期更新の場合)、「手動」、または「連続」になります。


## 関連トピック

- [484 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(BUI\)」](#)
- [486 ページの「レプリケーションアクションの作成 \(CLI\)」](#)




## 圧縮レプリケーション

圧縮レプリケーション機能は、帯域幅に制限のあるソースとターゲットのサイト間で圧縮可能なデータをレプリケートするときのパフォーマンスを向上します。レプリケーションストリームは、ターゲットに送信される前に、現在の CPU 使用率およびネットワーク I/O スループットに基づく率で自動的に圧縮されます。その後、レプリケーションストリームは、ターゲットアプライアンスで受信されるときに圧縮解除されます。データに圧縮可能ではない部分がある場合、その部分は圧縮が無効であるときと同様に送信されます。

明示的に圧縮を無効化しないかぎり、すべてのレプリケーションストリームが圧縮されます。たとえば WAN アクセラレータを介するなど、WAN 装置で圧縮を提供する場合、「レプリケーション圧縮の無効化 [BUI](#)、[CLI](#)」の手順に従って圧縮機能を無効にします。

レプリケーションの圧縮をサポートするには、ソースおよびターゲットアプライアンスにソフトウェアバージョン 2013.1.4.0 (またはそれ以降) が必要です。ターゲットのバージョンがそれ以前である場合は、ターゲットの名前の横に警告アイコン  が表示されます。ターゲットアプライアンスを最小バージョンに更新する必要があります。

ソースアプライアンスでは、レプリケーションの進行状況バーの下で、レプリケーションのパフォーマンス統計を表示できます。

TARGET ▲	UPDATES	STATUS
 hog-10g Manual	Never Synced Never Attempted	  43% of 10.0G @548MB/s (-00:00:11)

## レプリケーションパッケージ

パッケージは、レプリケートされたプロジェクトとシェアのコンテナです。ソースアプライアンス上の各レプリケーションアクションは、ターゲットアプライアンス上の1つのパッケージに対応します。

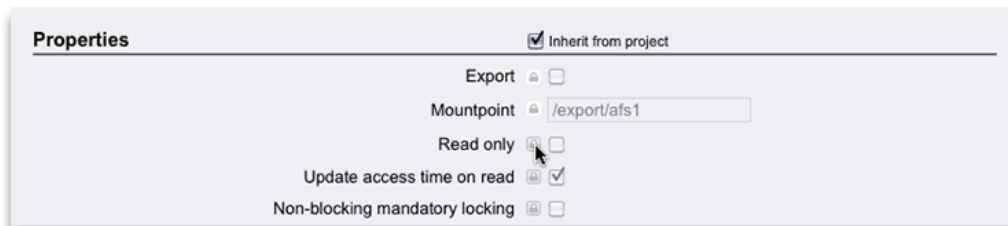
BUI または CLI を使用すると、レプリケートされたプロジェクト、シェア、スナップショット、およびプロパティをローカルプロジェクトやシェアと同様に参照できます。ただし、レプリケートされたシェアは、ソースアプライアンスで対応するものと正確に一致する必要があるため、レプリケーションパッケージ内で多くの管理操作が許可されません。

レプリケートされたプロジェクトとシェアのプロパティのうち、次のものを変更できます。

- **reservation、compression、copies、deduplication、および caching** - これらのプロパティをレプリケーションターゲット上で変更することで、コスト、柔軟性、パフォーマンス、信頼性などに関してソースアプライアンスとは異なるポリシーをターゲットアプライアンスに適用できます。
- **マウントポイントとシェアのプロパティ** (sharenfs、SMB リソース名など) - これらのプロパティは、シェアを NAS クライアントにエクスポートする方法を制御します。これらを変更することで、セキュリティや保護に関してソースアプライアンスとは異なるポリシーをターゲットアプライアンスに適用できます。
- **自動スナップショットのポリシー** - 自動スナップショットのポリシーはターゲットアプライアンス上で変更できますが、パッケージが切断されるまで変更は有効になりません。レプリケートされたプロジェクトおよびシェアでは自動スナップショットの作成や破棄は行われません。

そのようなプロパティの変更は、レプリケーション更新後も保持されます。

図 34 レプリケーションパッケージのプロパティの管理



### 関連トピック

- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)
- [561 ページの「レプリケーションの切断」](#)

## レプリケーションパッケージまたはシェアのクローニング

レプリケートされたパッケージのクローンは、システム上のほかのプロジェクトと同様に管理できる、可変のローカルプロジェクトです。クローンプロジェクトが作成されるとき、レプリケートされたシェアのもっとも新しく受信されたスナップショットが、クローンプロジェクト内のシェアを作成するために使用されます。これらのクローンは、シェアのスナップショットのクローンが行うのと同じ方法で、ストレージを元のスナップショットとシェアします (スナップショットのクローニング [BUI](#)、[CLI](#)を参照)。このメカニズムは、レプリケーションソースに壊滅的な問題が発生した場合のフェイルオーバーや、単にローカルで変更可能なデータを作成するために使用できます。

クローンが存在している間は、元のスナップショットを破棄することができません。(スナップショットが属しているシェア、プロジェクト、またはレプリケーションパッケージの破棄などの結果として) スナップショットが破棄される場合、その操作によって破棄される従属クローンがあれば、管理者に警告されます。ソース上のスナップショットがいつでも破棄される可能性もあり、そのようなスナップショットは、それ以降のレプリケーション更新の一環としてターゲット上で破棄されます。そのようなスナップショットのクローンが存在する場合、最後のクローンが破棄されるまでそのスナップショットは破棄されません。

### クローンのレプリケーション

クローンをレプリケートする際、クローンのレプリカと元のスナップショットの間の関係を理解することが重要です。デフォルトでは、クローンのレプリカはその元のスナップショットとの関係を維持し、元のスナップショットのレプリカもターゲット上に存在するよう指示します。クローンの元のスナップショットのレプリカは、クローンと同じプール内に存在する必要がありますが、同じプロジェクト内に存在する必要はありません。

レプリケートされたクローンとその元のスナップショットとの関係を維持するために、元のスナップショットは次のいずれかのようにする必要があります。

- クローンの初期レプリケーションの前にターゲットにレプリケートされる
- 同じ更新の一環としてレプリケートされる。

この制限がアプライアンス管理ソフトウェアによって強制されることはありませんが、レプリケーション更新を成功させるためには従う必要があります。

クローンがその元のスナップショットとの関係を維持するようにクローンを正しくレプリケーションするには、いくつかの方法があります。

- クローンの元のスナップショットが同じプロジェクト内にある場合は、プロジェクトレベルのレプリケーションを使用します。
- クローンの元のスナップショットを含むシェアが同じプロジェクト内にない場合や、クローンまたはその元のシェアがプロジェクトレベルのレプリケーションから省略されている場合、元のシェアをまずレプリケートし、次にプロジェクトレベルまたはシェアレベルのレプリケーションを使用してクローンをレプリケートします。
- ターゲットシステムでは、クローン自体も破棄する場合を除き、クローン元を破棄しないでください。

元のスナップショットがターゲットに送信されるようにするために、元のレプリケーションアクションの「スナップショットを含める」プロパティを常に設定してください。

クローンとその元のスナップショットがソースアプライアンス上の領域を節約するのと同様に、レプリケートされるクローンとそのレプリケートされた元のスナップショットはターゲットアプライアンス上の領域を節約します。レプリケーションターゲットでの領域の節約があまり重要でない場合、管理者は「クローン元をデータとして含める」プロパティを設定する場合があります。このプロパティが設定され、クローンの元のスナップショットがクローンと同じ更新でレプリケートされない場合、ソースアプライアンスはクローンの元のデータ内容のコピーをレプリカのクローンに挿入します。したがって、クローンの元のシェアを最初にレプリケートする必要はありませんが、クローンの元のデータのコピーによってターゲット上のストレージ領域がさらに消費されます。

「スナップショットを含める」および「クローン元をデータとして含める」の両方が設定されると、レプリカのクローンにはソース上のクローンに存在するスナップショットの

みが含まれます。ソースアプライアンスは、クローンの元のスナップショットではなく、クローンの元のデータ内容をレプリカのクローンに挿入します。これにより、レプリカのクローンに存在するスナップショットが、ソース上のクローンに存在するスナップショットと確実に一致します。

クローンとその元のスナップショットが同じ更新でレプリケートされる場合、「クローン元をデータとして含める」プロパティはこれらのレプリケーションに影響を及ぼしません。同じレプリケーションアクションによって同時にレプリケートされる場合、クローンとその元のスナップショットの間の関係は維持され、領域の共有による利点がターゲット上で保持されます。

### 関連トピック

- [538 ページの「プロジェクトとシェアのレプリケーション」](#)
- [レプリケーションパッケージのクローニング BUI、CLI](#)
- [364 ページの「プロジェクトとシェアのプロパティ」](#)

## レプリケートされたファイルシステムのエクスポート

レプリケートされたファイルシステムを読み取り専用として NAS クライアントにエクスポートできます。この機能は、レプリケートされたデータを確認する場合や、バックアップなどの負荷がかかる操作を (ソースアプライアンスにそのような負荷をかけるために) レプリケートされたデータに対して実行する場合に使用できます。

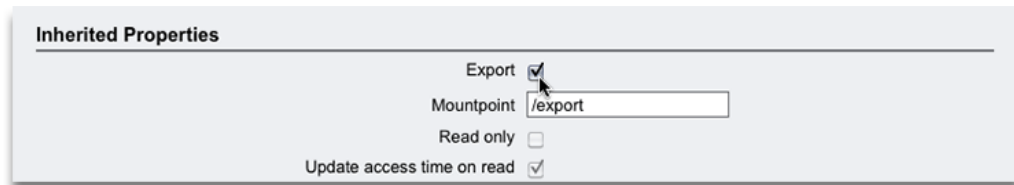
ファイルシステムの内容は、そのファイルシステムのもっとも新しく受信されたレプリケーションスナップショットと常に一致します。これはパッケージ全体のもっとも新しく受信されたスナップショットよりも新しい場合があり、同じパッケージに含まれているほかのシェアの最新スナップショットと一致しない場合があります。詳細は、[548 ページの「レプリケーションスナップショットとデータ整合性」](#)を参照してください。

レプリケーション更新はファイルシステムレベルで原子的に適用されます。レプリケートされたファイルを見ているクライアントには、レプリケーション更新は配下のファイルシステムの瞬時変化に見えます。最新の更新で削除されたファイルを操作しているクライアントには、エラーが表示されます。最新の更新で変更されたファイルを操作しているクライアントには、更新後の内容がただちに表示されます。

レプリケートされたファイルシステムは、デフォルトではエクスポートされません。エクスポートするには、BUI または CLI を使用してプロジェクトまたはシェアの `exported` プロパティを変更します。



図 35 継承されるプロパティ



このプロパティは、ほかのシェアプロパティと同様に継承されます。ローカルのプロジェクトとシェアは常にエクスポートされるため、このプロパティは表示されません。また、レプリケーションを切断すると(パッケージがローカルプロジェクトに変換され)、パッケージのシェアがエクスポートされます。

現在、レプリケートされた LUN をエクスポートすることはできません。それらの内容をエクスポートするには、まずクローンを作成するか、レプリケーションパッケージを切断する必要があります。

#### 関連トピック

- [478 ページの「リモートレプリケーションのワークフロー」](#)
- [365 ページの「継承されるプロパティ」](#)

## レプリケーションの切断

レプリケーション接続を切断することによって、レプリケーションパッケージを、ほかのローカルプロジェクトと同様に動作する(つまり、レプリケーションパッケージに適用される管理上の制限がない)書き込み可能なローカルプロジェクトに変換できます。この操作のあとは、このパッケージにレプリケーション更新を受信することはできなくなります。そのため、これ以降にソースから同じプロジェクトのレプリケーション更新を行うには、新しいアクションで完全更新を(新しいパッケージに)送信する必要があります。これ以降に同じアクションを使用してレプリケーション更新を行うと、対応するパッケージがターゲットに存在しないため失敗します。

このオプションが主に役立つのは、レプリケーションを使用してアプライアンス間でデータを移行する場合など、受信したデータをレプリケートしてソースに戻す処理を伴わないシナリオです。2 システムによる障害回復計画にはこのような処理が含まれます。

レプリケーション切断操作によって、レプリケーションパッケージは通常のローカルプロジェクトに変換されます。すべてのローカルシェアは常にエクスポートされ、

SMB を経由して共有されるため、レプリケートされたファイルシステムとシステム上のほかのファイルシステムの間でいずれかのマウントポイントまたは SMB リソース名が競合している場合、切断操作は失敗します。レプリケーションパッケージを切断する前に、プロジェクト、シェアのマウントポイント、または SMB リソース名を再構成して、これらの競合を解決する必要があります。

### 関連トピック

- レプリケーションパッケージの切断 ([BUI](#)、[CLI](#))
- 障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 ([BUI](#)、[CLI](#))
- [ディスク間バックアップでのレプリケーションの使用](#)

## 逆向きレプリケーションの動作方法

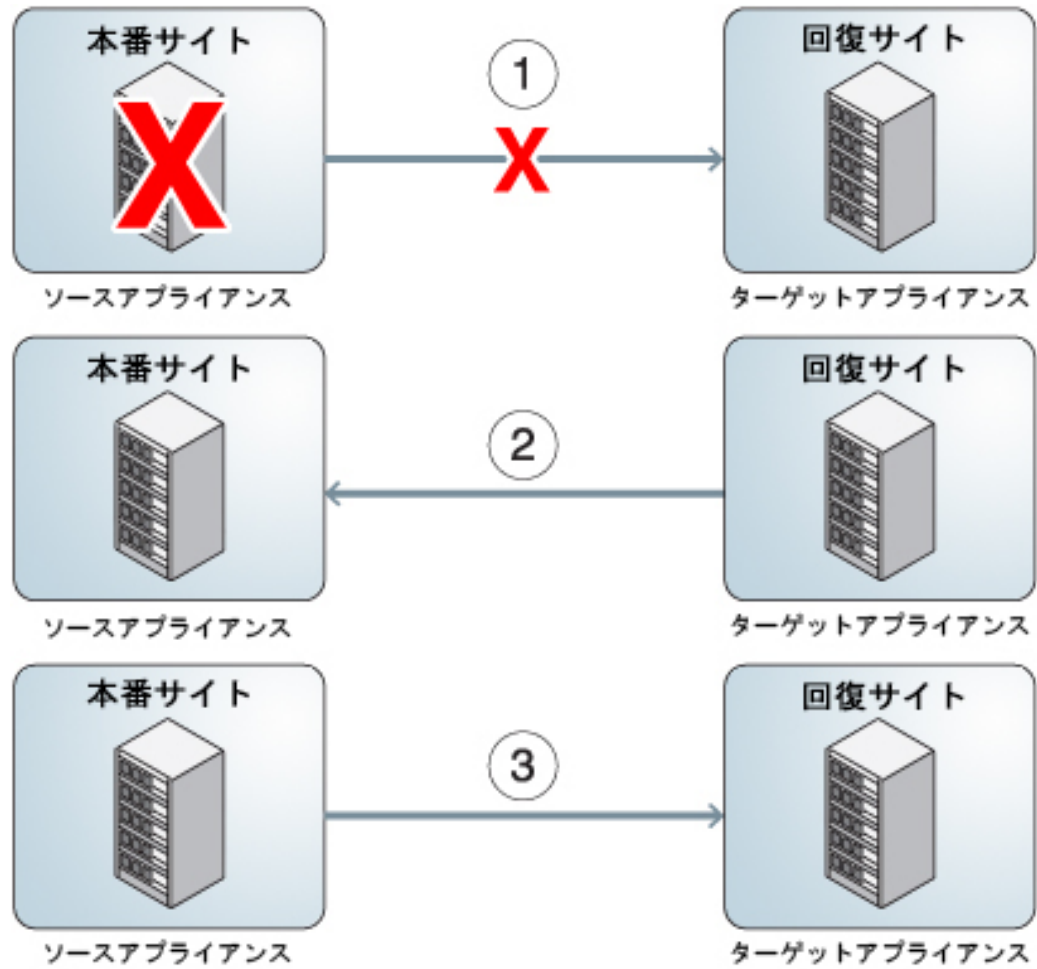
レプリケーションの方向を逆にして、2 システムによる障害回復計画およびディスク間バックアップをサポートできます。

### 障害回復のためのレプリケーションの逆向き処理

レプリケーションを逆向きにする操作によって、レプリケーションパッケージはローカルプロジェクトに変換されます。この操作は新しいローカルプロジェクト上で、増分レプリケートしてソースアプライアンスに戻すレプリケーションアクションも構成します。最初の更新が試行されると、ソースシステム上の元のプロジェクトがレプリケーションパッケージに変換され、そのシステムからのレプリケーション更新が最後に正常に実行された時点以降の変更がすべてロールバックされます。

次の図で、逆向きレプリケーションの一連のイベントについて説明します。

図 36 障害回復のためのリモートレプリケーションの使用



凡例	説明
1	<p>本番システムは、クライアントワークロードを処理し、回復サイトに配置されているターゲットアプライアンスにレプリケートするソースアプライアンスです。</p> <p>ソースアプライアンスの完全な障害が本番サイトで発生しました。</p> <p>管理者は回復サイトからレプリケーションの方向を逆向きにします。この操作によって、レプリケーションパッケージは書き込み可能なローカルプロジェクトに変換されます。</p>

凡例	説明
	管理者はクライアントワークロードとフェイルオーバー IP アドレスを回復サイトにリダイレクトします。
2	本番サイトが復元されて通常の動作に戻ったら、管理者は回復サイトから本番サイトへのレプリケーション更新を開始します。この操作は本番用コピーをレプリケーションパッケージに変換し、本番サイトが停止している間に回復サイトに書き込まれたすべての変更をロールバックします。
3	本番サイトが更新されたら、管理者はレプリケーションの方向を再度逆にし、これによって本番サイトのコピーが書き込み可能になります。  次に、管理者はクライアントワークロードとフェイルオーバー IP アドレスを元の本番サイトにリダイレクトします。  本番サイトのソースアプライアンスと回復サイトのターゲットアプライアンスとの元の関係が復元されます。

(現在はターゲットとして動作している) 元のソースシステムで元のソースプロジェクトをレプリケーションパッケージに変換する一環として、現在逆向きになっているアクション/パッケージの一部としてレプリケートされたシェアが、新しいレプリケーションパッケージに移動され、アンエクスポートされます。元のプロジェクトはローカルコレクションに残りますが、アクション/パッケージがそのすべてのシェアを含んでいた場合には、空になることがあります。シェアレベルのレプリケーションを逆向きにした場合、元のプロジェクト内のほかのシェアはどれも変更されません。

あるアプライアンスから別のアプライアンスへのシェアレベルのレプリケーションを確立したあとで、ターゲット上でそのレプリケーションを逆向きにすると、レプリケーションスケジュールが破棄されます。その後、プロジェクトレベルでレプリケーションアクションが作成されます。これには、正しいターゲットアプライアンスが設定され、スケジュールは含まれていません。

パッケージのレプリケーションの方向を逆にするときは、その前にソースからそのプロジェクトのレプリケーションを停止することを管理者に強くお勧めします。レプリケーション更新の進行中に管理者がプロジェクトのレプリケーションの方向を逆にした場合、管理者は、以前のターゲットアプライアンス (現在のソースアプライアンス) に作成されたプロジェクトに、どの整合性のあるレプリケーションスナップショットが使用されたのかわからなくなります。

ローカルのシェアはすべてエクスポートされるため、パッケージを逆向きにする、それまでにエクスポートされたかどうかにかかわらずパッケージ内のすべてのシェアがエクスポートされます。レプリケートされたファイルシステムとシステム上のほかのファイルシステムの間でマウントポイントが競合している場合、逆向きにする操作は失敗します。切断する前に、関連するシェアのマウントポイントを再構成して、これらの競合を解決する必要があります。通常、この操作は本番用のサービスの復元におけるクリティカルパスの一部なため、このようなマウントポイントの競合は、障害回復フェイルオーバーの時点ではなく、システムを最初に設定するときに解決することを強くお勧めします。

## 関連トピック

- [522 ページの「障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 \(BUI\)」](#)
- [525 ページの「障害回復のためのリモートレプリケーションの設定 \(CLI\)」](#)
- [ディスク間バックアップでのリモートレプリケーションの使用](#)

## レプリケーションパッケージの破棄

パッケージ内のプロジェクトとシェアを破棄するには、パッケージ全体を破棄する必要があります。BUI からパッケージ全体を破棄するには、対応するプロジェクトを破棄します。CLI からパッケージを破棄するには、`shares replication sources` ノードで `destroy` コマンドを使用します。

パッケージが破棄されると、対応するアクションからの以降のレプリケーション更新は失敗します。レプリケーションを再開するには、ソース上でアクションを作成し直して、データの新しいコピーを受信するための新しいパッケージをターゲット上に作成します。

## ターゲットレプリカのバックアップ

NDMP `zfs` バックアップタイプを使用すると、ターゲットレプリカデータセット (プロジェクトまたはシェア) をバックアップできます。NDMP `zfs` タイプのレプリカバックアップの遅延更新サポートを適用することで、アプライアンスでレプリカバックアップが有効になります。レプリカバックアップ機能では、ユーザー生成の (拡張子が `.ir` でない) スナップショットを指定しないかぎり、最新のシステム生成のスナップショットがバックアップ対象として選択されます。詳細は、[274 ページの「レプリカのバックアップ」](#)を参照してください。

将来の増分バックアップ用にもともと保持されている古いレプリケーションスナップショットの一部には、必要のないものもあるため削除できます。スナップショットが NDMP によって保持される場合、進行中または将来の NDMP バックアップに与える潜在的な影響を警告する確認が表示されます。

次の順序でイベントが発生するためレプリケーションが失敗し、アラートが生成されます。このエラーからの回復については、[551 ページの「レプリケーションの失敗」](#)の「名前の競合」を参照してください。

1. レプリカスナップショットがターゲットアプライアンス上の NDMP によって保持されます (進行中のバックアップまたは将来の増分バックアップのため)。
2. ソースアプライアンス上の対応するスナップショットが削除または名前変更されます。
3. ターゲットアプライアンス上に保持されているレプリカスナップショットと同じ名前の新しいスナップショットがソースアプライアンス上で作成されます。
4. レプリケーション更新が試行されます。



# データ暗号化

---

**ライセンスについて:** 暗号化は無償で評価することが許可されていますが、本稼働環境で使用するには、機能のライセンスを個別に購入する必要があります。暗号化は、*Oracle ZFS Storage ZS5-4*、*Oracle ZFS Storage ZS5-2*、*Oracle ZFS Storage ZS4-4*、および *Oracle ZFS Storage ZS3-4* のライセンスのみで利用できます。評価期間を過ぎたら、この機能のライセンスを購入するか、機能を非アクティブ化する必要があります。オラクル社は、ライセンスが遵守されているかどうかをいつでも監査する権利を保持しています。詳細は、「オラクル社のソフトウェアライセンス契約書 (「SLA」) およびハードウェアシステムと組み込みのソフトウェアオプションの権利書」を参照してください。

Oracle ZFS Storage Appliance では、個々のシェア (ファイルシステムおよび LUN) およびプロジェクト内に作成されたシェアに対して透過的なデータ暗号化が提供されます。

暗号化を構成および管理するには、次のタスクを実行します。

- [568 ページの「データ暗号化ワークフロー」](#)
- ローカルキーストア暗号化の構成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- OKM キーストア暗号化の構成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- 暗号化プロジェクトの作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- プロジェクトの暗号化鍵の変更 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ファイルシステムまたは LUN の作成 - [BUI](#)、[CLI](#)
- シェアの暗号化鍵の変更 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ローカル鍵のバックアップ - [BUI](#)、[CLI](#)
- 暗号化鍵の削除 - [BUI](#)、[CLI](#)
- ローカル鍵の復元 - [BUI](#)、[CLI](#)
- スナップショットのクローニング - [BUI](#)、[CLI](#)

データ暗号化を理解するには、次のトピックを参照してください。

- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化のパフォーマンスへの影響」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)
- [592 ページの「暗号化データのバックアップと復元」](#)

- [592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」](#)

## ▼ データ暗号化ワークフロー

次の手順では、データ暗号化を構成および使用するための一般的な方法を示します。暗号化プロパティの詳細は、[588 ページの「暗号化プロパティ」](#)を参照してください。

1. **ローカルキーストアまたは Oracle Key Manager (OKM) キーストアの暗号化を構成します。**

ローカルキーストアまたは OKM キーストアの作成の詳細は、次のトピックを参照してください。

  - [569 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#) または [571 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
  - [572 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#) または [573 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
2. **ローカル暗号化鍵または OKM 暗号化鍵を作成します。**

ローカル鍵または OKM 鍵の作成の詳細は、次のトピックを参照してください。

  - [569 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#) または [571 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
  - [572 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#) または [573 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
3. **(オプション) ローカル暗号鍵または OKM 暗号化鍵のいずれかを使用してプロジェクトを作成します。**

プロジェクト作成の詳細は、[346 ページの「プロジェクトの作成 \(BUI\)」](#)を参照してください。
4. **暗号化鍵を使用するプロジェクトにシェアを作成するか、ローカル暗号化鍵または OKM 暗号化鍵のいずれかを使用してシェアを作成します。**

シェア作成の詳細は、[345 ページの「シェアとプロジェクト」](#) または [575 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(CLI\)」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化のパフォーマンスへの影響」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)
- [592 ページの「暗号化データのバックアップと復元」](#)

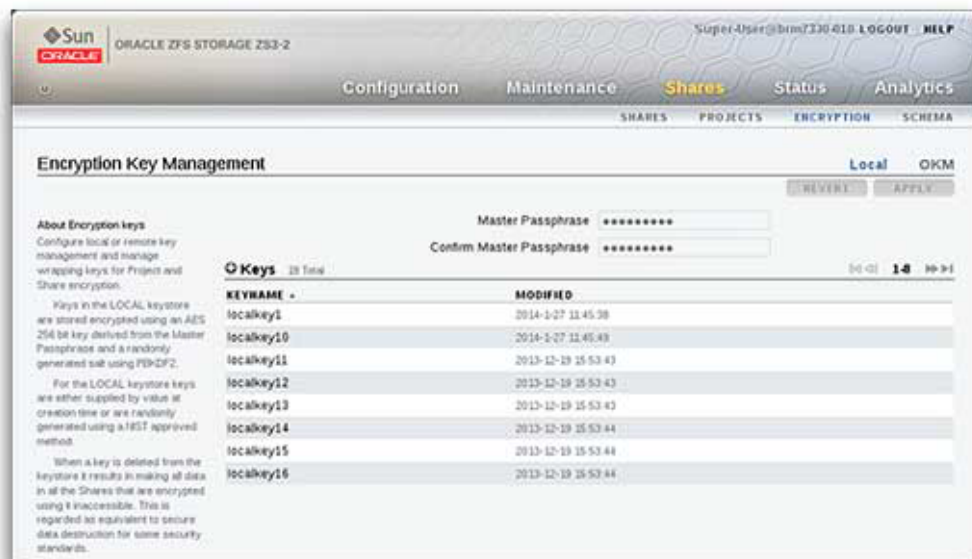


## ▼ ローカルキーストア暗号化の構成 (BUI)


ローカルキーストアを使用して暗号化を構成するには、最初にマスターパスフレーズを設定してから、暗号化されるシェアに割り当てる鍵を作成します。暗号化プロパティの詳細は、588 ページの「暗号化プロパティ」を参照してください。

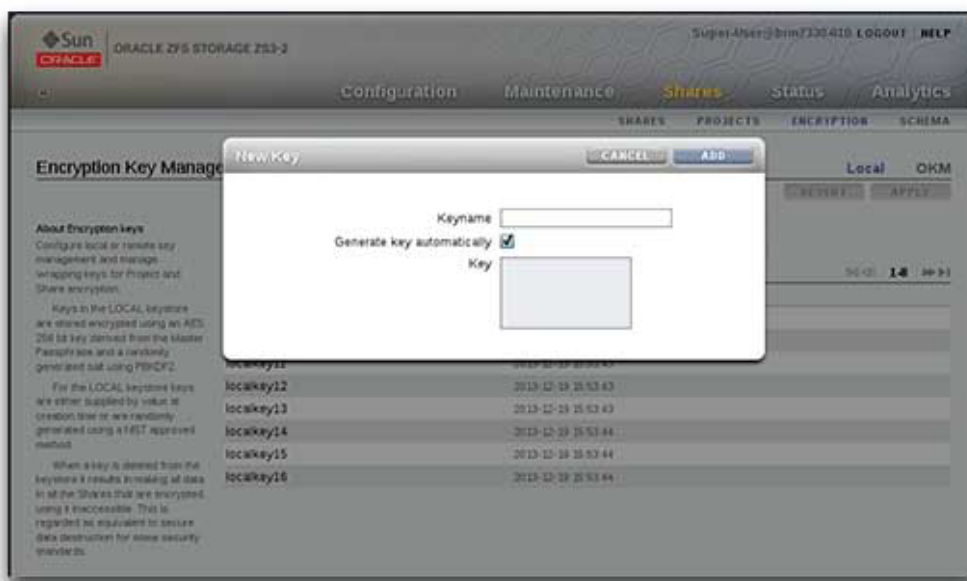
鍵を作成するには、プロジェクトまたはシェアへの鍵の割り当てに使用する名前を指定します。システムに鍵の値を生成させるよう選択することも、16 進エンコード raw 256 ビット鍵を指定することもできます。鍵は暗号化された形式で格納されます。

1. ローカルキーストアを構成するには、「シェア」 > 「暗号化 BUI」 ページに移動します。
2. 「ローカル」をクリックします。  
ローカルキーストアの情報が表示されます。



3. マスターパスフレーズを構成するには、管理者によって提供されたパスフレーズを入力したあと、そのパスフレーズを隣のボックスにも再入力します。
4. マスターパスフレーズを保存するには「適用」をクリックし、変更を破棄するには「戻す」をクリックします。

5. 鍵を作成するには、項目を追加アイコン  をクリックします。  
「新しい鍵」ダイアログボックスが表示されます。



6. 鍵の名前を入力します。
7. 16 進エンコード raw 256 ビット鍵を使用する場合は、「鍵の自動生成」のチェックマークを外し、鍵を入力します。
8. 鍵を保存するには、「追加」をクリックするか、「取り消し」をクリックして変更を破棄します。  
「追加」をクリックすると、作成日とともに新しい鍵が鍵のリストに表示されます。

### 関連トピック

- [571 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
- [572 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#)
- [351 ページの「プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 \(BUI\)」](#)

## ▼ ローカルキーストア暗号化の構成 (CLI)

この手順は、これまで暗号化を設定したことのないアプライアンスを想定していません。暗号化プロパティの詳細は、[588 ページの「暗号化プロパティ」](#)を参照してください。

1. マスターパスフレーズを設定するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:> shares encryption
hostname:shares encryption> show
Children:
 okm => Manage encryption keys
 local => Manage encryption keys

hostname:shares encryption> local
hostname:shares encryption local> show
Properties:
 master_passphrase =

Children:
 keys => Manage this Keystore's Keys

hostname:shares encryption local> set master_passphrase
Enter new master_passphrase:
Re-enter new master_passphrase:
 master_passphrase = *****
```

2. 最初の鍵を作成するには、次の CLI コマンドを使用し、鍵名を入力します。

これは、プロジェクトまたはシェアに鍵を割り当てるときに CLI および BUI で使用される名前です。キープロパティを空白のままとしてシステムでランダム鍵値を生成することも、16 進エンコード raw 256 ビットの鍵値を入力することもできます。

---

注記 - 鍵は、指定されたマスターパスフレーズを使用して暗号化された状態で保存されます。この例では、システムによって鍵の値が生成されます。

---

```
hostname:shares encryption local> keys create
hostname:shares encryption local key (uncommitted)> show
Properties:
 cipher = AES
 key =
 keyname = (unset)
hostname:shares encryption local key (uncommitted)> set keyname=MyFirstKey
 keyname = MyFirstKey (uncommitted)
hostname:shares encryption local key (uncommitted)> commit
```

### 関連トピック

- [569 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#)
- [573 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
- [575 ページの「暗号化プロジェクトの作成 \(CLI\)」](#)

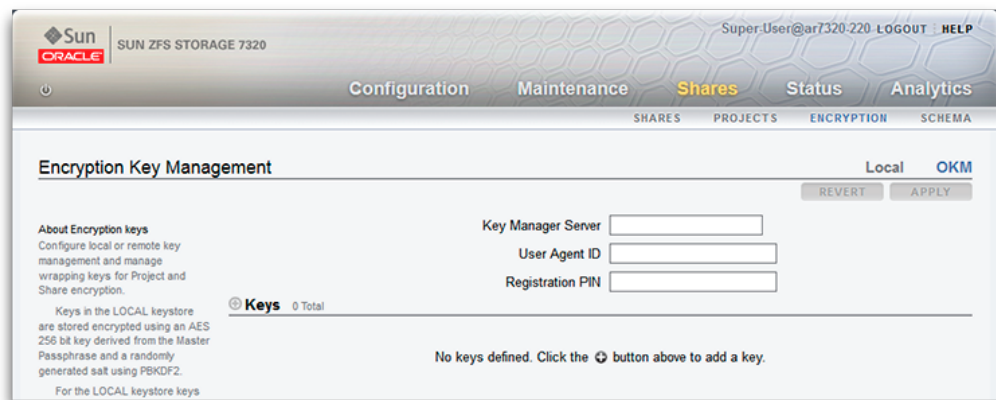
## ▼ OKM キーストア暗号化の構成 (BUI)

Oracle Key Manager (OKM) を使用して暗号化を構成するには、最初に鍵管理サーバー情報を設定してから、暗号化されるシェアに割り当てる鍵を作成します。暗号化プロパティの詳細は、[588 ページの「暗号化プロパティ」](#)を参照してください。


**注記** - アプライアンスがクラスタ化されている場合、OKM サーバーエージェントの作成時に「一回限りのパズフレーズ」設定を使用しないでください。使用すると、ほかのクラスタノードでの登録が失敗し、フェイルオーバー時に鍵を使用できなくなります。

鍵を作成するには、プロジェクトまたはシェアへの鍵の割り当てに使用する名前を指定します。

1. **OKM キーストアを構成するには、「シェア」 > 「暗号化 BUI」 ページに移動します。**
2. **「OKM」をクリックします。**  
OKM キーストアの情報が表示されます。



3. **サーバー情報を構成するには、次の情報を入力します。**
  - 鍵管理サーバー
  - ユーザーエージェント ID
  - 登録 PIN

4. サーバー情報を保存するには「適用」をクリックし、変更を破棄するには「取り消し」をクリックします。
5. 鍵を作成するには、項目を追加アイコン  をクリックします。  
「新しい鍵」ダイアログボックスが表示されます。
6. 鍵の名前を入力します。
7. 鍵を保存するには「追加」をクリックし、変更を破棄するには「取り消し」をクリックします。  
「追加」をクリックすると、作成日とともに新しい鍵が鍵のリストに表示されます。

#### 関連トピック

- [569 ページの「ローカルキーストア暗号化の構成 \(BUI\)」](#)
- [573 ページの「OKM キーストア暗号化の構成 \(CLI\)」](#)
- [351 ページの「プロジェクト内のファイルシステムまたは LUN の作成 \(BUI\)」](#)

## ▼ OKM キーストア暗号化の構成 (CLI)

Oracle Key Manager (OKM) キーストアを使用するには、次のパラメータを構成します。

- agent\_id
- registration\_pin (OKM セキュリティー担当者から支給されます)
- server\_addr

暗号化プロパティの詳細は、[588 ページの「暗号化プロパティ」](#)を参照してください。

---

注記 - アプライアンスがクラスタ化されている場合、OKM サーバーエージェントの作成時に「一回限りのパスフレーズ」設定を使用しないでください。使用すると、ほかのクラスタノードでの登録が失敗し、フェイルオーバー時に鍵を使用できなくなります。

---

1. **OKM キーストア暗号化を構成するには、次の CLI コマンドを使用します。**

```
hostname:> shares encryption
hostname:shares encryption> show
Children:
 okm => Manage encryption keys
 local => Manage encryption keys

hostname:shares encryption> okm
hostname:shares encryption okm> show
```

```

Properties:
 agent_id = ExternalClient041
 registration_pin = *****
 server_addr = 10.80.180.109

Children:
 keys => Manage this Keystore's Keys

```

## 2. OKM 鍵を作成するには、次の CLI コマンドを使用します。

```


hostname:shares (pool-290-A) encryption okm keys>
hostname:shares (pool-290-A) encryption okm keys> create
hostname:shares (pool-290-A) encryption okm key-372 (uncommitted)> ls
Properties:
 cipher = AES
 keyname = (unset)
hostname:shares (pool-290-A) encryption okm key-372 (uncommitted)> set
keyname=anykey
 keyname = anykey (uncommitted)
hostname:shares (pool-290-A) encryption okm key-372 (uncommitted)> commit

```

## ▼ 暗号化プロジェクトの作成 (BUI)

シェア (ファイルシステムおよび LUN) は個別に暗号化するか、プロジェクトレベル (シェアはプロジェクトのプロパティを継承するため) で暗号化できます。次の例では、プロジェクト自体を暗号化することによってプロジェクト内のすべてのシェアを暗号化する方法を示しています。

始める前に 暗号化を使用するには、最初に構成する必要があります。567 ページの「[データ暗号化](#)」を参照してください。

1. 「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. 追加アイコン  をクリックします。
3. プロジェクトに名前を付けます。
4. 暗号化鍵の長さを設定します。
5. キーストアで「ローカル」または「OKM」を選択します。
6. 鍵名を選択します。
7. プロジェクトを保存します。

### 関連トピック

- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [575 ページの「プロジェクトの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)

## ▼ 暗号化プロジェクトの作成 (CLI)

シェア (ファイルシステムおよび LUN) は個別に暗号化するか、プロジェクトレベル (シェアはプロジェクトのプロパティを継承するため) で暗号化できます。次の例では、プロジェクト自体を暗号化することによってプロジェクト内のすべてのシェアを暗号化する方法を示しています。

始める前に 暗号化を使用するには、最初に構成する必要があります。567 ページの「データ暗号化」を参照してください。

1. 暗号化プロジェクトを作成するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:shares> project myproject
hostname:shares myproject (uncommitted)> set encryption=aes-128-ccm
 encryption = aes-128-ccm (uncommitted)
hostname:shares myproject (uncommitted)> set keystore=LOCAL
 keystore = LOCAL (uncommitted)
hostname:shares myproject (uncommitted)> set keyname=MyFirstKey
 keyname = MyFirstKey (uncommitted)
hostname:shares myproject (uncommitted)> commit
hostname:shares>
```

このプロジェクトの下に作成するすべてのシェアは、ローカルキーストアにある「MyFirstKey」という名前の鍵を使用して、AES-128 CCM で自動的に暗号化されます。

2. 新しいプロジェクト内にファイルシステムを作成し、これが暗号化プロパティを継承していることを確認するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:shares> select myproject
hostname:shares myproject> filesystem f1
hostname:shares myproject/f1 (uncommitted)> commit
hostname:shares myproject> select f1
hostname:shares myproject/f1> get encryption keystore keyname keystore
 encryption = aes-128-ccm (inherited)
 keystore = LOCAL (inherited)
 keyname = MyFirstKey (inherited)
 keystorestatus = available
hostname:shares myproject/f1> done
```


### 関連トピック

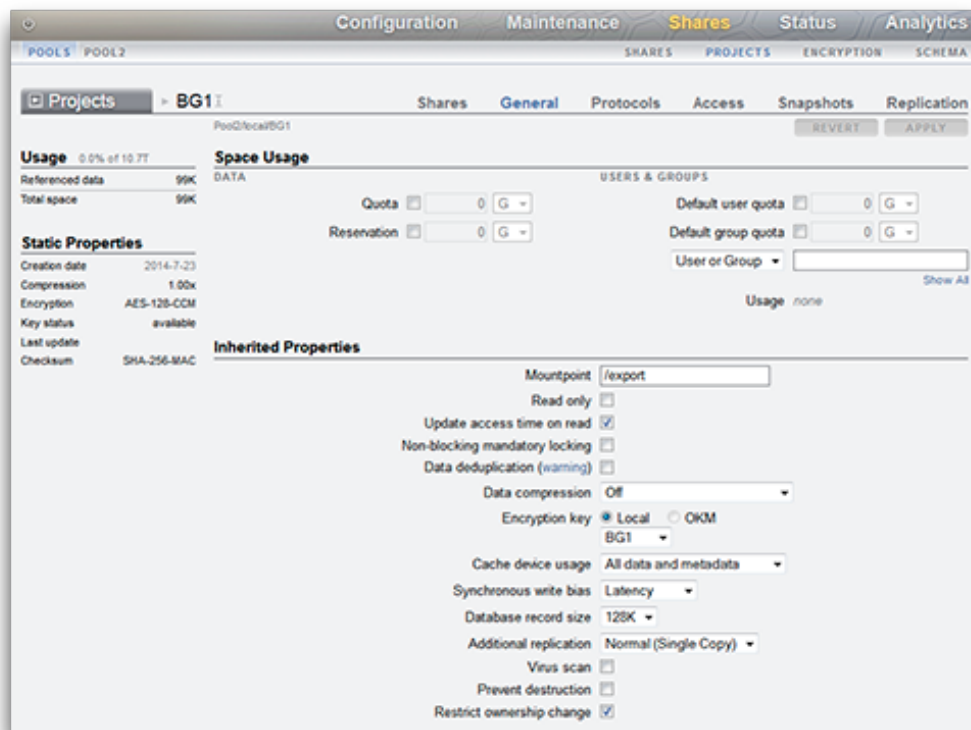
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)

## ▼ プロジェクトの暗号化鍵の変更 (BUI)

プロジェクトの暗号化鍵を変更すると、プロジェクトから鍵を継承するシェアの鍵が変更されます。シェアに関連付けられている暗号化鍵は、その鍵がクライアントシス

テムに使用されている場合であってもいつでも変更できます。プロジェクトの鍵を変更するには、次の手順を使用します。

1. 変更するプロジェクトを表示するには、「シェア」 > 「プロジェクト」に移動します。
2. 目的のシェアを探すには、「すべて表示」、「ローカル」、または「レプリカ」をクリックします。
3. 変更するプロジェクトの上にカーソルを移動し、編集アイコン  をクリックします。
4. 「一般」をクリックします。  
プロジェクトパラメータが表示されます。



5. プロジェクトの暗号化鍵を変更するには、「ローカル」または「OKM」を選択し、使用する鍵を選択します。



- 変更を保存するには、「適用」をクリックするか、「戻す」をクリックして変更を破棄します。「適用」をクリックすると、変更が保存され新しい鍵が暗号化鍵領域に表示されます。

#### 関連トピック

- [577 ページの「プロジェクトの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)
- [583 ページの「暗号化鍵の削除 \(BUI\)」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)

## ▼ プロジェクトの暗号化鍵の変更 (CLI)

プロジェクトの暗号化鍵を変更すると、プロジェクトから鍵を継承するシェアの鍵が変更されます。シェアに関連付けられている暗号化鍵は、その鍵がクライアントシステムで使用されている場合であってもいつでも変更できます。プロジェクトの鍵を変更するには、次の手順を使用します。

- プロジェクトの現在の鍵を表示するには、そのプロジェクトに移動し、`get keyname` と入力します。

```
hostname:shares> select default
hostname:shares default> get keyname
keyname = MyFirstKey
```

- プロジェクトに使用される鍵と関連付けられたすべてのシェアを変更するには、`set keyname=` に続いて新しい鍵名を入力してから、`commit` と入力します。

```
hostname:shares default> set keyname=MySecondKey
keyname = MySecondKey (uncommitted)
hostname: shares default> commit.
```

- `get keyname` と入力して、プロジェクトの新しい鍵を確認します。

```
shares default> get keyname
keyname = MySecondKey
```


#### 関連トピック

- [575 ページの「プロジェクトの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)
- [581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)
- [585 ページの「暗号化鍵の削除 \(CLI\)」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)

## ▼ 暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 (BUI)

シェア (ファイルシステムおよび LUN) は個別に暗号化するか、プロジェクトレベル (シェアはプロジェクトのプロパティを継承するため) で暗号化できます。プロジェクトが暗号化されている場合は、プロジェクト内に作成されたファイルシステムまたは LUN も暗号化されます。暗号化されていないプロジェクト内で暗号化ファイルシステムまたは LUN を作成するには、次の手順を使用します。

始める前に 暗号化を使用するには、最初にキーストアと鍵を構成する必要があります。567 ページの「[データ暗号化](#)」を参照してください。

1. 「シェア」 > 「シェア」に移動します。
2. 「ファイルシステム」または「LUN」を選択します。
3. 追加アイコン  をクリックします。
4. 「ファイルシステムを作成」または「LUN を作成」ダイアログボックス内のフィールドに入力します。
  - ファイルシステムの場合、プロジェクトを選択し名前を入力します。
  - LUN の場合、プロジェクトを選択し、名前を入力してボリュームサイズを指定します。
  - 「暗号化」で「オン」を選択します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 \_ - . : です

5. 「適用」をクリックします。

### 関連トピック

- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [580 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)

## ▼ 暗号化ファイルシステムまたは LUN の作成 (CLI)

シェア (ファイルシステムおよび LUN) は個別に暗号化するか、プロジェクトレベル (シェアはプロジェクトのプロパティを継承するため) で暗号化できます。プロジェクトが暗号化されている場合は、プロジェクト内に作成されたファイルシステムまたは LUN も暗号化されます。暗号化されていないプロジェクト内で個別の暗号化ファイルシステムまたは LUN を作成するには、次の手順を使用します。

始める前に 暗号化を使用するには、最初に構成する必要があります。567 ページの「データ暗号化」を参照してください。

1. **shares** に移動します。

```
hostname:> shares
```

2. **select** とプロジェクト名を入力します。

この例では、default プロジェクトを選択します。

```
hostname:shares > select default
```

3. **filesystem** とファイルシステム名、または **lun** と LUN 名を入力します。

名前は 1 - 64 文字で構成される必要がありますが、空白を含めたり先頭にピリオドを使用することはできません。許容可能な文字は、英数字と特殊文字 `_ - . :` です。次の例では、default プロジェクトに fs-1 という名前のファイルシステムを作成しています。

```
hostname:shares default> filesystem fs-1
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)>
```

4. **LUN** を作成する場合、**set volsize=** およびボリュームサイズを入力します。

```
hostname:shares default/lun1 (uncommitted)> set volsize=2G
volsize = 2G (uncommitted)
```

5. 暗号化を有効にするには、**set encryption=** と暗号化タイプを入力します。

```
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)> set encryption=aes-128-ccm
encryption = aes-128-ccm (uncommitted)
```

6. ローカルキーストアまたは **Oracle Key Manager (OKM)** キーストアを使用して暗号化を構成します。**set keystore=** と、**LOCAL** または **OKM** のいずれかを入力します。

```
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)> set keystore=LOCAL
keystore = LOCAL (uncommitted)
```

7. 暗号化鍵を設定するには、**set keyname=** と鍵名を入力します。

```
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)> set keyname=MyFirstKey
keyname = MyFirstKey (uncommitted)
```

8. 「**commit**」と入力します。


```
hostname:shares default/fs-1 (uncommitted)> commit
```

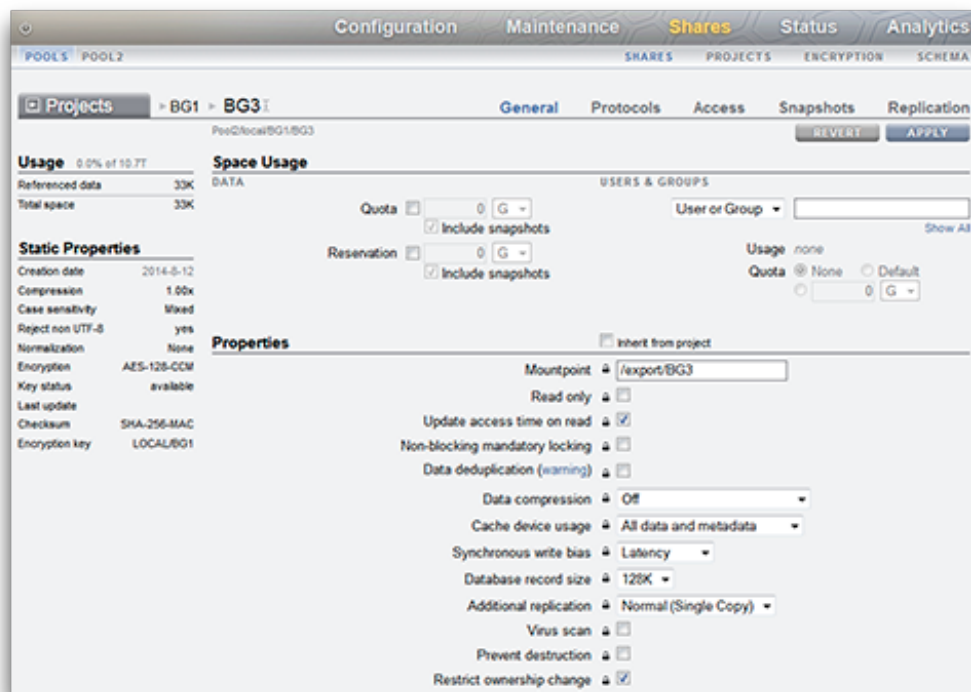
## 関連トピック

- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)

## ▼ シェアの暗号化鍵の変更 (BUI)

シェアに関連付けられている暗号化鍵は、その鍵がクライアントシステムで使用されている場合であってもいつでも変更できます。親プロジェクトを変更せずにシェアの鍵を変更するには、次の手順を使用します。

1. 変更するシェアのプロパティを表示するには、「シェア」 > 「シェア」に移動します。
2. 「ファイルシステム」または「LUN」を選択します。
3. 目的のシェアを探すには、「すべて表示」、「ローカル」、または「レプリカ」をクリックします。
4. 変更するシェアの上にカーソルを移動し、編集アイコン  をクリックします。シェアプロパティが表示されます。



5. 必要に応じて、「プロジェクトから継承」のチェックマークを外します。

- 暗号化鍵を変更するには、「ローカル」または「OKM」を選択し、使用する鍵を選択します。
- 変更を保存するには、「適用」をクリックするか、「戻す」をクリックして変更を破棄します。「適用」をクリックすると、変更が保存され新しい鍵が暗号化鍵領域に表示されます。

### 関連トピック

- [575 ページの「プロジェクトの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)
- [583 ページの「暗号化鍵の削除 \(BUI\)」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)

## ▼ シェアの暗号化鍵の変更 (CLI)

シェアに関連付けられている暗号化鍵は、その鍵がクライアントシステムに使用されている場合であってもいつでも変更できます。親プロジェクトを変更せずにシェアの鍵を変更するには、次の手順を使用します。

- シェアの現在の鍵を表示するには、そのファイルシステムまたは LUN に移動し、**get keyname** と入力します。

```
hostname:shares default> select fs-1
hostname:shares default/fs-1> get keyname
keyname = MyFirstKey
```

- シェアに使用される鍵を変更するには、**set keyname=** に続いて新しい鍵名を入力してから、**commit** と入力します。

```
hostname:shares default/fs-1> set keyname=MySecondKey
keyname = MySecondKey (uncommitted)
hostname: shares default/fs-1> commit.
```

- get keyname** と入力して、シェアの新しい鍵を確認します。

```
shares default/fs-1> get keyname
keyname = MySecondKey
```

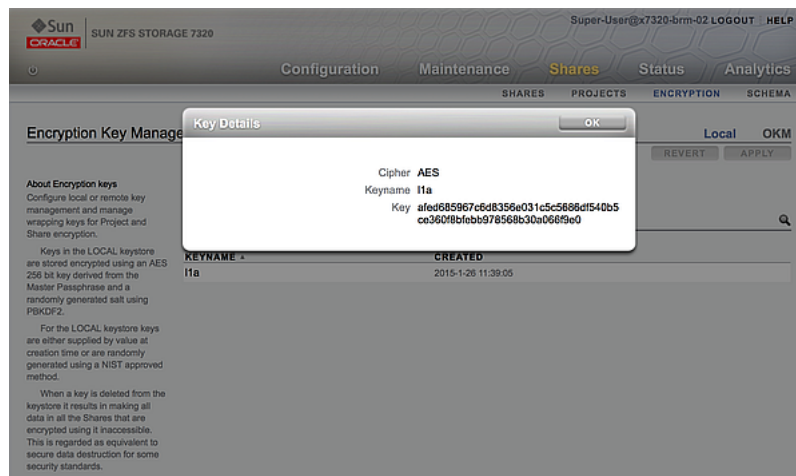
### 関連トピック

- [577 ページの「プロジェクトの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)
- [585 ページの「暗号化鍵の削除 \(CLI\)」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)

## ▼ ローカル鍵のバックアップ (BUI)

1つのローカル鍵をバックアップするためにその情報を取得するには、次の手順を使用します。

1. 「シェア」 > 「暗号化」 > 「ローカル」に移動します。
2. バックアップする鍵をクリックします。  
鍵名と鍵値のダイアログボックスが表示されます。



3. 何らかの方法を使用して、この情報を選択したバックアップ場所に記録し、「了解」をクリックします。

## ▼ ローカル鍵のバックアップ (CLI)

1つのローカル鍵をバックアップするためにその情報を取得するには、次の手順を使用します。

1. 鍵を選択します。

```
hostname:shares encryption local keys> select keyname=Mykey
```

2. 鍵の値を取得します。

```
hostname:shares encryption local key-005> get key
key = d6a5b801ffb93fcb19ef70a11d662d8092f243c5d4ccd0cd34264b15dd0b7739
```


3. 何らかの方法を使用して、この情報を選択したバックアップ場所に記録します。

## ▼ 暗号化鍵の削除 (BUI)

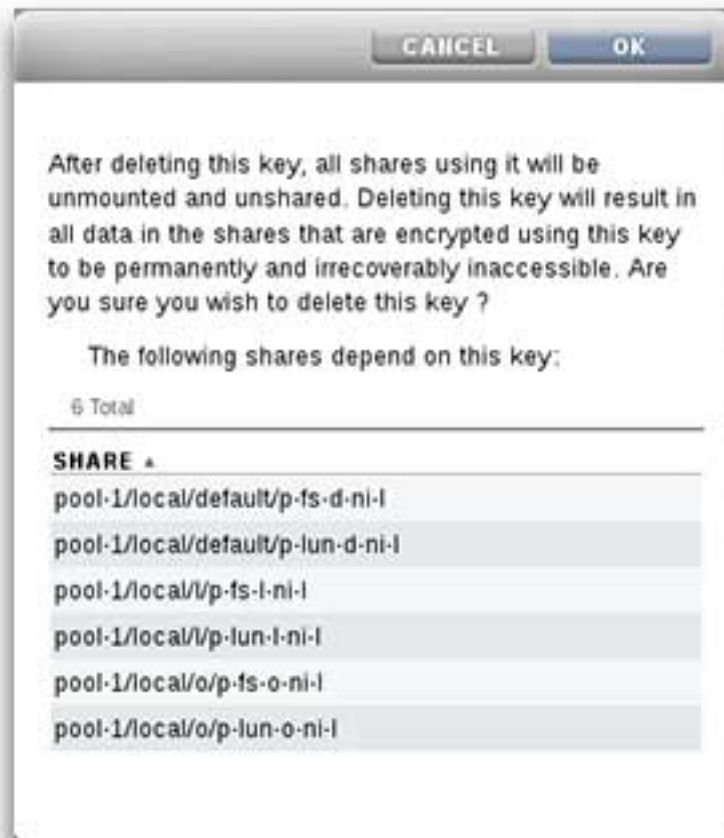
大量のデータへのアクセスを短時間かつ効率的に遮断するには、暗号化鍵を削除します。鍵は使用中でも削除できます。鍵が使用中の場合は、警告が表示され確認を求められます。その鍵を使用しているすべてのシェアまたはプロジェクトが解除され、クライアントからアクセスできなくなります。

関連するシェアにアクセスするためにローカル鍵を再度使用する場合は、鍵を削除する前に鍵名および値をバックアップしてください。これにより、[586 ページの「ローカル鍵の復元 \(BUI\)」](#)の説明に従って、あとで復元手順を実行できます。

ローカルまたは OKM 暗号化鍵を削除するには、次の手順を使用します。

1. 「シェア」 > 「暗号化」に移動します。
2. 「ローカル」または「OKM」を選択します。
3. 削除する鍵の上にカーソルを移動し、削除アイコン  をクリックします。

次のアラートが表示されます。



4. 鍵を削除するには「了解」をクリックし、鍵を維持するには「取り消し」をクリックします。

鍵を削除すると、その鍵を使用しているすべてのシェアのすべてのデータにアクセスできなくなります。これは、セキュアなデータ破棄と同等であり、鍵をバックアップして鍵復元に備えている場合を除き、永続的で取り消し不能です。鍵のバックアップおよび復元の詳細は、[582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(BUI\)」](#)、および [586 ページの「ローカル鍵の復元 \(BUI\)」](#) を参照してください。

#### 関連トピック

- [580 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)



- [585 ページの「暗号化鍵の削除 \(CLI\)」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)

## ▼ 暗号化鍵の削除 (CLI)

大量のデータへのアクセスを短時間かつ効率的に遮断するには、暗号化鍵を削除します。鍵は使用中でも削除できます。鍵が使用中の場合は、警告が表示され確認を求められます。その鍵を使用しているすべてのシェアまたはプロジェクトが解除され、クライアントからアクセスできなくなります。

関連するシェアにアクセスするためにローカル鍵を再度使用する場合は、鍵を削除する前に鍵名および値をバックアップしてください。これにより、[587 ページの「ローカル鍵の復元 \(CLI\)」](#)の説明に従って、あとで復元手順を実行できます。

ローカルまたは OKM 暗号化鍵を削除するには、次の手順を使用します。

1. 鍵を削除するには次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:shares encryption local local_keys> destroy keyname=AKTEST_K1
```

This key has the following dependent shares:

```
Pool2/local/BG1
Pool2/local/BG1/BG3
Pool2/local/BG1/fast1
Pool2/local/default/BG2
```

Destroying this key will render the data inaccessible. Are you sure? (Y/N)

2. その鍵を使用してシェアにアクセスできなくなったことを確認するには、シェアに移動し、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:> shares select test_project select test_share1
hostname:shares test_project/test_share1> get encryption keystore keyname keystatus
```

```
encryption = aes-128-ccm (inherited)
keystore = LOCAL (inherited)
keyname = AKTEST_K1 (inherited)
keystatus = unavailable
```

Errors:

```
key_unavailable
```

3. 依存要素を一覧表示するには、次の CLI コマンドを使用します。

```
hostname:shares (pool-010) encryption local keys> select keyname=1 hostname:shares
(pool-010) encryption local key-002> list
```

Properties:

```
cipher = AES
keyname = 1
```

```
hostname:shares (pool-010) encryption local key-002> list dependents DEPENDENTS
pool-010/local/default/a hostname:shares (pool-010) encryption local key-002>
```

### 関連トピック

- [581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)
- [582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(CLI\)」](#)
- [587 ページの「ローカル鍵の復元 \(CLI\)」](#)

## ▼ ローカル鍵の復元 (BUI)

削除されたローカル鍵を復元するには、削除された鍵と同じ鍵名および値を使用して新しいローカル鍵を作成します。鍵を削除する前に、この情報をあらかじめ記録またはバックアップしておく必要があります。バックアップの手順は、[582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(BUI\)」](#)で説明しています。ローカル鍵を削除するとシェアがアクセス不可能になりますが、そのローカル鍵を再度作成すると、シェアは再度アクセス可能になります。

OKM キーストアに格納されている鍵の復元については、[Oracle Technology Network \(http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html)にある Oracle Key Manager のドキュメントを参照してください。

バックアップしたローカル鍵を復元するには、次の手順を使用します。

---

**注記** - 鍵名が既存シェアで使用されており鍵値が異なる場合は、元のローカル鍵を復元する前に、それらのシェアで使用される鍵を変更してください。詳細は、[580 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)を参照してください。

---

1. バックアップ場所からローカル鍵の鍵名および値を取得します。
2. 「シェア」 > 「暗号化」 > 「ローカル」に移動し、「追加」アイコンをクリックします。
3. バックアップ内と同じ鍵名を入力します。
4. 「鍵を自動的に生成する」のチェックマークを外し、バックアップに基づいて鍵値を設定します。
5. 「追加」をクリックして復元した鍵を保存します。  
鍵名が既存のシェアで使用されている場合は、ダイアログボックスが表示されます。既存のシェアの鍵値を上書きするには、「了解」をクリックします。新しい鍵を追加しない場合は「取り消し」をクリックします。その後、この手順を繰り返して元の鍵を復元する前に、シェアで使用される鍵を変更できます。詳細は、[580 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)を参照してください。

## 関連トピック

- [580 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(BUI\)」](#)
- [582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(BUI\)」](#)
- [583 ページの「暗号化鍵の削除 \(BUI\)」](#)

## ▼ ローカル鍵の復元 (CLI)

削除されたローカル鍵を復元するには、削除された鍵と同じ鍵名および値を使用して新しいローカル鍵を作成します。鍵を削除する前に、この情報をあらかじめ記録またはバックアップしておく必要があります。バックアップの手順は、[582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(CLI\)」](#)で説明しています。ローカル鍵を削除するとシェアがアクセス不可能になりますが、そのローカル鍵を再度作成すると、シェアは再度アクセス可能になります。

OKM キーストアに格納されている鍵の復元については、[Oracle Technology Network \(http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html)にある Oracle Key Manager のドキュメントを参照してください。

バックアップしたローカル鍵を復元するには、次の手順を使用します。

---

**注記** - 鍵名が既存シェアで使用されており鍵値が異なる場合は、元のローカル鍵を復元する前に、それらのシェアで使用される鍵を変更してください。詳細は、[581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)を参照してください。

---

1. バックアップ場所からローカル鍵の鍵名および値を取得します。

2. ローカルキーストアに鍵を作成します。

```
hostname:shares encryption local keys> create
```

3. バックアップに基づいて鍵に名前を付けます。

```
hostname:shares encryption local key-005 (uncommitted)> set keyname=Mykey
keyname = Mykey (uncommitted)
```

4. バックアップに基づいて鍵値を設定します。

```
hostname:shares encryption local key-005 (uncommitted)> set
key=d6a5b801ffb93fcb19ef70a11d662d8092f243c5d4ccd0cd34264b15dd0b7739
key = d6a5b801ffb93fcb19ef70a11d662d8092f243c5d4ccd0cd34264b15dd0b7739 (uncommitted)
```

5. 鍵を保存します。

```
hostname:shares encryption local key-005 (uncommitted)> commit
```

鍵名が既存のシェアで使用されている場合は、アラートが表示されます。

```
Existing shares reference the key Mykey from the LOCAL keystore. Are you sure? (Y/N)
```

既存のシェアの鍵値を上書きするには、Y と入力します。新しい鍵を追加しない場合は N と入力します。その後、この手順を繰り返して元の鍵を復元する前に、シェアで使用される鍵を変更できます。詳細は、[581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)を参照してください。

### 関連トピック

- [581 ページの「シェアの暗号化鍵の変更 \(CLI\)」](#)
- [582 ページの「ローカル鍵のバックアップ \(CLI\)」](#)
- [585 ページの「暗号化鍵の削除 \(CLI\)」](#)

## 暗号化プロパティ

次に、鍵の管理、鍵の作成、および暗号化プロジェクトとシェアの作成に使用可能な暗号化プロパティを一覧表示します。

- **ローカル鍵管理プロパティ**
  - **マスターパスフレーズ** - マスターパスフレーズは、ローカルキーストアに格納された鍵の暗号化用の AES 鍵の生成に使用します。鍵の生成には PKCS#5 PBKDF アルゴリズムが使用され、鍵はシステムによりランダムに生成されて管理されます。
- **ローカル鍵作成プロパティ**
  - **鍵名** - 鍵を識別する名前。
  - **鍵の自動生成** - 鍵を自動的に生成します。
  - **鍵** - 自動鍵生成が選択されていない場合の、暗号化された状態で保存された 16 進エンコード raw 256 ビット鍵。
- **OKM 鍵管理プロパティ (OKM 管理者により提供)**
  - **Key Manager Server** - Oracle Key Manager (OKM) サーバーの IP アドレス。
  - **ユーザーエージェント ID** - エージェント ID。
  - **登録 PIN** - 登録 PIN。
- **OKM 鍵作成プロパティ**
  - **鍵名** - 鍵を識別する名前。
- **シェア暗号化プロパティ**
  - **暗号化** - AES 暗号化タイプと鍵の長さ (詳細は、[590 ページの「暗号化鍵の値について」](#)を参照してください)。
  - **鍵の継承** - 親プロジェクトから暗号鍵を継承します。
  - **鍵** - 特定のローカル鍵または OKM 鍵を設定し、鍵が親プロジェクトから継承されない場合に使用されます。
- **プロジェクト暗号化プロパティ**

- **名前** - プロジェクトを識別する名前。
- **暗号化** - AES 暗号化タイプと鍵の長さ (詳細は、590 ページの「暗号化鍵の値について」を参照してください)。
- **鍵** - 特定のローカルまたは OKM 鍵。

#### 関連トピック

- 568 ページの「データ暗号化ワークフロー」
- 589 ページの「暗号化鍵の管理」
- 591 ページの「暗号化のパフォーマンスへの影響」
- 591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」

## 暗号化鍵の管理

アプライアンスには、組み込みのローカルキーストアと Oracle Key Manager (OKM) システムに接続する機能が含まれています。各暗号化プロジェクトまたはシェアでは、ローカルキーストアまたは OKM キーストアからのラッピング鍵が必要とされます。データ暗号化鍵はストレージアプライアンスによって管理され、ローカルまたは OKM キーストアからのラッピング鍵によって暗号化された状態で永続的に保存されます。

包括的な鍵管理システム (KMS) である OKM は、企業の間で急速にニーズが高まっているストレージベースのデータ暗号化に対応するものです。この機能はオープンな標準に準拠するように設計されており、広範囲に分散した異機種混在ストレージインフラストラクチャーにおける暗号鍵を集中管理するためのキャパシティ、スケーラビリティ、相互運用性を提供します。

OKM はストレージ鍵管理における特有の課題を解決します。

- **長期間の鍵保持** - OKM ではアーカイブデータをいつでも使用できるようになります。データのライフサイクルが終了するまで OKM が暗号化鍵を安全に保持します。
- **相互運用性** - OKM は、単一のストレージ鍵管理システム下で、メインフレームやオープンシステムに接続されたさまざまなストレージデバイスをサポートするための相互運用性を提供します。
- **高可用性** - アプライアンスが同じ場所にある場合でも世界中に分散している場合でも、アクティブな N ノードクラスタリング、動的な負荷分散、および自動化されたフェイルオーバーを使用する高可用性を提供します。
- **大容量** - 大量のストレージデバイスと、さらに多くのストレージ鍵を管理します。クラスタ化されたアプライアンス 1 つで、数千ものストレージデバイスと数百万ものストレージ鍵を対象にした鍵管理サービスを提供できます。
- **柔軟な鍵構成** - OKM クラスタごとに、鍵を自動で生成したり、ローカルキーストアまたは OKM キーストアに対して個別に作成したりできます。セキュリティー管

理者は、キーストアと組み合わせたときに、特定のラップ鍵をプロジェクトまたはシェアと関連付ける鍵名を提供します。

**注記** - アプライアンスがクラスタ化されている場合、OKM サーバーエージェントの作成時に「一回限りのパズフレーズ」設定を使用しないでください。使用すると、ほかのクラスタノードでの登録が失敗し、フェイルオーバー時に鍵を使用できなくなります。

## 鍵の管理

非アクティブの状態の OKM 鍵を使用するシェアおよびプロジェクトはアクセス可能なままになります。OKM 鍵を使用されないようにするには、OKM 管理者はこの鍵を明示的に削除する必要があります。

暗号化されたシェアおよびプロジェクトを確実にアクセス可能にするには、アプライアンス構成およびローカルキーストアの鍵の値をバックアップします。鍵が使用不可能になった場合、その鍵を使用するシェアまたはプロジェクトはアクセスできなくなります。プロジェクトの鍵が使用できない場合、新しいシェアをそのプロジェクトに作成できなくなります。

鍵は次のような場合に使用不可能になります。

- 鍵の削除
- 暗号化をサポートしていないリリースへのロールバック
- 鍵が構成されていないリリースへのロールバック
- 出荷時リセット
- OKM サーバーを使用できない

## 暗号化鍵の値について

次の表は、BUI および CLI 暗号化鍵の値と説明を示しています。また、暗号化タイプが複製解除で機能するかどうかを示しています。

表 124 暗号化鍵の値

BUI の値	CLI の値	説明
オフ	オフ	シェア/プロジェクトは暗号化されません
AES-128-CCM	aes-128-ccm	CPU への影響が最小の暗号化。複製解除可能
AES-192-CCM	aes-192-ccm	複製解除可能

BUI の値	CLI の値	説明
AES-256-CCM	aes-256-ccm	複製解除可能
AES-128-GCM	aes-128-gcm	NIST SP800-38D が推奨されます。複製解除不能
AES-192-GCM	aes-192-gcm	NIST SP800-38D が推奨されます。複製解除不能
AES-256-GCM	aes-256-gcm	CPU への影響が最大の暗号化。NIST SP800-38D が推奨されます。複製解除不能

## 暗号化のパフォーマンスへの影響

シェアで暗号化を使用すると、CPU のパフォーマンスが次のような影響を受ける可能性があります。

- AES-128-CCM モードでは CPU パフォーマンスに与える影響が最小限であるため、ローカルセキュリティーの要件がないすべてのワークロードで推奨されます。
- 暗号化データが読み取られると、DRAM に復号化および圧縮解除されて保存されます。DRAM キャッシュから主に読み取り処理できる読み取りが主なワークロードでは、データの復号化の影響は最小限で済みます。
- SSD キャッシュデバイスを使用する場合、DRAM から取り出されてキャッシュに入れられたデータブロックは圧縮および暗号化され、DRAM に戻すときに復号化して暗号化解除する必要があります。
- 書き込みが主で、より大きいブロックサイズ (特に 128K バイトと 1M バイト) を使用するワークロードでは、CPU が重大な影響を受ける可能性があり、これによりスループットが低下します。これは特に、ファイルシステムレコードサイズまたは LUN ボリュームブロックサイズがアプリケーションブロックサイズより大きい場合に発生する可能性があります。

### 関連トピック

- [568 ページの「データ暗号化ワークフロー」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)

## 暗号化鍵のライフサイクル

暗号化鍵のライフサイクルは、データサービスをオフラインにせずに任意の時点で鍵を変更できるため柔軟性が高くなっています。

キーストアから鍵を削除すると、その鍵を使用しているすべてのシェアがアンマウントされるため、それらのデータにアクセスできなくなります。OKM キーストア内の鍵のバックアップは、OKM バックアップサービスを使用して実行する必要があります。ローカルキーストア内の鍵はシステム構成バックアップの一環としてバックアップされます。ローカルキーストアの場合は、鍵を値で指定して作成し外部システムに委託することもできるので、鍵ごとのバックアップまたは復元機能も実現できます。

#### 関連トピック

- [568 ページの「データ暗号化ワークフロー」](#)
- [588 ページの「暗号化プロパティ」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化のパフォーマンスへの影響」](#)

## 暗号化データのバックアップと復元

シェアを ZFS 復元機能を使用して復元する際には、元のシェアがソースプロジェクトからその暗号化プロパティを継承している場合、復元されたシェアはターゲットプロジェクトの暗号化プロパティを継承します。

復元されたシェアに元のシェアの暗号化プロパティが保持されるようにするには、暗号化をプロジェクトから継承するのではなく、元のシェアで構成します。

プロジェクト内で個々のシェアに対して異なる暗号化を設定する場合には、シェアにプロジェクトからプロパティを継承させるのではなく、個々のソースシェアに対して手動で暗号化を構成します。こうすることによって、すべてのシェアを、必要とされる暗号化設定でバックアップおよび復元できるようになります。

NDMP バックアップの詳細は、[268 ページの「NDMP 構成」](#) を参照してください。レプリケーションの詳細は、[477 ページの「リモートレプリケーション」](#) を参照してください。

#### 関連トピック

- [568 ページの「データ暗号化ワークフロー」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)
- [592 ページの「暗号化シェアのレプリケート」](#)

## 暗号化シェアのレプリケート

暗号化シェアをレプリケートするには、ソースとターゲットの両方が暗号化をサポートしており、次の要件を満たしている必要があります。



- ソフトウェアリリース 2013.1.3.0 (以降)
- シェアによって使用される暗号化ラッピング鍵
- OKM 鍵名は、レプリケーションのソースアプライアンスとターゲットアプライアンスの両方のキーストアで同一である必要があります。
- OKM エージェント ID は、レプリケーションソースアプライアンスとターゲットレプリケーションアプライアンスで一意である必要があります。複数のレプリケーションピアアプライアンスが同じエージェントを使用することはできません。
- レプリケーションピアの OKM エージェントは、同じ鍵グループを参照するように、同じ OKM サーバー上に構成するようにします。この場合、レプリケーションのターゲットシステムに手動で OKM 鍵を作成する必要はありません。

暗号化シェアをレプリケートしようとしたときに、ターゲットで暗号化がサポートされていない場合は、レプリケーションは失敗します。ラッピング鍵がソースまたはターゲットシステムで使用できない場合、またはターゲットソフトウェアが 2013.1.3.0 より前の場合は、アラートが発生します。ソースとターゲットの両方でアラートを確認して、レプリケーションの失敗の理由を判別してください。

レプリケーションの構成の詳細は、[477 ページの「リモートレプリケーション」](#)を参照してください。

#### 関連トピック

- [568 ページの「データ暗号化ワークフロー」](#)
- [589 ページの「暗号化鍵の管理」](#)
- [591 ページの「暗号化鍵のライフサイクル」](#)
- [592 ページの「暗号化データのバックアップと復元」](#)
- Oracle ZFS Storage Appliance: リモートレプリケーション互換性 [Doc ID 1958039.1] MOS ノート



## 保守のワークフロー

---

ワークフローとは、アプライアンスにアップロードされ、そのアプライアンス自体で管理される CLI スクリプトのことです。ワークフローは、ブラウザインタフェースまたはコマンド行インタフェースのどちらからも優れた方法でパラメータ化し、実行できます。ワークフローはまた、オプションでアラートとして実行したり、指定された時間に実行したりすることもできます。そのため、ワークフローを使用すると、特定のポリシーや手順を取り込むような方法でアプライアンスを拡張できます。また、たとえば、特定の組織またはアプリケーションのベストプラクティスを正式にエンコードすることもできます。

ワークフローを操作するには、次のセクションを使用してください。

- [ワークフローについて](#)
- [ワークフローのパラメータについて](#)
- [制約付きのワークフローのパラメータ](#)
- [オプションのワークフローのパラメータ](#)
- [ワークフローのエラー処理](#)
- [ワークフローの入力の検証](#)
- [ワークフローの実行の監査およびレポート](#)
- [ワークフローのバージョン管理について](#)
- [アラートアクションでのワークフローの使用](#)
- [スケジュールされたワークフローの使用](#)
- [スケジュールされたワークフローの使用](#)
- [ワークフローズケジュールのコーディング](#)
- [指定されたドライブタイプに基づくワークシートの作成](#)
- [BUI を使用したワークフローのアップロード](#)
- [CLI を使用したワークフローのダウンロード](#)
- [CLI を使用したワークフローの一覧表示](#)
- [CLI を使用したワークフローの実行](#)

## ワークフローについて

ワークフローは、1つの大域変数 `workflow` が含まれている、有効な ECMAScript ファイルに組み込まれています。これは、少なくとも次の3つのメンバーを含む必要のあるオブジェクトです。

**表 125** 必須のオブジェクトメンバー

必須メンバー	タイプ	説明
<code>name</code>	文字列	ワークフローの名前
<code>description</code>	文字列	ワークフローの説明
<code>execute</code>	関数	ワークフローを実行する関数

### 例 18 Hello World ワークフロー

次に、基本的なワークフローの例を示します。

```
var workflow = {
 name: 'Hello world',
 description: 'Bids a greeting to the world',
 execute: function () { return ('hello world!') }
};
```

このワークフローをアップロードすると「Hello world」という名前の新しいワークフローが作成され、このワークフローを実行すると「hello world!」が出力されます。

### 例 19 ワークフローの `run` 関数を使用して CPU 使用率を返す

ワークフローは、アプライアンスのシェル内で非同期に (デフォルトでは) そのワークフローを実行しているユーザーとして実行されます。そのため、ワークフローはアプライアンスのスクリプト機能 ([42 ページの「CLI スクリプトの操作」](#)を参照) を自由に使用でき、さらにアプライアンスのシェルのほかの任意のインスタンスと同じようにアプライアンスと対話できます。つまり、ワークフローはコマンドを実行したり、出力を解析したり、状態を変更したりできます。run 関数を使用して現在の CPU 使用率を返す、より複雑な例を次に示します。

```
var workflow = {
 name: 'CPU utilization',
 description: 'Displays the current CPU utilization',
 execute: function () {
 run('analytics datasets select name=cpu.utilization');
 cpu = run('csv 1').split('\n')[1].split(',');
 return ('At ' + cpu[0] + ', utilization is ' + cpu[1] + '%');
 }
};
```

## ワークフローのパラメータについて

入力に従って動作しないワークフローの範囲は限られます。有効に使用するには、多くのワークフローをパラメータ化する必要があります。これを行うには、グローバルな workflow オブジェクトに parameters メンバーを追加します。この parameters メンバーがさらに、パラメータごとにメンバーを持つことが想定されるオブジェクトになっています。各 parameters メンバーには、次のメンバーが必要です。

表 126 必須のワークフローパラメータメンバー

必須メンバー	タイプ	説明
label	文字列	ワークフローパラメータの入力を飾るためのラベル
type	文字列	ワークフローパラメータの型

type メンバーは、次の型のいずれかに設定されている必要があります。

表 127 ワークフローのメンバー型名

型名	説明
Boolean	ブール値
ChooseOne	いくつかの指定された値のいずれか
EmailAddress	電子メールアドレス
File	アプライアンスに転送されるファイル
Host	有効なホスト (名前またはドット区切り 10 進数のどちらか)
HostName	有効なホスト名
HostPort	有効な、使用可能なポート
Integer	整数
NetAddress	ネットワークアドレス
NodeName	ネットワークノードの名前
NonNegativeInteger	0 以上の整数
Number	任意の数値 (浮動小数点を含む)
Password	パスワード
Permissions	POSIX アクセス権
Port	ポート番号
Size	サイズ
String	文字列
StringList	文字列のリスト

**例 20**                    2つのパラメータを使用するワークフロー

指定された型に基づいて、ワークフローの実行時に適切な入力フォームが生成されます。たとえば、ビジネス単位の名前 (プロジェクトとして使用される) と、シェアの名前 (シェア名として使用される) の2つのパラメータを持つワークフローを次に示します。

```
var workflow = {
 name: 'New share',
 description: 'Creates a new share in a business unit',
 parameters: {
 name: {
 label: 'Name of new share',
 type: 'String'
 },
 unit: {
 label: 'Business unit',
 type: 'String'
 }
 },
 execute: function (params) {
 run('shares select ' + params.unit);
 run('filesystem ' + params.name);
 run('commit');
 return ('Created new share "' + params.name + '"');
 }
};
```

このワークフローをアップロードして実行すると、シェアとビジネス単位の名前を入力するためのダイアログボックスが表示されます。シェアが作成されると、それを示すメッセージが生成されます。

## 制約付きワークフローパラメータ

パラメータによっては、任意の文字列は許可せず、入力を少数の候補のいずれかに制限する場合があります。これらのパラメータは型 **ChooseOne** として指定するべきであり、そのパラメータを含むオブジェクトには次の2つの追加のメンバーが必要です。

**表 128**                    制約付きのパラメータの必須メンバー

必須メンバー	タイプ	説明
options	配列	有効なオプションを指定する文字列の配列
optionlabels	配列	options で指定されたオプションに関連付けられているラベルを指定する文字列の配列

## 例 21 ワークフロー ChooseOne パラメータの使用

ChooseOne パラメータ型を使用すると、前の例を、ビジネス単位が少数の定義済みの値のいずれかに制限されるように拡張できます。

```
var workflow = {
 name: 'Create share',
 description: 'Creates a new share in a business unit',
 parameters: {
 name: {
 label: 'Name of new share',
 type: 'String'
 },
 unit: {
 label: 'Business unit',
 type: 'ChooseOne',
 options: ['development', 'finance', 'qa', 'sales'],
 optionlabels: ['Development', 'Finance',
 'Quality Assurance', 'Sales/Administrative'],
 }
 },
 execute: function (params) {
 run('shares select ' + params.unit);
 run('filesystem ' + params.name);
 run('commit');
 return ('Created new share "' + params.name + '"');
 }
};
```

このワークフローが実行されたときに、unit パラメータは手動では入力されず、可能性のあるオプションの指定されたリストから選択されます。

## オプションワークフローのパラメータ

一部のパラメータは、ワークフローの実行を許可するためにそのパラメータがいずれかの値に設定されていることが UI によって義務付けられないという点で、オプションとみなすことができます。このようなパラメータは、parameters メンバーの optional フィールドによって示されます。

表 129 オプションのパラメータの必須メンバー

オプションメンバー	タイプ	説明
optional	ブール値	true に設定されている場合は、このパラメータを設定する必要がないことを示します。このパラメータの値が指定されてなくても、UI によってワークフローの実行が許可されます。

パラメータがオプションであり、未設定の場合、execute 関数に渡される parameters オブジェクト内のそのメンバーは undefined に設定されます。

## ワークフローのエラー処理

ワークフローの実行中にエラーが検出された場合は、例外がスローされます。例外がワークフロー自体によってキャッチされない場合 (または、ワークフローが別の方法ではキャッチされない例外をスローした場合)、ワークフローは失敗し、その例外に関連した情報がユーザーに表示されます。エラーを正しく処理するには、例外をキャッチして処理する必要があります。たとえば、前の例では、存在しないプロジェクト内にシェアを作成しようとすると、キャッチされない例外が発生します。

### 例 22 ワークフローのエラー処理

この例は、問題のあるエラーをキャッチし、プロジェクトが存在しない場合はそのプロジェクトを作成するように変更できます。

```
var workflow = {
 name: 'Create share',
 description: 'Creates a new share in a business unit',
 parameters: {
 name: {
 label: 'Name of new share',
 type: 'String'
 },
 unit: {
 label: 'Business unit',
 type: 'ChooseOne',
 options: ['development', 'finance', 'qa', 'sales'],
 optionlabels: ['Development', 'Finance',
 'Quality Assurance', 'Sales/Administrative'],
 }
 },
 execute: function (params) {
 try {
 run('shares select ' + params.unit);
 } catch (err) {
 if (err.code != EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw (err);

 /*
 * We haven't yet created a project that corresponds to
 * this business unit; create it now.
 */
 run('shares project ' + params.unit);
 run('commit');
 run('shares select ' + params.unit);
 }

 run('filesystem ' + params.name);
 run('commit');
 return ('Created new share "' + params.name + '"');
 }
};
```



## ワークフローの入力の検証

ワークフローは、そのワークフローのパラメータがメンバーとして含まれているオブジェクトをパラメータとして受け取る `validate` メンバーを追加することによって、オプションでその入力を検証できます。`validate` 関数からは、各メンバーの名前が検証に失敗したパラメータの名前であり、各メンバーの値がユーザーに表示される検証失敗メッセージであるオブジェクトが返されます。

### 例 23 ワークフローの入力の検証

前の例を拡張して、ユーザーがすでに存在するシェアを作成しようとした場合に明確なエラーを表示するには、次のようにします。

```
var workflow = {
 name: 'Create share',
 description: 'Creates a new share in a business unit',
 parameters: {
 name: {
 label: 'Name of new share',
 type: 'String'
 },
 unit: {
 label: 'Business unit',
 type: 'ChooseOne',
 options: ['development', 'finance', 'qa', 'sales'],
 optionlabels: ['Development', 'Finance',
 'Quality Assurance', 'Sales/Administrative'],
 }
 },
 validate: function (params) {
 try {
 run('shares select ' + params.unit);
 run('select ' + params.name);
 } catch (err) {
 if (err.code == EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 return;
 }

 return ({ name: 'share already exists' });
 },
 execute: function (params) {
 try {
 run('shares select ' + params.unit);
 } catch (err) {
 if (err.code != EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw (err);
 }

 /*
 * We haven't yet created a project that corresponds to
 * this business unit; create it now.
 */
 run('shares project ' + params.unit);
 set('mountpoint', '/export/' + params.unit);
 run('commit');
 run('shares select ' + params.unit);
 }

 run('filesystem ' + params.name);
}
```

```

 run('commit');
 return ('Created new share ' + params.name + '');
 }
};

```

## ワークフローの実行の監査およびレポート

ワークフローは、`audit` 関数を呼び出すことによって監査レコードを発行できます。`audit` 関数の唯一の引数は、監査ログに記録される文字列です。

実行にある程度の時間が必要な複雑なワークフローの場合は、そのワークフローを実行しているユーザーに明確な進捗状況を表示すると有益です。ワークフローの実行をこの方法で報告できるようにするには、`execute` メンバーが手順の配列を返すべきです。各配列要素には、次のメンバーが必要です。

**表 130** 実行のレポートの必須メンバー

必須メンバー	タイプ	説明
<code>step</code>	文字列	実行段階の名前を示す文字列
<code>execute</code>	関数	ワークフローの段階を実行する関数

全体としてのワークフロー上の `execute` 関数と同様に、各段階の `execute` メンバーは、そのワークフローへのパラメータを含むオブジェクトを引数として受け取ります。

**例 24** ワークフローの実行のレポート

例として、3つの手順で新しいプロジェクト、シェア、および監査レコードを作成するワークフローを次に示します。

```

var steps = [{
 step: 'Checking for associated project',
 execute: function (params) {
 try {
 run('shares select ' + params.unit);
 } catch (err) {
 if (err.code != EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw (err);
 }
 /*
 * We haven't yet created a project that corresponds to
 * this business unit; create it now.
 */
 run('shares project ' + params.unit);
 set('mountpoint', '/export/' + params.unit);
 run('commit');
 run('shares select ' + params.unit);
 }
}

```

```

 }
 }, {
 step: 'Creating share',
 execute: function (params) {
 run('filesystem ' + params.name);
 run('commit');
 }
 }, {
 step: 'Creating audit record',
 execute: function (params) {
 audit('created "' + params.name + '" in "' + params.unit);
 }
 }
];

var workflow = {
 name: 'Create share',
 description: 'Creates a new share in a business unit',
 parameters: {
 name: {
 label: 'Name of new share',
 type: 'String'
 },
 },
 unit: {
 label: 'Business unit',
 type: 'ChooseOne',
 options: ['development', 'finance', 'qa', 'sales'],
 optionlabels: ['Development', 'Finance',
 'Quality Assurance', 'Sales/Administrative'],
 },
},
validate: function (params) {
 try {
 run('shares select ' + params.unit);
 run('select ' + params.name);
 } catch (err) {
 if (err.code == EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 return;
 }

 return ({ name: 'share already exists' });
},
execute: function (params) { return (steps); }
};

```

ワークフローは、メール関数を使用して、電子メールを介してワークフローの特定の出力を提供できます。メール関数には、`to` と `subject` を持つオブジェクト、および `messageBody` 文字列などの引数が含まれている必要があります。

#### 例 25           メーラーを使用したワークフローの実行

```

var workflow = {
 name: 'email controller state',
 description: 'email controller state',
 execute: function () {

 // verify state of the controller
 var faulted = run('maintenance hardware "chassis-000" get faulted');

 var messageBody = faulted;

 emailAddress = 'first.last@xyz.com';
 }
};

```

```

 subjectLine = 'Controller State';
 mail({To: emailAddress, Subject: subjectLine}, messageBody);
 }
};

```

## ワークフローのバージョン管理について

ワークフローに関しては、バージョン管理の2つの側面があります。最初は、ワークフローが依存するアプライアンスソフトウェアのバージョンの表現であり、2番目はワークフロー自体のバージョンの表現です。バージョン管理は、ワークフローへの次の2つのオプションメンバーによって表されます。

表 131 バージョン管理のオプションのメンバー

オプションメンバー	タイプ	説明
required	文字列	このワークフローを実行するために必要なアプライアンスソフトウェアの最小のバージョン。最小の年、月、日、ビルド、およびブランチを含みます。
version	文字列	ドット区切り 10 進数 (major.minor.micro) 形式での、このワークフローのバージョン。

**アプライアンスのバージョン管理** - アプライアンスソフトウェアの最小限必要なバージョンを表すには、ワークフローにオプションの `required` フィールドを追加します。このアプライアンスは、ソフトウェアがビルドされた年、月、日のあとにビルド番号とブランチ番号を付加した「`year.month.day.build-branch`」によってバージョン管理されます。たとえば、「`2009.04.10,12-0`」は、2009年4月10日に最初にビルドされたソフトウェアの12番目のビルドです。現在のアプライアンスキットソフトウェアのバージョンを取得するには、CLI コマンド「`configuration version get version`」を実行するか、または BUI の「システム」画面にある「バージョン」フィールドを参照します。`required` フィールドを使用した例を次に示します。

例 26 ワークフローの必須フィールドの使用

`required` フィールドを使用した例を次に示します。

```

var workflow = {
 name: 'Configure FC',
 description: 'Configures fibre channel target groups',
 required: '2009.12.25,1-0',
 ...
}

```

あるワークフローに、アプライアンス上にロードされているバージョンより新しいバージョンのソフトウェアが必要な場合は、そのワークフローをアップロードしようとすると失敗し、不一致を説明したメッセージが表示されます。

**ワークフローのバージョン管理** - アプライアンスソフトウェアの必要なバージョンの指定に加えて、ワークフロー自体も `version` フィールドでバージョン管理できます。この文字列は、ワークフローのバージョンのメジャー、マイナー、およびマイクロ番号を示し、同じワークフローの複数のバージョンがマシン上に存在できるようにします。ワークフローをアップロードするとき、同じワークフローの互換性がある、古いバージョンはすべて削除されます。ワークフローは、メジャー番号が同じ場合に互換性があるとみなされ、バージョン番号が低い場合に古いとみなされます。そのため、バージョン「2.1」のワークフローをアップロードすると、バージョン「2.0」(またはバージョン「2.0.1」)の同じワークフローが削除されますが、「1.2」や「0.1」は削除されません。

## アラートアクションでのワークフローの使用

ワークフローは、オプションでアラートとして実行できます。ワークフローをアラートアクションとして使用できるようにするには、その `alert` アクションが `true` に設定されている必要があります。

アラートアクションとして実行される場合、ワークフローは、そのワークフローを作成したユーザーの ID を引き継ぎます。このため、アラートアクションとして使用できるワークフローはすべて、`setid` が `true` に設定されている必要があります。アラートアクションには、次のメンバーを持つ 1 つのオブジェクトパラメータがあります。

表 132 アラートの実行コンテキストの必須メンバー

必須メンバー	タイプ	説明
<code>class</code>	文字列	アラートのクラス。
<code>code</code>	文字列	アラートのコード。
<code>items</code>	オブジェクト	アラートを記述したオブジェクト。
<code>timestamp</code>	日付	アラートの時間。

`parameters` オブジェクトの `items` メンバーには、次のメンバーがあります。

表 133 `items` メンバーの必須メンバー

必須メンバー	タイプ	説明
<code>url</code>	文字列	アラートを記述した Web ページの URL

必須メンバー	タイプ	説明
action	文字列	アラートに対応してユーザーが実行するべきアクション。
impact	文字列	アラートの原因となったイベントの影響。
description	文字列	アラートを記述した、人間が読める形式の文字列。
severity	文字列	アラートの原因となったイベントの重要度。

アラートアクションとして実行されているワークフローは、`audit` 関数を使用して監査ログエントリを生成できます。関連するすべてのデバッグ情報を `audit` 関数を経由して監査ログに生成することをお勧めします。たとえば、クラスタ化された状態にある場合はフェイルオーバーを実行するが、リブートの失敗をすべて監査するワークフローを次に示します。

#### 例 27 リブートの失敗を監査するワークフロー

たとえば、クラスタ化された状態にある場合はフェイルオーバーを実行するが、リブートの失敗をすべて監査するワークフローを次に示します。

```
var workflow = {
 name: 'Failover',
 description: 'Fail the node over to its clustered peer',
 alert: true,
 setid: true,
 execute: function (params) {
 /*
 * To failover, we first confirm that clustering is configured
 * and that we are in the clustered state. We then reboot,
 * which will force our peer to takeover. Note that we're
 * being very conservative by only rebooting if in the
 * AKCS_CLUSTERED state: there are other states in which it
 * may well be valid to failback (e.g., we are in AKCS_OWNER,
 * and our peer is AKCS_STRIPPED), but those states may also
 * indicate aberrant operation, and we therefore refuse to
 * failback. (Even in an active/passive clustered config, a
 * FAILBACK should always be performed to transition the
 * cluster peers from OWNER/STRIPPED to CLUSTERED/CLUSTERED.)
 */
 var uuid = params.uuid;
 var clustered = 'AKCS_CLUSTERED';

 audit('attempting failover in response to alert ' + uuid);

 try {
 run('configuration cluster');
 } catch (err) {
 audit('could not get clustered state; aborting');
 return;
 }

 if ((state = get('state')) != clustered) {
 audit('state is ' + state + '; aborting');
 }
 }
}
```

```

 return;
 }

 if ((state = get('peer_state')) != clustered) {
 audit('peer state is ' + state + '; aborting');
 return;
 }

 run('cd /');
 run('confirm maintenance system reboot');
}
};

```

## スケジュールされたワークフローの使用

ワークフローは、ワークフローのスケジュールを設定し、タイマーイベント経由で開始できます。プロパティ `scheduled` をワークフローオブジェクトに追加して `true` に設定する必要があります。ワークフローがアプライアンスにロードされたあとで CLI を使用してスケジュールを作成することも、オブジェクトワークフローに配列型のプロパティ `schedule` をオブジェクトワークフローに追加することもできます。

各スケジュールエンタリは、次のプロパティで構成されています。

表 134 ワークフロースケジュールのプロパティ

プロパティ	タイプ	説明
NAME	文字列	スケジュールの名前 (システムが生成)
frequency	文字列	minute、halfhour、hour、day、week、month
day	文字列	特定の曜日を指定します。設定できるのは Monday、Tuesday、Wednesday、Thursday、Friday、Saturday、または Sunday です。frequency が week または month に設定されているときに設定できます
hour	文字列	00 - 23 の範囲でスケジュールの時間部分を指定します。frequency が day、week、または month に設定されているときに設定できます。
minute	文字列	00 - 59 の範囲で、スケジュールの分部分を指定します。

## スケジュールされたワークフローの使用

ワークフローがアプライアンスにロードされると、次のように CLI インタフェースを使用してスケジュールを定義できます。

### 例 28 CLI でのスケジュールされたワークフロー

```
dory:> maintenance workflows
dory:maintenance workflows> "select workflow-002'"
dory:maintenance workflow-002> schedules
dory:maintenance workflow-002 schedules>create
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set frequency=day
 frequency = day (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set hour=10
 hour = 10 (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set minute=05
 minute = 05 (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> commit
dory:maintenance workflow-002 schedules> list
NAME FREQUENCY DAY HH:MM
schedule-001 day - 10:05
dory:maintenance workflow-002 schedules> create
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set frequency=week
 frequency = week (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set day=Monday
 day = Monday (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set hour=13
 hour = 13 (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> set minute=15
 minute = 15 (uncommitted)
dory:maintenance workflow-002 schedule (uncommitted)> commit
dory:maintenance workflow-002 schedules> list
NAME FREQUENCY DAY HH:MM
schedule-001 day - 10:05
schedule-002 week Monday 13:15
dory:maintenance workflow-002 schedules>
```

## ワークフロースケジュールのコード化

スケジュールは、オブジェクトワークフローのプロパティとして、ワークフローコードで指定することもできます。ここで使用されるプロパティの構文は、CLI でスケジュールを作成する場合と異なります。ここでは 3 つのプロパティが使用されます。

表 135 ワークフロースケジュールのプロパティ

プロパティ	タイプ	説明
offset	数値	定義された期間の開始時点を指定します
period	数値	スケジュールの頻度を定義します



プロパティ	タイプ	説明
unit	文字列	offset および period の定義で単位として秒と月のどちらを使用するかを指定します

#### 例 29 ワークフロープロパティの使用を示します

次のコード例は、プロパティの使用方法を示しています。インライン演算を使用することで、offset や period の宣言が読みやすくなっていることに注意してください。

```
// Example of using Schedule definitions within a workflow
var MyTextObject = {
 MyVersion: '1.0',
 MyName: 'Example 9',
 MyDescription: 'Example of use of Timer',
 Origin: 'Oracle'
};
var MySchedules = [
 // half hr interval
 { offset: 0, period: 1800, units: "seconds" },
 // offset 2 days, 4hr, 30min , week interval
 {offset: 2*24*60*60+4*60*60+30*60, period: 604800,units: "seconds" }
];
var workflow = {
 name: MyTextObject.MyName,
 description: MyTextObject.MyDescription,
 version: MyTextObject.MyVersion,
 alert: false,
 setid: true,
 schedules: MySchedules,
 scheduled: true,
 origin: MyTextObject.Origin,
 execute: function () {
 audit('workflow started for timer; ');
 }
};
```

オブジェクト MySchedules のプロパティ units は、プロパティ offset および period で使用される単位の種類を指定します。これらは、seconds または month に設定できます。プロパティ period はイベントの頻度を指定し、offset はその期間内の単位を指定します。上記の例では、2 番目のスケジュールの期間が 1 週に設定されていて、2 日目の 4:30 に開始します。プロパティ schedules には複数のスケジュールを定義できます。

この例のオブジェクト MySchedules では、次の 3 つのプロパティが使用されています。

- offset - これは、1970 年 1 月 1 日からの、スケジュールの開始オフセットです。このオフセットは、プロパティ「units」で定義された単位で表されます。
- period - これはスケジュールが繰り返される期間であり、同様にプロパティ「units」で定義された単位で表されます。
- units - これは秒数または月数で定義できます。

週次スケジュールの開始時点は木曜日です。これは、エポックの開始基準として定義されている 1970 年 1 月 1 日が木曜日だったからです。

**例 30** CLI に表示されるワークフロースケジュール

上記の例では、2 番目のスケジュールの期間で 2 日 4 時間 30 分の開始オフセットを使用します。このため、1970 年 1 月 3 日午前 4:30 が開始日になります。スケジュールは毎週土曜日の午前 4:30 に期限なしで繰り返されます。次に、CLI でのスケジュール表示を示します。

```
<small>dory:> maintenance workflows
dory:maintenance workflows> list
WORKFLOW NAME OWNER SETID ORIGIN VERSION
workflow-000 Configure for Oracle Solaris Cluster NFS root false Oracle Corporation
1.0.0
workflow-001 Unconfigure Oracle Solaris Cluster NFS root false Oracle Corporation 1.0.0
workflow-002 Configure for Oracle Enterprise Manager Monitoring root false Sun
Microsystems, Inc. 1.1
workflow-003 Unconfigure Oracle Enterprise Manager Monitoring root false Sun Microsystems,
Inc. 1.0</small>
```

dory:maintenance workflow-002 schedules>

NAME	FREQUENCY	DAY	HH:MM
schedule-000	halfhour	-	--:00
schedule-001	week	Saturday	04:30

## 指定されたドライブタイプに基づくワークシートの作成

指定されたドライブタイプに基づいてワークシートを作成するワークフローの例を次に示します。

**例 31** ワークフローのデバイスタイプの選択

```
var steps = [{
 step: 'Checking for existing worksheet',
 execute: function (params) {
 /*
 * In this step, we're going to see if the worksheet that
 * we're going to create already exists. If the worksheet
 * already exists, we blow it away if the user has indicated
 * that they desire this behavior. Note that we store our
 * derived worksheet name with the parameters, even though
 * it is not a parameter per se; this is explicitly allowed,
 * and it allows us to build state in one step that is
 * processed in another without requiring additional global
 * variables.
 */
 params.worksheet = 'Drilling down on ' + params.type + ' disks';

 try {
 run('analytics worksheets select name="' +
 params.worksheet + '"');
```

```
 if (params.overwrite) {
 run('confirm destroy');
 return;
 }

 throw ('Worksheet called "' + params.worksheet +
 '" already exists!');
} catch (err) {
 if (err.code !== EAKSH_ENTITY_BADSELECT)
 throw (err);
}
}, {
step: 'Finding disks of specified type',
execute: function (params) {
 /*
 * In this step, we will iterate over all chassis, and for
 * each chassis iterates over all disks in the chassis,
 * looking for disks that match the specified type.
 */
 var chassis, name, disks;
 var i, j;

 run('cd /');
 run('maintenance hardware');

 chassis = list();
 params.disks = [];

 for (i = 0; i < chassis.length; i++) {
 run('select ' + chassis[i]);

 name = get('name');
 run('select disk');
 disks = list();

 for (j = 0; j < disks.length; j++) {
 run('select ' + disks[j]);

 if (get('use') == params.type) {
 params.disks.push(name + '/' +
 get('label'));
 }

 run('cd ..');
 }

 run('cd ../../');
 }

 if (params.disks.length === 0)
 throw ('No ' + params.type + ' disks found');
 run('cd /');
}
}, {
step: 'Creating worksheet',
execute: function (params) {
 /*
 * In this step, we're ready to actually create the worksheet
 * itself: we have the disks of the specified type and
 * we know that we can create the worksheet. Note that we
 * create several datasets: first, I/O bytes broken down
 * by disk, with each disk of the specified type highlighted
 */

```

```
* as a drilldown. Then, we create a separate dataset for
* each disk of the specified type. Finally, note that we
* aren't saving the datasets -- we'll let the user do that
* from the created worksheet if they so desire. (It would
* be straightforward to add a boolean parameter to this
* workflow that allows that last behavior to be optionally
* changed.)
*/
var disks = [], i;

run('analytics worksheets');
run('create "' + params.worksheet + '"');
run('select name="' + params.worksheet + '"');
run('dataset');
run('set name=io.bytes[disk]');

for (i = 0; i < params.disks.length; i++)
 disks.push("'" + params.disks[i] + "'");

run('set drilldowns=' + disks.join(', '));
run('commit');

for (i = 0; i < params.disks.length; i++) {
 run('dataset');
 run('set name="io.bytes[disk=' +
 params.disks[i] + ']"');
 run('commit');
}
}
}];

var workflow = {
 name: 'Disk drilldown',
 description: 'Creates a worksheet that drills down on system, ' +
 'cache, or log devices',
 parameters: {
 type: {
 label: 'Create a new worksheet drilling down on',
 type: 'ChooseOne',
 options: ['cache', 'log', 'system'],
 optionlabels: ['Cache', 'Log', 'System']
 },
 overwrite: {
 label: 'Overwrite the worksheet if it exists',
 type: 'Boolean'
 }
 },
 execute: function (params) { return (steps); }
};
```

## BUI を使用したワークフローのアップロード

ワークフローは、プラスアイコンをクリックすることによってアプライアンスにアップロードされ、そのワークフローを指定する行をクリックすることによって実行されます。

図 37 BUI で表示されるワークフロー

NAME ^	DESCRIPTION	VERSION
Clear locks	Clear locks held on behalf of an NFS client	1.0.0
Configure for Oracle Enterprise Manager Monitoring	Sets up environment to be monitored by Oracle Enterprise Manager	1.1
Configure for Oracle Solaris Cluster NFS	Sets up environment for Oracle Solaris Cluster NFS	1.0.0
Unconfigure Oracle Enterprise Manager Monitoring	Removes the artifacts from the appliance used by Oracle Enterprise Manager	1.0
Unconfigure Oracle Solaris Cluster NFS	Removes the artifacts from the appliance used by Oracle Solaris Cluster NFS	1.0.0

## ▼ CLI を使用したワークフローのダウンロード

1. ワークフローは、`download` コマンドを使用してアプライアンスにダウンロードされます。これは、ソフトウェア更新に使用されるメカニズムと同様です。

```
dory:maintenance workflows> download
dory:maintenance workflows download (uncommitted)> get
 url = (unset)
 user = (unset)
 password = (unset)
```

2. そのワークフローに有効な URL になるように「`url`」プロパティを設定する必要があります。これはネットワークにローカル、またはインターネット経由のどちらでもかまいません。URL には、HTTP (「`http://`」で始まる) または FTP (「`ftp://`」で始まる) のどちらかを指定できます。ユーザー認証が必要な場合は、URL の一部にユーザー認証を含めることも (たとえば、「`ftp://myusername:mypasswd@myserver/export/foo`」)、URL からユーザー名とパスワードを除き、代わりにユーザープロパティとパスワードプロパティを設定することもできます。

```
dory:maintenance workflows download (uncommitted)> set url=
 ftp://foo/example1.akwf
 url = ftp://foo/example1.akwf
dory:maintenance workflows download (uncommitted)> set user=bmc
 user = bmc
dory:maintenance workflows download (uncommitted)> set password
Enter password:
 password = *****
dory:maintenance workflows download (uncommitted)> commit
Transferred 138 of 138 (100%) ... done
```

## ▼ CLI を使用したワークフローの一覧表示

1. ワークフローを一覧表示するには、`maintenance workflows` コンテキストから `list` コマンドを使用します。

```
<small>dory:maintenance workflows> list
WORKFLOW NAME OWNER SETID ORIGIN VERSION
workflow-000 Configure for Oracle Solaris Cluster NFS root false Oracle Corporation 1.0.0
workflow-001 Unconfigure Oracle Solaris Cluster NFS root false Oracle Corporation 1.0.0
workflow-002 Configure for Oracle Enterprise Manager Monitoring root false Sun Microsystems, Inc. 1.1
workflow-003 Unconfigure Oracle Enterprise Manager Monitoring root false Sun Microsystems, Inc. 1.0</small>
```

2. ワークフローを表示するには、**maintenance workflows** コンテキストから **show** コマンドを使用します。

```
dory:maintenance workflows> select workflow-001
dory:maintenance workflow-001> show
Properties:
 name = Configure for Oracle Solaris Cluster NFS
description = Sets up environment for Oracle Solaris Cluster NFS
 owner = root
 origin = Oracle Corporation
 setid = false
 alert = false
 version = 1.0.0
 scheduled = false
```

3. ワークフローを選択するには、**select** コマンドを使用します。

```
dory:maintenance workflows> select workflow-000
dory:maintenance workflow-000>
```

4. ワークフローのプロパティを取得するには、選択されたワークフローのコンテキスト内から **get** コマンドを使用します。

```
dory:maintenance workflow-000> get
 name = Hello world
description = Bids a greeting to the world
 owner = root
 origin = <local>
 setid = false
 alert = false
 scheduled = false
```

## ▼ CLI を使用したワークフローの実行

1. ワークフローを実行するには、選択されたワークフローのコンテキスト内から **execute** コマンドを使用します。ワークフローがパラメータを取らない場合は、単純に実行されます。

```
dory:maintenance workflow-000> execute
hello world!
```

2. ワークフローがパラメータを取る場合、コンテキストは、パラメータを指定する必要のあるキャプティブコンテキストになります。

```
dory:maintenance workflow-000> execute
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> get
```

```
type = (unset)
overwrite = (unset)
```

- 最初に必要なパラメータを設定しないでワークフローの実行をコミットしようとすると、常に明示的に失敗します。

```
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> commit
error: cannot execute workflow without setting property "type"
```

- ワークフローを実行するには、指定されたパラメータを設定したあと、`commit` コマンドを使用します。

```
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> set type=system
type = system
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> set overwrite=true
overwrite = true
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> commit
```

- ワークフローに指定された手順がある場合は、それらの手順が CLI に表示されます。次に例を示します。

```
dory:maintenance workflow-000 execute (uncommitted)> commit
Checking for existing worksheet ... done
Finding disks of specified type ... done
Creating worksheet ... done
```

## ▼ CLI を使用したワークフローの監査

すべてのワークフローには、システムによって計算されるチェックサムプロパティがあります。このチェックサムは、ワークフローの内容の SHA-256 ダイジェストです。ワークフローが変更されたかどうかを判断するには、ワークフローのチェックサムを以前のチェックサムと比較します。

- ワークフローのチェックサムプロパティを取得するには、`maintenance workflows` コンテキストから `get checksum` コマンドを使用します。

```
hostname:maintenance workflows> select workflow-001
hostname:maintenance workflow-001> get checksum
checksum = 15f4188643d7add37b5ad8bda6d9b4e7210f1cd890a73df176382e800aec
```





## 統合

---

Oracle ZFS Storage Appliance には、多種多様なアプリケーションホストと通信するためのデータプロトコルのフルスイートが用意されています。アプリケーションのパフォーマンスを向上させ、アプリケーション環境とより密に統合するには、次を参照してください。

- ホワイトペーパーおよびソリューションの概要 (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-unified-storage/documentation/index.html>)
- Oracle ZFS Storage Appliance プラグイン (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-unified-storage/downloads/zfssa-plugins-1489830.html>)
- NAS ストレージのドキュメント (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-unified-storage/documentation/index.html>)

標準プロトコルを使用して最適な結果を達成する方法の例は、652 ページの「Symantec Dynamic Multi-Pathing および Storage Foundation での FC サポート」を参照してください。

一部のアプリケーションでは、アプリケーションホストにソフトウェアをインストールすると相互運用性が強化されます。次の記事では、ソフトウェア統合によってストレージ管理者の操作向上を実現する方法について概要を説明しています。包括的なドキュメントが各ダウンロードに同梱されています。

- 649 ページの「Oracle Solaris Cluster Geographic Edition 用のアプライアンスプラグイン」
- 649 ページの「Oracle Solaris Cluster 用のアプライアンスネットワークファイルシステムプラグイン」
- 651 ページの「ボリュームシャドウコピーサービスソフトウェア用のアプライアンスプラグインプロバイダ」
- 649 ページの「Oracle Enterprise Manager System Monitoring のアプライアンスプラグイン」
- 651 ページの「Oracle Virtual Machine Storage Connect 用のアプライアンスプラグイン」
- 653 ページの「Appliance Replication Adapter for VMware Site Recovery Manager」
- 647 ページの「Oracle Intelligent Storage Protocol」

Oracle Snap Management Utility for Oracle Database を使用すると、データベース管理者は、Oracle ZFS Storage Appliance 用の Oracle データベースを効率的にプロビジョニング、クローニング、バックアップ、および復元することによって、データの保護、可用性、および迅速なテストを実現できます。詳細は、[Oracle Snap Management Utility for Oracle Database \(https://www.oracle.com/storage/nas/snap/index.html\)](https://www.oracle.com/storage/nas/snap/index.html) を参照してください。

Oracle ZFS Storage Appliance はほかの Oracle 製品とシームレスに統合されるように設計されています。以降のセクションでは、Oracle ZFS Storage Appliance を Oracle データベースファイルのターゲットとして、また Oracle Exadata Database Machine および Oracle SuperCluster のバックアップ先として構成する方法について説明します。

- [618 ページの「Oracle Exadata Database Machine バックアップ」](#)
- [618 ページの「Oracle Exadata Database Machine バックアップ」](#)
- [626 ページの「Oracle SuperCluster のバックアップ」](#)

## Oracle ZFS Storage Appliance の Oracle データベースクライアント用の構成

Oracle ZFS Storage Appliance には、Oracle データベースクライアントと統合するように設計された Oracle Hybrid Columnar Compression (HCC) や Oracle Intelligent Storage Protocol (OISP) などの数多くの独自の機能が用意されています。

これらの機能を有効にするため、Oracle ZFS Storage Appliance の SNMP サービスを、データベースクライアントによる SNMP 問合せが可能になるように構成する必要があります。クライアントはこのメカニズムを使用して、ストレージデバイスを ZFS Storage Appliance として識別します。データベースクライアントのホスト名または IP アドレスをトラップの宛先として指定する方法は、[326 ページの「アプライアンスのステータスを表示するための SNMP の構成 \(BUI\)」](#) を参照してください。

アプライアンス SNMP サービスが正しく構成されていることを確認するには、クライアントシステムから <host> をアプライアンスの名前または IP アドレスに置き換えて、snmpget (1) コマンドを実行します。

```
-bash-4.1$ snmpget -v1 -c public <host> .1.3.6.1.4.1.42.2.225.1.4.2.0
SNMPv2-SMI::enterprises.42.2.225.1.4.2.0 = STRING: "Oracle ZFS Storage Appliance"
```

## Oracle Exadata Database Machine バックアップ

ネイティブな QDR InfiniBand および 10Gb Ethernet 接続オプションを搭載している Oracle ZFS Storage Appliance は、Oracle Exadata の信頼性あるバックアップに最適で

す。コマンド行ツールを使用した配備用に Oracle Exadata Backup Configuration Utility が提供されています。または以降のセクションの手順を使用して、アプライアンスを手動で構成することもできます。

- [Exadata 用のアプライアンスの構成](#)
- [アプライアンス用の Exadata の構成](#)

Oracle Exadata からバックアップを実行する方法など、包括的なドキュメントがユーティリティーに同梱されています。手動かユーティリティーの使用かにかかわらず、それらの設定のほかに、アプライアンスのネットワークおよびストレージプールの構成も必要です。

Oracle Exadata のバックアップ先として ZFS Storage Appliance を使用方法の詳細は、NAS ストレージのドキュメントページで、Oracle ZFS Storage Appliance を使用した Oracle Exadata の保護: 構成のベストプラクティスに関するホワイトペーパーを参照してください。また、セットアップの複雑さを最小限に抑えるために、Oracle ZFS Storage ZS3-BA としてディスクセルフに事前にラックされている Oracle ZFS Storage ZS3-4 クラスタも使用可能です。このアプライアンスを Oracle Exadata と統合する方法は、前述のプロセスと同一です。

詳細は NAS ストレージのドキュメントページで、Oracle ZFS Storage Appliance を使用した Oracle Exadata の保護: 構成のベストプラクティスに関するホワイトペーパーを参照してください。

## Exadata 用のアプライアンスの構成

次の手順を使用して、Exadata 用にアプライアンスを構成します。

- [アプライアンスの構成](#)
- [アプライアンスプールの構成](#)
- [アプライアンスシェアの構成](#)
- [Oracle RMAN および Oracle Database インスタンスの構成](#)
- [アプライアンス用の Exadata の構成](#)

### ▼ アプライアンスネットワークの構成

このセクションでは、IP ネットワークマルチパス (IPMP) グループを構成する方法、および ZFS Storage Appliance でルーティングを構成する方法について説明します。

---

**注記** - Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、このセクションの説明に従ってネットワークを構成してください。詳細は、ベストプラクティスのホワイトペーパーを参照してください。

---

追加の IB 接続を必要としている場合は、IB HCA をさらにインストールして構成できます。詳細は、[Oracle ZFS Storage Appliance 顧客サービスマニュアル](#)に記載されたコントローラのハードウェア概要を参照してください。

このセクションの原則は、ネットワーク構成を ibp インタフェースではなく ixgbe インタフェースに適用することで、10G ビット Ethernet 実装に適用できます。10G ビット Ethernet 実装は、アクティブ/アクティブ IPMP として構成できます。ZFS Storage Appliance が Oracle Exadata とは異なるサブネット上にある場合は、ZFS Storage Appliance から Oracle Exadata への静的ルートを作成することが必要な場合があります。詳細は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

1. **ZFS Storage Appliance が Oracle Exadata に接続されていることを確認します。**
2. **ibp0、ibp1、ibp2、および ibp3 をアドレス 0.0.0.0/8 (IPMP に必要)、接続モード、およびパーティションキー ffff で構成します。Oracle Exadata システムで使用されるパーティションキーを指定するには、root ユーザーとしてコマンド `># cat /sys/class/net/ib0/pkey` を実行します**
3. **アクティブ/スタンバイ IPMP グループを ibd0 および ibd3 で構成します (ibd0 がアクティブで ibd3 がスタンバイ)。**
4. **アクティブ/スタンバイ IPMP グループを ibd1 および ibd2 で構成します (ibd2 がアクティブで ibd1 がスタンバイ)。**
5. **アダプティブルレーティングを有効にして、同じサブネット上の複数の IP アドレスが同じヘッドに所有されているときに、トラフィックが適切に負荷分散されるようにします。これは、クラスタのフェイルオーバーのあとで発生します。**

## アプライアンスプールの構成

このセクションでは、データ保護およびパフォーマンスの要件に基づいて Oracle Recovery Manager (RMAN) のバックアップおよび復元操作に ZFS Storage Appliance の最適なプール構成を決定するために、設計に関する考慮事項について説明します。

---

**注記** - Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、このセクションの説明に従ってプールを構成してください。詳細は、ベストプラクティスのホワイトペーパーを参照してください。

---

システム計画担当者は、次のガイドラインに基づいてプールの保護を検討する必要があります。

- 汎用および容量用に最適化されたシステムには、パリティに基づく保護を使用します。

- ランダムなワークロードの対象となるシステムの1ドライブ障害から保護するには RAID-Z。
- ストリーミングのワークロードのみであるシステムの2ドライブ障害から保護するには RAID-Z2。
- 増分で適用されるバックアップと高パフォーマンスには、ミラー化を使用します。
- パフォーマンス要件に基づいてプールを構成します。
  - 管理用に最適化されたシステムには、1つのプールを構成します。
  - パフォーマンス用に最適化されたシステムには、2つのプールを構成します。各トレイのドライブの半分を使用して、2つのプールシステムを構成してください。
- ログデバイスの保護を構成します。
  - RAID-Z およびミラー化プール構成にはログデバイスをストライプ化します。
  - RAID-Z2 プール構成にはログデバイスをミラー化します。

---

注記 - Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、次のトピック、[アプライアンス用の Exadata の構成](#)に進みます。

---

## アプライアンスシェアの構成

ZFS Storage Appliance のシェアでは、デフォルトオプションを汎用ワークロードの開始点として使用できます。アプライアンスのシェアは、次のようにして Oracle RMAN バックアップおよび復元操作に最適化できます。

- 単一データベースのバックアップおよび復旧に関連するすべてのシェアを格納するためのプロジェクトを作成します。2 プール実装の場合は、2つのプロジェクト(各プールに1つ)を作成します。
- Oracle RMAN のバックアップおよび復元ワークロードをサポートするシェアを次の値を使用して構成します。
  - データベースレコードサイズ (recordsize): 128K バイト
  - 同期書き込みバイアス (logbias): 「スループット」(バックアップセットおよびイメージコピーを処理する場合)または「待機時間」(増分で適用されるバックアップの場合)
  - デバイス使用をキャッシュ (secondary cache): 「なし」(バックアップセットの場合)または「すべて」(増分で適用されるバックアップまたはデータベースのクローン操作をサポートする場合)
  - データ圧縮 (compression): 「オフ」(パフォーマンスが最適化されたシステムの場合)、「LZJB」または「gzip-2」(容量が最適化されたシステムの場合)
  - プールごとのシェアの数: 1 (管理が最適化されたシステムの場合)、2 または 4 (パフォーマンスが最適化されたシステムの場合)

Oracle Exadata のバックアップおよび復元をサポートするために使用されるシェアに対して、ユーザー要件の要求に従い、追加のシェア構成オプション (高次の gzip 圧縮やレプリケーションなど) を適用できます。

追加の ZFS Storage Appliance データサービスを実装するユーザーは、前述のプラクティスから逸脱する部分の影響を検証するために、実装固有のテストを検討する必要があります。

## Oracle RMAN および Oracle Database インスタンスの構成

Oracle RMAN は、Oracle Exadata の内容を保護するために不可欠なコンポーネントです。Oracle RMAN を使用すると、ZFS Storage Appliance に Oracle Exadata の内容のバックアップセット、イメージコピー、増分更新されたバックアップを作成できます。Oracle Exadata から ZFS Storage Appliance への Oracle RMAN バックアップのパフォーマンスを最適化するために、データベース管理者は次のベストプラクティスを適用する必要があります。

- データベースマシンのノード全体に均等に Oracle RMAN チャンネルを負荷分散します。
- ZFS Storage Appliance のシェアおよびコントローラ全体に均等に Oracle RMAN チャンネルを負荷分散します。

ZFS Storage Appliance に対する Oracle RMAN チャンネルのバッファリングを最適化するために、隠しインスタンスパラメータのいくつかについて、値を調整できます。Oracle Database 11g リリース 2 では、次のパラメータを調整できます。

- バックアップおよび復元セットの場合:
  - `_backup_disk_bufcnt=64`
  - `_backup_disk_bufsz=1048576`
- イメージコピーのバックアップおよび復元の場合:
  - `_backup_file_bufcnt=64`
  - `_backup_file_bufsz=1048576`

これらのパラメータの調整や Oracle データベースソフトウェアの以前のバージョンでの同等のパラメータの調整に関する詳細は、[My Oracle Support \(https://support.oracle.com\)](https://support.oracle.com) でバッファメモリーパラメータを使用した RMAN パフォーマンスの調整に関する記事番号 1072545.1 を参照してください。

Oracle Direct NFS (dNFS) は、高パフォーマンスの NFS クライアントで、Oracle RMAN のバックアップおよび復元操作に優れたパフォーマンスを発揮します。バックアップおよび復元操作で最大限のスループットを求めるユーザーは、dNFS を構成する必要があります。

## アプライアンス用の Exadata の構成

Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、手順 4 および手順 7 を除き、すべての手順がすでに実行されています。

- Exadata 用のアプライアンスの構成
- シェアのためのディレクトリ構造の構成
- /etc/fstab ファイルの更新
- init.d サービスの作成
- アプライアンスのエクスポートにアクセスするための oranfstab の更新
- ホスト上にシェアのマウント
- マウントされたシェアの所有者の設定

### ▼ シェアのためのディレクトリ構造の構成

- ホスト上にシェアをマウントするためのマウントポイントを次のように設定します。

```
mkdir -p /zfssa/dbname/backup1
mkdir -p /zfssa/dbname/backup2
mkdir -p /zfssa/dbname/backup3
mkdir -p /zfssa/dbname/backup4
```

### ▼ /etc/fstab ファイルの更新

下記のリストで UNIX の改行エスケープ文字 (\) は、1 行分のコードが 2 行目に折り返していることを表します。折り返された 1 行を fstab に入力するときは、\ 文字を削除して空白で区切られた 2 つの行の断片を 1 行に結合してください。

1. /etc/fstab ファイルを更新するには、次のいずれかのオプションを使用します。

1 プール構成の場合:

```
192.168.36.200:/export/dbname/backup1 /zfssa/dbname/backup1 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
192.168.36.200:/export/dbname/backup2 /zfssa/dbname/backup2 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
192.168.36.200:/export/dbname/backup3 /zfssa/dbname/backup3 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
192.168.36.200:/export/dbname/backup4 /zfssa/dbname/backup4 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
```

2. 2 プール構成の場合:

```
192.168.36.200:/export/dbname/backup1 /zfssa/dbname/backup1 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
192.168.36.201:/export/dbname/backup2 /zfssa/dbname/backup2 nfs \

 rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
```

```
192.168.36.200:/export/dbname/backup3 /zfssa/dbname/backup3 nfs \

rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
192.168.36.201:/export/dbname/backup4 /zfssa/dbname/backup4 nfs \

rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,tcp,nfsvers= \
 3,timeo=600 0 0
```

## ▼ init.d サービスの作成

1. 次の適切なオプションを使用して、init.d サービスを作成します。

```
!/bin/sh
#
zfssa_dbname: Mount ZFSSA project dbname for database dbname
#
chkconfig: 345 61 19
description: mounts ZFS Storage Appliance shares
#

start()
{
 mount /zfssa/dbname/backup1
 mount /zfssa/dbname/backup2
 mount /zfssa/dbname/backup3
 mount /zfssa/dbname/backup4
 echo "Starting $prog: "
}

stop()
{
 umount /zfssa/dbname/backup1
 umount /zfssa/dbname/backup2
 umount /zfssa/dbname/backup3
 umount /zfssa/dbname/backup4
 echo "Stopping $prog: "
}

case "$1" in
 start)
 start
 ;;
 stop)
 stop
 ;;
 restart)
 stop
 start
 ;;
 status)
 mount
 ;;
 *)
 echo "Usage: $0 {start|stop|restart|status}"
 exit 1
esac
```

2. (オプション) 次を入力して、init.d サービスのブート時起動を有効にします。

```
chkconfig zfssa_dbname on
```

3. (オプション) サービスコマンドを使用してサービスを手動で起動および停止します。



```
service zfssa_dbname start
service zfssa_dbname stop
```

## ▼ アプライアンスのエクスポートにアクセスするための oranfstab の更新

Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、オプションでこの手順を実行できます。

1. **ZFS Storage Appliance** のエクスポートにアクセスするように **oranfstab** ファイルを更新するには、次の適切なオプションを使用します。1 プール構成の場合:

```
server: 192.168.36.200
path: 192.168.36.200
export: /export/dbname/backup1 mount: /zfssa/dbname/backup1
export: /export/dbname/backup2 mount: /zfssa/dbname/backup2
export: /export/dbname/backup3 mount: /zfssa/dbname/backup3
export: /export/dbname/backup4 mount: /zfssa/dbname/backup4
```

2. 2 プール構成の場合:

```
server: 192.168.36.200
path: 192.168.36.200
export: /export/dbname/backup1 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup1
export: /export/dbname/backup3 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup3
server: 192.168.36.201
path: 192.168.36.201
export: /export/dbname/backup2 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup2
export: /export/dbname/backup4 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup4
```

## ▼ ホスト上にシェアのマウント

1. ホスト上にシェアをマウントするには、次の2つのうちいずれかのオプションを使用します。

```
service mount_dbname start
```

2. または

```
dcli -l root -g /home/oracle/dbs_group service mount_dbname start
```

## ▼ マウントされたシェアの所有者の設定

ORACLE\_HOME のアクセス権設定と一致するように、マウントされたシェアのアクセス権の設定を変更します。この例では、ユーザーおよびグループの所有者が **oracle:dba** に設定されています。

Oracle Exadata Backup Configuration Utility を使用した場合は、オプションで手順 2 を実行できます。手順 1 はすでに実行されています。

1. 次の 2 つのうちいずれかのオプションを入力します。<br /># chown oracle:dba /zfssa/dbname/\*<br /> または <br /># dcli -l root -g /home/oracle/dbs\_group chown oracle:dba/zfssa/dbname/\*
2. 次のいずれかのオプションを使用して Oracle Database インスタンスを再起動して、oranfstab ファイルに対する変更を有効にします。
3. 一度に 1 つのインスタンスを再起動します (順次アップグレード)。

#### 例 32 一度に 1 つのインスタンスの再起動

```
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname1
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname1
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname1
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname2
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname2
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname3
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname3
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname4
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname4
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname5
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname5
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname6
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname6
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname7
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname7
$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname8
$ srvctl start instance -d dbname -i dbname8
```

データベース全体を再起動します。例:

```
$ srvctl stop database -d dbname
$ srvctl start database -d dbname
```

## Oracle SuperCluster のバックアップ

ネイティブな QDR InfiniBand および 10Gb Ethernet 接続オプションを搭載している ZFS Storage Appliance は、Oracle SPARC SuperCluster の信頼性あるバックアップに最適です。以降のセクションの手順を使用してシステムを構成します。

- [SuperCluster のバックアップのためのアプライアンスの構成](#)
- [アプライアンスのバックアップのための Oracle SPARC SuperCluster の構成](#)

Oracle SPARC SuperCluster のバックアップ先として ZFS Storage Appliance を使用する方法の詳細は、NAS ストレージのドキュメントページで、Oracle SPARC SuperCluster

を使用した Sun ZFS Backup Appliance の構成に関するホワイトペーパーを参照してください。また、セットアップの複雑さを最小限に抑えるために、Oracle ZFS Storage ZS3-BA としてディスクシェルフに事前にラックされている Oracle ZFS Storage ZS3-4 クラスタも使用可能です。このアプライアンスを Oracle SPARC SuperCluster と統合する方法は、前述のプロセスと同一です。

## SuperCluster のバックアップのためのアプライアンスの構成

この手順では、Oracle SPARC SuperCluster で ZFS Storage Appliance をバックアップに使用するために構成する場合の一般的な手順について説明します。詳細は NAS ストレージのドキュメントページで、Oracle SPARC SuperCluster を使用した Sun ZFS Backup Appliance の構成に関するホワイトペーパーを参照してください。

- [627 ページの「ZFS Storage Appliance InfiniBand データリンクの構成」](#)
- [628 ページの「ZFS Storage Appliance を追加する Oracle SPARC SuperCluster InfiniBand スイッチの構成」](#)
- [631 ページの「シングル IP 接続用の ZFS Storage Appliance ネットワークの構成」](#)
- [632 ページの「アクティブ/アクティブ構成用の ZFS Storage Appliance ネットワークの構成」](#)
- [633 ページの「ZFS Storage Appliance ストレージプールの構成」](#)
- [634 ページの「ZFS Storage Appliance のシェアの構成」](#)
- [635 ページの「ZFS Storage Appliance DTrace Analytics の構成」](#)
- [636 ページの「クライアント NFS マウントの構成」](#)
- [636 ページの「Solaris 11 ネットワークおよびカーネルの調整」](#)
- [636 ページの「Oracle Direct NFS \(dNFS\) の構成」](#)
- [638 ページの「Oracle RMAN バックアップおよび復元用の Oracle Database インスタンスの調整」](#)
- [640 ページの「Oracle RMAN 操作の専用サービスの作成」](#)
- [640 ページの「Oracle RMAN の構成」](#)
- [644 ページの「アプライアンスのバックアップのための Oracle SPARC SuperCluster の構成」](#)

### ▼ ZFS Storage Appliance InfiniBand データリンクの構成

このセクションの手順に従って、各 ZFS Storage Appliance InfiniBand 接続を構成します。次の手順では、この手順の間に記録する InfiniBand HBA ポートの 8 つの GUID を使用して、Oracle SPARC SuperCluster InfiniBand スイッチを構成します。

1. **NAS ストレージのドキュメントページにある、Oracle SPARC SuperCluster を使用した Sun ZFS Backup Appliance の構成に関するホワイトペーパーの説明に従って、ZFS Storage Appliance を Oracle SPARC SuperCluster に接続します。**
2. ヘッド 1 のブラウザユーザーインターフェース (BUI) にログインして、「構成」>「ネットワーク」に移動します。
3. データリンクの横のプラスアイコンをクリックします。「ネットワークデータリンク」ダイアログボックスが開きます。
4. 次のようにダイアログボックスの操作を完了します。
  - 「IB パーティション」ボックスにチェックマークを付けます。
  - データリンク名にわかりやすい名前を入力します。
  - 「パーティションキー」を「8503」に設定します。
  - 「リンクモード」に「接続済みモード」を選択します。
  - 「LACP アグリゲーション」ボックスにチェックマークを付けしないでください。
  - 「パーティションデバイス」の「ibp0」を選択します。
  - GUID 番号 (たとえば、21280001ef43bb) を記録して、「適用」をクリックします。
5. 残りの各 InfiniBand インタフェース (ibp1、ibp2、および ibp3) に対して段階 3 および 4 を繰り返します。
6. ヘッド 2 に対して段階 2 から 5 を繰り返します。

## ▼ ZFS Storage Appliance を追加する Oracle SPARC SuperCluster InfiniBand スイッチの構成

この手順では、ZFS Storage Appliance Infiniband HBA ポートの GUID を、既存の Oracle SPARC SuperCluster InfiniBand 構成に追加します。これらのポートを追加してパーティションキーの 8503 を使用することで、2つのデバイス間の通信を行うことができます。

1. **Oracle SPARC SuperCluster InfiniBand スパインスイッチに root としてログオンします。デフォルトでは、スパインスイッチには <sscid>sw-ib1 (<sscid> は Oracle SPARC SuperCluster システム全体に与えられる接頭辞名) のホスト名が付けられます。次の例では、<sscid> は aiessc です。**

```
login as: root
root@aiesscsw-ib1's password:
Last login: Tue Sep 25 08:19:01 2013 from dhcp-brm-b15-204-3e
east-10-135-75-254.usdhcp.oraclecorp.com
```

2. コマンド `enablesm` を入力して、スイッチで **Subnet Manager** が実行されていることを確認します (またはこのコマンドにより **Subnet Manager** が起動します)。

```
[root@aiesscsw-ib1 ~]# enablesm
opensm (pid 15906) is already running...
Starting partitiond daemon
/usr/local/util/partitiond is already running
(You may also perform a 'restart' if wanted)
```

3. コマンド `getmaster` を入力して、これが構成のマスタースイッチであることを確認します。スパインスイッチでマスタースイッチが実行されていない場合は、ログアウトして、指定したマスタースイッチにログインして残りの手順を行います。

```
[root@aiesscsw-ib1 ~]# getmaster
Local SM enabled and running
20130913 10:16:51 Master SubnetManager on sm lid 13 sm guid
0x2128e8ac27a0a0 : SUN DCS 36P QDR aiesscsw-ib1.us.oracle.com
[root@aiesscsw-ib1 ~]#
```

4. 説明されているバックアップ手順 ([http://docs.oracle.com/cd/E26698\\_01/index.html](http://docs.oracle.com/cd/E26698_01/index.html)) に従って、スイッチ構成をバックアップします。

5. コマンド `smpartition list active` を入力して、パーティションキー `0x0503` がパーティション名「sto」に割り当てられていることを確認します (`sto = 0x0503`)。ZFS Storage Appliance データリンクではパーティションキーが `8503` に設定されましたが、InfiniBand スイッチでは `0503` と報告されます。InfiniBand プロトコルは自身で使用するために 16 進パーティションキー (pkey) の最上位ビット (`0x8000`) を予約するため、これは意図的なものです。したがって、pkeys の `0x8503` と `0x0503` は同じです。

```
[root@aiesscsw-ib1 ~]# smpartition list active
Sun DCS IB partition config file
This file is generated, do not edit
#! version_number : 11
Default=0x7fff, ipoib : ALL_CAS=full, ALL_SWITCHES=full, SELF=full;
SUN_DCS=0x0001, ipoib : ALL_SWITCHES=full;
ic1s10 = 0x0501, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef30f7,
0x0021280001ef33bf,
0x0021280001ef30b7,
0x0021280001ef314b;
ic2s10 = 0x0502, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef30f8,
0x0021280001ef33c0,
0x0021280001ef30b8,
0x0021280001ef314c;
sto = 0x0503, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef43f8,
0x0021280001ef43b7,
0x0021280001cf90c0,
0x0021280001ef43bb,
...more...
```

6. ZFS Storage Appliance を InfiniBand 構成に追加します。

7. コマンド `smpartition start` を入力して、再構成セッションを開始します。

```
smpartition start

[root@ailesscsw-ib1 ~]# smpartition start
```

8. コマンド `smpartition add` を入力して、8 つの新しい GUID を構成に追加します。

```
smpartition add -n sto -port <GUID1> <GUID2> <GUID3> ... <GUID8>

[root@ailesscsw-ib1 ~]# smpartition add -n sto -port
21280001ef43bb 21280001ef43bc 21280001cf90bf 21280001cf90c0
21280001ef43f7 21280001ef43f8 21280001ef43b7 21280001ef43b8
```

9. コマンド `smpartition list modified` を入力して、新しい GUID が正しく追加されていることを確認します。

```
smpartition list modified

[root@ailesscsw-ib1 ~]# smpartition list modified
Sun DCS IB partition config file
<nowki># This file is generated, do not edit
#! version_number : 11
Default=0x7fff, ipoib : ALL_CAS=full, ALL_SWITCHES=full, SELF=
full;
SUN_DCS=0x0001, ipoib : ALL_SWITCHES=full;
ic1s10 = 0x0501, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef30f7,
0x0021280001ef33bf,
0x0021280001ef30b7,
0x0021280001ef314b;
ic2s10 = 0x0502, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef30f8,
0x0021280001ef33c0,
0x0021280001ef30b8,
0x0021280001ef314c;
sto = 0x0503, ipoib, defmember=full:
0x0021280001ef43f8,
0x0021280001ef43b7,
0x0021280001cf90c0,
0x0021280001ef43bb,
0x0021280001ef43bc,
0x0021280001cf90bf,
0x0021280001ef43b8,
0x0021280001ef43f7,
0x0021280001ef3048,
0x0021280001ef30af,
0x0021280001ef30f8,
0x0021280001ef30f7,
0x0021280001ef33c0,
0x0021280001ef33bf,
0x0021280001ef30cc,
0x0021280001ef342b,
0x0021280001ef30b8,
0x0021280001ef30b7,
0x0021280001ef314c,
0x0021280001ef314b,
0x0021280001efec65,
0x0021280001efec66,
0x0021280001efecb1,
```

```
0x0021280001efecb2;
```

10. コマンド `smpartition commit` を入力して新しい構成を適用し、構成内のすべての InfiniBand スイッチに構成の変更を伝播します。

```
smpartition commit

[root@aiesscsw-ib1 ~]# smpartition commit
[root@aiesscsw-ib1 ~]#
```

11. InfiniBand スイッチからログオフします。
12. [Sun Datacenter InfiniBand Switch のドキュメント \(http://docs.oracle.com/cd/E26698\\_01/index.html\)](http://docs.oracle.com/cd/E26698_01/index.html)に記載されているバックアップ手順に従って、InfiniBand 構成をバックアップします。

## ▼ シングル IP 接続用の ZFS Storage Appliance ネットワークの構成

この構成は、外部リーフスイッチのない Oracle SPARC SuperCluster T5 にのみ使用します。最適なフェイルオーバーおよびパフォーマンスのためには、その他すべての構成でアクティブ/アクティブ構成 (次のセクション) を使用します。

次の手順を使用してポート 1 に目的の IP アドレスを設定することで、ネットワーク接続およびシンプルクラスタフェイルオーバー用の ZFS Storage Appliance InfiniBand ポートを構成します。

1. ヘッド 1 の BUI にログオンして、「構成」>「ネットワーク」に移動します。
2. インタフェースの横のプラスアイコンをクリックします。「ネットワークインタフェース」ダイアログボックスが開きます。
3. 次のようにダイアログボックスの操作を完了します。
  - ネットワークインタフェースのわかりやすい名前を入力します。
  - 「インタフェースを有効化」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「管理を許可」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「IPv4 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「構成」メニューで「静的アドレスリスト」が選択されていることを確認します。
  - その下のボックスに、目的の IP アドレスと適切なネットマスクを入力します。
  - 「IPv6 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていないことを確認します。
  - `ibp0` のデータリンクを選択して、「適用」をクリックします。
4. データリンクとして `ibp2` を使用して、ヘッド 2 で段階 1 から 3 を繰り返します。

## ▼ アクティブ/アクティブ構成用の ZFS Storage Appliance ネットワークの構成

ZFS Storage Appliance で IP マルチパス用の InfiniBand ポートを構成します。インタフェースはアクティブ/アクティブ構成で実行されるため、プライベートストレージサブネット上で各 ZFS Storage Appliance ヘッド用に 4 つの IP アドレス (つまり合計で 8 つのアドレス) が必要です。

### 1. ヘッド 1 で IPMP インタフェースを構成します。

- ヘッド 1 の BUI にログオンして、「構成」>「ネットワーク」に移動します。
- インタフェースの横のプラスアイコンをクリックします。「ネットワークインタフェース」ダイアログボックスが開きます。
- 次のようにダイアログボックスの操作を完了します。
  - IPMP ネットワークインタフェースのわかりやすい名前を入力します。
  - 「インタフェースを有効化」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「管理を許可」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「IPv4 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「構成」メニューで「静的アドレスリスト」が選択されていることを確認します。
  - 空の 4 つのボックスが表示されるように、空のボックスの横のプラス記号を 3 回クリックします。
  - 空の各ボックスに、InfiniBand 接続用に予約されている IP アドレスの 1 つを、それぞれの /24 ネットマスク指定とともに入力します。ベストプラクティスとして、ブロックの連続する IP アドレスを使用するのではなく、1 つおきの IP アドレス (たとえば、すべて奇数またはすべて偶数) を使用します。
  - 「IPv6 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていないことを確認します。
  - 「IP マルチパスグループ」ボックスにチェックマークを付けます。
  - データリンク `ibp0` および `ibp3` に対応するインタフェースの横のボックスにチェックマークを付けます。
  - 2 つのインタフェースのそれぞれが「アクティブ」に設定されていることを確認して、「適用」をクリックします。
- 「構成」>「ネットワーク」から「ルーティング」をクリックします。
- 「適応可能」に対応するマルチホーミングモデルをクリックします。

### 2. ヘッド 2 で IPMP インタフェースを構成します。

- ヘッド 2 の BUI にログオンして、「構成」>「ネットワーク」に移動します。
- インタフェースの横のプラスアイコンをクリックします。「ネットワークインタフェース」ダイアログボックスが開きます。
- 次のようにダイアログボックスの操作を完了します。



- IPMP ネットワークインタフェースのわかりやすい名前を入力します。
  - 「インタフェースを有効化」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「管理を許可」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「IPv4 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていることを確認します。
  - 「構成」メニューで「静的アドレスリスト」が選択されていることを確認します。
  - 空の 4 つのボックスが表示されるように、空のボックスの横のプラス記号を 3 回クリックします。
  - 空の各ボックスに、InfiniBand 接続用に予約されている残りの 4 つの IP アドレスの 1 つを、それぞれの /24 ネットマスク指定とともに入力します。これにはヘッド 1 で使用されていないものを使用します。
  - 「IPv6 プロトコルを使用」にチェックマークが付いていないことを確認します。
  - 「IP マルチパスグループ」ボックスにチェックマークを付けます。
  - データリンク `ibp1` および `ibp2` に対応するインタフェースの横のボックスにチェックマークを付けます。
  - 2 つのインタフェースのそれぞれが「アクティブ」に設定されていることを確認して、「適用」をクリックします。
  - 「構成」>「ネットワーク」から「ルーティング」をクリックします。
  - 「適応可能」に対応するマルチホーミングモデルをクリックします。
3. **Oracle SPARC SuperCluster ノードとの接続を確認します。**各ノードから、ZFS Storage Appliance の IPMP グループで使用されている 8 つのアドレスのそれぞれに ping を実行できることを確認します。これらの IP アドレスを、各ノードの `/etc/inet/hosts` テーブルに追加します。

## ZFS Storage Appliance ストレージプールの構成

プール構成では、物理ディスクドライブのリソースを、バックアップデータストレージの論理ストレージプールに割り当てます。システムのスループットを最大限にするために、各ドライブトレイの物理ドライブの半分を各ストレージプールに割り当てることで、サイズの等しい 2 つのストレージプールを構成します。

同じ RAID 保護プロファイルを使用して 2 つのプールを構成すると、ZFS Storage Appliance 管理ソフトウェアに効率に関する警告メッセージが表示されます。高パフォーマンスの Oracle RMAN バックアップ解決方法用の構成の場合、このメッセージは無視して構いません。

## ▼ ZFS Storage Appliance のシェアの構成

シェアの構成は、クライアントアクセス用の NFS マウントポイントを設定および実行するプロセスです。Oracle SPARC SuperCluster 構成用に 2 つのプロジェクト (プールごとに 1 つのプロジェクト) を作成する必要があります。プロジェクトは、シェアの集合のためにより高いレベルの管理インタフェースポイントを提供するエンティティです。シェアの管理を最適化するには、プロジェクトに含まれるシェアのデフォルトのマウントポイントを、データベース名を参照するように更新します (/export/dbname など)。パフォーマンスが最適化されたシステムのためには、各プールのプロジェクトごとに 4 つのシェア、合計で 8 つのシェア (ヘッドごとに 4 つ) を作成します。プロジェクトを構成するには次の手順を実行します。

1. ヘッド 1 の BUI にログオンして、「シェア」>「プロジェクト」に移動します。
2. プロジェクトの横のプラスアイコンをクリックしてプロジェクトのわかりやすい名前を入力し、「適用」をクリックします。別のヘッドで類似したプロジェクトが作成されるため、プロジェクトにはヘッド 1 の独自の名前 (H1-mydb など) を付けます。
3. 新しいプロジェクト名の横の鉛筆アイコンをクリックして、プロジェクトを編集します。
4. 「一般」をクリックして、プロパティを次のように指定します。
  - 「マウントポイント」をデータベース名を含むように変更します (たとえば、/export/H1-mydb)。
  - 「同期書き込みバイアス」を「待機時間」から「スループット」に変更して、「適用」をクリックします。
5. 「プロトコル」をクリックして、次のように NFS 例外を追加します。
  - NFS 例外の横のプラスアイコンをクリックします。
  - 「タイプ」を「ネットワーク」に変更します。
  - InfiniBand ネットワークのサブネットおよびネットマスク (たとえば、/24) を入力します。
  - 「アクセスモード」を「読み取り/書き込み」に変更します。
  - 「Charset」が「デフォルト」に設定されていることを確認します。
  - 「ルートアクセス」ボックスにチェックマークを付けて、「適用」をクリックします。
6. 「一般」の横で「シェア」をクリックします。
7. ヘッド 1 の 4 つのファイルシステムを作成し、ヘッド 2 とは異なる名前になるように独自の名前を付けます。バックアップストリームをインターリーブしてデータを 2 つ

のヘッドに分散させ、それによってパフォーマンスを向上させるため、ヘッド 1 には奇数番号の名前 (backup1、backup3、backup5、backup7 など) を使用し、ヘッド 2 には偶数番号の名前 (backup2、backup4、backup6、backup8 など) を使用します。ファイルシステムを作成するには、ファイルシステムの横のプラスアイコンをクリックしてファイルシステムの名前 (backup1) を入力し、「適用」をクリックします。この段階を繰り返して、残りの 3 つのファイルシステム (backup3、backup5、および backup7) を作成します。

- ヘッド 2 に対して段階 1 から 7 を繰り返します。忘れずに一意のプロジェクト名 (たとえば、H2-mydb) を使用し、ファイルシステム名として偶数番号のバックアップ ID (backup2、backup4、backup6、および backup8) を指定します。

## ZFS Storage Appliance DTrace Analytics の構成

ZFS Storage Appliance には、DTrace Analytics という包括的なパフォーマンス分析ツールがあります。DTrace Analytics は、重要なサブシステムのパフォーマンスのアカウントリング統計をモニターするフレームワークです。Oracle RMAN のバックアップおよび復元のワークロードの有効性とパフォーマンスに関する包括的なデータを提供するために、使用可能なアカウントリング統計のサブセットをモニターする必要があります。

ZFS Storage Appliance で高度な分析を構成 (「構成」>「プリファレンス」>「高度な分析を有効化」) していると、次の分析を使用できます。

- CPU: CPU モード別使用率
- ディスク: 操作の状態別平均 I/O 操作回数
- ディスク: 操作タイプ別 1 秒あたりの I/O バイト数
- ディスク: 待機時間別 1 秒あたりの I/O 操作回数
- ディスク: ディスク別の 95% 以上の使用率のディスク内訳
- ネットワーク: 方向別 1 秒あたりのインタフェースバイト数
- ネットワーク: インタフェース別 1 秒あたりのインタフェースバイト数
- プロトコル: サイズ別 1 秒あたりの NFSv3 操作回数
- プロトコル: 操作のタイプ別の秒あたりの NFSv3 操作内訳
- プロトコル: 待機時間別 1 秒あたりの読み取りタイプ NFSv3 操作回数
- プロトコル: 待機時間別 1 秒あたりの書き込みタイプ NFSv3 操作回数
- プロトコル: サイズ別 1 秒あたりの読み取りタイプ NFSv3 操作回数
- プロトコル: サイズ別 1 秒あたりの書き込みタイプ NFSv3 操作回数

これらのアカウントリング統計を実装すると、エンドユーザーは特定の実装について、リソース消費およびサービス品質 (QoS) を即時におよび履歴から数量的に理解することができます。

## クライアント NFS マウントの構成

ZFS Storage Appliance を構成する際、アプライアンスにアクセスするすべてのサーバー (Oracle SPARC SuperCluster ノードを含む) はクライアントと見なされます。クライアントの NFS マウントの構成には、ZFS Storage Appliance にアクセスするためのターゲットディレクトリ構造の作成、および最適なシステムパフォーマンスのために必要な特定の NFS マウントオプションの作成が含まれます。Solaris クライアントのマウントオプションは次のとおりです。

```
rw,bg,hard,nointr,rsiz=1048576,wsiz=1048576,proto=tcp,vers=3,forcedirectio
```

ZFS Storage Appliance に作成したディレクトリのマウントポイントを、Oracle SPARC SuperCluster の各ノード上に作成し、それぞれの `/etc/inet/hosts` テーブルに追加する必要があります。

### ▼ Solaris 11 ネットワークおよびカーネルの調整

1. Oracle SPARC SuperCluster の各ノードの `/etc/system` ファイルに、次のエントリを追加する必要があります。

```
set rpcmod:clnt_max_conns = 8
set nfs:nfs3_bsize = 131072
```

2. また、Oracle SPARC SuperCluster の各ノードをリブートするたびに、各ノードで次のコマンドを実行する必要があります。

```
/usr/sbin/ndd -set /dev/tcp tcp_max_buf 2097152
/usr/sbin/ndd -set /dev/tcp tcp_xmit_hiwat 1048576
/usr/sbin/ndd -set /dev/tcp tcp_recv_hiwat 1048576
```

3. 最適なパフォーマンスを実現するために、追加の調整が必要になる場合があります。最新情報は、[My Oracle Support \(http://support.oracle.com\)](http://support.oracle.com) で入手可能な Oracle SPARC SuperCluster Tunables のドキュメント 1474401.1 を参照してください。また、2013 年 1 月の QFSDP リリースには、調整可能値を自動的に設定する「`ssctuner`」ツールが追加されています。詳細は、Oracle SPARC SuperCluster のリリースノートを参照してください。

### ▼ Oracle Direct NFS (dNFS) の構成

Oracle SPARC SuperCluster の各ノードで、次のように dNFS を構成します。

1. Oracle Database ソフトウェアの実行中のインスタンスをシャットダウンします。
2. ディレクトリを `$ORACLE_HOME/rdbms/lib` に変更します。

### 3. dNFS の有効化:<br/>

```
make -f $ORACLE_HOME/rdbms/lib/ins_rdbms.mk dnfs_on
```

### 4. (\$ORACLE\_HOME/dbs にある) oranfstab ファイルを、構成に固有のサーバー、パス、およびエクスポート名で更新します。ここでは: <br/>

- サーバーパラメータは、InfiniBand ネットワーク上の ZFS Storage Appliance ヘッドのローカル名です。<br/>
- パスパラメータは、構成時に指定した、そのヘッドのアドレスを反映する必要があります。<br/>
- エクスポートパラメータは、/etc/vfstab に作成したエントリと似たマウントポイントを反映する必要があります。エントリは次のようになります。<br/>

### 5. シングル IP 構成 (外部リーフスイッチのない Oracle SPARC SuperCluster T5 のみ) の場合:

```
server: aie-zba-h1-stor
path: 192.168.30.100
export: /export/test1/backup1 mount: /zba/test1/backup1
export: /export/test1/backup3 mount: /zba/test1/backup3
export: /export/test1/backup5 mount: /zba/test1/backup5
export: /export/test1/backup7 mount: /zba/test1/backup7
server: aie-zba-h2-stor
path: 192.168.30.101
export: /export/test1/backup2 mount: /zba/test1/backup2
export: /export/test1/backup4 mount: /zba/test1/backup4
export: /export/test1/backup6 mount: /zba/test1/backup6
export: /export/test1/backup8 mount: /zba/test1/backup8

```

### 6. IPMP グループ構成 (その他すべて) の場合:

```
server: aie-zba-h1-stor
path: 192.168.30.100
path: 192.168.30.102
path: 192.168.30.104
path: 192.168.30.106
export: /export/test1/backup1 mount: /zba/test1/backup1
export: /export/test1/backup3 mount: /zba/test1/backup3
export: /export/test1/backup5 mount: /zba/test1/backup5
export: /export/test1/backup7 mount: /zba/test1/backup7
server: aie-zba-h2-stor
path: 192.168.30.101
path: 192.168.30.103
path: 192.168.30.105
path: 192.168.30.107
export: /export/test1/backup2 mount: /zba/test1/backup2
export: /export/test1/backup4 mount: /zba/test1/backup4
export: /export/test1/backup6 mount: /zba/test1/backup6
export: /export/test1/backup8 mount: /zba/test1/backup8
```

### 7. Oracle Database ソフトウェアインスタンスを再起動します。

## Oracle RMAN バックアップおよび復元用の Oracle Database インスタンスの調整

Oracle RMAN および ZFS Storage Appliance を使用した高帯域幅のバックアップおよび復元操作を最適化するには、I/O バッファリングを制御するインスタンスパラメータの調整が必要です。これらのパラメータをチューニングする方法については、[My Oracle Support \(http://support.oracle.com\)](http://support.oracle.com) にある記事 ID 1072545.1: バッファメモリーパラメータを使用した RMAN パフォーマンスのチューニングを参照してください。

Oracle SPARC SuperCluster については、次の 4 つのパラメータの調整を検討する必要があります。

- `_backup_disk_bufcnt` - バックアップセットの処理に使用するバッファラーの数
- `_backup_disk_bufsz` - バックアップセットの処理に使用するバッファラーのサイズ
- `_backup_file_bufcnt` - イメージコピーの処理に使用するバッファラーの数
- `_backup_file_bufsz` - イメージコピーの処理に使用するバッファラーのサイズ

バックアップセットおよびイメージコピーのバックアップおよび復元操作の場合、バッファラーの数を 64 に、バッファラーサイズを 1M バイトに設定します。

```
SQL> alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64;
SQL> alter system set "_backup_file_bufcnt"=64;
SQL> alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576;
SQL> alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576;
```

SPFILE に追加することでこれらのコマンドを永続的に構成することも、バックアップおよび復元操作の実行に使用される Oracle RMAN 実行ブロック内で動的に設定することもできます。

次のコード部分は、バックアップおよび復元操作のバッファラーのサイズおよび数を動的に調整する方法を示しています。

- バックアップセットのバックアップ:

```
run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576';

 allocate channel...
 ...

 backup as backupset database;
}
```

- バックアップセットの復元:

```

run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576';

 allocate channel...
...

 restore database;
}

```

- イメージコピーのバックアップ:

```

run
{

 sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576';

 allocate channel...
...

 backup as copy database;
}

```

- イメージコピーの復元:

```

run
{

 sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576';

 allocate channel...
...

 restore database;
}

```

増分で適用するバックアップを実行するには、増分バックアップセットを読み取り、イメージコピーに書き込む必要があります。増分で適用するバックアップ用にバッファを調整するには、次を実行します。

```

run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576';

 allocate channel...
...

 recover copy of database;
}

```

## Oracle RMAN 操作の専用サービスの作成

Oracle RMAN 処理専用の 2 つのサービスを構成して、負荷分散、高可用性、およびアップグレードの管理を最適化できます。これらのサービスを、Oracle SPARC SuperCluster システムの全ノードにわたって均等に負荷分散できます。可用性およびパフォーマンスは、優先インスタンスで実行されるようにサービスを構成するとともに、それらのサービスがクラスタ内のインスタンスにフェイルオーバーされるように準備することで最適化できます。これらのサービスを構成すると、クォーターラックまたはハーフラックの Oracle SPARC SuperCluster システムをアップグレードする際に、Oracle RMAN 実行ブロックの接続文字列を変更する必要がありません。

Oracle RMAN 処理用のサービスをインストールするには、`srvctl` コマンドを使用します。次のコード部分は、4 ノードのクラスタに均等に分散され、クラスタ内のほかのノードにフェイルオーバーされるように設定された、2 つのサービスを作成する方法を示しています。この例では、これらのサービスは `dbname` というデータベース用にインストールされ、サービスの名前は `dbname_bkup` です。

```
srvctl add service -d dbname -r dbname1 -a dbname2 -s dbname_bkup1
srvctl start service -d dbname -s dbname_bkup1
srvctl add service -d dbname -r dbname2 -a dbname1 -s dbname_bkup2
srvctl start service -d dbname -s dbname_bkup2
```

## Oracle RMAN の構成

Oracle RMAN のチャンネルおよび並列性の構成には、Oracle RMAN バックアップチャンネルのファイルシステムターゲット、およびバックアップと復元操作に使用されるチャンネルの合計数の指定が含まれます。パフォーマンスのメリットは、ZFS Storage Appliance の使用可能なシェアにまたがる 16 の Oracle RMAN チャンネルを構成することで実現できます。Oracle RMAN チャンネルを、RAC クラスタ内の Oracle Database インスタンスとノード間に均等に分散され、ZFS Storage Appliance からエクスポートされたシェア間に均等に分散されるように構成します。

次のコード部分は、バックアップセットおよびイメージコピーのバックアップと復元操作を実行し、イメージコピーに増分マージを適用するための Oracle RMAN 実行ブロックのサンプルを示しています。このサンプルコードは、次のデータベース構成をベースにしています。

- データベース名: `dbname`
- SYSDBA ログイン: `sys/welcome`
- スキャンアドレス: `ad01-scan`
- バックアップのサービス名: `dbname_bkup`

ZFS Storage Appliance は 1 プール構成で構成でき、この構成では 8 つのマウントポイントとして使用される 8 つのシェアがアプライアンスによってエクスポートされません。



バックアップセットおよびイメージコピーを使用するバックアップおよび復元用の Oracle RMAN 実行ブロックを、以降のセクションの例で示しています。これらの例では、4 シェア構成のマウントポイントは /zfsa/dbname/backup1 から /zfsa/dbname/backup4 としてアクセスされます。またこれらは、ZFS Storage Appliance が 16 の Oracle RMAN チャンネル用の 4 つのマウントポイントとして使用される 4 つのシェアをエクスポートする構成の例です。

バックアップセットのレベル 0 バックアップ:

```
run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64 scope=memory';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576 scope=memory';

 allocate channel ch01 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup1/%U';

 allocate channel ch02 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup2/%U';

 allocate channel ch03 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup3/%U';

 allocate channel ch04 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup4/%U';

 allocate channel ch05 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup1/%U';

 allocate channel ch06 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup2/%U';

 allocate channel ch07 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup3/%U';

 allocate channel ch08 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup4/%U';

 allocate channel ch09 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup2/%U';

 allocate channel ch10 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup1/%U';

 allocate channel ch11 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup4/%U';

 allocate channel ch12 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup3/%U';

 allocate channel ch13 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup2/%U';

 allocate channel ch14 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup1/%U';

 allocate channel ch15 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup4/%U';

 allocate channel ch16 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2' format '/zfsa/dbname/backup3/%U';

 configure snapshot controlfile name to

 '/zfsa/dbname/backup1/snapcf_dbname.f';

 backup as backupset incremental level 0 section size 32g database

 tag 'FULLBACKUPSET_L0' plus archiveLog tag 'FULLBACKUPSET_L0';
}
```

バックアップセットのレベル 1 バックアップ:

```
run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64 scope=memory';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576 scope=memory';

 allocate channel ch01 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1' format '/zfsa/dbname/backup1/%U';

}
```

```

allocate channel ch02 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch03 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch04 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch05 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch06 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch07 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch08 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch09 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch10 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch11 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch12 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch13 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch14 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch15 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch16 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

configure snapshot controlfile name to

'/zfssa/dbname/backup1/snapcf_dbname.f';

backup as backupset incremental level 1 database tag

'FULLBACKUPSET_L1' plus archivelog tag 'FULLBACKUPSET_L1';
}

```

イメージコピーのバックアップ:

```

run
{

sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64 scope=memory';

sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576 scope=memory';

allocate channel ch01 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch02 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch03 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch04 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch05 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch06 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch07 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch08 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch09 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch10 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch11 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-


```

```

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch12 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

allocate channel ch13 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup2/%U';

allocate channel ch14 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup1/%U';

allocate channel ch15 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1' format '/zfssa/dbname/backup4/%U';

allocate channel ch16 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2' format '/zfssa/dbname/backup3/%U';

configure snapshot controlfile name to

'/zfssa/dbname/backup1/snapcf_dbname.f';

backup incremental level 1 for recover of copy with tag 'IMAGECOPY'

database;
}

```

イメージコピーへの増分マージ:

```

run
{

sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64 scope=memory';

sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576 scope=memory';

sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64 scope=memory';

sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576 scope=memory';

allocate channel ch01 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch02 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch03 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch04 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch05 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch06 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch07 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch08 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch09 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch10 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch11 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch12 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch13 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch14 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

allocate channel ch15 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup1';

allocate channel ch16 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

scan/dbname_bkup2';

configure snapshot controlfile name to

'/zfssa/dbname/backup1/snapcf_dbname.f';

recover copy of database with tag 'IMAGECOPY';
}

```

復元の検証:

```
run
{

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufcnt"=64 scope=memory';

 sql 'alter system set "_backup_disk_bufsz"=1048576 scope=memory';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufcnt"=64 scope=memory';

 sql 'alter system set "_backup_file_bufsz"=1048576 scope=memory';

 allocate channel ch01 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch02 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch03 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch04 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch05 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch06 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch07 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch08 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch09 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch10 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch11 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch12 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch13 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch14 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 allocate channel ch15 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup1';

 allocate channel ch16 device type disk connect 'sys/welcome@ad01-

 scan/dbname_bkup2';

 configure snapshot controlfile name to

 '/zfssa/dbname/backup1/snapcf_dbname.f';

 restore validate database;
}
```

## アプライアンスのバックアップのための Oracle SPARC SuperCluster の構成

アプライアンスのバックアップのために Oracle SPARC SuperCluster を構成するには、次の手順を使用します。

- [SuperCluster のバックアップのためのアプライアンスの構成](#)
- [ホスト上にシェアをマウントするためのディレクトリ構造の設定](#)
- [/etc/vfstab ファイルの更新](#)
- [NFS クライアントサービスの有効化](#)
- [ZFS Storage Appliance のエクスポートにアクセスするための oranfstab の更新](#)

- ホスト上にシェアのマウント
- マウントされたシェアの所有者の設定

## ▼ ホスト上にシェアをマウントするためのディレクトリ構造の設定

- ホスト上にシェアをマウントするためのマウントポイントを次のように設定します。

```
mkdir -p /zfssa/dbname/backup1
mkdir -p /zfssa/dbname/backup2
mkdir -p /zfssa/dbname/backup3
mkdir -p /zfssa/dbname/backup4
```

## ▼ /etc/vfstab ファイルの更新

下記のリストで UNIX の改行エスケープ文字 (\) は、1 行分のコードが 2 行目に折り返していることを表します。折り返された 1 行を `fstab` に入力するときは、\ 文字を削除して空白で区切られた 2 つの行の断片を 1 行に結合してください。

1. `/etc/vfstab` ファイルを更新するには、次のいずれかのオプションを使用します。

1 プール構成の場合:

```
192.168.36.200:/export/dbname/backup1 - /zfssa/dbname/backup1 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.200:/export/dbname/backup2 - /zfssa/dbname/backup2 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.200:/export/dbname/backup3 - /zfssa/dbname/backup3 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.200:/export/dbname/backup4 - /zfssa/dbname/backup4 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
```

2. 2 プール構成の場合:

```
192.168.36.200:/export/dbname/backup1 - /zfssa/dbname/backup1 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.201:/export/dbname/backup2 - /zfssa/dbname/backup2 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.200:/export/dbname/backup3 - /zfssa/dbname/backup3 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
192.168.36.201:/export/dbname/backup4 - /zfssa/dbname/backup4 \

nfs - yes rw,bg,hard,nointr,rsize=1048576,wsiz=1048576,proto= \

tcp,vers=3,forcedirectio
```

## ▼ NFS クライアントサービスの有効化

- 次のコマンドを使用して、Solaris 11 ホスト上の NFS クライアントサービスを有効化します。

```
svcadm enable -r nfs/client
```

## ▼ ZFS Storage Appliance のエクスポートにアクセスするための oranstab の更新

ZFS Storage Appliance のエクスポートにアクセスするように oranstab ファイルを更新するには、次の適切なオプションを使用します。

1. 1 プール構成の場合:

```
server: 192.168.36.200
path: 192.168.36.200
path: 192.168.36.201
path: 192.168.36.202
path: 192.168.36.203
export: /export/dbname/backup1 mount: /zfssa/dbname/backup1
export: /export/dbname/backup2 mount: /zfssa/dbname/backup2
export: /export/dbname/backup3 mount: /zfssa/dbname/backup3
export: /export/dbname/backup4 mount: /zfssa/dbname/backup4
```

2. 2 プール構成の場合:

```
server: 192.168.36.200
path: 192.168.36.200
path: 192.168.36.202
export: /export/dbname/backup1 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup1
export: /export/dbname/backup3 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup3
server: 192.168.36.201
path: 192.168.36.201
path: 192.168.36.203
export: /export/dbname/backup2 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup2
export: /export/dbname/backup4 mount: /zfssa/dbname-2pool/backup4
```

## ▼ ホスト上にシェアのマウント

- 標準の Solaris mount コマンドを使用して、シェアを手動でマウントします。

```
mount /zfssa/dbname/backup1
mount /zfssa/dbname/backup2
mount /zfssa/dbname/backup3
mount /zfssa/dbname/backup4
```

## ▼ マウントされたシェアの所有者の設定

ORACLE\_HOME のアクセス権設定と一致するように、マウントされたシェアのアクセス権の設定を変更します。この例では、ユーザーおよびグループの所有者が `oracle:dba` に設定されています。

1. 次のように入力します。<br />`# chown oracle:dba /zfssa/dbname/*`
2. 次のいずれかのオプションを使用して Oracle Database インスタンスを再起動して、`oranfstab` ファイルに対する変更を有効にします。
  - 一度に 1 つのインスタンスを再起動します (順次アップグレード)。例:
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname1`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname1`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname2`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname2`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname3`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname3`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname4`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname4`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname5`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname5`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname6`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname6`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname7`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname7`
    - `:$ srvctl stop instance -d dbname -i dbname8`
    - `:$ srvctl start instance -d dbname -i dbname8`
  - データベース全体を再起動します。例:
    - `:$ srvctl stop database -d dbname`
    - `:$ srvctl start database -d dbname`

## Oracle Intelligent Storage Protocol

Oracle Intelligent Storage Protocol (OISP) を使用すると、Oracle Direct NFS (dNFS) クライアントは、入出力要求に関連付けられた属性をエンコードして Oracle ZFS Storage Appliance に渡すことができます。これらの属性には、入出力要求のターゲットであるデータベースファイルのタイプ、ファイルのレコードサイズ、入出力要求を発行するデータベースの ID などの情報が含まれています。

Oracle ZFS Storage Appliance は、これらの属性をデコードして使用し、データベース構成を単純化して、データベースのパフォーマンスを改善し、データベースクライアントによって生成される入出力ワークロードのソースに対する可観測性を提供します。

## データベースレコードサイズ

Oracle dNFS クライアントは、入出力要求ごとのファイルのタイプに基づいて最適なレコードサイズを渡すことができます。レコードサイズが渡されると、シェアまたはプロジェクトで「データベースレコードサイズ」プロパティ設定がオーバーライドされます。レコードサイズは、新たに作成されたファイルでのみ設定できます。ファイルがすでに存在する場合は、レコードサイズは変更されません。

## 同期書き込みバイアスのヒント

Oracle dNFS クライアントは、入出力要求を待機時間の影響を受けるものとして処理するか、スループット指向として処理するように Oracle ZFS Storage Appliance に要求する、書き込み入出力要求に関連付けられた書き込みバイアスの「ヒント」を渡すことができます。ヒントが渡されると、シェアまたはプロジェクトで「同期書き込みバイアス」プロパティ設定がオーバーライドされます。

## データベース名別の分析内訳

Oracle 12c dNFS クライアントは、入出力要求の発行を行うデータベースの識別情報 (SID) またはコンテナデータベースおよびプラグブルデータベースの識別情報 (SID: SID) を渡すことができます。Oracle ZFS Storage Appliance 分析では、内訳を選択することでデータベースの SID 名別の入出力統計内訳を表示したり、「アプリケーション ID」別にドリルしたりできます。

## OISP 対応プロトコルおよびクライアント

プロトコル: NFSv4

クライアント: Oracle Database NFS (dNFS) クライアント



## Oracle Solaris Cluster 用のアプライアンスネットワークファイルシステムプラグイン

Oracle Solaris Cluster (OSC) は、Solaris オペレーティングシステム用の高可用性クラスタソフトウェア製品です。

Oracle Solaris Cluster 用のアプライアンスネットワークファイルシステムプラグインを使用すると、NFS プロトコルを使用して OSC をアプライアンスで有効にできます。このプラグインと readme ファイルは、Oracle Technology Network で Oracle ZFS Storage Appliance Network File System Plug-in for Oracle Solaris Cluster の一部として入手できます。

## Oracle Solaris Cluster Geographic Edition 用のアプライアンスプラグイン

Oracle Solaris Cluster Geographic Edition ソフトウェアは、Oracle Solaris Cluster ソフトウェアの階層化された拡張です。Geographic Edition ソフトウェアは、長距離を隔てられた複数のクラスタを使用することにより、およびこれらのクラスタサイト間でデータをレプリケートする冗長インフラストラクチャーを使用することにより、アプリケーションを予期しない中断から保護します。このプラグインは、アプライアンスのリモートレプリケーションサービスを使用して、リモート Oracle Solaris Cluster サイト間のデータレプリケーションを調整します。

このプラグインパッケージは、Oracle Technology Network の Sun NAS ストレージ情報ページから入手できます。

## Oracle Enterprise Manager System Monitoring のアプライアンスプラグイン

Oracle Enterprise Manager System Monitoring 用 Oracle ZFS Storage プラグインは、Oracle ZFS Storage アプライアンス用のグリッドコントローラ環境に対して、次のような優れたモニタリング機能を提供します。プラグインには次の機能があります。

- Oracle ZFS Storage アプライアンスのモニター
- ストレージシステム情報と、アクセス可能なストレージコンポーネントの構成情報およびパフォーマンス情報の収集
- ツールによって収集されたモニタリング情報としきい値に基づくアラートおよび違反の表示

- 分析機能を補完する既製のレポートの提供
- リモートエージェントによるモニタリングのサポート

アプライアンスがグリッドコントローラによってモニターされるように構成されると、分析機能のワークシートおよびデータセットが作成されます。これにより、グリッドコントローラ管理者の視点が、アプライアンス内部で使用可能なリアルタイム分析によって提供される詳細なレベルまで到達します。

管理プラグインはリンク、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/index.html> から入手できます。

プラグインと一緒にパッケージされているインストールガイドは、グリッドコントローラ管理者と、モニター対象アプライアンスのストレージ管理者の両方が読む必要があります。

各アプライアンスには2つのワークフローが付属しており、これらはそれぞれモニタリング対象システムの準備と、モニタリング環境用に作成された成果物の削除に使用されます。

- Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成
- Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成解除

これらのワークフローは、ブラウザのユーザーインタフェースの「保守」>「ワークフロー」ページからアクセスできます。

## Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成

このワークフローは、環境をモニタリング用に準備したり、ワークフローによって作成された成果物が操作中にストレージ管理者によって変更された場合に成果物を元の状態にリセットしたりするために使用されます。このワークフローを実行すると、システムに次の変更が加えられます。

- システムへの制限付きアクセス権を持つ `oracle_agent` ロールプロパティーが作成されます。Oracle Enterprise Manager Grid Controller エージェントはモニタリングに必要な情報を取得できますが、システムに変更を加えることはできません。`oracle_agent` ユーザーが作成されて、このロールが割り当てられます。このロールとユーザーを使用することは、エージェントがアプライアンスにアクセスした時期と方法についての明確な監査記録を維持する上できわめて重要です。
- 高度な分析が使用可能になり、Oracle ZFS Storage アプライアンスのすべてのユーザーが、拡張された統計のセットを使用できるようになります。
- *Oracle Enterprise Manager* というワークシートが作成され、グリッドコントローラ管理者とストレージ管理者の間のコミュニケーションが促進されます。グリッドコントローラによってモニターされるすべてのメトリックをこのワークシートから使用できます。

## Oracle Enterprise Manager Monitoring の構成解除

このワークフローは、*Oracle Enterprise Manager Monitoring* の構成 によって作成された成果物を削除します。特に、次のことを行います。

- *oracle\_agent* ロールおよびユーザーの削除
- *Oracle Enterprise Manager* ワークシートの削除

このワークシートは、高度な分析や、収集目的でアクティブ化されたあらゆるデータセットを無効にするものではありません。

## Oracle Virtual Machine Storage Connect 用のアプライアンスプラグイン

Oracle VM 3.0 内で導入された多くの新機能の 1 つが Storage Connect フレームワークです。このフレームワークを使用すると、Oracle VM 3.0 Manager がストレージサーバーに直接アクセスしてリソースをプロビジョニングできます。このフレームワークを使用すると、ストレージサーバーの登録、既存ストレージリソースの発見、物理ディスクの作成とサーバープールでの参照、ストレージリポジトリおよび仮想マシンのシェアを行えます。

Oracle Virtual Machine Storage Connect Plug-in for the Oracle ZFS Storage Appliance は、Oracle VM が仮想化のために Oracle ZFS Storage Appliance をプロビジョニングおよび管理できる Oracle VM ソフトウェアスイートのコンポーネントです。プラグインは Oracle VM サーバーにインストールされて、アプライアンスにインストールされているワークフローを介してストレージサーバーと通信します。

このプラグインおよび readme ファイルは、[Oracle Technology Network](#) で入手できます。

## ボリュームシャドウコピーサービスソフトウェア用のアプライアンスプラグインプロバイダ

Microsoft オペレーティングシステム用のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) は、システム上のアプリケーションがボリュームへの書き込みを続行している間にボリュームバックアップを実行できるようにするためのフレームワークを提供します。VSS が提供する一貫性のあるインタフェースによって、ディスク上のデータを更新するユーザーアプリケーション (VSS 書き込み側) と、アプリケーションをバックアップ

するユーザーアプリケーション (VSS リクエスト側) との間で調整が可能になります。VSS は特に次のものを提供します。

- アプリケーションとファイルシステムのアクティビティを調整するバックアップインフラストラクチャ
- シャドウコピーと呼ばれる、特定の時点での合体したコピーを作成するための場所

Oracle ZFS Storage Appliance Provider for Volume Shadow Copy Service Software は、Oracle ZFS Storage Appliance が、ブロックターゲットを使用している Windows ホストの一貫性のあるスナップショットを作成できるようにする VSS ハードウェアプロバイダです。VSS は、ブロックデータが一貫性を保つようにスナップショットを調整します。プロバイダはアプライアンス上のワークフローのセットと通信して、アプリケーションから見たスナップショットの取得を調整します。これは iSCSI とファイバチャネルの両方で動作します。

Oracle ZFS Storage Appliance Provider for Volume Shadow Copy Service Software は、この機能とアプリケーション間の調整とを必要とするホスト上にインストールします。このアプリケーション統合のためのドキュメント全体は、ダウンロードしたコンポーネントに readme ファイルの形式でパッケージされています。このプロバイダソフトウェアと readme ファイルは、[Oracle Technology Network](http://www.oracle.com/technetwork/) で Oracle ZFS Storage Appliance ソフトウェアプロバイダおよびプラグインパッチの一部として入手できます。VSS の詳細な情報は、Microsoft の Web サイト <http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa384649> で入手できます。

## Symantec Dynamic Multi-Pathing および Storage Foundation での FC サポート

- **SF** - Symantec Storage Foundation 5.1
- **SF HA** - Storage Foundation High Availability 5.1
- **SFCFS/SF Oracle RAC** - Storage Foundation Cluster File System/Storage Foundation for Oracle RAC 5.1
- **SFCFS/SFCFS Oracle RAC** - Storage Foundation Cluster File System/Storage Foundation Cluster File System for Oracle RAC 5.1
- Solaris 10 SPARC
- Solaris 10 x86
- Linux RedHat5
- Oracle Enterprise Linux (OEL)

[Symantec Storage Foundation and High Availability Solutions Hardware TechNote \(http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH47728\)](http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH47728) にある Symantec の HCL を参照してください。

次の制限に注意してください。

- Symantec ではアプライアンス ASL (<https://vos.symantec.com/asl> からダウンロード可能) がインストールされていることを「要求」しています
- Symantec では SF 5.1 VM パッチレベル 5.1RP2 以上 (<https://vos.symantec.com/patch/matrix> からダウンロード可能) がインストールされていることも要求しています
- Symantec では次の DMP パラメータ設定も要求しています (「クラスタ化」されたアプライアンスのみ)。
  - :dmp\_health\_time=0
  - :dmp\_path\_age=0
  - :dmp\_lun\_retry\_timeout=200

「クラスタ化」されたアプライアンス設定を参照している Symantec の HW テックノート [Symantec Technical Support \(http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH74012\)](http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH74012) を参照してください。

Symantec の Storage Foundation 5.1SP2 for Windows では、次の Windows バージョンにおける Oracle ZFS Storage Appliance に対する FC 接続をサポートしています。

- Windows Server 2003
- Windows Server 2008
- Windows Server 2008 R2

[Hardware Compatibility List \(HCL\) for Symantec Storage Foundation \(http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH138719\)](http://www.symantec.com/business/support/index?page=content&id=TECH138719) の SF 5.1 SP2 HCL を参照してください。

## Appliance Replication Adapter for VMware Site Recovery Manager

Oracle ZFS Storage Appliance Storage Replication Adapter (SRA) for VMware vCenter Site Recovery Manager (SRM) は、複数のサイトにまたがっていて、保護されているサイトのサービス中断時には迅速な復旧が必要な VMware の配備に、Oracle ZFS Storage Appliance を統合します。SRA を既存の VMware vCenter SRM 環境に導入すると、復旧計画がテストされ実行されるときに VMware vCenter SRM の検出、テスト、フェイルオーバーシーケンスを通して Oracle ZFS Storage Appliance を管理できます。SRA の使用は、完全に VMware vCenter SRM アプリケーション内で発生します。

VMware 管理者は、VMware データストアをホストしているアプライアンスを担当する Oracle ZFS Storage Appliance 管理者と密に協力する必要があります。詳細は、SRA に同梱されている Oracle ZFS Storage Appliance SRA for VMware SRM の管理に関するガイドを参照してください。

---

注記 - SRA は Oracle Technology Network からダウンロードできます。SRA を入手するには、Oracle ZFS Storage Appliance の有効な Oracle サポート契約が必要です。

---